熊本県文化財調査報告　第159集

堂園遺跡
中尾遺跡
別府遺跡

－県営緊急畑地帯総合土地改良事業（須恵・深田地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査－

1997. 3

熊本県教育委員会

堂園遺跡
中尾遺跡
別府遺跡

－熊本県球磨郡須恵村に所在する三遺跡の調査－

8,000年前の堂園ムラでの人びとの暮し

1997.3

熊本県教育委員会

序　　文

農業の近代化をめざす県営農業基盤整備事業は、県下各地で実施されていますが、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきています。熊本県教育委員会としましては、その文化財の取扱いについて、事前に地元や農政部局と協議し、保存できるものについては極力保存に努めていますが、やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する球磨郡須恵村堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡は、平成２年度・平成３年度の県営緊急畑地帯総合土地改良事業（須恵・深田地区）に伴って発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、これらの遺跡から、先土器時代から歴史時代までの多種多様な遺構や遺物が出土しました。特に、歴史時代関係の資料は、注目される内容です。こうした調査成果を報告するにあたり、この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを願ってやみません。

最後に、埋蔵文化財の発掘調査に、御協力いただいた県農政部、県球磨事務所川辺川土地改良推進室、須恵村役場、須恵村教育委員会および地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成９年３月31日

熊本県教育長　松　尾　隆　樹

例　　言

1　本書は，県営緊急畑地帯総合土地改良事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　発掘調査は，熊本県球磨郡須恵村に所在する堂園遺跡と中尾遺跡と別府遺跡が対象となり，県農政部の依頼を受けて,熊本県教育委員会が実施した。

3　遺物の整理は，熊本県文化財収蔵庫でおこなった。なお，遺物の保管も文化財収蔵庫である。

4　遺跡の発掘調査は，堂園遺跡が平成２年度，中尾遺跡と別府遺跡が平成３年度に実施し，整理は，平成８年度におこなった。

5　本書は，２部構成をとり，第Ⅰ部を堂園遺跡，第Ⅱ部を中尾遺跡と別府遺跡とした。また，それぞれの部では，調査・遺跡・成果・総括ごとに章をかえ，また，古い時代から順に節をかえて記載している。

6　本書の地形図は，県農政部から提供を受けたものをもとにして，作成した。

7　現地調査での実測および写真撮影は，堂園遺跡を野口龍彦・山城敏昭・長谷部善一が，中尾・別府遺跡を木村元浩・中川裕二がおこなった。遺構の製図は，冨永圭子・丹生英里・森愛華でおこなった。遺物の実測では，石器を木﨑康弘・木村・冨永・森が，土器を古城史雄・冨永・森がおこない，また石器・土器の一部を（有）埋蔵文化財サポートシステムに依頼した。製図は石器を冨永・森・岩谷史記，土器を冨永・森がおこなった。遺物の写真は，今村龍太郎が撮影した。また，本扉のイラストは，文化課嘱託の知名石揚子による。

　堂園遺跡出土の陶磁器については，滋賀県野洲町教育委員会の森隆氏に生産地等についての御教示をいただいた。また，別府遺跡の墨書土器の赤外線写真の撮影に際しては，太宰府市教育委員会の御協力をいただいた。

8　本書の執筆は，第Ⅰ部を木﨑が、第Ⅱ部第Ⅰ章，第Ⅲ章第１節，第Ⅳ章第１節を木村が，その他を古城がおこなった。

9　本書の編集は，熊本県教育委員会で第Ⅰ部を木﨑が、第Ⅱ部を古城がおこなった。

凡　　例

1　現地での実測図は，以下の縮尺で作成した。

竪穴式住居跡	20分の1,土坑類	10分の１	
溝	20分の1,柵状柱列	20分の１	
道路	20分の１		

また，本書収録の際には以下の縮尺となった。

竪穴式住居跡	60分の1,土坑類	30分の１
溝	80分の1,柵状柱列	200分の１
道路	80分の１	

遺構の方位は，磁北である。

3　出土遺物の番号は，各挿図ごとに１番から付した。なお，縮尺は，以下のとおりである。

4　土器　　３分の１　石器　石鏃　原寸

楔形石器・剥片・石核など　３分の２

磨石・敲石・石皿・台石　　２分の１

5　出土遺物の解説は本文中に記した。ただし，計測値は，第Ⅰ部では石器について，第Ⅱ部では石器と土器類について，計測表に収めた。なお，その計測位置は，下に図示する。

本 文 目 次

序文
例言・凡例
第Ⅰ部　堂園遺跡の調査とその成果
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　調査の方法と経過 …… 7
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 9
第１節　遺跡の環境 …… 11
第２節　遺跡の概観 …… 17
第３節　遺跡の層位と包含層 …… 17
第Ⅲ章　調査とその成果 …… 19
第１節　縄文時代早期の遺構と土器 …… 21
第２節　縄文時代中期・後期・晩期の遺構と土器 …… 62
第３節　縄文時代の石器とその分布 …… 69
第４節　古墳時代の遺構と遺物 …… 97
第５節　平安時代の遺構と遺物 …… 106
第６節　鎌倉時代以降の遺構 …… 111
第Ⅳ章　総括 …… 123
1　はじめに …… 125
2　堂園遺跡における縄文時代早期の集落構成と遺跡の形成過程 …… 125
3　球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年 …… 132
4　球磨・人吉地方の古代と堂園遺跡 …… 148
文献目録 …… 157
写真図版 …… 159
第Ⅱ部　中尾・別府遺跡の調査とその成果
第Ⅰ章　調査の概要 …… 177
第１節　調査に至る経緯 …… 179
第２節　調査及び整理の組織 …… 179
第３節　調査の方法と経過 …… 180
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 183
第１節　遺跡の概要 …… 185
第Ⅲ章　中尾遺跡の調査とその成果 …… 187
第１節　先土器時代の遺物 …… 189
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 194
第３節　まとめ …… 196
第Ⅳ章　別府遺跡の調査とその成果 …… 199
第１節　先土器時代の遺物 …… 201
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 201
第３節　弥生・古墳時代の遺物 …… 220
第４節　歴史時代以降の遺構と遺物 …… 222
参考文献 …… 252
写真図版 …… 255

第Ⅰ部　堂園（どうぞの）遺跡の調査とその成果

第Ⅰ章　調査の概要
第Ⅱ章　遺跡の概要
第Ⅲ章　調査とその成果
第Ⅳ章　総括

第Ⅰ部　堂園遺跡の調査と成果　目次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1

第１節　調査に至る経緯…… 3

1　調査の契機（３）　2　事業照会と予備調査の経過（３）　3　発掘調査の進捗（６）

4　発掘調査の組織（６）

第２節　調査の方法と経過…… 7

1　調査の方法（７）　2　調査の経過（７）

第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 9

第１節　遺跡の環境……11

1　地理的環境（11）　2　歴史的環境（12）

第２節　遺跡の概観……17

第３節　遺跡の層位と包含層……17

第Ⅲ章　調査とその成果 ……19

第１節　縄文時代早期の遺構と土器……21

1　はじめに……21

2　遺構とその位置……21

①集石（21）

１号集石（21）　２号集石（21）　３号集石（21）

②遺物分布（21）

③集石の位置の特徴（24）

3　土器とその分布……24

①中原式土器（26）

中原式土器１（26）　中原式土器２（32）　中原式土器３（32）

その他、単独出土の中原式土器片（32）

②石清水式土器（32）

石清水式土器１（34）石清水式土器２（34）石清水式土器３（34）

石清水式土器４（34）石清水式土器５（40）その他、単独出土の石清水式土器片（40）

③塞ノ神式土器（40）

塞ノ神式土器１（43）塞ノ神式土器２（45）塞ノ神式土器３（45）

塞ノ神式土器４（45）その他、単独出土の塞ノ神式土器片（45）

④その他の有文土器（46）

⑤無文土器（50）

無文土器１（50）　無文土器２（50）　無文土器３（50）　無文土器４（50）

無文土器５（50）　無文土器６（50）　無文土器７（50）　無文土器８（50）

無文土器９（50）　無文土器10（59）　その他、単独出土の無文土器片（59）

4　まとめ……59

【地形】(59)　【遺構】(59)　【遺物分布】(59)　【土器】(60)

第２節　縄文時代中期・後期・晩期の遺構と土器……62

1　はじめに……62

2　縄文時代中期の土器……62

船元式土器（62）　阿高式系土器（62）　型式不明の土器（62）

3　縄文時代後期の土器……62
御手洗 a 式土器（62）沈線文の土器（65）太郎迫式土器（65）型式不明の土器（65）
4　縄文時代晩期の土器……65
黒川式土器（65）刻目突帯文土器（68）型式不明の土器（68）
5　まとめ……68
【地形】(68)　【土器】(69)
第 3 節　縄文時代の石器とその分布……69
1　はじめに……69
2　石器とその分布……69
①石鏃（69）　②削器（71）　③楔形石器（71）　④石錘（71）
⑤打製石斧（71）　⑥礫器（84）　⑦円盤状石器（84）　⑧磨石・敲石（84）
⑨石皿・台石（84）⑩二次加工ある不定形石器（84）　⑪使用痕ある剥片（84）
⑫石核（84）　⑬分割礫（89）　⑭剥片・砕片（94）
3　まとめ……95
第 4 節　古墳時代の遺構と遺物……97
1　はじめに……97
2　遺構と出土土器……97
①竪穴式住居跡（97）　②出土土器（98）　③竪穴式住居跡以外からの出土土器（102）
3　まとめ……102
第 5 節　平安時代の遺構と遺物……106
1　はじめに……106
2　墓と供献土器……106
①木蓋土壙墓（106）　②供献土器（109）
3　まとめ……109
第 6 節　鎌倉時代以降の遺構……111
1　はじめに……111
2　道路……111
1 号道路（111）　2 号道路（111）　3 号道路（114）
3　柵状柱列……115
1 号柵状柱列（115）2 号柵状柱列（115）3 号柵状柱列（116）
4　土坑……116
2 号土坑（116）　3 号土坑（116）　4 号土坑（116）　5 号土坑（116）
6 号土坑（116）　7 号土坑（116）　8 号土坑（116）　9 号土坑（116）
10号土坑（116）　11号土坑（116）　12号土坑（121）　13号土坑（121）
5　おわりに……121
第Ⅳ章　総括……123
1　はじめに……125
2　堂園遺跡における縄文時代早期の集落構成と遺跡の形成過程……125
①縄文時代早期の集落構成（125）　②遺跡の形成過程（127）
3　球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年……132
①編年学的研究における方法について（132）
②球磨・人吉地方における古墳時代後期の土器資料について（132）
夏女遺跡（133）　1 号住居跡（133）　2 号住居跡（133）

沖松遺跡（133）　1号住居跡（134）　3号住居跡（134）　5号住居跡（134）
15号住居跡（134）　16号住居跡（134）　17号住居跡（136）
18号住居跡（136）　22号住居跡（136）　25号住居跡（136）
アンモン山遺跡（137）　1号住居跡（137）　2号住居跡（138）
③球磨・人吉地方における土師器資料の型式論的研究（138）
④球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年研究の契機と目的（142）
⑤球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年（142）
⑥球磨・人吉地方における古墳時代土師器編年と他地域編年との対比、及び年代観（145）
4　球磨・人吉地方の古代と堂園遺跡 ……148
1．はじめに ……148
2．堂園遺跡発見の木蓋土壙墓の供献土器 ……148
3．堂園遺跡における木蓋土壙墓とその供献土器の歴史的背景 ……150
①球磨・人吉地方古代史研究における堂園遺跡の意義（150）
②古代須恵氏の領地と歴史的景観（150）　③球磨・人吉地方の古代豪族について（152）
④球磨郡衙と久米氏・須恵氏（153）　⑤球磨郡衙とその遷移（154）
⑥球磨・人吉地方における堂園遺跡出土木蓋土壙墓の意義（155）
参考文献 ……157
写真図版 ……159

図　版　目　次

図版1
1．竪穴式住居跡（南から）
2．竪穴式住居跡（東から）
図版2
1．木蓋土壙墓（西側から）
2．木蓋土壙墓（南側から）
図版3
1．木蓋土壙墓供献土器
2．木蓋土壙墓枕状造り出し部
図版4
1．1号柵状柱列（上）・2号柵状柱列（下）
2．3号柵状柱列
図版5
1．2号土坑
2．3号土坑
図版6
1．4号土坑
2．5号土坑
図版7
1．6号土坑
2．7号土坑
図版8
1．8号土坑
2．調査風景
図版9
竪穴式住居跡出土土器
図版10
1．竪穴式住居跡出土土器
2．木蓋土壙墓供献土器

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図……4
第２図　周辺地形図（工事施工後の状況）……5
第３図　周辺の遺跡……14
第４図　層位図……18
第５図　縄文時代早期遺構位置図・遺物分布図…22
第６図　１号・２号集石実測図……23
第７図　３号集石実測図……24
第８図　縄文時代早期土器分布図……25
第９図　中原式土器分布図……27
第10図　中原式土器１分布図……28
第11図　中原式土器１実測図……29
第12図　中原式土器２～３・その他分布図……30
第13図　中原式土器１～３・その他実測図……31
第14図　石清水式土器分布図……33
第15図　石清水式土器１分布図……35
第16図　石清水式土器１実測図……36
第17図　石清水式土器２～５分布図……37
第18図　石清水式土器その他分布図……38
第19図　石清水式土器２～５・その他実測図……39
第20図　塞ノ神式土器分布図……41
第21図　塞ノ神式土器１～４分布図……42
第22図　塞ノ神式土器１～４実測図……43
第23図　塞ノ神式土器その他分布図……44
第24図　塞ノ神式土器その他実測図……46
第25図　隆起文土器１分布図……47
第26図　その他の有文土器分布図……48
第27図　有文土器実測図……49
第28図　無文土器分布図……51
第29図　無文土器１分布図……52
第30図　無文土器２分布図……53
第31図　無文土器３～６分布図……54
第32図　無文土器７～10分布図……55
第33図　無文土器１～10実測図……56
第34図　無文土器その他分布図……57
第35図　無文土器その他実測図……58
第36図　縄文時代中期土器分布図……63
第37図　縄文時代後期土器分布図……64
第38図　縄文時代中期・後期土器実測図……66
第39図　縄文時代晩期土器分布図……67
第40図　縄文時代晩期土器実測図……68
第41図　石器分布図……70
第42図　石鏃分布図……72
第43図　削器・楔形石器・石錘分布図……73
第44図　石鏃・削器・楔形石器・石錘実測図……74
第45図　打製石斧分布図……75
第46図　礫器・円盤状石器分布図……76
第47図　打製石斧実測図……77
第48図　打製石斧実測図……78
第49図　打製石斧実測図……79
第50図　打製石斧・礫器実測図……80
第51図　礫器実測図……81
第52図　礫器実測図……82
第53図　円盤状石器実測図……83
第54図　磨石・敲石・石皿分布図……85
第55図　磨石・敲石実測図……86
第56図　磨石・敲石・石皿実測図……87
第57図　二次加工ある不定形石器・使用痕跡ある剥片分布図……88
第58図　二次加工ある不定形石器・使用痕跡ある剥片実測図……89
第59図　石核・原石・分割礫分布図……90
第60図　石核・分割礫実測図……91
第61図　剥片・破片分布図……92
第62図　剥片・破片実測図……93
第63図　剥片・破片実測図……94
第64図　古墳時代中期遺構位置図……99
第65図　竪穴式住居跡実測図……100
第66図　竪穴式住居跡出土土器実測図……101
第67図　沖松遺跡1号･3号･5号住居跡出土土器…103
第68図　夏女遺跡出土土器の編年……104
第69図　沖松遺跡４号住居跡出土土器……105
第70図　平安時代遺構位置図……107
第71図　木蓋土壙墓・出土土器実測図……108
第72図　鎌倉時代以降遺構実測図……112
第73図　１号道路実測図……113
第74図　２号道路実測図……114
第75図　３号道路実測図……114
第76図　柵状柱列・穴実測図……115

第77図　土坑実測図 ……117
第78図　土坑実測図 ……118
第79図　土坑実測図 ……119
第80図　土坑実測図 ……120
第81図　集石と遺物の分布 ……126
第82図　集落構成の例 ……127
第83図　土器個体別資料の分布累積相関概念図 ……129
第84図　石器分布累積相関概念図 ……130
第85図　堂園遺跡縄文時代早期の集落構成 ……131
第86図　夏女遺跡出土土器の編年 ……133
第87図　沖松遺跡１号・３号・５号出土土器 …135
第88図　沖松遺跡15号・16号～18号・22号・25号住居跡出土土器 ……136
第89図　アンモン山遺跡出土土器 ……137
第90図　球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年……146～147
第91図　木蓋土壙墓と供献土器 ……149
第92図　球磨・人吉地方の古代と須恵氏 ……151

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表……15
第２表　石器計測表……95～96

第Ⅰ章　調　査　の　概　要

第1節　調　査　に　至　る　経　緯

第2節　調　査　の　方　法　と　経　過

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査の契機

農業の近代化は，今日的課題として，広く認知されている国の施策の重要な柱である。そのために，農業に係わる行政は，起耕から収穫等までの効率的な作業行程に利するための農業環境の整備を進めているともいえる。こうした農業環境の整備を目的とした事業の一つに，農地の区画整理としての農業基盤整備事業がある。

農業基盤整備事業の中で，面工事を伴うものには，大きく，水田を対象にした圃場整備事業と，畑地を対象にした畑地帯総合土地改良事業とがある。これらの事業は，農地が対象となるだけあって対象面積が広大で，仮にそれが周知の埋蔵文化財包蔵地を含む土地において実施される場合には，必然的に調査面積も広大となる。こうした状況の中，今日の埋蔵文化財保護行政では，調査面積と事業工程とのすり合わせの中で，掘削・盛土と呼ばれる現実的な対応が実施されているのである。

今回，報告する熊本県球磨郡須恵村に所在する堂園遺跡は，この農業基盤整備事業の中で，上記した面工事に伴うものである。しかもその中で，畑地を対象にした緊急畑地帯総合土地改良事業である。地区名を「須恵深田地区」と呼ぶ。熊本県農政部が須恵村・深田村からの要請を受けて，平成２年度に着工した事業である。

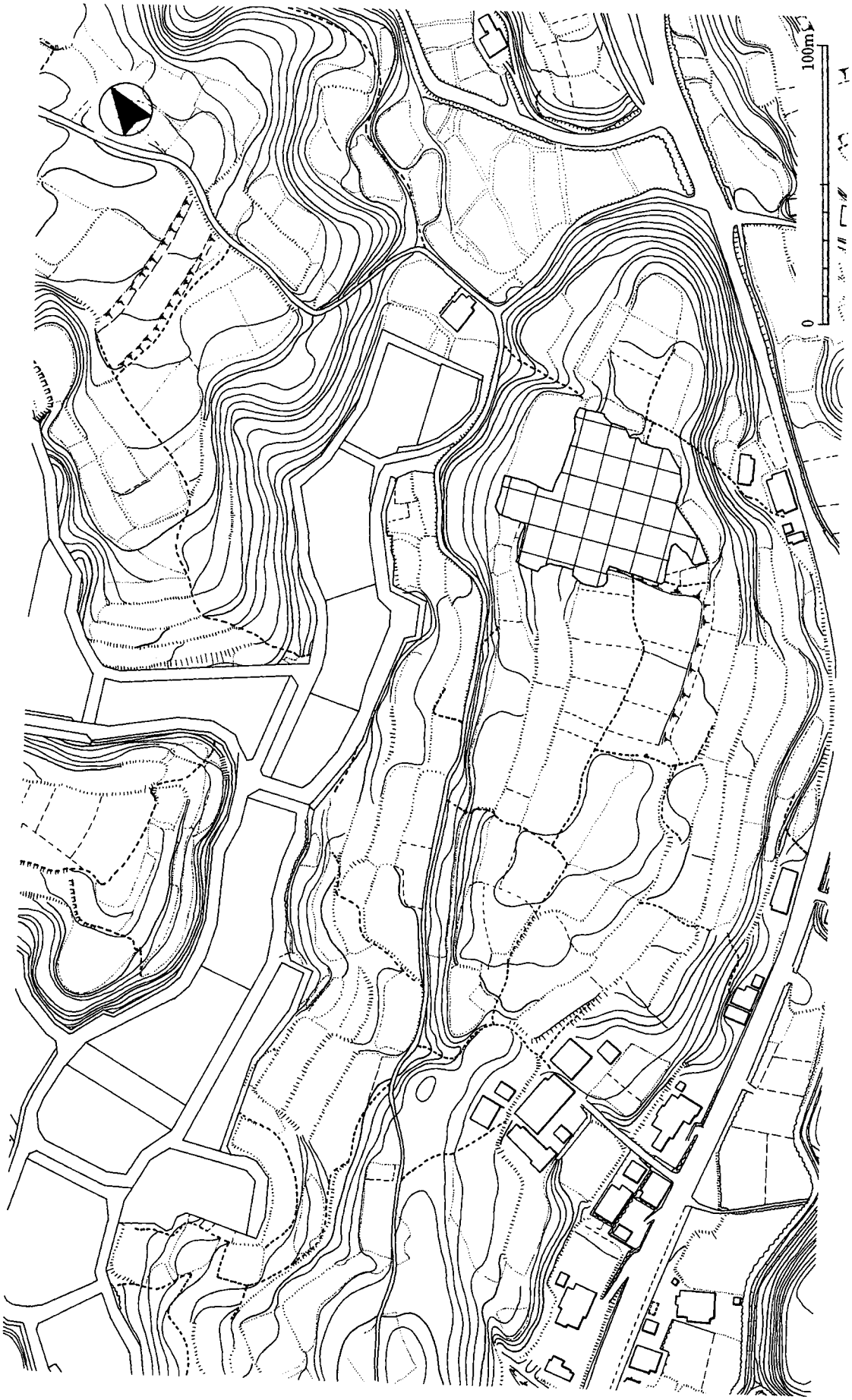
この事業の対象地域は，「農道網は地区内の主要道路である村道はいずれも幅員が狭く特に集落内は拡幅不可能な状況にある。又，農道も有効幅員2.0～2.5m と狭く区画の形状も不規則で狭く，機械利用形態に支障をきたしている。水田の用水は湧水に依存している現状で恒常的な用水不足をきたしている。このため国営総合かんばい事業による用水補給による農業用水の安定的確保と供給が望まれている」現状にある。また，営農状況では「飼料作（青刈とうもろこし，イタリアン）を中心として一部なす，栗を含んだ経営であるが，狭小で不規則な区画形状と合せて水利に恵まれない適期作付など計画的な輪作態形の阻害要因となっている」という問題点も指摘される。こうした現状を受けて，この事業は，「農産物輸入自由化に耐えうる畑地帯の整備を目的として，区画整理と農道網の整備を行い，農産物輸送の合理化，農業機械の大型化，農地の汎用化を図り農業の近代化を進めながら，農業経営の合理化と安定を図る」ことを目的にして始められた。その工事計画は，農道計画，区画整理計画，用水計画，排水計画である。

２．事業照会と予備調査の経過

熊本県文化課は毎年国及び県，それに係わる法人などの開発部局に対して次年度の事業照会をおこなっている。そうした照会をもとにして予備調査をおこない極力その保存を求めながら，設計の関係でその開発が埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがある場合には，その対象となる部分について本調査を実施している。

昭和63年度県農政部から多くの事業計画が提出された。この中の一つに平成２年度着工予定の県営緊急畑地帯総合土地改良事業（須恵深田地区）があった。その後，文化課では，遺跡台帳の照合と現地踏査（文化財保護主事，坂田和弘担当）を実施して，当地に埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が高いと判断した。そして，その結果を農政部局へ通知し，併せて，早急な試掘調査の実施を求めた。

こうした通知を受けて，県農政部は，試掘調査を県文化課に依頼した。この依頼を受けて，県文化課は平成元年度に試掘調査（参事，高木正文・文化財保護主事，園村辰実担当）を実施し，その結果，当地に埋蔵文化財包蔵地の存在が認められること，縄文時代と歴史時代の二つの時期がみられることを，その範囲や深度を明示した「試掘調査結果報告書」に取りまとめて農政部局へ通知した。また，併せて，今後の措置として，工事施工上，埋蔵文化財包蔵地



第１図　周辺地形図

第２図　周辺地形図（工事施工後の状況）

内で掘削の対象となる地域については，発掘調査が必要である旨を農政部局へ通知し，その中で調査のスムーズな進行や調査が工事施工上での障害とならないために，遺跡の現地保存を目的とした設計変更等の協議を求めた。

３．発掘調査の進捗

事業照会，台帳照合，そし
流れをとおして確認した遺跡の範囲と，設計変更等を経て最終的に確定した調査範囲は，第１図に示したとおりである。

本調査は，平成２年10月から平成３年２月まで実施されている。10月は調査準備が中心の月であり，11月以降が本格調査で，そして，１月下旬から２月上旬にかけて調査整理という進捗であった。なお，その具体的な発掘調査の経過については，第２節に譲ることにする。

４．発掘調査の組織

〔現地踏査・試掘調査，昭和63年度・平成元年度〕

調査責任者　江崎　正（文化課長）
隈　昭志（課長補佐）

調査総括　松本健郎（調査第一係長）

調査担当　高木正文（試掘調査担当，参事）
園村辰実（試掘調査担当，文化財保護主事）
坂田和弘（現地踏査担当，文化財保護主事）

調査事務局　林田敏嗣（課長補佐）
松崎厚生（主幹・経理係長）
上村裕司・泉野順子（主事）

〔本調査平成２年度〕

調査責任者　江崎　正（文化課長）
隈　昭志（教育審議員・課長補佐）

調査総括　松本健郎（調査第一係長）

調査担当　野口龍彦（文化財保護主事）
山城敏昭（文化財保護主事）

調査事務局　中川義孝（課長補佐）
上村忠道（経理係長）
上村裕司・泉野順子（主事）

調査協力者

高田素次（上村在住，熊本県文化財保護指導委員），渋谷敦（錦町在住，錦町教育委員長），富田紘一（熊本市立博物館），鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会），菖蒲和弘（山江村教育委員会），和田好史（人吉市教育委員会），熊本県農政部，熊本県球磨事務所耕地課，熊本県須恵村経済課，同県須恵村教育委員会

調査作業員

五嶋マツミ，荒木忠代，松坂アサカ，川辺ナラヨ，中村ユキヨ，釜田ミヤ子，恒松リツ，宮田ミツ子，平田シマエ，宮田マスノ，林田ミエ，恒松シヅエ，松山ヒサ子，松村ユキエ，北川十七子，谷村ミチ子，久保田米子，中村純一

〔整理・報告書作成平成８年度〕

調査責任者　桑山裕好（文化課長）
丸山秀人（教育審議員・課長補佐）

調査総括　島津義昭（主幹・調査第一係長）

調査担当　木﨑康弘（文化財保護主事）
富永圭子（文化課整理嘱託）
森　愛華（文化課臨時）

調査事務局　淵上重喜（教育審議員・課長補佐）
江尻靖子（総務係長）
高宮優美（参事）
岸本誠司（主事）

調査協力者　三島　格（肥後考古学会長）
森　　隆（滋賀県野洲町教育委員会）
山本信夫・狭川真一・中島恒次郎
（太宰府市教育委員会）

整理作業員

荒牧陽子，米倉五月，山切律子，山下千栄子，今福英子，大塚トシ子

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

本調査は，平成２年10月から平成３年２月まで実施された。そこで，第２節では，調査の具体的な方法と，その開始から終了までの行程を発掘調査日誌に則して紹介していくことにしよう。

調査は，調査区の立木等の伐採と焼却，そして重機による表土の取り除きから始めた。その後，その箇所の清掃をおこない，引き続いて実測図作成に給するための基準作りとして，トランシットを使用してグリッド設定をおこなった。設定したグリッドの一辺の長さは，10mである。グリッド設定は，地形に則して，任意におこなった。また，その際の基準の点も任意に置かれている。なお，調査区の位置を地形図上で押さえるための基準としては，県道33号線沿の電柱をグリッドH－4,H－5,I
交点杭からトランシットを使用して見通すという方法が採られている。

遺構には，集石，竪穴式住居跡，土坑，土壙墓，柵状柱列，穴，道路跡という種類があった。それぞれの遺構ごとにおこなわれた調査方法を示す。

集石は，包含層の掘削に併行しての礫の露出後，その状況を写真，平面図，断面図に記録する。実測図の縮尺率は，10分の１である。

竪穴式住居跡は，平面形を確認した後，土層堆積の状況を確認するためのセクション・ベルトを残して掘り始める。次に土層観察と土層断面図の作成，そして写真撮影をして，セクション・ベルトを除去して，平面図と断面図を完成させる。実測図の縮尺率は，20分の１である。

土坑は，平面形を確認の後，土層堆積の状況を確認するためのセクション・ベルトを残して掘り始める。次に，土層観察と土層断面図の作成，そして写真撮影をし，その後にベルトを取り除いて，平面図及び断面図を完成させる。実測図の縮尺率は，10分の１である。

土壙墓も同様の方法で調査が実施されている。ただし，供献遺物の出土状態の実測図と写真撮影は，ていねいになされている。実測図の縮尺率は，10分の１である。

柵状柱列と穴は，同時進行で調査されている。実測図の作成は各グリッドを単位にしておこなわれている。その縮尺率は，20分の１である。通常の穴は，レベル記載，柵状柱列は，断面図の作成がおこなわれている。

道路跡は，路線の確認後にセクション・ベルトを残して掘削を開始している。硬化面の面数を面的に確認しながらの掘削である。実測図は縮尺率20分の１でおこなわれ，平面図の他，断面図の作成もおこなわれている。

包含層の調査では，各グリッドを単位として，掘り下げがおこなわれている。その後，出土位置とレベルを使っての深度計測をおこないながら，ドットマップが完成していく。その際の縮尺率は，20分の１である。

平板を使った地形図の作成もおこなわれている。その縮尺率は，200分の１である。20㎝ごとに１本づつの等高線が引かれている。

写真は，モノクロとカラースライドの２種類で撮影された。写真機の種類は，35㎜の一眼レフである。撮影の方向は，主軸に平行して１景，その主軸に直行させて１景を原則とした。なお，空中写真の撮影は，実施されていない。

２．調査の経過

本調査は，平成２年10月15日から平成３年２月５日まで実施されている。10月は調査準備が中心の月で，11月以降が本格調査で，そして，１月下旬から２月上旬にかけて調査整理であった。次に，調査の経過を月別に示していこう。

10月は，発掘調査開始の月であった。調査担当者は，文化財保護主事の山城敏昭である。15日がその開始日で須恵村役場の経済課と調査の打合せそして現場下見，プレハブ建設がおこなわれている。16日の作業は調査予定地の伐採と焼却作業である。また調査員として，文化財保護主事の野口龍彦が22日に合流している。表土除去作業は18日～23日で，バックフォーとブルドーザーをチャーターしての作業であった。また調査区の清掃は，その表土除去作業と

併行して実施されている。なお遺構確認作業は，調査区清掃作業と一緒に実施され，29日に終了している。23日は，グリッド杭の設置を調査区の半分（残りの部分については30日と31日に実施）そして現場への調査器材の搬入がおこなわれている。なお，本格的な調査開始は，31日からである。

11月に入り，調査は本格的な始動となったようである。作業は，グリッドの掘り下げが中心である。１日には，道路跡が検出されている。５日には，原点移動をおこなっている。また，６日には，200分の１地形図の作成を平板でおこなっている。７日には，土壙墓の調査が開始され，供献土器として，磁器・土師器が検出されている。その調査終了は，13日である。13日は道路跡の調査日である。また14日からは土坑の調査も始まった。なおグリッドの掘り下げは，順次おこなわれている。

来跡者としては，県文化課の松本健郎（16日）と宮坂孝宏（６日),木﨑康弘（15日）がいる。また，熊本日日新聞と人吉新聞の取材が17日にあり，熊本日日新聞が18日付け，人吉新聞が17日付けの誌上に土壙墓についての記事が掲載されている。なお14日から17日までは学芸員の長谷部善一が調査員として調査に合流している。

12月の調査日誌には，霜柱の記載が始まっている。調査環境としては，劣悪である。また，遺跡がある球磨・人吉地方の気候的な特徴として挙げられる霧の発生の記述も，調査日誌上に現れ，調査の進行の障害となっているようだ。

調査では，グリッドの掘り下げが継続されている。また，土坑の調査も継続的におこなわれている。竪穴式住居跡の調査は，４日に始まっている。この頃は，縄文時代後期の遺構であるという認識であったようである。なお，この認識は，その後，日誌記述の上での変更がなく，遺構調査の終了（１月７日）まで続いていたものと思われる。なお，土坑の調査やグリッドの掘り下げも順次おこなわれた。

来跡者としては，熊本県文化課坂田和弘（７日），山江村教育委員会の菖蒲和弘氏（12日),熊本市立博物館の富田紘一氏と人吉市教育委員会の和田好史氏（19日),人吉市教育委員会鶴嶋俊彦氏(27日)がいる。

12月に見られた劣悪な調査環境は，１月にも見られる。年が明けて，１月は，７日から調査が再開されている。グリッドの掘削作業と併行して，穴の調査が実施されている。また，１号集石の調査も，７日におこなわれている。８日には，柵状柱列の調査がおこなわれ，さらには２号集石や３号集石も調査の対象となる。14日には10号・11号土坑が調査され25日には11号・12号・13号土坑，29日には14号土坑が調査されている。また遺物の出土地点の記録も逐次おこなわれている。

来跡者には９日に郷土史家の高田素次氏（上村，熊本県文化財保護指導員）と渋谷敦氏（錦町，錦町教育委員長）がいる。

なお，調査は，30日に調査器材を搬出，31日に現場や事務所の整理をおこないおおかた終了している。そして２月１日にプレハブ解体，５日にプレハブ跡地の現状修復を経て，調査に係わるすべての日程が終了している。

第Ⅱ章　遺　跡　の　概　要

第1節　遺　跡　の　環　境

第2節　遺　跡　の　概　観

第3節　遺跡の層位と包含層

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１．地理的環境

九州島は，地形上で大きく四つに区分される。それは，福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地，大分県・熊本県北半と長崎県南半の中部火山地域，宮崎県・熊本県南半の中部山地，そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の４地域である。そして，これらの地域は，それぞれに地形的特徴を異にしている。例えば，北部山地は広い平野部と険しい山地によって形成されている地域であるし，中部火山地域には阿蘇山や雲仙岳のように活発に活動する火山群と熊本平野がある。また，南部火山地域は，広いシラス台地と多くの活火山群を擁するなど，他の地域とは趣を異にしている。では，ここで報告する堂園遺跡が存在する中部山地は，どのような地形的特徴を示しているのであろうか。

中部山地は，九州山地と呼ばれ，祖母山・国見山・市房山などの1,700ｍ級の山々が連なる高山地帯である。平野部は極めて狭く，西の不知火海沿岸や東の太平洋岸，そして山地内に大きく口を開く人吉盆地にあるのみである。従って中部山地は，標高が1,700ｍ級から０ｍまでという激しい高低差があり，しかも高山地帯の山間をぬうように大小の川が流れて深い谷を作るなど，極めて起伏に富んだ地形を成していることになる。そうした山間を流れる川の一つに，球磨川がある。この球磨川は，狭い九州島から不知火海へと，急激に標高を下げて流れ下る川である。それ故に，日本三急流に数えられるほどに流れの速い川と言われることもある。

球磨川は，市房山塊を源にして，人吉盆地を東西に貫流する。その後，急激に流れを北にかえ，中部山地の谷間を蛇行しながら不知火海へと注ぎ込んでいる。その間の支流は80本を数え，流域面積は実に1,880㎢に及んでいる。その面積は，熊本県総面積の25％を占め，まさに，熊本県最大規模の河川と言える。しかも、この川は，人吉盆地での地形の広がりの中心をもなしている。それは球磨川を中心にしての沖積地→台地・丘陵地→山地という展開である。そこで，沖積地，台地・丘陵地，山地ごとに概観してみよう。

沖積地は，球磨川とその支流の流路にそってみられる。特に，今回報告する堂園遺跡がある中球磨と呼ばれる地域では、球磨川に沿って広く発達している。台地・丘陵地は，その広さからも人吉盆地の中心をなしているが，やはり中球磨という盆地中央部でよく発達している。しかし，球磨川の北と南とでは，その地形的な特徴に違いが認められ，生成の違いを窺わせる。その違いとは，球磨川の南岸が白髪岳を初めとする九州山地の麓に形成された複合扇状地であるのに対して，北岸は球磨川の支流川辺川によって作られた扇状地と共に，阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵部がその両側に広がっている，という点である。換言すれば，とても平坦な南岸に対する起伏に富んだ北岸と，その特徴の違いを表現することができよう。実は，今回報告する堂園遺跡は，この起伏に富んだ北岸の丘陵上に立地しているのである。

次に，山地に目を移そう。球磨・人吉地方は，人吉盆地とその周りに広がる山地を含む範囲である。しかも，その山地は，盆地の平坦部とは比較にならないほど広く，そこには多くの種類の岩塊・岩層がみられる。石器時代にあっては，道具の中心が石器であり，その石材が球磨・人吉地方で産するものなのかそうではないのかは，とても重要な問題である。そこで，山地における岩石・岩層の分布をみてみることにしたい。

黒曜石は，人吉市桑ノ木津留と球磨村の白浜での産出が知られている。桑ノ木津留のものは，ほとんど気泡を含まず，飴色で透明である，とても良質な黒曜石である。原石は，小さい。白浜例は，気泡の粒子を多く含んで，表面がザラついた黒曜石である。よく似たものに大口市日東産があるが，肉眼観察に基づけば，白浜産のほうが透明であり，光沢を持つ

ようである。チャートは，人吉盆地の北側山地に岩脈がある。入手は容易で，北側の山地を流れる河川や川辺川の扇状地の礫層中でも多くみつけることができる。また，安山岩も入手が容易で，盆地南西に広がる山地の表層をなしており，河川には多くの転石がみられる。この他，砂岩・千枚岩・花崗岩も山地中にみられる石材で，石器時代以来，石器石材等に利用されている。

このように，球磨・人吉地方の山地には，多種多様な岩石の産出地があり，石器石材の入手にはとても便利な地域であったことがわかる（**第３図**）。

さらに，こうした山地は，新しい時代にあっては，地域的な隔絶性を生んでいる。例えば，人吉盆地外からの商品流入には，高山を越えなければならないというリスクを背負うように、相当の付加価値が伴う場合が多いものと予想される。例えば，それは，古代・中世や近世における広域流通品としての陶磁器類の特徴でもあろう。そうした意味でも，球磨・人吉地方の歴史と山地との関わりはとても深いものである。

２．歴史的環境

【先土器時代】球磨・人吉地方の先土器時代遺跡は，今日までに49箇所が確認されている。その所属時期は，ナイフ形石器文化以前２遺跡（深田村中里遺跡),ナイフ形石器文化33遺跡，細石器文化12遺跡，不明６遺跡である。ただし，多くの遺跡が表面採集によって確認されているもので，その内容を具体的に知ることはできない。

ナイフ形石器文化の中でもっとも古い石器文化では，湯前町潮山遺跡でみつかった石器文化，人吉市血気ケ峯遺跡で検出された石器文化，山江村狸谷遺跡で見つかった狸谷Ⅰ石器文化（木崎・隈1987）が有名である。この中で、その状況が明らかにされているのは、狸谷Ⅰ石器文化で，ナイフ形石器，掻器，削器，抉入石器，彫器，磨石・敲石等の多くの石器が出土した。この石器文化は，その出土層位からみて入戸火砕流直下に出土位置があり，姶良Ｔｎ火山灰降灰（以後，ＡＴとする）直前の段階とすることができる。

ＡＴ降灰以後のナイフ形石器文化は，球磨郡内では多く確認されている。しかも堂園遺跡周辺にもみられ，須恵村中尾遺跡（17),沖松遺跡（20),深田村灰塚遺跡（23）などがある。さらに，この周辺を広く見渡せば，免田町五本松遺跡，黒田周辺の遺跡，錦町夏女遺跡，そして人吉市、山江村、相良村周辺の人吉市白鳥平遺跡，同市天道ケ尾遺跡，同市鼓ケ峰遺跡，同市村山・闇谷遺跡，同市石清水遺跡，同市血気ケ峯遺跡，山江村大丸・藤ノ迫遺跡，狸谷遺跡，相良村出口遺跡でも関係する石器文化が検出されている。

細石器文化関係の遺物が出土している所では，須恵村別府遺跡（18）が近くにある。また，発掘調査でその石器文化の出土層位などを明らかにできる遺跡としては，多良木町里城遺跡（８）で検出された里城石器文化がある。なお、この石器文化では、隆起線文土器が検出されており，縄文時代草創期に属することが，調査後に確認されている。

【縄文時代】堂園遺跡では，早期，中期，後期，晩期に属すると考えられる遺物が出土した。ただし，その中心は，早期のもので，中期，後期，晩期の資料は僅少に止まっている。

早期の遺跡では，深田村灰塚遺跡（23）の資料がもっとも充実している。特に，手向山式土器や塞ノ神式土器の資料が充実している。また，出土点数は少ないが，須恵村中尾遺跡（17),別府遺跡（18),沖松遺跡(20)でも押型文土器や中原式土器など，早期の中でも古手の土器が出土している。この他，須恵村内では，上阿蘇遺跡（塞ノ神式土器),諏訪原遺跡（２，押型文土器，塞ノ神式土器),馬場遺跡（押型文土器),小春遺跡(３，押型文土器，塞ノ神式土器),浜ノ上遺跡（13，押型文土器，塞ノ神式土器),古城遺跡（57，押型文土器）などが検出されている。さらに，近隣では，免田町五本松遺跡や同町黒田周辺で，押型文土器が多量に採集されているし，発掘資料としても錦町益手遺跡（38）が確認されている。このように，縄文時代早期の遺跡の数や内容において，堂園遺跡周辺は、充実した地域なのである。

なお、球磨郡内で注目される遺跡を数例挙げれば，球磨村大瀬洞穴遺跡と同村高沢洞穴遺跡をまず第一

にあげることができる。それは、石灰岩地帯にある鍾乳洞が住居に利用された遺跡である。骨や貝殻などの保存に適した条件を具えた大瀬洞穴遺跡では、学術調査が実施され，鹿の骨の他，アワビ・ハマグリなどの海の貝殻が発掘されている。また，高沢洞穴遺跡でも正式な調査がおこなわれていないが，鹿の骨とともにハマグリの貝殻がみつかっている。この二つの洞穴から海との関係を示唆する貝殻が出土したことは，縄文時代早期の社会を探る上でとても重要である。この他，狸谷遺跡や大丸・藤ノ迫遺跡，天道ケ尾遺跡，人吉市石清水遺跡は，著名な遺跡である。

堂園遺跡では，前期の資料が検出されていない。これと呼応するのであろうか，堂園遺跡周辺でもあまり発見例がない。人吉盆地内では，人吉市八峰遺跡で玦状耳飾りが採集されている。この耳飾りとしては，湯前町浄心寺（登録名称は城泉寺）周辺でも発見されている。いずれについても，伴出土器は，轟式土器が予想される。なお、この轟式土器を出土している遺跡としては，球磨村久保遺跡や人吉市射場ノ本遺跡がある。曽畑式土器は，人吉市棚平遺跡や鼓ケ峰遺跡で採集されている他，水上村岩野でも検出されている。

中期の遺物としては，少なくはあるが，後半の時期の遺物である阿高式系土器が堂園遺跡で検出されている。また,遺跡周辺でも,諏訪原遺跡(２，南福寺式土器),馬場遺跡（南福寺式土器),小春遺跡（３，南福寺式土器),別府遺跡（18，南福寺式土器）などで検出されている。

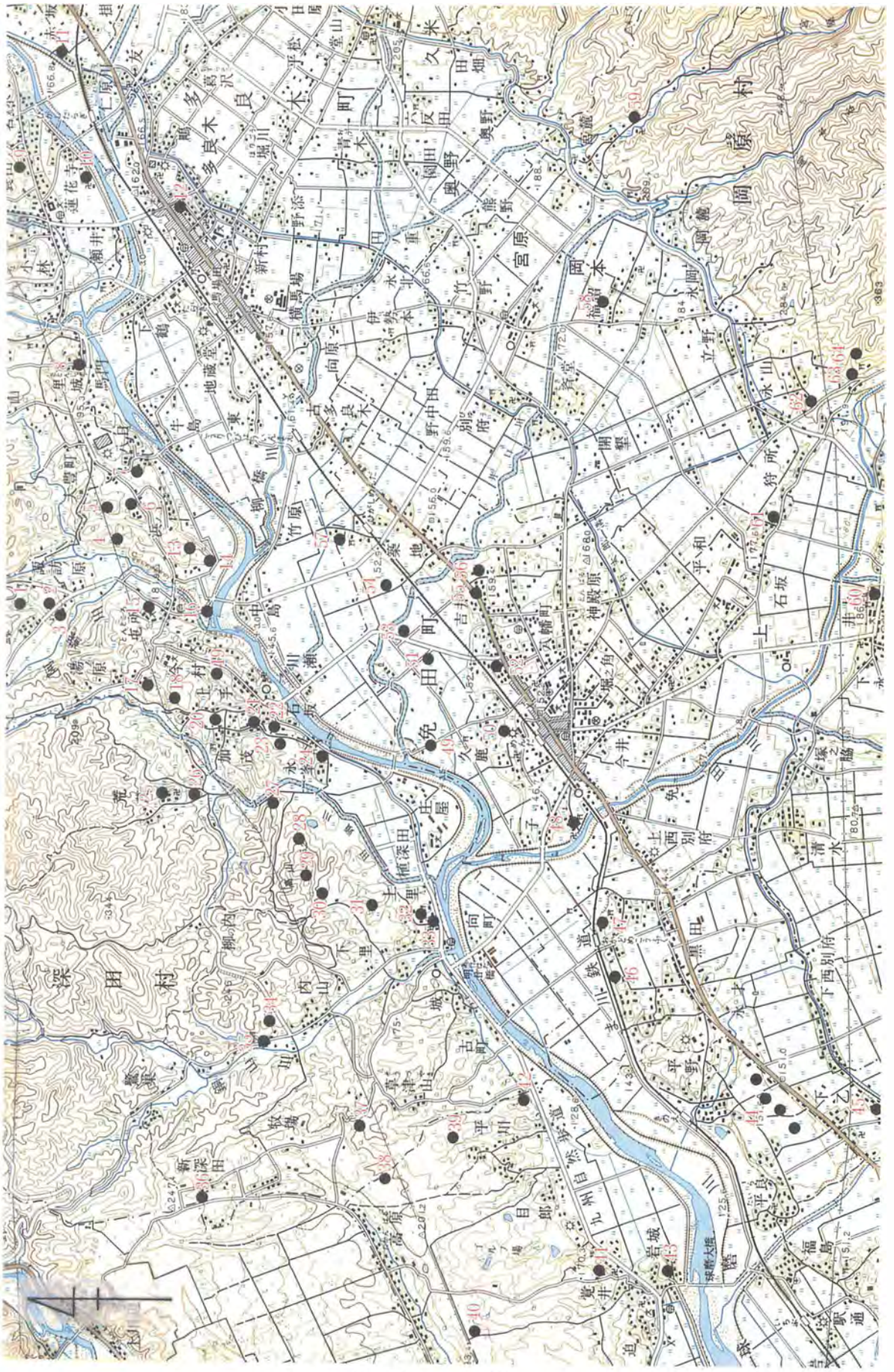
後期の遺物としては、初め頃の御手洗ａ式土器や中頃の太郎迫式土器などが出土している。また，周辺の遺跡でも検出例が多い。例えば，須恵村沖松遺跡(20）の調査では，多くの資料が検出されている。ただし，これは辛川式土器や天城式土器という後期後半が中心の遺跡である。なお，人吉市中堂遺跡も同様に，辛川式土器，三万田式土器，天城式土器の時期の集落遺跡である。堂園遺跡の近くでは、沖松遺跡の他に，出水式土器が出土した柿ノ木遺跡(１)，諏訪原遺跡（２),小春遺跡（３),鐘崎式土器が検出されている馬場遺跡などがある。この出土土器からすれば，これらの遺跡は，後期の中でも前半期に位置付けられる遺跡である。

なお，先に紹介した沖松遺跡では，晩期になっても集落は継続し，埋甕の他に，天城式土器，古閑式土器，黒川式土器などが大量に検出されている。主な出土遺物では，先に示した土器の他に，土偶に似た土製品，滑石製の玉類などがある。また，周辺の遺跡としては，黒川式土器が出土している柿ノ木遺跡，諏訪原遺跡，馬場遺跡，小春遺跡があり，別府遺跡では黒川式土器や凸帯文土器と共に，孔列土器が出土している。人吉盆地内の晩期では，人吉市中堂遺跡，同市アンモン山遺跡がある。また，石刀の出土遺跡としては，球磨村近江原遺跡や多良木町熊山遺跡などが著名である。

【弥生時代】堂園遺跡では，弥生式土器が少量出土しているが，遺構は存在していない。周辺の遺跡では，松尾遺跡，上阿蘇遺跡，阿蘇遺跡，柿ノ木遺跡（１),諏訪原遺跡（２),中島遺跡（16),別府遺跡（18),沖松遺跡（20),上手遺跡（21）がある。この中で，柿ノ木遺跡では，中期の黒髪式土器と後期の重弧文土器や石庖丁が見つかっている。また，重弧文土器は，沖松遺跡や上手遺跡でも検出例がある。なお、別府遺跡では，シカをかたどった線刻がある石製品（石庖丁？）が検出されている。

この他，近くの遺跡としては、深田村の新深田周辺で後期の集落の跡が見つかっているし，錦町夏女遺跡(40)もその時期の集落遺跡として著名である。また，錦町大原天子遺跡(39)では，球磨・人吉地方でももっとも古い弥生式土器である前期の終わり頃の亀ノ甲式土器が検出されているし，免田町本目遺跡(45)でもこの型式の土器が発掘されている。なお，本目遺跡では，過去，多量の重弧文土器が採集されていたが，発掘調査の結果，後期の終わり頃の木棺墓や墳丘墓などが検出され，これらの土器が共同墓地に供献された土器であることが確かめられている。

球磨・人吉地方を広く見回すと，人吉市荒毛遺跡がある。中期初め頃の城ノ越式土器や後期のＶ字溝が発掘されていると共に，多数の重弧文土器が採集されている。人吉市中通遺跡では，中期の黒髪式土器の時期の竪穴式住居跡が見つかっている。多良木



第３図　周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時　代	備　考
1	柿ノ木遺跡	須恵村柿の木	縄･弥	
2	諏訪原遺跡	須恵村諏訪原	縄･弥	縄文土器･石器、弥生土器･石器
3	小春遺跡	須恵村小春	縄	
4	馬渡遺跡	須恵村馬渡	縄	
5	八日遺跡	須恵村八日	縄	
6	毛谷遺跡	須恵村毛谷	縄	
7	京塚遺跡	須恵村京塚	縄	
8	里城遺跡	多良木町多良木里城	旧･縄	
9	青蓮寺遺跡	多良木町黒肥地北山下		
10	蓮華寺･相良頼景遺跡	多良木町黒肥地		
11	赤坂古墳	多良木町上赤坂	古	刀･クツワ･馬具
12	青銅製経筒	多良木町中央公民館		
13	浜ノ上遺跡	須恵村浜ノ上	縄	縄文土器、石器
14	浜ノ上横穴群	須恵村浜ノ上	古	
15	屯所遺跡	須恵村屯所		
16	中島遺跡	須恵村中島	弥	弥生土器
17	**中尾遺跡**	須恵村中尾	旧･縄	石器･土器
18	**別府遺跡**	須恵村別府	旧･縄･古･奈･平･鎌	石器･縄文時代土器･古墳時代土器
19	**堂園遺跡**	須恵村堂園	縄･古･奈･平	縄文晩期
20	沖松遺跡	須恵村沖松	旧･縄･弥･古･奈･平	縄文･古墳時代土器
21	上手遺跡	須恵村上手	弥	
22	石坂横穴群	須恵村石坂	古	馬具･須恵器
23	灰塚遺跡	深田村	縄･平･鎌	
24	永峰横穴群	深田村永峰	古	
25	荒茂横穴群	深田村荒茂	古	
26	勝福寺跡遺跡	深田村荒茂		
27	高山瓦窯跡	深田村高山		瓦窯、平瓦･軒平瓦
28	前平遺跡	深田村前平	縄	縄文土器・石器
29	高山城跡	深田村高山	歴	
30	赤坂窯跡推定地	深田村赤坂		須恵器、羽口
31	オンバガサコ遺跡	深田村萩尾	旧･歴	須恵器出土
32	下里遺跡	深田村下里	旧･縄	石錘、縄文晩期土器
33	下里横穴群	深田村下里	古	球磨川岸壁に開口
34	内山遺跡	深田村内山		石器･石鏃
35	万福寺遺跡	深田村内山		池跡･参道跡をとどめる
36	新深田遺跡	深田村新深田	古	地下式板石積石室墳
37	天子山遺跡	深田村草津山	弥	石包丁1､弥生後期土器
38	木上益手遺跡	錦町木上益手	縄	縄文早期、塞ノ神式
39	大原天子遺跡	錦町大原・天子	縄	縄文晩期土器、平安土師器･須恵器･近世屋敷･有肩打製石斧
40	夏女遺跡	錦町高原	弥･古	古墳前期弥生後期、鏡･銅剣
41	荒田横穴群	錦町木上荒田	古	道路改修で消滅
42	竜口横穴群	錦町木上龍口	古	５基確認
43	岩城横穴群	錦町木上岩城	古･縄	
44	四塚古墳群	錦町木上三つ塚	古･弥	円墳４基
45	下乙本目遺跡	免田町本目	弥･古	
46	才園古墳	免田町畑中	古	円墳、金環･刀子･クツワ･管玉･切子玉･丸玉
47	黒田墓誌銅板出土地	免田町平城	奈	銅板１枚
48	宝塚古墳	免田町久保	古	
49	上久鹿遺跡	免田町久鹿		土師器
50	前田遺跡	免田町前田	平	瓦（布目）軒平
51	古屋敷遺跡	免田町竹下		湖州鏡･土師器･滑石鍋
52	市房隠遺跡	免田町馬立原	弥	弥生土器
53	鬼の釜古墳	免田町久鹿萩原	古	円墳、横穴式石室
54	上築地遺跡	免田町築地権現		弥生後期土器、石鏃･石庖丁
55	廻迫遺跡	免田町神の田		縄文土器、石鏃
56	廻り迫蔵骨器出土地	免田町神の田		須恵器･蔵骨器
57	古城遺跡	須恵村古城	縄	
58	福留古墳	岡原村岡本福留	古	古墳、剣
59	宇土谷蔵骨器出土地	岡原村宮原宇土谷		歴史、有肩打製石器
60	井上遺跡	上村井上		縄文～弥生土器
61	石坂古墳	上村石坂	古	消滅
62	永山遺跡	上村永山	古	縄文～弥生、石庖丁
63	伊勢尾蔵骨器出土地	上村上の原		蔵骨器１個
64	上の原窯跡	上村上の原	奈良～平安	須恵窯跡

町槍掛松遺跡では，細形銅剣の出土が知られている。また，五木村などの山地部からも弥生式土器が出土していることは，注目に値するだろう。

【古墳時代】堂園遺跡では，この古墳時代の竪穴式住居跡が１基検出されている。近隣の遺跡を挙げてみれば，沖松遺跡（20）で５世紀代と６世紀代の集落跡が検出されている。横穴としては，石坂横穴群（22）と浜ノ上横穴群（14）がある。この中で，石坂横穴群では直刀１本と鉄鏃７本，馬具１式が発見されている。また浜ノ上横穴群からは，６世紀後半代の須恵器高坏が出土している。

さて，球磨・人吉地方の中で大型の古墳は，錦町や免田町など中球磨に集中し，その縁辺部には小型の古墳が目立っている。これらは堂園遺跡周辺から眺望できる範囲にあり，比較的近接した位置関係にある。錦町亀塚古墳群には、前方後円墳３基がある。錦町四塚古墳群（44）は，球磨・人吉地方の中ではもっとも規模が大きな円墳群（３基）である。免田町才園古墳群（46）では，かつて２号墳から，直刀などの武具や馬具類，鉄鋏などの工具類，鍍金したが画文帯求心式神獣鏡，玉類，金環などの豊富な副葬品が出土していた。免田町鬼ノ釜古墳は（53),巨石を使った貫り抜き玄門に特徴がある古墳である。以上が球磨・人吉地方の有力な古墳である。

この他に，高塚古墳としては，多良木町夫婦塚古墳群，同町赤坂古墳群（11）が有力な遺跡として挙げられる。また，山の中腹に作られている古墳群として，水上村千人塚古墳群は，特徴的な遺跡である。

堂園遺跡の近くには，特徴的な墓が検出されている遺跡がある。それは，深田村にある新深田地下式板石積石室墓群（36）で，同様の墓は相良村高原でも見つかっている。なお，相良村の高原台地では，球磨・人吉地方で最古の古墳である吉野尾古墳群という小型の古墳が群集した遺跡がある。地下式板石積石室墓は、他に，多良木町大久保台地や免田町本目遺跡（45）等でも検出例がある。

球磨・人吉地方では，装飾のある横穴墓もある。もっとも近い所では，相良村の小原横穴群，錦町京ケ峰横穴群がある。また，人吉市大村横穴群は，国指定の史跡である。

【奈良・平安時代】古代における球磨・人吉地方の中心地域は，依然として盆地中央部にあったと考えられる。堂園遺跡は，この中央部に位置している。そのことが窺えるように，堂園遺跡から移動式竈の出土があった。また，同時に，10世紀代の越州窯系青磁や緑釉陶器片，土師器を供献した墓が検出されている。

近隣の遺跡としては，沖松遺跡（20）で掘立柱建物跡が検出されている。その年代ははっきりしないが，平安時代の初め頃と推定されている。また，掘立柱建物跡が検出されている遺跡としては，別府遺跡（18）がある。さらに，深田村灰塚遺跡（23）では，10世紀代の掘立柱建物跡と輸入陶磁器や湖州鏡を供献した９世紀後半の墓などが検出されている。なお11世紀から12世紀にかけて、この遺跡は本格的な様相を呈するようになる。このことから灰塚遺跡は，古代末から中世前半期にかけての須恵氏居館跡と推定されてもいる。また，須恵村屯所遺跡（15),浜ノ上遺跡（13),寺池遺跡，山の口遺跡でも土師器や須恵器など，この時代の遺物が採集されている。

また堂園遺跡の周辺には，球磨・人吉地方の政治的な中心人物の経済的な基盤を保証した生産遺跡や彼らの墓の遺跡が見つかっている。例えば，生産遺跡としては，須恵器や瓦の窯跡の遺跡がある。須恵村上阿蘇周辺，上村上の原遺跡（64）深田村高山遺跡（27),錦町下り山遺跡同町七中口遺跡などである。また，古瓦出土遺跡として免田町前田遺跡（50）や深田村灰塚遺跡（23）がある。墓の遺跡としては，輸入陶磁器が供献された墓が見つかっている灰塚遺跡（23),蔵骨器が出土した上村宇土谷遺跡（59),伊勢尾遺跡（63),栩登遺跡，東小原遺跡，西小原遺跡（石帯の丸鞆が出土),廻り迫遺跡（56),銅板製墓誌が見られる黒田遺跡（47）が存在している。古代の郡衙比定遺跡としては，免田町前田遺跡（50),錦町尼ケ土手遺跡，深田村灰塚遺跡（23）がある。

第２節　遺跡の概観

遺跡は，熊本県球磨郡須恵村字堂園に所在する。標高は，172ｍ～168ｍである。

第１節で述べたように，人吉盆地の中央部には，広い沖積地と広い台地・丘陵地とが広がっている。球磨川の南岸は台地で，北岸は台地・丘陵地である。この中で，堂園遺跡は，球磨川の北岸にあり，この中でも起伏量が大きい丘陵地上に立地し，しかも沖積地に近い位置にある。

調査では縄文時代の早期，中期，後期，晩期と古墳時代，平安時代，鎌倉時代以降の遺構や遺物が見つかった。縄文時代の資料でもっとも多いのが，早期の資料である。特に，手向山式土器や塞ノ神式土器などの中頃から後半にかけての土器が目立っている。中期以降では，資料数が少ない。中期では，船元式土器の破片が出土している。また，後半期の阿高式系の土器が見られる。後期では，御手洗ａ式土器や太郎迫式土器が，晩期では黒川式土器，夜臼式土器がある。ただし、これらの土器は，アカホヤ火山灰層の堆積が未発達なため，アカホヤ火山灰との関係で早期と前期以降の時期を層的に分離することができていない。ただ，早期の面から集石が確認されたり，出土遺物が多いなど，早期の集落としては安定していたことを窺わせる。

古墳時代の関係遺構としては，５世紀代の竪穴式住居跡１基が検出されている。出土した土器の量としては少ないが，近隣の沖松遺跡の例も含めて，球磨川上流域の土師器編年資料となるだろう。

平安時代の資料としては，10世紀代の土壙墓が検出されている。この墓には越州窯系青磁や緑釉陶器片，土師器が供献されており，その内容から球磨・人吉地方の政治的指導層に近いクラスの人物の墓であると判断される。球磨・人吉地方の政治史上では，その意味は大きい。

中世以降としては，時代不明の道路跡や柵状柱列が検出されている。詳細は不明であるが，字名が「堂園」ということで，荘園的な地名であり，これと係わる遺構群の可能性も高い。

第３節　遺跡の層位と包含層

遺跡では，アカホヤ火山灰層を介して上下に包含層が認められた。その堆積の状況を示そう。

第Ⅰ層表土層

遺構の確認面がアカホヤとされているので，調査段階ではすでに除去されている。

第Ⅱ層暗褐色土層

粒子が細かくて，サラサラとしたしまりのない土層である。作成された土層断面図によれば、中世以降の穴の埋め土と同じものであり，ほぼその時期に相当する土層であると判断される。

第Ⅲ層黄褐色土層

アカホヤ火山灰である。場所によっては層の状態によって二つの亜層に分けることができる所もある。それを，Ⅲａ層とⅢｂ層と呼ぼう。

Ⅲａ層は，アカホヤ火山灰が二次的に堆積した層である。球磨・人吉地方では普遍的に認められる層である。粒子は細かくてサラサラでしまりがない。堂園遺跡でいえば，縄文時代前期から晩期にかけての包含層ということになる。

Ⅲｂ層は，アカホヤ火山灰の一次堆積層である。これも球磨・人吉地方では広く認められる土層であるが，堂園遺跡では部分的な堆積状況に止まっている。この層の未発達なことが，遺物の層位的な出土を阻害している。粒子が細かくて密であるために，層自体は非常に硬くしまっている。基本的には無遺物層である。

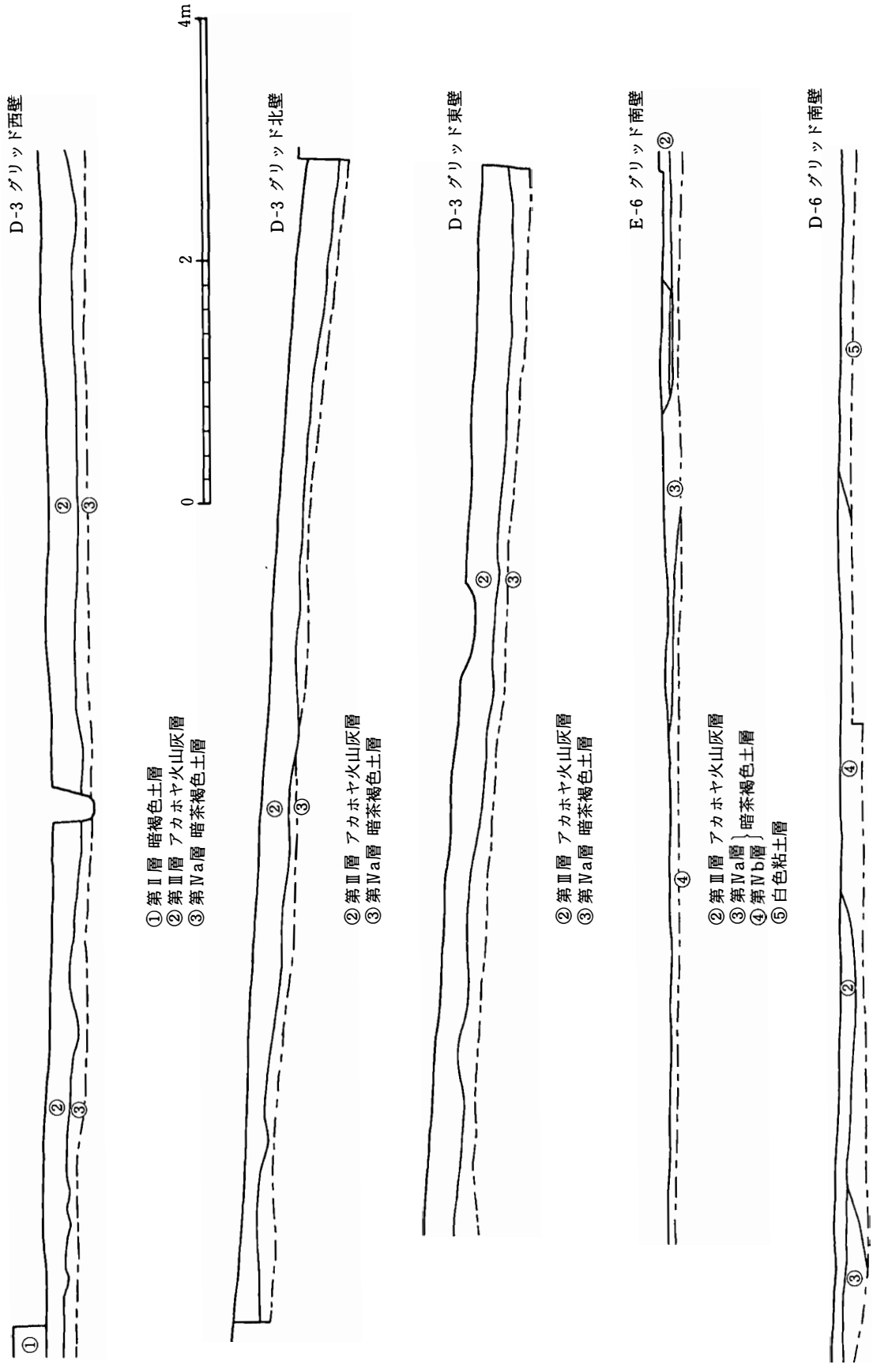
第Ⅳ層暗茶褐色土層

アカホヤ火山灰層の直下に見られる層である。このことから，縄文時代早期の遺物の包含層であることがわかる。なお、この層は，場所を異にしてその性状を違えている。

一つの性状の土層は，もっとも典型的な層で暗茶褐色を帯びているという。これをａ層としよう。

二つ目の性状をとる土層は、やや白みを増した層で，これをｂ層としよう。

上記ａとｂの亜層は，面的に分布域を異にする場合もあるが，一部ではａがｂに乗るという上下関係に置かれることもある。


D-3 グリッド西壁
D-3 グリッド北壁
D-3 グリッド東壁
E-6 グリッド南壁
D-6 グリッド南壁
0
2
4m
①第Ⅱ層 暗褐色土層
②第Ⅲ層 アカホヤ火山灰層
③第Ⅳa層 暗茶褐色土層
④第Ⅳb層
⑤白色粘土層

第４図　層位図

第Ⅲ章　調査とその成果

第1節　縄文時代早期の遺構と土器
第2節　縄文時代中期・後期・晩期の遺構と土器
第3節　縄文時代の石器とその分布
第4節　古墳時代の遺構と遺物
第5節　平安時代の遺構と遺物
第6節　鎌倉時代以降の遺構

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　縄文時代早期の遺構と土器

１．はじめに

縄文時代早期に属する遺構や遺物は，鬼界カルデラを給源とするアカホヤ火山灰層の下の層から検出された。層序としては，表土層を一枚目の第Ⅰ層として，四枚目の層である第Ⅳ層にあたる。層名は，暗茶褐色土層である。ただし，調査区は，アカホヤ火山灰層である第Ⅲ層以上の遺存が悪い状態にあったため，調査員の所見によれば，縄文時代早期の遺物と中期以降の遺物との間に明瞭な層位的上下関係は認められなかったようである。この時期の遺物の包含状況は，芳しくないと判断される。

今回の調査で得られた成果には，遺構として集石３基がある。遺物としては，中原式土器・石清水式土器・塞ノ神式土器・撚糸文土器・縄文土器・沈線文土器・沈線文と刺突文との併用文土器・「隆起文の土器」・無文土器などの早期土器とそれに伴う石器・石製品などである。ただし，石器については，上記した包含状況の関係から，所属時期を明確に決定できなかった。そこで，本節では，石器の項を設けずに，遺構，そして土器という順序で紹介をおこなっていこう。

２．遺構とその位置

遺構としては，集石３基がある。また，遺物の分布も基本的には，遺構の位置と関係があるものと思われるので，ここで，その傾向を取り上げたいと思う。

①集石

集石３基の出土位置については，**第５図**に示すとおりである。１基は，調査区の東側，残りの２基は，隣接した状況で，調査区の南側から検出されている。いずれの構造も，土坑等の下部構造を伴わないもので，調査時に礫の密集として認識された。

１号集石（第６図）

この集石は，調査区の南西隅近くで検出された。礫は52個で，受熱礫であったという。この形態的特徴は，土坑等の下部構造を伴わないところにある。その分布は，二つの長方形を呈する広がりが合体した状況にあり，東西90㎝弱，南北60㎝の範囲に広がりが認められた。礫は，ほとんどが破損しており，完形のものは見られなかった。

２号集石（第６図）

この集石は，１号集石に隣接して検出された。その位置関係は，１号集石の約２ｍ西側である。石の密集の度合いは，１号集石に比べて粗である。形態的特徴は，土坑等の下部構造を伴わないところである。分布は，一辺が1.２ｍ，1.05m，0.88mの三角形状を呈する範囲にある。礫は，40個で，受熱礫であった。また，ほとんどが破損している。

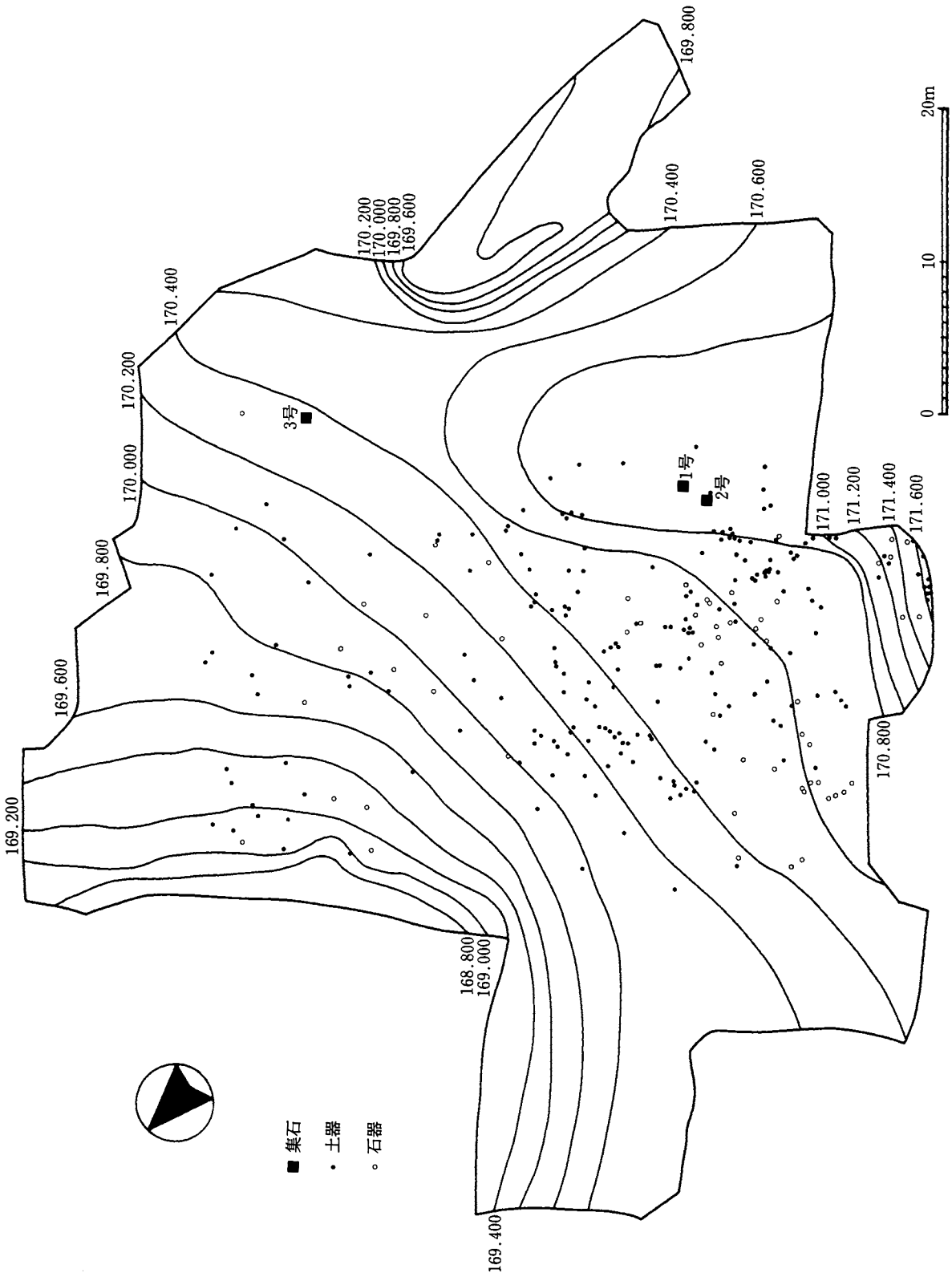
３号集石（第７図）

この集石は，１号集石や２号集石から北東方向へ28mほど行ったところで検出されている。その分布状況は，密である。ただし，その分布域は狭く，東西55㎝，南北48㎝である。その分布の平面形は，東西に長い楕円形を呈している。形態的特徴は，土坑等の下部構造を伴わないところである。構成礫は，29個で，受熱礫であった。また，ほとんどが破損していた。

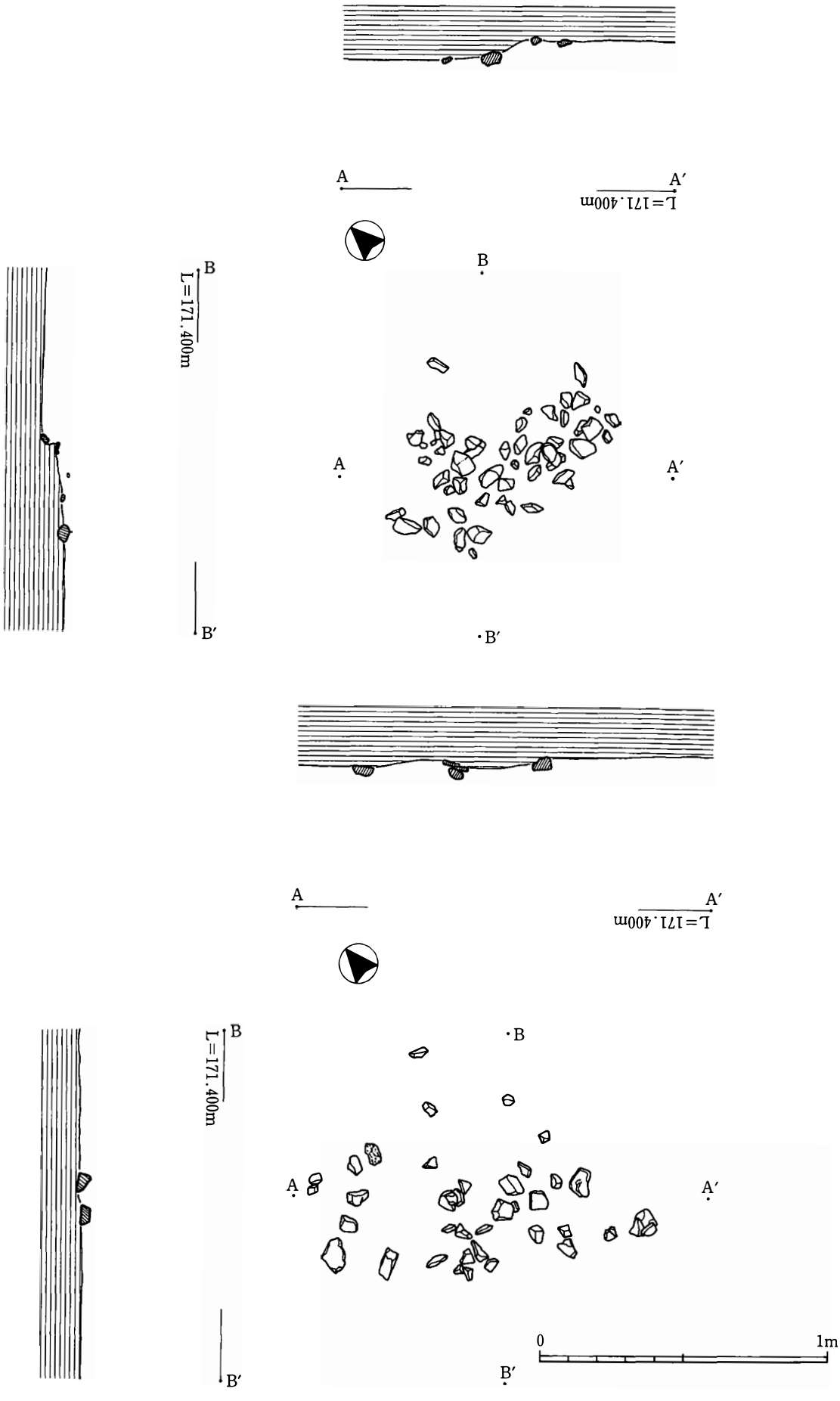
②遺物分布（第５図）

遺物分布は，調査区全面にまんべんなく見られるのではなく，その中央部を中心にして帯状に広がる状況が認められた。その状況から，遺物分布は，特徴的な偏在の傾向を呈しているようなので，そのことを詳述しよう。

遺物分布は，前記したように，調査区の中央部に帯状に広がっていた。その範囲は，幅（ほぼ東西）20m，長さ（ほぼ南北）45mであった。その広がり方は，長方形を呈した状況である。ただし，その広がりの範囲にまんべんなく遺物が見られるわけではない。その傾向は，中央部の南側に特に集中した状況である。そして，その分布は，北東方向に行くにしたがって，点在した状況を呈していく。こうした



第５図　縄文時代早期遺構位置図・遺物分布図



第6図　1号・2号集石実測図

傾向から読みとれることは，南側の主分布域に対して，北東方向に延びる遺物の拡散域という関係である。しかも，その調査区の北側には，谷部が存在し，遺物分布も谷部方向へと延びた傾向にある。

堂園遺跡の縄文時代早期の遺物分布は，本来の位置近くに遺存している遺物と，自然の拡散現象の結果，移動を余儀なくされた遺物とによって構成されている可能性が高い。しかしながら，これについては，土器型式や個体識別による分布傾向を考慮に入れる必要があり，改めて，本節の終わりで触れることにしよう。

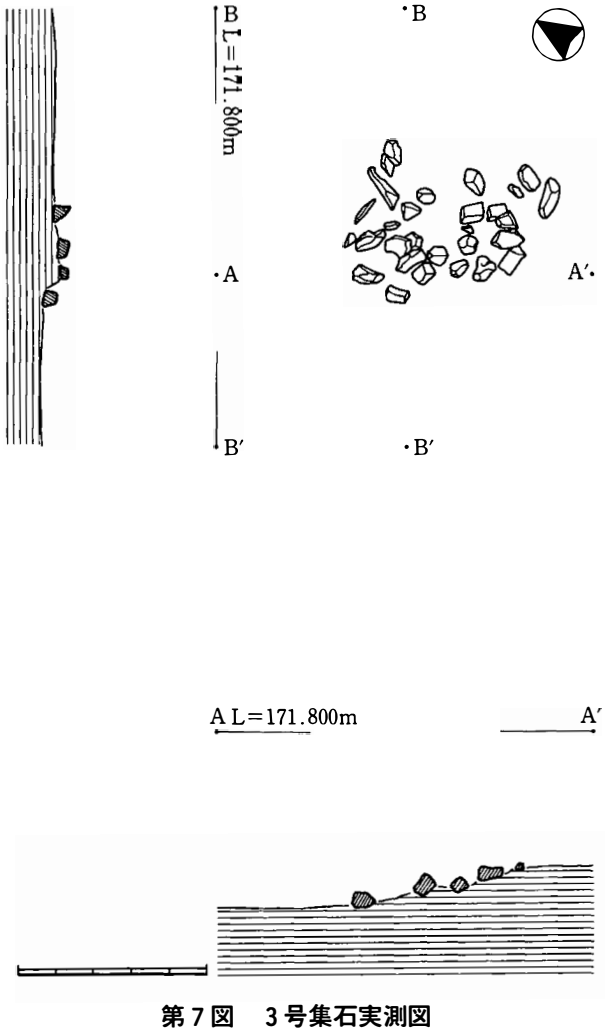
③集石の位置の特徴（第５図）

「②遺物分布」でも述べているように，調査区には，かつて，北側に開く浅い谷部が存在していた。この地形的な特徴と集石の位置を関係付けて，集石の位置的な特徴を見てみることにしよう。

集石は，調査区の等高線の状況から読み取れば，谷部を登り切った比較的平坦な場所に存在していることが分かる。しかもその平坦部は，幅13m から幅２m と幅を狭めながら北東方向へと延びている。その状況は，この平坦部が狭い尾根状地形を呈しているものであることを示している。つまり，集石は，尾根状地形上，しかもその北側の縁に残された遺構ということになる。

次に，集石と遺物分布の関係では，二つの隣接する集石は，遺物分布の密度が濃い部分近くにあり，残りの１基は，遺物があまり検出されていない地点に存在していることが分かる。ただし，遺物分布と集石の位置関係を細かく見てみれば，いずれの集石でもその周囲に遺物分布は，認められない。つまり，集石の周辺には遺物の広がりは見られず，ある一定の空白部をおいて遺物が出土し始めるという傾向を認識することができるのである。これは，興味ある傾向であり，注意しておこう。

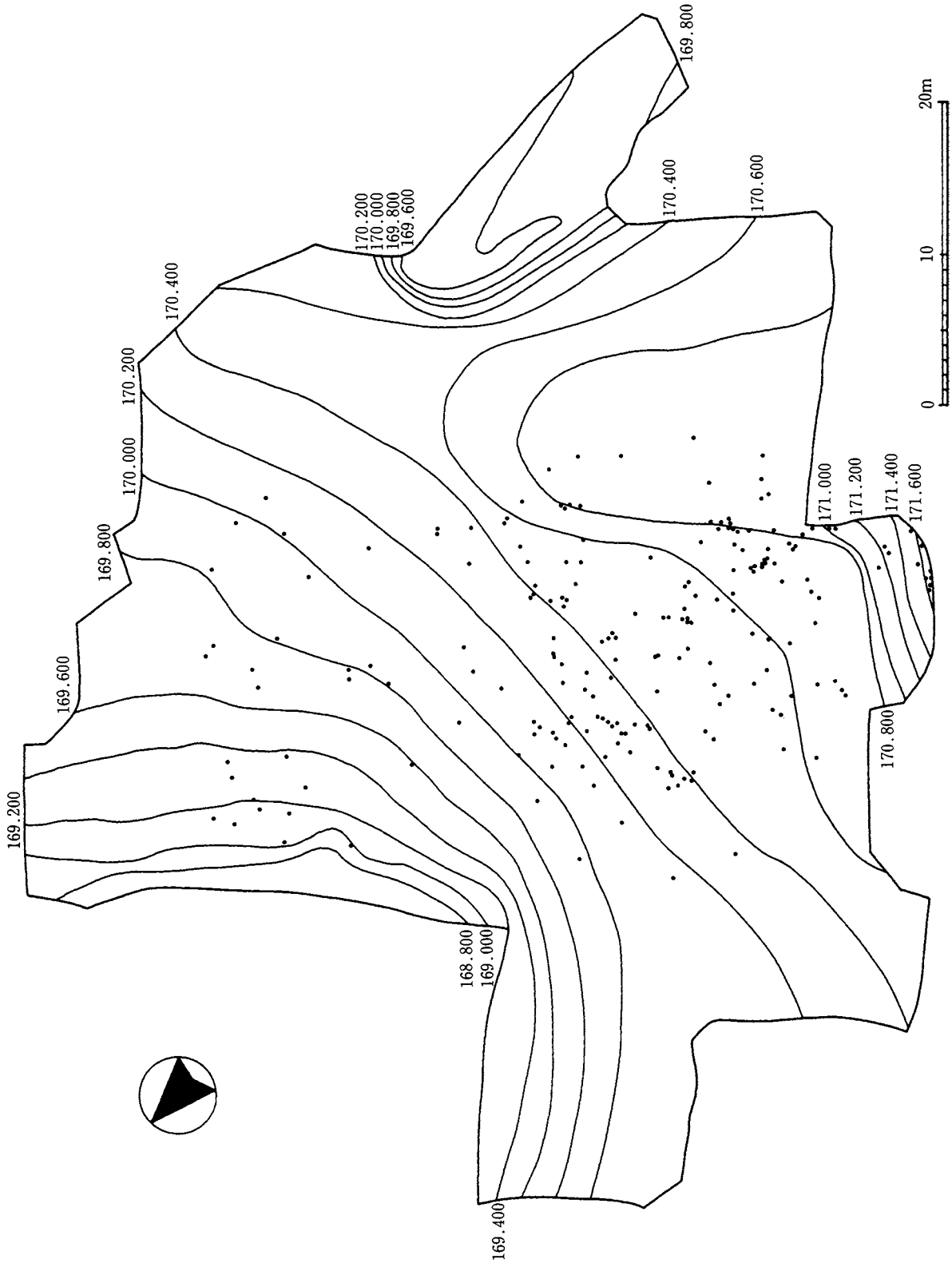
以上のように，私たちは，堂園遺跡の縄文時代早期では，狭い尾根の縁に集石という厨房施設が設けられていたことを知った。また，私たちは，厨房施設の近くには遺物の分布が見られず，一定の空白部を置いて，その北側に遺物が集中するという傾向を知った。この傾向こそ，堂園遺跡で展開した縄文時代早期の人びとの行動の軌跡を表すものであると言えよう。このように，堂園遺跡での調査は，遺構の位置と地形的特徴を併せて考えさせてくれたという意味で，意義深いものであった。少なくとも，当時の集落の構成を，集石の位置と遺物分布，そして地形的な特徴から推し量らせたことは，当時の集落景観を復元する意味で重要なことである。ここで知りえた現象は，縄文時代早期における地形的な特徴に係わる集落景観を知る一つの素材となることは確かであり，今後，類例を集めていく必要がある。



第７図　３号集石実測図

３．土器とその分布

縄文時代早期の土器の出土地点を示したのが，**第８図**である。その出土状態は，アカホヤ火山灰の遺存の状況が芳しくなく，縄文時代各期の土器とが縄文時代早期の土器に接して，検出されるという状況にあった。このように，明確な層位的な出土状態を



第８図　縄文時代早期土器分布図

とらない土器群であるが，第Ⅳ層という茶褐色土層に包含されていたかどうかを基準にすれば，ある程度，時期ごとの分離が可能である。しかも，縄文時代早期に特徴的な土器型式や文様，それ以降の時期の特徴を示す土器型式を基準にすれば，さらに分離の精度は高まる。こうした作業を経て提示したのが，縄文時代早期の土器分布図（**第８図**）である。

堂園遺跡では，中原式土器・石清水式土器・塞ノ神式土器・撚糸文土器・縄文土器・沈線文土器・沈線文と刺突文との併用文土器・「隆起文の土器」・無文土器という縄文時代早期の土器が検出された。そこで，これから，上記した土器ごと，さらには，それを同一個体のみをまとめていくという個体識別作業を経て認定した「個体別資料」ごとに，分布図と拓影と断面等の実測図を提示し，説明と検討を加えていくことにしよう。

①中原式土器

中原式土器は，中九州の縄文時代早期を代表する土器型式である。東光彦・富田紘一両氏（1969）によって注目されるようになってから，しばらくの間，「円筒形条痕文土器」と呼ばれてきた。こうした状況を受けて，木崎康弘は，蒲生・上の原遺跡の調査報告（1996）の際に，関連する土器群を型式学的に検討し，縄文時代早期前半に編年される土器型式として新たに設定した。

型式論的特徴は，次のような点がある。器形は，平底の円筒形を呈する。器壁は厚く，１㎝を超えるものもある。文様は，貝殻腹縁による連続刺突文・押引文・条線文が原則である。この文様施文方法の違いは，細分型式による時期差である。連続刺突文はⅠ式とⅡ式，押引文はⅢ式，条線文はⅣ式とⅤ式である。また，他に撚糸文や絡条体圧痕文が見られる場合もある。文様帯では，口縁部周辺に限られる場合と，全面に施される場合がある。この文様の違いは時期差であり，Ⅰ式では口縁のみであり，Ⅳ式では胴部下半部までと，新しくなるに従って文様帯は拡大する。器面の調整は，胴部以下に無文帯がある場合は，ミガキ調整に近いていねいなナデ調整である。分布は，熊本県という中九州西部地域を主にして，その周辺，北九州，中九州東部，南九州へと広がっている。編年的位置は，前半で，もっとも古い細分型式であるⅠ式が早期初頭で，新しい細分型式のⅤ式が早期中頃である。

堂園遺跡において，明確に「中原式土器」の特徴を留める土器は，検出されていない。そうした中，土器の特徴が，円筒形を呈する，ないし呈すると想定できるものが見られる。その文様の特徴は，貝殻腹縁による連続刺突文と条線文である。また，沈線状の条線文が見られるものもある。ここでは，こうした土器群を集めて中原式土器として紹介する。

調査区における分布は，「②遺物分布」で述べた南側の主分布域を中心にして見られる（**第９図**）。そして，それが谷部へ拡散している土器も一部見られる。このことから，中原式土器は，南側の尾根周辺が主な分布域であることが推定される。個体識別の結果，中原式土器，ないし類似の土器は，四つのグループに分けることができた。その中の三つは，複数個体を認めたものであり，もう一つのグループは，単独出土で，３点ある。したがって，個体数は，６個体ということになる。複数個体の個体別資料を，**１～３**,そして単独出土の個体には番号を付さずに紹介をおこなっていこう。

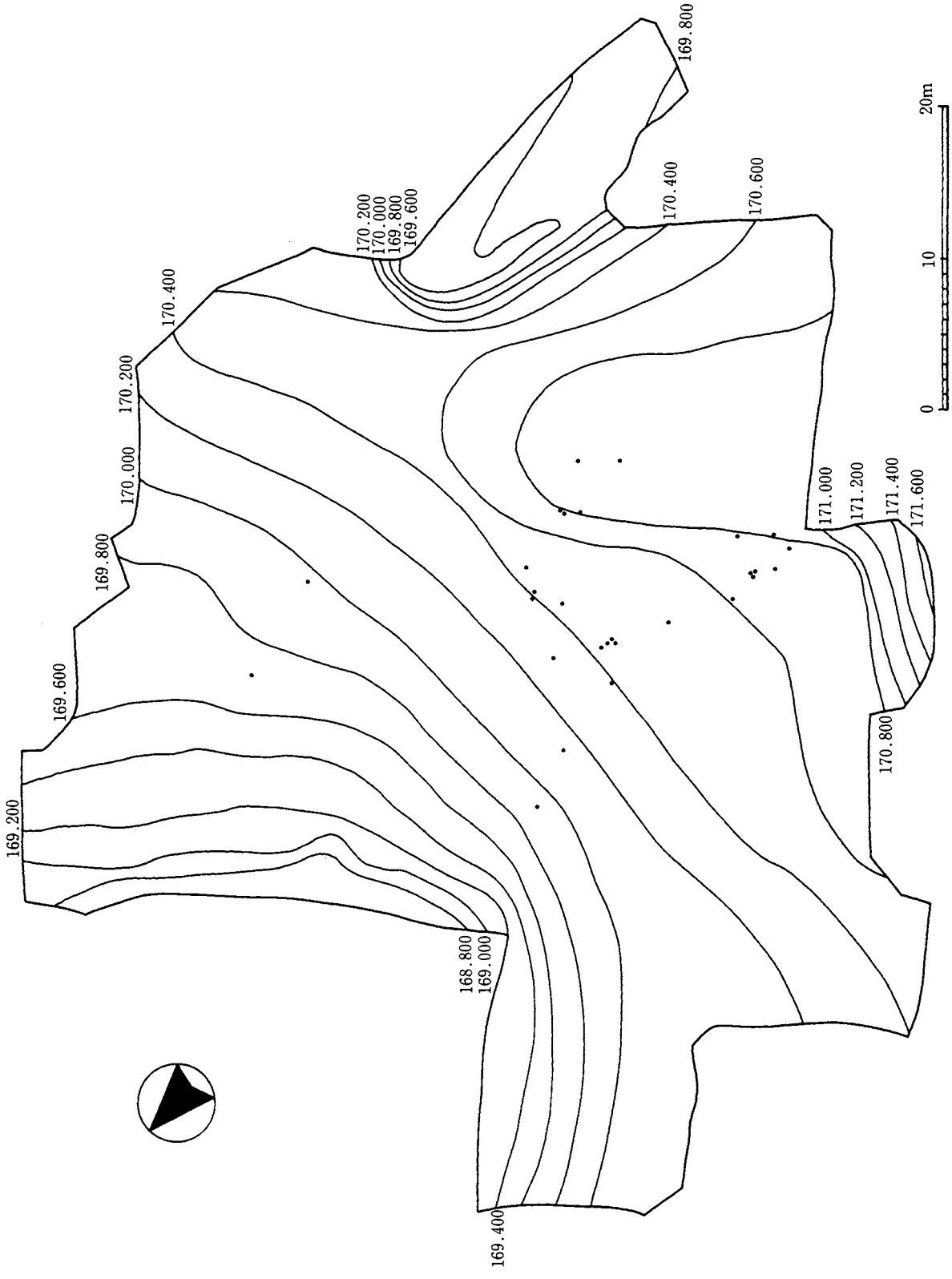
中原式土器１（第11図，第

個体識別の結果，23個の破片を抽出した。その部位は，口縁部と胴部である。反転復元した口縁部径は，36.5㎝である。器壁の厚さは，0.6㎝～0.8㎝である。器面は，ナデ調整である。

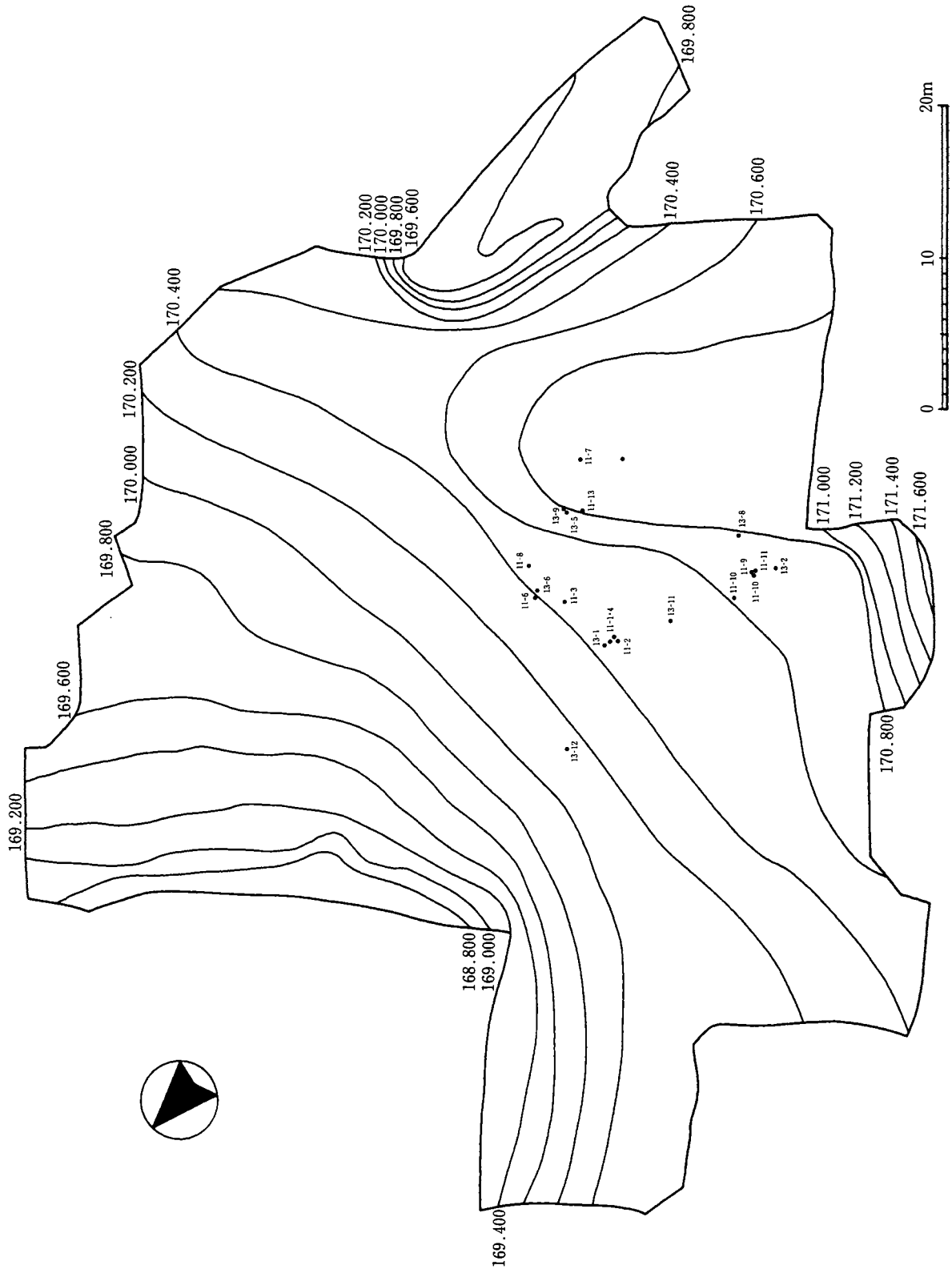
主な分布域は，南側の尾根周辺にある。その広がりは，環状を呈することが特徴で，一部には谷部への拡散が認められる（**第10図**）。ここでは，特徴的な環状分布にはあまり意味がなく，おそらくは拡散の結果であると推定しておこう。

この土器は，その全体形を知れるほどの資料に恵まれていない。そのために，文様帯の状況が不明確である。そうした不明確な状況の中で，その文様の位置を見れば，口縁部周辺と胴部に文様があることがわかる。ただし，胴部については，その位置は不明確である。

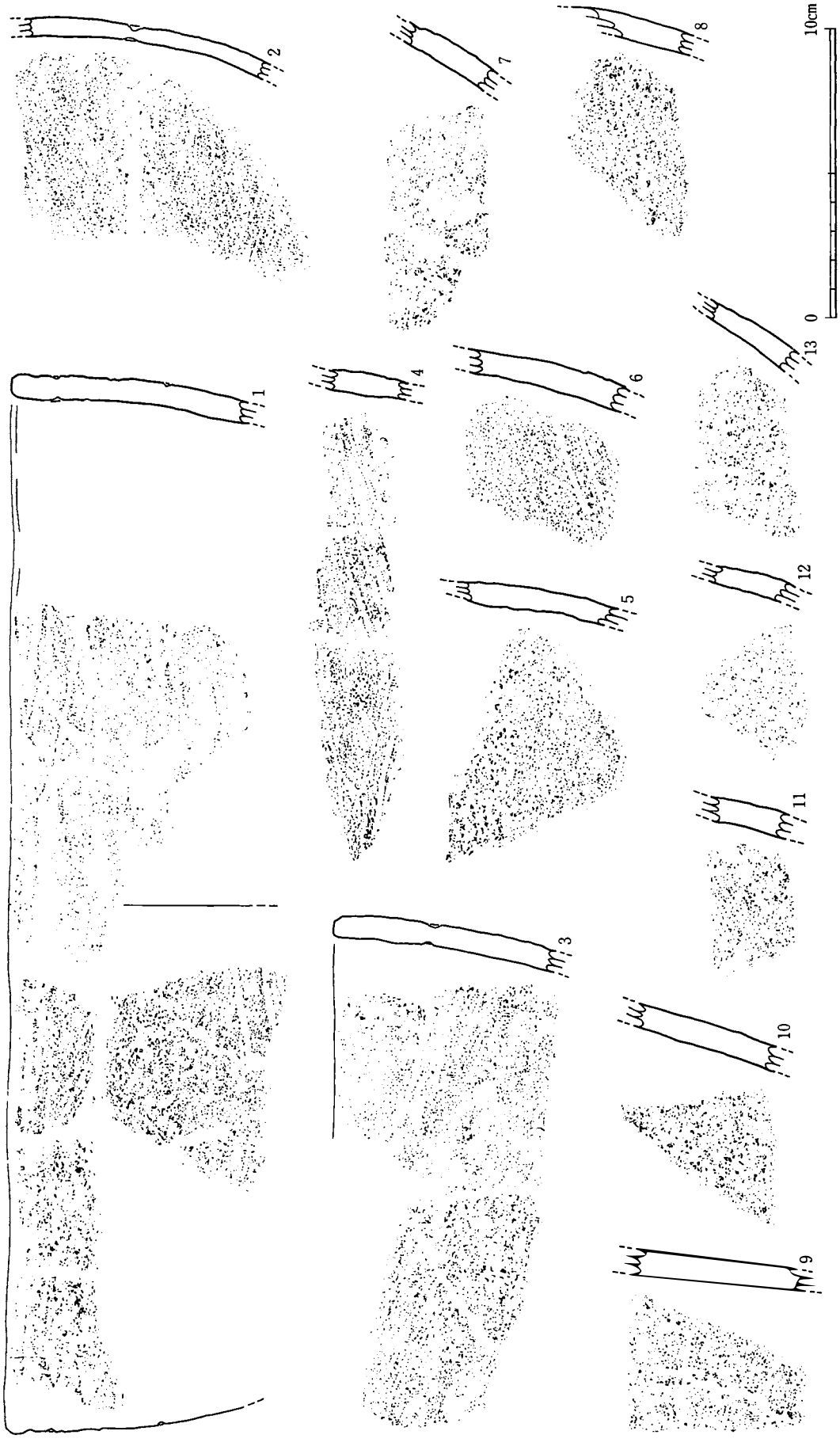
文様の部位ごとにその特徴を見よう。口唇部には，刻み目に近い，押引文が認められる。口縁部や胴部



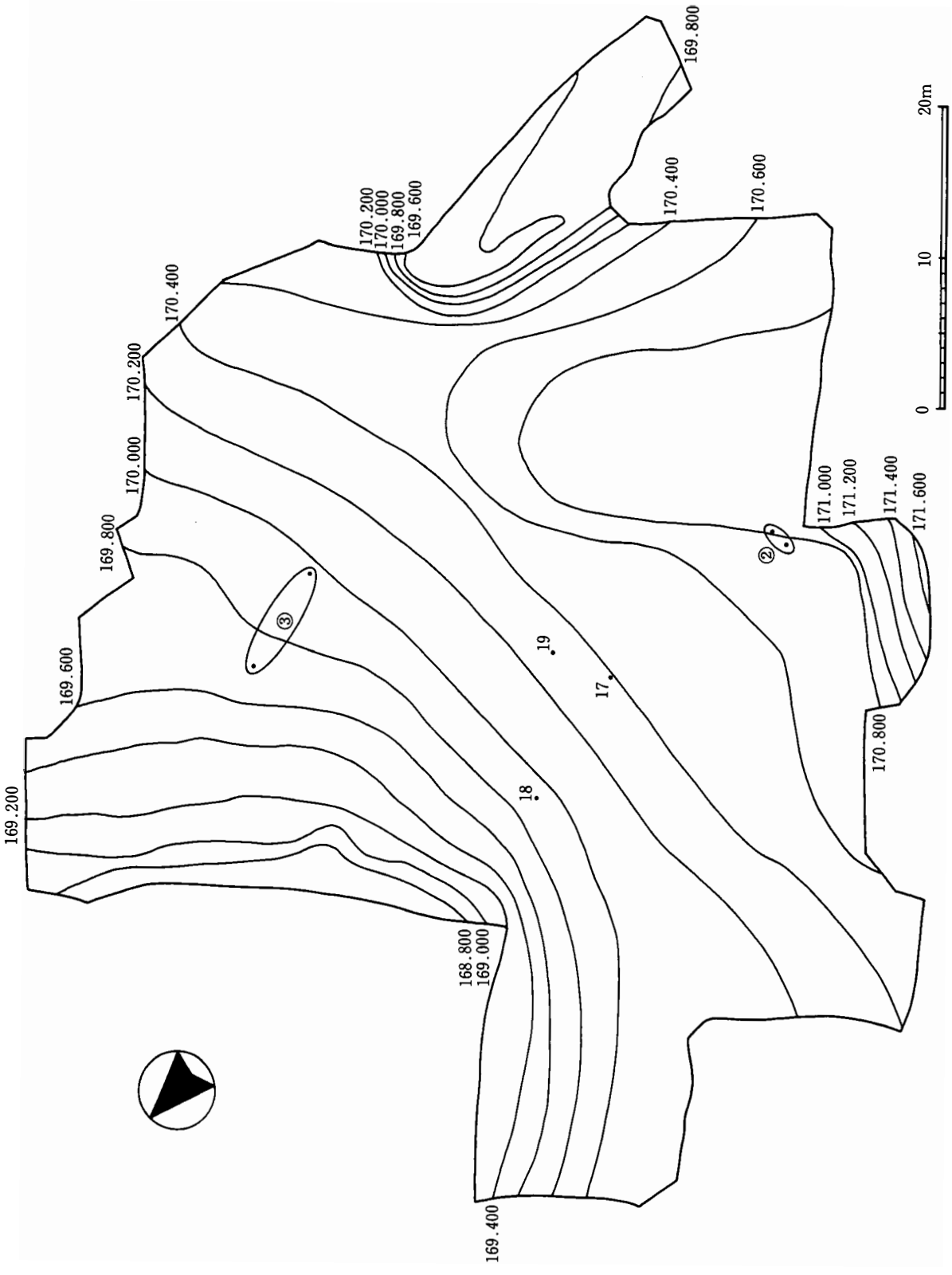
第９図　中原式土器分布図



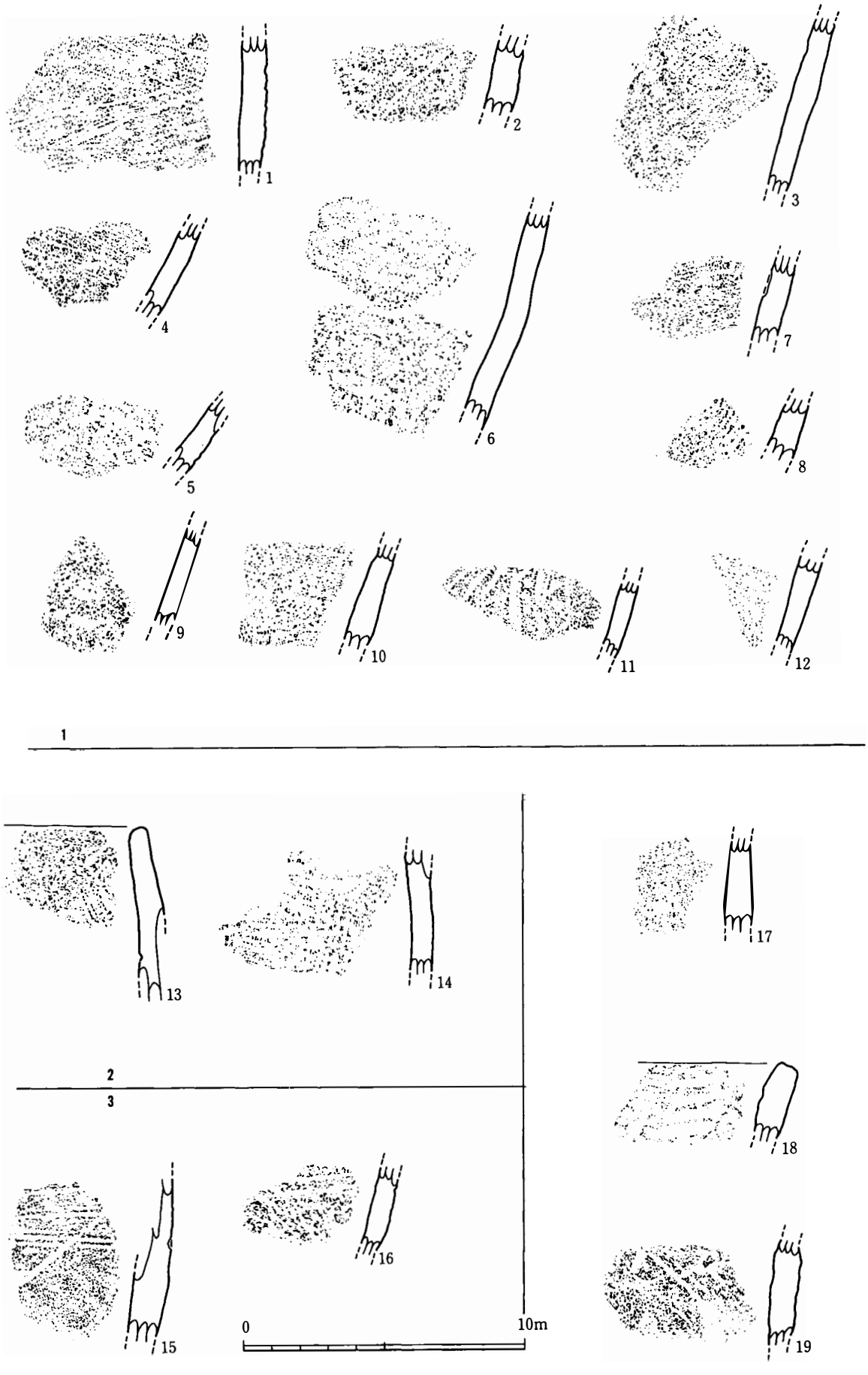
第10図　中原式土器１分布図



第11図　中原式土器１　実測図



第12図　中原式土器２～３・その他分布図



第13図　中原式土器１～３・その他実測図

には，沈線状の条線文が施されている。その単位は明確ではないが，２～４本の単位が確認される。そして，それが一つの単位となって，曲線を描かず，直線的に施文される。また，二つの単位が交差する場合も見られる。こうした形態論的特徴は，蒲生・上の原遺跡で細分したⅠ式からⅤ式までの型式土器には該当しない。そこで，本資料の位置付けは，中原式系統の土器として認識するに止めておこう。ただし，その型式性を考えれば，中原Ⅴ式土器の後に編年される土器という判断は，可能であろう。

中原式土器２（第13図13～14）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その中２点が接合し，１点は出土地点不明である。その部位は，口縁部と胴部である。小破片のため，口縁部径等は，不明である。器壁の厚さは，対象資料において，0.75㎝～0.9㎝である。

主な分布域は，南側の主分布域にあたり，その周辺の尾根の縁にある（**第12図**）。

この土器資料では，その全体形を知れないために，文様帯の状況が不明確である。文様は，貝殻腹縁による条線文で，口縁部付近に斜めの条線，胴部の破片には縦位ないし横位の条線が観察される。こうした特徴から，この土器は，中原Ⅴ式土器の範疇に含められるものと理解される。

中原式土器３（第13図15～16）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，いずれも胴部である。器壁の厚さは，0.８㎝～1.25㎝である。

主な出土地点は，調査区の北西側にある。その状況から，主分布域から拡散した土器群の一つであると想像される（**第12図**）。

この土器は，胴部破片のため，文様帯等の状況が不明確である。文様は，貝殻腹縁による条線文で，横位の破片，横位と斜位が複合している破片とがある。こうした特徴から，この土器は，中原Ⅴ式土器の範疇に含められるものと理解される。

その他，単独の中原式土器片（第13図17～19）

３点共に，南側の主分布域の中には入っているが，谷部に落ち込んでいる状況が見て取れる。これもまた，主分布域の中にあるとは言え，拡散した状況であると考えられる。個体ごとに見ていこう。

17は，口縁部近くの破片である。貝殻腹縁による連続刺突文が施されている。無文部は，ナデ調整によっている。この特徴から，中原Ⅰ式土器の範疇の中で理解できるだろう。

18は，口縁部の破片である。貝殻腹縁による条線文が横位に施されている。その特徴から，中原Ⅳ式土器・中原Ⅴ式土器のいずれかに属するものと判断される。

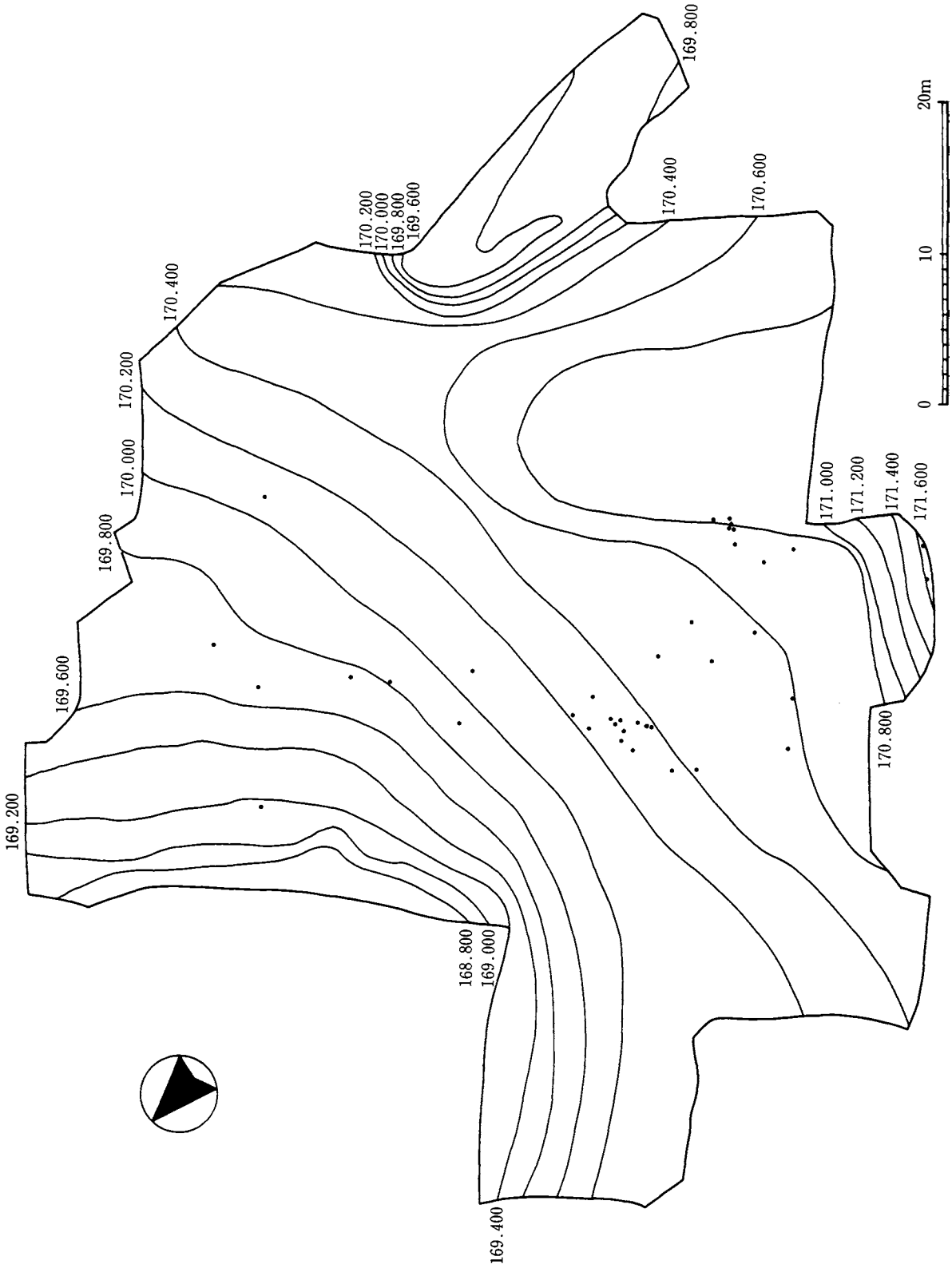
19は，胴部の破片である。貝殻腹縁による条線文が斜位に施されている。その特徴から，中原Ⅴ式土器ないし，それに後続する新しい土器型式に属するものと理解できる。

②石清水式土器

石清水式土器は，押型文土器の一つである。1935年に高田素次氏が発見して，ひろく学界で注目されるようになった。その後，この土器は，小林久雄氏によって1939年に学界に正式に紹介されることになった（小林1939）。その後，木﨑康弘は，無田原遺跡の調査成果を報告するにあたって，この石清水式土器を研究史的に再評価した。そして，旭志村無田原遺跡の資料を基にした石清水式土器の再定義を試みた（1995a）。

その土器型式の形態論的特徴を示そう。器形は，胴部に丸みがあり，口縁部が外へ開くところに特徴が認められる。底部は，平底であり，上げ底を呈するものもある。文様は，押型文である。その種類には，山形文や格子目文などがある。施文方向は，表面が斜位ないし縦位施文と，それに横位が組み合わされて施されている。口縁内面にも，文様の施文が横位に見られる。文様の特徴は，彫りが浅い施文原体が使われているようで，浅く繊細で，また，間延びしてもいる。

この土器型式の分布は，熊本県という中九州西部地域が中心である。そして，その周辺には，近似した形態論的特徴を持つ土器型式として，中九州東部にあっては文様・文様帯・器形的な特徴が類似する「ヤトコロ式土器」があり，南九州にあっては文様・文様帯的には類似しつつ，屈曲胴部を持つ点において異なる「手向山式土器」が見られる。おそらく，



第14図　石清水式土器分布図

形態論的な特徴においては，多少の違いが認められるが，文様の特徴において編年的には併行する土器と判断されるだろう（木崎1995)。編年的位置は，押型文土器の中ではもっとも新しい段階であり，早期中頃と考えられる（木崎1995)。

堂園遺跡では，屈曲胴部を持たない特徴において，出土した関係の資料は，石清水式土器と判断される。調査区における分布は，中原式土器と同様に，「②遺物分布」で述べた南側の主分布域を中心にして見られる（**第14図**)。そして，それが谷部へ拡散している土器もある。石清水式土器もまた，南側の尾根周辺が主な分布域であると推定される。

個体識別の結果，石清水式土器は，六つのグループに分けることができた。その中の五つは，複数個体が見られる土器群である。また，もう一つのグループは，単独出土の資料である。単独の資料数は，18点ある。したがって，個体数は，23個体ということになる。そこで，複数個体の個体別資料を，**1～5**,そして単独出土の個体には番号を付さずに紹介をしよう。

石清水式土器１（第16図）

個体識別の結果，18個の破片を抽出した。その部位は，胴部と底部である。器壁の厚さは，0.4㎝～0.7㎝である。

分布域は，南側にみられる主分布域で，尾根から離れた谷部の上位にあたる（**第15図**)。この周辺は，谷頭付近のやや平坦な地形にある。出土地点は，それぞれに近接した状況にあり，あまり原位置から遊離・拡散した状況にはないようである。

この土器は，その資料点数においてある程度まとまっている。しかし，それは，口縁部が無く，接合した破片も少ないなど，その全体形を知れるほどの資料ではない。こうした資料的な制約の範囲の中で，器形的な特徴を見てみれば，胴部の屈曲部は見られないようである。それは，胴部中位と思われる破片（**14**など）の状況からそう判断される。底部は，上げ底をなす平底である。径は大きく，10.5㎝を測る。こうした大きめの底部は，標式資料である人吉市石清水遺跡出土の石清水式土器の特徴に類似している。なお，文様帯の状況は，不明確である。

文様は，間延びした山形押型文である。その施文方向には，縦位と横位がある。おそらく，土器部位ごとにその方向を違えているものと考えられる。

石清水式土器２（第19図１～３）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。器壁の厚さは，0.7㎝～0.8㎝である。

分布域は，調査区北側にあり，谷部に落ち込んだ状況を呈している（**第17図**)。主分布域から拡散した土器群の一つであろう。

この土器は，その資料点数が少なく，その全体形を知れるほどの資料ではない。したがって，この土器が，石清水式土器であるのか，手向山式土器であるのかは明確ではない。ただし，堂園遺跡出土の押型文系土器群全体の傾向では，胴部破片の中に屈曲部の特徴を示すものが見られない。つまり，このことは，この土器が石清水式土器にあたると理解できることを示している。

資料土器の文様は，横位の間延びした山形の押型文である。

石清水式土器３（第19図４～６）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部であるが，口縁部近くのもの（**4**，**5**）と胴部中位（**6**）のものがある。器壁の厚さは，0.6㎝～0.85㎝である。

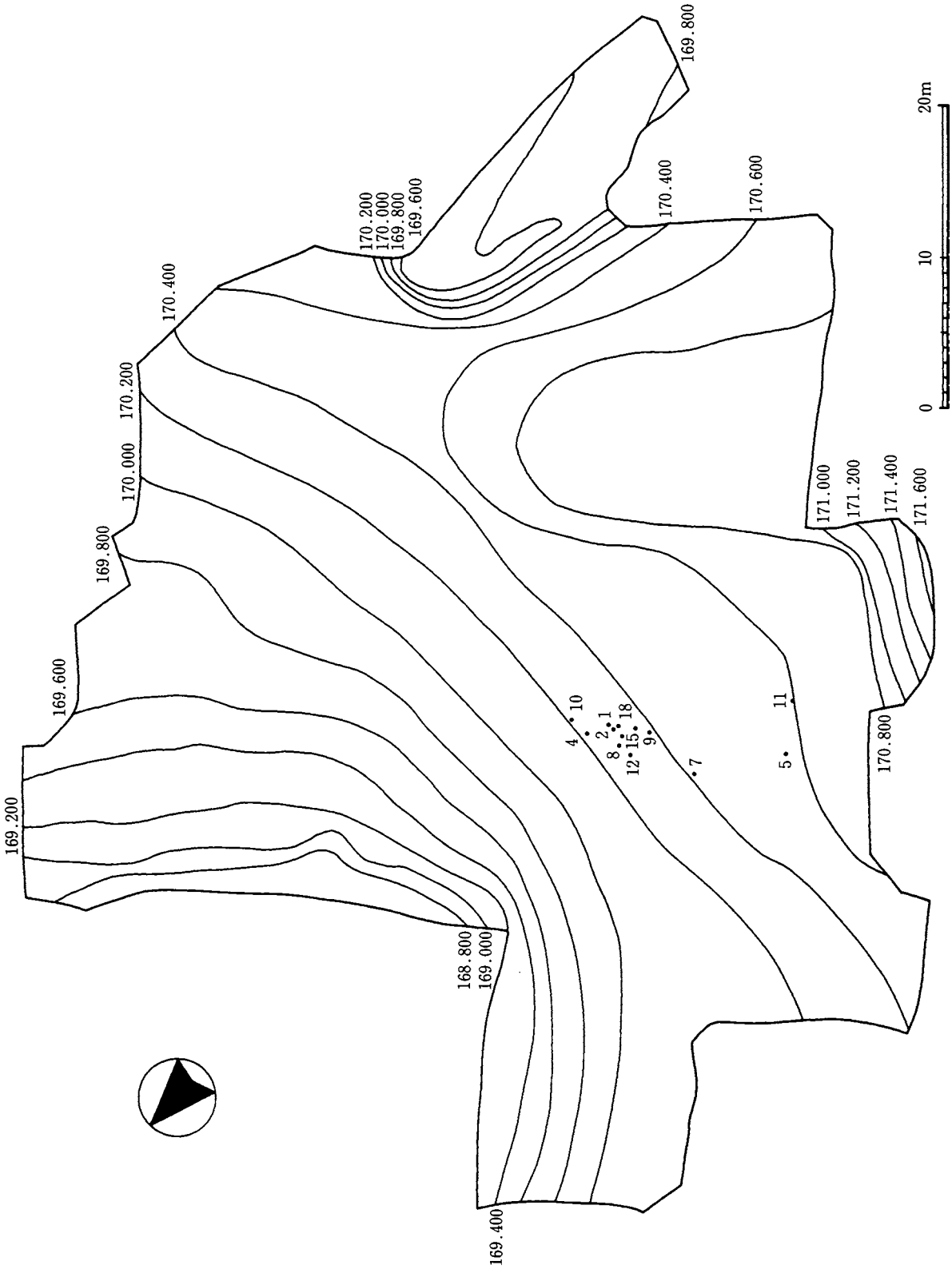
分布域は，南側の主分布域にある。その出土地点は，近接していて，すべて尾根部の縁ないしその周辺部に位置している（**第17図**)。

この土器も，その全体形を知れるほどの資料ではない。ただし，屈曲をしない胴部中位の資料（**6**）があり，それによって，この土器が，石清水式土器であることを教えてくれている。この土器は，丸みをもった胴部中位からやや窄まり，その後，口縁部に近づきながら開くという器形を呈していたものと思われる。

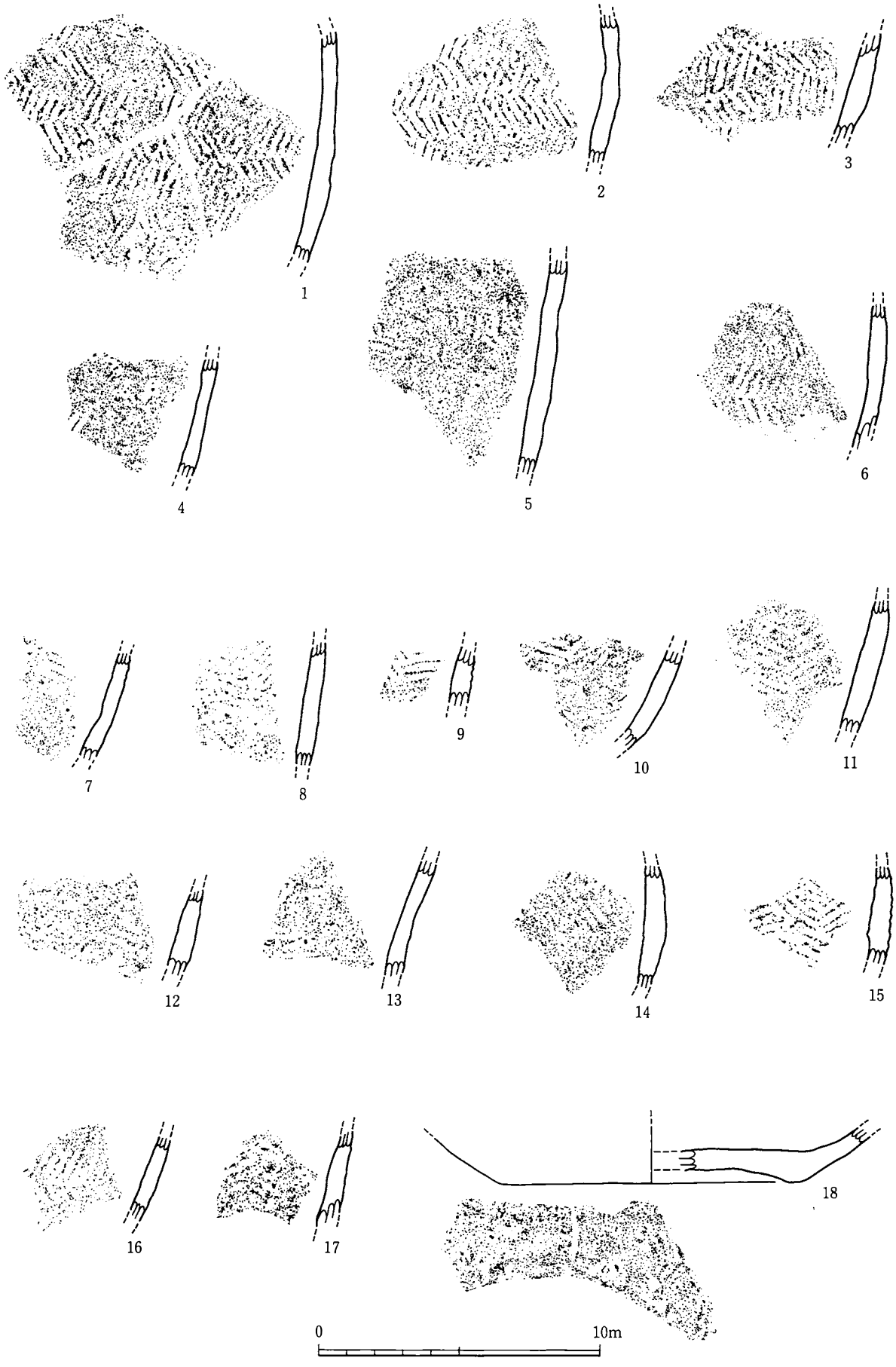
資料土器の文様は，縦位の間延びした山形の押型文である。

石清水式土器４（第19図７・８）

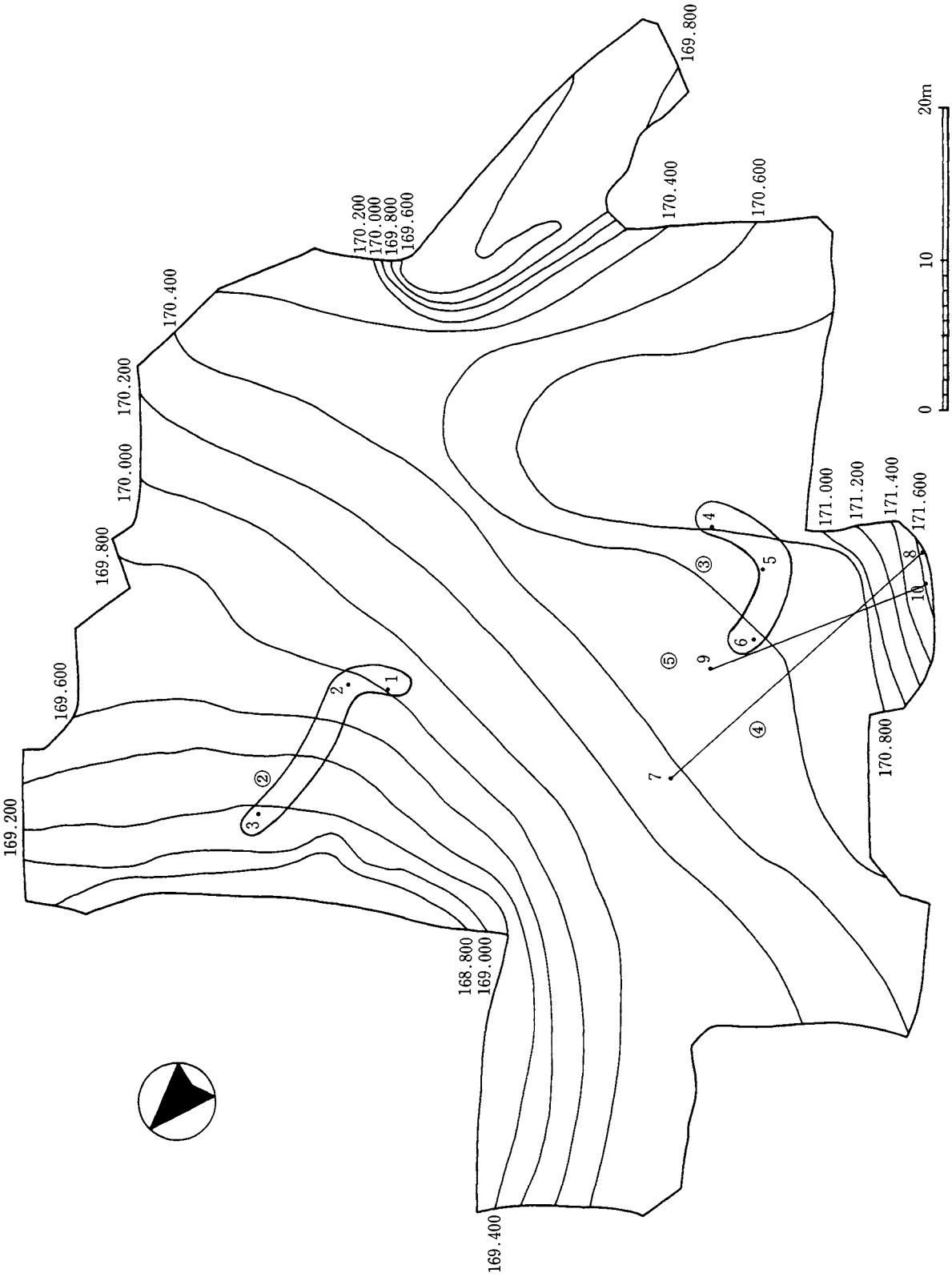
個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部であるが，器壁は厚く，0.8㎝～



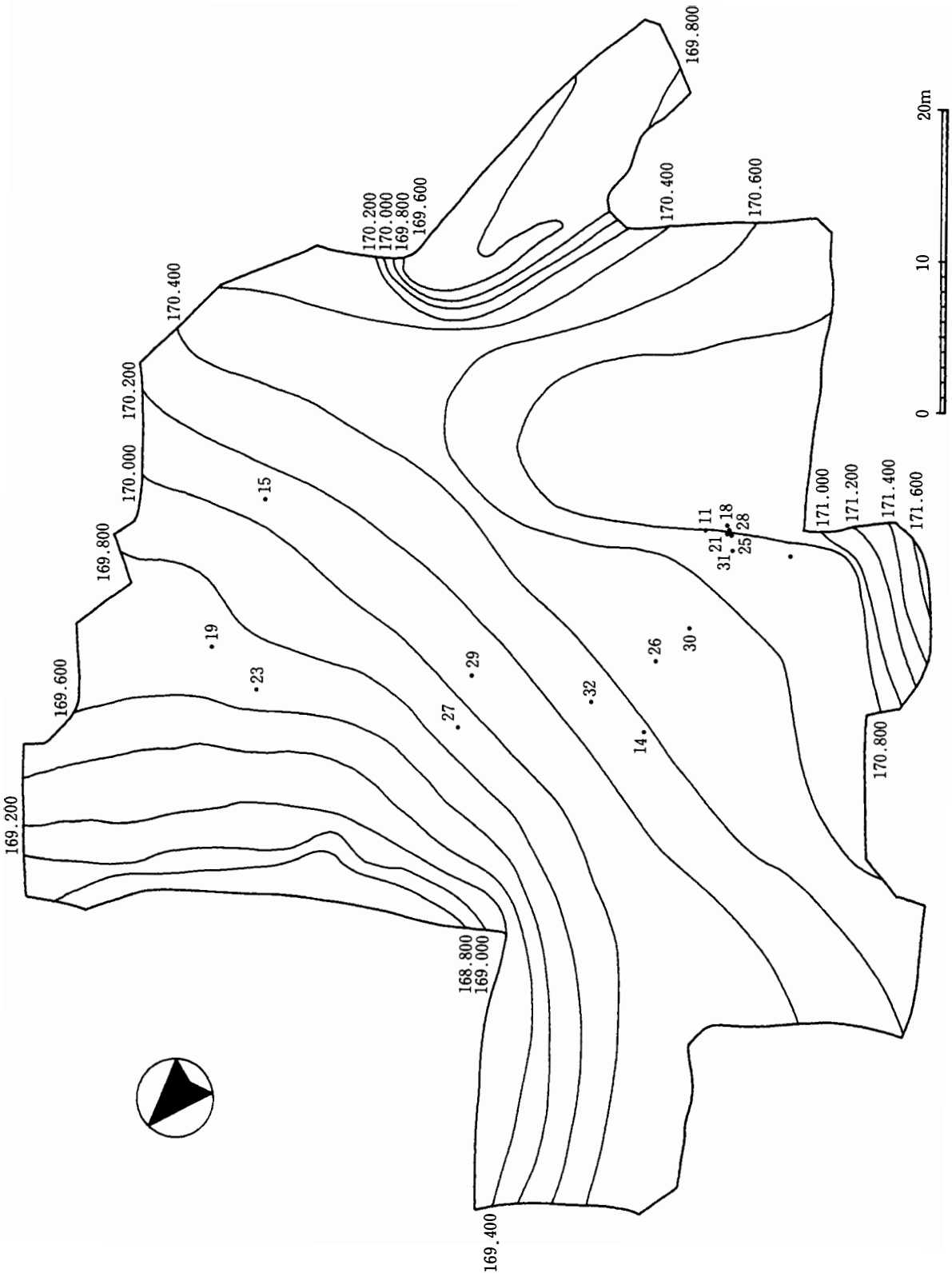
第15図　石清水式土器１分布図



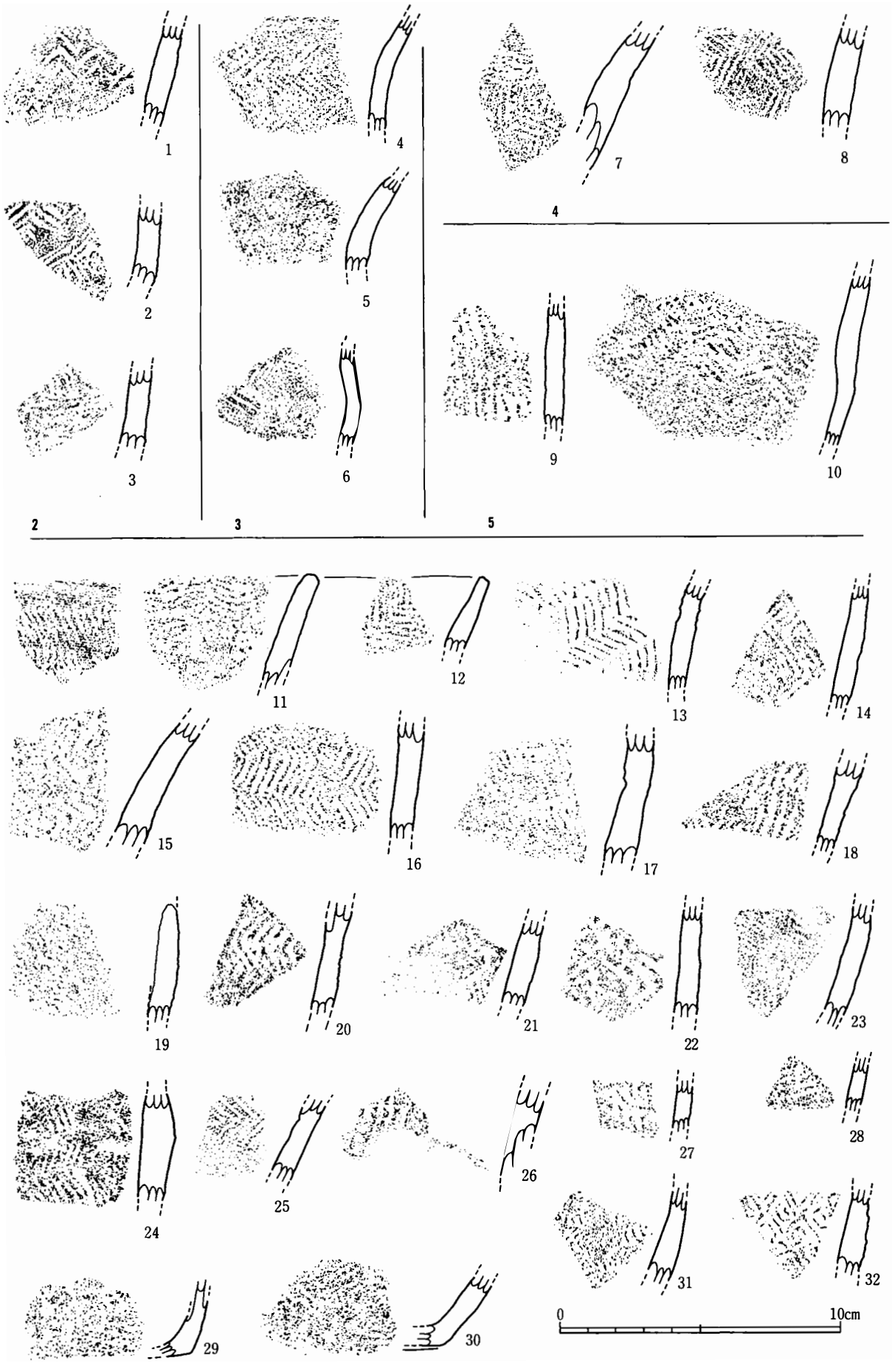
第16図　石清水式土器１実測図



第17図　石清水式土器２～５分布図



第18図　石清水式土器その他分布図



第19図　石清水式土器２～５・その他実測図

1.15㎝である。

分布域は，南側の主分布域にある。ただし，その位置は，尾根部から離れている。しかも，この二つの破片は，22mという離れた地点から出土している。こうしたことから，この出土状態には，遊離・拡散した状況が認められる（**第17図**）。

この土器も，その全体形を知れるほどの資料ではない。したがって，これが石清水式土器である確証はないが，**石清水式土器２**で示した理由によって，そう判断した。

資料土器の文様は，斜位ないし縦位の間延びした山形の押型文である。

石清水式土器５（第19図９～10）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。その中の１点が，胴部中位付近の資料（**10**）である。器壁は，0.55㎝～0.8㎝である。

分布域は，南側の主分布域にある。ただし，その位置は，尾根部ではない。しかも，この二つの破片は，**石清水式土器４**と同じように，離れた地点から出土している。つまり，この出土状態には，遊離・拡散した状況が認められる（**第17図**）。

この土器では，その全体形がわからない。ただし，胴部中位の資料に屈曲した状況が認められない。このことから，この土器は，石清水式土器と判断されるだろう。

資料土器の文様は，縦位と横位の間延びした山形の押型文である。部位を違えて施文方向が異なっていると考えられる。

その他，単独出土の石清水式土器片（第19図11～32）

23点の破片は，個体識別において複数の破片が抽出できなかった資料で，単独出土の土器片である。いずれも谷部に落ち込んでいる状況が見て取れる。主分布域の中にあるものが多いとは言え，拡散した状況が認められる（**第18図**）。個体ごとに見ていこう。

11は，口縁部の破片である。縦位の山形文が表面に，横位の山形の押型文が内面に見られる。文様の特徴は，細く，浅い。**12**は，口縁部の破片である。斜位の山形の押型文が表面に観察される。

13～28，**31～32**は，胴部破片である。屈曲胴部を示す資料は，無い。**13～28**は，山形の押型文である。**31**は，同心円の押型文である。**32**は，複合した菱形の押型文である。その施文方向には，縦位のもの（**14～16**，**18**，**20～22**，**24**，**25**，**31**，**32**），斜位のもの（**13**，**17**，**19**）がある。

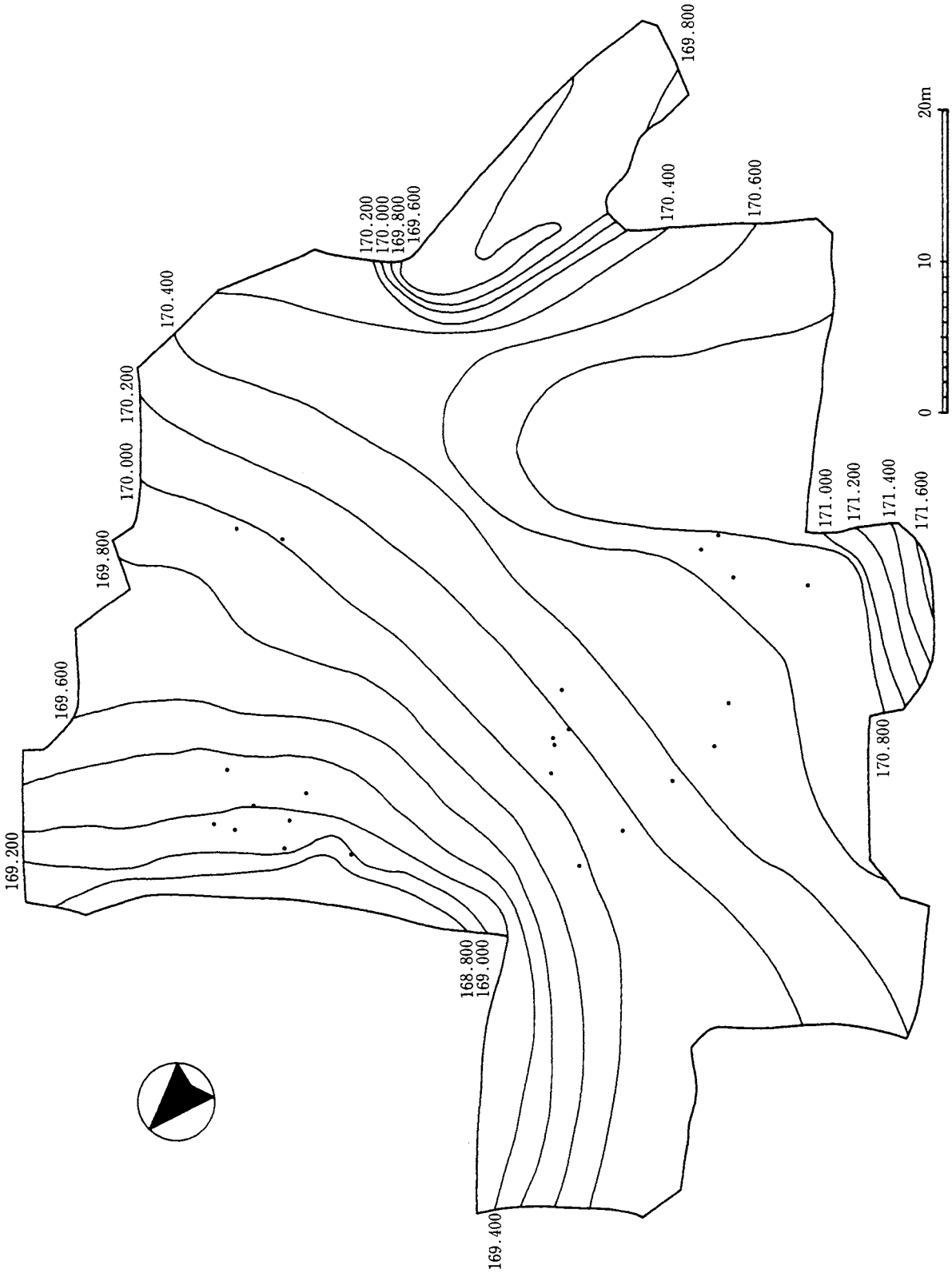
29と**30**は，底部である。山形の押型文が観察される。

③塞ノ神式土器

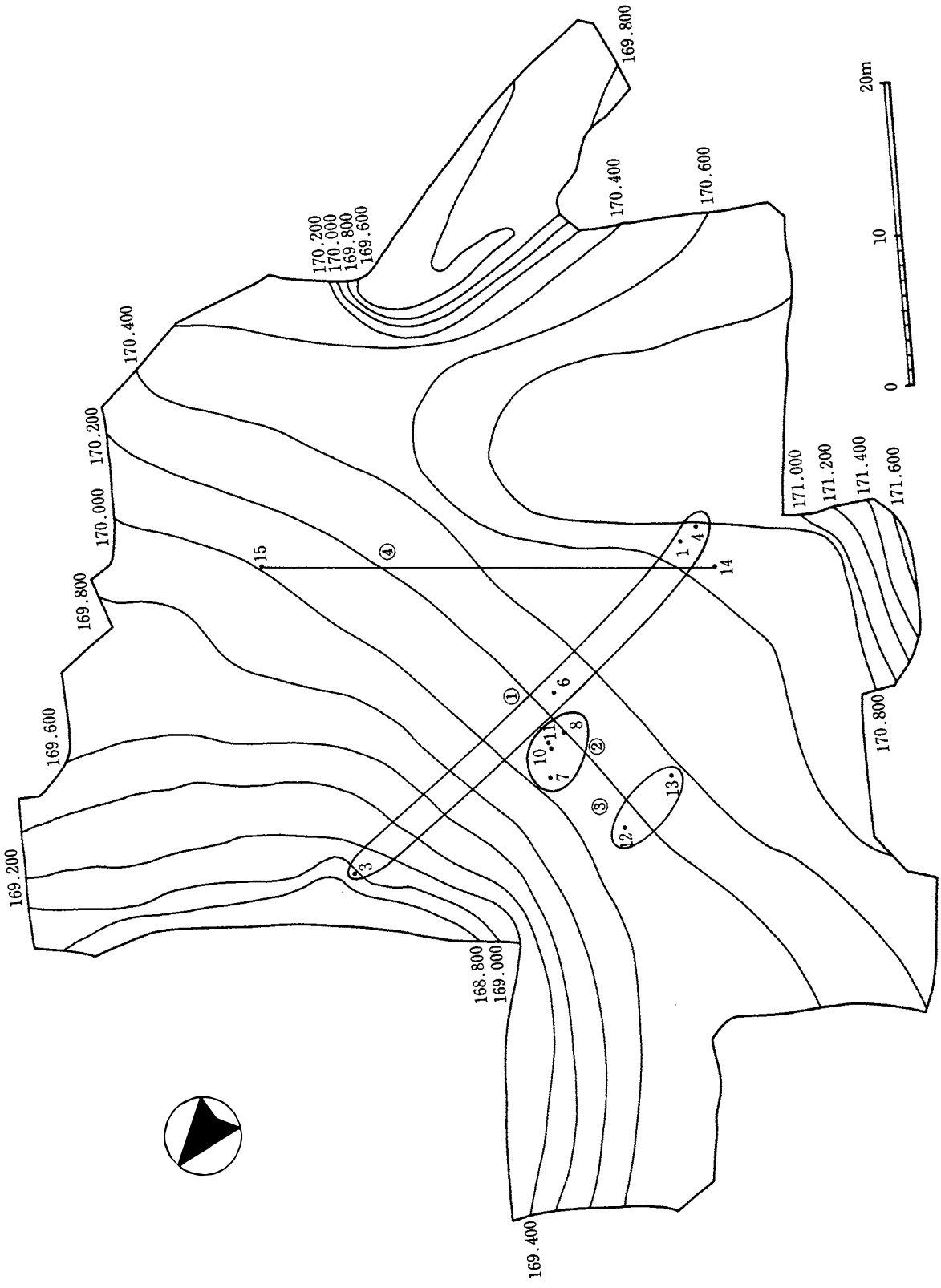
塞ノ神式土器は，1933年に，木村幹夫氏によって設定された土器型式である（1933）。その後，寺師見国氏（1936）は，文様の特徴や分布域を明らかにした。また，小林久雄氏（1939）は，「貝文」「爪形文」「平行線文」の一群と「網目文」と「縄蓆文」の一群とがあることを示し，前者を柏田式土器と呼び，後者の伴出土器とした。こうした小林氏の見解に近いものが，石川恒太郎氏（1968）の見解である。石川氏は，貝殻文の土器を柏田式土器，撚糸文土器を塞ノ神式土器とした。こうした研究の状況を受けて，今日の一般的な「塞ノ神式土器」観を提示したのが河口貞徳氏（1972）である。河口氏は，塞ノ神式土器を撚糸文のＡ式と貝殻文のＢ式土器に分け，Ａ式からＢ式という変遷を考えた。また，それぞれは，二つの細分型式に分けられている。これに対して，新東晃一氏は，こうした塞ノ神式土器を複数の新たな土器型式として分離・再編するという見解を示すようになった（1988）。この他，多々良友博氏（1985），木崎康弘（1985），松永幸男氏（1987）の見解も出されている。

以上のように，今日の塞ノ神式土器に関する研究状況は，未だ統一的な見解でまとまっているわけではない。そこで，ここでは，今日にあっても依然として一般的に使われている河口貞徳氏の見解に従って，塞ノ神式土器という型式名を使用したいと思う。なお，新東晃一氏の型式名についても，文章中において，示すことにしよう。

堂園遺跡における調査区での分布は，「②遺物分布」で述べた南側の主分布域を中心にして見られる（**第20図**）。そして，一部，谷部へ拡散している土器も認められる。塞ノ神式土器もまた，南側の尾根周辺が主な分布域であると推定される。



第20図　塞ノ神式土器分布図



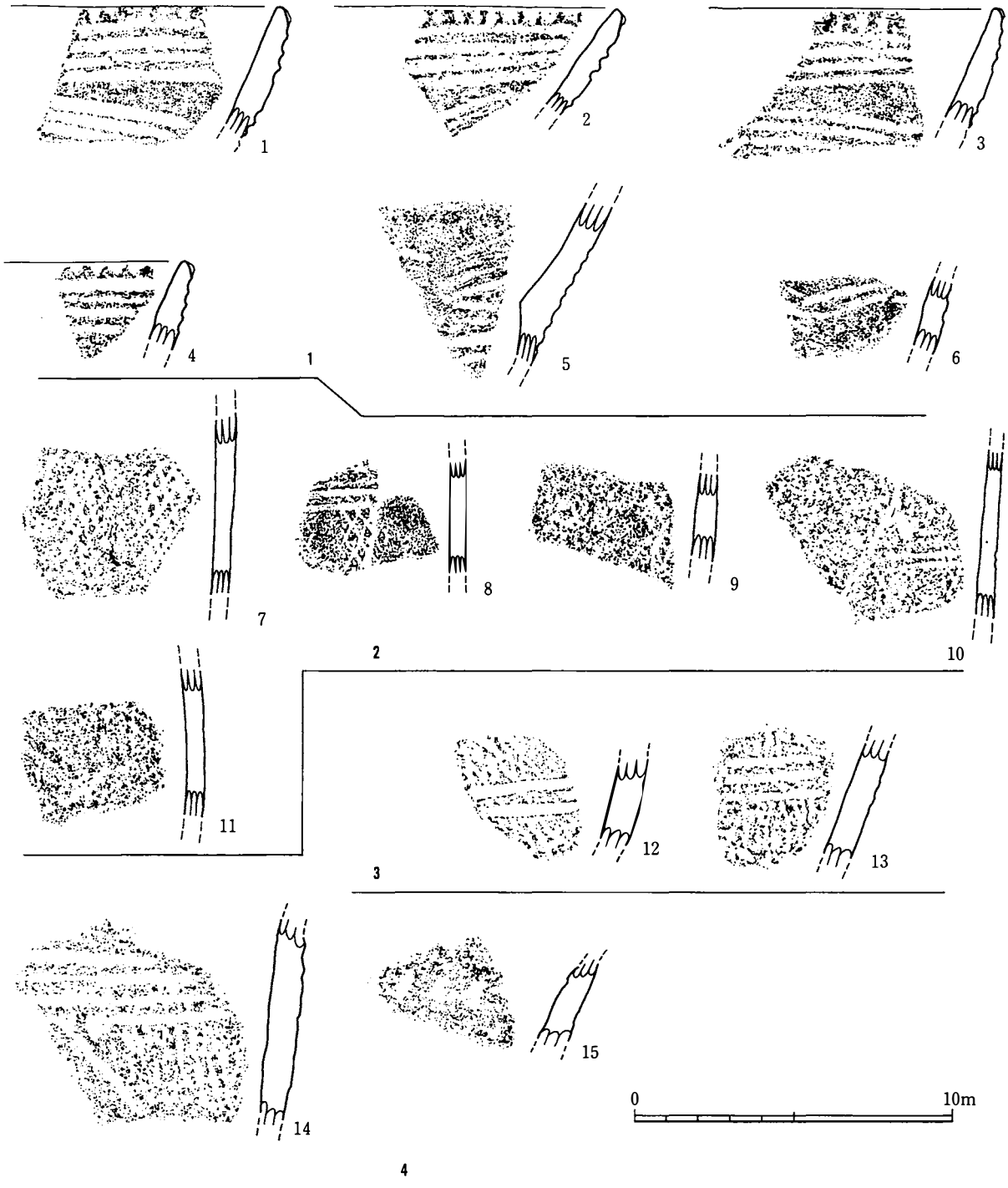
第21図　塞ノ神式土器１～４分布図

個体識別の結果，塞ノ神式土器は，五つのグループに分けることができた。その中の四つは，複数個体が見られる土器群である。また，もう一つのグループは，単独出土の資料である。単独の資料数は，14点ある。したがって，全体の個体数は，18個体ということになる。そこで，複数個体の個体別資料を，1～4,そして単独出土の個体には番号を付さずに紹介をしよう。

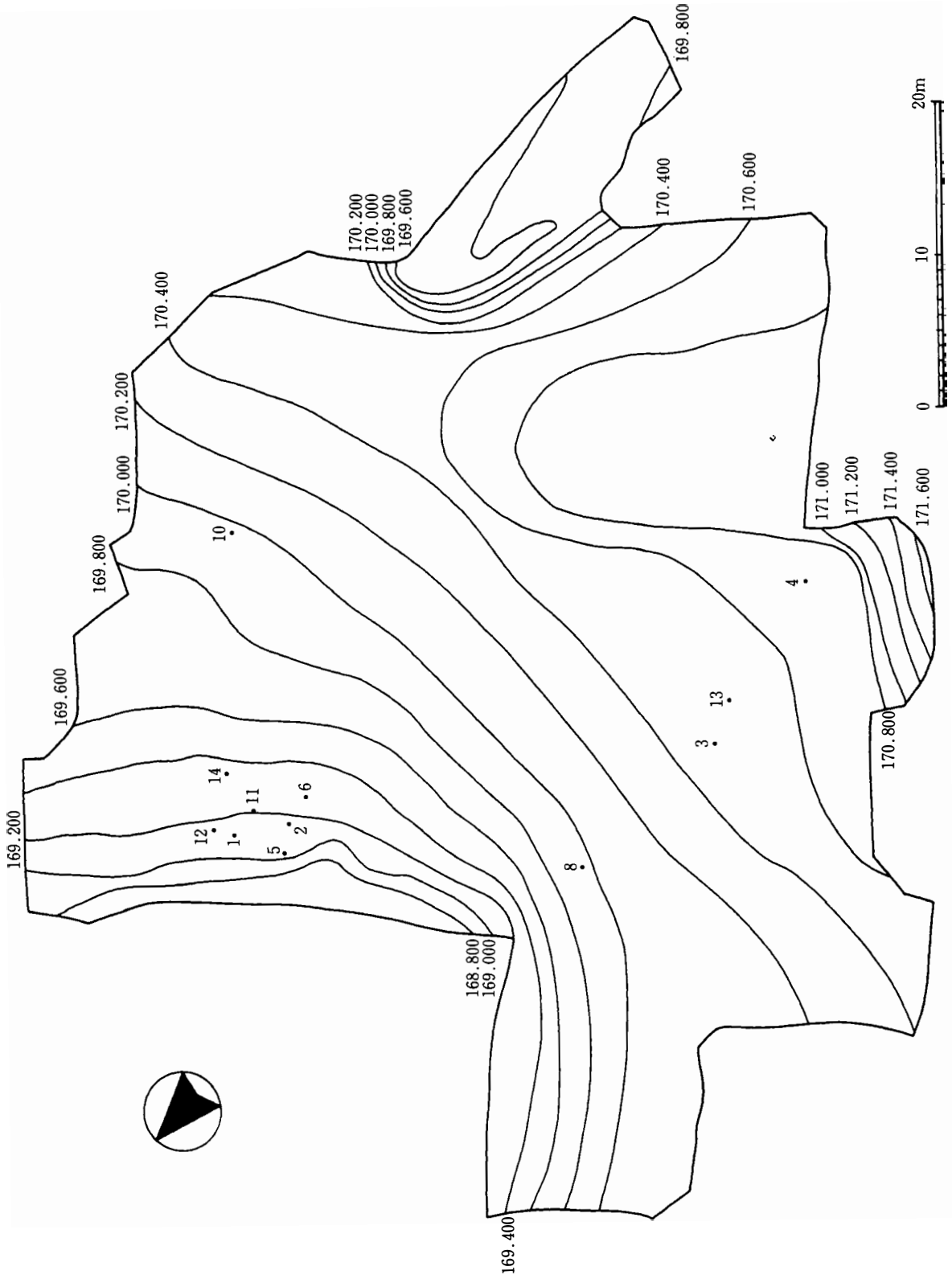
塞ノ神式土器1（第22図1～6）

個体識別の結果，18個の破片を抽出した。その部位は，口縁部とその周辺である。器壁の厚さは，0.5cm～0.9cmである。

分布域は，南側の主分布域，しかも尾根の縁と，尾根から離れた谷部にある（**第21図**）。この状況から，この個体の土器は，尾根近くに原位置があり，一部が原位置を離れて谷部に浮動・拡散したものと



第22図　塞ノ神式土器1～4実測図



第23図　塞ノ神式土器その他分布図

判断される。その浮動・拡散によっての移動距離は，確認できる範囲では33m を測る。

資料が口縁部とその周辺に限られているために，その器形の全体は，分からない。そこで，口縁部形状についてのみ見てみる。口縁部は，僅かに内湾ぎみに外傾する。頸部の屈曲は，内面では強く，外面ではあまり強くない。

口縁部の文様帯は，二つ認められる。一つは，口唇部の文様帯と，その下の文様帯である。口唇部の文様帯には，棒状工具による刻み目が施されている。口縁部には，３本～４本を単位とする棒状工具による沈線文が施されている。その方向は，上段が口唇部に沿っての横方向，下段が３本を単位として浅い稲妻状を呈する斜め方向である。また，頸部周辺にも沈線文がある。この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Ab 式土器，新東晃一氏による「木佐貫原式土器」に該当しよう。

塞ノ神式土器２（第22図７～11）

個体識別の結果，５個の破片を抽出した。その部位は，いずれも胴部である。器壁の厚さは，0.5㎝～0.6㎝である。

分布域は，南側の主分布域の北端，谷部に拡散しながらもまとまった状況にある（**第21図**）。この状況から，この個体の土器は，尾根にあった原位置から谷部に浮動・拡散しているが，それほどの移動は伴っていないことが分かる。

文様は，沈線文と網目の撚糸文が併用されている。器形全体がわからないために，文様の状況は具体的に分からないが，２本の沈線文が上位と中位，そして下位に横に引かれ，網目の撚糸文が上位沈線文から下位沈線文まで懸垂している。この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Aa 式土器，新東晃一氏による「栫ノ原式土器」に該当しよう。

塞ノ神式土器３（第22図12・13）

個体識別をおこなった結果，２個の破片を抽出した。その部位は，胴部である。器壁の厚さは，0.9㎝である。

分布域は，南側の主分布域の外れの谷部にある（**第21図**）。この状況から，この個体の土器は，原位置を離れて，尾根部から谷部に浮動・拡散したものと判断される。

文様は，２本～３本の沈線文と懸垂する網目の撚糸文である。この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Aa 式土器，新東晃一氏による「栫ノ原式土器」に該当しよう。

塞ノ神式土器４（第22図14・15）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，口縁部と胴部である。器壁の厚さは，0.8㎝～1.0㎝である。

出土地点は，南側の主分布域，尾根の縁と，谷部北側にある（**第21図**）。この個体の土器は，尾根近くに原位置があり，他の破片が原位置を離れて谷部に浮動・拡散していると判断される。

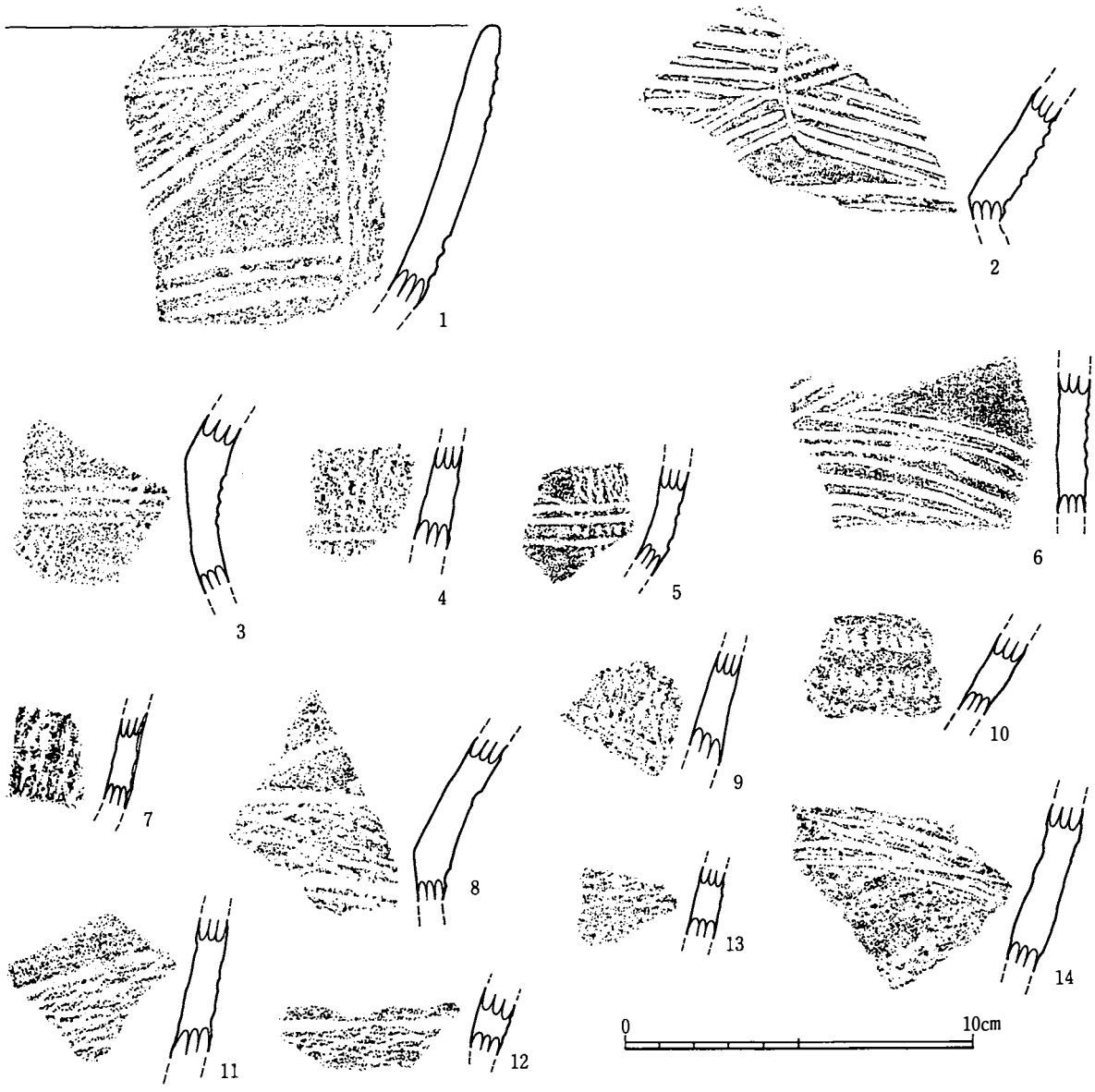
資料は，口縁部と胴部であるが，資料数が少なく，器形の全体を知ることはできない。文様帯は，口縁部で貝殻腹縁による押引文，胴部で沈線文と沈線文区画内の撚糸文である。この特徴から，この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Ab 式土器，新東晃一氏による「塞ノ神式土器」に該当しよう。

その他，単独出土の塞ノ神式土器片（第24図）

14点の破片は，個体識別において複数の破片が抽出できなかった資料である。いずれも谷部に落ち込んでいる状況が見て取れる（**第23図**）。

１は，口縁部の破片である。文様は，１本～３本の沈線文と沈線区画内の撚糸文である。口縁部は，やや内湾ぎみで外傾する。文様の特徴から，この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Ab 式土器，新東晃一氏による「鍋谷式土器」に該当しよう。**２**は，頸部から口縁部下半にかけての資料である。文様は，沈線文である。この土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Aa 式土器，新東晃一氏による「石坂上式土器」に該当しよう。

３～9,11～14は，胴部である。**３～５**は，横位の沈線文と縦位懸垂の網目の撚糸文による土器である。この特徴から，これらは，河口貞徳氏による塞ノ神 Aa 式土器，新東晃一氏による「栫ノ原式土器」に該当しよう。**６**は，沈線文の土器である。**７～9,11～13**は，沈線区画の撚糸文の土器である。この特徴から，これらの土器は，河口貞徳氏による塞ノ神 Ab 式土器，新東晃一氏による「鍋谷式土器」か「塞ノ



第24図　塞ノ神式土器その他実測図

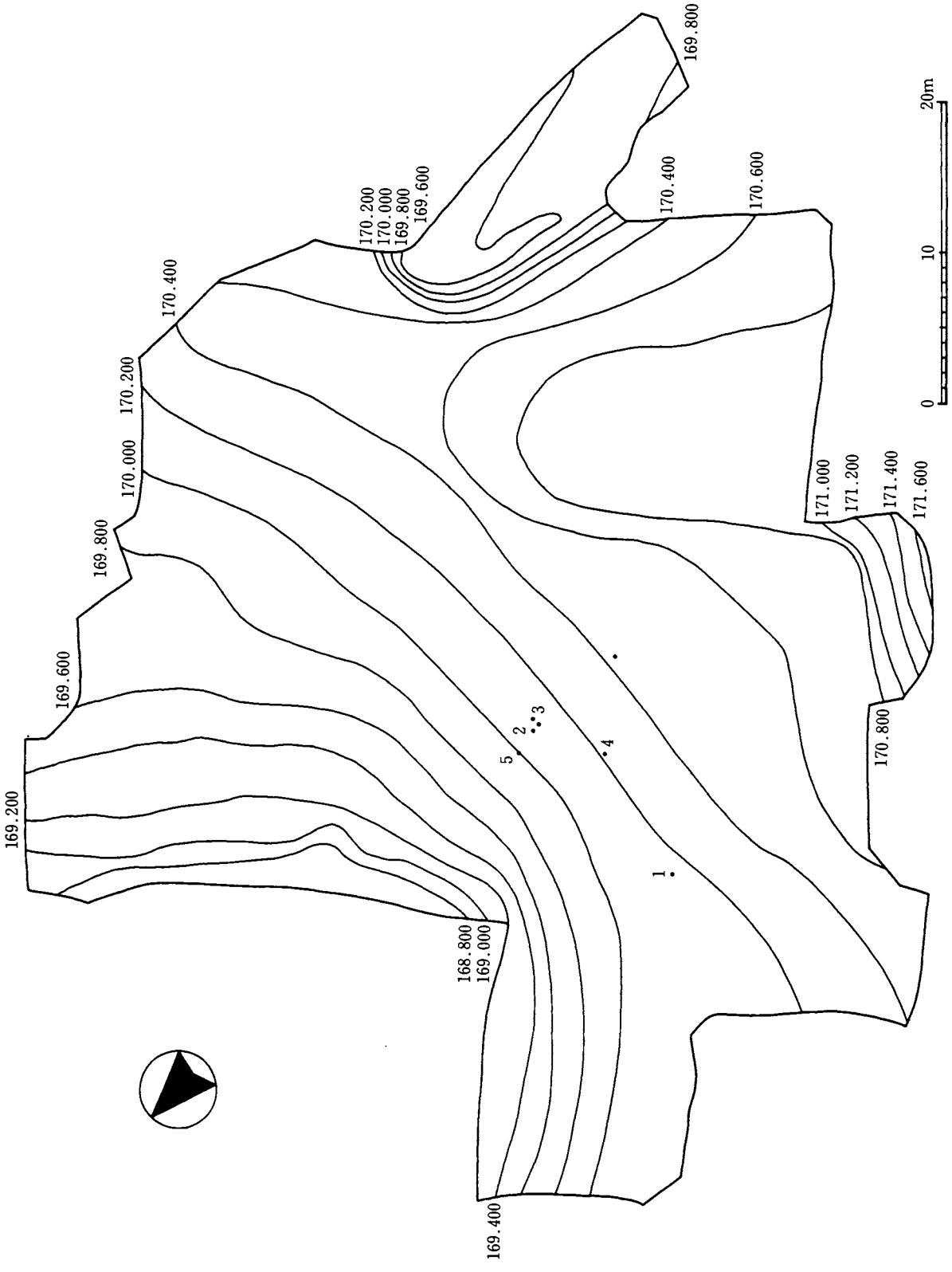
神式土器」に該当しよう。14は，条痕文である。河口貞徳氏による塞ノ神Ｂ式土器，新東晃一氏による「塞ノ神式土器」に該当しよう。10については，その部位が分からないが，器面に貝殻腹縁による押引文が見られる。

④その他の有文土器（第27図）

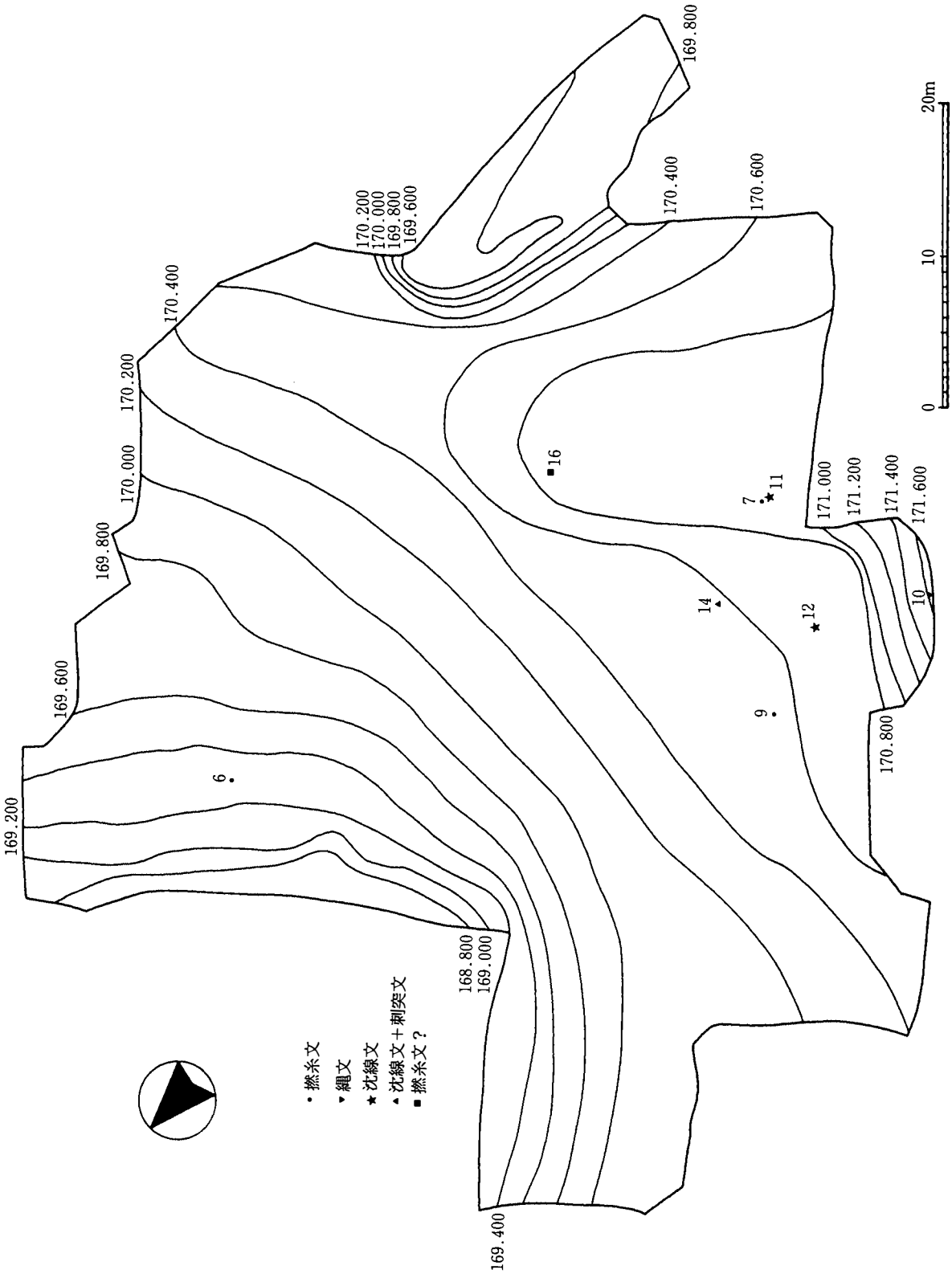
ここでは，中原式土器，石清水式土器，塞ノ神式土器以外の土器で，文様を持つ土器を紹介する。その文様では，隆起文の土器，撚糸文土器，縄文土器，沈線文土器，沈線文と刺突文との併用文の土器である。

隆起文の土器は，口縁部１点，その近く１点，胴部が検出された。この土器は，口縁部近くに数条の隆起文が見られる土器である。文様の特徴や胎土，焼成の特徴から，縄文時代草創期の隆線文土器や前期の轟Ｂ式土器とは異なる特徴を示す土器である。該当する土器型式，その時期については，不明である。南側の主分布域の中の北外れでまとまって検出されている（第25図）。

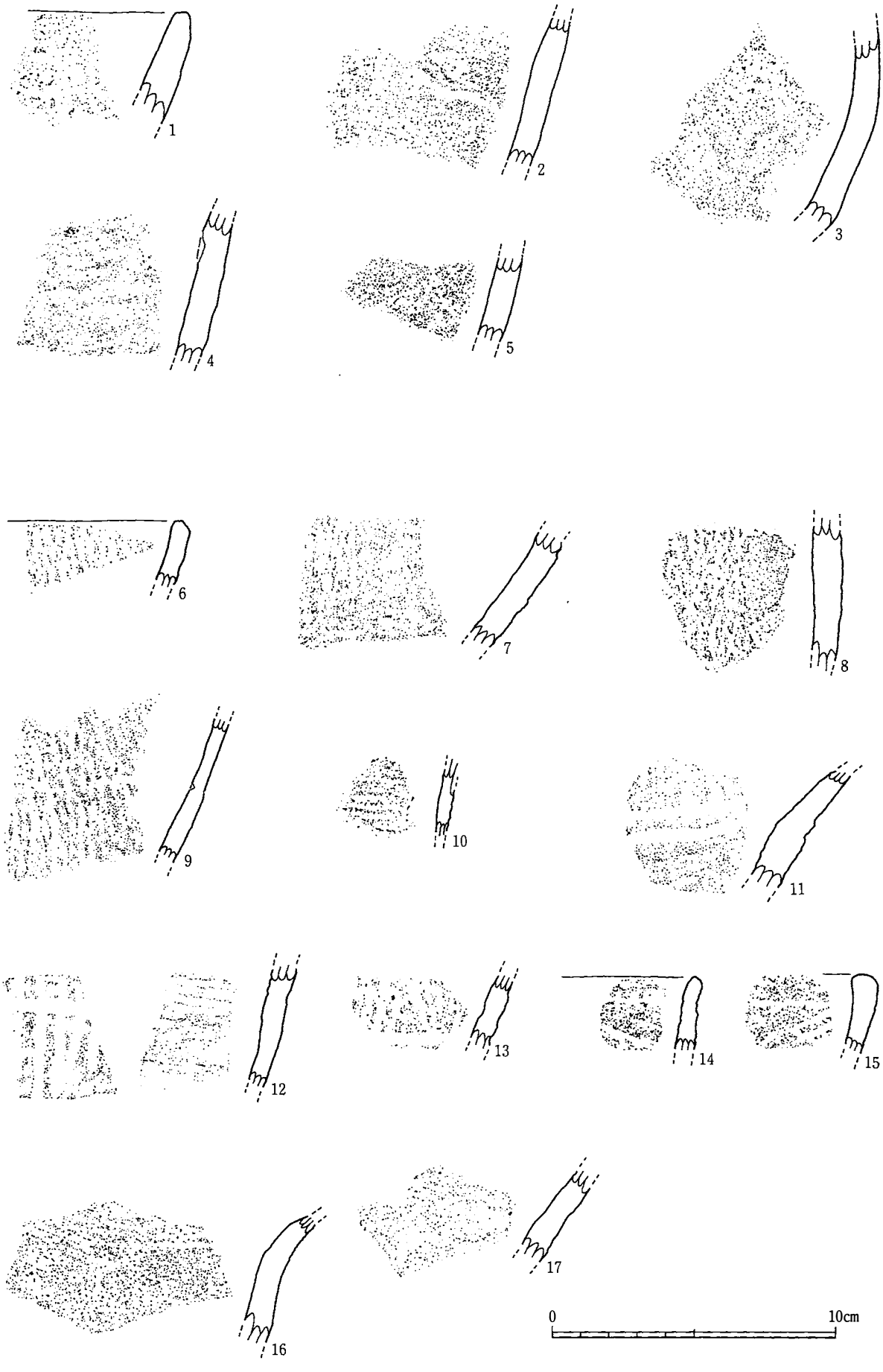
撚糸文土器は，４点検出されている。主分布域で尾根部から出土したもの（７），主分布域ではあるが谷部に近いところで検出されたもの（９），調査区北側で検出されているもの（６）である。縦位施文の撚糸文土器である。**縄文土器**は，調査区の南側から出土している。**沈線文土器**は，南側の主分布域から検出されている。12は，外面と内面に文様がある。



第25図　隆起文土器１分布図



第26図　その他の有文土器分布図



第27図　有文土器実測図

13と14は，外面のみである。横位の沈線文と縦位の沈線文が併用されるもの（12・13),斜位のものがある。15は，口縁部である。沈線文と刺突文が併用されている。16と17は，文様不明である。16は口縁部で，17は胴部である。

⑤無文土器

堂園遺跡では，多くの無文土器や土器の無文部が検出されている。その分布域は，主に南側の主分布域にある。そして，谷部に浮動・拡散している土器も認められる（第28図)。

この土器は，無文であるという点から，層位的な裏付けが無いかぎり時期を特定することは不可能である。ただし，土器の胎土の特徴によって，その所属時期をある程度推定できる。こうした作業を経て特定したものが，ここで紹介する土器である。

個体識別の結果，無文土器は，11のグループに分けることができた。その中の10群は，複数個体が見られる土器群である。また，もう一つのグループは，単独出土の資料である。ここでは，複数個体の個体別資料を中心にして，１～10という番号を付して紹介をしよう。

無文土器１（第33図１～３）

個体識別の結果，10個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，３点である。

分布域は，南側の主分布域が中心である。その出土地点では，尾根近くから谷部上位まで広がっている（第29図)。この状況から，この個体の土器は，尾根近くに原位置があり，一部が原位置を離れて谷部に浮動・拡散したと判断される。

無文土器２（第33図４～６）

個体識別の結果，11個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，３点である。

分布域は，南側の主分布域を中心にして，一部谷部に認められる（第30図)。この状況から，この個体の土器は，尾根近くに原位置があり，一部が原位置を離れて谷部に浮動・拡散したと判断される。

無文土器３（第33図４～10）

個体識別の結果，６個の破片を抽出した。その部位は，口縁部と胴部である。図示した土器は，４点である。

分布域は，南側の主分布域の北外れにあり，谷部上位に認められる（第31図)。

無文土器４（第33図11～13）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器も，３点である。

分布域は，南側の主分布域にある。その位置は，尾根部にある（第31図)。

無文土器５（第33図14～16）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，３点である。

分布域は，南側の主分布域にあり，その北外れに近い部分，谷部の上位にある（第31図)。

無文土器６（第33図17・18）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，２点である。

分布域は，南側の主分布域にある。しかも，その尾根近くで検出されている（第31図)。

無文土器７（第33図19・20）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，２点である。

分布域は，南側の主分布域の北外れにあり，谷部上位で検出されている（第32図)。

無文土器８（第33図21・22）

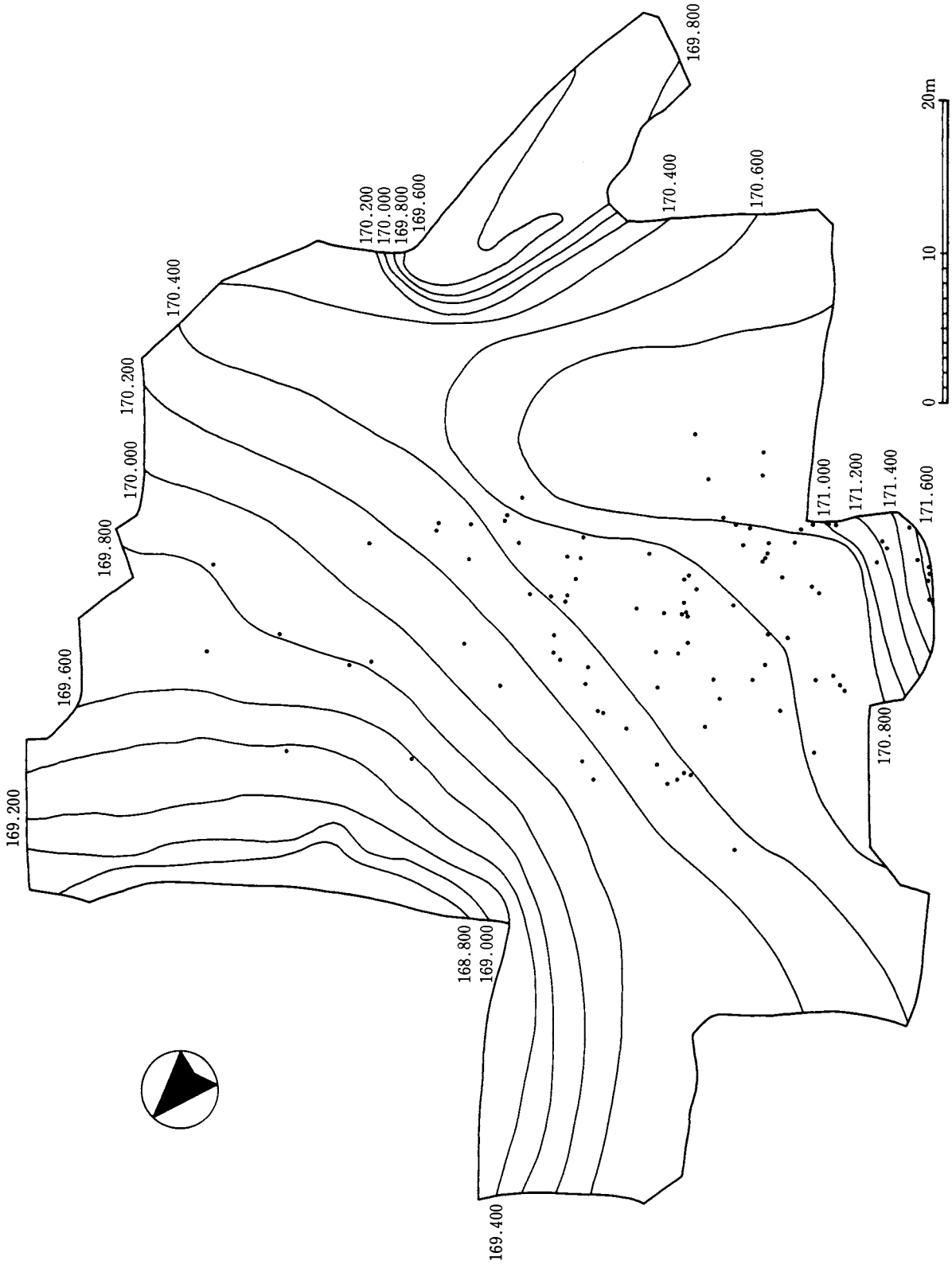
個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，２点である。

分布域は，南側の主分布域にある。尾根部で検出されている（第32図)。

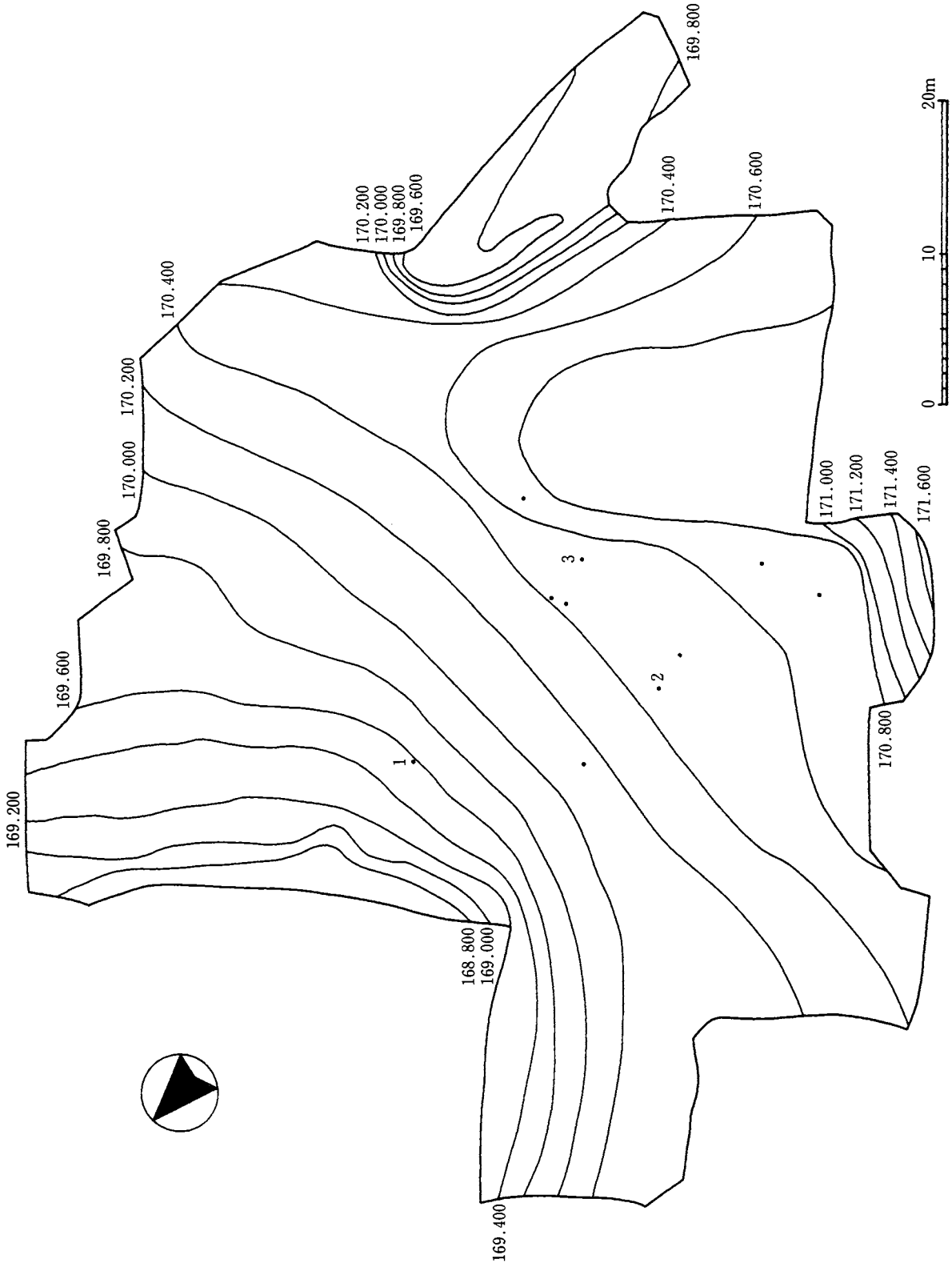
無文土器９（第33図23～25）

個体識別の結果，３個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，３点である。

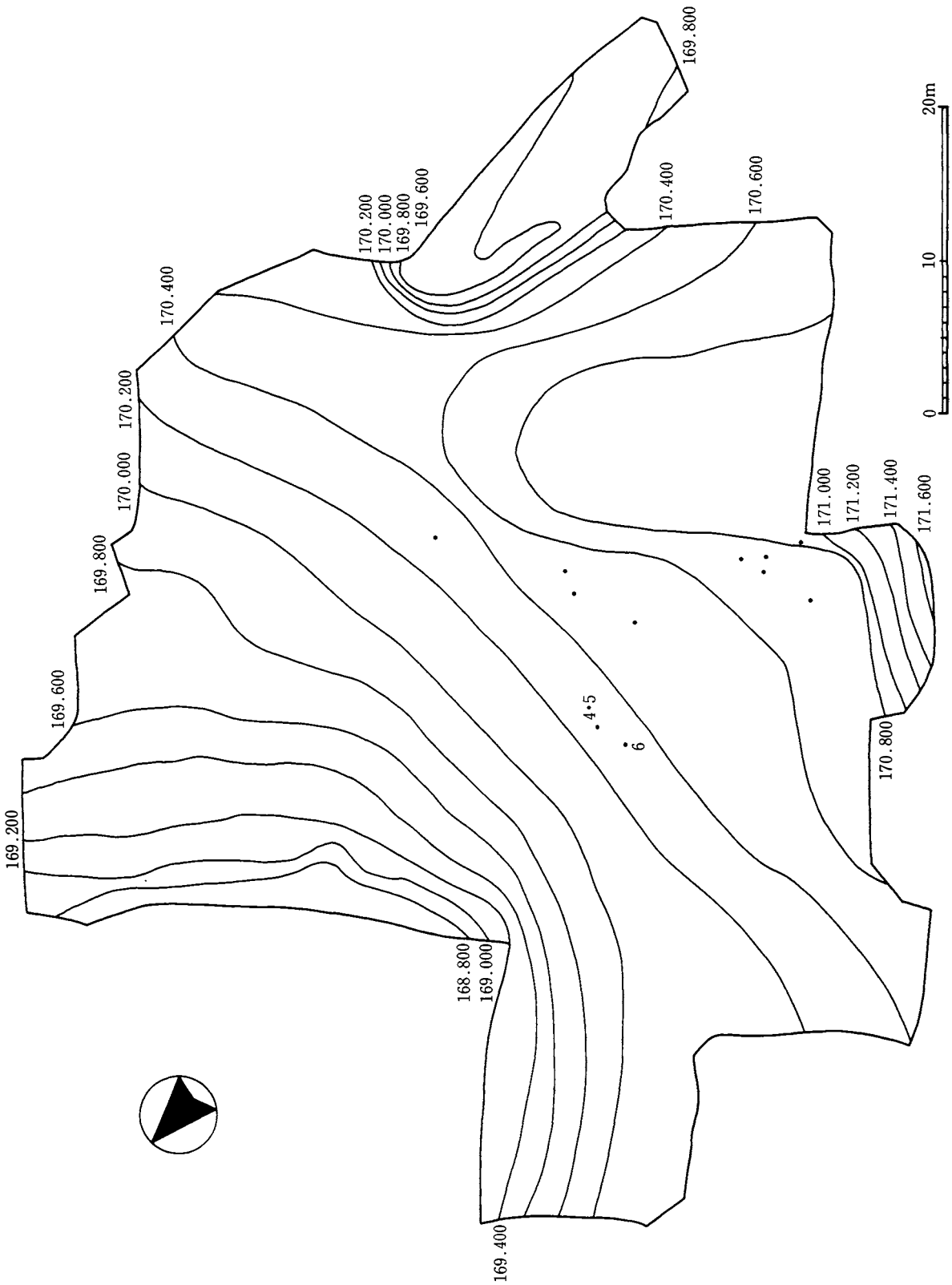
分布域は，南側の主分布域にある。いずれの出土位置も谷部上位である（第32図)。



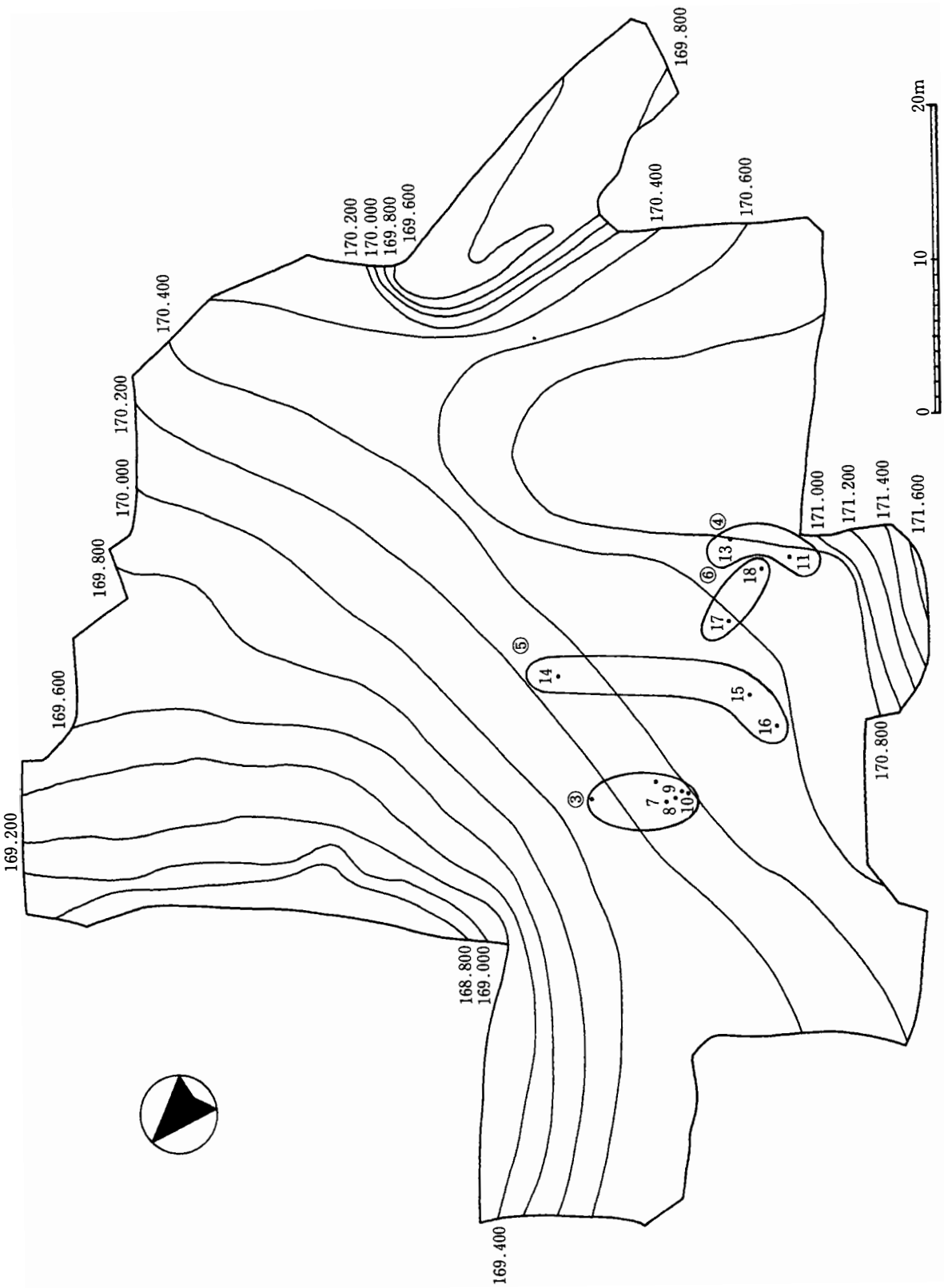
第28図　無文土器分布図



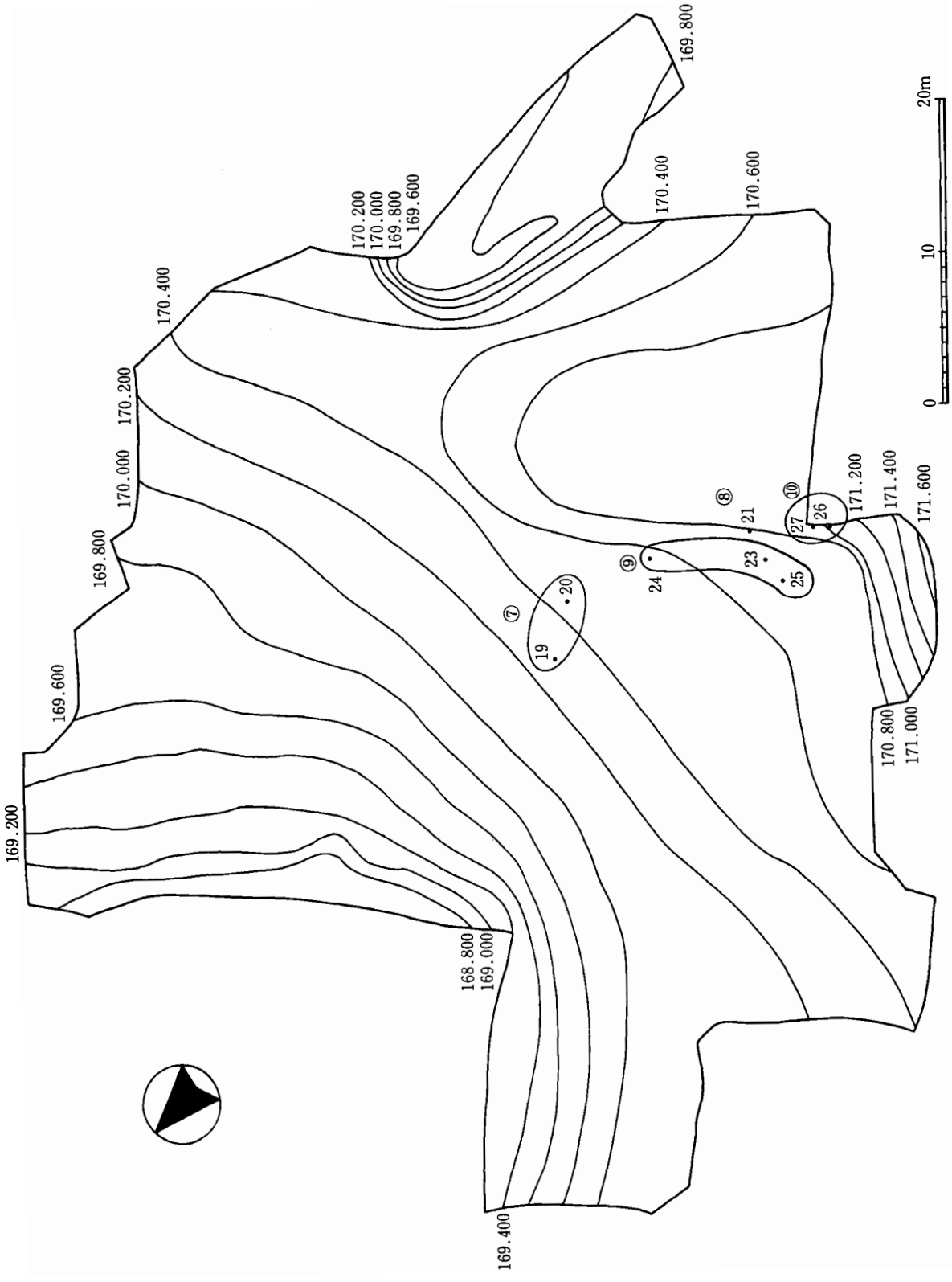
第29図　無文土器１分布図



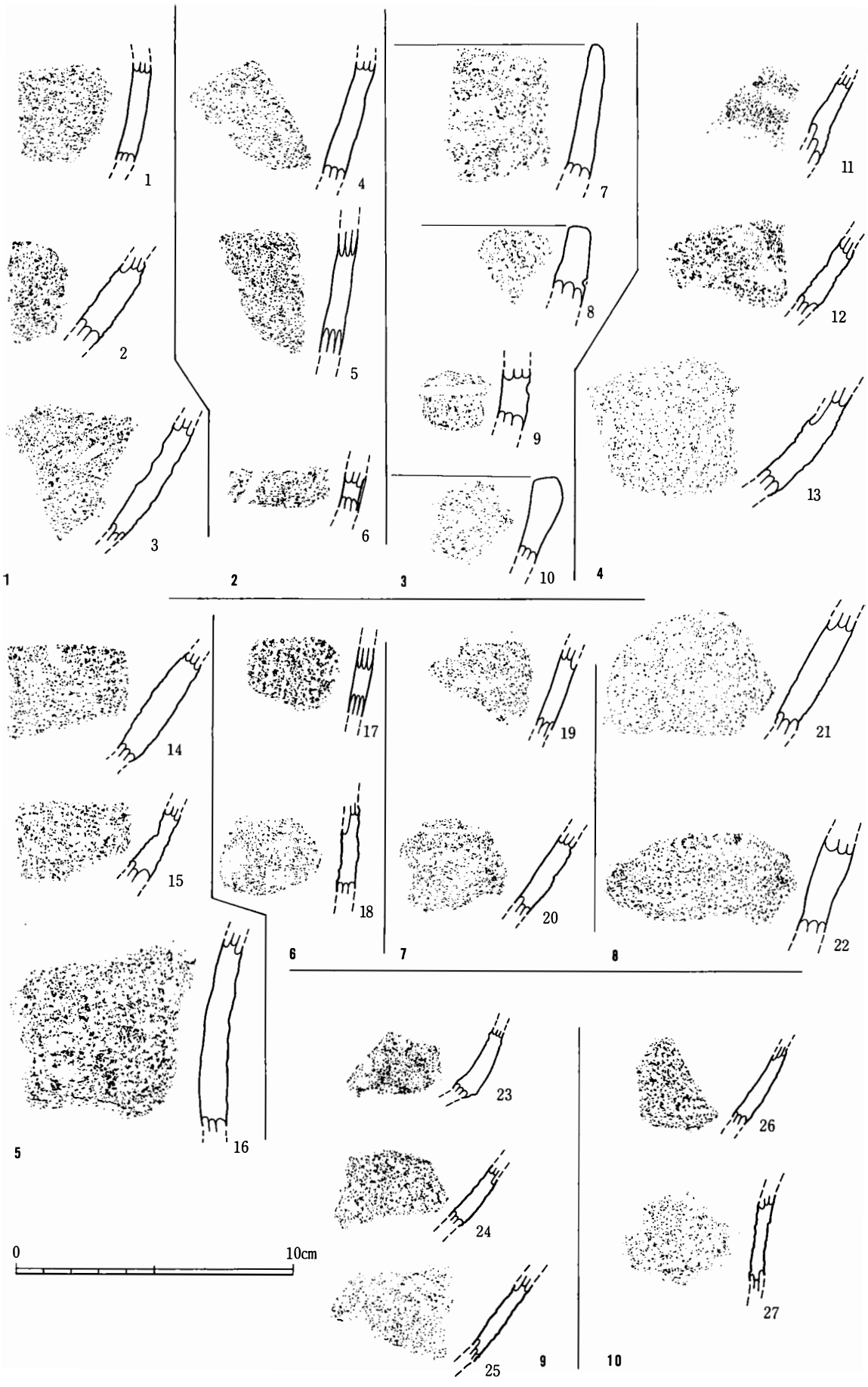
第30図　無文土器２分布図



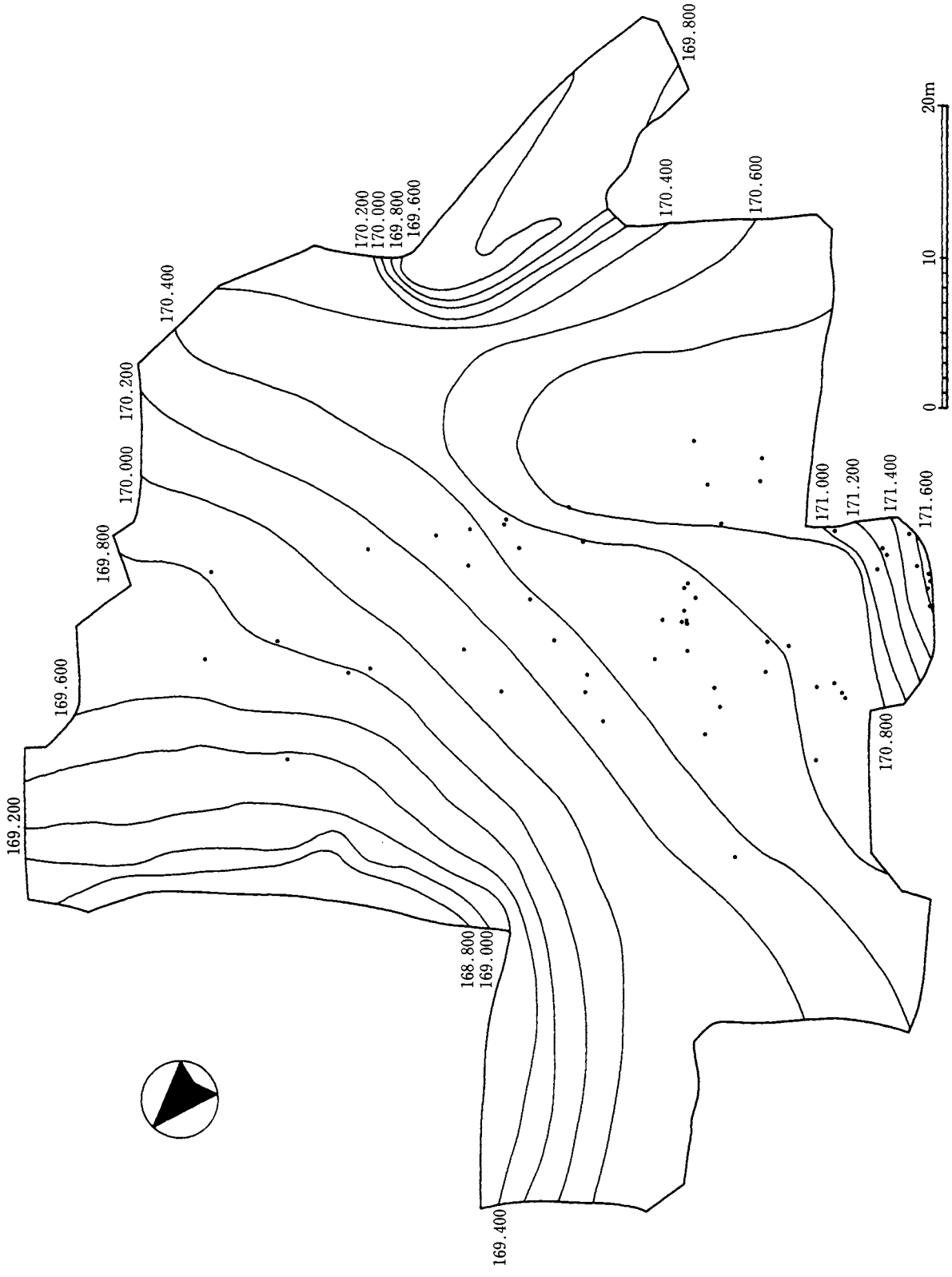
第31図　無文土器３～６分布図



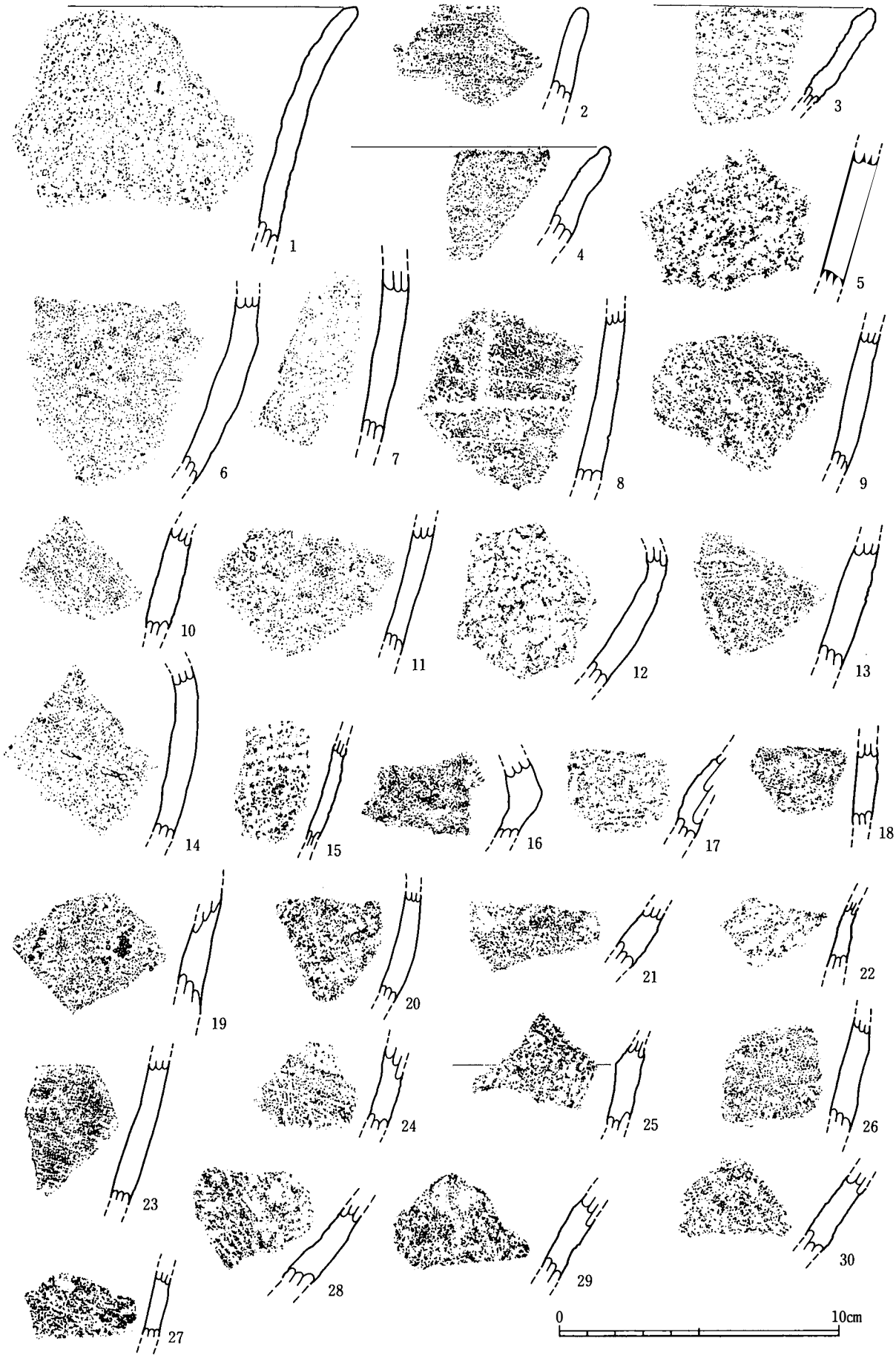
第32図　無文土器７～10分布図



第33図　無文土器１～10実測図



第34図　無文土器その他分布図



第35図　無文土器その他実測図

無文土器10（第33図26・27）

個体識別の結果，２個の破片を抽出した。その部位は，すべて胴部である。図示した土器は，２点である。

分布域は，南側の主分布域にある。出土位置は，尾根上である（**第32図**）。

その他，単独出土の無文土器片（第35図）

第34図に，堂園遺跡で出土した無文土器ないし土器の無文部の出土位置を一括して掲載している。底部は無く，口縁部４点（**１～４**）,残りは胴部である。

４．まとめ

堂園遺跡の縄文時代の資料の中で，もっとも多く出土しているのは，早期の資料である。これまで紹介してきたものが，その成果であるが，次には，本節のまとめとして，遺構・地形・土器について簡単に整理しておきたい。

【地形】調査区を地形的に見る上では，尾根部の存在と谷部の存在は，見逃せない。尾根部は，調査区の南側に認められる地形である。その平坦部は狭く，幅13mから幅２ｍである。そして，その尾根部は，南側が広く，北側が狭い。その延びる方向は，北東である。

谷部は，この尾根から北に開いている。谷上位には，一部平坦部があるとはいっても，傾斜は比較的急である。

堂園遺跡の縄文時代早期の遺構や遺物は，この地形的な特徴に左右されることによって展開している。それを具体的に見ていこう。

【遺構】遺構としては，集石３基がある。

集石は，縄文時代早期の遺跡から一般的に出土する遺構である。この場合，構造上は大きく三つの種類がある。一つは，下部構造としての石組みが見られるものである。もう一つは，下部構造として土坑が見られるものである。そして，もう一つは，下部構造としての石組みも土坑も見られず，礫の密集した広がりとして認められるものである。

堂園遺跡で検出された集石は，上記３種類の集石の中，下部構造を伴わないものであった。検出された場所は，調査区にある尾根部の北側の縁にある。**１号**と**２号**がある場所は，尾根部の中でも広くて一段高い部分にあたり，**３号**は尾根が狭くなって，一段低くなっている部分にあたっている。位置の異なりはあるとはいっても，尾根部の北側に存在している点では共通している。構造上の共通性と立地の共通性から，この三つの集石は，機能的にも，使用した季節においても，同じような性格の施設であると判断できる。

【遺物分布】縄文時代早期の遺物としては，土器と石器が一般的である。堂園遺跡でも，土器の他，石器の検出があった。ただし，この石器は，層位的な出土状態が悪ければ悪いほど，その所属時期を特定することが不可能な遺物である。したがって，本節では，まず所属時期が明らかな土器を中心にして紹介してきた。

土器の分布は，調査区の地形的な特徴をよく表した状況にある。それは，尾根部の縁から谷部上位に広がる主分布域と，谷部に見られる分布域という大きく二つの分布域が見られることである。これについて，堂園遺跡の縄文時代早期の遺物分布は，本来の位置近くに遺存している遺物と，自然の拡散現象の結果，移動を余儀なくされた遺物とによって構成されている可能性が高いことを，「２遺構とその位置」の「②遺物分布」の中で予想しておいた。ただし，この問題については土器型式や個体別資料による分布傾向を考慮の中に入れる必要があり，その場では触れることを避けてもいた。そこで，出土した土器の土器型式別，個体別資料ごとにその分布の傾向を見てきた結果を受けて，あらためて保留してきた遺物分布の問題を取り上げたい。なお，その際に，特に資料的にまとまっている中原式土器，石清水式土器，塞ノ神式土器，無文土器を扱いたい。

中原式土器では，主分布域と谷部の分布域とにまたがった広がりが認められる。この土器型式の個体別資料では，複数の破片が認められたものが，３個体あった。それを**中原式土器１～３**と呼んだ。その中で，**中原式土器１**は，23個の破片が見られる。その主な分布域は，南側の尾根周辺が中心で，環状の分布が認められた。また，一部の土器片は，谷部でも検出されている。環状分布を呈していること，谷

部にも土器片の散布が認められること，などを考慮すれば，**中原式土器１**の分布は，土器片の浮遊・拡散の結果であると考えることが可能であろう。

石清水式土器でも，主分布域と谷部の分布域とにまたがった広がりが認められる。この土器型式の個体別資料では，複数の破片が認められたものが，５個体あった。それを**石清水式土器１～５**と呼んだ。その中で**石清水式土器１**は，18個の破片が見られる。分布域は，南側にみられる主分布域で，尾根から離れた谷部の上位にあたる。この周辺は，谷頭付近のやや平坦な地形にある。出土地点は，それぞれに近接した状況にあり，あまり原位置から遊離・拡散した状況にはないようである。ただし，こうした資料であっても10m 以上も離れて検出されている土器片があるなど，拡散の傾向は認められるだろう。

塞ノ神式土器でも，主分布域と谷部の分布域とにまたがった広がりが見られる。この土器型式の個体別資料では，複数の破片が認められるものが，４個体あった。それを**塞ノ神式土器１～４**と呼んだ。ここでは，18点の破片が認識できた**塞ノ神式土器1**，５点の破片が認識できた**塞ノ神式土器２**を扱いたい。**塞ノ神式土器１**の分布域は，南側の主分布域，しかも尾根の縁と，谷部にある。この状況は，この個体の土器が原位置に近い尾根周辺から谷部へと浮動・拡散した結果を示しているとすることができる。その間の移動は，33m である。**塞ノ神式土器２**の分布域は，南側の主分布域の北端，谷部に近い位置にある。あまり，拡散した状況にはない。

無文土器でも，主分布域と谷部の分布域とにまたがった広がりが見られる。この土器型式の個体別資料では，複数の破片が認められるものが，10個体あった。その中で，10点の資料である**無文土器1**，11点の**無文土器2**，６点の**無文土器３**を扱うことにしよう。**無文土器１**の分布域は，南側の主分布域が中心である。その出土地点では，尾根近くから谷部上位まで広がっている。その広がりは，南北30m，東西15m である。この個体の土器の分布には，尾根近くに原位置があり，一部が原位置を離れて谷部に浮動・拡散した状況が認められる。こうした傾向は，**無文土器２**の分布域でも認められる。それは，南側の主分布域を中心にして，一部が谷部に認められる状況である。**無文土器３**の分布域は，南側の主分布域の北外れにあり，谷部上位である。この個体には，あまり拡散の状況は認められない。

以上の結果から明らかにできることは，土器型式別には，いずれの土器型式でも尾根周辺の主分布域と谷部周辺とにまたがった分布が見られるなど，それぞれの分布傾向に差が無いという点である。つまり，いずれにも，主分布域とその北側という関係が認められ，土器型式ごとにその分布域を違えるという偏在の傾向は，認められないのである。また，個体別資料においても，同一個体で，それぞれの分布域にまたがっているものが存在するなど，明らかな偏在の傾向は存在していないのである。つまり，こうしたことは，遺物分布の傾向から予想した，主分布域近くにある原位置からの浮動・拡散という遺物分布の形成を証明する現象でもあろう。

なお，こうした分布の状況と先に示した遺構の状況を併せて検討することによって，明らかにできる遺跡の形成過程については，次の章であらためて扱うことにして，次には，土器そのものについて，整理をおこないたい。

【土器】縄文時代早期の土器としては，中原式土器，石清水式土器，塞ノ神式土器，隆起文の土器，縄文土器，撚糸文土器，沈線文土器，沈線文と刺突文の併用文の土器，無文土器があった。いずれも破片での出土で，完形の状態で検出されたものはなかった。そこで，検討の幅を広めるという意味も含めて，整理・報告書作成の段階では，出土した土器片について個体識別をおこなった。

その結果，中原式土器では６個体，石清水式土器では23個体，塞ノ神式土器では18個体を識別することができた。また，隆起文の土器は１個体，撚糸文土器，沈線文土器，沈線文と刺突文の併用文様の土器など，出土点数が少ないものは，それぞれに単独での出土であった。さらに，無文土器の中で，複数個体のものは，10個体を識別できた。また，その他の無文土器では，識別できなかった破片も多く存在している。

中原式土器は，木﨑康弘によって蒲生・上の原遺

跡の調査成果の報告の際に，型式設定された土器型式である（木崎1996）。その早期における位置は，前半にあたり，中原Ⅰ式土器が早期の初め頃，中原Ⅴ式土器が早期の中頃であると考えられる。堂園遺跡で出土した中原式土器をそれぞれの細別型式ごとにまとめると，中原Ⅰ式土器が**単独出土の土器**1点（**第13図17**），中原Ⅴ式土器が**中原式土器2・3**，中原Ⅳ式土器かⅤ式土器に該当するものが**単独出土の土器**1点（**第13図18**），中原Ⅴ式土器ないし，それに後続する新しい土器型式に属する土器が**単独出土の土器**1点（**第13図19**）ということである。そして，もっともまとまった資料である**中原式土器1**については，中原式土器におけるいずれの細別型式にも該当するものが見られず，新たな細別型式を設定することが求められるだろう。そして，その特徴から，この土器は，中原Ⅴ式土器の後に編年される土器であると考えられる。

堂園遺跡で出土した押型文土器は，その文様の特徴から，その土器群の末に位置付けられる土器として理解できる。しかも，前記してもいるように，手向山式土器の型式論的特徴である屈曲胴部を示す資料が1点も存在していない。こうしたことから，堂園遺跡で出土した押型文土器は，すべて**石清水式土器**（小林1939・木崎1995）に該当するものと判断された。

塞ノ神式土器については，前記しているように，河口貞徳氏（1972）と新東晃一氏（1988）である。そこで，両氏の分類にそれぞれの土器を対応させていくというかたちでまとめをおこないたい。

堂園遺跡で出土した塞ノ神式土器は，貝殻文が主文様となる土器が1点あるのみで，ほかのすべては撚糸文が主文様の一つとなる土器であった。以下，両氏の分類ごとに見ていこう。

河口氏分類では，塞ノ神Aa式土器に該当するものが，**塞ノ神式土器2・3，単**
24図2・3～5）ということになる。塞ノ神Ab式土器に該当するものが，**塞ノ神式土器1・4，単独出土の土器片**2点（**第24図1・6**）ということになる。

新東氏分類では，石坂上式土器に該当するものが**単独出土の土器片**1点（**第24図2**）である。栫ノ原式土器に該当する土器としては，**塞ノ神式土器2・3，単独出土の土器片**3点（**第24図3～5**）がある。木佐貫原式土器としては，**塞ノ神式土器1**が該当しよう。塞ノ神式土器としては，**塞ノ神式土器4**と**単独出土の土器片**1点（**第24図14**）がある。また，鍋谷式土器としては，**単独出土の土器片**1点（**第24図1**）で，鍋谷式土器と塞ノ神式土器のどちらかに属するものとして**第24図6**の資料がある。

以上の結果，堂園遺跡で出土した塞ノ神式土器をその編年の中に位置付けられるだろう。ただし，それは，両氏の分類によって微妙に違いが見られる。例えば，河口氏分類に従えば，堂園遺跡出土の塞ノ神式土器は，その中でも前半段階に収まるものがほとんどということになる。これに対して，新東氏分類に従えば，貝殻文系という「塞ノ神式土器様式」の中，その後半段階が中心で，撚糸文系という「平栫式土器様式」の中，その後半段階ということになる。このように，所属する段階の問題も，この土器そのものは定まっていないのが実状であり，今後の検討事項ということになろう。

以上の他，堂園遺跡では，**隆起文の土器**，**撚糸文土器**，**沈線文土器**，**沈線文と刺突文の併用文の土器**，**無文土器**が出土した。これらの土器については，その所属する段階も含めて，検討する材料に乏しいのが実状である。したがって，今回の取り扱いとしては，資料の提示のみに止めている。

なお，土器型式別，個体別資料ごとの分布傾向についてのまとめは，前に述べているので，ここでは繰り返さない。

第２節　縄文時代中期・後期・晩期の土器

１．はじめに

縄文時代中期・後期・晩期に属する遺物は，鬼界カルデラを給源とするアカホヤ火山灰層よりも上の層から検出された。層序としては，表土層を一枚目の第Ⅰ層として，三枚目の層である第Ⅲ層にあたる。なお，この層は，１次堆積層で硬くしまった火山灰層であるｂ層と，２次堆積層でしまりのないａ層に分層される。縄文時代中期・後期・晩期に属する遺物が包含される層は，この中の第Ⅲａ層ということになる。ただし，調査区は，第Ⅲ層以上の遺存が悪い状態にあったため，調査員の所見によれば，縄文時代早期の遺物と中期以降の遺物との間に明瞭な層位的上下関係は認められなかったという。

今回の調査で得られた成果は中期の船元式土器・阿高式系土器，後期の御手洗ａ式土器・沈線文の土器・太郎迫式土器，晩期の黒川式土器・刻目突帯文土器という土器と，後期の時期の打製石斧やその未加工品，円盤状石器などがあった。ただし，資料的には少なく，しかも石器については，早期のものとの混在が予想されるなど，良好な資料とはいえない状況にある。そこで，ここでは，時期ごとに節を変えず，一つの節として中期・後期・晩期を一括することにした。また，石器については，包含状況の関係から所属時期を明確に決定できなったので，次節の中で取り扱うこととした。

２．縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器としては，船元式土器と阿高式系土器がある。また，型式不明の土器として，胎土が阿高式系土器に類似した土器も１点出土している。その出土位置は，すべて谷部にある（**第36図**）。型式ごとに見ていこう。

船元式土器（第38図１）

船元式土器は，中部瀬戸内地域に分布する，岡山県船元貝塚を標式遺跡とする土器型式である。その所属時期は，中期の前半段階である。

堂園遺跡では，１点の船元式土器が検出されている。その出土位置は，谷部にある（**第36図**）。文様は，撚りが粗く細い原体による縄文である。部位は，胴部である。しかし，その位置は，不明である。破片が小さく，しかも１点という出土量であり，その細かい特徴については，明らかにできない。

阿高式系土器（第38図２）

阿高式土器は，熊本県阿高貝塚を標式遺跡とする土器型式である。その時期は，中期後半である。

堂園遺跡では，１点の阿高式土器に類似した土器が出土している。その出土位置は，船元式土器の近く，谷部にある（**第36図**）。部位は，口縁部である。文様は，幅の広い沈線文が口縁部にそって横方向に引かれている。文様の特徴，赤褐色を呈する器面の色調，厚手の器壁という型式論的・形態論的特徴によって，阿高式土器に類似した土器として認識した。なお，上記した特徴の中，文様の特徴から，この土器は，阿高式土器の中でも新しい段階の土器として認識され，南福寺式土器との関連も考えられるだろう。

型式不明の土器（第38図３）

文様が見られず，型式不明の土器が１点出土した。出土位置は，不明である。

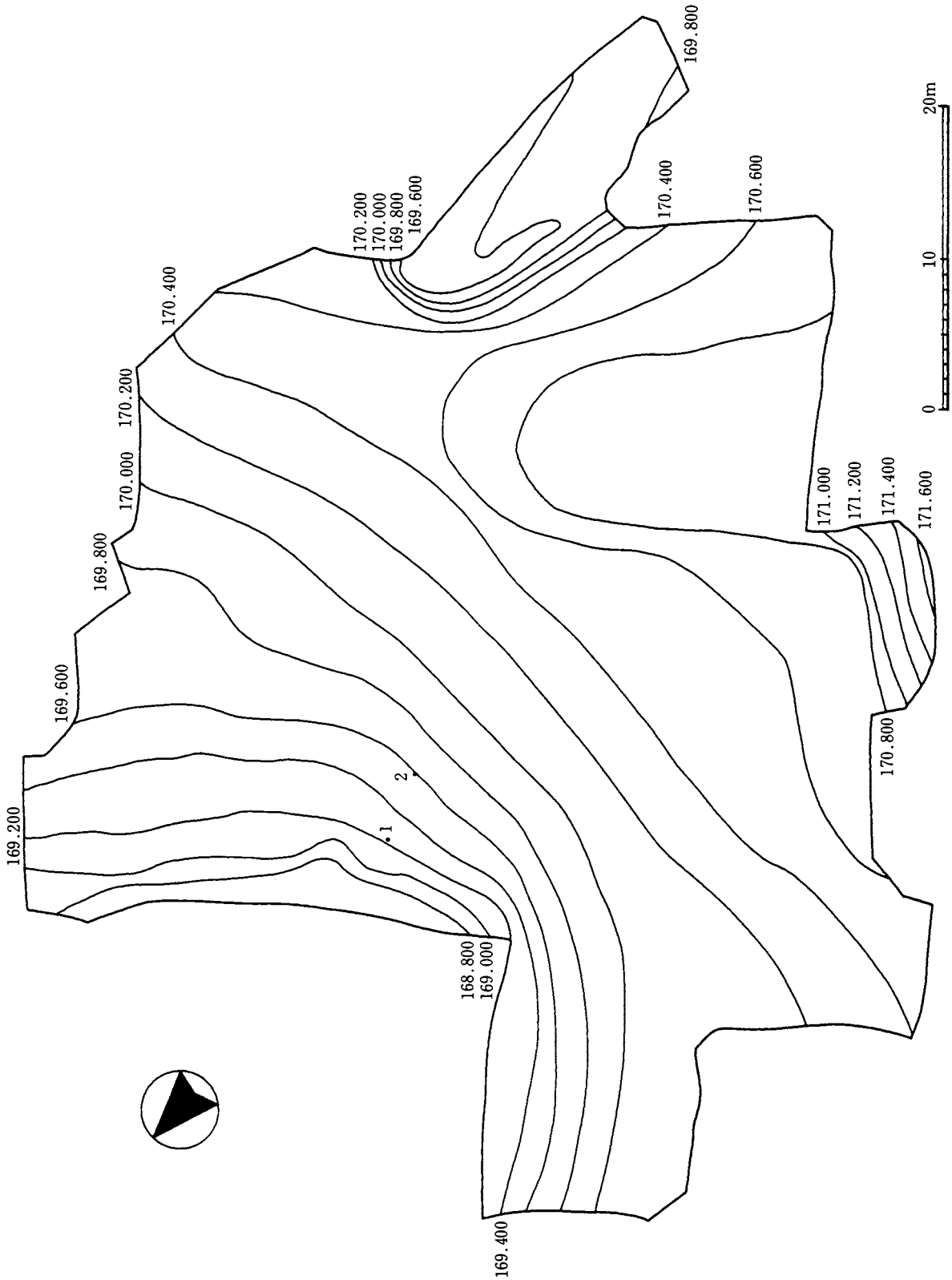
この土器は，器面の色調が赤褐色を呈し，厚手の器壁をとるという特徴を持つ。このことから，阿高式系土器に類似していると認識した。

３．縄文時代後期の土器

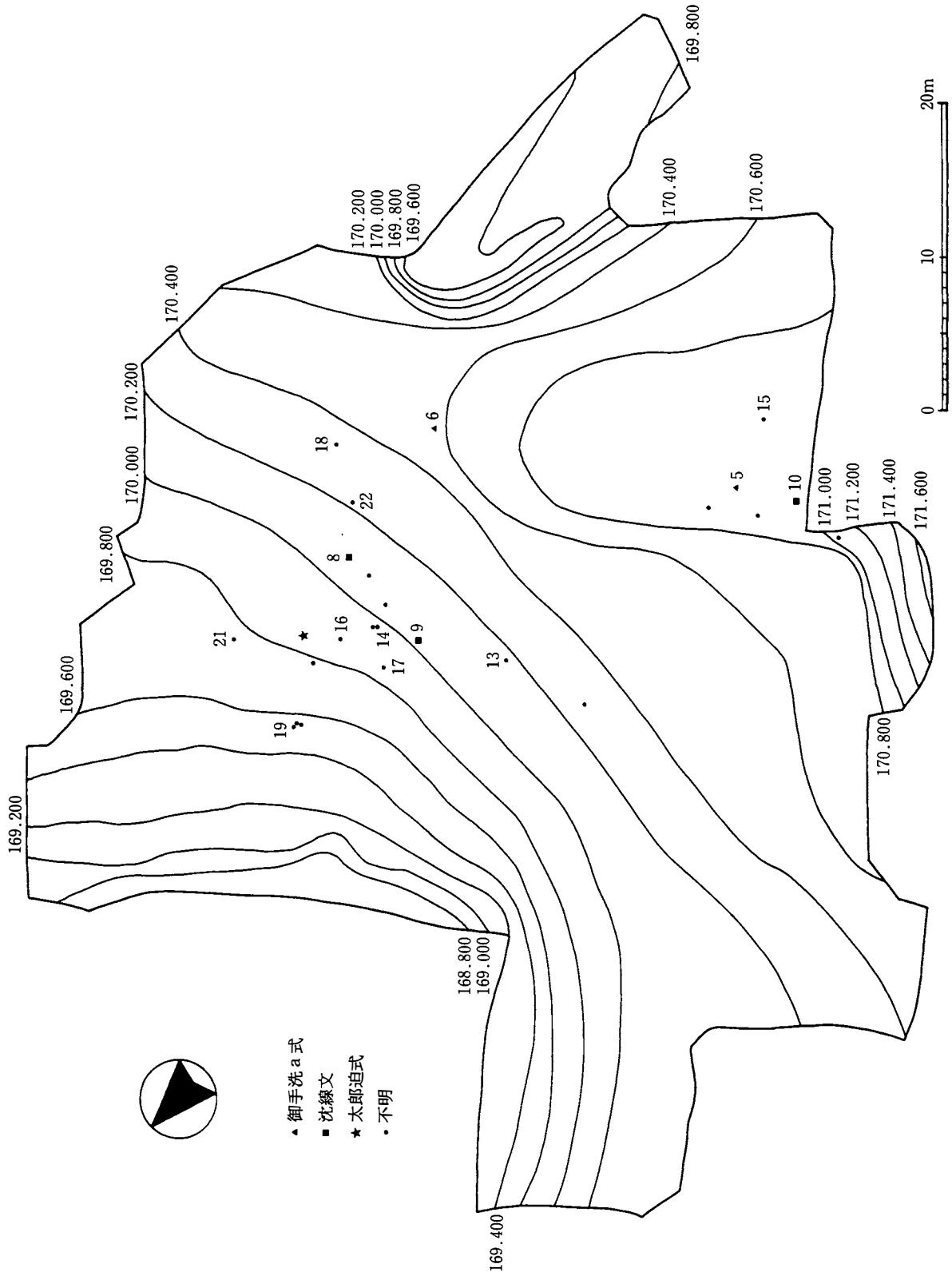
縄文時代後期の土器としては，御手洗ａ式土器・沈線文の土器・太郎迫式土器，その他，型式不明の土器がある。その全体の出土位置の傾向は，尾根上と谷部にある（**第37図**）。特に，谷部上位での出土量が多い。これは，縄文時代早期で指摘した，尾根部と谷部という地形に則する出土状況とは明らかに異なる傾向である。この時期ごとの違いは，時期ごとに異なる空間利用の違いの可能性が高く，その点では興味深いものがある。ただし，残念ながら，出土量の僅少さは，こうした分布傾向が本来の姿を表しているのか，そうでないのかという点において，不明瞭な部分を多く保持する結果となっている。

個別に見ていこう。

御手洗ａ式土器（第38図４～６）



第36図　縄文時代中期土器分布図



第37図　縄文時代後期土器分布図

御手洗ａ式土器は，熊本県御手洗遺跡を標式遺跡にして設定された土器型式である。その時期は，後期前半である。

堂園遺跡では，同一個体の資料である３点の御手洗ａ式土器が出土している。その出土位置は，尾根部である。しかし，その出土地点は，南側と北側とに偏り，その間，20mの隔たりがある（**第37図**）。部位は，口縁部（４）,ないし口唇部を欠いた口縁部近く（５・６）である。文様は，貝殻腹縁による刺突文で，横走している。

沈線文の土器（第38図７～10）

後期の土器との共伴が認められる土器として，型式設定がおこなわれていないものが４点出土している。個体識別の結果，二つの個体が存在することがわかった。７と８が一つの個体で，９と10が一つの個体である。それぞれの位置は，７と８がいずれも谷部にあり，９と10では谷部と尾根部にあった(**第37図**)。

文様の特徴は，いずれの個体も箆状工具による沈線文である。沈線の太い引き始め部と細く消える引き終わり部は，明瞭で，器面に工具を入れて器面を引き始め，そのまま器面上を走らせながら工具を引き上げるという工具の軌跡を認めることができる。７・８は，格子状に沈線が組み合わさっている。９と10については，文様帯から外れた部分であるために，詳細は不明である。しかし，９の破片の上位に工具の引き上げ痕跡が認められることから，７・８の土器と同じ文様構成をとる可能性もある。

太郎迫式土器（第38図11）

太郎迫式土器は，熊本市太郎迫遺跡を標式遺跡として設定された土器型式である。その時期は，後期中頃である。土器の形態には，波状口縁や平口縁で胴部に「X」字状の沈線文が見られる鉢形土器や深鉢形土器，浅鉢形土器，椀形土器，高坏形土器，皿形土器がある。

堂園遺跡では，１点の鉢形土器の破片が検出されている。その出土地点は，谷部上位である(**第37図**)。破片の部位は，胴部で，その上位である文様帯部にあたっている。器面には，多条の横沈線文が引かれている。破片の上位には，この土器型式の特徴である「X」字状に類似した沈線による反転部が認められる。この土器は，明瞭な「X」字状をとらず，それに代わって弧状の沈線と列点が組み合わさる文様が見られるなど，太郎迫式土器の中でもやや古相を呈する土器のようだ。

型式不明の土器（第38図12～22）

土器の無文部であるために，型式が不明な土器が出土した。出土位置ごとに点数は，谷部上位で15点，尾根部で４点である（**第37図**）。図示したものは，その中の11点である。口縁部３点（**12～14**）,胴部８点（**15～22**）である。この中で，**12**は，口縁部形状の型式論的特徴が明確であり，ある程度の型式対比が可能である。つまり，この土器は，無文ではあるが，明瞭で短い口縁部の存在から西平式土器か太郎迫式土器のどちらかに対比できそうである。また，**16**の胴部についても，屈曲の度合いから**12**の資料と同じ評価を下すことができよう。

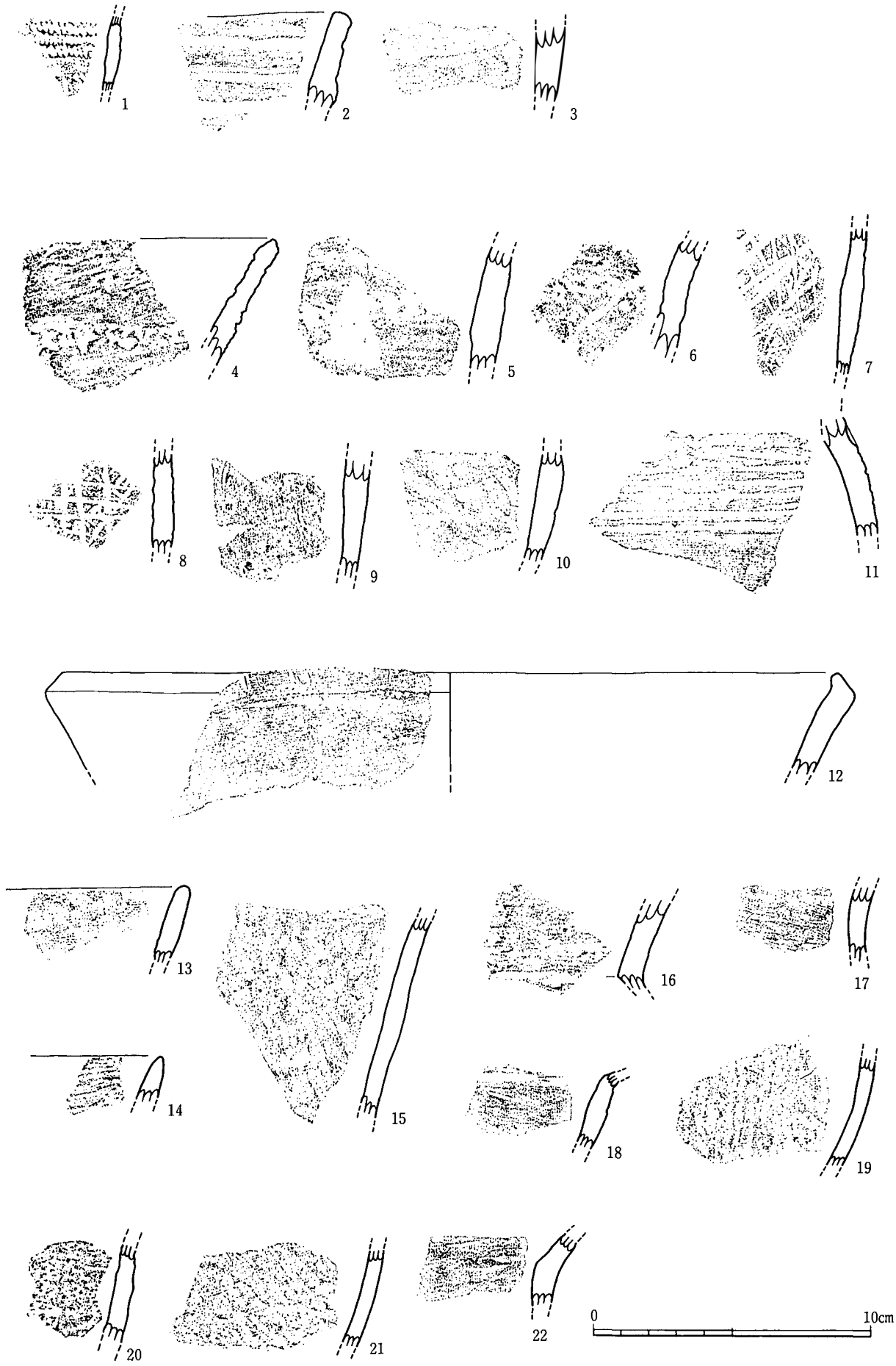
４．縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期の土器では，黒川式土器・刻目突帯文土器がある。それらの出土位置は，谷部を中心にして見られる（**第39図**）。これは，縄文時代後期の傾向として指摘した点に類似した特徴である。ただし，この時期も，残念ながら，出土量の僅少さは免れない事実である。こうした分布傾向が本来の姿を表しているのか，そうでないのかという点において，不明瞭な部分が多い。

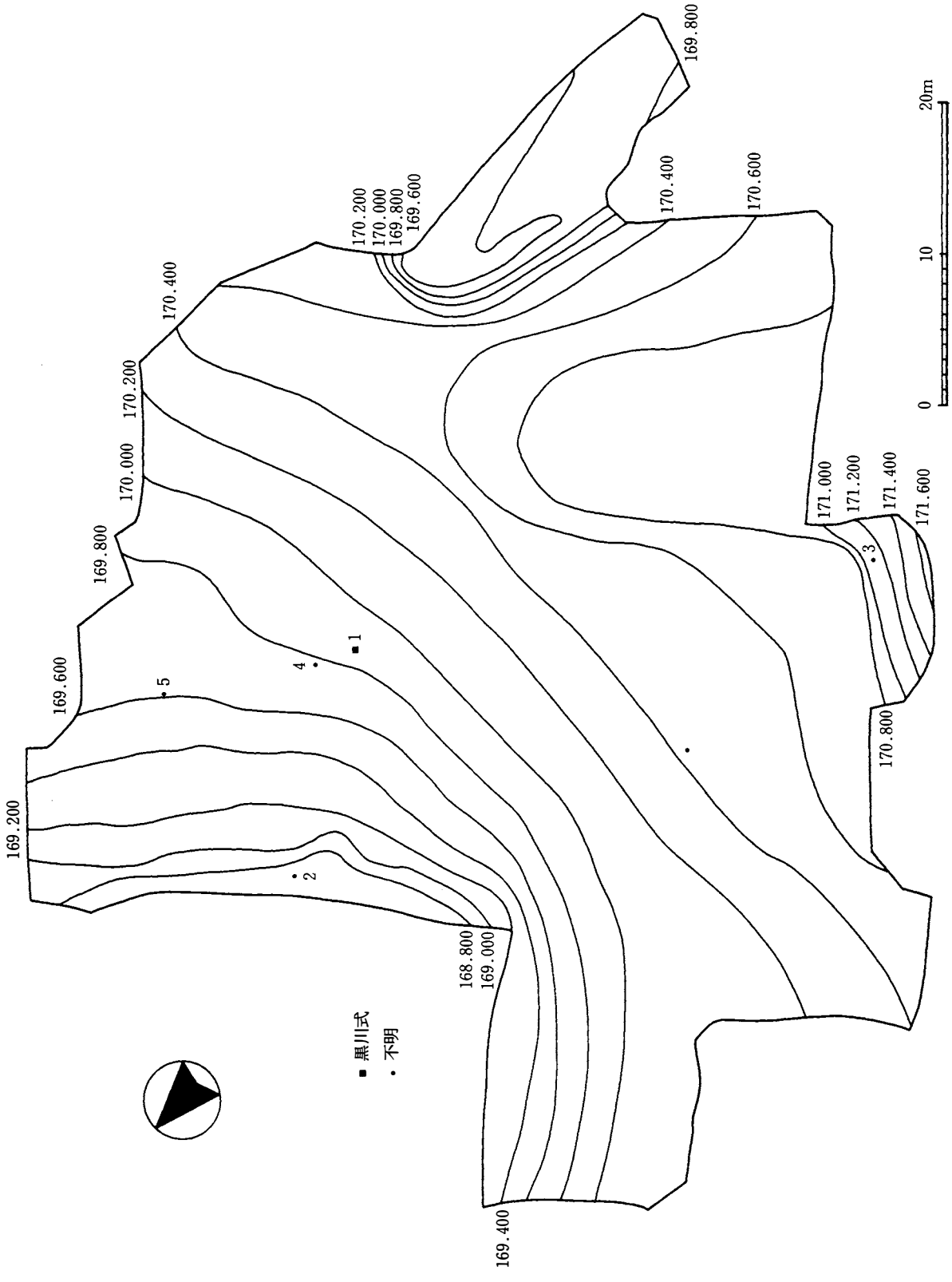
黒川式土器（第40図１）

黒川式土器は，鹿児島県黒川洞穴遺跡の出土土器群を標式にして設定された土器型式である。その時期は，晩期後半である。この型式の形態としては，精製土器である浅鉢形土器や小型の壺形土器，粗製土器である深鉢形土器がある。

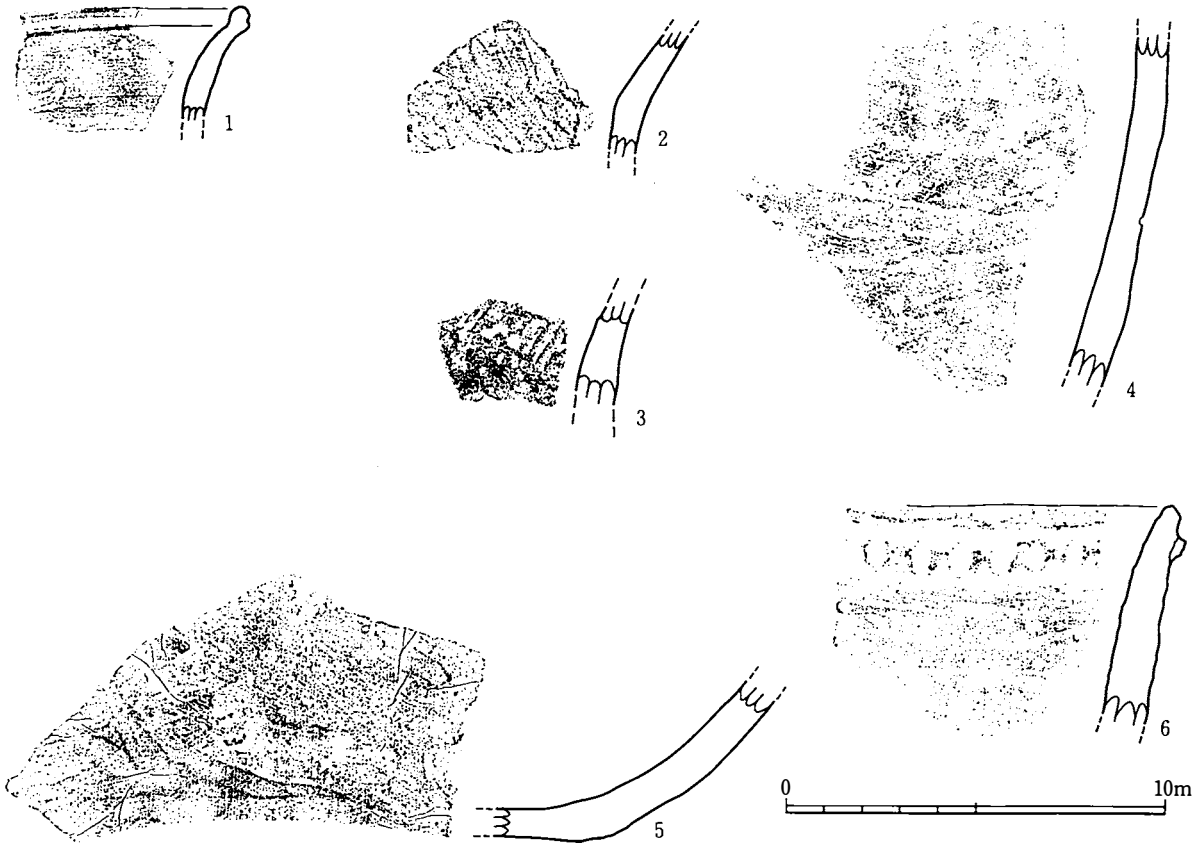
堂園遺跡では，１点の土器を認めた。それは，浅鉢形土器の破片である。その出土位置は，谷部上位にある（**第39図**）。器面は，黒く，ていねいに磨かれている。口縁部の内面への折り込み，表面の１条の沈線，裏面の段は，黒川式土器の型式的特徴として指摘されるものである。なお，同じ色調や器面の調整の特徴を呈する土器として，型式不明ではあるが２の資料を挙げることができる。



第38図　縄文時代中期・後期土器実測図



第39図　縄文時代晩期土器分布図



第40図　縄文時代晩期土器実測図

刻目突帯文土器（第40図６）

刻目突帯文土器は，晩期後半の土器である。北九州西部では長崎県山の寺遺跡を標式遺跡として山の寺式土器が，北九州東部では福岡県夜臼遺跡を標式遺跡として夜臼式土器が型式設定されている。この型式の形態としては，精製土器である浅鉢形土器や小型の壺形土器，粗製土器である深鉢形土器があり，また，北九州を中心にしてこの土器型式の時期の水田の存在も確認されているなど，弥生時代起源論においても鍵を握る土器型式と見なされている。

堂園遺跡では，１点の土器を認めた。図示した深鉢形土器の破片がそれである。その出土位置は，谷部上位にある（**第39図**）。部位は,口縁部である。口唇部の下に横走する刻目突帯が貼り付けられている。

型式不明の土器（第40図２～５）

胎土や器面の調整の特徴によって，晩期に位置付けられる土器が出土している。いずれも，無文部であるために，明確に型式を特定できる資料ではない。出土位置ごとに点数は，谷部上位で４点，尾根部で１点である（**第39図**）。図示したものは，その中の４点である。いずれも胴部の破片である。この中，２の資料については，前記「黒川式土器」の部分で，黒川式土器に類似した器面の色調や調整の特徴を示すとして，紹介している。

５．まとめ

堂園遺跡の縄文時代の資料の中で，早期の資料はもっとも充実している。こうした資料にまじって，中期や後期や晩期に属する土器も出土した。もう一度，これらを取り上げて，その意味するところを整理してみたい。

【地形】この報告書で図示している調査区の等高線は，アカホヤ火山灰の上面で作成したものである。こうした調査区の等高線からは，調査区において尾根部の存在と谷部が存在していることを読み取れる。それは，縄文時代早期の所でも指摘している点である。尾根部は，調査区の南側に認められる。その平坦部は，幅13mから幅２mで，それは，北東方向に延びている。そして，谷部は，この尾根から北に開く。

ところで，堂園遺跡の縄文時代早期にあっては，この地形的な特徴に左右されて，遺構や土器分布が見られることを指摘した。例えば，集石は，尾根部の北側の縁に見られる。土器分布は，尾根部周辺の主分布域と，原位置からの浮動・拡散によって形成された谷部の分布域によって構成されている。こうした特徴を縄文時代の早期の遺構や遺物は，示しているのである。

中期・後期・晩期の遺物は，その量の僅少さ故に，その偏在の傾向を認識することはなかなか困難である。そうした中から，それぞれの時期の遺物の出土位置を見てみると，中期の土器は，すべて谷部にある。後期の土器は，尾根上と谷部で出土している。しかし，谷部上位での出土量の方が尾根部に比べて多い。晩期の土器では，一部尾根上に出土地点が見られるとはいえ，そのほとんどは谷部を中心にした場所である。このように，縄文時代の中期・後期・晩期の土器の出土位置は，縄文時代早期の土器の出土位置とは大きく傾向を異にする。これがどのような意味を持つのかは，現状の資料では不明である。しかし，現状の資料で見る限り，早期のある時期にこの地で生活を営んでいた縄文時代人の土地利用と，中期・後期・晩期の縄文時代人の土地利用とは明らかに異なっていたことが予想される。

【土器】中期の土器では，船元式土器・阿高式系土器が検出された。後期の土器では，御手洗ａ式土器・沈線文の土器・太郎迫式土器が，晩期の土器では黒川式土器や刻目突帯文土器が検出された。遺物量に比べて型式の数も多く，その結果，型式ごとの量はさらに僅少となっている。このように資料的には限られており，それ故にこうした土器を明確に意義付けることは困難である。

なお，石器として，後期に比定される打製石斧や円盤状石器も出土している。これについては次節で紹介することにしよう。

第３節　縄文時代の石器とその分布

１．はじめに

石器関係の資料は，地点が明確になっているもので，63点が出土した。その内訳は，石鏃５点（内，１点は出土地点不明），削器３点（内，１点は出土地点不明），楔形石器２点，石錘１点，打製石斧及びその関係資料８点，礫器３点，円盤状石器２点，磨石・敲石５点，石皿・台石１点，二次加工ある不定形石器４点，使用痕ある剥片２点，石核７点，分割礫８点，剥片・砕片19点である。

堂園遺跡の縄文時代の遺物では，これらの遺物が層の中から出土する状況が芳しくないということから，早期の土器と中期以降の土器が明確に分離されずに検出されることが目立った。そのために，土器とは異なり，単体ではその所属する時期がなかなか明確でない石器については，整理・報告書作成段階で，これらを時期ごとに分離することが不可能であった。そのために，今回は，時期を限定せず，あえて，石器のみの節を設けたのである。

その分布は，縄文時代早期の土器の分布傾向に似て，尾根部周辺にまとまるものと，谷部に広がるものがある（**第41図**）。そこで，それぞれの器種ごとに，その分布と特徴について見ていくことにしよう。また，時期が限定できるものについては，それぞれの項目の中で明記していこう。

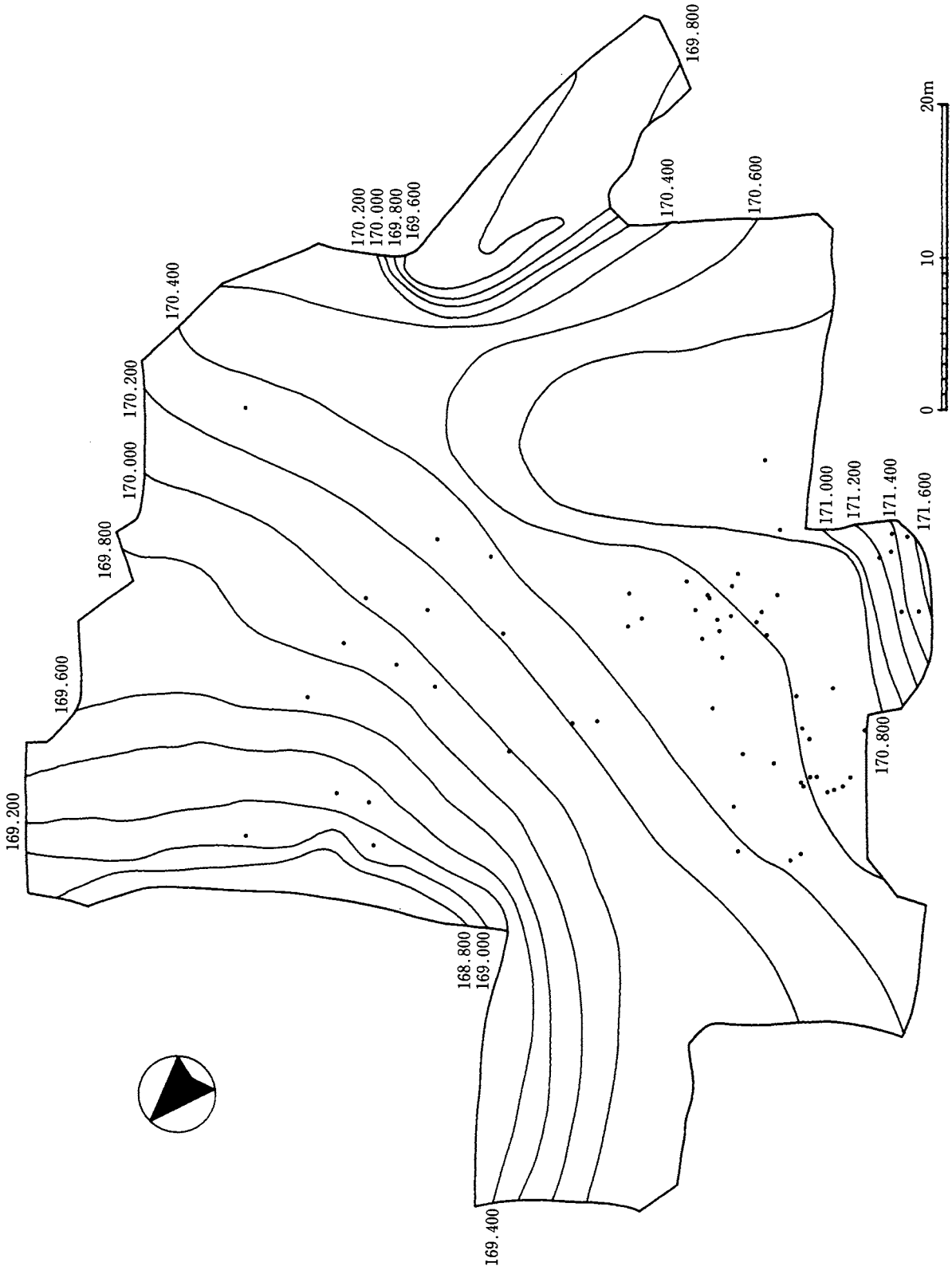
２．石器とその分布

①石鏃（第44図１～５）

石鏃は，５点が出土した。その出土地点は，３点が尾根部周辺で，１点が谷部である（**第42図**）。また，１点については，出土地点が不明であった。

使用石材では黒曜石１点，安山岩１点，チャート３点である。重量では，2.7g を最大にし，0.9g を最小にしている。

私は，早期に属する石鏃について，大きく六つの類型に分類したことがあった（木崎1986，1987）。それは，まず，大きく正三角形と二等辺三角形に分け，前者をＡ類とし，後者をＢ類とする基準でおこなった。また，それぞれ平基式のものをⅠ類，凹


169.800
170.200
170.000
169.800
169.600
170.400
170.600
170.400
170.200
170.000
169.800
169.600
169.200
168.800
169.000
169.400
171.000
171.200
171.400
171.600
170.800
0
10
20m

第41図　石器分布図

基式のものをⅡ類，U字状凹基式のものをⅢ類とした。つまり，整理すると，A類には，AⅠ類の平基式正三角形石鏃，AⅡ類の凹基式正三角形石鏃，AⅢ類のU字状凹基式正三角形石鏃がある。B類には，BⅠ類の平基式二等辺三角形石鏃，BⅡ類の凹基式二等辺三角形石鏃，BⅢ類のU字状凹基式二等辺三角形石鏃である。

そこで，堂園遺跡で出土した石鏃について，その形態を見ていくことにしよう。

A類に属する正三角形石鏃は，検出されていない。5点とも，B類に属する二等辺三角形石鏃である。1は，凹基式である。所属する細分形態は，BⅡ類の凹基式二等辺三角形石鏃である。2も同様に，BⅡ類の凹基式二等辺三角形石鏃であるが，やや器長が短い。3もBⅡ類の凹基式二等辺三角形石鏃であるが，やや抉入が強い。この抉入が強い石鏃で，BⅡ類の凹基式二等辺三角形石鏃のものは5である。そして，4は，BⅢ類のU字状凹基式二等辺三角形石鏃にあたっている。

②削器（第44図6～8）

剥片の側縁部に，連続した加工を施して作られた刃部が見られる石器である。出土点数は，3点である。その分布は，尾根部周辺から外れた北と南側の谷近くにある（第44図）。

6は，大型の削器である。横長剥片が素材となり，幅が広い剥片の先端部の表裏両面に連続した加工が観察される。チャート製である。

7は，円刃となる刃部を持つ削器である。素材となる剥片は，縦に長い剥片であり，その先端部と両側縁に調整加工がめぐる。チャート製である。

8は，基部つまみ部のみの資料である。基部先端部と両側縁に抉入状の加工が見られる。全体の形状は，不明である。チャート製である。

③楔形石器（第44図9・10）

平面形状としては，四角形を基本にして，多角形のものも存在し，向かいあった辺の側縁部に，対向する階段状の剥離痕跡が観察される石器を，楔形石器とする。出土点数は，2点である。その出土位置は，尾根部周辺である（第43図）。

使用石材は，いずれも黒曜石である。

9は，平面形が五角形を呈する石器である。上端には平坦面が見られてその縁辺に微細な剥離痕が観察され，下端には上端に対向するかたちで微細な剥離痕跡が見られる。10は，平面形が平行四辺形を呈する石器である。上端には平坦部が見られ，下端には微細な剥離痕跡が観察される。

④石錘（第44図11）

出土した石錘は，網の錘となすために，紐掛け用の浅い窪みを，偏平礫の両端に敲打を加えて作った石器である。これを，礫石錘と呼ぶ。

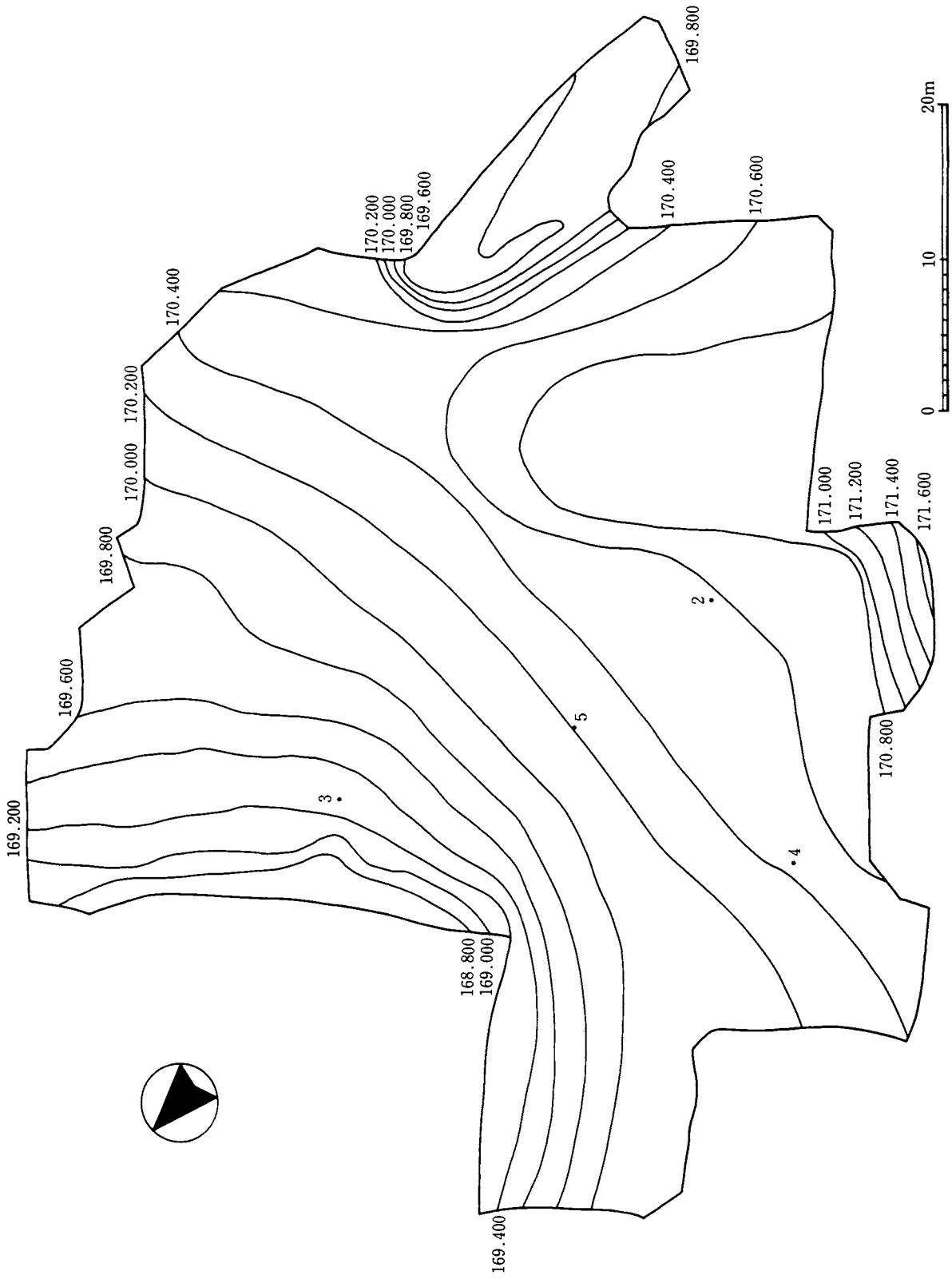
礫石錘は，1点が出土した。出土地点は，尾根部である（第43図）。石材は，頁岩である。重さ100gを計る。

⑤打製石斧（第47図12～14）・その関連資料（第48図15～第50図19）

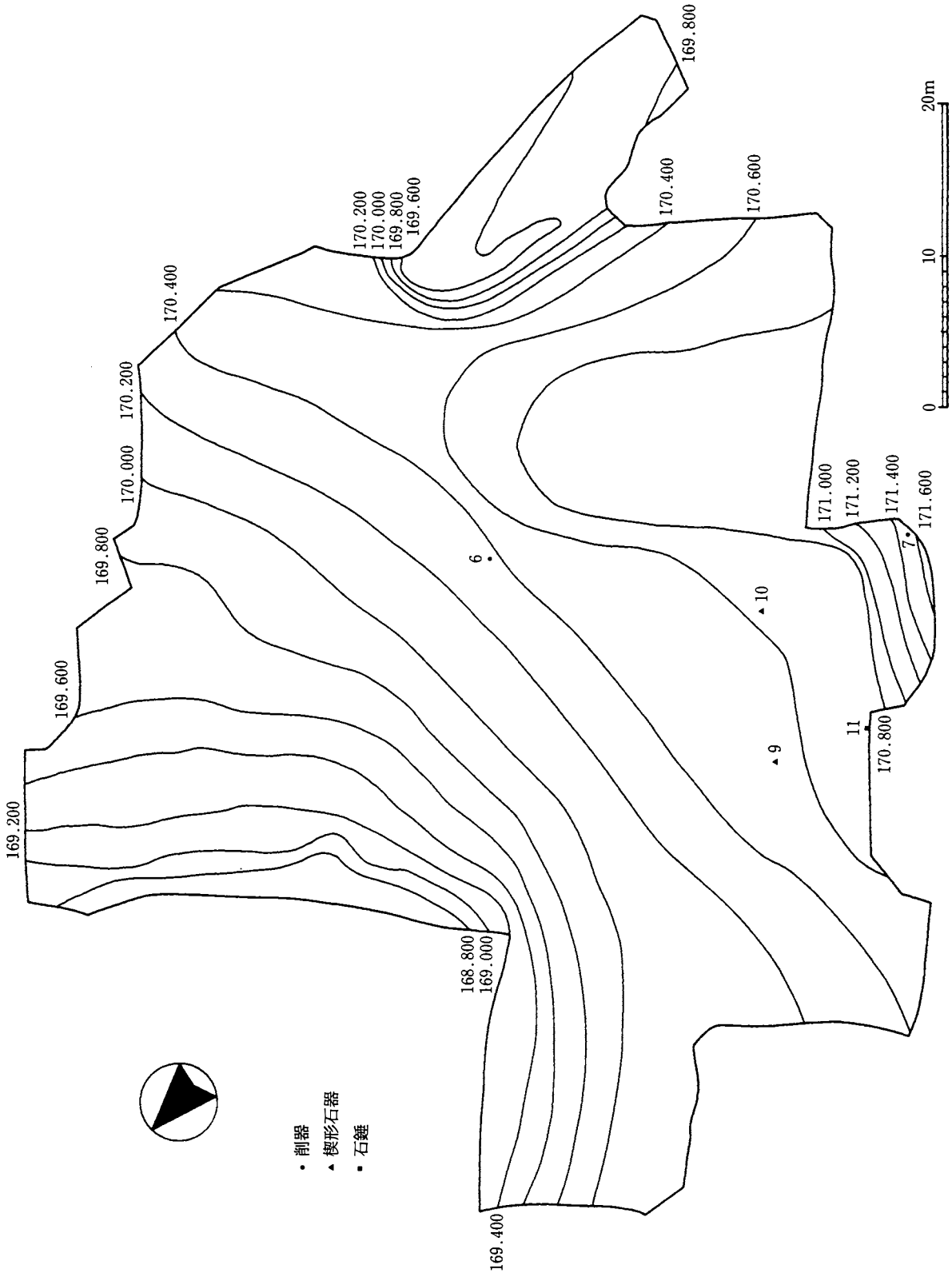
出土点数は，打製石斧3点，その関連資料5点である。その出土地点は，尾根部周辺と谷部にある（第45図）。谷部での出土例が多いことと，縄文時代後期や晩期の土器が谷部で多く出土していることとは，何らかの関連が見られるものと思われる。使用石材は，すべて砂岩である。

打製石斧は，短冊形と撥形と呼ばれる形状の石器である。12は，両側縁がやや弧状を呈し，刃部も円刃，基部も円基である。これにより，全体の形状が長楕円形を呈することになる。13は，両側縁が直線的で，やや刃部に向かって幅を広げている。基部は，直線的で，刃部は円刃である。形状は，撥形を呈している。14は欠損品のため，全体の形状が不明な資料である。現状で判断すれば，正方形に近い形状を考えることができる。その点では，円盤状石器に近いものと言える。

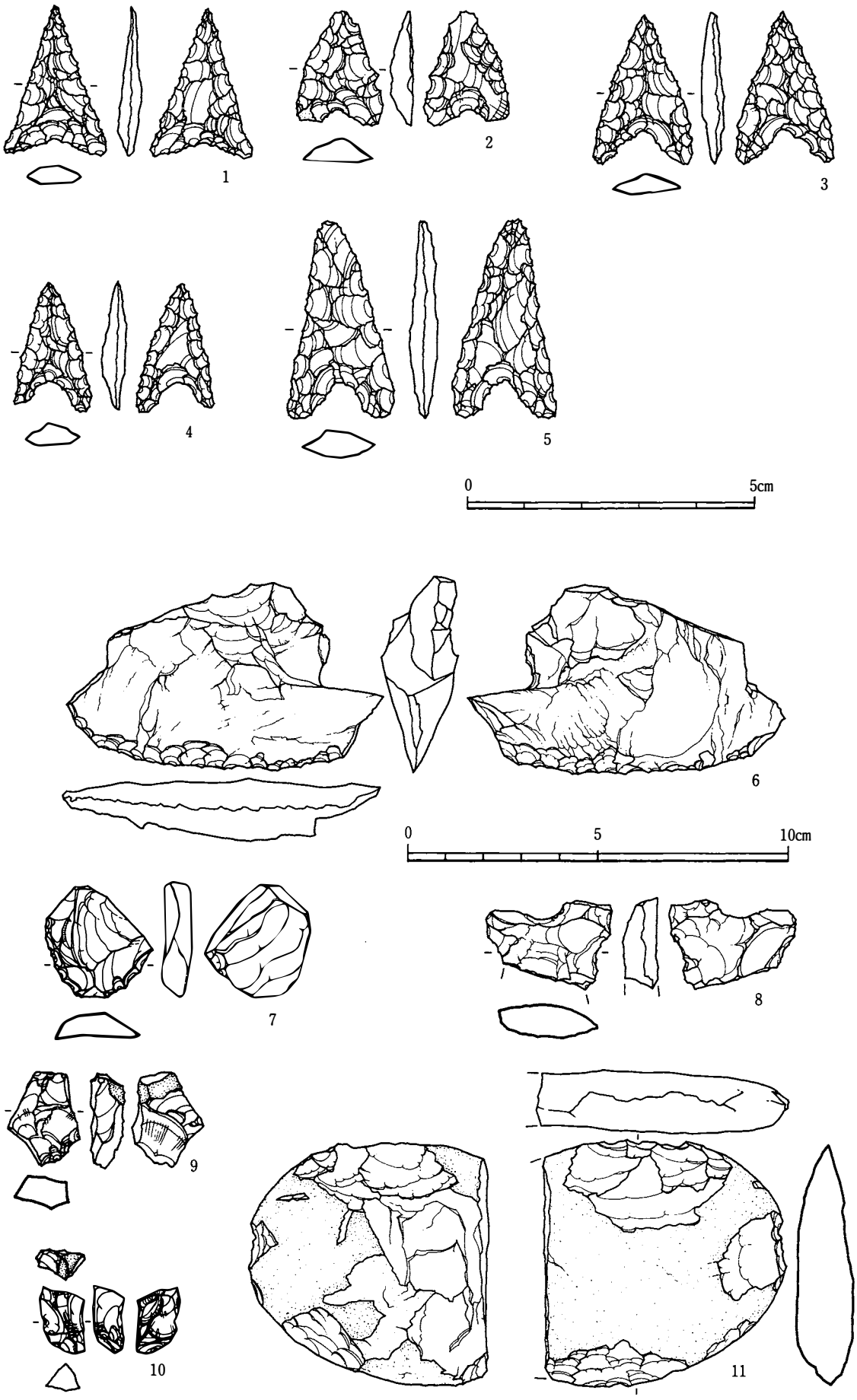
打製石斧の関連資料では，完成まじかの未加工品1点（15），加工途次の未加工品（16～19）がある。15は，刃部と基部に調整加工が施されれば十分に製品となる資料である。その未加工品で終わった理由は，右側縁下半部に見られる裏面の大きな剥離の存在だろう。側縁加工途中に，この剥離が発生したために，製作中断がおこったものと想像される。16は表面に礫面を残して，裏面に調整加工を施した石器である。基部側と刃部側に調整加工が見られる。礫


169.800
170.200
170.000
169.800
169.600
170.400
170.600
170.400
170.200
170.000
169.800
169.600
169.200
171.000
171.200
171.400
171.600
170.800
168.800
169.000
169.400
2
3
4
5
0
10
20m

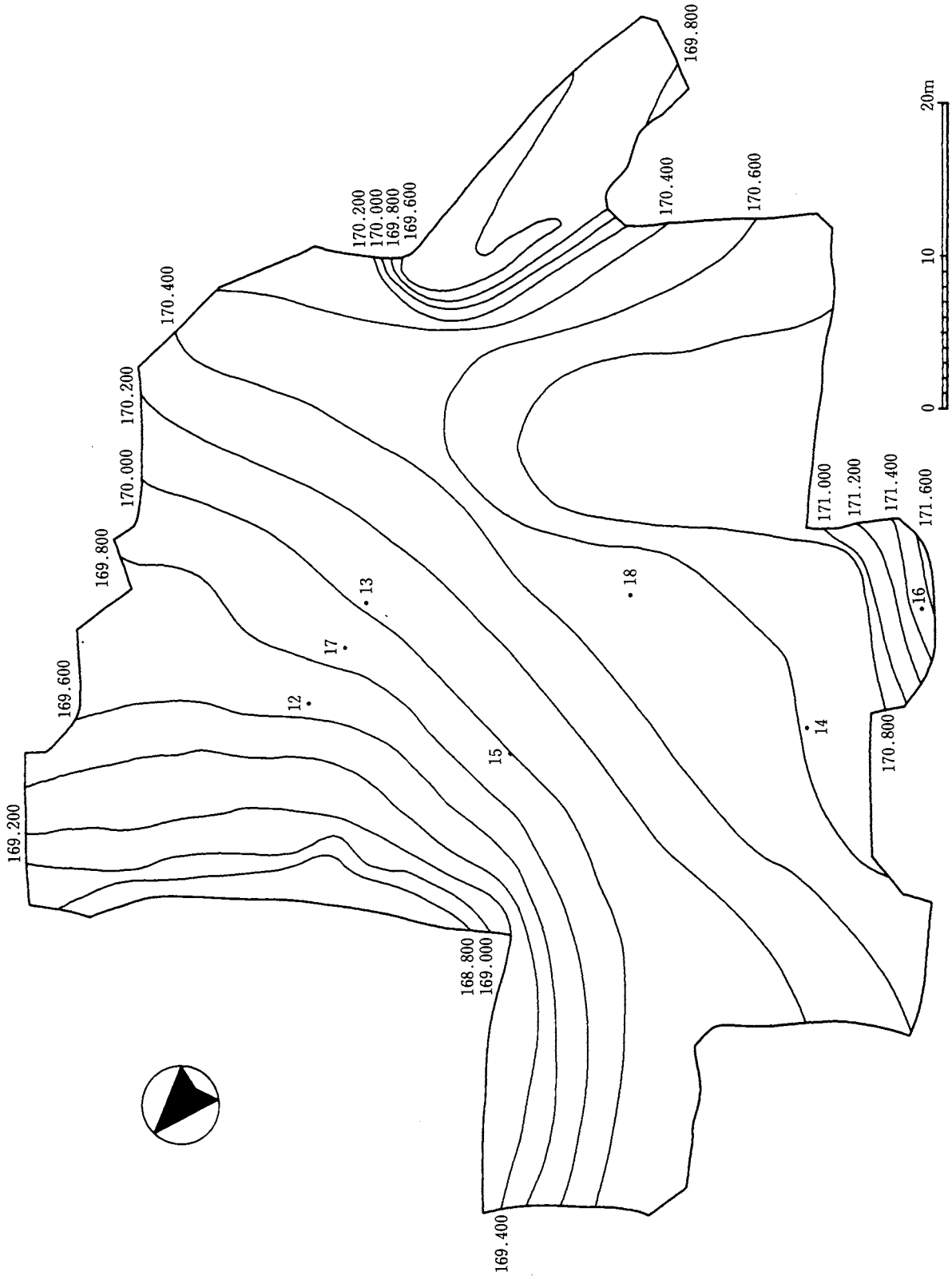
第42図　石鏃分布図



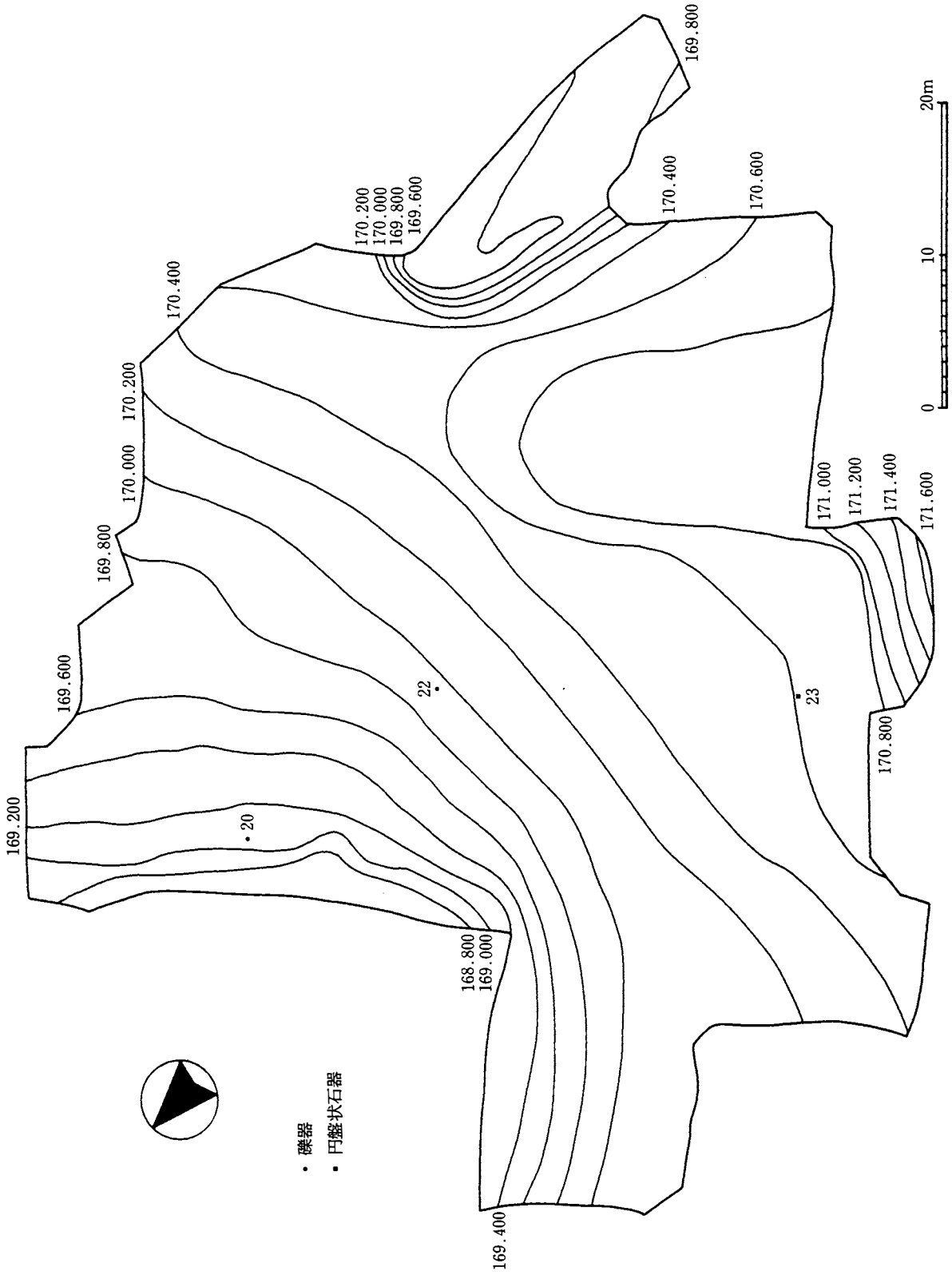
第43図　削器・楔形石器・石錘分布図



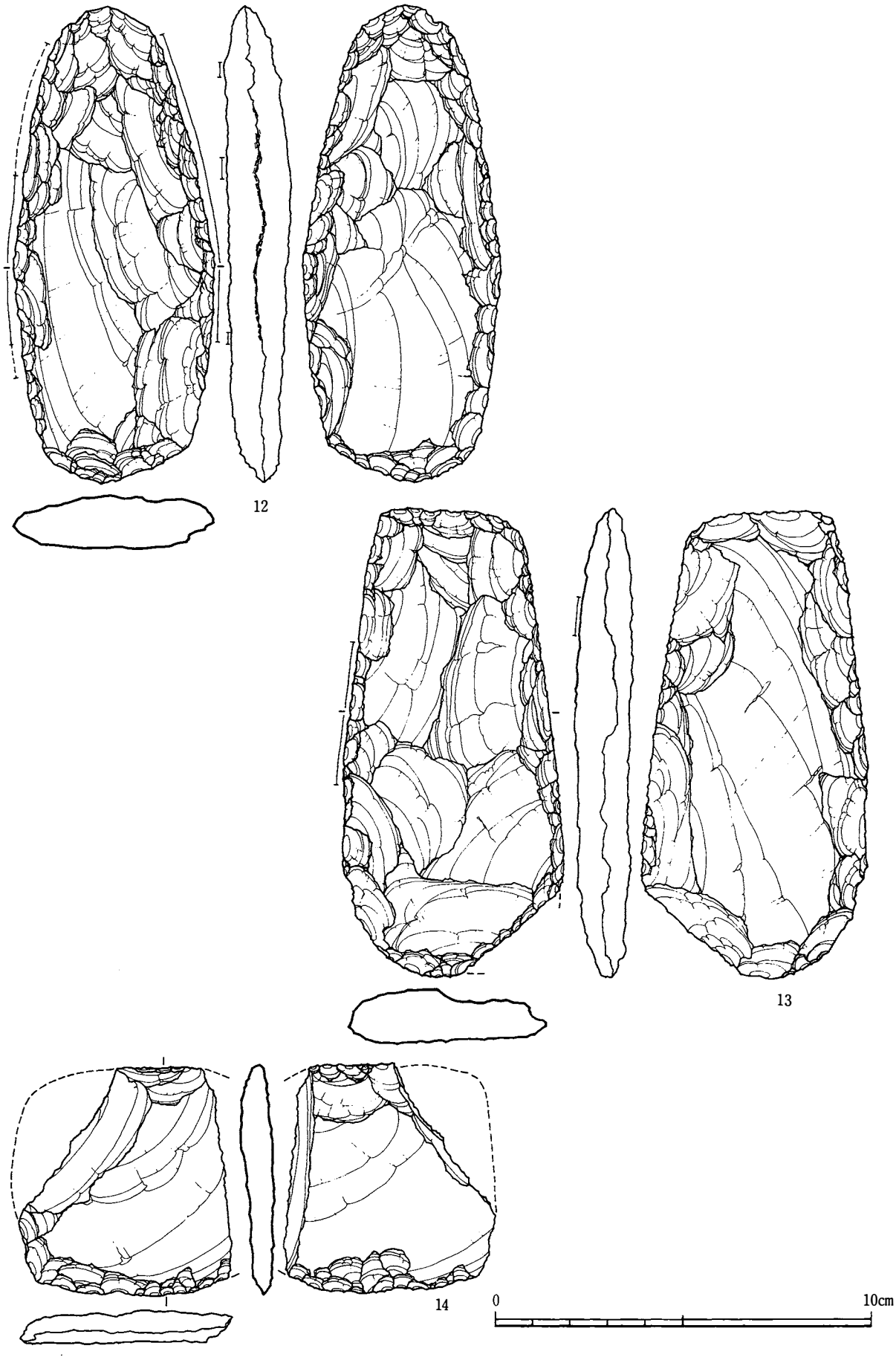
第44図　石鏃・削器・楔形石器・石錘実測図



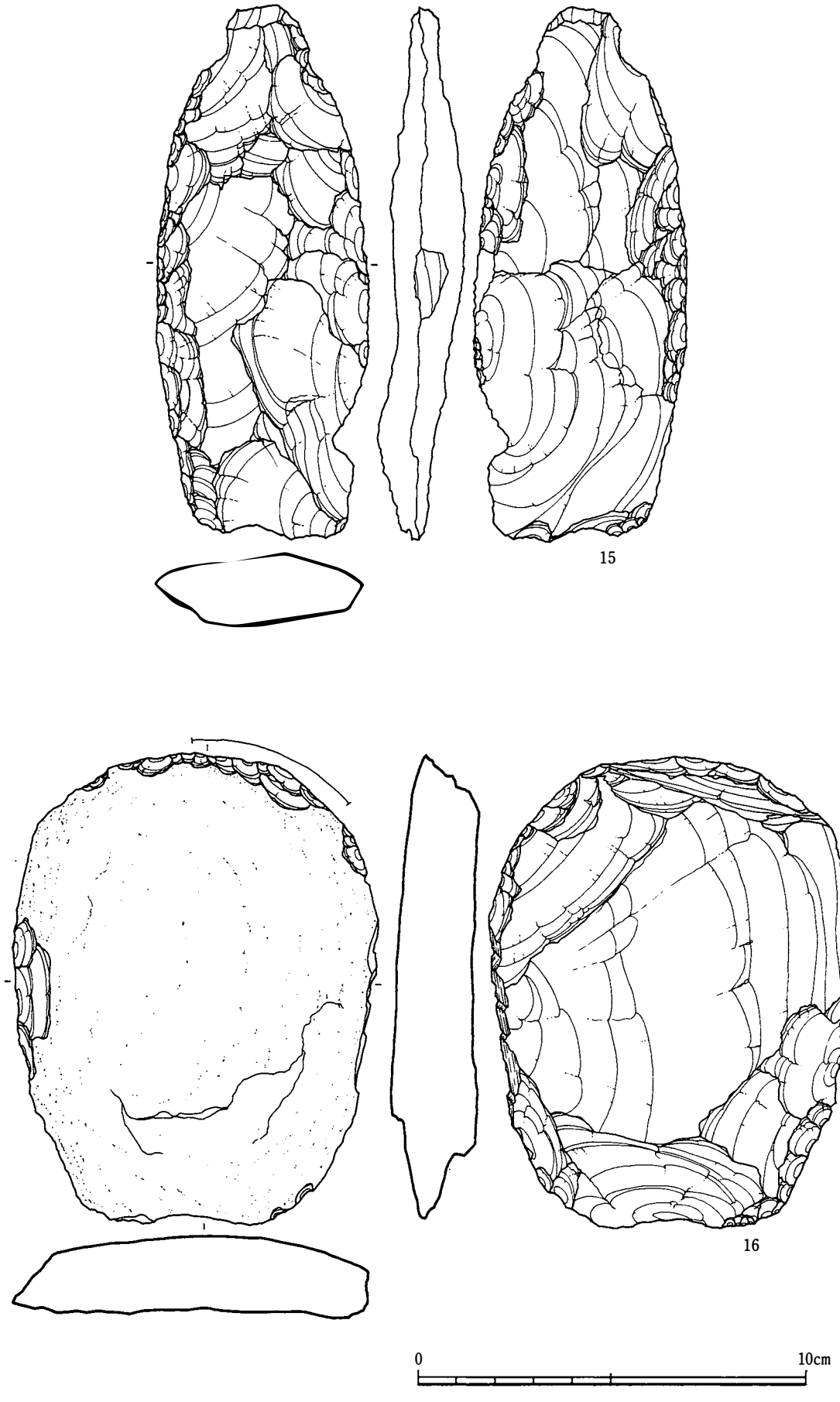
第45図　打製石斧分布図



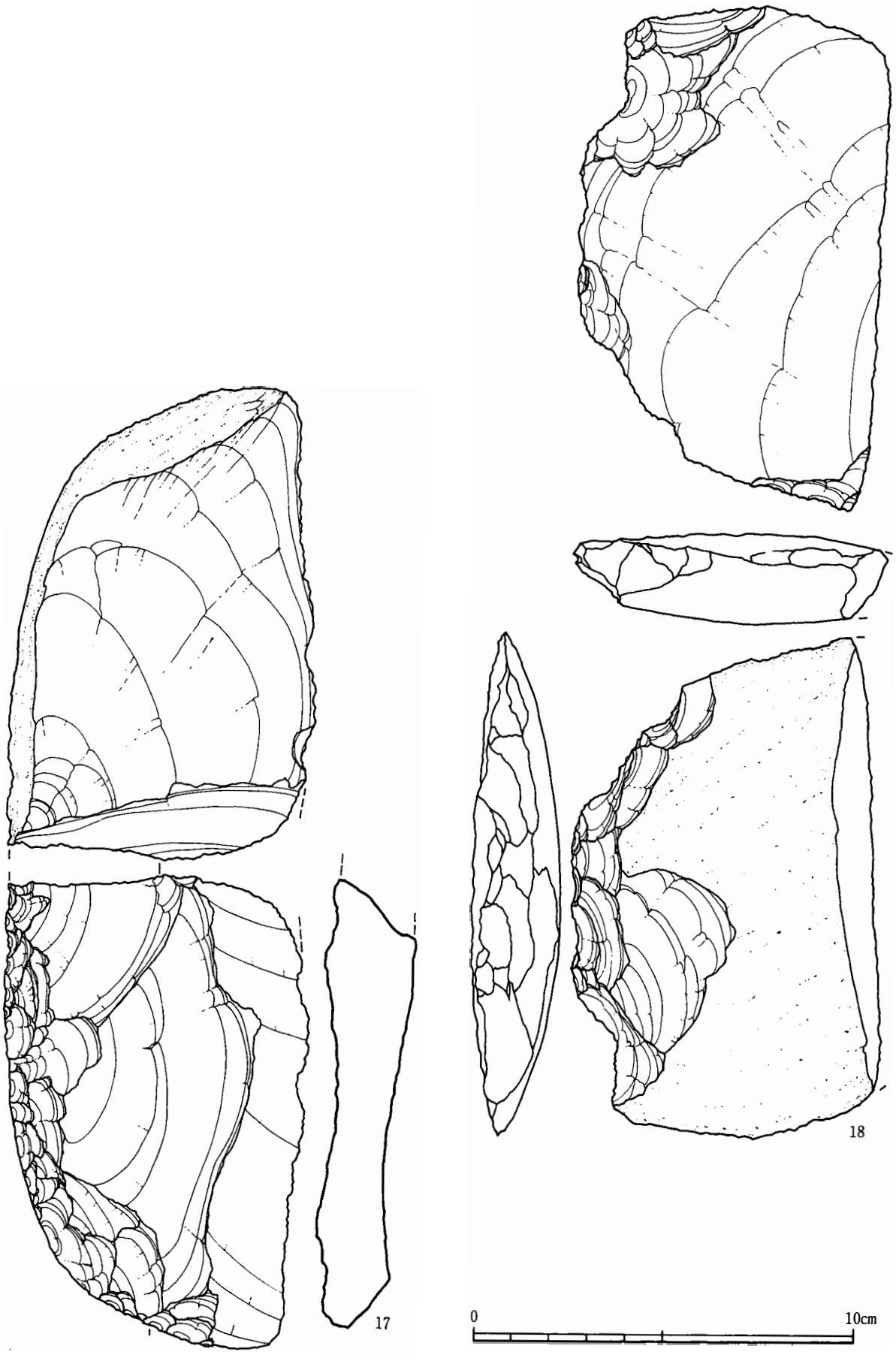
第46図　礫器・円盤状石器分布図



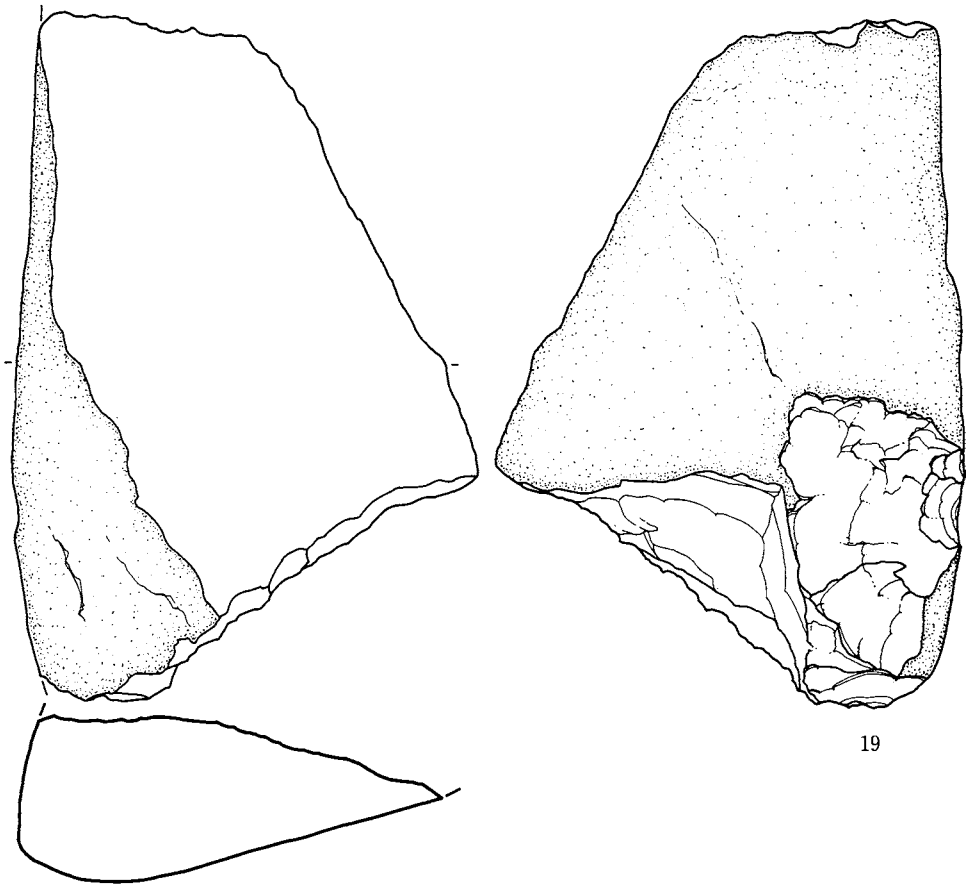
第47図　打製石斧実測図

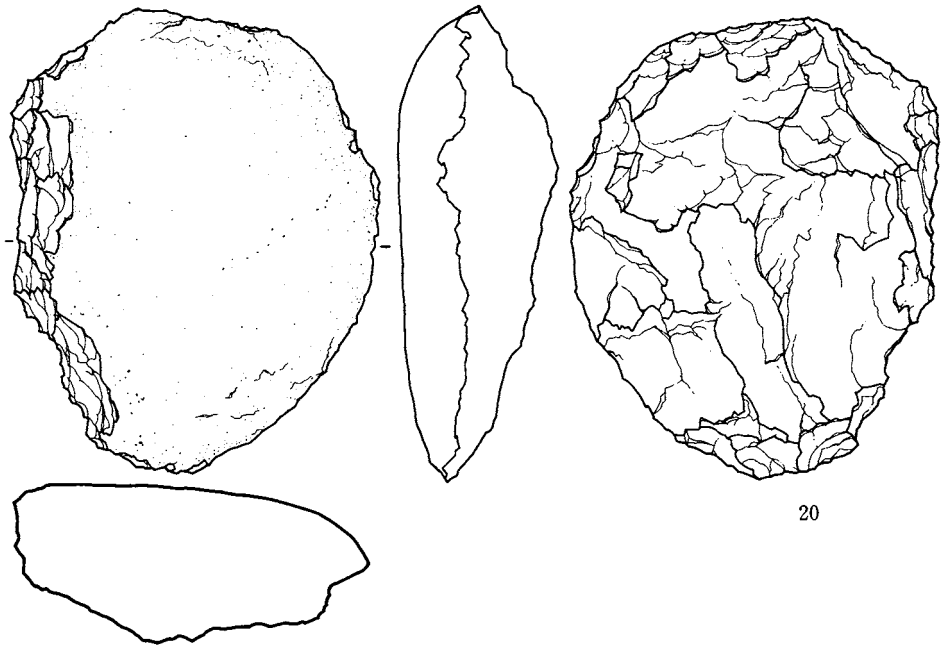


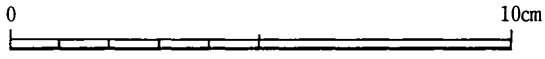
第48図　打製石斧実測図



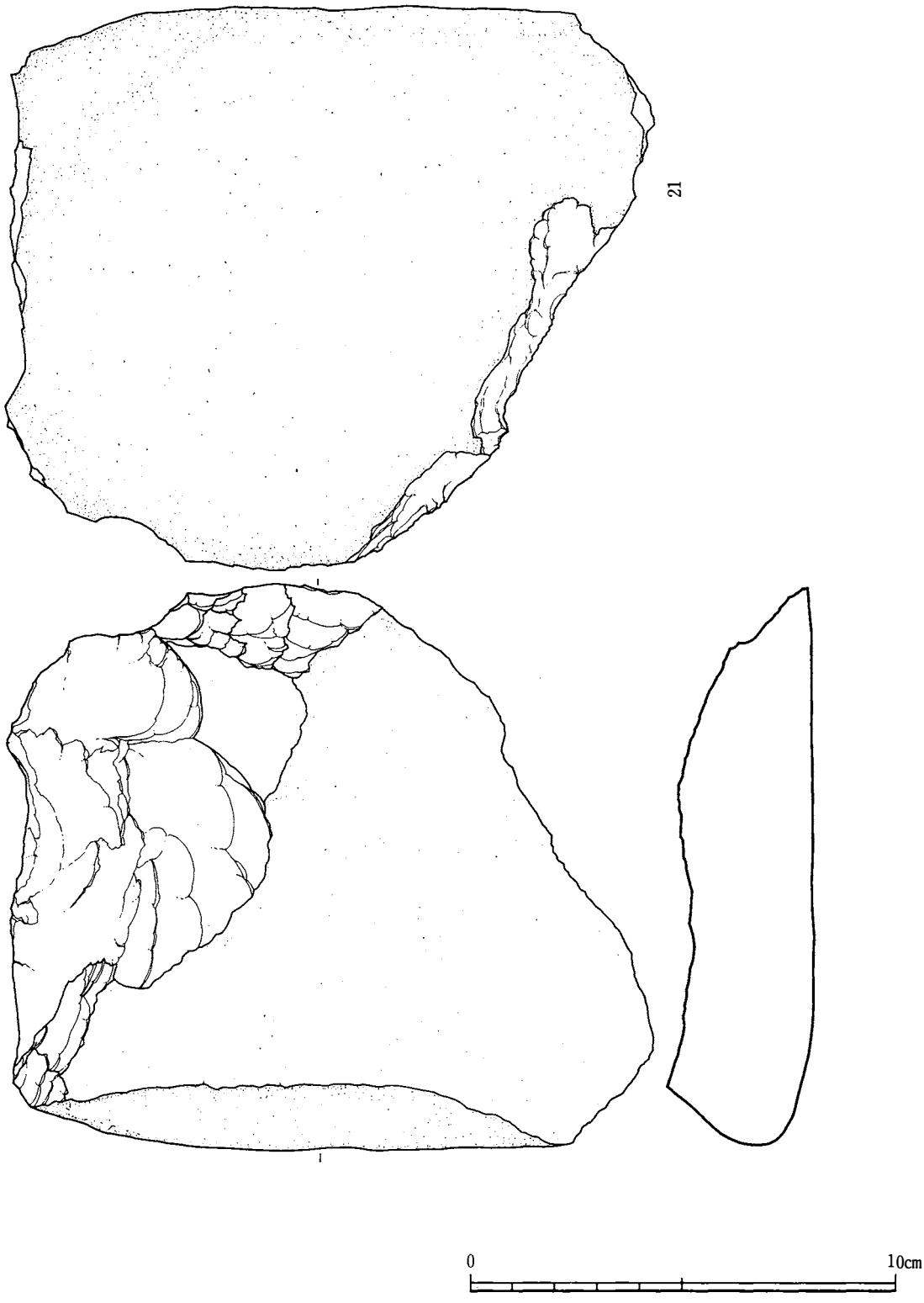
第49図　打製石斧実測図



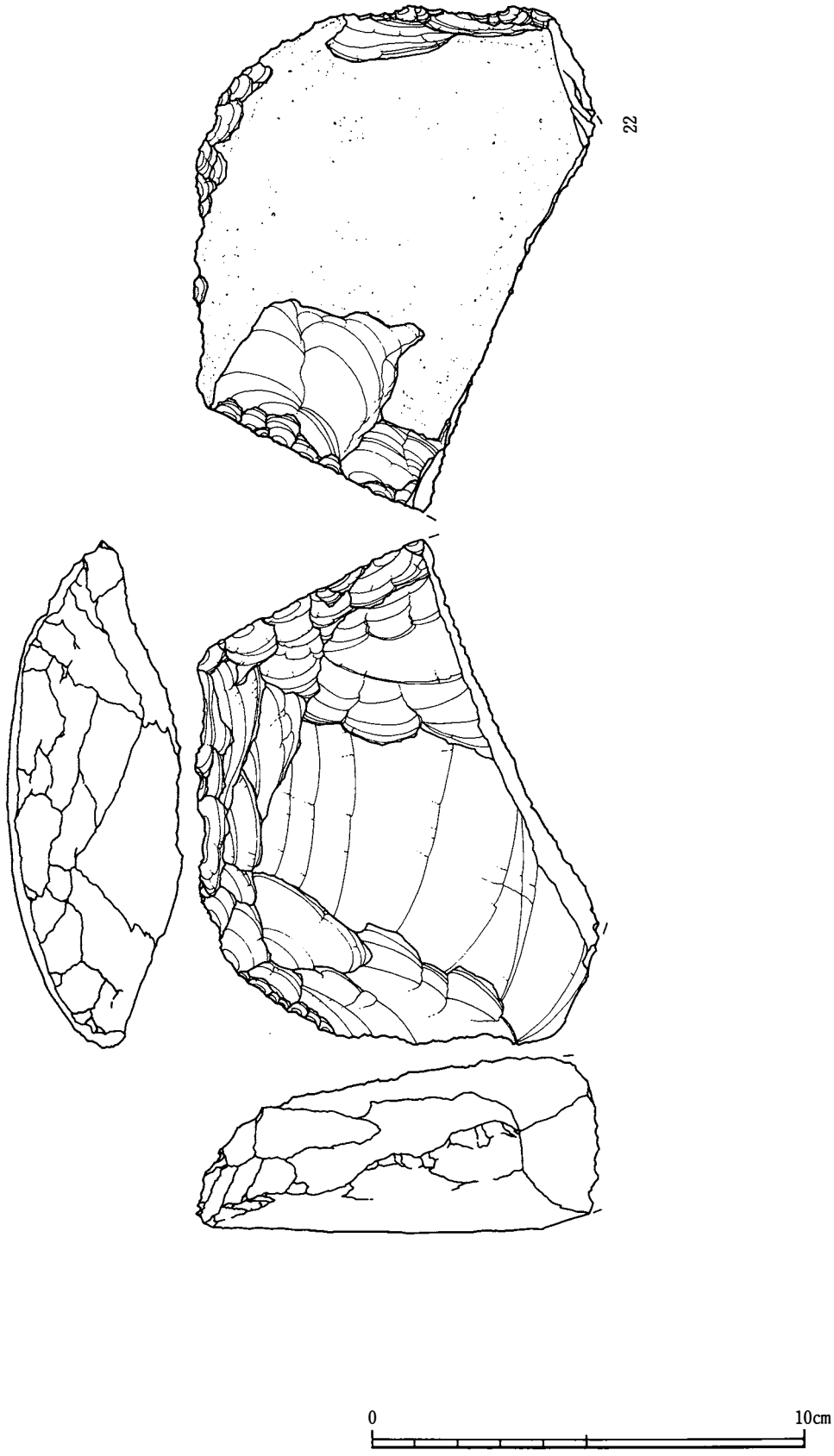




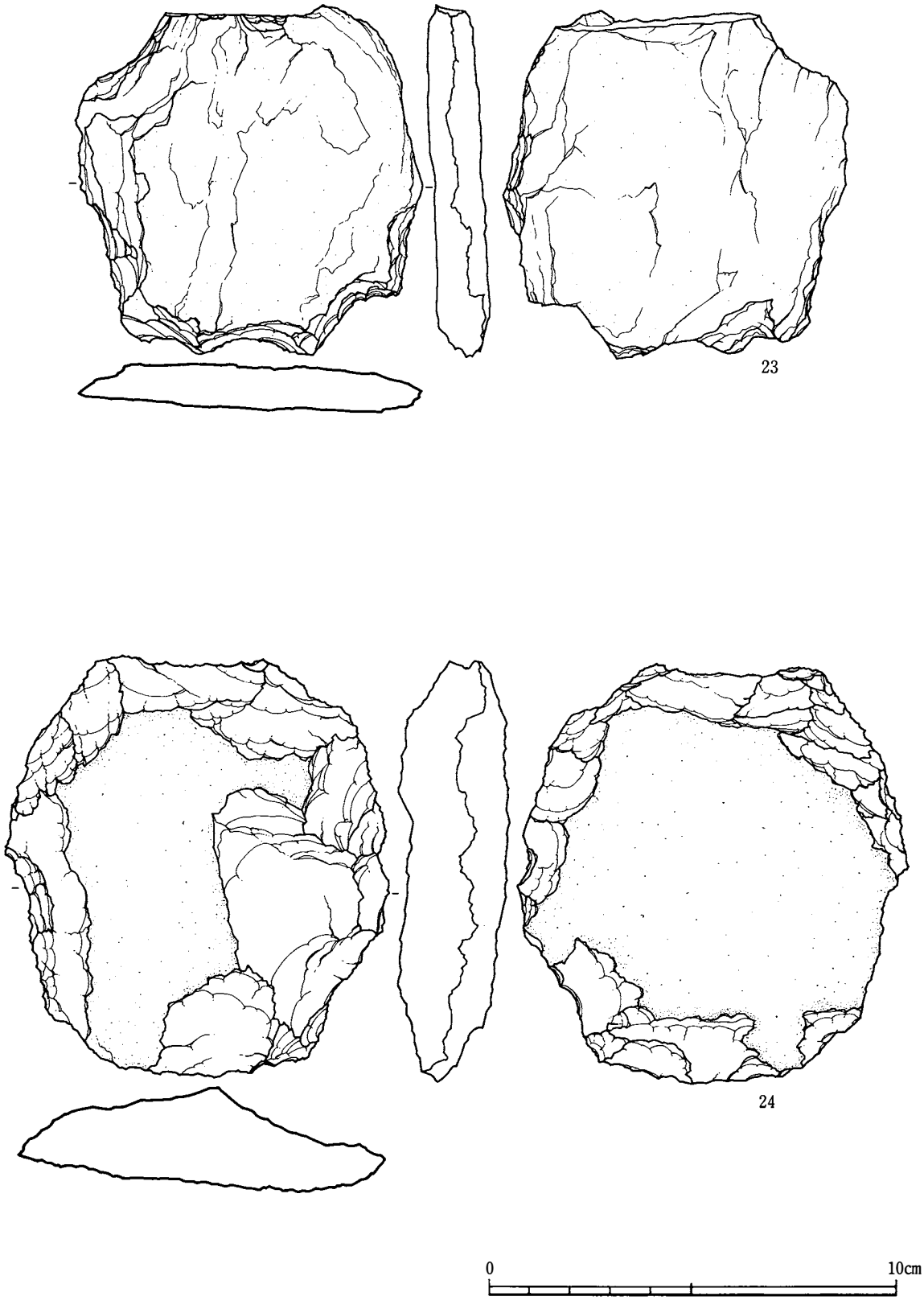
第50図　打製石斧・礫器実測図



第51図　礫器実測図



第52図　礫器実測図



第53図　円盤状石器実測図

器とも考えられるが，薄手であるということから，加工途次の未加工品と判断した。素材となる剥片は，横長剥片である。**17～19**は，偏平な大型の石片である。いずれも一部に調整加工が見られる資料である。全体の形状と調整加工の状況から加工途次の未加工品と判断した。いずれも，素材となる剥片は，横長剥片である。

⑥礫器（第50図20～第52図22）

打製石斧の関連資料との差については，明確ではないが，大きさに対して厚手のものを，礫器として取り扱った。したがって，打製石斧の関連資料との峻別は不明な点が多い。出土地点は，谷部である(**第46図**)。石材は,**20**が安山岩で,**21**と**22**が砂岩である。

20は楕円形を呈するもので，両刃である。表面には，礫面が残る。**22**は，表裏面に礫面を残すもので，片刃である。大型品で，重さは，775g を計る。石核の可能性も高い。**23**は，礫器とした資料の中で，もっとも丁寧な加工が見られる石器である。片刃である。

⑦円盤状石器（第53図23・24）

円盤状石器は，２点が検出されている。出土地点が明らかなのは，１点（**23**）で，尾根部近くにあった（**第46図**)。**23**は，片岩製である。素材は，板状剥落石片である。縁辺の一端は，鋸歯状を呈し，それに対向する辺には微細な剥落痕跡が観察される。重さは，110g である。**24**は，砂岩製である。素材は，板状石片である。縁辺をめぐって調整加工が施されている。重さは，265g である。

⑧磨石・敲石（第55図25～第56図29）

磨石・敲石は，５点が検出されている。出土地点は，いずれも尾根部周辺にあたっている（**第54図**)。その出土地点からは，この石器が縄文時代早期に属する可能性が高いをことを窺える。

形状では,大きく二つの種類がある。一つは,円形ないし楕円形を呈するもの（**第55図25～第56図28**）である。もう一つは，棒状を呈するもの(**第56図29**)である。

円形ないし楕円形を呈する磨石・敲石は，４点である。使用石材は，安山岩３点，砂岩１点である。表面ないし側面に敲打痕がみられるものもある。重さは,**25**が560g，**26**が280g，**27**が450g，**28**が770g である。

棒状の磨石・敲石は，１点である。下端部に敲打の痕跡が残されている。石材は，砂岩である。重さは，225g である。

⑨石皿・台石（第56図30）

出土点数は，１点である。その出土位置は，尾根部周辺である（**第54図**)。その出土位置と，対になる磨石・敲石の状況を考慮すれば，この石器が縄文時代早期に属する蓋然性がもっとも高いと言える。使用石材は，砂岩である。欠損品である。作業面は，表裏両面に設けられている。

⑩二次加工ある不定形石器（第58図31～34）

二次加工ある不定形石器は，剥片の側縁の一部に連続しない加工を施したのみで，形状を定めない石器である。出土点数は，４点である。その出土地点は，尾根部周辺と谷部にある（**第57図**)。

石材は，黒曜石２点（**32・33**),チャート２点（**31・32**）である。素材となる剥片は，幅広の剥片や縦長の剥片，そして大型の幅広の剥片が中心であるが，その形状に共通する特徴は見出せない。

⑪使用痕ある剥片（第58図35・36）

剥片の側縁の一部に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察されるものである。２点が出土した。その出土地点は尾根部周辺にある（**第57図**)。

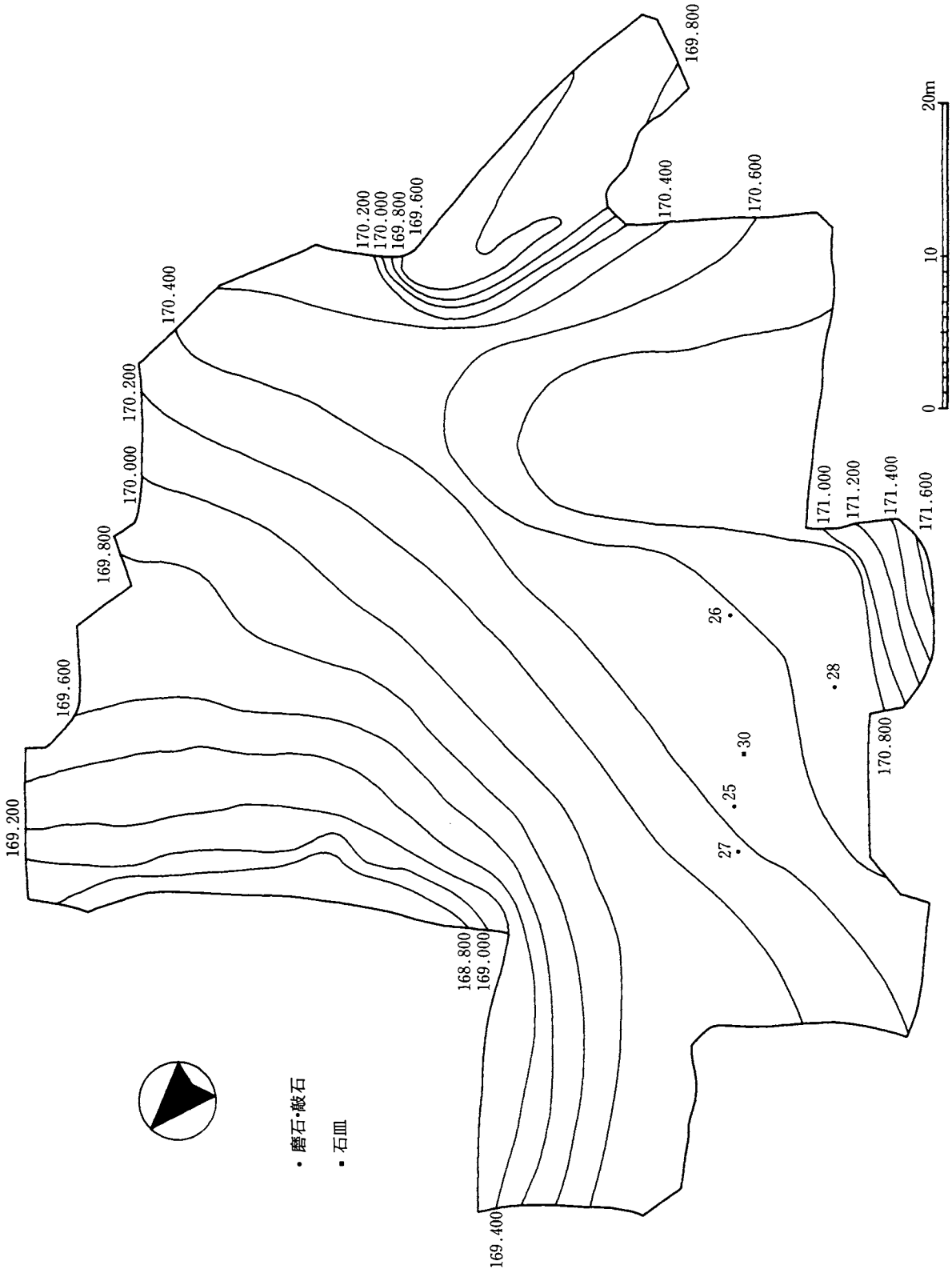
石材はいずれもチャートである。剥片は，縦長剥片である。

⑫石核（第60図37～43）

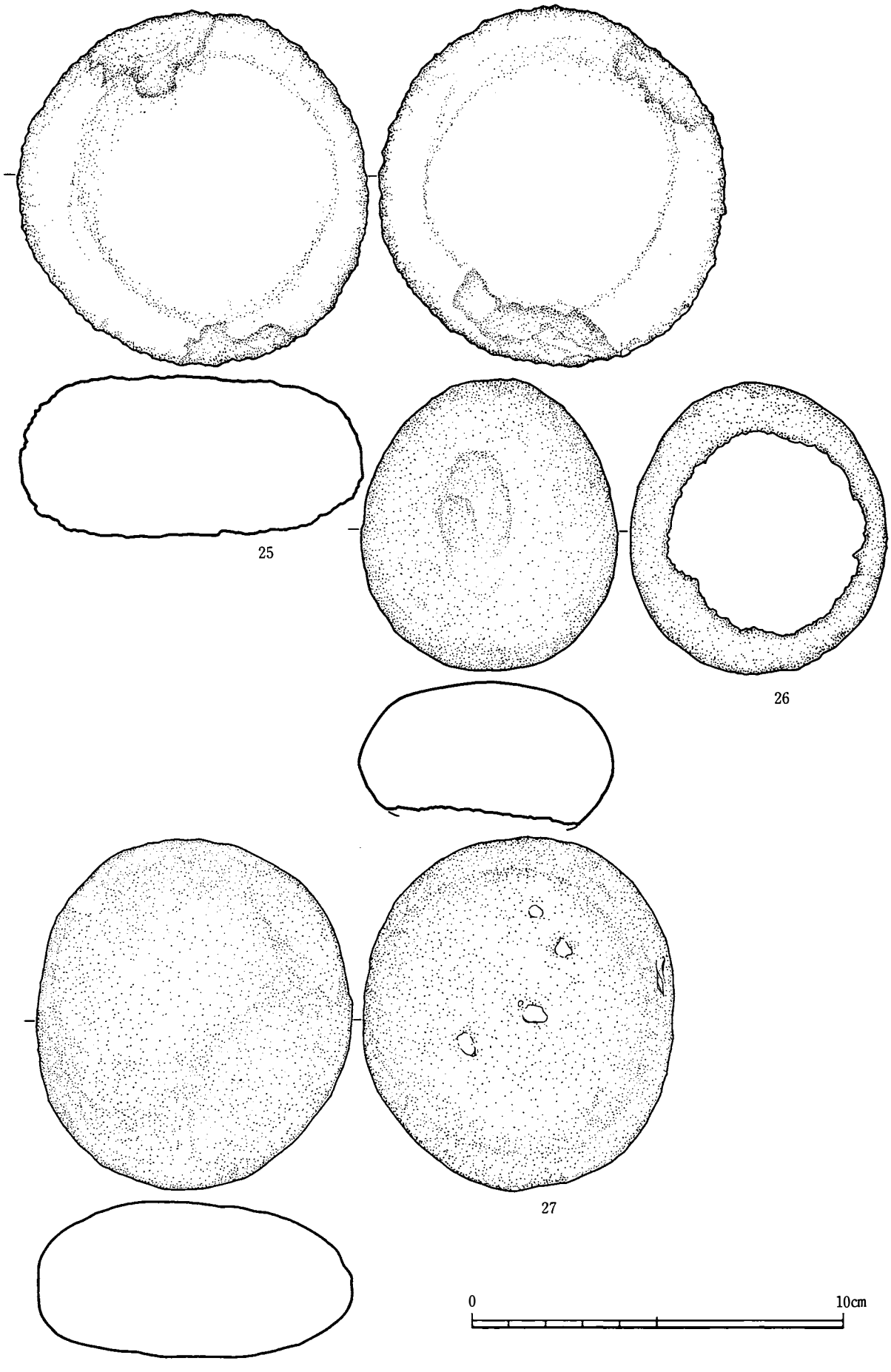
出土点数は，７点である。いずれも剥片や分割礫を素材としたものである。分布は尾根部周辺にある（**第59図**)。その出土状況からは，ほとんどの石核が縄文時代早期に属する可能性が高いことを窺わせる。そこで，以下，狸谷遺跡の縄文時代早期で試みた分類(木崎ほか1985)に従って,出土石核を見ていく。

第１類（第60図39～43）

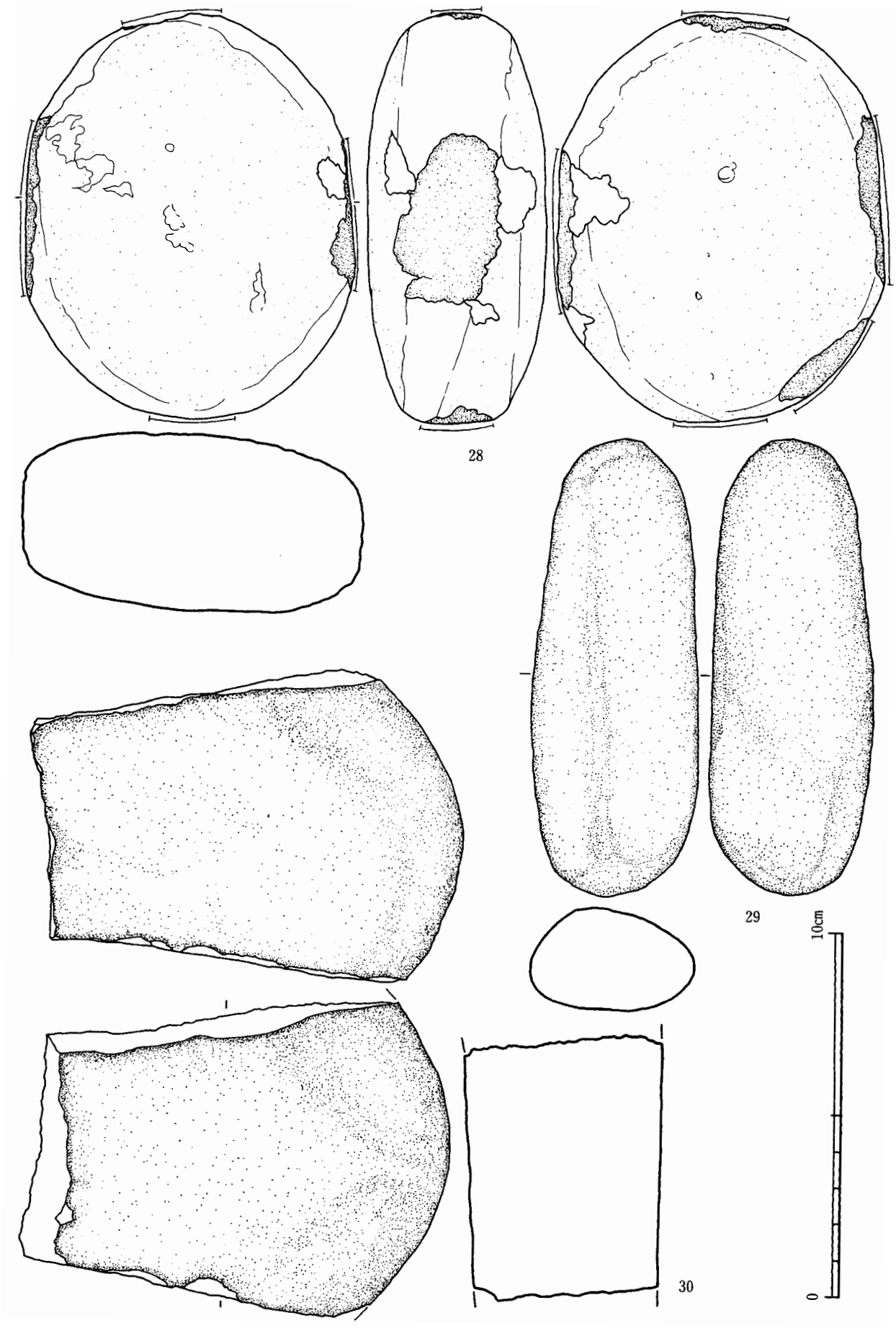
剥片や分割礫を素材とした石核である。剥片剥離は，打面を石核の縁辺に沿って転移していくかたちで進行していく。その結果,石核の表面には求心的な剥離痕が残される。「柏原型石核」(山崎･小畑1983)と呼称され，縄文時代早期を特徴づける石核である。



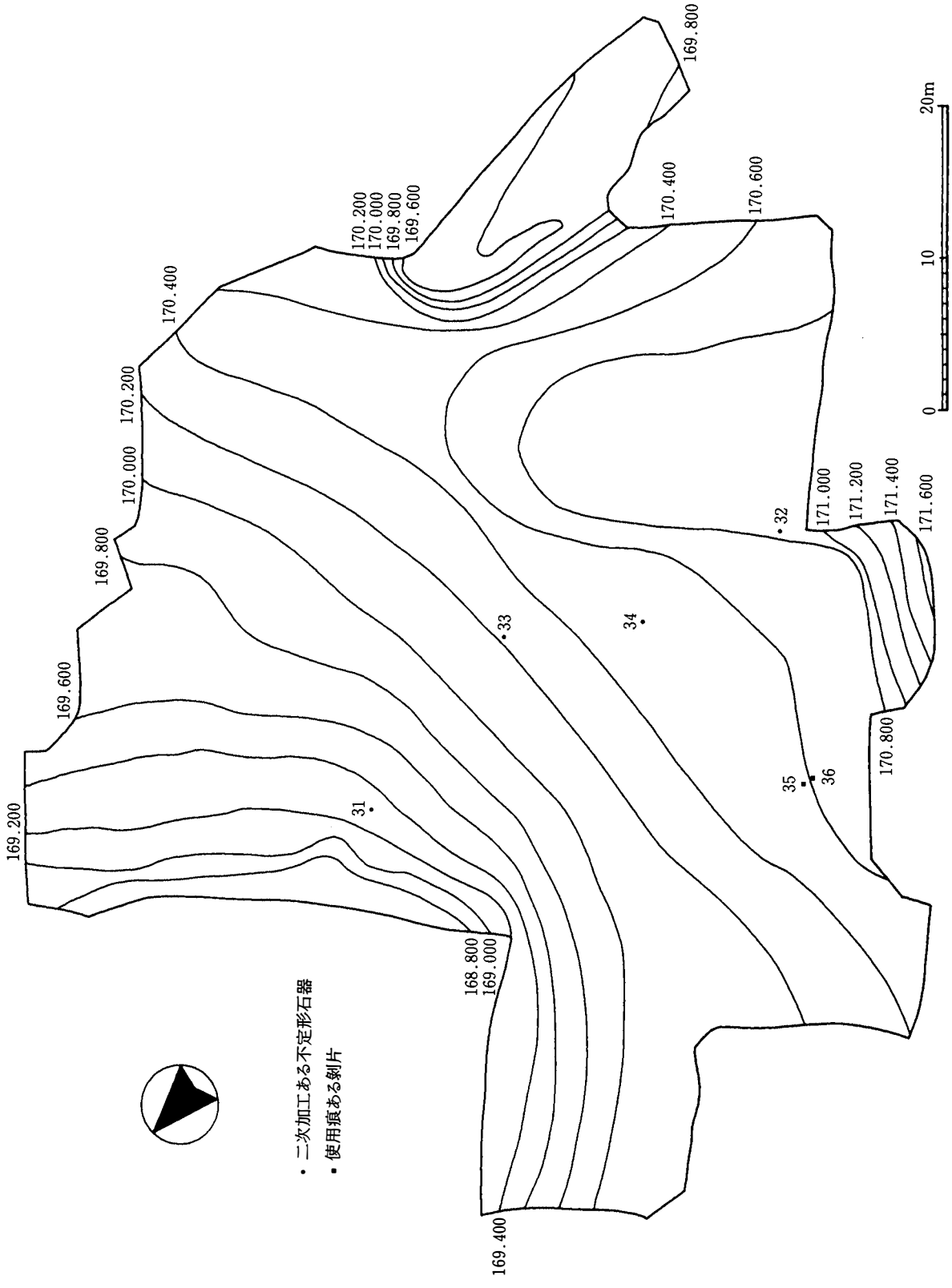
第54図　磨石・敲石・石皿分布図



第55図　磨石・敲石実測図



第56図　磨石・敲石・石皿実測図



第57図　二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片分布図

堂園遺跡で出土した石核の中では，５点が近似している。

第２類（第60図37・38）

偏平な石核である。素材には，剥片と分割礫がある。剥片剥離は，打面の転移を頻繁におこなわずに進行するところに特徴がある。したがって，石核原型の形状は，良く保持される。該当する石核としては，２点が検出されている。

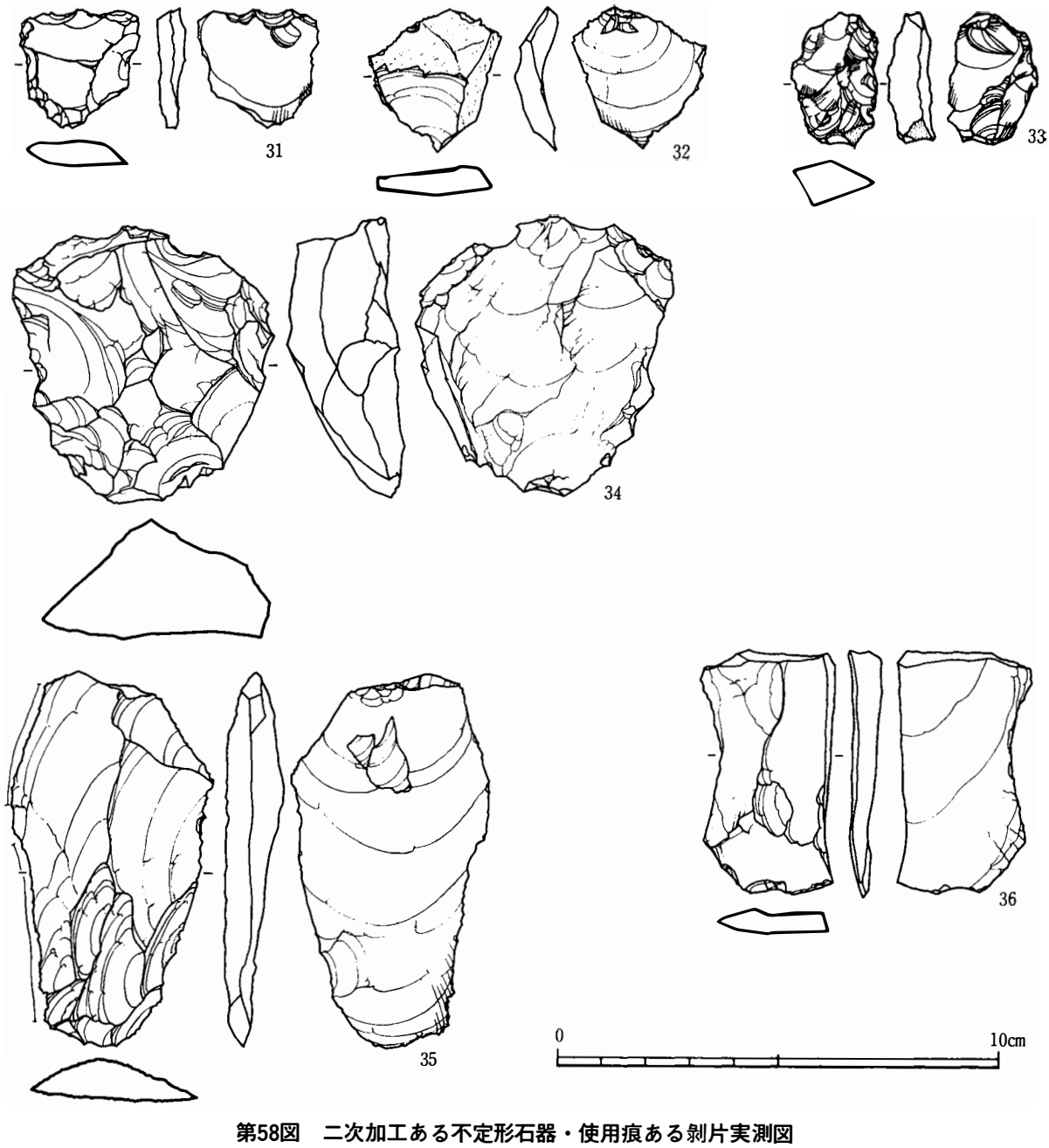
第３類

両刃礫器の刃部作出剥離に似た状態で，剥片剥離が進行していく石核である。この石核に該当する石核は，堂園遺跡では検出されていない。

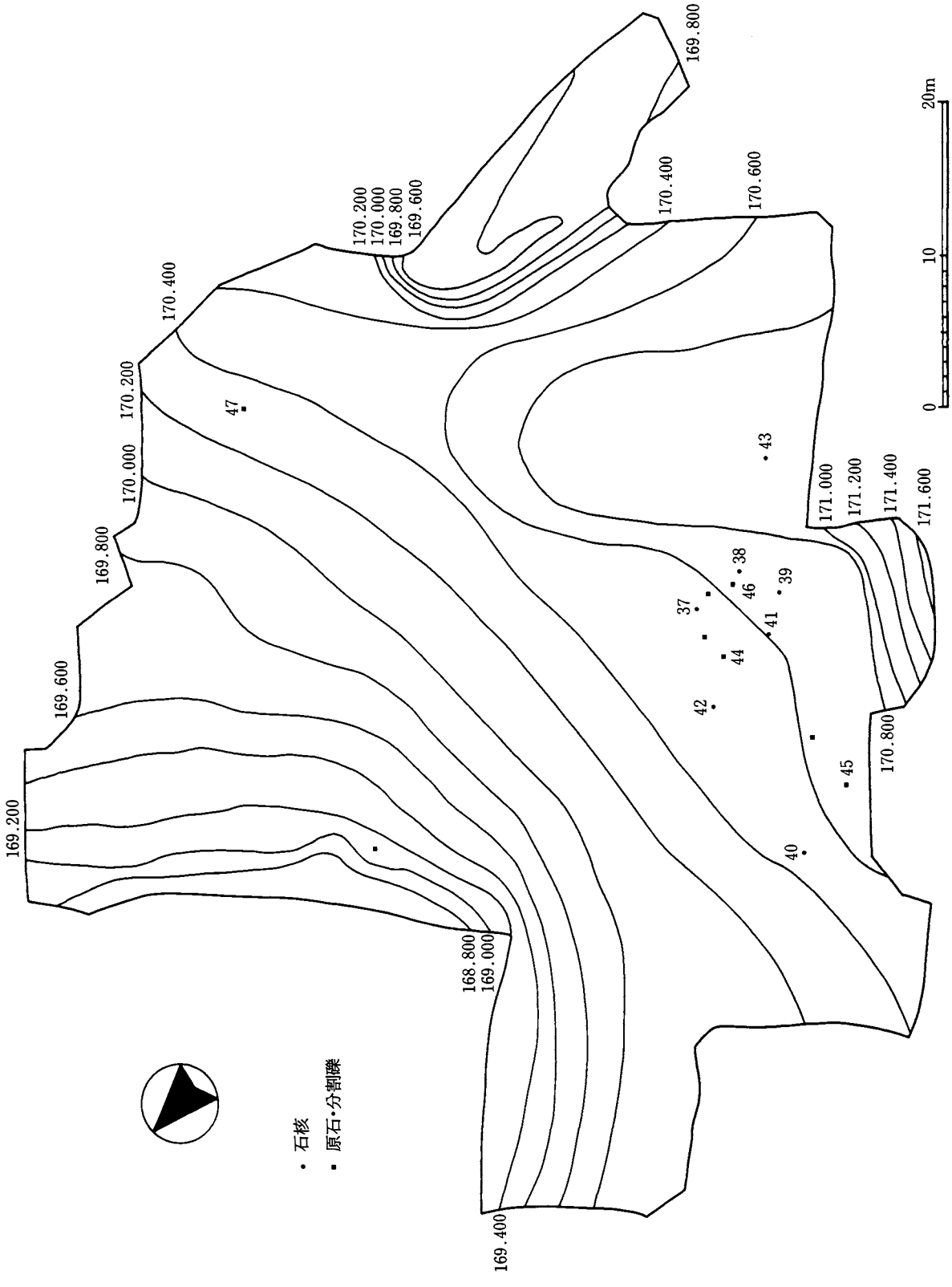
⑬分割礫（第60図44～48）

石核の素材となったり，その素材をとる際に出た余分な石片が出土している。それを分割礫として一括して提示している。出土点数は，８点である。出土位置は，尾根部周辺を中心にして，谷部にも１点が認められる（第59図）。

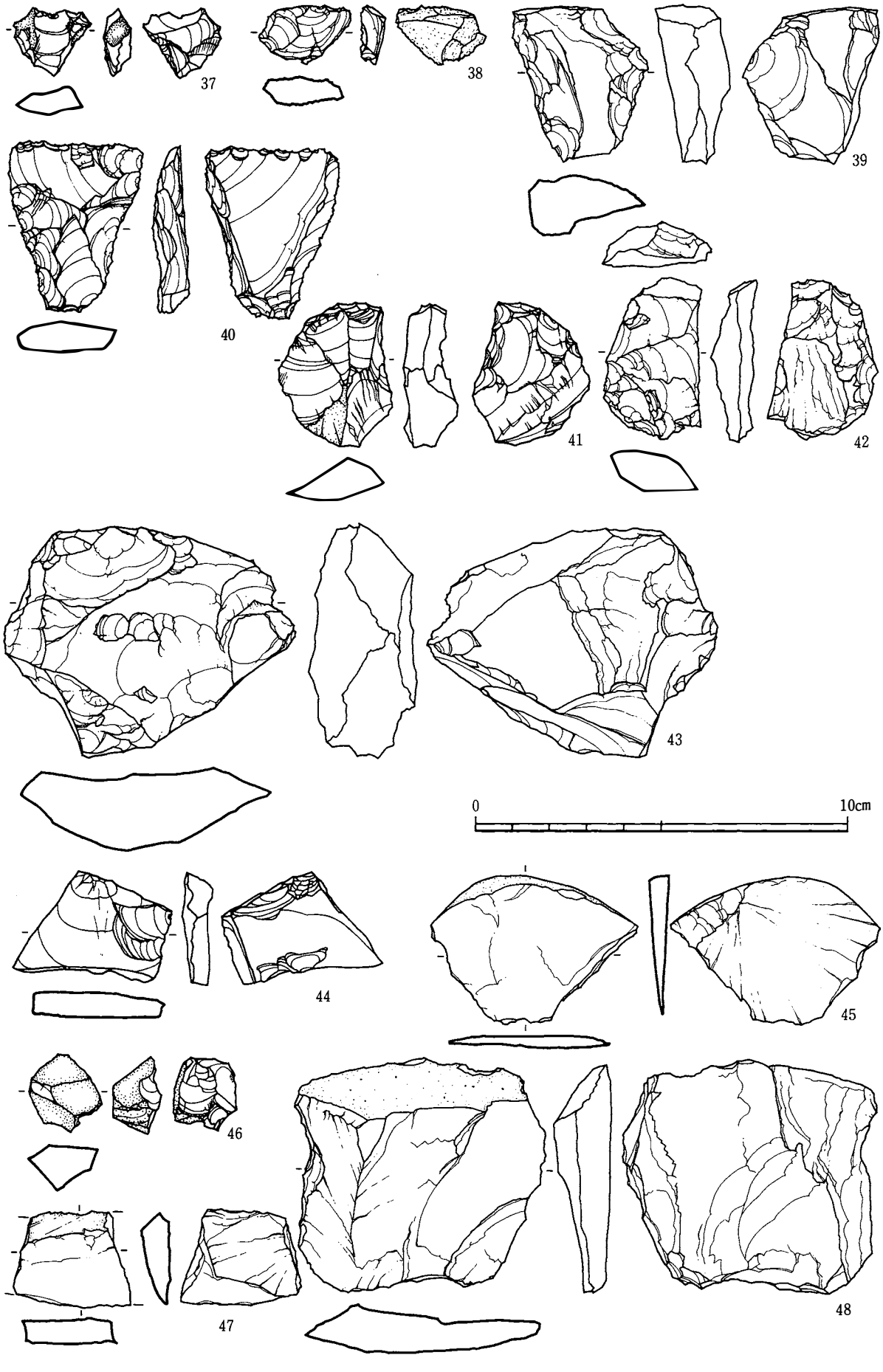
図示しているものは，この中の５点である。大型のものから小型のものまで，形状は多様である。



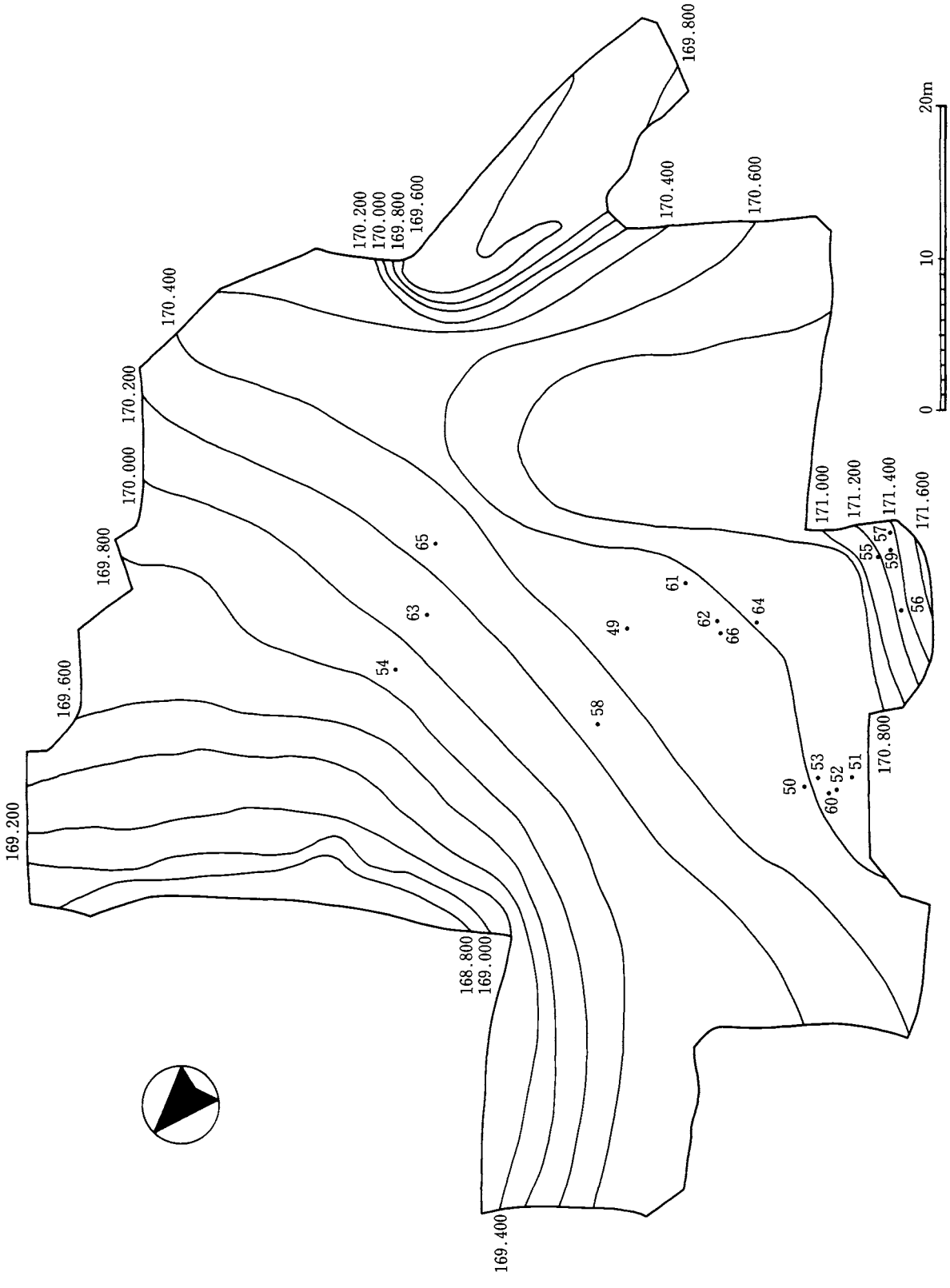
第58図　二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片実測図



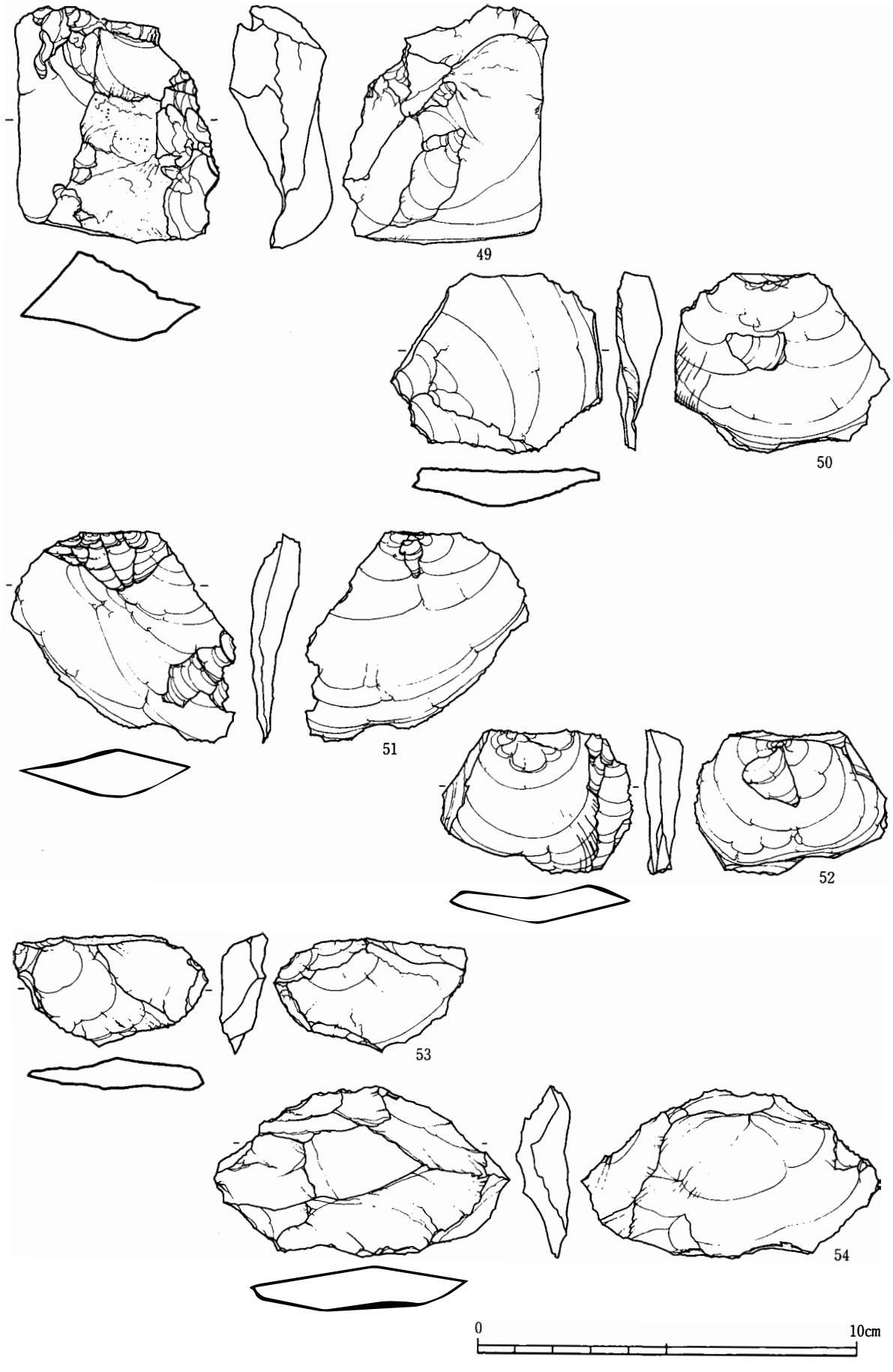
第59図　石核・原石・分割礫分布図



第60図　石核・分割礫実測図



第61図　剥片・砕片分布図



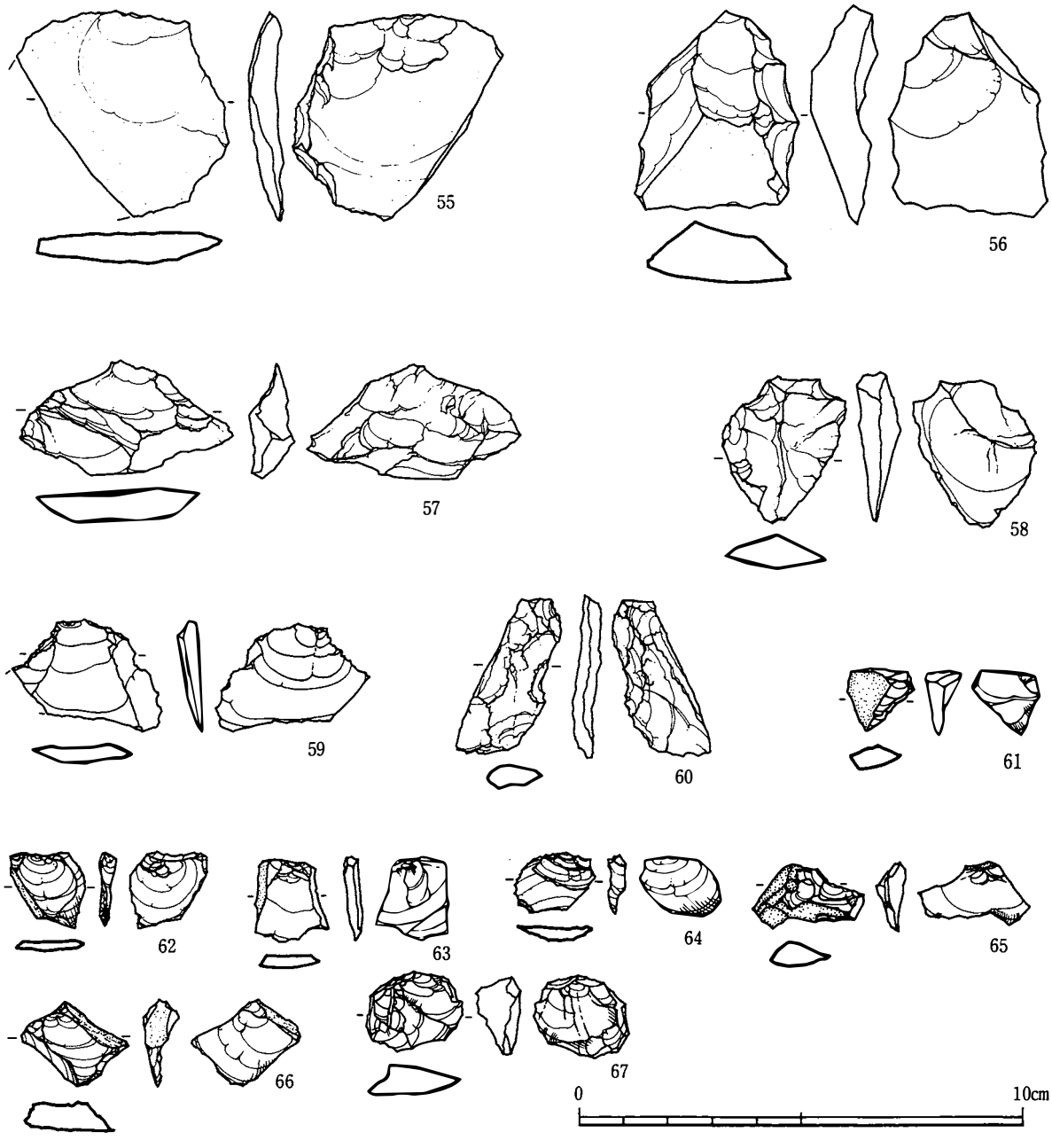
第62図　剥片・砕片実測図

⑭剥片・砕片（第62図49～第63図67）

剥片・砕片は，19点が出土している。その分布は，尾根部周辺と，北と南に開く谷部にある。石材は，チャート９点，黒曜石７点，頁岩２点，安山岩１点である。

形状は，大型の幅広の剥片（**49～52**），大型の横長剥片（**53・54**），幅広の寸詰まりの縦長剥片（**55・56**），小型の横長剥片（**57**），小型の幅広の剥片（**58～59**，**62～67**），不明（**60・61**）がある。

まず，大型の剥片を取り上げよう。**49**は，厚手で大型の剥片である。主要剥離面と同じ剥離痕跡が表面に観察される。ただし，この剥片に対応するものは，上記した石核には見当たらない。石材は，チャートである。**50**は，表面に素材剥片の主要剥離面を残す資料である。石材は，チャートである。この剥片に対応するものは，上記した石核には見当たらない。**51**も表面に素材剥片の主要剥離面を残す資料で，石核の頭部縁辺調整による加工痕が認められる。石材は，チャートである。この資料についても，対応する石核は見られない。**52**は，チャートを使用石材としている。表面には，上方向と横方向の二つの剥離痕が観察される。これによって，この剥片の剥離



第63図　剥片・砕片実測図

段階以前には，上位と横位に打面が設けられていたことが分かる。この資料についても，大きさにおいて対応する石核は認められない。53も，チャートを使用石材にしている。表面と裏面の剥離方向は，一致している。この剥片に対応する大きさの剥片も，堂園遺跡では見られない。

54は，黒色頁岩製である。表面には，周辺から対向する剥離痕が残されている。この大きさに対応する石核は認められないが，**第1類**の石核によって生産される剥片の形状であろう。55は，表面に礫面を残す剥片である。石材は，シルト質頁岩である。大きさの点では，対応する石核は認められない。56は，安山岩を石材とする。剥離方向では，主要剥離面と一致するもの，横方向のものがある。大きさの点では，対応する石核は認められない。57は，チャートを石材とするものである。主要剥離面の剥離方向に対する表面の剥離方向は，一致する。58も，チャートを石材とする。裏面の剥離方向に対しては，上下両方向の剥離痕が表面で観察される。59は，チャートを石材とする。裏面も表面も剥離方向では一致している。60は，チャート製，61は，黒曜石製である。形状等は，不明である。なお，61の黒曜石は，人吉市桑ノ木津留産のものに類似する。62は，桑ノ木津留産黒曜石を石材とする。表裏面の剥離方向は，一致する。このことから，**第2類**の石核に対応する剥片であることがわかる。63も同様に，**第2類**の石核に対応する。原産地は不明であるが，黒曜石を使用している。64は，調整剥片である。63の使用石材と同じ原産地の黒曜石である。65も石核調整の際の剥片である。その特徴から，桑ノ木津留産黒曜石を石材としている。66も，桑ノ木津留産黒曜石を石材としている。表面には，上位と横位からの剥離痕が観察される。67は，質はやや悪いが，桑ノ木津留産黒曜石の特徴を示している。厚手は，剥片剥離作業面の再生剥片である。剥離方向は，裏面の方向に対してやや左側に寄る方向の剥離痕が表面で観察される。

3．まとめ

縄文時代に属する石器類としては，これまで見てきたように，石鏃5点（中，1点は出土地点不明），削器3点（中，1点は出土地点不明），楔形石器2点，石錘1点，打製石斧及びその関係資料8点，礫器3点，円盤状石器2点，磨石・敲石5点，石皿・台石1点，二次加工ある不定形石器4点，使用痕ある剥片2点，石核7点，分割礫点，剥片・砕片19点である。これらは，前記しているように，その出土状態が芳しくなく，時期的に分離することがなかなか困難な資料である。その為に，一つの独立した節を設けて紹介してきた。

こうした中，ある程度の時期的な振り分けが可能なものも含まれている。そこで，ここでは，この節のまとめとして，こうした時期的な峻別が可能な資料を整理しておこう。

確実にその時期がわかる石器としては，打製石斧とその関連資料，それに，そうした石斧石材に類した石を素材にした礫器，円盤状石器がある。出土位置としては，打製石斧やその関連資料の多くが谷部で出土していることからも，後期や晩期の土器が谷部で多く出土していることと何らかの関連が想定される。また，偏平打製石斧の所属時期からも，この出土傾向と一致している。つまり，こうしたことから，打製石斧とその関連資料，石斧石材に類した石を素材にした礫器，そして円盤状石器は，後期か晩期に属することが確実である。

第2表　石器計測表

挿図	No.	器種	石質	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ(g)	登録番号
44	1	石鏃	チャート	2.5	1.75	0.45	1.0	1号道路
	2	〃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	1.0	E−6，7　37
	3	〃	チャート	2.6	1.75	0.4	1.3	D−3　13
	4	〃	安山岩	2.2	1.35	0.45	0.9	C−6，D−6，7　34
	5	〃	チャート	3.4	1.9	0.5	2.7	D−5　41
	6	削器	チャート	4.8	8.3	1.7	51.0	E−4　26
	7	〃	チャート	(2.9)	2.8	0.7	(5.8)	F−6，7　52

	8	〃	チャート	(2.3)	(3.3)	0.4	(0.9)	E－4	一括
	9	楔形石器	黒曜石	2.4	1.85	0.3	0.8	F－6,7	108
	10	〃	黒曜石	1.7	1.15	0.7	1.2	E－6,72	10
	11	石錘	頁岩	(6.3)	6.35	1.5	100.0	E－6,7	246
47	12	打製石斧	砂岩	12.65	5.8	1.4	120.0	E－3	23
	13	〃	砂岩	12.4	5.9	1.4	135.0	E－3	64
	14	〃	砂岩	6.0	(5.6)	0.9	(45.0)	C－6,D－6,73	
48	15	打製石斧の未加工品	砂岩	13.5	5.45	1.85	120.0	D－4	37
	16	〃	砂岩	11.95	9.4	2.05	340.0	E－6,7	117
49	17	〃	砂岩	(8.2)	13.15	2.4	(295.0)	E－5	24
	18	〃	砂岩	8.1	(12.4)	2.5	(280.0)	E－3	11
50	19	〃	砂岩	(13.4)	9.3	3.3	(420.0)	D－3	60
	20	礫器	安山岩	9.1	7.3	3.1	210.0	D－3	45
	21	〃	砂岩	15.2	13.3	3.4	775.0	D－3	59
	22	〃	砂岩	(9.3)	(11.5)	4.0	(20.0)	D－4	35
53	23	円盤状石器	片岩	8.55	8.6	1.1	110.0	E－6,7	84
	24	〃	砂岩	10.2	9.5	2.55	265.0	一括	
55	25	磨石・敲石	安山岩	9.5	9.4	4.3	560.0	D－6	75
	26	〃	砂岩	7.7	6.95	3.75	280.0	E－6,7	106
	27	〃	安山岩	9.3	8.4	4.2	450.0	D－6	79
	28	〃	安山岩	11.1	9.1	4.9	770.0	E－6,7	8
	29	〃	砂岩	12.5	4.6	2.8	225.0	F－3	1
	30	石皿・台石	砂岩	(11.8)	(8.6)	(5.4)	(930.0)	D－6	45
58	31	二次加工ある不定形石器	チャート	2.65	2.7	0.5	4.0	D－3	27
	32	〃	黒曜石	3.2	3.1	0.65	5.4	E－6,7	23
	33	〃	黒曜石	3.0	1.9	1.0	5.2	E－4	9
	34	〃	チャート	6.25	5.9	2.7	76.0	E－5	22
	35	使用痕ある剥片	チャート	8.4	4.6	1.0	41.6	D－6	61
	36	〃	チャート	5.5	3.0	0.6	12.2	C－6,D－6,720	
60	37	石核	黒曜石	1.8	2.1	0.8	1.7	E－6,5	5
	38	〃	黒曜石	1.57	2.45	0.65	2.3	E－6,7	48
	39	〃	チャート	4.15	3.6	1.6	22.8	E－6,7	42
	40	〃	チャート	4.5	3.6	0.8	16.6	C－6,D－6,7	33
	41	〃	チャート	3.8	3.05	1.1	11.2	E－6,7	58
	42	〃	黒曜石	4.3	2.6	1.1	10.4	E－6,7	1
	43	〃	チャート	6.15	7.85	2.2	110.0	F－5	12
	44	分割礫	チャート	2.9	4.2	6.5	9.9	C－6,D－6,7	16
	45	〃	頁岩	(4.0)	(5.5)	0.4	(11.4)	E－6,7	16
	46	〃	黒曜石	2.1	1.95	1.2	3.9	E－6,7	47
	47	〃	頁岩	(2.6)	(3.1)	0.7	(6.8)	F－2	3
	48	〃	頁岩	6.2	6.8	1.3	51.0	D－6	51
62	49	剥片・砕片	チャート	6.2	5.25	2.2	60.0	E－5	23
	50	〃	チャート	4.75	5.62	1.05	24.2	D－6	60
	51	〃	チャート	5.58	5.95	1.22	25.8	C－6,D－6,7	15
	52	〃	チャート	3.79	5.08	1.09	17.8	C－6,D－6,7	17
	53	〃	チャート	2.9	5.1	0.9	12.8	C－6,D－6,7	19
	54	〃	黒色頁岩	4.5	7.85	1.15	32.2	E－3	54
	55	〃	シルト質頁岩	(4.5)	(4.7)	0.7	(14.4)	F－6,7	44
	56	〃	安山岩	4.4	3.6	1.3	16.2	F－6,7	133
	57	〃	チャート	2.5	4.7	0.8	7.4	F－7	38
	58	〃	チャート	3.2	2.75	0.7	5.3	C,D－5	5
	59	〃	チャート	2.4	(3.3)	0.4	(2.0)	E－6,7	149
	60	〃	チャート	3.45	2.3	0.5	2.9	D－6	57
	61	〃	黒曜石	1.4	1.5	0.5	0.7	E－3	55
	62	〃	黒曜石	1.7	1.7	0.22	0.6	E－6,7	66
	63	〃	黒曜石	1.8	1.65	0.3	0.9	E－4	43
	64	〃	黒曜石	1.3	1.82	0.32	0.5	E－6,7	39
	65	〃	黒曜石	1.45	2.5	0.5	1.0	F－4	12
	66	〃	黒曜石	1.9	1.92	0.5	1.7	E－6,7	22
	67	〃	黒曜石	1.8	2.2	0.7	2.3	E－5	一括

一方，早期に属する可能性が高い資料としては，出土位置の傾向から石鏃がまず挙げられる。しかも，石鏃の形態的類似性からも早期の可能性が高そうである。また，出土位置が尾根部周辺に限られる磨石・敲石もまた，早期に属するだろう。この磨石・敲石と対になる石皿・台石もこの時期であろう。

なお，削器・楔形石器・石錘・二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片・石核・その他の剥片・砕片については，明確な時期を押さえることはできない。ただし，出土遺物の中で早期の土器が占める割合がもっとも高く，その９割近くの比率である。したがって，高い確率で，時期不明の資料についても早期に属することが考えられる。

以上のように，堂園遺跡で出土した石器については，後期や晩期に属すると確実に言える資料以外については，多くの場合，早期に属する可能性が高い。石鏃や磨石・敲石，そして石皿・台石は，確実に早期に属しているだろうし，削器・楔形石器・石錘・二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片・石核・その他の剥片・砕片ではその確率が90％に近いと言えるだろう。尾根近くに分布域の主体が見られる早期土器の分布傾向からすれば，石器にもその傾向が指摘できる。以上のように，石器の特徴の他，土器の出土量の比率，そして分布傾向において，縄文時代の石器類はある程度の整理が可能であろう。

第４節　古墳時代の遺構と遺物

１．はじめに

堂園遺跡では，古墳時代に属する遺構や遺物が出土した。遺構としては，確実には竪穴式住居跡１基である。それは，調査区の西側に偏って検出されている。遺構の数としても，出土遺物の量にしても少なく，資料的には極めて限られた成果であった。おそらくは，調査が対象となった地区は，古墳時代に営まれた集落の東外れということになるだろう。ただし，かつて，古墳時代，この地に人びとが生活をしていたことは確かである。そういう意味では，堂園遺跡での来歴を知る上での材料となる。

２．遺構と出土土器

遺構には，竪穴式住居跡１基がある。その位置は，前記しているように調査区の西側である（**第64図**）。検出遺構が竪穴式住居跡１基であるという点，その位置が調査区の東に偏っているという点，こうした点を考えれば，調査の対象は，古墳時代中期の集落の東端であったことになるだろう。

①竪穴式住居跡（第65図）。

竪穴式住居跡の平面形態は，やや台形に近い長方形である。その規模は，長軸5.25m，短軸3.84m～3.89mである。壁高は，40㎝～26㎝である。

炉は，東方の長辺側，その壁近くに設けられている。炉の平面形態は，短軸方向に長い不整の楕円形である。構造上では，段掘りとなっているところが特徴の第一である。住居跡中央側に，中段面としての一段高い部分があり，その部分の床面からの深さは，10㎝である。その部分の埋め土は，カーボンを少量含んだ暗褐色土である。明瞭な焼け土は，見られない。このことから，この中段の底面は，燃焼面とはなっていなかったことがわかる。なお，中段の底面には，深さ30㎝と50㎝の二個の穴が穿たれている。これは，後の攪乱ではなく，この炉穴に伴うものであるが，その用途は，不明である。下段面は，楕円形を呈している。床面からの深さは20㎝，中段面からの深さは10㎝である。

柱穴は，長軸側の中軸線上にのって，２個が見られる。その位置は，短辺側壁際からそれぞれ1.17m，

1.08m離れた部分である。いずれからも，柱痕跡は確認されていない。また，他の穴としては，炉穴がのる短軸側の中軸線上で，炉穴とは反対側にある壁近くに穿たれた１個がある。その床面からの深さは，50cmである。その位置は，壁から47cm離れた部分にある。おそらく，この穴は，入口施設に伴うものと考えられる。

出土遺物は，土器のみである。その出土位置は，一方の柱穴周辺の床面上に集中している。これが原位置をなすか，投げ込みなのかは不明であるが，個体数も少なく，しかも集中的であるということからすれば，その状況から一括性の高い資料であることは確かである。

この竪穴式住居跡は，消失家屋である（**第65図下段**）。床面には，焼け土の集まりが見られ，また，炭化材も１本分認められた。その場所は，柱穴近くである。しかも，それは大型であり，このことから，この炭化材は主柱である可能性が高い。残念ながら，この炭化材の樹種同定はおこなわれていないために，その材木の種類は不明である。

②出土土器（第66図）

出土土器では，**第66図**に掲載した分が図化に耐えうるものであり，他にも多くの破片が出土している。土器形態としては，壺，鉢，小型広口の壺，高坏，甕がある。順に見ていこう。

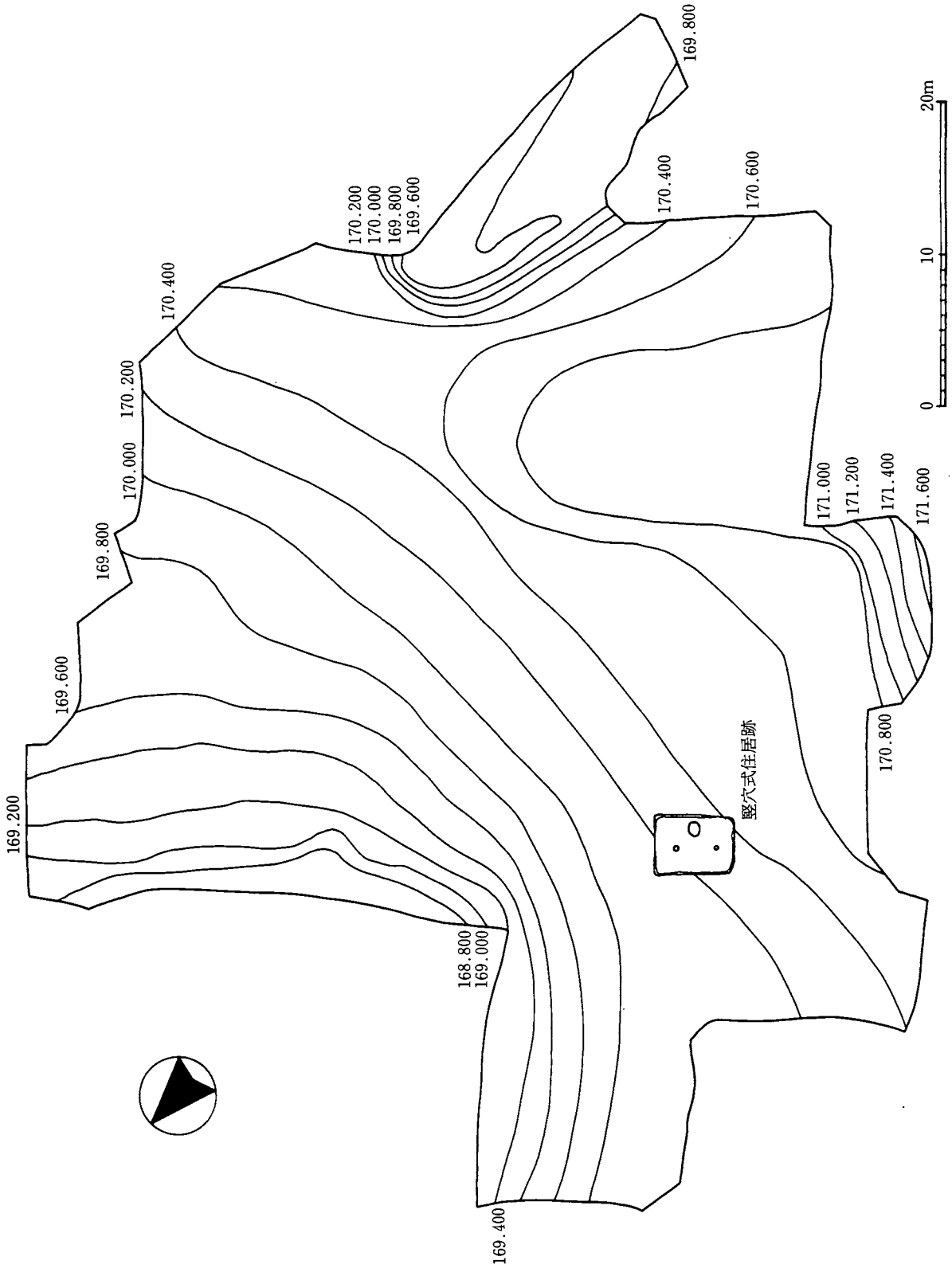
1と**2**は，壺である。**1**は，頸部以上を欠損する胴部以下の資料である。この土器は，狭い頸部から大きく張り出して胴部上位に最大径を持ち，明瞭な肩を持つ器形である。また，大きく張り出した胴部から底部にかけては直線的に窄まり，やや凸レンズ状に中央部が膨らんだ底部へと至る。胴部最大径は32.0cm，底径は6.05cmを測る。器面の調整は，広くナデ調整が認められるが，一部にケズリ調整の痕跡も残っている。**2**は，壺の底部と考えたが，薄く煤の付着が認められる。甕の底部の可能性もある。底面は,凸レンズ状に膨らんでいる。残存度は，2/3である。器面は，ナデ調整によっている。

3と**5**は，鉢である。**3**は，砲弾形を呈する尖り底の鉢である。口縁部は指頭による調整の圧痕が見られ，底部には工具による強く荒いナデが見られるなど，手捏状の粗製の土器である。器面の調整は，ナデによるが，内面にはケズリ調整の痕跡も一部に留める。残存は，口縁部が2/3で，体部は一部を欠損する程度である。**5**は，丸い体部からやや斜めに立ち上がって，口縁部ではまた強く開くという器形を呈する鉢である。器面の調整は，ナデ調整によるが，内面の口縁部近くにハケ調整の痕跡が，内面の底近くには指頭圧痕が観察される。残存度は，体部で2/3程度である。

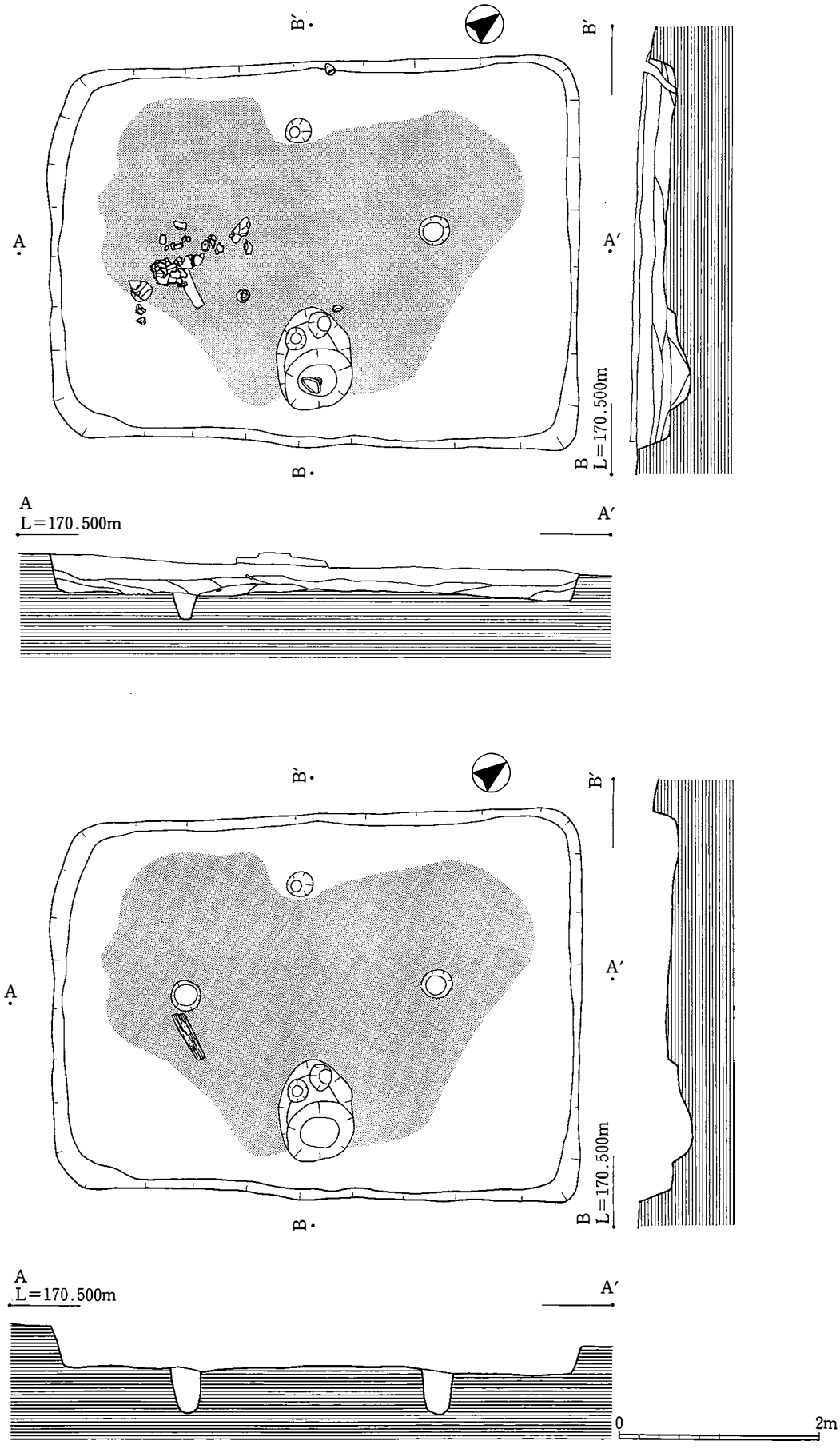
4は，小型広口の壺である。頸部は，口縁部へとやや内湾ぎみに斜めに立ち上がる。胴部の最大径は，中位よりもやや上位にある。頸部から直線的に胴部径最大部へと至るために，屈曲部の稜は，ある程度明瞭に観察される。底部は丸底で，胴部径最大部からお碗状に丸みを持って至る。残存度は，口縁部から頸部にかけてが2/3である。口縁部径は10.8cm(推定値),胴部最大径は11.9cm，器高は11.4cmを測る。器面の調整は，内外面ともにナデ調整である。ただし，胴部の外面にはハケ調整の痕跡が残り，胴部の内面には整形段階の指頭圧痕が観察される。

6は，高杯の脚部である。裾部は大きく開き，しかもその開き方はややラッパ状を呈するが，直線的である。その径は，14.1cm（推定値）である。残存状況は，1/4程度である。器面調整は，表面がナデ調整で，内面はハケ調整の後，ケズリ調整，そしてナデ調整である。

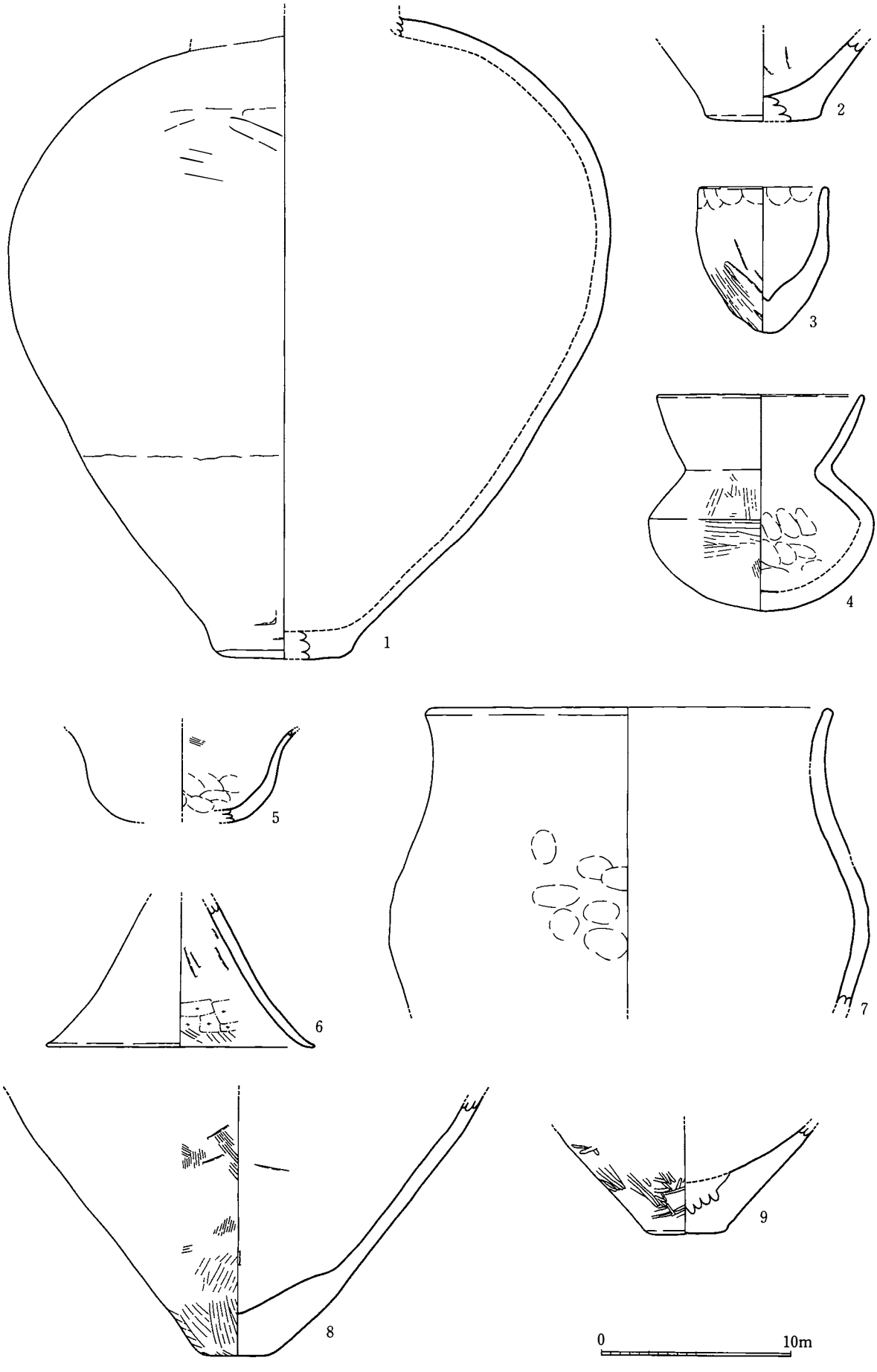
7～9は，甕である。**7**が口縁部から胴部中位にかけて，**8**と**9**が底部周辺である。**7**は，やや張り出した胴部で，わずかに窄まりながら頸部へと至り，そして弱く外反しながら口縁部へと至る器形を呈している。その残存の状況は，口縁部が1/8で，胴部が1/5である。口縁径は，21.8cm（推定値),胴部最大径（推定値）は，25.5cmである。器面の調整は，ナデ調整であるが，胴部径最大部には指頭圧痕が観察される。内面は，ナデ調整である。**8**は，胴部下半から底部にかけての資料である。底部は平底で，径は小さく，3.5cmを測る。胴部から底部への移行は，直線的である。器面の調整は，外面ではハケ調整の後にナデ調整をおこなっている。内面には，ナデ調整の痕跡のみが観察される。**9**は，底部の資料



第64図　古墳時代中期遺構位置図



第65図　竪穴式住居跡実測図



第66図　竪穴式住居跡出土土器実測図

である。形状的な特徴は，８と同じである。それは，やや膨らんだ底面を持つ平底で，径4.4cmという小さな底部である。器面の調整はナデ調整で，外面には，ミガキ調整に似た工具によるナデ調整も観察される。

③竪穴式住居跡以外からの出土土器

竪穴式住居跡以外からの出土土器も若干存在する。それは，中世以降の土坑から出土したり，遺構外から出土したりしたものである。ここでは，図示しなかったが，壺の底部，小型丸底土器，甕，そして移動式の土製竈の破片である。

３．まとめ

堂園遺跡では，古墳時代に属する遺構や遺物が出土した。遺構としては，調査区の西端で検出された竪穴式住居跡１基である。つまり，このことは，調査が古墳時代に営まれた集落の東外れを対象にしていたことを示している。

今日，球磨・人吉地方では，古墳時代の土器である土師器の編年研究がまったく手つかずのまま残されている。このままでは，堂園遺跡で検出された竪穴式住居跡を球磨・人吉地方の古墳時代の中に位置付けることは，永遠にできないままで終わることにもなりかねない。そこで，この点を解決する意味でも，球磨・人吉地方の土師器編年を試みる必要があるだろう。そこで手始めに，堂園遺跡で出土した土器と近隣の遺跡で検出された竪穴式住居跡の出土土器を中心にして，それらの形態論・型式論的な検討を試みてみよう。

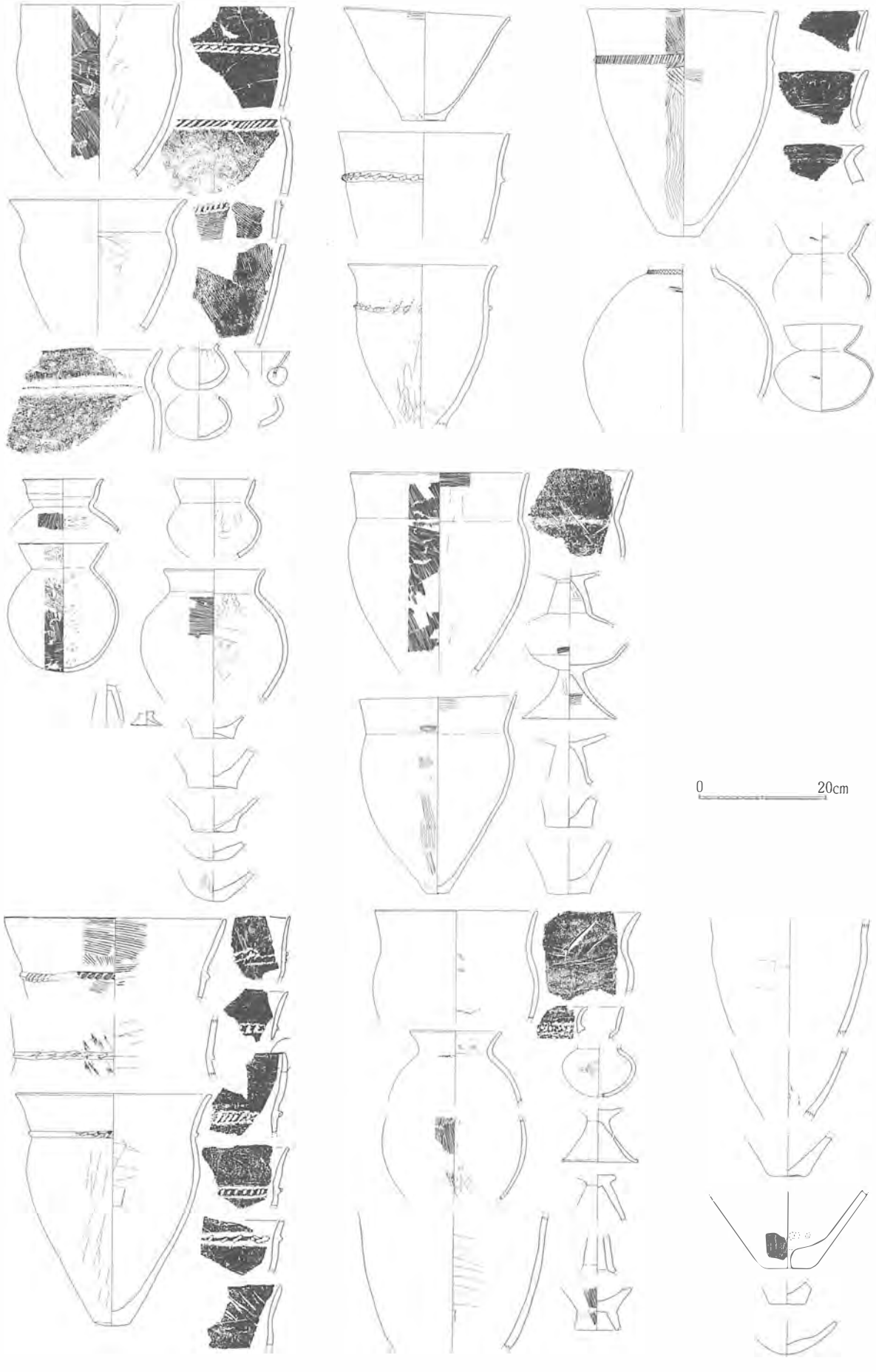
堂園遺跡の竪穴式住居跡の中からは，その出土状況において，一括性が高いと認識される土器群が検出されている。土器形態としては，壺，小型広口の壺，鉢，高坏，甕がある。ただし，その出土数は少なく，広域編年に耐える資料も存在しない。そこで，近隣の遺跡の中から，この土器群の特徴に対して関連する資料を取り上げてみよう。遺跡は，近くの丘陵上にある沖松遺跡である。その中で対象となる竪穴式住居跡は，１号住居跡と３号住居跡，そして５号住居跡である。いずれの住居跡からも，一括性の高い良好な土器形態組成を持つ土器群が検出されている（**第67図**）。

こうした資料を検討すれば，まず，堂園遺跡で出土している甕の底部と沖松遺跡３号住居跡出土の甕の類似を指摘することができる。その底部は，平底であり，器高や口径・胴部径に比べて極端に小さな底部である。その器形的な特徴は，頸部から口縁部にかけて，弱く外反しながら弱く開いて長く延びていることである。胴部の最大径は，その上位にある。頸部と胴部の境は明瞭で，胴部最大径部までの胴部上位部までは，撫肩状を呈している。このことから，堂園遺跡の竪穴式住居跡出土土器と沖松遺跡３号住居跡出土土器とは，お互いに近い形態論的・型式論的関係にあることを想定することができる。そこで，沖松遺跡３号住居跡出土土器と，他の遺跡の住居跡出土土器について比較検討を試みてみよう。

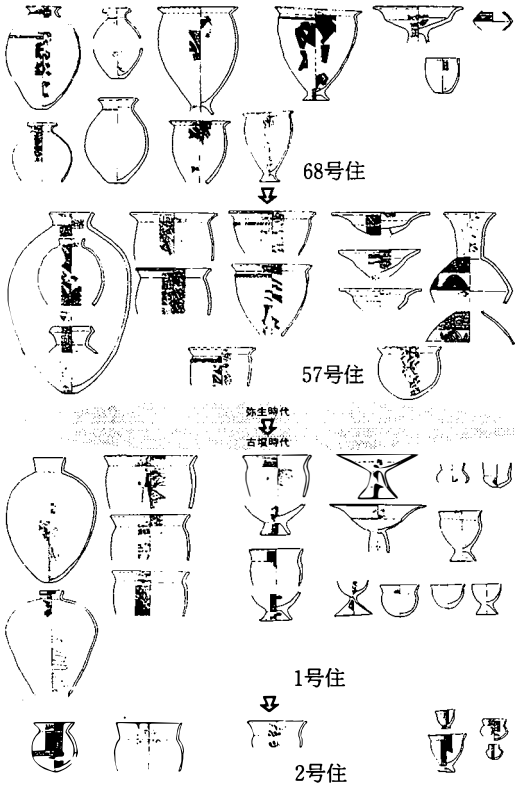
錦町夏女遺跡１号住居跡と２号住居跡は，夏女遺跡で検出された住居跡の中でも新しい時期に属するものである（園村1993）。しかもそれは，古墳時代に属し，１号住居跡→２号住居跡という変遷（**第58図**）も想定されている（木崎1996a.b）。

夏女遺跡１号住居跡では，壺，鉢，高坏，小型丸底土器，甕などが検出されている（**第58図**）。夏女遺跡２号住居跡では，壺，鉢，小型丸底土器，甕がある（**第58図**）。ここで検出されている土器の中で，沖松遺跡３号住居跡出土土器との関連で注目されるのが長胴の甕である。それは，夏女遺跡２号住居跡で見られる甕の形態論・型式論的特徴が沖松遺跡３号住居跡の甕に類似しているからである。

ただし，この両者には，明らかな形態論・型式論的特徴の差異もある。それを三点にまとめて示してみよう。第一に，夏女遺跡２号住居跡の甕は，胴部最大径が沖松遺跡例に比べてさらに上位にあることである。第二に，頸部でのしっかりしたタテハケ調整が見られない沖松遺跡３号住居跡例に対して，夏女遺跡２号住居跡例の頸部ではタテハケ調整がしっかりと施されていることである。第三に，その調整の結果，夏女遺跡２号住居跡例の方が頸部と胴部の境において沖松遺跡例よりも明瞭であることである。こうした点は，夏女遺跡２号住居跡が夏女遺跡１号住居跡との時期的な関係からも，沖松遺跡３号住居



第67図　沖松遺跡１号・３号・５号竪穴式住居跡出土土器



第68図　夏女遺跡出土土器の編年

跡に先行するということを明確に示している特徴と言えるだろう。

さらに，沖松遺跡３号住居跡で検出されている高坏の脚柱部と脚裾部上位の資料に類似した資料が夏女遺跡１号住居跡に認められることも注意が必要である。その理由には，二点ある。第一は，甕における形態論・型式論的特徴における沖松遺跡３号住居跡と夏女遺跡２号住居跡・１号住居跡との関連が追認できることである。第二には，その高坏の存在によって，夏女遺跡の弥生式土器から沖松遺跡の土師器への型式変遷がたどれ，しかも宮崎方面の土器編年との対比が可能になってくる点にある。この点については，次章に記述しよう。

ところで，沖松遺跡３号住居跡と夏女遺跡２号住居跡・１号住居跡との関係は，わかった。では，堂園遺跡出土土器と夏女遺跡２号住居跡・１号住居跡出土土器との関係は，どのようなところに見られるだろうか。先に，堂園遺跡出土土器と沖松遺跡３号住居跡出土土器との関係の中で，甕の底部に着目してその関係について述べているので，次にはその検討が必要になってくるだろう。そうした中で，ここでは，壺と小型丸底土器を取り上げよう。

堂園遺跡で出土した壺には，狭い頸部と球形の大きく張り出した胴部を形状的な特徴とする土器がある。明瞭な肩を持つ点が特徴的であり，底部は，やや凸レンズ状に中央部が膨らんでいる。これに類した壺形土器が夏女遺跡１号住居跡で検出されている。それは，胴部最大径61.3cm，現存の器高69cmという大型の壺形土器である。大きさの点では，隔絶しているとしても，形状的には類似した土器であると言えよう。ここに，この両者には，その形態論・型式論的関連が充分に想定されるのである。

また，堂園遺跡と夏女遺跡１号・２号住居跡には，小型広口の壺も存在している。この土器は，弥生時代後期に系譜が辿れると考えられる土器である。中九州の弥生時代では，有文土器で，頸部が長めから短めへという変化が辿れ，古墳時代に入ると無文となり，さらに短い頸部となる。古墳時代に入ると，形状的にはそれほどの変化も見られない土器ではある。そうした中，共通した点と相違した点が二点が見られる。共通した点は，頸部から口縁部への立ち上がりが内湾気味であるという点である。相違した点は，頸部の長さにおいては堂園遺跡例の方が長めで，開き方においては夏女遺跡２号住居跡例の方が立ち気味だという点である。そこに，型式論的な関連が見出せ，そしてまた型式論的な変化を見出すことも可能であろう。いずれにしても，堂園遺跡の竪穴式住居跡と夏女遺跡の１号・２号住居跡とを型式論的に関連付ける上での特徴を，ここに見出すことが可能となろうか。

球磨・人吉地方の古墳時代の土器を比較検討することによって，**夏女遺跡１号住居跡→夏女遺跡２号住居跡→沖松遺跡３号住居跡**という変遷が想定されることを述べた。

次に，沖松遺跡１号住居跡を見てみよう(**第67図**)。ここの土器形態は，壺，小型広口の壺，高坏，甕などである。壺の中で特徴的なものとして，複合口縁状を呈する口縁部を付けたものがある。また，甕の中で球形胴部の甕が存在し，その胴部内面にはヘラ削りによる調整が認められる。さらに，沖松遺跡３号住居跡で見られた特徴的な長胴の甕も沖松遺跡１

号住居跡に認められる。ただし，その特徴は，頸部から口縁部にかけての延びが直線的となり，また，頸部と胴部の境も沖松遺跡３号住居跡例に比べると明瞭さを欠いている。底部の径も，沖松遺跡１号住居跡の方が大きめである。しかも，胴部内面の調整では，ケズリの痕跡が見られる。つまり，沖松遺跡３号住居跡出土土器と沖松遺跡１号住居跡出土土器との間では，明らかな型式変化が認められるのである。その編年関係は，沖松遺跡３号住居跡出土土器が古く，沖松遺跡１号住居跡出土土器は，それよりも新しいという前後関係になる。なお，同じ様な特徴を示すものとして，沖松遺跡５号住居跡があり，これも沖松遺跡１号住居跡と同じ時期ということになるだろう。そうすれば，５号住居跡出土の高坏脚柱部と同じ型式論的特徴を持つ高坏が出土している４号住居跡（第69図）に３号住居跡が切られているという，住居跡の切り合い関係も矛盾しない。

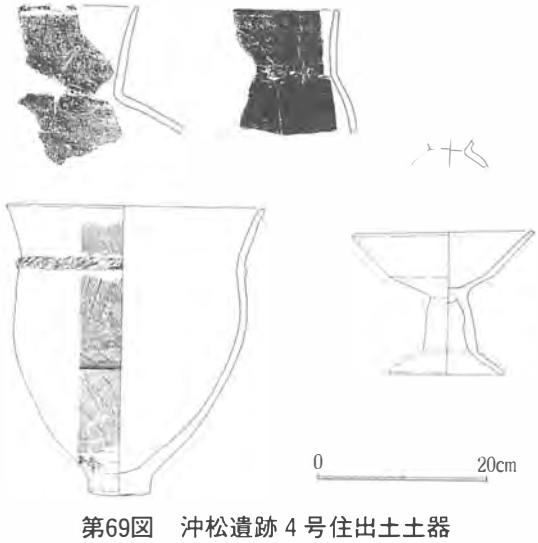
では，沖松遺跡３号住居跡出土土器と形態論・型式論的特徴が近いと判断した堂園遺跡の住居跡の資料と，沖松遺跡１号住居跡出土土器とは，どうであろうか。比較する要素としては，長胴の甕の底部形状にある。この特徴で両者を見てみると，堂園遺跡出土例は，沖松遺跡３号住居跡例により近く，小さな底部となっている。つまり，この甕底部の特徴からは，堂園遺跡住居跡出土土器は，沖松遺跡３号住居跡に近いという評価が下せるかもしれない。

以上のように，堂園遺跡の住居跡は，沖松遺跡や夏女遺跡という近隣の遺跡の調査成果を参考にして，下に示す編年の中に位置付けを与えることができる。そこでまず，基本となる編年を示そう。

夏女遺跡１号住居跡→夏女遺跡２号住居跡→沖松遺跡３号住居跡→沖松遺跡１号・４号・５号住居跡

そしてこの編年の中で，堂園遺跡の住居跡が編年的に位置付けられるのは，沖松遺跡３号住居跡の段階ということになろう。なお，その年代観としては，沖松遺跡１号・４号・５号住居跡出土土器の型式論的特徴から５世紀前半と考えられるので，４世紀後半という幅で捉えられるだろう。

４世紀後半，堂園遺跡がある丘陵上には，竪穴式住居跡に住む人びとが集落を構えていた。その規模は分からないが，丘陵の規模からすれば，それほど大規模なものではなかった。そして，近くの沖松遺跡の集落と共に，一つの景観を成していた。この二つの集落の関係が並立していたものか，同じ人びとの移動に伴うものなのかは分からない。少なくとも，堂園遺跡の集落の一部が調査対象になっているだけであり，その点は，今後の課題ということが言えそうである。しかしながら，同じ時期の二つ以上の集落が近隣に同時に存在することがたびたび見られることも，重要な問題である。この問題は，当時の集落構成を含む古墳時代の地域社会を考察する上では避けて通れないものでもある。今後，新たな遺跡調査の中で，この問題が取り扱われる機会を模索しなければならないだろう。



第69図　沖松遺跡４号住出土土器

第５節　平安時代の遺構と遺物

１．はじめに

堂園遺跡では，平安時代に属する墓地に関係する遺構が検出されている。それは，木蓋土壙墓である。検出数は，１基である。基数こそ少ないとしても，供献土器として輸入陶磁器や緑釉陶器の破片などが見られるなど，その内容は豊かである。この遺構の位置付けは，おそらくは，球磨・人吉地方の古代を考察する上で重要な作業と言えるだろう。

検出された位置は，調査区の北側に偏った場所にある（**第70図**）。調査区にはこの種の墓壙が他には見られないという点，墓が見られる場所が調査区の外れにあるという点，こうしたことから，調査は，平安時代の墓地の外れの一角を対象にしたことがわかる。

２．墓と供献土器

平安時代の遺構としては，木蓋土壙墓が１基ある。しかもそれには，供献土器が供えられていた。そこで，ここでは，この遺構の特徴と供献土器の特徴について，見ていくことにしよう。

①木蓋土壙墓（第71図）。

木蓋土壙墓の平面形態は，不整ではあるが，長軸側両端が丸く，しかも北辺に向かって先細り気味になる長方形を呈している。その規模は，長軸3.5m，北側短辺長0.75m，南側短辺長1.15mである。現状での壁高は，25㎝である。北側隅には，枕状の高まりが削り出しによって造り付けられている。その形状は，長方形である。その上面は，屍床面に向かって緩く傾斜している。なお，この枕状の高まりの部分が，木蓋土壙墓の平面形態で先細りとなっているところでもある。これを枕とすれば，遺体の頭位方向は，磁北ということになる。

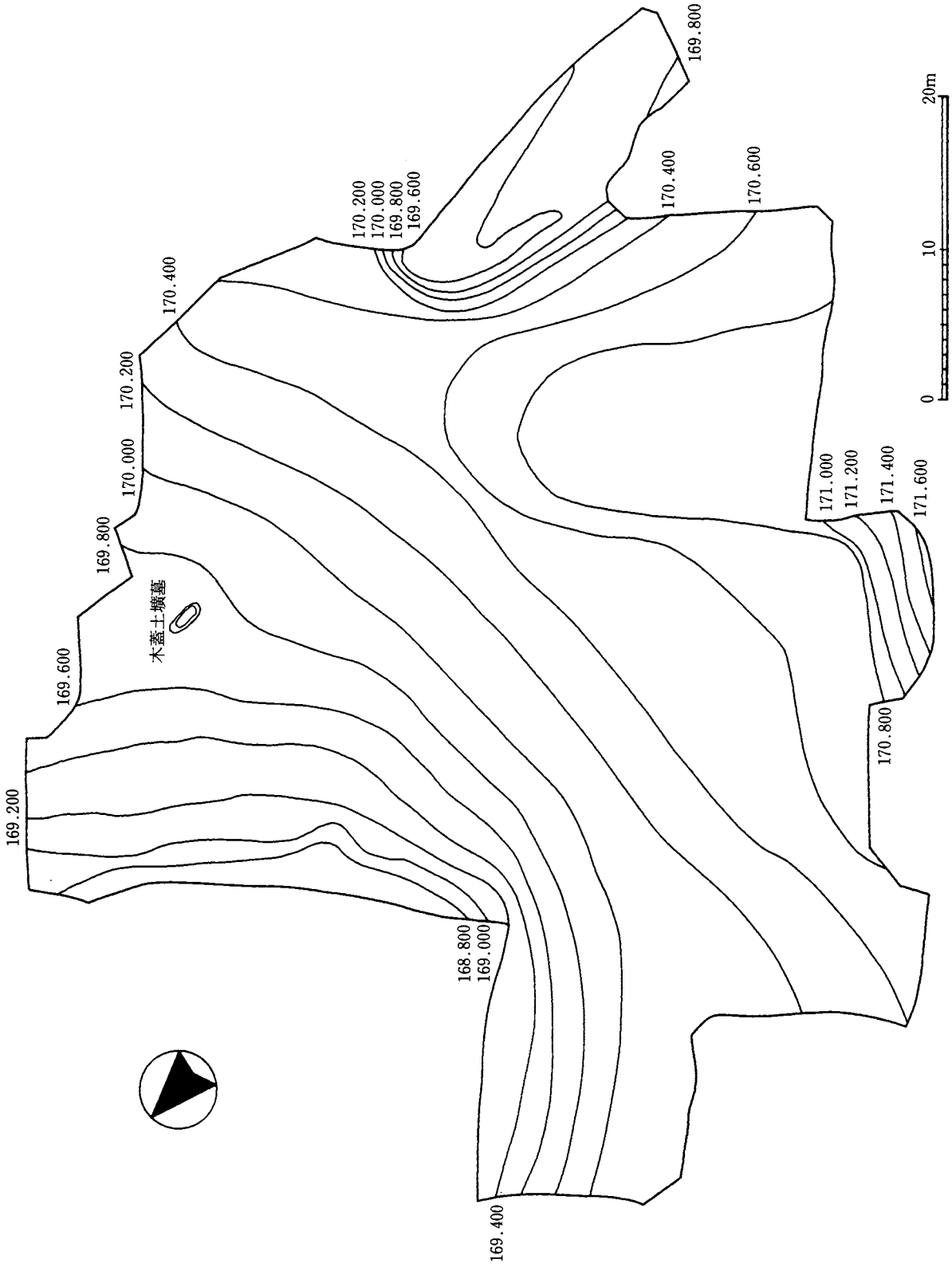
供献土器は，東側縁近くで検出されている。その構成は，輸入陶磁器である越州窯系青磁の皿の破片１点，国産の緑釉陶器の皿の破片１点，土師器製の椀１点と坏２点である。その出土状況は，屍床面から数センチメートル程度浮いた状態であった。このことから，これらの遺物が，屍床面に直接置かれた状況にないことが窺える。つまり，木蓋の上にこれらの供献土器が置かれていたことを想像できる。そして，木蓋が朽ちることによって，これらの供献土器が棺内部に落ち込んだことが想像される。

一般的にみて，供献された品物の埋設は，遺体埋葬直後に実施されるという特徴がある。そういう意味では，その組成の組み合わせには，一括性が認められ，埋葬時のそのままの状態が保持される。こういう点では，竪穴式住居跡などの遺構内出土土器とは，明確に違いがある。しかも，その後の攪乱が無いかぎり，埋納時の品物の形状は，そのまま保持される。つまり，墓に供献された品物は，埋葬前や埋葬時に行われた行為が，その後の影響が無いかぎり，保持されているのである。そこに，何らかの原則が見出せるのであれば，有意なものとして認識できるだろう。そこで，それらの遺存状態を見てみてみよう。

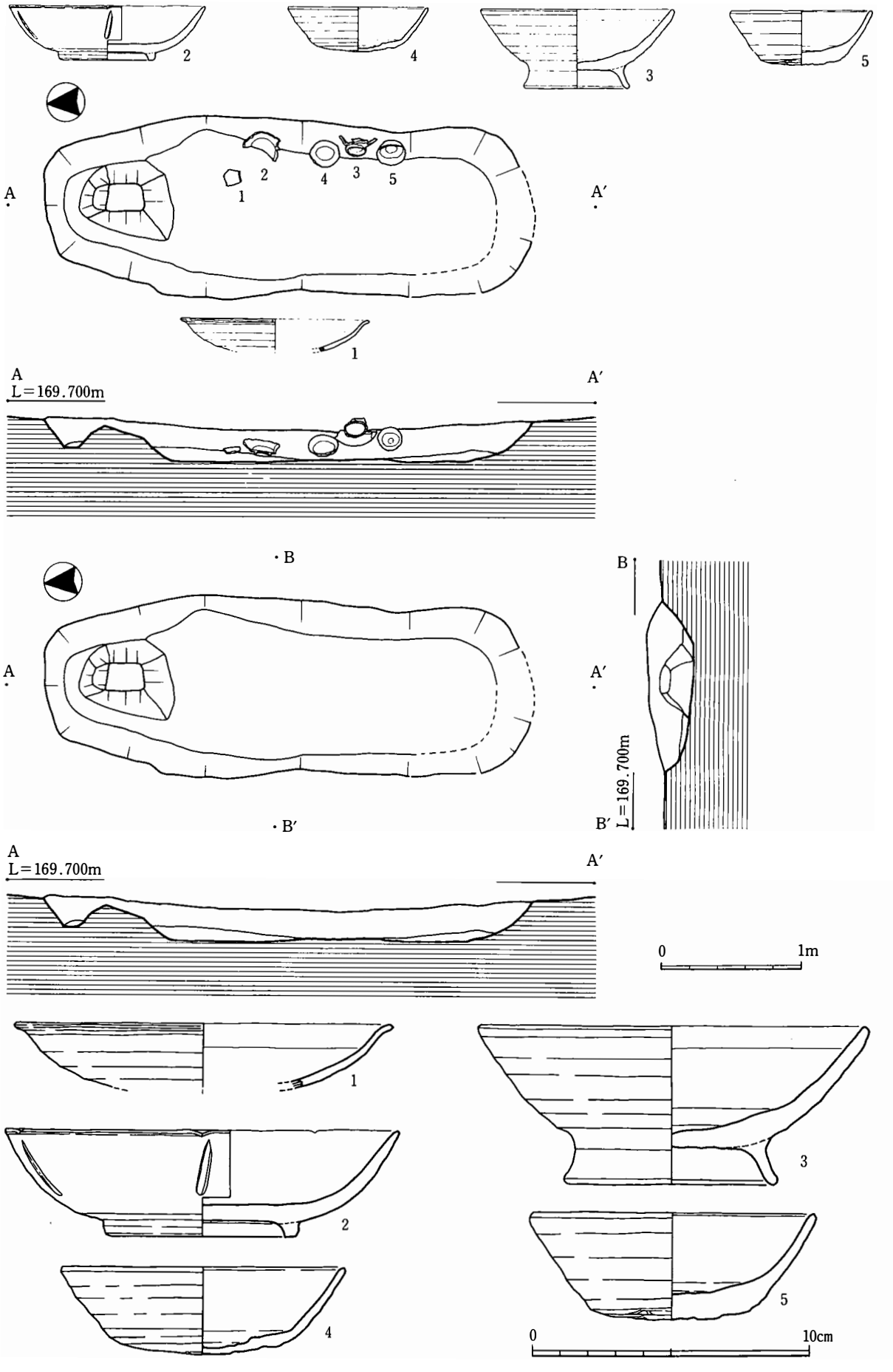
緑釉陶器製の皿は，底部を欠くなど，小さな破片で検出された。本来の大きさからすれば，1/8程度の遺存状況である。この陶器は，供献土器の中で，もっとも頭位（推定）に近い位置で検出されている。その隣から検出されたものが，越州窯系青磁皿である。その遺存状況は，1/3であった。

こうした貴重品以外で，日常品として土師器製の容器も供献されていた。それは，緑釉陶器皿や越州窯青磁系皿の隣から検出された坏２点と高台付き椀１点である。その位置関係は，坏２点の間に１点の椀が見られるという状況である。坏２点は，いずれも完形である。椀は，横転した状況で検出され，その上半部を欠失している。ただし，その状況を見れば，遺構検出面から下は遺存し，その上は欠失しているということであるので，この欠失は後世の削平に伴う可能性が高い。つまり，この椀は，本来，完形で遺体に供献されていたと想像される。

さて，供献土器では，貴重品としての緑釉陶器皿・越州窯系青磁皿と日常容器としての土師器との二者がある。これらが遺体に供献された時点では，それぞれに異なる価値が付与されていたのであろうが，今日，その価値についてはわからない。ただし，緑釉陶器や青磁が破片であるのに対して，土師器は完形であるということは，この二者に性格の違いがあ



第70図　平安時代遺構位置図



第71図　木蓋土壙墓・出土土器実測図

ることを窺わせる。当時の葬送儀礼を復元する意味でも，ここが，解釈を必要とする点である。

②供献土器（第71図１～５）

供献土器には，緑釉陶器製皿１点，越州窯系青磁製皿１点，そして土師器製坏２点と椀１点があった。順に見ていこう。

1は，京都系の緑釉陶器の皿である。素地の状況は，灰色硬質，緻密である。この特徴から，洛西を産地とする緑釉陶器であることがわかる。釉の色調は，深みのある濃緑色である。資料は，底部を欠損し，口縁部と体部の一部である。口縁部での残存率は，全体の約1/8程度である。洛西産の緑釉陶器は，その生産が９世紀中ごろ以降とされている。

2は，越州窯系青磁製皿である。皿は，体部が丸みを持つ特徴から，横田賢次郎・森田勉氏分類の皿Ⅰ－２類（横田・森田1978）に相当しよう。底部には，輪状高台が付く。文様は，口唇に五個の輪花文（五輪花文),それに対応して体部外面に縦ヘラ文が見られる。青磁五輪花皿である。胎土は，淡黄灰色である。釉の色調は，深みのある黄緑色である。その残存率は，全体の約2/3である。目跡は，見込み部に残り，白色粘土が残る。森田氏によれば，この皿Ⅰ－２類は，10世紀代になって主体となる越州窯系青磁製皿であるという（森田1982)。

3は，土師器製椀である。器体は，高台部より丸みをもって立ち上がるという形状を呈する。口縁部の延びは，やや内湾気味である。調整は，器面の内外面ともに，ナデ調整で，高台部と底部の貼り付け部もナデ調整である。残存率は，約1/2であったが，出土状況から，本来は完形品であったと考えられる。法量は，口径13.7㎝（推定値),高台径7.3㎝，器高5.6㎝である。

4と**5**は，土師器製坏である。二つの坏は，形状的には異なる部類の特徴を示している。

4は，浅い形状の坏である。器体は，不安定で丸みのある底部，そこから直線的に延びる体部による形状を呈する。器面の調整は，内外面ともにナデ調整である。底部には，回転ヘラ切り離しの痕跡を留めるが，一部は粗くナデ調整が認められる。一部，口縁部を欠くが，完形品である。法量は，口径10.1㎝，器高3.15㎝である。

5は，深い形状の坏である。器体は，丸みのある底部，そこからやや直線的に開き，口縁部でやや内湾気味となる形状を呈している。器面の調整は，内外面ともにナデ調整である。底部には，回転ヘラ切り離しの痕跡を留める。完形品である。法量は，口径9.95～10.1㎝，器高3.85㎝である。

３．まとめ

堂園遺跡は，平安時代の墓地の跡であった。遺構としては，１基の木蓋土壙墓があり，そこに，供献された土器として，輸入陶磁器や緑釉陶器の破片，そして，土師器三点があった。それは，輸入陶磁器や緑釉陶器の破片など，当時の高級品が墓の中に入るという豊富な内容である。この墓に葬られた人物やそれを取り巻く人物たちは，高級品を身近に置ける人びとであったろうし，球磨・人吉地方の平安時代において，社会的にも政治的にも，地域の権力に何らかのかたちで係われる人びとであったと想像される。

さて，その墓の年代である。出土した輸入陶磁器や緑釉陶器，そして，土師器においてその位置付けをおこなわなければならない。その際に，大きくは，輸入陶磁器や緑釉陶器という広域流通品の年代幅，そして，在地生産品である土師器の型式論的な特徴が検討の対象となろう。以下，広域流通品と在地生産品とに分けて，検討を進めていこう。

広域流通品の年代については，前記している。例えば，京都系洛西産の緑釉陶器は，その生産が９世紀中ごろ以降とされている。次に，越州窯系青磁五輪花皿は，10世紀代になって組成の主体となる横田・森田氏分類の皿Ⅰ－２類に相当することから，この年代観が参考になるだろう。つまり，広域流通品の特徴からは，この墓の年代は，10世紀代以降ということになるだろう。

一方，在地生産品である土師器の型式論・形態論的な特徴を見てみよう。堂園遺跡の年代観としては，九州土器研究会によって，「肥後における古代・中世の土器」という形でその編年案が提出されている（九州土器研究会1994)。その編年案によると，九

州土器研究会（熊本）は，その年代を10世紀第１四半期に求めている。そこで，その特徴を中心にして，その前後の時期の土師器を見てみよう。

土師器では，椀と坏がある。この中，椀は，その年代観を示す土器形態である。

椀は，高台部より丸みをもって斜めに立ち上がり，口縁部がやや内湾気味になるという形状的な特徴を呈している。また，内面も丸みをもちつつ，斜めに立ち上がる。全体として，丸みを持つ底と体部による器体に高台が付くという特徴が認められる。その法量は，口径13.7㎝（推定値),高台径7.3㎝，器高5.6㎝である。上記した特徴は，山本信夫氏による福岡県太宰府土師器「椀ｃ」編年（山本1988）の中で，Ⅷ期に比定されるものである。つまり，堂園遺跡の高台付き椀には，10世紀初頭前後という年代観が与えられるのである。

これに類するものとしては，御船町久保遺跡３号土坑（高木1975）や城南町沈目遺跡４号土坑（江本1974）が挙げられている（九州土器研究会1994)。これに対して，神水遺跡第３次調査の包含層出土土器の中の椀は，底部と体部との境が明瞭で，その屈曲部に高台が付けられている。つまり，型式論的には，底部と体部との境が明瞭な椀が丸みを持つ体部の椀に先行するということで理解できるので，神水遺跡例の椀を堂園遺跡例の前に置くという，九州土器研究会（熊本）の編年案の妥当性がわかる。

以上のように，京都系洛西産の緑釉陶器，越州窯系青磁五輪花皿（Ⅰ－２類),そして椀の特徴から，堂園遺跡の墓の年代を10世紀第１四半期に求めた九州土器研究会（熊本）の見解には肯首できる点がある。そこで，ここでは，九州土器研究会（熊本）の見解を受けて，堂園遺跡の墓について，10世紀初頭という年代値を当てておくことにしよう。

次に，坏を見てみよう。坏には，二種が見られる。一つは，口径10.1㎝に対して器高3.15㎝という浅めの坏である。底部は，不安定で丸みがあり，体部は，直線的に延びている。底部と体部の境は，不明瞭である。底部には，回転ヘラ切り離しの痕跡の後，わずかにナデ調整が施されている。

もう一つは，口縁径9.95～10.1㎝，器高3.85㎝という法量の，深めの坏である。底部は，丸みがある。体部は，直線的に開いた後，やや内湾気味の口縁部となる。底部には，回転ヘラ切り離しの痕跡を留める。これに類するものとしては，熊本市渡鹿「旧電波高校」遺跡11号住居跡で認められる。堂園遺跡の例に比べて，法量的にはやや大きいが，その形態論的な特徴は，類似している。伴出資料としては，黒色土器Ａが見られる。器体は，丸い形状を呈し，体部中位から真っ直ぐに立ち上がるという特徴を持つ。この特徴は，年代的に堂園遺跡に後続すると理解される。したがって，堂園遺跡の深めの坏と渡鹿「旧電波高校」遺跡11号住居跡の坏との間には，型式論的な関係が予想されるのである。

また，年代的下降に伴う法量の縮小という現象を併せて考えるならば，平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて見られる人吉市天道ケ尾遺跡や山江村大丸・藤ノ迫遺跡出土の土師器製「小坏」との類似も見逃せない。つまり，予察の範囲であるが，平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて見られる土師器製小皿の型式論的系譜を堂園遺跡の深めの坏に求めることも一考に値するものと評価しておこう。

堂園遺跡で検出された木蓋土壙墓に葬られた人物には，当時の高級品である輸入陶磁器や緑釉陶器の破片が供えられていた。また併せて，完形の土師器３点も人物と共に埋められていた。このことから，私は，先に，この墓に葬られた人物やそれを取り巻く人物たちが高級品を身近に置ける人びとであったことを，指摘した。また，併せて，球磨・人吉地方の平安時代，社会的にも政治的にも，地域の権力に何らかのかたちで係われる人物だったと想像した。その年代は，出土した陶磁器や土師器の特徴から，10世紀初頭と考えられる。つまり，平安時代中期のことである。

亀井明徳氏は，「越州窯系青磁の需要層」を考察するなかで，「肥後において郡司クラスは初期輸入陶磁の需要階層となっていたと考えることは許されよう」という見解を示した（1982)。この点は，肥後国が太宰府から離れて「官貿易とは直接無関係」な場所にあるということからも初期輸入陶磁器の貴重性が窺え，亀井氏の見解の妥当性に賛同できると

ころでもある。肥後国の中にあって，さらに僻遠の地である球磨・人吉地方ということでは，その貴重性はさらなるものであり，当然のごとく，出土した破片に付加された価値は相当なものであったことが予想される。しかも，貴重品を手に入れるという行為は，直接的にも間接的にも，「唐物流通システム」に何らかのかたちで触れられる立場にあってこそ可能なのである。

こうした点を考慮すれば，堂園遺跡で検出された木蓋土壙墓に葬られた人物は，球磨郡衙に係わる人物かその周辺にいた人物であったと想像されるだろう。その人物周辺を具体的に例示すれば，須恵氏を挙げることができよう。

須恵氏は，平安時代に球磨・人吉地方で郡衙に係わり，しかも須恵器生産に直接係わることによって，政治的にも経済的にも重要な役割を担っていた豪族である。それは，平安時代と鎌倉時代の過渡期の文書である建久八年(1198)の「肥後国球磨郡図田帳」の記述からも窺える（木﨑1996)。その本拠地は，須恵器や瓦の窯の分布を参考にすれば，現，須恵村・深田村・免田町・上村・錦町の範囲にあたり，人吉盆地の中央部にあると言える。堂園遺跡が須恵村に所在することからすれば，堂園遺跡は須恵氏の本拠地の中に位置することになる。このことは，堂園遺跡で検出された墓の被葬者と須恵氏との関係を窺わせるに，充分な根拠となるだろう。

堂園遺跡周辺には，須恵氏に係わる遺跡が数多く発掘調査の対象となっている。こうした点から，堂園遺跡周辺は，球磨・人吉地方における古代史研究にとって，重要な地域ということになろうか。

第６節　鎌倉時代以降の遺構

１．はじめに

堂園遺跡では，時期不明の遺構が存在している。それは，３本の道路，３列の柵状柱列，12基の土坑，多数の穴である。出土遺物が見られる場合もあったが，それらが伴うものか，そうではないかという点では，判断に苦しむ場合が多くある。そこで，これらをまとめて取り上げたいと思う。なお，遺構を埋める土の状況から，古代以前の遺構と確証を得るものは少ない。しかも出土土器の中で糸切り痕を底部に留める土師器の坏が存在するなど，中世以降の人びとの生活痕跡は確実に存在している。こうしたことから，こうした時期不明の遺構を鎌倉時代以降の遺構として取り扱って，記述を進めていく。なお，ここでは，穴の中に樹痕跡も相当数含まれていると判断されるので，道路と柵状柱列と土坑を中心にした説明をおこなっていこう。

２．道路

道路は，３本を検出した。それらを１号道路～３号道路と呼んだ。いずれも谷部から丘陵上に延びている（**第72図**)。このことから，この道路は，丘陵下から丘陵上へと通じる山道であったことが知れる。各遺構ごとに見ていこう。

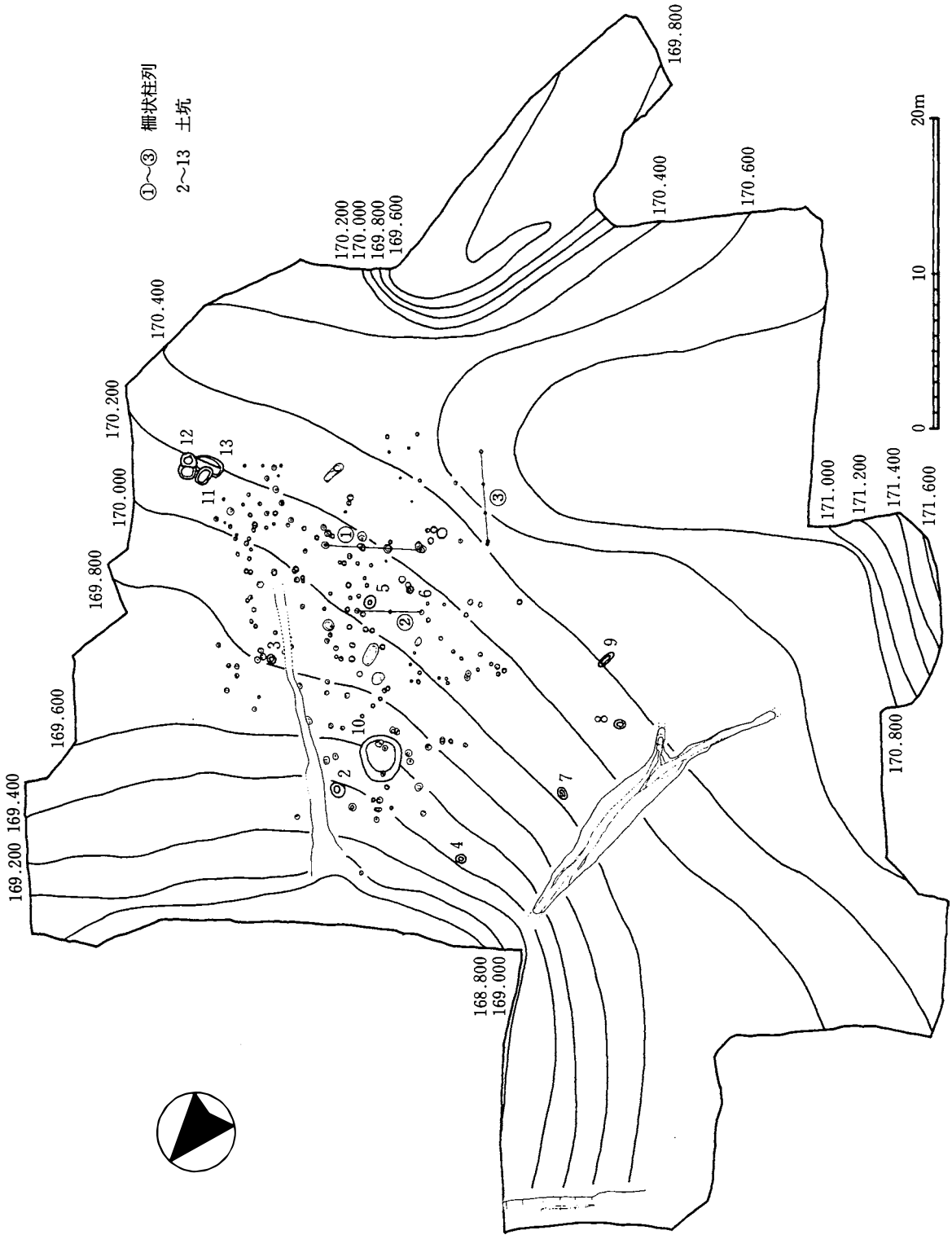
１号道路（第73図）

１号道路は，谷部から南方へと向かった状況にある（**第72図**)。検出状況は，北端と南端が削平によって失われている。その長さは，20.2mを測る。その幅は，最大のところで2.24mである。南端側では，二股に分かれ，一方は丘陵のさらに高い部分へ，もう一方は尾根部へと通じている。確認面からの最深部40㎝を測る堀切道である。

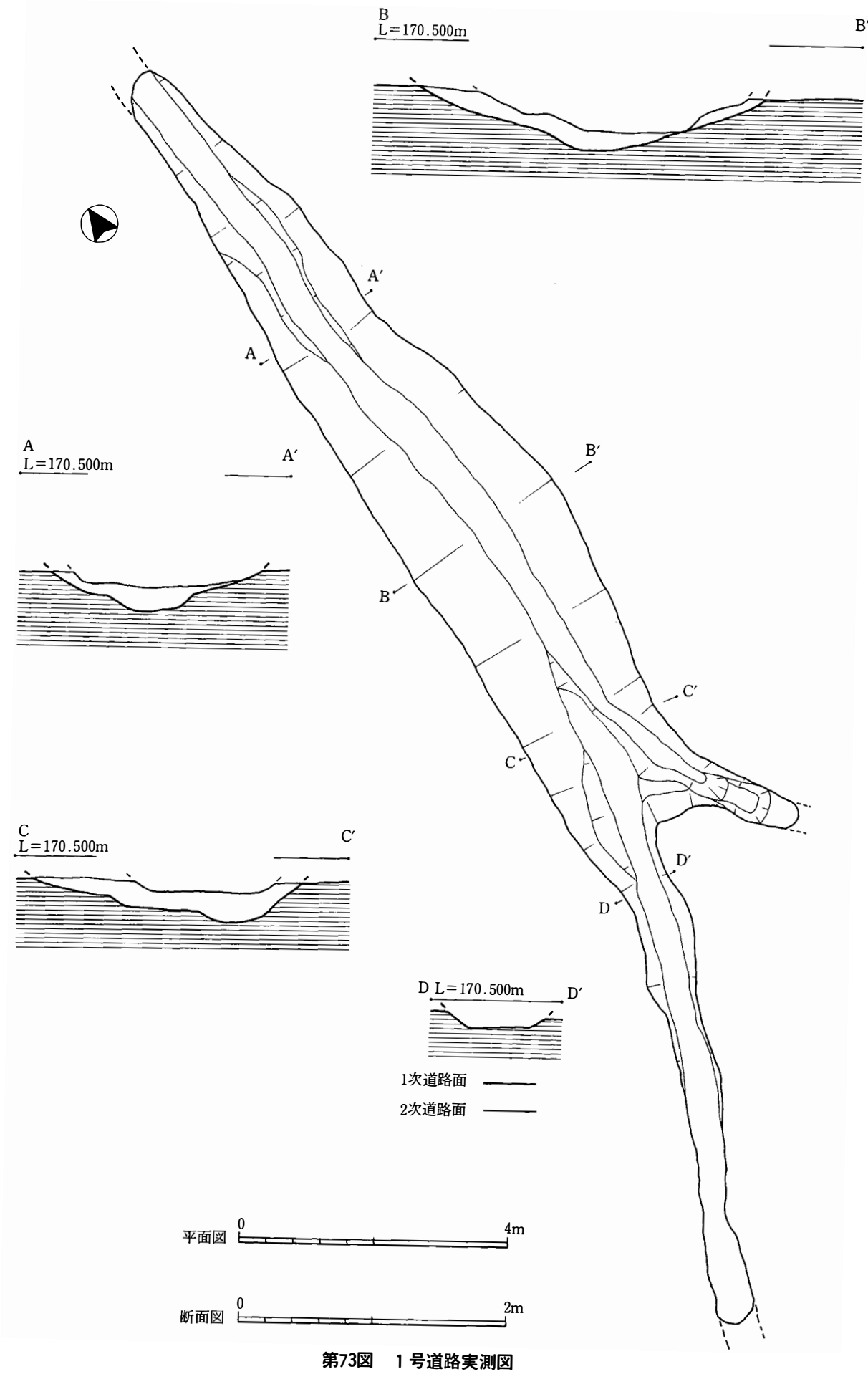
道路面は，最低でも二面が確認できた。一つは，堀切下底面近くで，もう一つは，確認面よりも10㎝下である。この中，下位道路面でしっかりとした硬化面が確認できている。

２号道路（第74図）

２号道路は，谷部から南東方向へと向かった状況にある（**第72図**)。検出状況は，両端とも削平によ



第72図　鎌倉時代以降遺構位置図

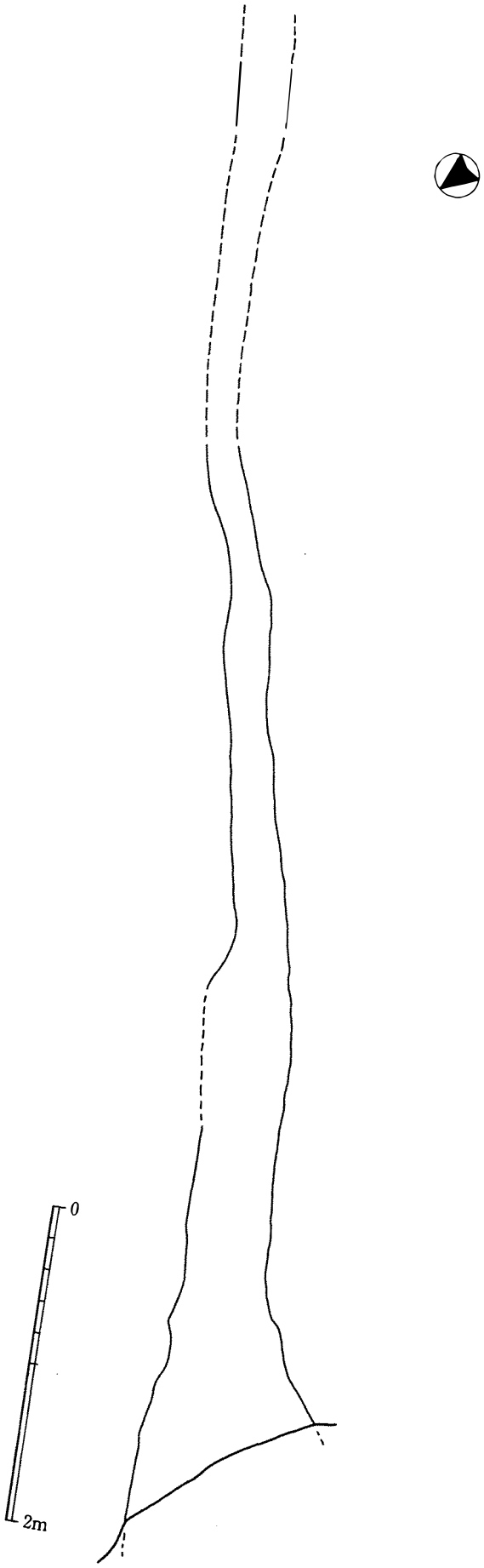


第73図　1号道路実測図

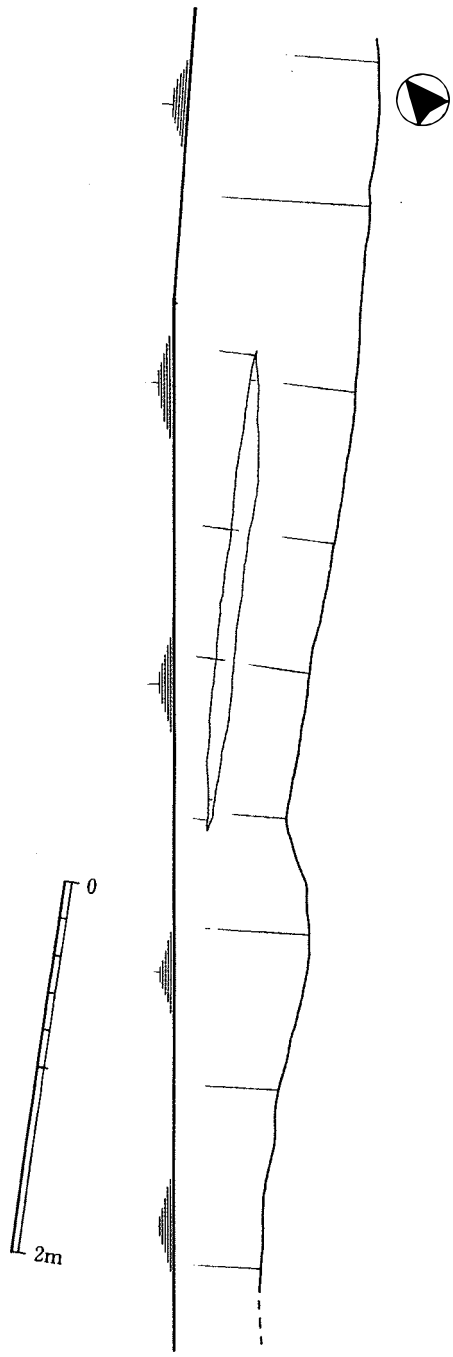
って失われている。その長さは，18.3mを測る。その幅は，最大のところで2mである。調査では硬化面のみが確認されているが，その遺存状況からは，堀切道であること想像される。

3号道路（第75図）

3号道路は，調査区の西側で一部確認された堀切道である。谷部から南西方向へと向かった状況で検出されている（第72図）。検出状況は，北端が調査区外へ延び，南端については未掘である。調査対象



第74図　2号道路実測図



第75図　3号道路実測図

となった部分の長さは，12.7mを測る。その幅，深さは，不明である。

3．柵状柱列

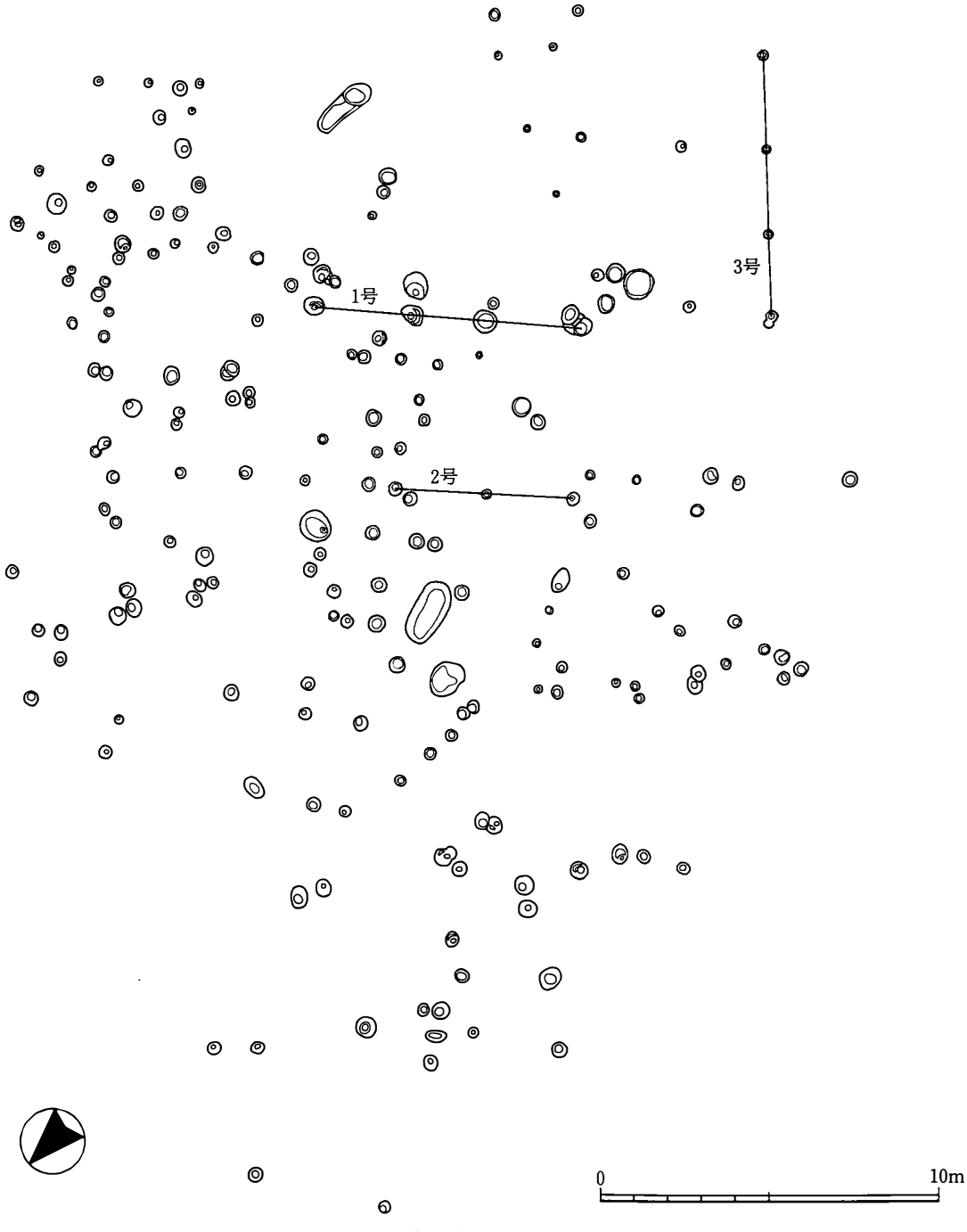
柵状柱列は，3列を検出した。その位置は，2号道路近くの尾根部周辺にある（**第72図**）。それらを1号柵状柱列～3号柵状柱列と呼んだ。この中，1号柵状柱列と2号柵状柱列は並列し，3号柵状柱列はその二つの並びに対して横位置に並ぶ。遺構の状況から，その用途を類推することはできない。各遺構ごとに見ていこう。

1号柵状柱列（第76図）

1号柵状柱列は，4個の穴が並ぶことによって確認された。両端の両柱穴間の長さは，6.45mである。柱間隔は，北端から2.34m，1.75m，2.36mである。いずれの穴からも柱痕跡が確認されている。

2号柵状柱列（第76図）

2号柵状柱列は，3個の穴が並ぶことによって確



第76図　柵状柱列・穴実測図

認された。両端の両柱穴間の長さは，4.25mである。柱間隔は，北端から2.05m，2.2mである。北側２個の穴から柱痕跡が確認されている。

３号柵状柱列（第76図）

３号柵状柱列は，４個の穴が並ぶことによって確認された遺構である。両端の両柱穴間の総延長は，6.1mである。柱間隔は，西端から1.94m，1.96m，2.2mである。柱穴の遺存状況が悪く，柱痕跡が確認されなかった。

４．土坑

土坑は，12基を検出した。１号が平安時代の墓であるので，２号土坑～13号土坑と呼んでいる。調査区におけるその位置は，尾根部よりもその縁から谷部に至るまでの緩斜面にある（**第72図**）。なお，位置関係における偏在の傾向は，認められない。以下，２号土坑から見ていこう。

２号土坑（第77図）

調査区にある谷部の中で，もっとも低いところで確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の円形である。断面形は，台形である。径は，上端で1.2m～1.26m，下端で0.92m～0.82mである。深さは，48㎝を測る。

３号土坑（第77図）

２号道路の北側に隣接して確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の楕円形である。断面形は,皿状を呈している。大きさは,上端で長軸1.2m，短軸0.92m，下端で長軸0.86m，短軸0.64mである。深さは，10㎝を測る。

４号土坑（第77図）

調査区にある谷部にあり，その西側で確認された（**第72図**）。平面形態は，不整の楕円形である。断面形は，深い皿状である。上端では長軸0.72m，短軸0.79mであり，不整の円形を呈する底面では0.46m～0.48mである。深さ20㎝を測る。

５号土坑（第78図）

調査区の中央部，２号柵状柱列の近くで確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の円形であるが，西側上端が大きく削り取られている。遺構の掘削は，段掘り状で，一部に中位面が残されている。断面形は，皿状を呈する。径は，上端で1.7m～1.73mである。深さは，30㎝を測る。

６号土坑（第78図）

５号土坑同様に，２号柵状柱列の近く，５号土坑の南側で確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の円形である。断面形は，皿状を呈している。径は,上端で0.82m～0.7m,下端で0.92m～0.82mである。底面を大きく失っているので，その深さは不明であるが，推定では10㎝程である。

７号土坑（第78図）

１号道路の近くで確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，上端も下端も共に不整の楕円形である。断面形は，皿状である。上端では長軸1.6m，短軸1.32mであり，下端では長軸1.2m，短軸0.82mである。深さは，24㎝を測る。底面は，段堀りである。併せて柱穴状の掘り込みも，西側底面に認められる。

８号土坑（第79図）

調査区の尾根近くにあり，その南端で確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，上端も下端も共に，不整の楕円形を呈している。断面形は，皿状をとる。上端では長軸1.16m，短軸0.78mであり，下端では長軸1.05m，短軸0.69mである。深さは，13㎝を測る。

９号土坑（第79図）

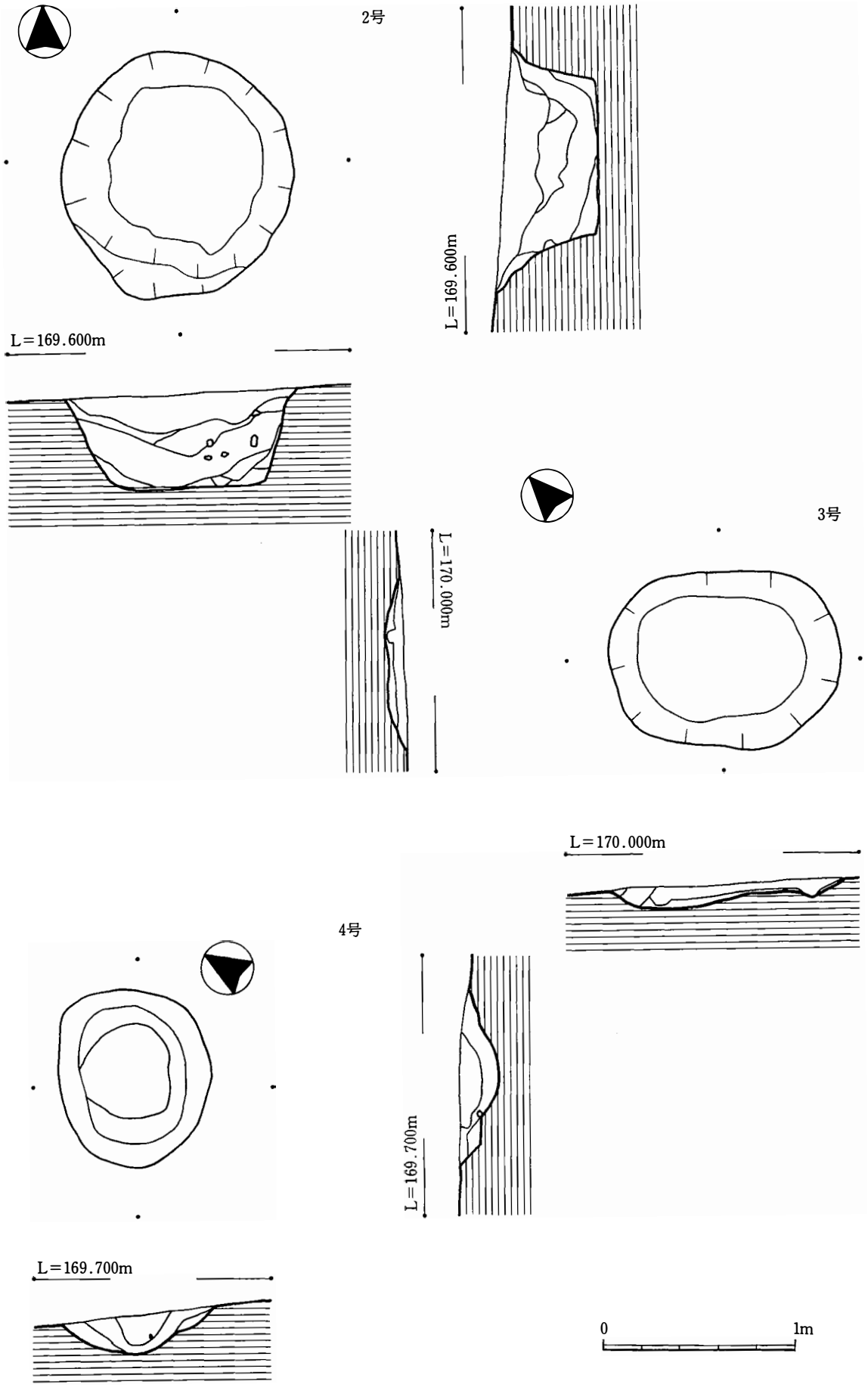
８号土坑の東側で確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の楕円形である。掘り込みは，段掘りである。断面形は，三角形である。上端では長軸2.2m，短軸1.02mを測る。底面の形状は，長さ0.9m，幅0.28mのドッグレッグ状を呈する。深さは，13㎝を測る。

10号土坑（第79図）

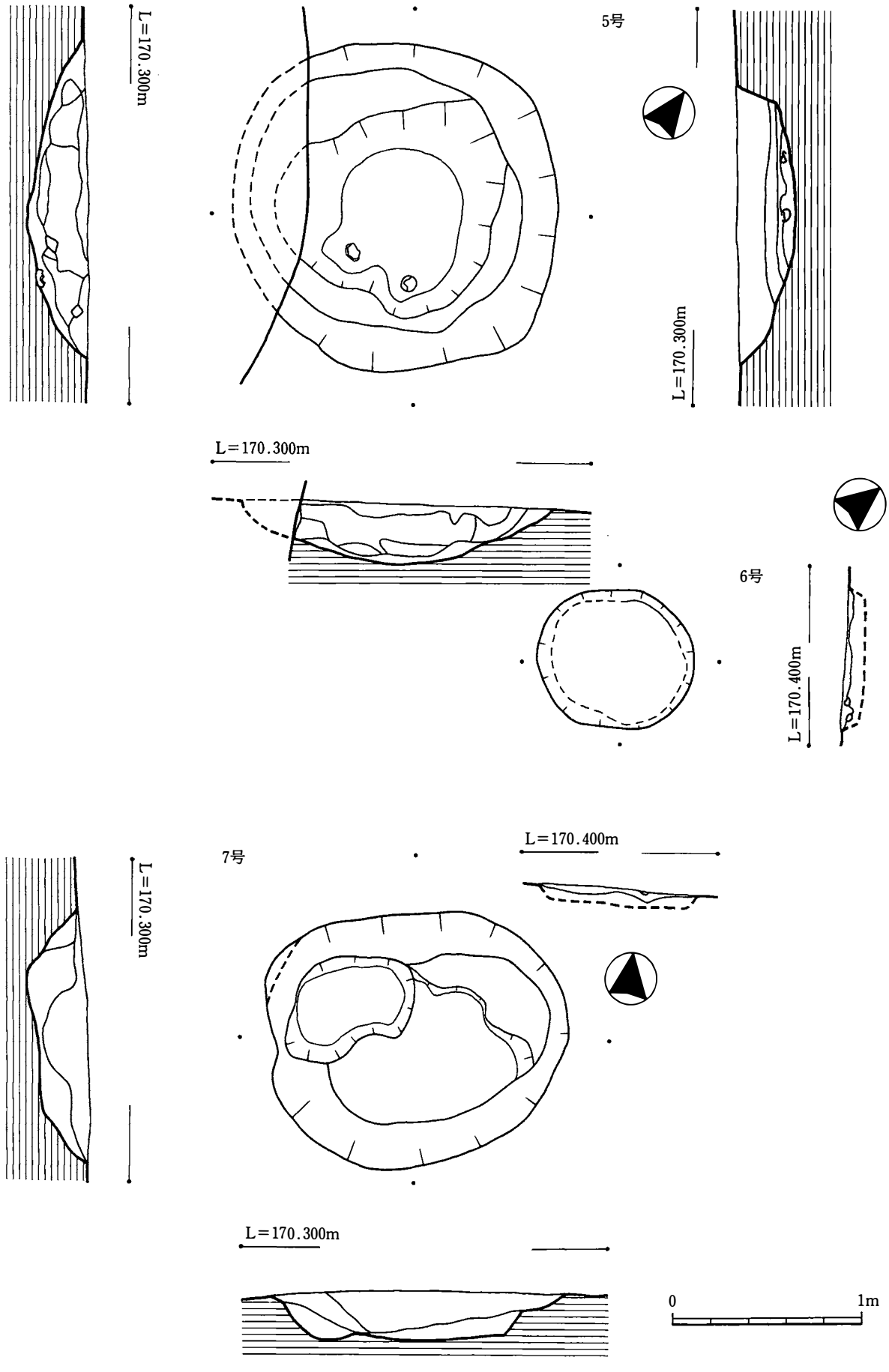
２号土坑の南側で確認された遺構である（**第72図**）。平面形態は，不整の円形で，辺が張った三角形に近い。断面形は，皿状である。径は，上端で2.56m～2.46mである。底面もまた，不整の円形である。ただし,一部は段を持っている。径は,1.82m～2.06mである。深さは，26㎝を測る。

11号土坑（第80図）

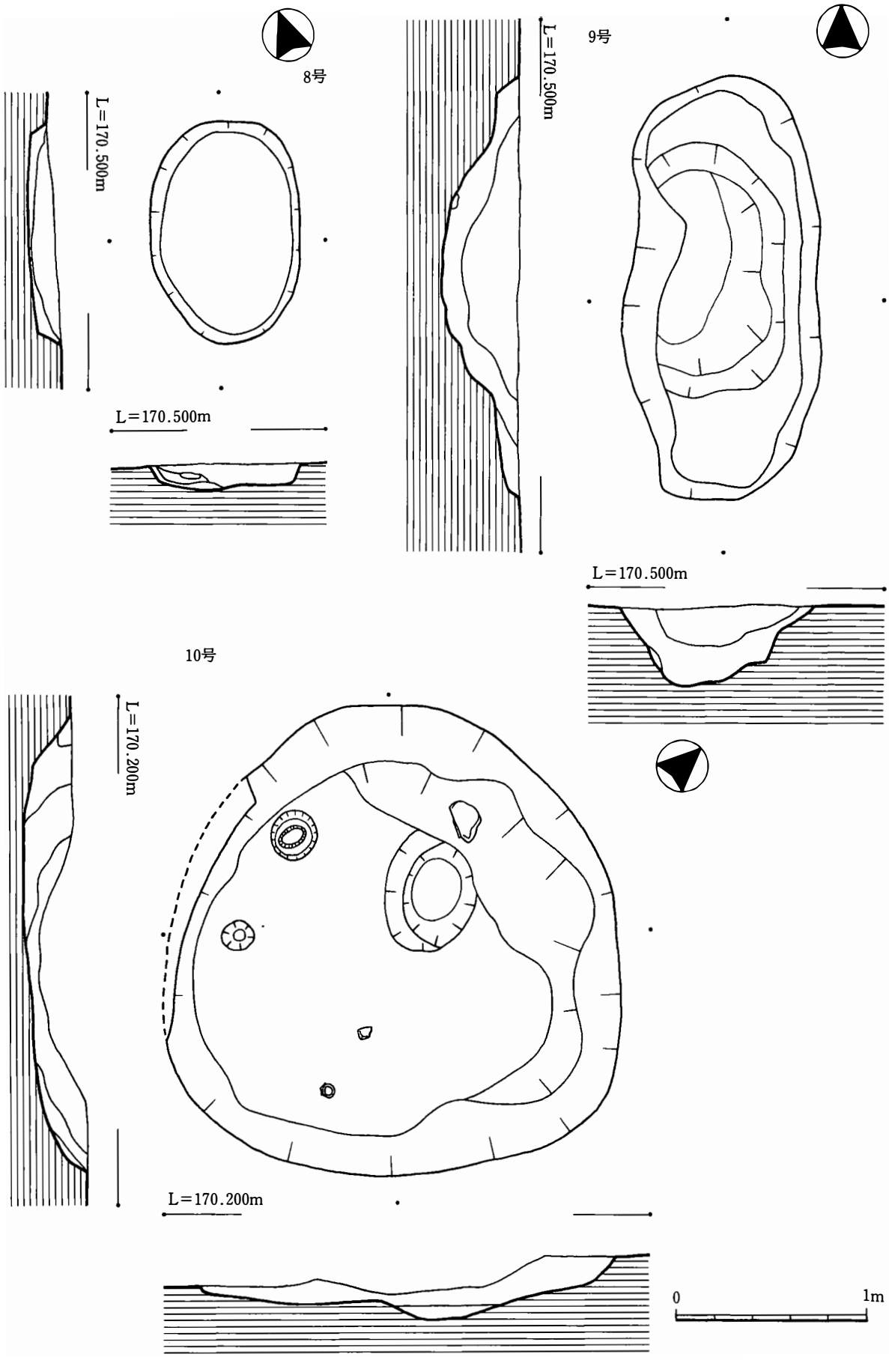
調査区の中で,もっとも北側で検出された遺構（**第72図**）で，13号との切り合い関係がある。平面形態


2号
L=169.600m
L=169.600m
3号
L=170.000m
L=170.000m
4号
L=169.700m
L=169.700m
0
1m

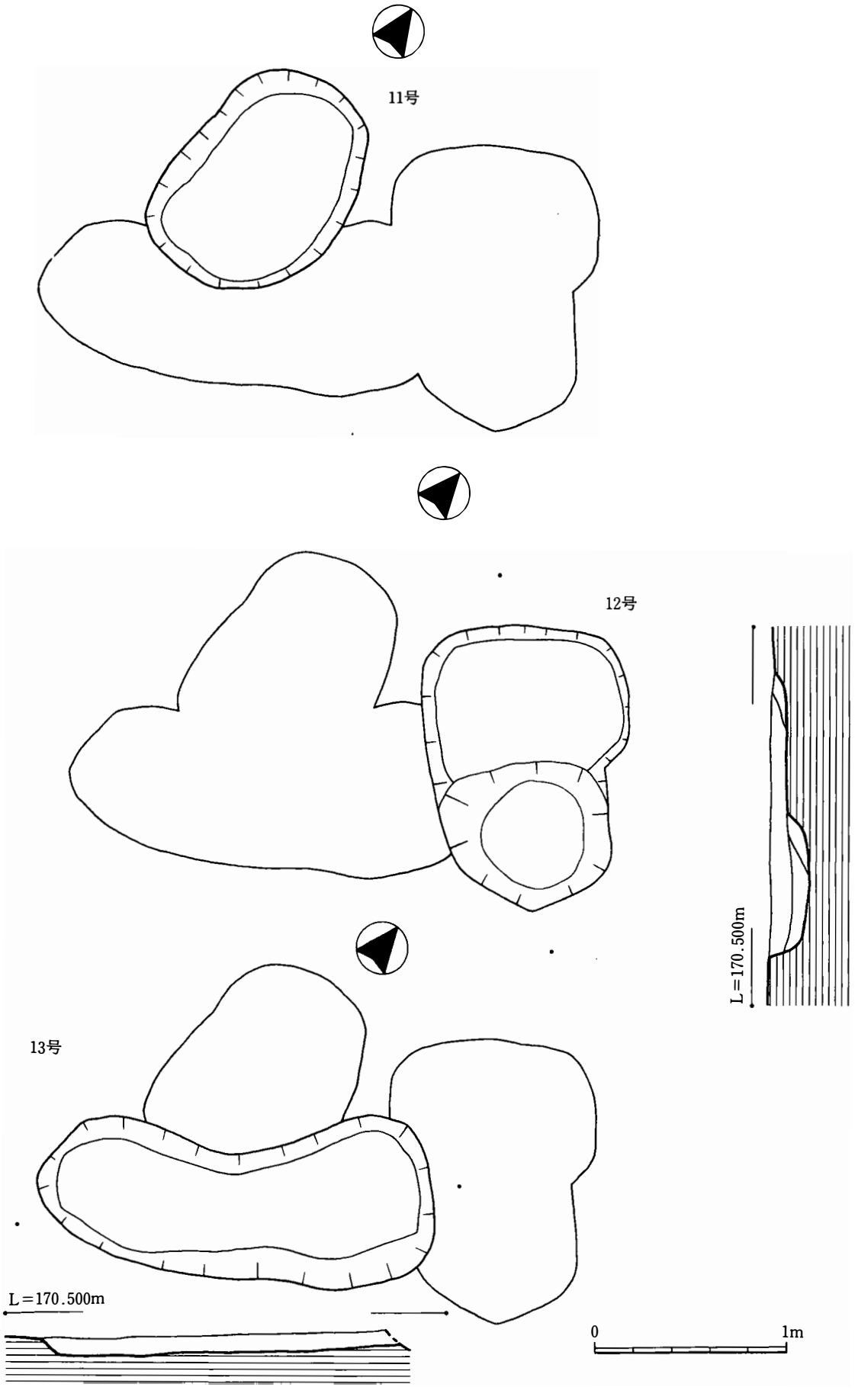
第77図　土坑実測図


5号
L=170.300m
L=170.300m
L=170.300m
6号
L=170.400m
L=170.400m
7号
L=170.300m
L=170.300m
0
1m

第78図　土坑実測図


8号
L=170.500m
L=170.500m
9号
L=170.500m
L=170.500m
10号
L=170.200m
L=170.200m
0
1m

第79図　土坑実測図



第80図　土坑実測図

は，上端も下端も共に，不整の楕円形である。断面形は，皿状を呈する。上端では長軸1.21m，短軸0.89mであり，下端では長軸1.06m，短軸0.69mである。

12号土坑（第80図）

13号との切り合い関係を持って検出された遺構である。平面形態は，不整の台形と不整の円形が組み合わさった状況である。不整の台形をA，不整の円形をBとしよう。Aは，上底0.6m，下底0.8m，高さ1.09mを測る。底面も不整の台形を呈し，上底0.46m，下底0.7m，高さ0.98mを測る。深さは，8㎝である。Bは，径0.92m～0.76mである。底面も不整の円形で，径0.54m～0.56mを測る。深さは，19㎝である。AとBという二つの遺構の切り合いであろうか。

13号土坑（第80図）

11号土坑と12号土坑によって，切られた状況で確認された遺構である。平面形態は，ドッグレッグ状を呈している。断面形は，皿状を呈している。長さは，2.07m，幅は，0.70～1.86mを測る。深さは，8㎝である。

5．おわりに

以上，鎌倉時代以降に位置付けられる遺構について見てきた。それは，道路であり，柵状柱列であり，土坑である。また，上記した遺構の他に，**第76図**で図示している多数の穴も検出されている。

周辺の地名が「堂園」とあるように，周辺は，ある堂（寺）の畑があったところかもしれない。これは近世の場合である。仮に，この地名が中世にまで遡る地名であったとするならば，ある「寺」に係わる荘園ということも可能性がある。いずれにしても，ここで検出された遺構は，そうした時代的背景を担っていて掘られ，造られたものと言える。ただし，残念ながら，いずれの遺構にしても，その時代，そしてその意義を見出すまでには至らなかった。

第Ⅳ章　総　　括

1．は　　じ　　め　　に

2．堂園遺跡における縄文時代早期の

　　集落構成と遺跡の形成過程

3．球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年

4．球磨・人吉地方の古代と堂園遺跡

第Ⅳ章　総　　括

1．はじめに

堂園遺跡では，縄文時代早期・中期・後期・晩期，古墳時代，平安時代，鎌倉時代以降に属する遺構や遺物が検出された。調査報告を終えるにあたり，その成果を一つの遺跡内で留めることなく，もっと踏み込んで球磨・人吉地方の問題として扱ってみよう。それは，上記した時代・時期の遺構や遺物が，単にその遺跡のみの問題として取り扱えないからである。つまり，一つの遺跡は，そこに遺構や遺物が残される過程の中では，球磨・人吉地方やその地方を取り巻く周辺の地域の遺跡と，直接的にも間接的にも係わっているのである。そういう意味から，本章の中で，私は，近隣の地域内の他の遺跡や周辺地域に点在する多数の遺跡に囲まれて堂園遺跡が存在しているという視点に立ちたい。そして，そうした視点の下に，私は，どうした作業が必要なのかを模索し，実際にその作業を進めたい。

縄文時代の遺構や遺物では，早期の資料がもっとも充実している。特に，集石の位置と遺物分布の問題では，当時の集落がどのような姿であったのかを知る上で，貴重な資料となるだろう。そこで，縄文時代早期集落の特徴の一つを堂園遺跡の中から見出すことを目指したい。また，球磨・人吉地方に見られる当該期の遺跡や，周辺地域の遺跡の資料を使い，その特徴を捉えなおすことにしよう。また，その遺跡の形成過程について，一つの解釈を提示することにしよう。

古墳時代では，竪穴式住居跡の出土土器が検討の対象となる。前章の第４節では，球磨・人吉地方の他の遺跡の出土土器を検討することによって，その編年的な位置付けをおこなった。ただし，球磨・人吉地方の土師器編年については，全く手が着けていないのも実状である。したがって，遺跡同士の比較によって，その相対的な段階は知りうるかもしれないが，古墳時代全体を通観しての位置付けは不可能である。そこで，私は，この編年研究を試みて，球磨・人吉地方の土師器編年に関する私案を提起したいと思う。

平安時代では，墓が検討の対象となる。当然のごとく，そこに埋葬された人物の問題が生じてくるだろう。そこで，ここでは，球磨・人吉地方の奈良時代から平安時代にかけての墓の問題や各種の遺跡・遺構の問題を取り上げることにしたい。そして，それに係わる人物やその周辺について考察することにしよう。堂園遺跡の墓であるが故に，おそらく，その結論は，球磨・人吉地方の古代史の一断面を抉ることになるだろう。

2．堂園遺跡における縄文時代早期の集落構成と遺跡の形成過程

①縄文時代早期の集落構成

堂園遺跡では，中原式土器，石清水式土器，塞ノ神式土器，無文土器が中心となるが，その中でも中原式土器と呼ぶ土器型式が主体となっている。その早期の中での段階的な位置付けは，早期中頃ということになろう。

堂園遺跡では，この時期の竪穴式住居跡の検出がされていないので，この集落は，集石の位置と遺物の分布域によって推測しなければならない。堂園遺跡の調査区の地形的特徴は，尾根部の存在と谷部の存在にある。尾根部は，調査区の南側に見られる地形であり，平坦部は狭く，南側で幅13m から北側で幅２m である。北東方向に延びている。谷部は，この尾根から北に開く。上位になるにしたがい，傾斜は緩やかになり，一部平坦地形を伴う部分もある。

遺構としては，集石３基がある。いずれの構造も，下部構造を伴わず，面的な出土状況を呈するものであった。検出された地点は，その尾根部の北側の縁にあたる。１号と２号は，尾根部の中でも広くて一段高い南側の地点にあたり，３号は尾根が狭くなって，一段低い北側の部分である。構造上の共通性と立地の共通性から，この三つの集石は，機能的にも，使用した季節においても，同じような性格であると

判断できるだろう。

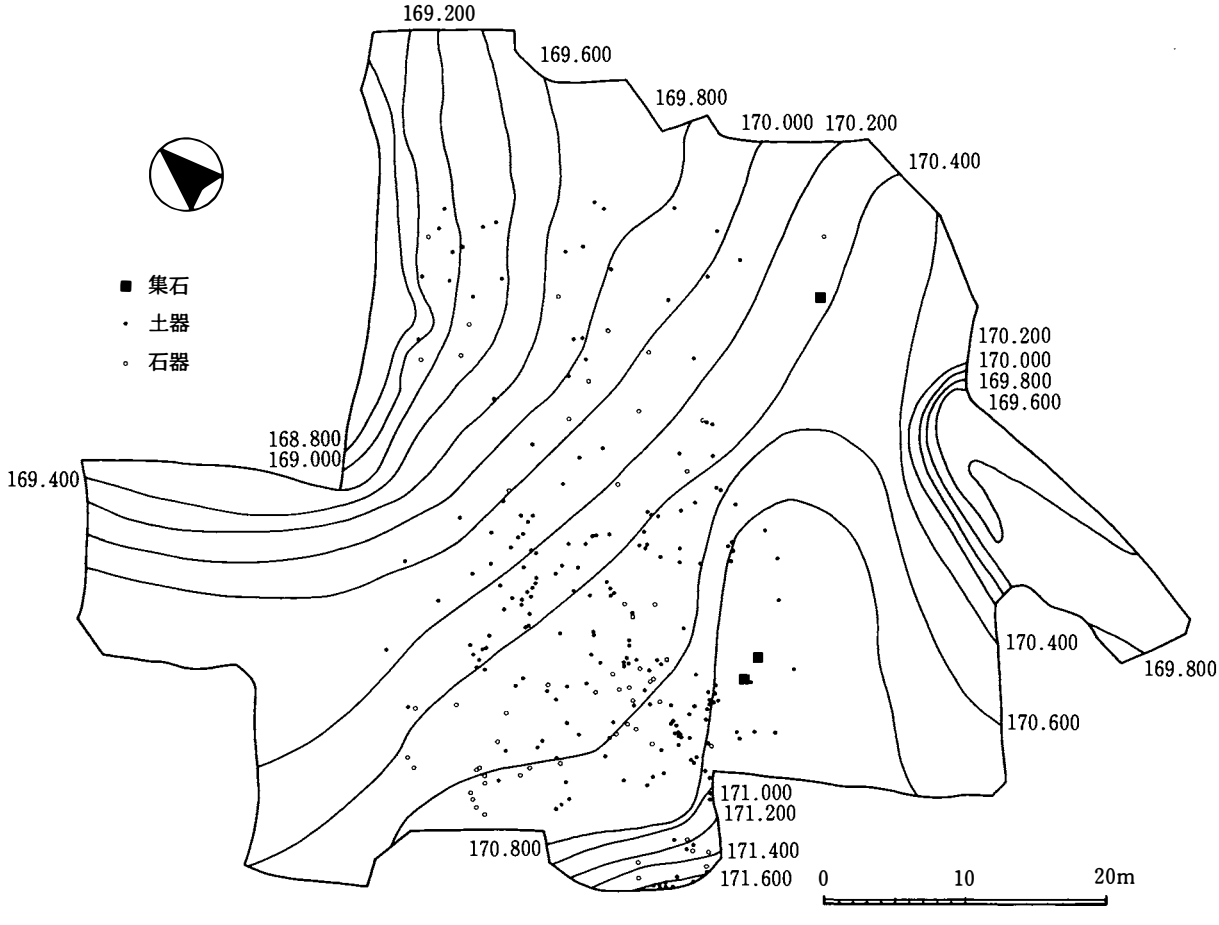
遺物分布では，尾根部の縁から谷部上位に広がる主分布域と，谷部に見られる分布域という大きく二つに分けて理解できるだろう。おそらく，この二つは，「2遺構とその位置」の「②遺物分布」の中で予想しておいたように，本来の位置近くに遺存している遺物群と，自然の拡散現象の結果，移動した遺物群とを表しているのだろう。

堂園遺跡では，集石の位置と遺物分布の特徴において，ある興味深い傾向が看取される。それは，集石が遺物分布の外縁近くに見られるという傾向である。つまり，遺物分布域と非分布域の臨界部分に，集石が残されているのである。この特徴を，堂園遺跡の縄文時代早期集落の特徴の一つと見なそう。

ところで，こうした特徴を指摘した縄文時代早期の遺跡がある，それは，熊本県大津町～旭志村無田原遺跡である（木崎1995）。この中で，私は，削平された部分とそうでない部分との関係の中で生まれる，見せかけの傾向かもしれないとしつつも，遺構配置と絡んだ傾向である可能性に注意してもいた。実は，堂園遺跡の例は，こうした無田原遺跡例と同じ傾向なのである。つまり，こうした特徴が，類例が増えるごとに，縄文時代早期の特徴として指摘できる可能性が出てきたのである。

狸谷遺跡では，竪穴式住居跡と集石と配石土坑が検出されている。ここでの遺物分布との関係を見てみよう。

狸谷遺跡では，尾根の縁からやや下りた部分に集石と配石土坑などの遺構が見られる。そして，それから広場としての空白部を設けるようにやや間を置いて尾根が北東方向へ延びる。そして，谷部を形成し始めた谷頭の部分に，今度は竪穴式住居跡が現れるのである。これが，縄文時代早期における集落構成の特徴の一つである。そこで，こうした遺構の配置と遺物の分布を関連付けて，その状況が明らかな西側を見てみれば，なるほど，多少の重複はあったとしても，そこに分布域のずれが見られ，遺物分布の方がやや谷部に落ち込んだ状況が見られるのであ

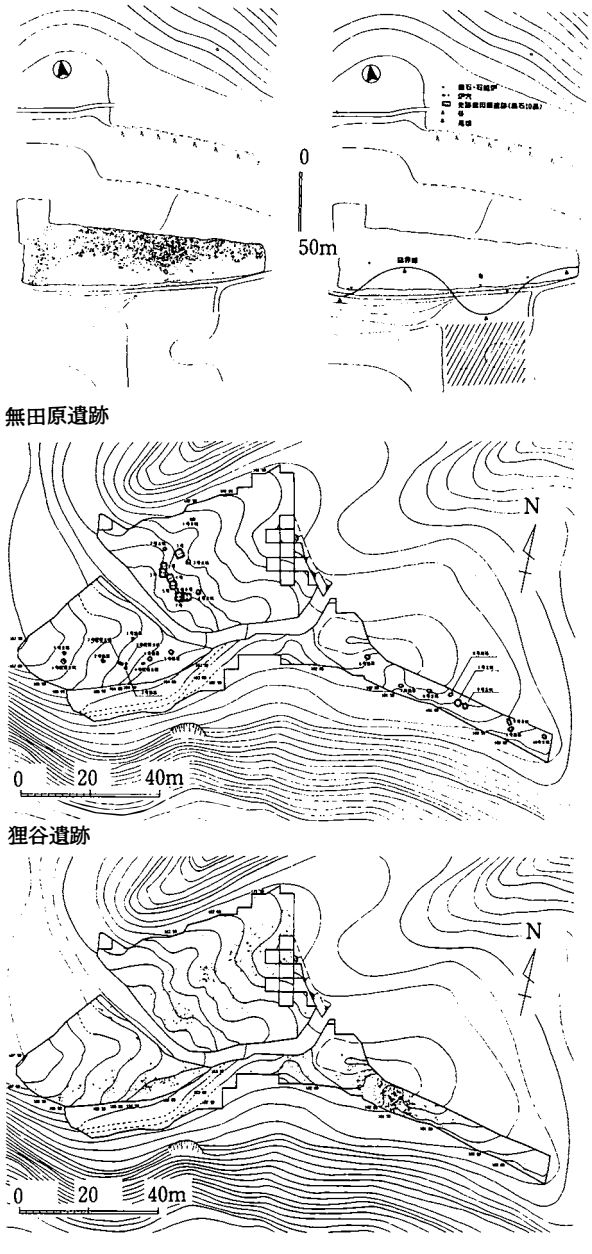


第81図　集石と遺物の分布

る。私は，こうした傾向について，「食物調理や工作などの作業の際の生活廃棄物の投棄の結果」と考え，「集落内の場の利用に，廃棄の場が加えられる」ことを指摘した（木﨑1987）。堂園遺跡と無田原遺跡，そして狸谷遺跡の共通する特徴として，遺構の位置と遺物分布とを関係付けて，そこにずれが存在することをあげられるだろう。

では，こうした特徴と集落の構成は，どのように関連するのだろうか。狸谷遺跡の結果を通して，堂園遺跡を考えてみよう。

私は，狸谷遺跡の報告の際に，その集落構成について，「居住域と調理・作業域，そして広場のような空白部と谷を中心として廃棄場による景観を持つこと」を指摘した（木﨑1987）。この指摘に則して，堂園遺跡の縄文時代早期の集落を見ると，そこには，調理・作業域と谷に設けられた廃棄場との構成があることを知れるのである。おそらく，これは，狸谷遺跡の特徴に合致したものだろう。つまり，球磨・人吉地方における縄文時代早期の集落構成の一面には，こうした調理・作業域と廃棄場との位置的な関係が存在するのである。そうであるならば，おそらくはこの近辺に居住域としての竪穴式住居跡群が存在しているだろうし，広場の存在も見られるかもしれない。そうした目で，その分布状況を見れば，尾根を介してその南側に谷部が見られるという地形的特徴に気付く。狸谷遺跡で，谷部を形成し始めた谷頭の部分に竪穴式住居跡が現れるという現象を参考にすれば，こうした谷頭部にその居住域を想定することも可能であろう。また，尾根部には，現に，何の遺構も存在していないように，ある一定の空白部としての広場が存在するかもしれない。



第82図　集落構成の例

以上のように，堂園遺跡における縄文時代早期の集落は，調査区外にある南側の谷部近くに居住域，その北に遺構空白としての広場，さらにその北に調理・作業域としての集石，その北に隣接する廃棄場という構成でレイアウトされていることが明らかである。しかも，興味深いことに，こうした構成は，狸谷遺跡の構成とは南北が逆になっている。このことは，狸谷遺跡が冬場の集落として想定できるのに対して，堂園遺跡が夏場の集落として想定できることを示唆するものである。こうした可能性が妥当なものであれば，狸谷遺跡と堂園遺跡との集石構造の違いもまた，理解できるところであろう。

②遺跡の形成過程

集落の構成について，ある程度の見通しを持った。そこで，次には，この遺跡がどのような過程で形成されていったのかを見てみよう。

第Ⅲ章第１節では，土器型式や文様の種類ごとに土器を分け，さらにその個体識別をおこなって，その分布を見た。その結果，次のような傾向が看取された。再度，まとめてみよう。

中原式土器は，主分布域と谷部の分布域とにまた

がって広がる。個体別資料では，**中原式土器1**は，23個の破片が見られるので，その傾向を見てみる。分布域は，南側の尾根周辺が中心で，環状の分布である。一部の土器片は，谷部でも検出されている。このように，**中原式土器1**は，分布が環状分布であること，谷部にも土器片の広がりが認められること，などが注意された。こうしたことを考慮すれば，**中原式土器1**は，浮遊・拡散の結果，こうした分布になったと考えられる。

石清水式土器でも，主分布域と谷部の分布域とにまたがって広がる傾向が看取される。個体別資料では，複数の破片を認めたものが，5個体あった。この中で，**石清水式土器1**は，18個の破片が見られたので，この分布域を見る。その結果，分布域は，南側の主分布域が中心で，尾根から離れた谷部の上位にあることを知れる。出土地点は，それぞれに近接した状況にあり，あまり原位置から遊離・拡散した状況にはないようだ。しかし，こうした資料でも10m以上も離れている土器片もあり，明らかに拡散の傾向は認められる。

塞ノ神式土器でも，主分布域と谷部の分布域とにまたがって広がる。個体別資料では，複数の破片が認められるものが，4個体あった。ここでは，18点の破片が認識できた**塞ノ神式土器1**と5点の破片が認識できた**塞ノ神式土器2**を扱おう。**塞ノ神式土器1**の分布域は，南側の主分布域の中の尾根の縁と谷部にある。その状況は，土器片が原位置に近い尾根周辺から谷部へと浮動・拡散したことを示している。その間の移動は，33mである。**塞ノ神式土器2**の分布域は，南側の主分布域の北端，谷部に近い位置にある。あまり，拡散した状況にはない。

無文土器でも，その分布は主分布域と谷部の分布域とにある。個体別資料では，複数の破片が認められるものが，10個体あった。その中で，10点の資料がある**無文土器1**,11点の**無文土器2**,6点の**無文土器3**を扱う。**無文土器1**の分布域は，南側の主分布域が中心である。その出土地点では，尾根近くから谷部上位まで広がっている。その広がりは，南北30m，東西15mである。その状況から判断するに，この土器は，尾根近くに原位置があり，一部のものが谷部に浮動・拡散しているようだ。このことは，**無文土器2**でも同様で，南側の主分布域を中心に，一部の土器が谷部に認められる状況である。**無文土器3**の分布域は，南側の主分布域の北外れにあり，谷部上位にあたっている。あまり拡散の状況は認められない。

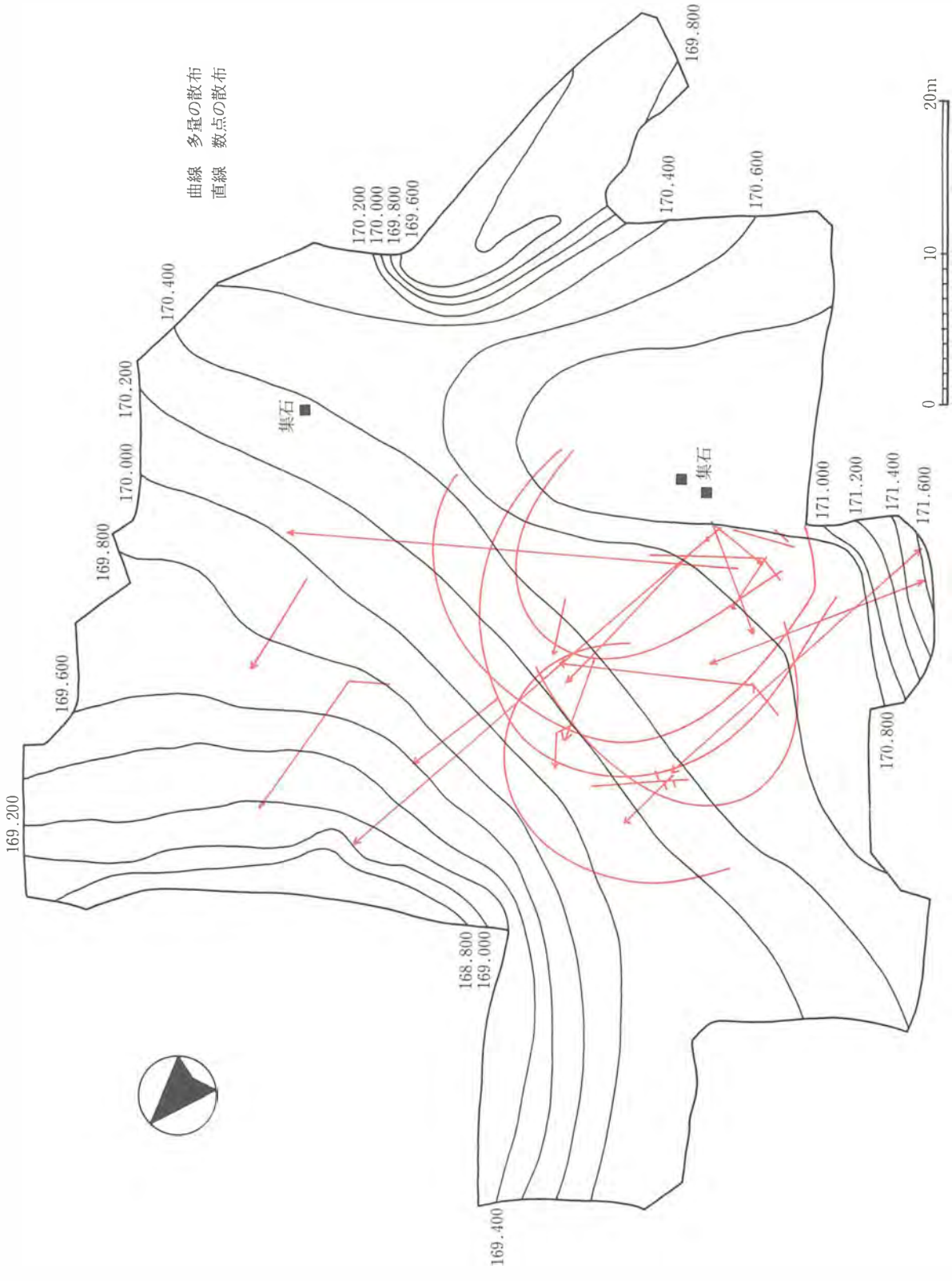
以上の結果を整理すれば，いずれの土器型式も尾根周辺の主分布域と谷部周辺とにまたがった分布が認められるようである。つまり，いずれの分布にも，主分布域とその北側という関係が認められ，土器型式ごとにその分布域を違える傾向は，認められないのである。このことは，二つの遺物の分布域が，時期を異にして形成されたわけではないことを示しているのである。

また，個体別資料においても，それぞれの分布域にまたがっているものが多く存在するなど，どちらかに偏在するという傾向は見られない。こうしたことは，土器型式の一つ一つの個体が分布域を違えて点在している状況でないことを示してもいる。

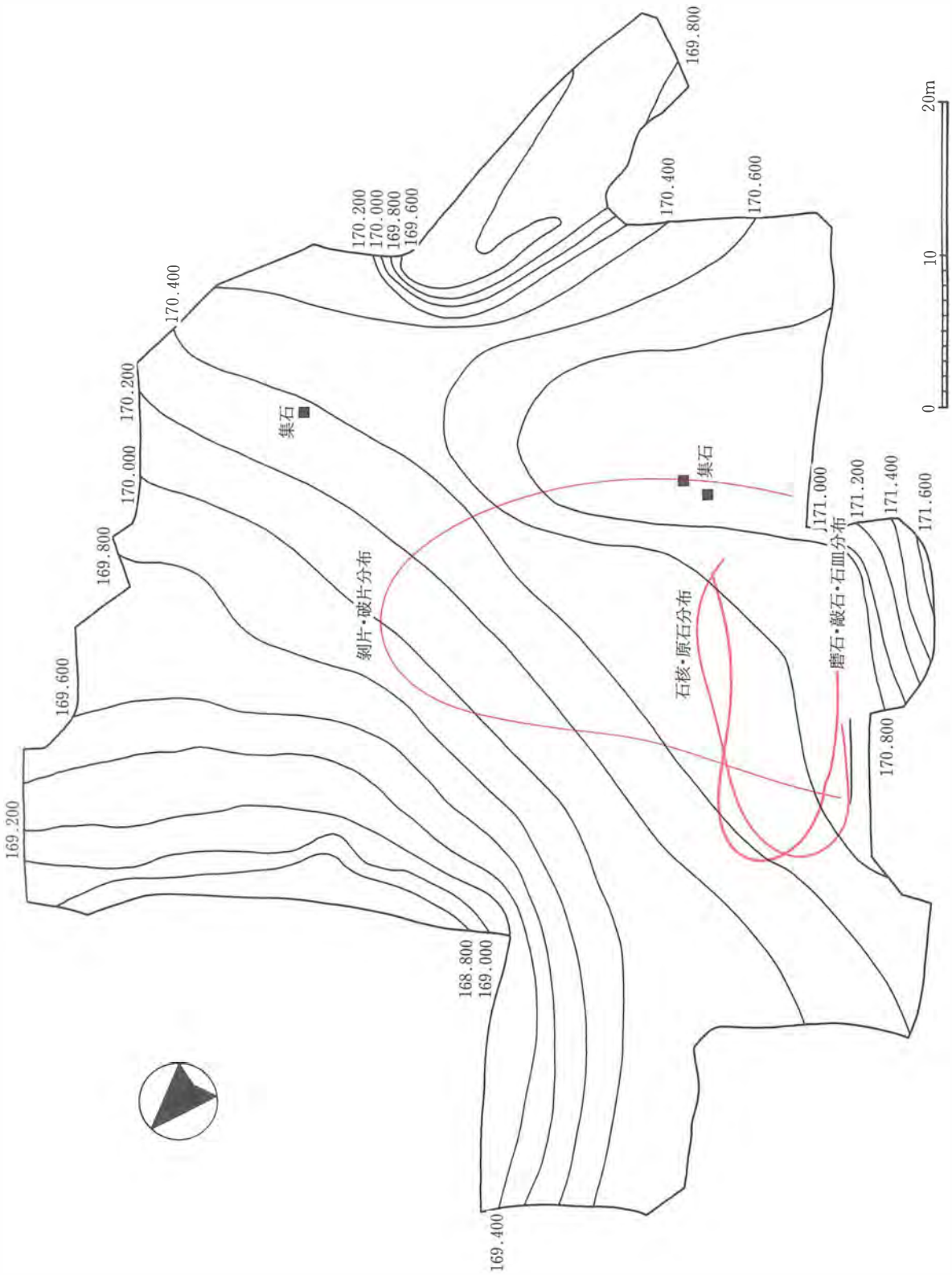
こうした傾向について，私は，先に，主分布域近くにある原位置からの浮動・拡散という遺物分布の形成を証明する現象だと考えた。では，その具体的な投棄場は，どこにあるだろうか。その事を示した概念図が**第83図**と**第84図**である。

第83図は，認識できた個体別資料についてその分布を概念化したものである。多量の散布が認められる場合には曲線で，数点の散布の場合はそれを直線で表している。この概念図からそのことを読み取ろうとすれば，1号・2号集石の北側に曲線の原点や放射線の原点が見出せる。おそらく，こうした傾向は，投棄場が1号・2号集石の北側にあったことの現れである。そこで，1号・2号集石の北側の斜面から傾斜がやや緩やかになった平坦部に，その投棄場を想定しよう。

第84図は，石器の中で重量のある磨石・敲石と石皿や原石・分割礫・石核，軽い剥片・砕片の分布域を概念化したものである。この概念図から読み取れることは，重い石器類の分布域は狭く，軽い石器類の分布域は広いということである。つまり，これは，重い石器類は，動きにくく，軽い石器類は，動きや



第83図　土器個体別資料の分布累積相関概念図



第84図　石器分布累積相関概念図

すいということを示している。しかも，そうした動きにくい石器類の分布域が，1号・2号集石の北側の斜面から傾斜がやや緩やかになった平坦部にかけて見られることは，土器の個体別資料で予想した投棄場の場所を補強するものとなるだろう。

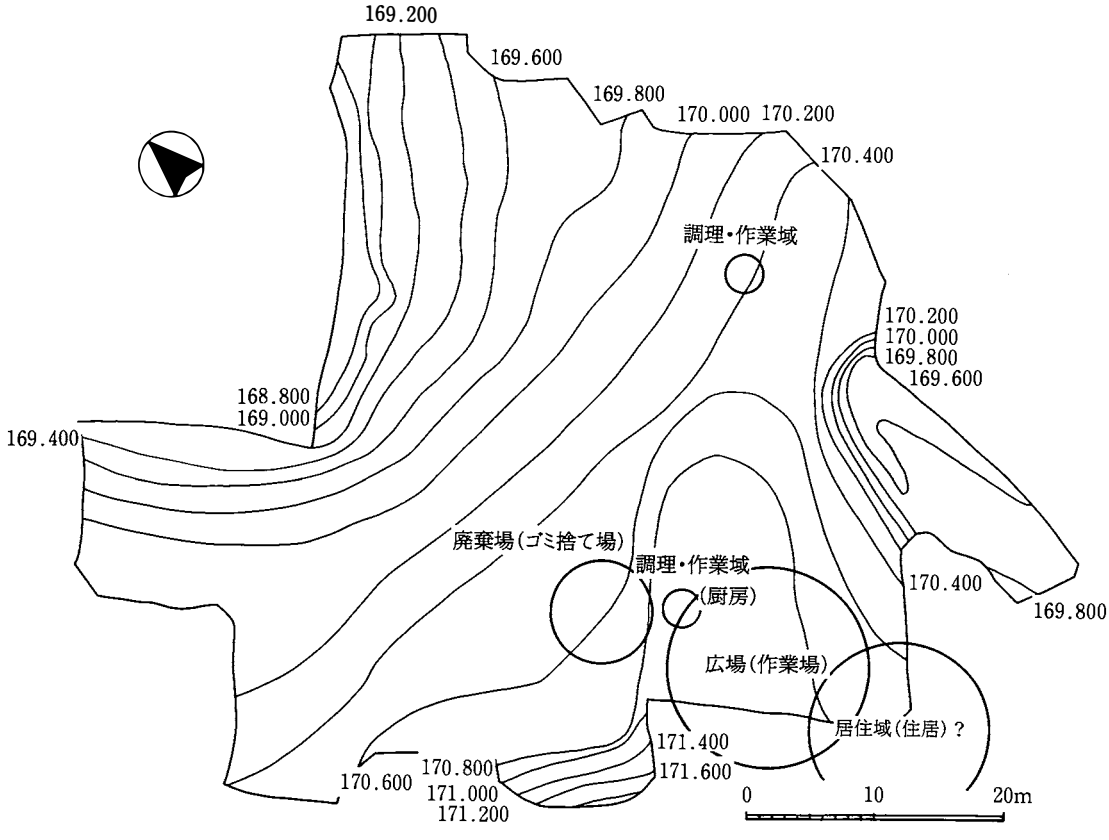
では，具体的にどのような過程を経て，この遺跡は，形成されていったのであろうか。

堂園遺跡の縄文時代早期集落は，調査区外にある南側の谷部近くに居住域，その北に遺構空白部として認識される広場，さらにその北に調理・作業域としての集石，その北に隣接する廃棄場という構成でレイアウトされていた（**第85図**）。つまり，遺物分布が認められる場所は，集石が見られる調理・作業域に隣接した廃棄場にあたっているのである。ここに，この分布域の形成過程が想定されるだろう。

堂園遺跡で夏から秋にかけて生活をしていた縄文時代早期の人びとは，集落の尾根の南側にある緩やかな斜面に住居を建てて寝起きをしていた。また，彼らは，広場で生活に係わった各種の作業をおこない，食料の処理や調理やその他の作業を調理・作業域でおこなっていた。おそらく，その場所では，それらの作業に伴って排出される，食物の残滓や不要な木片や植物の葉，さらには壊れた土器や石器などなど，多くの生活廃棄物が生み出されていた。人びとは，こうした生活廃棄物を近くの谷部に投げ捨てていたのである。こうして，谷部上位の廃棄場には，日々，投棄される生活排出物の集積が進んでいったものと想像される。

堂園遺跡では，少なくとも，50個体以上の土器が投棄されていた。また，出土した石器も，これらの土器といっしょに棄てられたものである。おそらく，今日では朽ち果ててしまって跡形もなくなってしまった食物の残滓や不要な木片や植物の葉なども，その土器に伴って棄てられていたはずである。

当時の人びとが一つの単位集団で生活していた場合，彼らは何個体の土器を所持していたのかは判らない。仮に，一つの個体の土器を所持して移動生活をおこなっていたのであれば，少なくとも，彼らは，その時期を違えながらも，50回以上はこの地で生活をし，土器を初めとした生活廃棄物の投棄をしてい



第85図　堂園遺跡縄文時代早期の集落構成

たことになる。

一方，集積した生活廃棄物は，そのままの姿で保持されていくわけではない。有機質で脆弱なものは，急速に姿を変えて朽ち果てていき，無機質で壊れやすいものは，しだいに破損しながら多数の小破片に割れていく。こうした過程を経て，集積された生活廃棄物は，降雨や霜柱，風などの影響によって，しだいしだいに浮遊し，移動するのである。その結果が，土器や石器の拡散という形で今日認められる二つの分布域ということになろう。

以上のように，遺跡に残された痕跡は，その時々に人びとが残した生活行動に伴う遺棄・廃棄物の集積によって形作られていく。しかもそれは，火山災害などの自然災害によって一瞬にして埋没した場合を除いては,そのままの姿が保持される場合は少ない。その状態が露呈される限り，自然の営力や人為的な攪乱行為によって，しだいにその姿を変えていくのである。こうした過程の結果，遺跡は残されていく。そのことを示したものが，ここでの分析である。

3．球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年

堂園遺跡では，古墳時代の竪穴式住居跡1基とそれに伴う土器が出土した。また遺構外からも多数の土器片が出土している。

第Ⅲ章の第4節の「まとめ」の中で，私は，堂園遺跡の出土土器を中心に据えて，それと同じ時期ないしその前後の時期の土器群を，球磨・人吉地方の他の遺跡に求めた。その遺跡とは，堂園遺跡に近い須恵村沖松遺跡（古城1996）と錦町夏女遺跡（園村1993）である。その結果，私は，堂園遺跡の出土土器が沖松遺跡3号住居跡出土土器に近い形態論的・型式論的特徴を示していることを述べた。また，併せて，沖松遺跡や夏女遺跡の古墳時代の土師器変遷が**「夏女遺跡1号住居跡→夏女遺跡2号住居跡→沖松遺跡3号住居跡→沖松遺跡1号・4号・5号住居跡」**と捉えられることも提案した。では，こうした土師器の編年は，球磨・人吉地方の古墳時代の土師器編年の中では，どのような位置にあるのであろうか。また，周辺地域の土器型式との時期的な並行関係や対応関係は，どのようになるのであろうか。私は，この点についての考察をここで示していきたいと思う。

①編年学的研究における方法について

古墳時代の土師器の編年学的研究について，ここでは次のような手順を踏んでおこなっていきたいと思う。その手順とは，第一段階から第三段階までである。

第一段階では，古墳時代の竪穴式住居跡から出土した土器の一括性を念頭に置いて，その資料を取り上げて検討する。なお，今回は，発掘調査がおこなわれて竪穴式住居跡が検出されている，錦町夏女遺跡（園村1993),須恵村沖松遺跡（古城1996),人吉市アンモン山遺跡（椎葉・松舟1985）を取り上げることにする。

第二段階では，取り上げた資料について，その形態論的・型式論的特徴を見出す。それは，須恵器の共伴関係も重要な特徴である。また，その際に，土師器の型式徴標を認識する必要があるだろう。

第三段階では，第二段階で見出した資料の形態論的・型式論的特徴を基にして，編年的に並べる。その際に威力を発揮するものが型式徴標であり，それを明瞭に示す土器形態が編年学的研究の基準となるだろう。因みに，その型式徴標としては，弥生式土器からの系譜を示す形態論的特徴，古墳時代に入って新たに成立した形態論的特徴，文様系統論的手法によって認識できる形態論的特徴などがある。この段階では，こうした特徴についても，提示していこう。須恵器の変遷もそれをおこなううえで，重要な検討材料となるだろう。

編年学的研究は，以上の手順をもって進められる。そして，最後には，周辺地域の土器型式との時期的な並行関係や対応関係についても言及する。その際の基準は，両方の地域に共通して存在する同じ形態論的特徴を示す土器であり，編年研究が進んでいる須恵器である。

②球磨・人吉地方における古墳時代の土器資料について

先に，ここで取り扱う資料として，錦町夏女遺跡，須恵村沖松遺跡，人吉市アンモン山遺跡を挙げた。そこで，それぞれの遺跡ごとに，取り扱う竪穴式住

居跡を例示していこう。

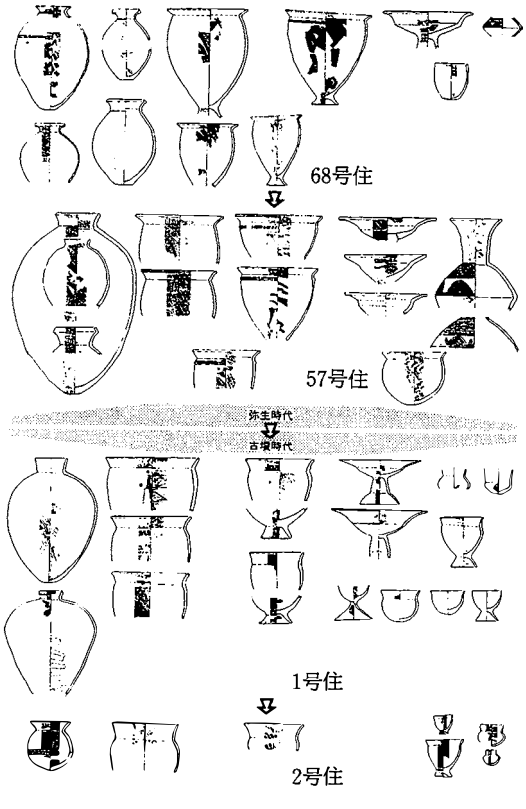
夏女遺跡（第86図）

熊本県球磨郡錦町木上に所在する遺跡である。調査は，農道建設に先立って実施された。その結果，弥生時代後期前半から古墳時代にかけての竪穴式住居跡が，67基検出されている。

検討の対象とする竪穴式住居跡は，出土量的にも土器形態的にも豊富な資料が検出されている1号住居跡と2号住居跡である。

1号住居跡　出土土器には，壺，鉢，高坏，甕などの土器形態がある（**第86図**）。

壺には，複合口縁を持つ大型のものと，素口縁で卵形の胴部と丸底のもの，そして小型のものがある。鉢には，脚が付かないものと付くものとがある。また，口縁形状では，屈曲口縁と直口縁がある。その組み合わせは，屈曲口縁で丸底のもの，直口縁で脚が付くもの，屈曲口縁で脚が付くものである。高坏の体部は，丸みを持つ下半部としゃくれながら強く外反して長く延びて口縁へ至る体部上半部に特徴がある。また脚部では，やや内反り気味に丸みを持つ脚柱部と，お碗を伏せた形状の脚裾部という特徴が見出せる。甕には，大型品と小型品がある。大型品は，頸部においての縦方向のハケ調整が特徴的である。その結果，頸部と胴部の境は，強く屈曲して明瞭である。胴部最大径は，頸部のすぐ下に位置している。低い脚台が付く。



第86図　夏女遺跡出土土器の編年

2号住居跡　出土土器には，壺，高坏，甕などの土器形態がある（**第86図**）。

壺には，素口縁，卵形の胴部，そして丸底で，胴部に二条の刻み目突帯が貼り付けられたものがある。また，口縁形状は不明であるが，丸底の壺や，小型で丸底の壺もある。高坏は，脚柱部のみが出土していて，一括性には疑問がある。それは，やや内反り気味に丸みを持つ脚柱部である。甕には，大型品と小型品がある。大型品は，頸部においての縦方向のハケ調整が特徴的であるが，斜め方向のハケ調整の痕跡が観察されるものも存在する。頸部と胴部の境は，強く屈曲して明瞭である。胴部最大径も，頸部下にある。低い脚台が付く。口縁部から頸部にかけては，長くて，また強く外反する。ただし，これらには，外反の程度によって，強く外反するものと，直口気味のものがある。

夏女遺跡では，他に6号住居跡出土土器がこの2号住居跡の出土土器に近似した形態論的・型式論的特徴を持っている。

沖松遺跡（第87図・第88図）

熊本県球磨郡須恵村に所在する遺跡である。調査は，緊急畑地帯総合土地改良事業に先立って実施された。その結果，古墳時代の竪穴式住居跡が27基検出されている。

検討の対象とする竪穴式住居跡には，出土量的にも土器形態的にも豊富な資料が検出されているものも見られるが，多くのものは，遺物量が少ない。特に，須恵器を伴う竪穴式住居跡では，その傾向が強く，土器形態の構成についても情報が不足している。ただし，須恵器の編年については，ある程度の精度で研究が深められており，それを基にして一部の土器形態の傾向を窺うことも可能かと思われる。よって，それらも検討の対象にしたい。検討の対象とする竪穴式住居跡は，1号，3号，5号，15号，16号，17号，18号，22号，25号である。

1号住居跡　出土土器には,壺と甕がある（第87図）。

壺には，複合口縁状のカーブをとる口縁と素口縁がある。器形としては，卵状の球形を呈する胴部のものと，器高が低く幅広でやや小振りのものと，小型のものがある。なお，球形胴部の壺の内面には，ケズリ調整の痕跡が残されている。甕には，三種がある。一つ目は，胴部上位に最大径がくるもので，頸部から口縁部へは強く外反する。胴部から頸部への移行部の屈曲度は弱く，その境は明瞭でない。胴部内面には，ヘラ削り調整の痕跡が残されている。二つ目は，胴部形状が一つ目のものに近似してはいるが，胴部から頸部への移行部は，ほとんど屈曲せずに直線的な形状を呈している。この胴部内面にも，ヘラ削り調整の痕跡が残されている。三つ目は，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられている甕である。器形的な特徴は，胴部から頸部への移行が緩やかなことから，二つ目の土器に類似していると言えるだろう。

3号住居跡　出土土器には，壺と鉢と高坏と甕がある（第87図）。

出土している壺の口縁形状は，素口縁である。形態論的な特徴からは，まず球形を呈する胴部であり，胴部と頸部の境には刻み目突帯がめぐるものがある。また，器高が低く，胴部が強く張って幅広を呈するやや小振りの壺も見られる。口縁部は，やや内湾して立ち上がる。鉢は，すり鉢状に直線的に体部が開く器形を呈している。高坏は，脚部の特徴によって，二種が存在する。一つ目の脚部では，やや内反り気味に丸みを持つ脚柱部と，お碗を伏せた形状の脚裾部に特徴が見出せる。二つ目は，体部底から直接ラッパ状に開く脚部形状を呈している。体部下位の形状は，皿状を呈するが，その上位の形状は不明である。甕には，四種がある。一つ目は，胴部上位に最大径がきて，頸部から口縁部へは強く外反する器形をとるものである。胴部と頸部との境は，明瞭である。頸部表面の調整方向は，縦ではなくて，横である。二つ目は，胴部と頸部との境は明瞭であるが，口縁部は外へ開かずに直口する土器である。頸部表面の調整方向は，斜めである。三つ目は，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられている甕である。口縁部は，外反する。四つ目は，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられている甕である。口縁部は，直口する。

5号住居跡　出土土器には，壺と高坏と甕がある（第87図）。

出土している壺の口縁形状は，素口縁である。形態論的な特徴では，球形胴部のものがある。また，小型の丸底の壺もある。高坏は，脚部の特徴によって，二種が存在する。一つ目の脚部では，直線的な脚柱部から脚裾部が強く開くものである。二つ目は，体部底から直接ラッパ状に開く脚部の土器である。いずれも体部の形状は，不明である。甕には，二種がある。一つ目は，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられている甕で，胴部上位が膨らみ，口縁部が外反するものである。二つ目は，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられている甕であり，胴部が膨らまずに口縁部が直口するものである。

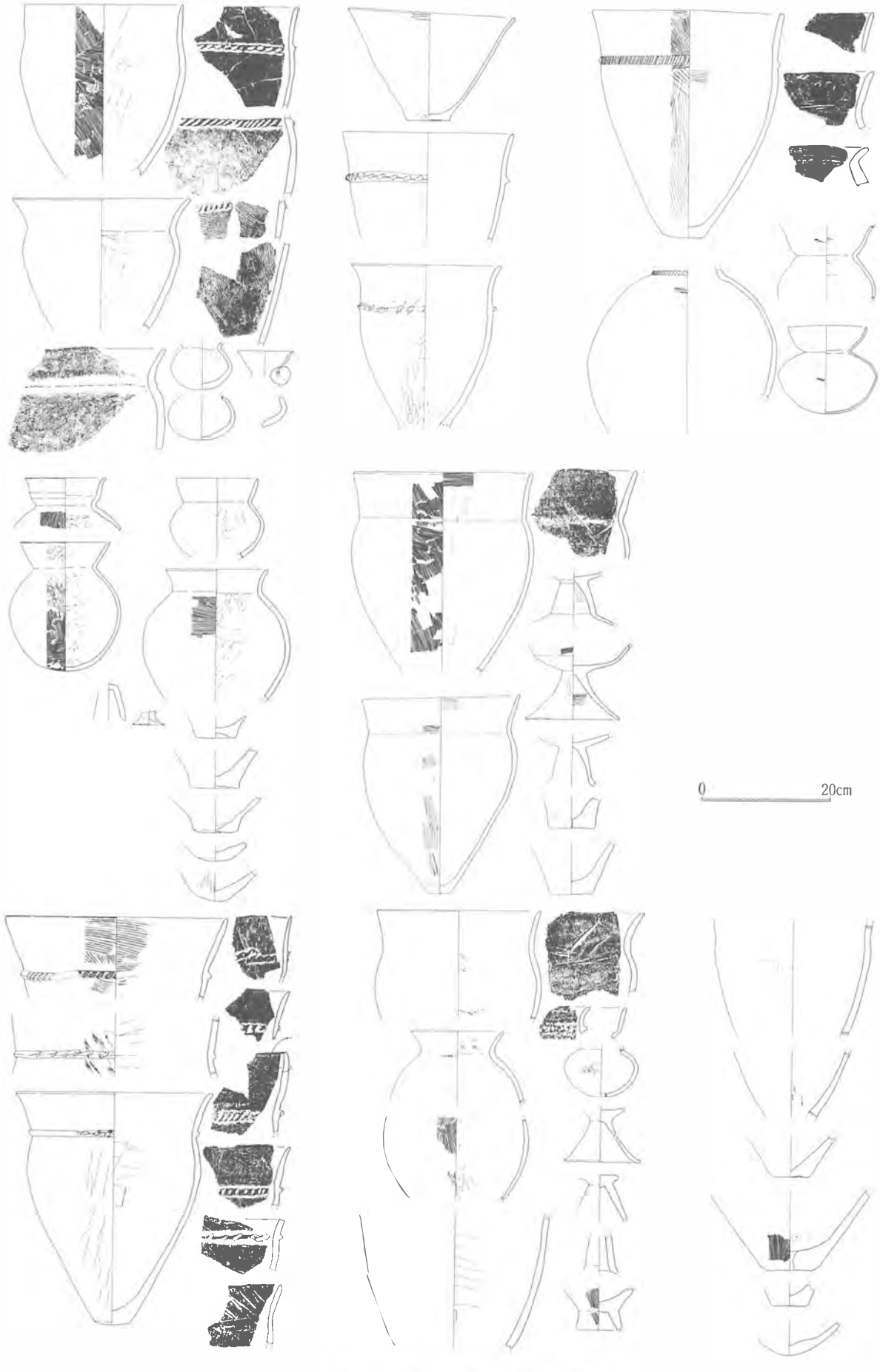
15号住居跡　出土土器には，壺と鉢と高坏と甕がある。また，須恵器の甑が伴う（第88図）。

壺の口縁形状は，素口縁である。胴部形状は，球形を呈する。頸部から口縁部への立ち上がりは，やや外反ぎみであるが，直立している。また，頸部と胴部の境に刻み目突帯をめぐらす壺も存在する。鉢には，三種がある。一つ目は，平底で，短く直線的に体部が開く器形を呈する土器である。二つ目は，口縁が直口して立ち上がるものである。三つ目は，内湾し，口縁部下の体部に最大径がくるものである。高坏では，脚部が出土している。いずれも，体部底から短い脚柱部を経て，ラッパ状に開くという形状を呈する。甕は資料的に少なく，口縁部から頸部周辺の資料のみである。一種のみで，口縁が外反する形状を呈している。頸部には，突帯は見られないが，ヘラ描きによる斜格子文が認められる。

伴出した須恵器は，甑である。体部は，ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。また，肩部への移行部の屈曲は，強い。

16号住居跡　出土土器には,鉢と甕がある（第88図）。

鉢は，浅いボール状を呈し，平底に近い丸底から丸みをもって開く器形をとる。甕は，胴部と頸部から口縁部にかけての差が明瞭でない器形である。口



第87図　沖松遺跡１号・３号・５号住出土土器

縁部よりも下に刻み目突帯が貼り付けられている。須恵器の伴出は，調査時には認められていない。

17号住居跡　出土土器には，甕がある。また，須恵器も伴出している（第88図）。

甕は，破片での出土である。その特徴から，二つの種類を認めることができる。一つ目は，突帯は見られないが，へら描きによる斜格子文が頸部近くにある土器である。二つ目は，同じ場所に刻み目突帯が貼り付けられている。前者の土器は，口縁部の外反が強い器形を窺わせ，後者の土器は，胴部から直線的に口縁部へ移る器形であることを窺わせる。

須恵器には，甑と坏身がある。

18号住居跡　出土土器には，高坏と甕がある（第88図）。

高坏は，体部を横から見た形状が逆台形を呈する器形である。体部の下部と上部とが強く折れ，その境が明瞭である。甕は，破片での出土である。直線的な口縁部の器形をとる土器で，刻み目突帯が貼り付けられている。

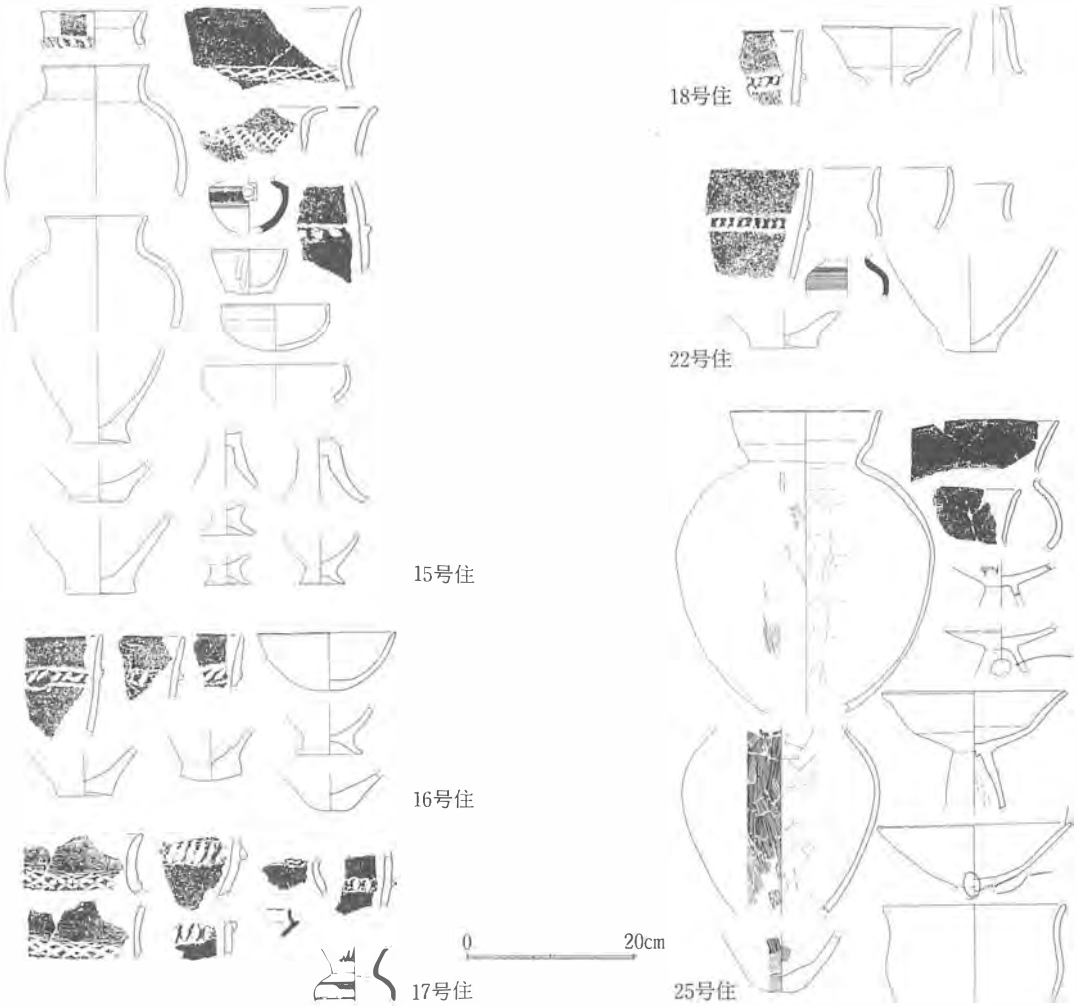
22号住居跡　出土土器には，甕がある。また，須恵器も見られる（第88図）。

甕は，破片での出土である。直線的な口縁部の器形をとり，刻み目突帯が貼り付けられている土器である。

須恵器には，甑がある。

25号住居跡　出土土器には，壺と高坏がある（第88図）。

壺には，複合口縁がある。その土器の器形は，卵状の球形を呈する胴部である。内面には，ケズリ調整の痕跡が残されている。もう一つの壺の口縁形状は不明であるが，器形や調整では，先の土器に類似した特徴を示している。高坏には，脚の形状や体部の形状から三つの種類がある。一つ目は，丸みを持った脚柱部を持つ土器である。二つ目は，体部底に



第88図　沖松遺跡15号・16号～18号・22号・25号住居跡出土土器

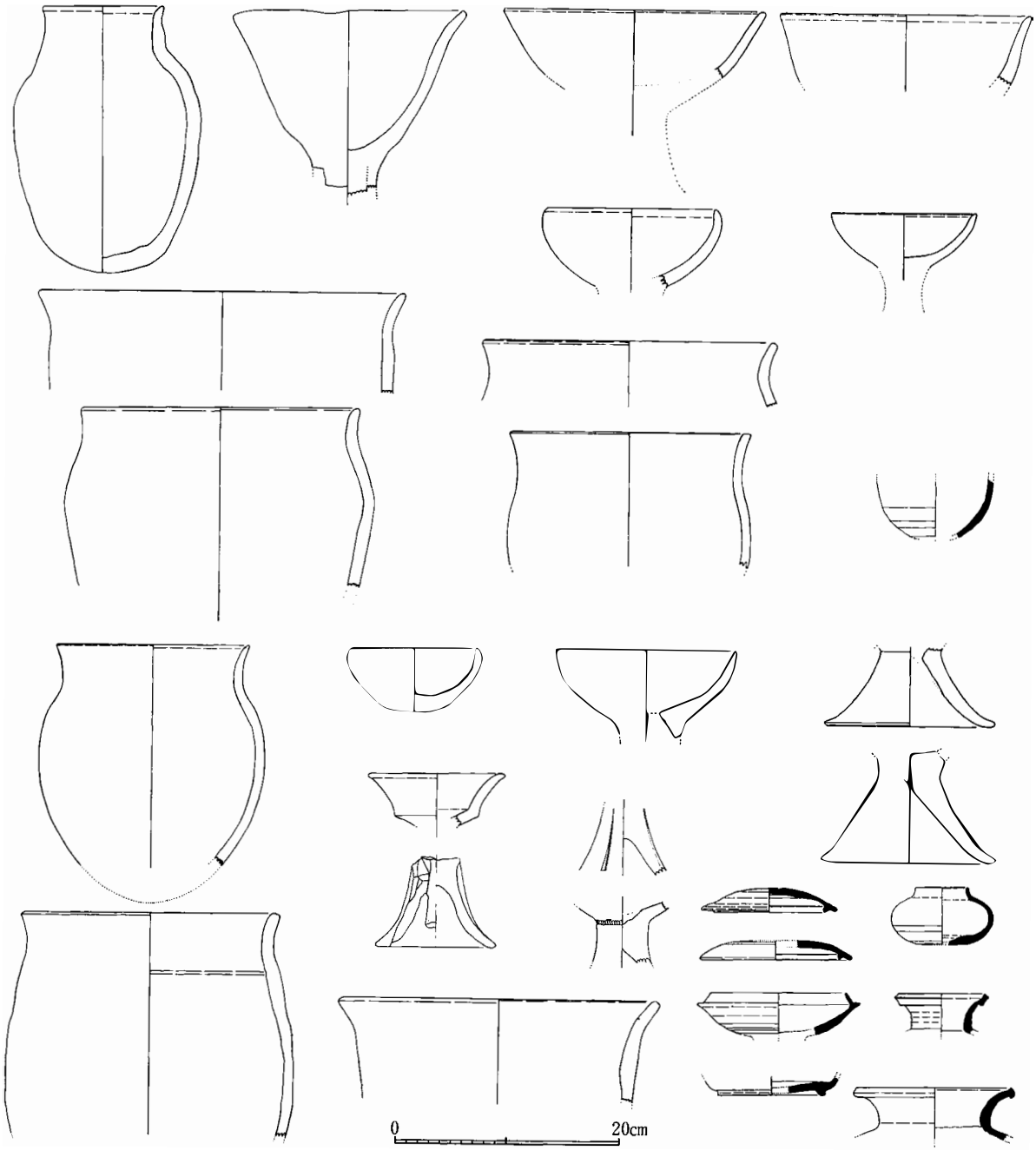
ラッパ状に開いた脚が付く土器である。いずれの土器も，体部には明瞭な屈曲部がある。三つ目は，体部がそのまま直線的に開いていく器形である。脚の形状は，不明である。

アンモン山遺跡（第89図）

熊本県人吉市下原田町に所在する遺跡である。調査は，圃場整備事業に先立って実施された。その結果，古墳時代の竪穴式住居跡が２基検出された。資料は，ある程度の量がまとまって出土している。ただし，それらは，出土状況が不明瞭な点も多い。こういうことから，今回取り扱う資料は，参考資料として提示するに止める。

１号住居跡　出土土器には，壺と高坏と甕がある（**第89図**）。

壺は，口縁部から頸部が真っ直ぐに立ち上がり，あまり張らない胴部に器形的な特徴がある。全体の形状は，砲弾形に近い。器面の調整は，外面がヘラケズリであり，胴部内面にもヘラケズリの痕跡が見られる。高坏は，体部が丸みをもって開いていく器形で，浅いボール状を呈している。脚の形状は，不



第89図　アンモン山遺跡出土土器

明である。甕には，二種がある。一つ目は，胴部上位で強く張り，口縁部が直口する土器である。胴部内面には，ヘラケズリ調整の痕跡が残る。二つ目は，口縁部が弱く外反する土器である。

2号住居跡　出土土器には，鉢と高坏と甕がある。須恵器も出土している（**第89図**）。

鉢は，口縁部が内湾し，口縁部下の体部に最大径がくるものである。高坏には，三種がある。一つ目は，丸みを持った体部で，口縁部がやや立つ器形である。二つ目は，口縁部が内湾し，口縁部下の体部に最大径がくる器形である。三つ目は，朝顔形に開く体部の土器である。甕は，口縁部が弱くはあるが外反する器形である。胴部内面には，ヘラケズリ調整の痕跡が残る。

須恵器は，形態が不明であるが，1点出土している。

以上の他に，祭祀行為の結果として石の累積が認められる地点から，多量の土師器や丹塗りの土器が出土した。甕は，胴部が膨らみ，口縁部がやや外反しながらも直口するという器形を呈している。高坏は，丸みを持った体部で，口縁部がやや立つ体部である。脚は，体部底から直接に開く形状にある。こうした特徴は，竪穴式住居跡の資料と，形態論的・型式論的特徴が類似している。また，これらの土師器に混じって，7世紀から8世紀にかけての須恵器も検出されている。その形態には，蓋坏，坏身，椀，壺などがある。

アンモン山遺跡では，2基の竪穴式住居跡が検出されている。その時期的な問題は，伴う須恵器の資料数が少なく明確ではない。ただし，石の累積地点で出土した資料については，土師器の特徴から竪穴式住居跡とほとんど時期差がないものと判断される。また，2号住居跡では須恵器の伴出も確認されている。こうしたことから，アンモン山遺跡の時期を，上記した須恵器を含めての年代観でおさえておいても差し支えないであろう。

③球磨・人吉地方における土師器資料の型式論的研究

これまで球磨・人吉地方の古墳時代の遺跡について，竪穴式住居跡ごとに出土した土師器の形態論的・型式論的特徴を述べてきた。そこで，次には，球磨・人吉地方における土師器資料の編年研究に資する意味で，須恵器の共伴関係も検討材料の一つに含めた，土師器の型式徴標の認識を進めていこう。

球磨・人吉地方における土師器資料については，まず，第一に，須恵器の共伴の有無を基準にして大きく二つのグループに分けることができる。一つは，須恵器を共伴しない土師器資料であり，もう一つは，須恵器を共伴する（はずの）土師器資料である。それらを例示し，それぞれのグループごとに検討を加えていくことにしよう。

須恵器を共伴しない土師器資料が検出された竪穴式住居跡は，夏女遺跡と沖松遺跡，そして前では提示していない相良村深水小園遺跡でも見られる。さらに，今回報告している堂園遺跡もこの時期と言えるだろう。夏女遺跡と沖松遺跡の竪穴式住居跡としては，夏女遺跡1号住居跡・2号住居跡・6号住居跡，沖松遺跡1号住居跡・3号住居跡・5号住居跡・25号住居跡である。

須恵器を共伴する土師器資料が検出された竪穴式住居跡は，沖松遺跡とアンモン山遺跡にある。沖松遺跡では，15号住居跡と17号住居跡と22号住居跡，アンモン山遺跡では，2号住居跡である。また，出土した土師器の形態論的・型式論的特徴によって，沖松遺跡16号住居跡や18号住居跡，アンモン山遺跡1号住居跡は，須恵器を共伴するはずの土師器資料と考えられる。

須恵器を共伴しない土師器資料では，さらに，壺や甕の胴部内面に残されるヘラケズリ調整の痕跡の有無が判断材料としての型式徴標となるだろう。また，高坏の中で，弥生式土器に系譜が辿れる資料についても，弥生式土器を念頭においた器形変化に対して型式徴標を認めることができる。さらに，同じ弥生式土器を念頭においた甕の器形変化に対しても，型式徴標が認められる。

以上のように，須恵器を共伴しない土師器資料については，古墳時代に入って新たな特徴として現れる型式徴標と，弥生式土器からの系譜の中で認められる型式徴標が存在することが分かるだろう。そして，土器群の前後関係を判断するうえでは，弥生式

土器の特徴をより明確に留めている土器群を古く，古墳時代に入って現れる新たな特徴を持つ土器群を新しく位置付けることができる。こうした基準の下におこなったのが，第4節の「まとめ」で述べた変遷案である。それは，**「夏女遺跡1号住居跡→夏女遺跡2号住居跡→沖松遺跡3号住居跡→沖松遺跡1号・4号・5号住居跡」**というものであった。

夏女遺跡1号住居跡の出土土器には，壺，鉢，高坏，甕などの土器形態がある。この中で，型式徴標をよく示すものが，高坏と甕であろう。高坏は，弥生式土器に系譜が求められる土器である。丸みを持つ下半部と，反転して強く外反して長く延びて口縁へ至るという体部に特徴がある。また，脚部は，やや内反り気味に丸みを持つ脚柱部と，お碗を伏せたような脚裾部に特徴が見出せる。夏女遺跡57号住居跡など弥生時代の竪穴式住居跡から出土する高坏に類似している。甕では，頸部においての縦方向のハケ調整が特徴的で，この調整によって，頸部と胴部の境は明瞭になっている。こうした特徴も，夏女遺跡57号住居跡の中で認められるものである。ただし，胴部が張る部分は，夏女遺跡1号住居跡例がより頸部近くにあり，その結果，夏女遺跡1号住居跡の例がより屈曲が強い。

夏女遺跡2号住居跡の出土土器は，夏女遺跡1号住居跡よりも新しい段階の土器だと判断される。それには，壺，高坏，甕などの土器形態がある。この中で，甕に，時期差を示す特徴が現れる。頸部においての縦方向のハケ調整が特徴的であるが，斜め方向のハケ調整の痕跡も見られる。頸部と胴部の境は，夏女遺跡1号住居跡例ほどの屈曲を示していない。ただし，頸部から口縁部は，よく発達している。それは，夏女遺跡1号住居跡例よりも外反の程度が強くなり，また長く延びている点である。外反するものと直口気味のものがある。

この夏女遺跡2号住居跡出土土器に後続すると考えられるのが，沖松遺跡3号住居跡の土器群である。土器形態には，壺と鉢と高坏と甕がある。この住居跡からは，夏女遺跡1号住居跡出土の高坏に系譜を辿ることができる特徴の土器が出土している。また，甕には，四種があり，その中の二つが夏女遺跡1号住居跡や夏女遺跡2号住居跡の甕からの系列にある。それは，胴部と頸部との境が明瞭で，胴部上位に最大径がきて，頸部から口縁部へは強く外反する器形をとるものと，胴部と頸部との境は明瞭であるが，口縁部は外へ開かずに直口する土器である。こうした器形の種類は，刻み目突帯が貼り付けられた土器にも認められる。それは，口縁部が外反するものと口縁部が直口するものである。なお，こうした四種の甕は，以後も基本的には器形変化を伴いながら受け継がれていく。

この沖松遺跡3号住居跡の土器群に後続する土器群が，沖松遺跡25号住居跡と沖松遺跡1号住居跡である。いずれの竪穴式住居跡から出土した壺や甕などの土器も，内面胴部の調整痕跡がヘラケズリである点では共通している。

沖松遺跡25号住居跡の出土土器には，壺と高坏がある。この中で複合口縁の壺は特徴的である。高坏では，丸みのある脚柱部を持つ土器が特徴的である。この高坏は，体部や脚部の形状的な特徴から，夏女遺跡1号住居跡や沖松遺跡3号住居跡で出土した高坏に系譜が求められるものである。体部下半は直線的になり，口縁部の反りや延びも弱くなっている。脚柱部の丸みも弱い。

沖松遺跡1号住居跡の出土土器には，壺と甕がある。壺には，複合口縁状のカーブをとる口縁の壺が見られる。また，素口縁のものもある。甕には，三種がある。この三種は，沖松遺跡3号住居跡で注意された四種の中の三つに対応する。胴部上位に最大径が来て，頸部から口縁部へは強く外反するもの，胴部から頸部への移行部の屈曲がほとんど見られず，口縁部が直口するもの，そして，胴部と頸部の境に刻み目突帯が貼り付けられ，胴部から頸部への移行が緩やかなものである。甕では，胴部から頸部の屈曲が沖松遺跡3号住居跡に比べて弱い。しかも内面にはヘラケズリが見られるなど，調整技術の点でも沖松遺跡3号住居跡との間で型式差が見れる。

なお，沖松遺跡25号住居跡と沖松遺跡1号住居跡との間でも壺の形状において，若干の違いが存在している。それは，複合口縁の形状である。沖松遺跡25号住居跡が，より明瞭な複合口縁である点で，古

相を呈しているからである。しかも，沖松遺跡３号住居跡と沖松遺跡１号住居跡の甕との間では，型式的に最低一つ程度の型式が介在する程の差が予想される。このように，複合口縁の差や甕の問題もあり，**「沖松遺跡３号住居跡→沖松遺跡25号住居跡→沖松遺跡１号住居跡」**という変遷を考えることは，十分に可能である。ただし，沖松遺跡25号住居跡と沖松遺跡１号住居跡とが時期差であるかどうかについては，関係し対応する資料が少なく，明確には判断できない。したがって，ここでは，可能性を指摘するに止めておこう。

沖松遺跡25号住居跡や沖松遺跡１号住居跡の出土土器に後続するものは，沖松遺跡５号住居跡の出土土器群である。出土土器としては，壺と高坏と甕がある。壺は，口縁形状が素口縁で，球形胴部である。この壺に類似するものは，沖松遺跡１号住居跡に存在する。ただし，頸部の窄まり方において，沖松遺跡１号住居跡例は強く，沖松遺跡５号住居跡例は弱い。ここに型式差を見出すことは可能である。甕には，沖松遺跡３号住居跡で注意された四種の中の二つが見られる。一つは，刻み目突帯が貼り付けられ，胴部上位が膨らみ，口縁部が外反するもの，もう一つは，胴部が膨らまずに口縁部が直口するものである。この中，口縁部が直口する甕では，沖松遺跡１号住居跡よりも古いものが頸部から口縁部にかけての形状で外反りが強く，沖松遺跡１号住居跡例は直線的ないしやや内反り気味である。ここに型式差が見出せるだろう。

以上のように，私は，須恵器を伴わない土師器群が**「夏女遺跡１号住居跡→夏女遺跡２号住居跡→沖松遺跡３号住居跡→沖松遺跡25号住居跡（→）沖松遺跡１号住居跡→沖松遺跡５号住居跡」**という変遷をとることを知った。

先に例示した須恵器を共伴する土師器資料が検出された竪穴式住居跡は，沖松遺跡15号住居跡・17号住居跡・22号住居跡，アンモン山遺跡２号住居跡である。また，沖松遺跡16号住居跡・18号住居跡，アンモン山遺跡１号住居跡も，須恵器を共伴するはずの土師器資料として挙げた。

須恵器については，その型式変遷が良く分かっている。したがって，共伴する須恵器を参考にして並べることが可能だろう。

須恵器を共伴する土師器資料の中で，もっとも古いものは，沖松遺跡15号住居跡の出土土器である。壺と鉢と高坏と甕がある。須恵器の瓶が伴っている。その特徴からは，第Ⅰ型式の終わり頃と考えられる。壺は，口縁形状が素口縁で，胴部は球形を呈する。頸部から口縁部へは，やや外反ぎみながら，直口して立ち上がる。この壺は，沖松遺跡５号住居跡例に類似し，その系譜の下に置かれる土器であろう。甕は資料的に少ない。１種のみで，口縁が外反する形状を呈し，ヘラ描きによる斜格子文が認められる。これは，沖松遺跡３号住居跡で注意した四種の中の一つで，口縁部が外反するものにあたる。沖松遺跡５号住居跡例では，明瞭な刻み目突帯となっているので，ここに型式差が認められよう。他の形態としては，鉢がある。平底で，短く直線的に体部が開く器形を呈する鉢，丸い体部と直口する口縁の鉢，口縁部が内湾する鉢がある。高坏では，脚部のみであるが，短い脚柱部に特徴が認められる。

このように，沖松遺跡15号住居跡出土土器は，須恵器を伴わない土師器群にもっとも近いものである。ただし，素口縁の壺にしても，甕にしても，沖松遺跡５号住居跡例との間には若干の型式差が認められる。ここに，須恵器の最古型式に時期的に並行する土師器群の存在を予想することも可能だろう。

15号住居跡出土土器に続くものは，17号住居跡と22号住居跡がある。その前後関係は，須恵器の特徴から，17号住居跡が古く，22号住居跡が新しいと見ることが可能だろう。

17号住居跡の出土土器は，甕のみである。しかも破片である。沖松遺跡３号住居跡で注意した四種に系譜がたどれる土器の中，二つの種類が認められる。一つは，ヘラ描きによる斜格子文が見られる土器で，口縁部の外反が強い器形である。もう一つは，刻み目突帯が貼り付けられている土器で，直線的な口縁部の器形である。沖松遺跡１号住居跡で見たように，この種の甕の口縁部から頸部にかけては，直線的ないしやや内反り気味である。17号住居跡の例は，こうした形態論的・型式論的特徴を窺わせるものであ

る。須恵器の瑕や坏身の特徴から，6世紀代でも前半期に位置付けられるものであろう。

沖松遺跡22号住居跡の出土土器には，甕がある。沖松遺跡3号住居跡で注意した四種に系譜がたどれる土器の中の一つの種類の甕が出土した。それは，口縁部から頸部にかけてが直線的というよりもやや内反りぎみになる器形で，刻み目突帯が貼り付けられている。しかも，胴部から頸部，そして口縁部にかけては直線的に移行している。沖松遺跡5号住居跡例では，胴部と頸部で弱い屈折が認められるので，ここにおいても型式変化を認められるだろう。

なお，こうした甕の特徴からすれば，須恵器は出土していないが，沖松遺跡16号住居跡・18号住居跡もこの沖松遺跡22号住居跡と同じ時期とすることができる。16号住居跡の出土土器としては，他に，浅いボール状を呈する鉢が伴う。また，18号住居跡の出土土器としては，体部を横から見た形状が逆台形を呈する器形の高坏がある。

沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡は，甕の形態論的・型式論的特徴によってほぼ同じ時期にまとめられる。しかも，共伴する須恵器の特徴によって，6世紀の後半代に位置付けることが可能である。

以上のように，私は，須恵器を伴う土師器群が「**沖松遺跡15号住居跡→沖松遺跡17号住居跡→沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡**」という変遷をとることを知った。

さて，7世紀から8世紀にかけての須恵器が出土しているアンモン山遺跡を参考として検討する。

アンモン山遺跡1号住居跡の出土土器には，壺と高坏と甕がある。壺は，口縁部から頸部が真っ直ぐに立ち上がり，あまり張らない胴部である。系譜としては，沖松遺跡15号住居跡で検出されている，素口縁で，球形胴部，頸部から口縁部へがやや外反ぎみながら，直口して立ち上がる壺に求められるだろう。高坏は，体部が丸みをもって開く器形で，浅いボール状をとる。形状としては，16号住居跡で出土した浅いボール状の鉢に類似している。甕には，二つの種類がある。それは，胴部上位で強く張り，口縁部が直口する土器と口縁部が弱く外反する土器である。前者は，沖松遺跡3号住居跡で注意した，胴部と頸部との境が明瞭で，口縁部が直口する土器に辿れる。後者は，胴部と頸部との境が明瞭で，頸部から口縁部へ強く外反する土器にたどれる。

アンモン山遺跡2号住居跡の出土土器には，鉢と高坏と甕がある。鉢は，口縁部が内湾するものである。高坏には，丸みを持った体部で口縁部がやや立つもの，口縁部が内湾して口縁部下の体部に最大径がくるもの，朝顔形に開く体部のものがある。甕は，口縁部が弱く外反する器形である。この甕は，系譜的には，沖松遺跡3号住居跡で注意した，胴部と頸部との境が明瞭で頸部から口縁部へと強く外反する土器にたどれる。

さて，アンモン山遺跡では，2基の竪穴式住居跡とその近くにある石の累積地点から多くの土器が出土した。すでに前記していることであるが，これらの資料の中では，それぞれの間で明確な型式差が認められず，2号住居跡では須恵器の伴出も確認されている。こうしたことから，私は，アンモン山遺跡の時期を，7世紀から8世紀にかけての年代観で理解しておいた。仮に，こうした理解が正しければ，アンモン山遺跡出土の土師器は，沖松遺跡22号住居跡・沖松遺跡16号住居跡・18号住居跡に後続することが予想されるだろう。現に，アンモン山遺跡1号住居跡出土の壺と沖松遺跡15号住居跡の素口縁の壺との間には，数型式の型式差が認められる一方で，鉢と高坏の体部との形状的な類似性から，沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡出土土器とアンモン山遺跡出土土器との間に近い関係も予想できるのである。つまり，アンモン山遺跡は，沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡の直後に位置し，素口縁の壺においては，沖松遺跡17号住居跡や沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡の段階を経て，アンモン山遺跡1号住居跡のような壺が成立した可能性も高いのである。そこで，球磨・人吉地方における古墳時代の土器を組列化するに際して，アンモン山遺跡1号住居跡・2号住居跡を沖松遺跡22号住居跡・16号住居跡・18号住居跡に後続させ，さらに括弧付きで提示することにしたい。

以上のように，球磨・人吉地方における土師器資

料の型式論的研究の結果，次のような変遷案が提示できることになった。

「夏女遺跡１号住居跡出土土器群→夏女遺跡２号住居跡出土土器群→沖松遺跡３号住居跡出土土器群→沖松遺跡25号住居跡出土土器群（→）沖松遺跡１号住居跡出土土器群→沖松遺跡５号住居跡出土土器群→沖松遺跡15号住居跡出土土器群→沖松遺跡17号住居跡出土土器群→沖松遺跡22号住居跡出土土器群・16号住居跡出土土器群・18号住居跡出土土器群→（アンモン山遺跡１号住居跡出土土器群・２号住居跡出土土器群）」

④球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年研究の契機と目的

これまで，古墳時代の土師器編年の基礎にするための，型式論的研究を進めてきた。その結果，前記するような，住居跡出土土器群の変遷を捉えることができた。そこで，次には，こうした成果を踏まえて，球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年研究を試みよう。

近年の球磨・人吉地方の考古学調査は，行政調査の増加と調査報告書の刊行によって，各時代や各時期ともに大きな進展が見られるようになってきた。その結果，各時代・各時期ともに多くの研究成果を排出できるほどの研究材料が提示されてきてもいる。こうした中，私も，中九州全域を視野に入れつつ，球磨・人吉地方の調査成果を基にした，編年研究や通史（1995b，1996a，1996b）を試みてきた。今回の球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年研究は，その一環である。

さて，熊本県における古墳時代土師器編年研究の中で，野田拓治氏の研究業績（1982）は，群を抜き，しっかりとした足場を築いている。少なくとも今日までは，この野田氏の研究を止揚した研究は何ら見当たらないのが現実である。このことは，逆に，熊本県における古墳時代研究において重要な位置に置かれるべき土師器研究の進展が，ここ10年の間，認められなかったことを意味してもいる。つまり，このことは，一面的な古墳（時代）研究に進展が著しい熊本県の古墳時代研究の閉塞状況を暗示する研究現状でもあるだろう。

野田氏は，熊本県中部（白川流域・緑川流域）を中心とした地域をその研究対象にして，編年研究を試みた。その結果，野田氏は，「古式土師器の成立と展開」を，次のような過程で理解した。

古閑期（古閑式土器ー益城町古閑遺跡北地区溝出土土器が標式資料）**→沈目Ⅰ期（沈目Ⅰ式土器**ー城南町沈目遺跡27号住居跡出土土器が標式資料）**→沈目Ⅱ期（沈目Ⅱ式土器**ー城南町沈目遺跡23号住居跡出土土器が標式資料）**・塚原Ⅰ期（塚原Ⅰ式土器**ー城南町塚原（古墳群）遺跡６号方形周溝墓出土土器が標式資料）**→塚原Ⅱ期（塚原Ⅱ式土器**ー城南町塚原（古墳群）遺跡15号方形周溝墓出土土器が標式資料）

その年代観は，野田氏によると，**古閑期**が４世紀初め，**沈目Ⅰ期**が４世紀中頃～後半，**沈目Ⅱ期・塚原Ⅰ期**が４世紀末～５世紀初頭，**塚原Ⅱ期**が５世紀前半という。

ところで，この野田氏の編年は，熊本県中部を中心にして，熊本県北部や南部の一部を含むものであった。ただし，残念ながら，調査成果があまり多くなかった球磨・人吉地方の問題は，触れられていなかったのである。そうした意味では，野田氏編年に対する意味で，球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年は，充分に意義あるものとなろう。

先に，私は，球磨・人吉地方の古墳時代土師器の変遷を，出土した住居跡ごとに９段階～11段階に組列化して理解した。ただし，この理解は，あくまでも住居跡出土土器の形態論的・型式論的特徴によって新旧関係を導き出して並べたものであって，古墳時代土師器の型式的展開の画期を表すものではない。そうした意味では，提示した９段階～11段階を整理し，そこに型式的展開の画期を見出す作業が必要になるだろう。私は，こうした視点を基にして，球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年研究を試みるものである。

⑤球磨・人吉地方における古墳時代土師器編年

９段階～11段階に組列化した球磨・人吉地方の古墳時代土師器の変遷の中で，まず一つの画期を見出そうとすれば，夏女遺跡２号住居跡出土土器群と沖松遺跡３号住居跡出土土器群の間に求めることがで

きるだろう。それは，夏女遺跡２号住居跡出土土器群に伴う脚台付きの甕が沖松遺跡３号住居跡出土土器群では見られなくなる点を考慮してのことである。また，沖松遺跡３号住居跡出土土器群に見られる刻み目突帯を貼り付けた甕が夏女遺跡２号住居跡出土土器群では見られないという点も考慮できる。そこで，私は，球磨・人吉地方における弥生式土器から土師器への移行過程における過渡的時期の土器として，夏女遺跡１号住居跡出土土器群と夏女遺跡２号住居跡出土土器群を位置付けようと思う。

では，夏女遺跡１号住居跡出土土器群や夏女遺跡２号住居跡出土土器群と，明らかな弥生式土器である「**免田Ⅱ式土器**」(木崎1996b）との間には，どのよう関係が見られるだろうか。特に，夏女遺跡１号住居跡出土土器群と「**免田Ⅱ式土器**」との関係について見てみる必要がある。

私は，夏女遺跡の出土土器を検討する中で，**57号住居跡出土土器→１号住居跡出土土器**という変遷を想定した（木崎1996a，1996b)。それは，土器形態の組成の中での重弧文土器の有無，高坏と甕の型式変化などを勘案しての想定であった。特に，重弧文土器の有無の問題は重要で，それぞれの型式性を規定する重要な要件の一つと言えるだろう。つまり，私は，重弧文土器が消滅した時期の土器として，夏女遺跡１号住居跡出土土器群と夏女遺跡２号住居跡出土土器群を評価したいのである。そこで，こうした時期の土器を評価して，私は，「**夏女式土器**」と呼称したいと思う。しかも，この土器型式では，**夏女遺跡１号住居跡出土土器群→夏女遺跡２号住居跡出土土器群**という二つの段階が存在しているので，これをそれぞれ**夏女Ⅰ式土器**と**夏女Ⅱ式土器**と細分することもできるだろう。

一方，**夏女Ⅱ式土器**よりも新しい住居跡出土土器としては，沖松遺跡３号住居跡出土土器群，沖松遺跡25号住居跡出土土器群，沖松遺跡１号住居跡出土土器群，沖松遺跡５号住居跡出土土器群，沖松遺跡15号住居跡出土土器群，沖松遺跡17号住居跡出土土器群，沖松遺跡22号住居跡出土土器群・16号住居跡出土土器群・18号住居跡出土土器群，アンモン山遺跡１号住居跡出土土器群・２号住居跡出土土器群がある。この中で，画期を求めようとすれば，やはり須恵器の出現であろう。そこで，球磨・人吉地方における須恵器の出現を画期の基準として，それよりも古い住居跡出土土器の一群とそれよりも新しい住居跡出土土器の一群とに分けようと思う。

沖松遺跡３号住居跡出土土器群，沖松遺跡25号住居跡出土土器群，沖松遺跡１号住居跡出土土器群，沖松遺跡５号住居跡出土土器群，これらは，球磨・人吉地方における須恵器の出現以前の土師器である。弥生式土器系統の高坏に系譜が辿れる高坏を残し，沖松遺跡３号住居跡で見られる四種の甕が土器形態組成の中に現れる所に特徴が見出せる。また，内面ヘラケズリの痕跡を残す壺の存在も重要な基準となるだろう。そこで，こうした須恵器の出現以前の土師器である住居跡出土土器群を一括して，**沖松式土器**と呼称することにしよう。そして，沖松遺跡３号住居跡出土土器群を**沖松Ⅰ式土器**，沖松遺跡25号住居跡出土土器群（→）沖松遺跡１号住居跡出土土器群を**沖松Ⅱ式土器**，沖松遺跡５号住居跡出土土器群を**沖松Ⅲ式土器**と細分することにしたい。

沖松遺跡15号住居跡出土土器群，沖松遺跡17号住居跡出土土器群，沖松遺跡22号住居跡出土土器群・16号住居跡出土土器群・18号住居跡出土土器群，アンモン山遺跡１号住居跡出土土器群・２号住居跡出土土器群，これらは，球磨・人吉地方における須恵器の出現以後の古墳時代の土師器である。**沖松式土器**に現れた甕の四種に系譜が辿れる土器は残るが，その中で頸部に刻み目突帯を巡らす甕の中の一種，口縁部が外反する器形の甕の刻み目突帯は，形骸化して，ヘラ描きによる斜格子文になっている。また，素口縁の壺にも口縁部の立ち上がりにおいて，型式変化が認められる。そこで，こうした須恵器の出現以後の土師器である住居跡出土土器群を一括して，一つの土器型式として認定しようと思う。ただし，今回提示した資料では不備が多すぎるので，これらを含んだ型式性を持つ土器群の存在を予想し，資料的な充実が図られた段階でその遺跡名を付した正式な型式名を使用したいと思う。そこで，私は，当面，こうした土器群に対して「**アンモン山遺跡段階土器群**」と鉤括弧付きで呼称したい。

以上のように，球磨・人吉地方の古墳時代土師器は，**夏女式土器（Ⅰ式土器→Ⅱ式土器）→沖松式土器（Ⅰ式土器→Ⅱ式土器→Ⅲ式土器）→「アンモン山遺跡段階土器群」**（3～4の複数段階に細分される）という編年で理解することが可能となる。そこで，それぞれの土器型式ごとに，その型式性の特徴を整理していこう。

【夏女式土器】夏女式土器は，球磨・人吉地方における弥生式土器から土師器への移行過程における過渡的時期の土器型式である。土器形態の組成は，壺，鉢，高坏，甕などによって構成される。これまでの資料から知れる型式性は，弥生式土器に系譜が辿れる高坏と脚台を付ける甕，そして重弧文土器の消滅というところにある。この土器型式は，**Ⅰ式土器**と**Ⅱ式土器**に細分される。

夏女Ⅰ式土器には，壺，鉢，高坏，甕などの土器形態がある。高坏は，丸みを持つ下半部，反転して強く外反して長く延びて口縁へ至る体部，そして，丸みを持つ脚柱部にお碗を伏せたような脚裾部が付く脚台に特徴が見出せる。これは，弥生式土器に系譜が求められる土器である。甕は，頸部と胴部の境が明瞭である。これは，頸部においての縦方向のハケ調整によって作られる器形的な調整である。

夏女Ⅱ式土器には，壺，高坏，甕などの土器形態がある。高坏は，資料が含まれていないので不明であるが，**夏女Ⅰ式土器**と同じような特徴の土器を予想しよう。甕では，頸部と胴部の境が**Ⅰ式土器**ほど明瞭ではない。頸部から口縁部は，**Ⅱ式土器**に比べてよく発達している。また，外反の程度が強くなっている。二つの種類が現れる。それは，口縁部に特徴があり，いずれも外反するとはいっても，傾向が強いものと直口気味のものとである。

【沖松式土器】沖松式土器は，**夏女式土器**に後続する土器型式である。土器形態の組成は，壺，鉢，高坏，甕などによって構成される。これまでの資料から知れる型式性は，弥生式土器に系譜が辿れる高坏が型式変化を遂げながら一部に残り，脚台を付ける甕に代わって平底の甕が登場するところにある。この甕には，四種がある。それは，刻み目突帯を付さない甕で口縁部が外へ開くものと直口ぎみのもの，刻み目突帯を付す甕で口縁が真っ直ぐに延びるものと外反するもの，である。この土器型式は，**Ⅰ式土器**と**Ⅱ式土器**と**Ⅲ式土器**に細分される。

沖松Ⅰ式土器は，沖松遺跡3号住居跡の土器群を標式資料とする土器型式である。土器形態には，壺と鉢と高坏と甕がある。高坏には，**夏女Ⅰ式土器**で注意した弥生式土器に系譜が辿れる特徴の土器が見られる。甕には，四種がある。一つ目は，胴部と頸部との境が明瞭で，頸部から口縁部へは外へ開く器形の甕である。二つ目は，胴部と頸部との境は明瞭で，口縁部が直口ぎみになる甕である。三つ目は，刻み目突帯が貼り付けられた土器で，口縁部が外反するものである，四つ目は，刻み目突帯が貼り付けられた土器で，口縁部が直口するものである。

沖松Ⅱ式土器は，沖松遺跡25号住居跡と沖松遺跡1号住居跡を標式資料とする土器型式である。資料的には不備があり，今後良好な資料を探す必要があるだろう。高坏では，丸みのある脚柱部を持つ土器が特徴的で，体部や脚部の形状から**沖松Ⅰ式土器**や**夏女Ⅰ式土器**に見られる土器の系統であろう。体部下半は直線的で，口縁部の反りや延びも弱い。また，脚柱部の丸みも弱い。甕は，その片鱗が見られるが，基本的には**沖松Ⅰ式土器**の四種が揃っているものと予想される。ただし，器形的には，刻み目突帯が無い土器では，胴部と頸部との境の明瞭さが見られず，口縁部の外反や直立の傾向はそれぞれ強くなる。なお，刻み目突帯がある土器は，資料が少なくて，その傾向が不明であるが，基本的には同じ特徴を予想しておこう。内面へラケズリの痕跡を残す壺も見逃せない。複合口縁や素口縁など，他の地域との編年対比では有力な材料である。

沖松Ⅲ式土器は，沖松遺跡5号住居跡の出土土器群を標式資料とする土器型式である。構成する土器形態には，壺と高坏と甕などがある。資料が少なく，今後，良好な資料を探す必要がある。壺は，口縁形状が素口縁で，球形胴部である。頸部の窄まり方が強い。**沖松Ⅱ式土器**に見られる素口縁の壺の系統であり，型式差が見れる。甕には，**Ⅰ式土器**同様に四種の存在が予想される。検出されている資料としては，刻み目突帯が貼り付けられた甕における二種が

ある。**Ⅰ式土器**の甕との比較でみれば，口縁部の外反や直立・直口の傾向はそれぞれ強くなる。

【「アンモン山遺跡段階土器群」】この土器群は，**沖松式土器**に後続する土器群で，須恵器を伴う古墳時代の土師器である。資料的には不備が多いが，それらをまとめてみると，壺，鉢，高坏，甕などがみられる。

壺は，口縁が直口する球形胴部が特徴である。この土器は，もっとも古い須恵器が伴う沖松遺跡15号住居跡出土土器に見られ，また，もっとも新しい須恵器の段階と考えられるアンモン山遺跡１号住居跡に型式変化を遂げたものが残っている。また，他に壺としては，アンモン山遺跡で見られる口縁部が大きく開くものが見られる。

鉢は，沖松遺跡15号住居跡に三つの種類が見られる。一つ目は，平底で，短く直線的に開く体部の鉢である。二つ目は，丸い体部と直口する口縁の鉢である。三つ目は，口縁部が内湾する鉢である。また，新しい須恵器が伴うと考えられる土器群である沖松遺跡16号住居跡では，丸みのある体部で外へ直線的に開く口縁というボール状の鉢もある。この鉢の器形的な特徴は，アンモン山遺跡の高坏に類似しているものがある。高坏では，良好な資料が無い。ただし，小型で，逆台形の側面形を呈する高坏が，沖松遺跡18号住居跡やアンモン山遺跡で見られる。

甕では，明確には分からないが，総体として見れば，**沖松Ⅰ式土器**に見られる四種に系譜が辿れるものが揃っていると予想できる。器形的には，刻み目突帯が無い土器では，胴部と頸部との境に明瞭さがまったく見られず，口縁部の外反や直立の傾向は緩くなる。器形的な系譜は，胴部の張りの強弱にある。刻み目突帯がある土器で，**沖松式土器**のものとは明確な型式差が見られる。口縁部が外反する土器では，刻み目突帯は，形骸化して，ヘラ描きによる斜格子文に変わっている。口縁部が直口する土器では，頸部相当部位に付けられる刻み目突帯に変化は見られず，胴部から口縁部までが直線的に延び，やや内傾するものも見られるなど，器形変化に特徴が認められる。

なお，以上の特徴は，段階差を無視した特徴の羅列であり，今後，資料の増加が進み，共伴する須恵器の型式によって，詳細な型式細分が進んでいくものと言える。

⑥球磨・人吉地方における古墳時代土師器編年と他地域編年との対比，及び年代観

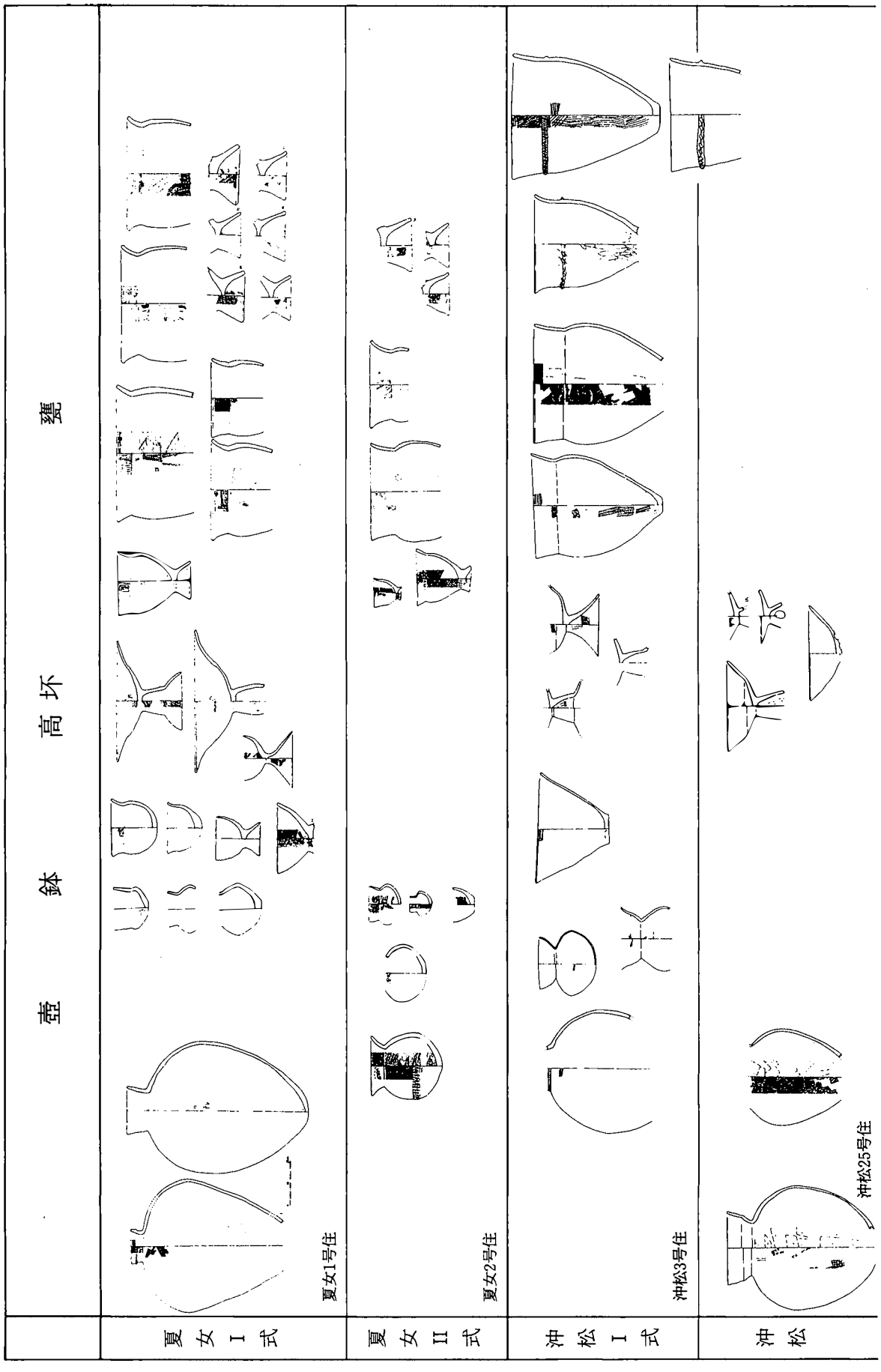
私は，球磨・人吉地方における古墳時代土師器編年について，**夏女式土器（Ⅰ式土器→Ⅱ式土器）→沖松式土器（Ⅰ式土器→Ⅱ式土器→Ⅲ式土器）→「アンモン山遺跡段階土器群」**と理解した。そこで，私は，ここで得られた編年観に則して，その特徴をもとにした他地域との編年対比，そしてその年代観を考察することにしよう。

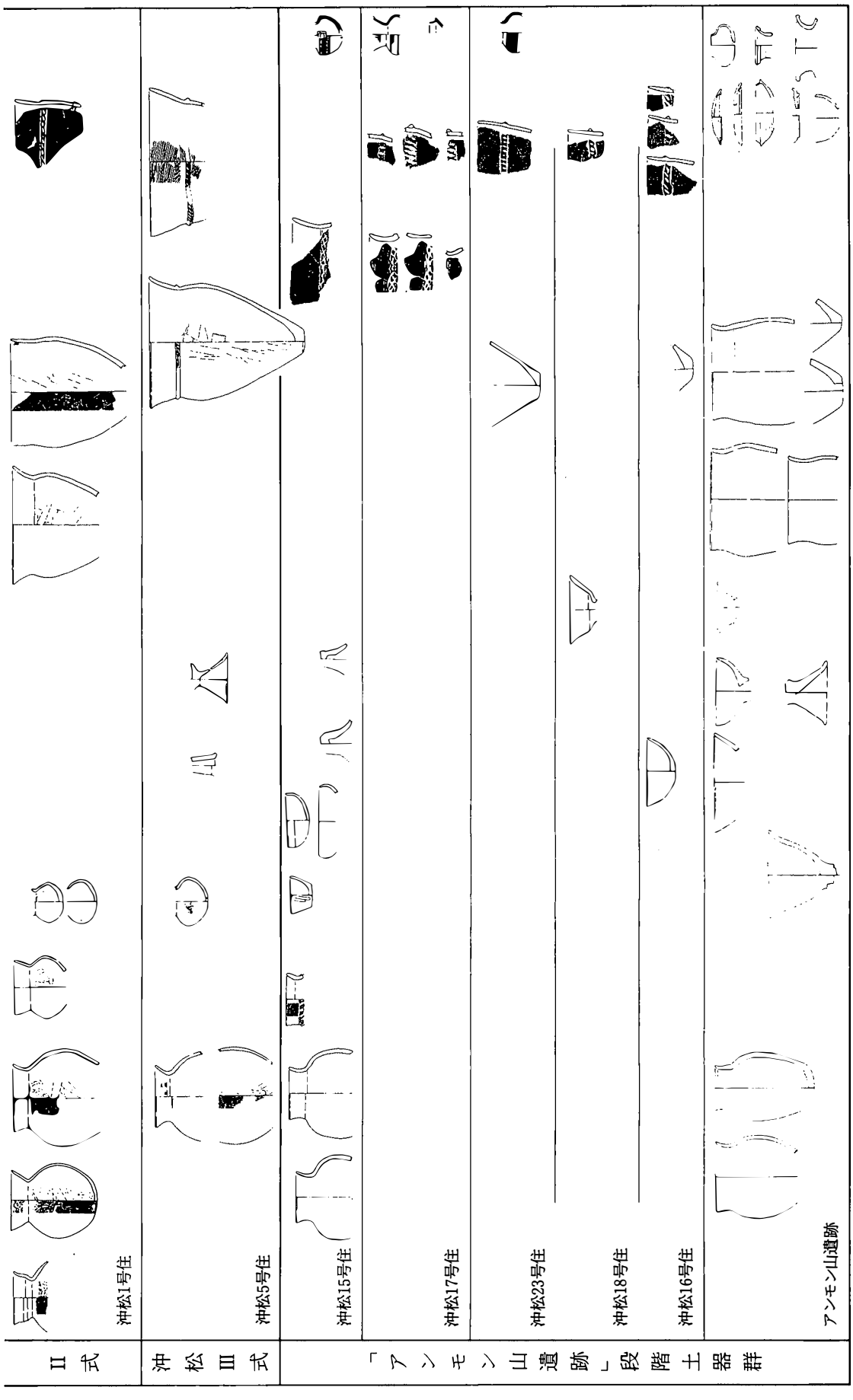
沖松式土器，特に，**沖松Ⅱ式土器**に見られる壺は，その特徴から**塚原Ⅱ式土器**の壺に類似している。おそらく，**沖松Ⅱ式土器**と**塚原Ⅱ式土器**とは，編年的に対比することが可能であろう。つまり，野田氏の見解に従えば，**沖松Ⅱ式土器**は，**塚原Ⅱ式土器**と同じく５世紀前半という年代観が与えられる。

一方，沖松Ⅰ式土器は，甕の頸部と胴部との境が明瞭であり，この部分に古相な特徴を見出すことが可能であろう。しかも，**免田Ⅱ式土器**や**夏女式土器**に系譜が求められる高坏の存在は，脚台の特徴において，その特徴をより明瞭に残しているということを勘案しても，充分に古相を呈する特徴である。その特徴は，宮崎県前原北遺跡SA49を標式として設定された**前原北Ⅳ式土器**に対比できるだろう（本郷編1988）。このことから，**沖松Ⅰ式土器**は，**沖松Ⅱ式土器**に先行し，４世紀後半から５世紀初頭にかけてのある段階に置けると考えられる。野田氏による中九州の土器型式でいえば，**沈目Ⅰ式土器**を含む**沈目Ⅱ式土器・塚原Ⅰ式土器**に，大枠では対比が可能だろう。

夏女式土器は，弥生式土器との継続性からその位置付けが予想される。**免田式土器**の消滅がどの段階にあるかで，**夏女式土器**の位置付けが左右されるだろうが，大枠としては野田氏による**古閑式土器**に対比される可能性が高い。つまり，４世紀前半から中葉という年代幅の中で考えておきたい。

「アンモン山遺跡段階土器群」は，球磨・人吉地方において須恵器が伴う段階である。ただし，その


壺
鉢
高坏
甕
夏女1号住
夏女2号住
沖松3号住
沖松25号住
夏女Ⅰ式
夏女Ⅱ式
沖松Ⅰ式
沖松



第90図　球磨・人吉地方における古墳時代土師器の編年

段階の上限がどこにあるのかは，須恵器の型式が基準になるのであって，土師器だけからは解決できない問題である。ただし，確実に言えるのは，沖松遺跡15号住居跡で出土した須恵器の瑕は，特徴的には福岡県新開窯跡中村勝氏採集資料（中村1991）に類似していることである。この資料の対比については，**陶邑Ⅰ－3～5**相当，小田富士雄氏編年**ⅠB期**に対比できるだろう（舟山1996）から，この須恵器を伴った沖松遺跡15号住居跡出土土器は，5世紀後半という年代観で大差ないものと思われる。なお，5世紀前半の須恵器を伴う土師器については，球磨・人吉地方では不明確である。ただし，前記しているように，素口縁の壺にしても，甕にしても，**沖松Ⅲ式土器**（沖松遺跡5号住居跡例）と沖松遺跡15号住居跡出土土器との間には若干の型式差が認められる。おそらく，さらに古い須恵器の型式は，そうした未検出の土器群との関係が想定されるだろうし，球磨・人吉地方の古墳出現の問題とも関係して，極めて重要な調査対象となろう。

下限の問題は，アンモン山遺跡を再評価する中で明らかにされるだろう。出土状況からすれば，おおよそこの遺跡の土器群は，7世紀から8世紀にかけての様相を示すはずである。なお，その上限と下限との間の問題は，共伴する須恵器の年代観とも関係する問題であり，ここでは明確には示せない。少なくとも，良好な土器群の検出と，須恵器の型式との対比によって，ある程度の作業が可能になるだろう。大枠としては，先に示した年代観と土器形態ごとの型式変化が考慮できるだろう。

4．球磨・人吉地方の古代と堂園遺跡

1．はじめに

堂園遺跡では，木蓋土壙墓が1基検出された。基数こそ少ないとしても，この墓は，供え物として輸入陶磁器や緑釉陶器の破片や土師器椀や坏が供献されるなど，その内容は，球磨・人吉地方の古代を考察する上で重要な資料となるだろう。そこで，ここでは，この資料から派生する問題について，球磨・人吉地方の古代という観点で整理・考察したい。

2．堂園遺跡発見の木蓋土壙墓の供献土器

堂園遺跡の木蓋土壙墓は，長軸側両端が丸く，しかも北辺に向かって先細り気味の長方形という平面形態を呈している。その規模は，長軸3.5m，北側短辺長0.75m，南側短辺長1.15mを測る。現況での壁高は，25㎝である。北側隅の底面には，長方形を呈し，屍床面に向かって緩く傾斜した枕状の高まりが削り出されている。これを枕とすれば，遺体の頭位方向は，磁北である。

供献土器は，東側壁近くにある。その組成は，越州窯系青磁の皿の破片1点，京都系洛西産の緑釉陶器の皿の破片1点，土師器製の椀1点と坏2点である。屍床面から数センチメートル程度浮いて出土している状況から，これらが屍床面に直接置かれた状況にないことが窺える。こうしたことから，これらの供献土器は，木蓋上に置かれていたと想像できる。

緑釉陶器製の皿は，小さな破片であった。その遺存率は，⅛程度であると考えられる。置かれた場所は，もっとも頭位（推定）に近い位置である。その隣には，遺存率⅓の越州窯系青磁皿がある。

3点の土師器は，すべて完形である。それは，坏2点と椀1点という土師器で，それらの出土位置の関係は，越州窯系青磁皿の隣，坏2点に挟まれて椀が見られるという状況にあった。

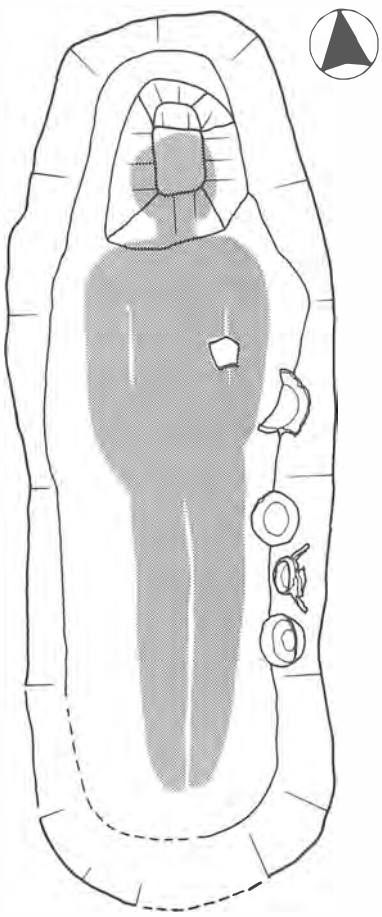
さて，供献土器には，意義を異にする二つの土器がある。それを対峙的に見ると，広域流通品として貴重性が強い緑釉陶器皿・越州窯系青磁皿に対して，地場性の高い土師器という関係が知れるだろう。おそらく，これらには，遺体に供献された時点においてもそれぞれに異なる価値が付与されていたはずである。つまり，緑釉陶器や青磁が破片であるのに対して，土師器は完形であることから，さらにその意味に奥深さが伴ってくる。

価値を異にする二種の供献土器は，頭位近くに緑釉陶器や青磁の破片が，頭位から離れて土師器が置かれていた。つまり，広域流通品であり，それ相応の価値が付与されている緑釉陶器や青磁が頭に近い位置にあり，地場性が強く，広域流通品に比べてそれほどの価値が付与されていない土師器が頭から離れているのである。私は，これこそが遺体の部位と供献土器の位置との関係の中に供献物の価値性にお

ける相関関係が見られることの証拠であると考える。仮にそうであるならば，それぞれの供献土器の位置関係は，それぞれの土器の価値性を垣間見れる重要な材料となるだろう。そこで，それぞれの土器の位置関係を見ることによって，当時における付加価値の実際と，その背景を考えることにしよう。

前記しているように，堂園遺跡の木蓋土壙墓では，遺体の部位の中で，もっとも頭に近い位置にあったものが緑釉陶器製皿の小破片であった。そして，その隣に越州窯系青磁皿の破片，その隣に土師器のまとまりがあった。土師器同士の位置関係は，坏，椀，坏という順番であった。

確かに，これらが木蓋上から棺内に落ち込んだ際に，混乱が無かったとは断言できない。そうはいっても，これらは混在した出土状況を呈さず，縦に整然として並んだ状況にあることは重要である。私は，多少の位置的移動はあったとしても，基本的にこの並びは供献当時と同じであったと考える。



第91図　木蓋土壙墓と供献土器

そこで，供献土器をその頭位に近い順に並べると，緑釉陶器製皿の小破片→越州窯系青磁皿の破片→土師器（坏→椀→坏）という関係で整理できるだろう。しかも，こうした並びは，それぞれの遺存率でも追認される。緑釉陶器製皿の小破片→越州窯系青磁皿の破片→土師器という配列で遺存率を並べてみると，約13%（1/8程度）→約33%（1/3程度）→100%（完形）という関係が見て取れるのである。すなわち，頭に近くなるに従い，土器の遺存率は減じていくのである。ここに，供献土器の位置と遺存率との相関関係から，緑釉陶器製皿は越州窯系青磁皿に勝り，越州窯系青磁皿は土師器に勝るという価値性の組列を見出すことができるだろう。私は，こうした組列の背景について，当時の商品流通の事情が反映していると考えている。

西日本を中心とした各地で多数の越州窯系青磁製品が発見されているように（国立歴史民俗学博物館編1993・1994），浙江省北部において生産された越州窯系青磁は，商品として大量に日本へ般入された。もっとも中国に近い地理的位置にある九州，しかも太宰府周辺は，その需要地の有力な場所である。おそらく，「太宰府官人および周辺を含めた富豪層は地理的有利性を最大限に発揮し，初期輸入陶磁器を含めた唐物の先買権を実質的に行使し，さらに商旅之徒として国内の唐物流通システムに大きな役割を担っていた」（亀井1982）ものと思われる。つまり，太宰府周辺が，越州窯系青磁製品流通システムの中心地になっていたと評価できるだろうし，併せて，越州窯系青磁製品の供給地としての太宰府周辺を意義付けることが可能となろう。

一方，堂園遺跡で出土した緑釉陶器製皿は，京都系洛西産である。つまり，同じ日本国内にある窯で生産された緑釉陶器であった。ただし，それは「本来特殊で生産量も須恵器などに比べてはるかに少な」（寺島1982）く，稀少性が高い商品であったと想像される。しかも，越州窯系青磁の供給地である太宰府に対して，京都周辺は地理的に離れた場所でもあった。ここに，堂園遺跡で見られた供献土器の付加価値による序列の背景があるものと言える。

木蓋土壙墓に埋葬された人物ないしその周辺の人

びとは，生産量が少なく，しかも畿内という遠隔地から供給される京都系洛西産の緑釉陶器に稀少性を見出した。その結果，彼らは，舶来品ではあるが，供給地が近くの太宰府周辺にある越州窯系青磁に対して，京都系洛西産の緑釉陶器に高い価値を見出したのである。おそらく，こうした背景の中で，**緑釉陶器製皿の小破片＞越州窯系青磁皿の破片＞土師器**という価値性による序列が成立したものだろう，と私は評価している。少なくとも，それが商品である以上，需要する側と供給する側の間で，その価値性において商談が成立しなければ，その流通は成り立たない。そこには，生産量や需要地と供給地の地理的関係などが付加価値の要素として現れるだろう。こうした商品流通の実際が，ここ堂園遺跡で垣間見れることは，球磨・人吉地方の古代に関する重要な研究材料であろうか。

3．堂園遺跡における木蓋土壙墓とその供献土器の歴史的背景

①球磨・人吉地方古代史研究における堂園遺跡の意義

球磨・人吉地方の古代について，この調査研究は，考古学的成果が主体とはなっているが，かなりの成果が出されている（鶴嶋1995,木崎1996b）。ただし，その成果の中心は，あくまでも社会的・政治的・経済的面において上層の立場にいた人びとについてのものであった。つまり，歴史学が目指すべき方向の一面にしか，その研究の対象が及んでいないのである。これは，今後の球磨・人吉地方での研究に課せられた課題でもある。

さて，私は，こうした状況の中で，堂園遺跡の木蓋土壙墓や供献土器の歴史的背景を取り扱うことは，その一面的な研究傾向を増幅するものであるかもしれないと危惧する。しかしながら，提示された資料について，真摯にその問題を掘り起こすことは，歴史学的にもまた大切な姿勢でもある。今日，当時の社会のあらゆる階層に係わる考古学的情報が提供されていない以上，私は，こうした姿勢の下に，今日可能な限りの情報を使って上層の立場にいた人びとの問題を検討したいと思う。

堂園遺跡の木蓋土壙墓に葬られた人物は，高級品である輸入陶磁器や緑釉陶器の流通システムに触れる機会を持てる立場にいた。このことは，球磨・人吉地方の平安時代の中にあって，彼が地域の権力に何らかのかたちで係わることが可能な人物だったことを表している。

さて，前章では，この木蓋土壙墓に葬られた人物を，球磨郡衙に係わる人物かその周辺にいた人物であったとして，その人物周辺を，須恵氏に比定しておいた。それは，堂園遺跡が須恵氏の本拠地の一つである須恵村に所在していることと関係する見解である。しかも，亀井明徳氏が「肥後において郡司クラスは初期輸入陶磁の需要階層となっていたと考えることは許されよう」(1982）とした点も勘案しての見解であった。そこでまず，古代における須恵氏の問題について検討してみよう。

②古代須恵氏の領地と歴史的景観

古代須恵氏の領地の範囲は，中世における須恵氏の領地の範囲を見ることによって推定できる。

その問題を窺わせる資料には，建久八年（1198）の『肥後国球磨郡図田帳』(相良家文書二）がある。ここに記載された須恵氏の領地は，「鎌倉殿御領五百丁」の中の「須恵小太良家基領百五十丁」と「公田九百丁」の中の「豊永四百丁」,その中の「藤原家基三百丁字須恵小太良」である。

「鎌倉殿御領五百丁」「須恵小太良家基領百五十丁」は，『当国惣図田帳』(平川家文書四）によると「西村」にあたっている。現在の錦町大字西村（旧，西村）周辺である。また，人吉市七地町の天満宮境内にあった阿弥陀三尊石塔婆（永正五）の銘文に「大日本國鎮西肥後州求麻郡須恵庄於當村」とあるように，「西村」に隣接する人吉市七地町（旧，七地村）も須恵庄であった。

「公田九百丁」の中の「豊永四百丁」は，「藤原家基三百丁字須恵小太良」と「多良木村百丁没官領」によって構成されている。「豊永」の中に「多良木村」が含まれていることから，「豊永」は，没官領である多良木村（現，多良木町多良木・黒肥地）を含んだ地域，須恵氏の姓が村名となる須恵村から多良木町多良木・黒肥地，さらにはその隣の水上村に

まで広がる範囲であったと考えられる。

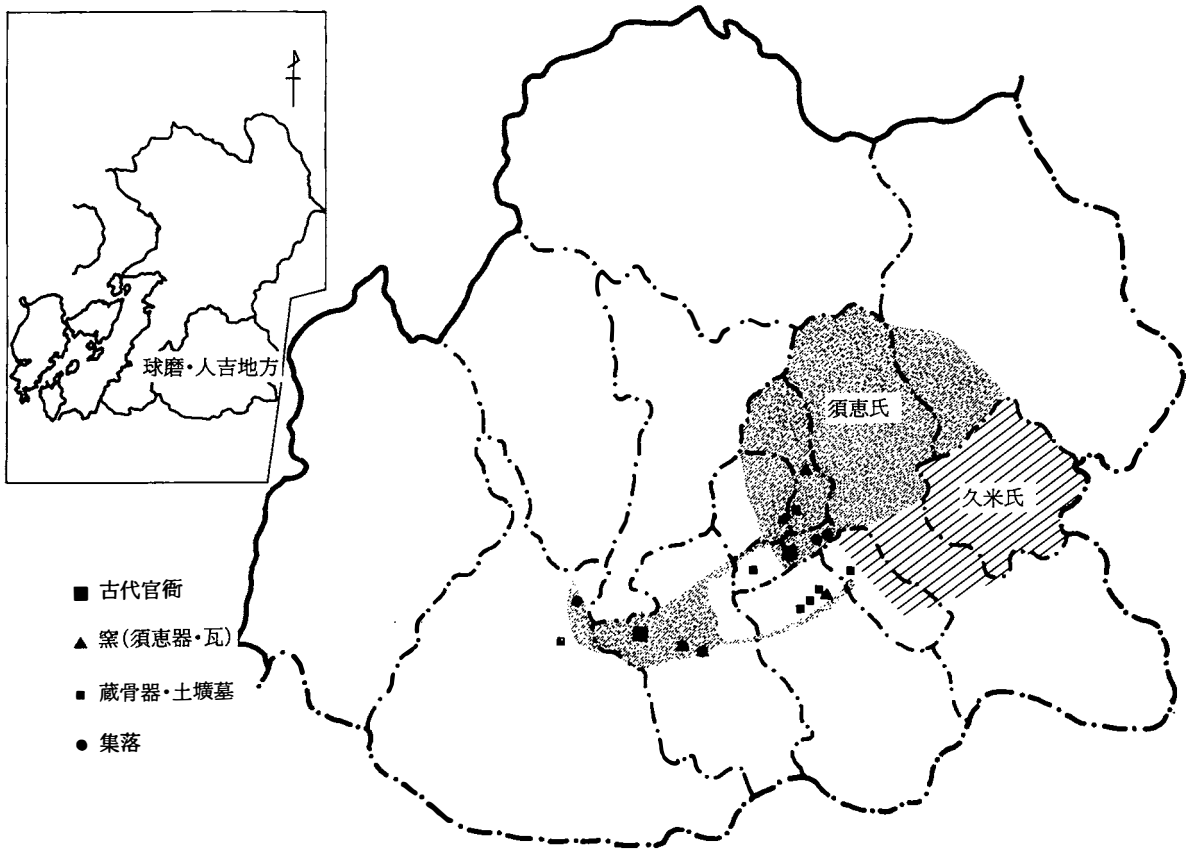
また，應永三四年の『平河式部給分坪付』の中に，須恵として「くらの町」と「しやうや田」があげられている。「くらの町」は，現，免田町蔵ノ町であり，「しやうや田」は，深田村庄屋である。さらに，室町時代の『十八道傳受払記下（写）』(願成寺文書七ー四〇四)や『口傳作法』(願成寺文書七ー三八〇)に「須恵庄築地村」とあり，現，免田町築地も須恵庄の範囲にあることがわかる。このように，中世には，須恵庄の範囲として，現在の須恵村に隣接する深田村の東側にある「庄屋」周辺や現在の免田町北側の「蔵ノ町」と「築地」一帯も含まれていたことがわかる。

これまで見てきたように，中世初期において須恵氏の領地は，二つの地域にあった。一つは，現在の水上村から須恵村，そしてそれに接する深田村東側の庄屋周辺，免田町北側の蔵ノ町や築地周辺にかけてである。もう一つは，現在の錦町西村と錦町一武，そして人吉市七地町という範囲である。こうした中世初期の須恵氏の領地範囲は，古代におけるそれを反映しているであろうから，それらの地域を含めた古代須恵氏の活動拠点が窺われるのである。

では，考古学的には，何か想定しうる資料がないだろうか。

須恵氏は，その名前が示すように，須恵器との関わりが深い豪族である。つまり，須恵器生産に係わった豪族なのである。そこで，球磨・人吉地方における須恵器生産の拠点，すなわち窯業関係の遺跡を見てみよう。

窯業関係の遺跡としては，今日までに錦町下り山遺跡・七中口遺跡・上村上の原遺跡・須恵村上阿蘇遺跡・深田村高山遺跡（瓦）が確認されている。それらの窯の操業時期は，奈良時代の末から平安時代の前期（9世紀）で，また下り山遺跡では平安時代後期（12世紀）まで須恵器が生産されていた。それぞれの位置を見てみると，下り山遺跡と七中口遺跡は，錦町西村に所在する。上阿蘇遺跡は須恵村にあり，高山遺跡は深田村の東側庄屋の北の山裾にある。上の原遺跡も，免田町に近く，人吉盆地南側の山裾にある。つまり，窯業関係の遺跡の所在を見ると，



第92図　球磨・人吉地方の古代と須恵氏

先に示した須恵氏の領地にそのほとんどが存在していることが知れるのである。

この地域では，8世紀から10世紀前半にかけて，つまり，奈良時代から平安時代の初めの有力者に関係する墓も多く検出されている。例えば，銅板製墓誌が副葬された墓が発見された免田町黒田遺跡，蔵骨器出土遺跡である免田町廻り迫遺跡・岡原村宇土谷遺跡・上村伊勢尾遺跡・栩登遺跡・東小原遺跡・西小原遺跡（石帯の丸鞆が出土），輸入陶磁器や湖州鏡が供献された墓が見つかった深田村灰塚遺跡，そして，須恵村堂園遺跡がその主なものである。これらは，墓の特徴，供献された品物の貴重性から判断して，一般階層の人びととは明らかに異なる立場にいた人びとの墓なのである。

この他，軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦が出土した免田町前田遺跡もある。この遺跡は，免田町北部にあり，須恵氏領地の範囲にある。出土した須恵器の年代から9世紀中頃と推定されている。当時の球磨・人吉地方で瓦を葺く施設といえば，寺院ないし郡衙の建物ということになるので，この遺跡にかつてそうした建物があったことは間違いない。おそらく，これは，古代においてこの地域が球磨・人吉地方の中心地域であったことを直接的に示す考古学的資料であろう。

考古学的解釈からすれば，須恵氏がその活動拠点とした地域，現在の錦町から免田町北部，深田村東部，須恵村などの中球磨地域は，実は，古代における球磨・人吉地方の政治的・経済的な中心地であった。その中で政治的な活動の中心地域は，中球磨の平野部周辺である。それは，前田遺跡の存在からそう判断される。そして，近くの山麓部周辺（岡原村の西端・上村・錦町と深田村・須恵村）には，彼らの政治基盤を経済的に保証する須恵器生産のための窯業施設が設けられていた。また，この地域は，盆地中央部という立地の中で，広大な水田が確保できるところでもあり，農業生産物確保でも有利な場所であった。その地で，政治的に活動した人びとは，死後，彼らの活動拠点を眺めうる近隣の山麓部や台地・丘陵地上に葬られたのである。こうした景観の中に，実は，須恵氏がその活動拠点とした地域は，存在していたのである。ここに，須恵氏と球磨郡衙との関わりがしだいに明らかになってくる。

③球磨・人吉地方の古代豪族について

須恵氏は，その活動拠点を中球磨から上球磨においていた。その地域は，考古学的にも当時の球磨・人吉地方の中心地であった。その地域のどこかには，おそらく，律令制の下で設置されていた球磨郡衙が造られていたものと思われる。また，その郡衙の運営にあたっては，須恵氏が相当の影響力をもっていたものと推測される。そこで，この点を問題にする上でも，球磨・人吉地方の古代豪族について整理しておこう。

平安時代の末期，球磨・人吉地方にはその氏名が明らかな幾人かの豪族の存在を認めることができる。それを示す文書が，鎌倉時代初期にあたる建久八年（1198）の『肥後国球磨郡図田帳』(相良家文書二）である。その中に挙げられた名を拾ってみると，久米三良（久米氏）・須恵小太良（須恵氏）・良峯師高子息の平紀平次（平河氏）・人吉次良（人吉氏）・合志九良（合志氏）などである。

久米氏は，現在の多良木町久米にその名前が残っている。おそらく，久米氏は，この一帯を本拠地としていた豪族であろう。『肥後国球磨郡図田帳』の中では，「公田」の中の「豊富五百丁」の地頭，「人吉庄」での地頭の一人として名前があがっている。領地の広さから言えば，須恵氏に匹敵する豪族であったようである。

須恵氏は，先にも示しているが，中球磨から上球磨にその本拠を持つ豪族である。『肥後国球磨郡図田帳』の中では，「公田」の中の「豊富五百丁」の地頭，「鎌倉殿御領五百丁」の中の「須恵小太良家基領百五十丁」の地頭，「人吉庄」での政所として名前があがっている。なお，「人吉庄」の中では，久米三良など四名の地頭よりも上の政所に列せられている。

平河氏は，肥後国山本郡から移り住んできた在地領主で，「求麻外史」によれば，その下向の時期は康平六年（1063）といわれている。多良木町の一部，免田町・錦町木上・深田村，相良村，山江村，五木村，球磨村を領としていた。『肥後国球磨郡図田帳』

の中では，「鎌倉殿御領五百丁」の中の「永吉三百丁」の地頭として「良峯師高子息字平紀平次」の名前があげられている。

人吉氏は，その名のとおり人吉周辺を活動の舞台とした在地領主であるが，その出自や背景などは不明である。ただし，人吉周辺の古墳時代には一種独特な古墳の様相が見られるところから　それを背景にした，人吉土着の豪族の可能性が高いと思われる。『肥後国球磨郡図田帳』の中では，「人吉庄六百丁」の下司として現れる。

合志氏は，平安時代の終わりに近い治承～寿永の頃，すなわち1177年～1184年の間に肥後国合志郡から下向した，菊地氏の流れをくむ豪族である。その領地は，『肥後国球磨郡図田帳』の中では，「人吉庄六百丁」の地頭の一人として名前を見れる。

さて，上記した領主の中，平河氏と合志氏は，11世紀ないし12世紀に球磨・人吉地方に下向してきた新規参入の豪族である。こうした勢力に対して，土着の勢力が久米氏と須恵氏と人吉氏であろう。特に，久米氏と須恵氏は，球磨郡二千町の中の半分以上の面積を占める広大な水田地帯を擁した上球磨や中球磨にその本拠を持っていた。しかも，この上球磨・中球磨は，前記しているような奈良時代や平安時代の重要な遺跡が集中している地域でもある。このことから，これらの豪族が，球磨・人吉地方の古代において，政治的にも経済的にも重要な立場にあったことは明白である。

④球磨郡衙と久米氏・須恵氏

須恵氏の本拠地である地域は，奈良時代や平安時代における球磨郡の中心地域であった。そこには，おそらく，球磨郡衙が置かれていたものと想像される。ところが，上記しているように，上球磨を中心的な基盤とする久米氏もまた，その領地の広大さでは，須恵氏と肩を並べるほどの勢力であった。そこで，次には，久米氏と須恵氏との関係について見てみることによって，この両氏と球磨郡衙について考えてみることにしよう。

この二つの豪族は，他の古代豪族に比べれば，人吉氏と共に，球磨・人吉地方に古くから居住していたと考えられる。例えば，久米氏は，球磨・人吉地方が熊県として大和王権の傘下に組み込まれた際に配された軍事担当部門の久米部を始まりとするものであろう（鶴嶋1995）。また　須恵氏は，球磨・人吉地方において，新しく須恵器生産を始めた人びとの子孫であったであろう。つまり，久米氏や須恵氏は，それぞれに異なった背景で存立した豪族であった。ただし，その活動拠点は，共に当時の中心地域である中球磨や上球磨にあった。このことから，この二つの豪族は，古墳時代以来の歴史の中で球磨・人吉地方の政治や社会に大きな影響力を行使してきた人びとであったことを，容易に窺せてくれるのである。彼らこそが，球磨郡衙の主要な位置に付いていた豪族なのである。

そこで,先に示しておいた『肥後国球磨郡図田帳』を通して，球磨郡衙に係わった久米氏・須恵氏を詳しく考えてみよう。

当時の球磨郡は，大きく三つのまとまりがあったようだ。「蓮華王院領人吉庄」と「鎌倉殿御領,そして「公田」である。

「蓮華王院領人吉庄」には，在地領主として，下司の人吉次良がおり,その下に政所の須恵小太良,さらにその下に地頭の合志九良・久米三良など４氏が名を連ねている。この荘園の構成は，寛元二年（1244）の『人吉庄起請田以下中分注進状』(相良家文書６）によると，「本庄」と「東郷」に分かれていた。この中，人吉庄の「本庄」は，現在の人吉市周辺といわれていて，これが人吉次郎の領地であろう。それに対して，「東郷」は，政所や地頭として名を連ねている豪族の領地であろう。その豪族とは，須恵氏や合志氏や久米氏などである。そうならば，この東郷は，豊富や豊永，それに永吉や西村を除いた中球磨か上球磨のどこかにあったものと予想できるだろう。服部英雄氏が言うように，「東郷」は，上村周辺ということも蓋然性が高い。

このように，人吉庄は，人吉氏の領地と須恵氏が取りまとめた久米氏や合志氏らの領地とを，人吉次良が代表して寄進した荘園ということが判るだろう。そして，この中で須恵小太良は，政所として人吉次良の下に位置付けられるなど，他の４氏とは別格の扱いである。おそらく，須恵小太良は，「東郷」の

中でも一番広い領地を有し，他の4氏を取りまとめ，荘園の政務全般を取り仕切れるだけの実力を具えていたものと考えられる。

「鎌倉殿御領」も，源頼朝に寄進された荘園で，地頭の良峯師高子息平紀平次の永吉庄と，地頭須恵小太良の領がある。

「公田」は，「国衙領」で，「豊富」と「豊永」とに分かれている。「豊富」は，500町の広さがある。地頭は，久米三良である。「豊永」は，400町である。本来は，地頭の須恵小太良の領土であった。ただし，『肥後国球磨郡図田帳』が作成されていた段階には，400町の中の多良木村100町が没官されている。

久米氏と須恵氏は，領地の広さという点では明らかに拮抗した実力をもっていた。それは，上記したように，久米氏の領地が500町で，須恵氏の領地が550町であったことから窺うことができる。ただし，そうした中で両者の関係を考えれば，人吉庄では久米氏が地頭であるのに対して，須恵氏が政所としての仕事に係わっていることは見逃せない。また，古文書では見えないが，須恵氏は，須恵器という商品の生産を手掛けているなど，強力な経済的基盤に立っていた。以上の事実は，須恵氏の位置が久米氏よりも優位であったことの証拠でもあろう。

ここに，球磨郡衙の郡司を須恵氏とする根拠が見出せそうである。ただし，領地の広さを考慮すれば，久米氏も無視できない存在であることが判るはずである。換言すれば，須恵氏が郡司となりつつも，久米氏がかなりの力をもって郡衙に係わっていたということになろうか。

⑤球磨郡衙とその遷移

須恵氏を郡司とし，それに久米氏も深く係わっていたことを考えた。では，球磨郡衙は，どこにあったのだろうか。

今一度，「②古代須恵氏の領地と歴史的景観」で述べておいたことを箇条書き的に整理しよう。

一つに，須恵氏がその活動拠点とした中球磨は，当時の政治的・経済的な中心地であった。その中で政治的な活動の中心は，古瓦が出土した前田遺跡の存在からも中球磨の平野部周辺である。

二つに，近くの山麓部には，彼らの政治基盤を経済的に保証する窯業施設があった。

三つに，中球磨は，広大な水田が確保できる地域であり，農業生産物確保でも有利であった。

四つに，近くの山麓や台地・丘陵地上には，球磨・人吉地方の権力やその周辺にいた人びとの墓が数多く発見されている。このことは，政治的な権力を握っていた人びとは，死後，彼らの活動拠点を眺めうる近隣の山麓部や台地・丘陵地上に葬られたことを物語っている。

つまり，上記したことでわかることは，奈良・平安時代の主要な遺跡が中球磨に集中していること，免田町前田遺跡周辺が奈良・平安時代の中心地であったこと，須恵氏の経済的基盤が農業生産と共に，須恵器生産だったことである。私は，やはり，鶴嶋俊彦氏（1995）が言うように，免田町前田遺跡周辺に郡衙を比定できるものと考えている。

そしてまた，経済基盤の一つとしての須恵器生産を考えれば，12世紀まで操業していた錦町下り山遺跡の近く，具体的には錦町西の「尼ケ土手」遺跡もまた，工藤敬一氏（1989）が言うように，郡衙の可能性が高いだろう。この遺跡は，鎌倉時代初期，「西村地頭職」を「狼藉之咎」によって召し上げられた「須恵後家」が居住していた館の跡である（渋谷1981）。特に，土塁に囲まれた南北400㍍，東西264.5㍍の範囲は，球磨郡衙を比定する上でも見逃せない広大な遺構である。この「須恵後家」は，平安時代末期の球磨郡司と考えられる「須恵小太良家基」の夫人と考えられているので，上記した下り山遺跡とも考え併せても，工藤氏の説は説得力がある。

ただし　私は，それぞれこの両者の説に固定させて郡衙の位置を考えてはいない。それは，上記した両者の比定地と共に，それぞれの時代を代表する遺跡であるからだ。

例えば，免田町前田遺跡周辺は，8世紀から9世紀にかけての主要遺跡が多く分布している地域である。錦町の「尼ケ土手」遺跡は，平安時代の遺構であるという考古学的事実は無い。しかし，平安時代末の球磨郡司と考えられる「須恵小太良家基」の夫人である「須恵後家」が居住していた館であることや，近隣の遺跡に12世紀に操業を終えた須恵器の窯

跡である下り山遺跡があることは，その傍証資料としては重要である。

私は　こうした点を踏まえ，それぞれの地域で主体となる時期にずれが存在していることを考慮し，時代の変遷に従って，郡衙の位置が変わった可能性が高いと考えた（木﨑1996a）。つまり，9世紀前後の時期までは免田町前田遺跡周辺に球磨郡衙があり，その後，須恵器生産の拠点が西村に移るに従い，郡衙が西村の「尼ケ土手」に移動し，その後12世紀までは郡衙が継続したことが想定されるのである。

ところで，須恵氏は，9世紀から12世紀へと，下り山遺跡の窯で焼く須恵器の種類を変えていった。例えば，9世紀の窯での生産の中心は，坏や坏蓋，台付き坏，皿，盤，高坏，壺，鉢であった。これに対して，12世紀の窯では，甕，広口・長胴・平底の壺や捏鉢が中心となっている。このことは，坏や坏蓋，台付き坏，皿などの小型品の主流が土師器や黒色土器，さらには瓦質土器，その他の陶磁器などに移っていた現象（網田1994）と深く係わるもので，須恵氏が需要層の商品欲求に呼応した，その結果であろう。そこに，中世陶への推移の一つの過程の中で，須恵器需要の低下という社会情勢に応ぜざるを得なかった，須恵氏の苦悩を読み取ることができよう。

12世紀のある段階，須恵氏は，8世紀以来継続し，商品生産によって自らの経済基盤を保証し続けた須恵器生産を中止した。それは，須恵氏がそれまでの自らの経済基盤を支えつづけた大きな柱の一つを失うことを意味していた。須恵氏に残された経済基盤は，広大な面積の水田によって裏打ちされた農業生産物のみになっていたのである。その結果，須恵氏は，自らの活動拠点を移動せざるを得なくなった。その移動した活動拠点が，深田村灰塚遺跡に見られる居館跡であると考えられる（木﨑1996a）。このように，須恵氏の活動拠点は，その時代時代の経済基盤の状況に則して，9世紀前後以前の免田町前田遺跡周辺，12世紀以前の錦町「尼ケ土手」遺跡，12世紀以降の深田村灰塚遺跡と変遷していった。おそらく，こうした須恵氏の活動拠点（居館）の移動に伴って，須恵氏が郡司として実権を握っていた球磨郡衙もまた移動していったことは想像にかたくない。

⑥球磨・人吉地方の古代における堂園遺跡出土木蓋土壙墓の意義

堂園遺跡は，須恵氏が領した地域の中に存在している。しかもここの墓の中には輸入陶磁器や緑釉陶器が供献されていた。つまり，こうした広域流通品の流通システムに触れる機会を持てる立場に，この墓の主はいたのである。おそらく，この墓に葬られていた人物は，球磨・人吉地方の平安時代の中にあって，この地域の権力に何らかのかたちで係われる立場にいたはずである。

こうした理由から，私は，この木蓋土壙墓が須恵氏に縁のある人物の墓であったと考えた。須恵氏は，これまで見てきたように，球磨郡司を努める豪族であった。つまり，堂園遺跡の木蓋土壙墓に葬られた人物は，球磨郡衙の運営に係わる立場にいたことが推測できる。その年代は，10世紀初頭の頃である。その時期は，球磨郡衙が西村の「尼ケ土手」遺跡の居館に置かれていた頃である。

熊本県教育委員会は，1993年9月から1997年2月まで，堂園遺跡から約1㎞ほど離れた灰塚遺跡で発掘調査を実施した。その結果，この遺跡が鎌倉時代の須恵氏の居館跡であることが明らかになった（木﨑1996a）。実は，その調査の際に，平安時代の墓が居館跡の外側から検出されたのである。その墓の構造は，木蓋土壙墓ないし土壙墓である。調査の結果，この墓に埋葬された人物に供えるものとして，定窯系白磁片（遺存率約17%）1点，土師器の坏9点，湖州鏡片（遺存率約50%）1点が検出された（山下1996）。この内容からみて，この墓に葬られた人物もまた，堂園遺跡の墓と同じ様に，須恵氏に縁が深く，球磨郡衙の運営に係わる立場にいたことが推測できるのである。その年代は，9世紀後半であり，その埋葬は，時期的には堂園遺跡の墓に先行しておこなわれている。この時期も，球磨郡衙が西村の「尼ケ土手」遺跡の居館にあった頃である。

今日の免田町・深田村・須恵村・上村の範囲は，奈良時代から平安時代にかけての中心地域であった。それは，すでに「②古代須恵氏の領地と歴史的景観」で述べておいた。その中で，私は，一つの景観とし

て，政治的な権力を握っていた人びとが死後，彼らの活動拠点を眺めうる近隣の山麓部や台地・丘陵地上に葬られていた事実を述べておいた。実は，今回の堂園遺跡や灰塚遺跡の墓の例は，その一つの資料であると言えるのである。

ところで，球磨・人吉地方の奈良時代や平安時代の墓で，権力に近い位置にいる人物の墓には，大きく二つの種類があった。一つは，火葬をおこなって，骨を土器に納める方法である。墓の資料としては，蔵骨器が発見される。上村，免田町，岡原村などで検出されているものは，その蔵骨器で，8世紀から9世紀代の須恵器や土師器が使われていた（鶴嶋1995）。もう一つは，土葬を前提にした土壙墓や木棺墓である。堂園遺跡や灰塚遺跡の墓がこれにあたる。年代は，9世紀後半代から10世紀にかけてである。ただし，この墓制は，灰塚遺跡では鎌倉時代でも認められる。堂園遺跡の検出例は，まさにこの奈良時代から平安時代，そして鎌倉時代の墓制に係わる問題を提起しているのである。今日の状況では，より古い，火葬を伴うものは南側の山麓部にあり，より新しい，土葬を伴うものは北側の台地や丘陵地上にある。こうした時期的な推移が仮に認められるとするならば，それはどのような要因の基にあるのか，興味深い問題である。

球磨・人吉地方の古代における堂園遺跡出土木蓋土壙墓は，当時の墓制の実体にかかわり，上記してきた多岐にわたる問題に関係するところに意義が見出せるのである。

文　献　目　録

網田龍生　1994　「肥後における回転台土師器の成立と展開」
『中近世土器の基礎研究』Ⅹ

池田公一　1987　『中世九州相良氏関係文書集』

石川恒太郎　1968　『宮崎県の考古学』

江本　直　1974　『沈目』熊本県教育委員会

小田富士雄　1960　「九州古式須恵器集成」『九州考古学』

亀井明徳　1982　「越州窯系青磁の需要層」『考古学ジャーナル』211

河口貞徳　1972　「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』6

木崎康弘　1985　「熊本県球磨郡大丸・藤ノ迫遺跡の塞ノ神式土器について」
『塞ノ神式土器』

木崎康弘　1995 a　『無田原遺跡』　熊本県教育委員会

木崎康弘　1995 b　「古代」『須恵村誌』熊本県須恵村

木崎康弘　1996 a　「原始・古代」『相良村誌』熊本県相良村

木崎康弘　1996 b　『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会

木崎康弘・隈昭志　1987　『狸谷遺跡』　熊本県教育委員会

木崎康弘・隈昭志・中原由子　1986　『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県教育委員会

木村幹彦　1933　「南九州に於ける縄文土器の一形式」『考古学』4－5

工藤敬一　1989　「肥後・球磨郡の庄園公領制－建久図田帳体制の成立－」
『東アジアと日本　歴史編』

九州土器研究会　1994　『肥後における古代・中世の土器』

国立歴史民俗学博物館編　1993　『日本出土の貿易陶磁器』西日本編1～3

国立歴史民俗学博物館編　1994　『日本出土の貿易陶磁器』東日本編1・2

小林久雄　1939　「九州の縄文土器」『先史学・人類学講座』11

小林久雄　1967　『九州縄文土器の研究』

佐藤宏之　1985　「斜面地における遺跡形成－多摩ニュータウンＮｏ．407遺跡1号
集石の分析例を中心にして－」
『東京都埋蔵文化財センター　研究論集』Ⅲ

椎葉文雄・松舟博満　1985　『アンモン山遺跡』人吉市教育委員会

渋谷　敦ほか　1981　『尼ケ土手調査報告』熊本県立球磨商業高校

菖蒲和弘　1995　「中世」『須恵村誌』熊本県須恵村

新東晃一　1988　「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』

杉原荘介　1943　『原史学序論』

園村辰実　1993　『夏女遺跡』熊本県教育委員会

多々良友博　1985　「塞ノ神式土器群の文様構成－その分類と変遷の位置づけ」
『塞ノ神式土器』

高木正文　1975　『久保遺跡』熊本県教育委員会

高田素次　1986　『しらがね帖』

鶴嶋俊彦　1984　「軒平瓦を出土した免田町久鹿の遺跡」『くまひと』第4号

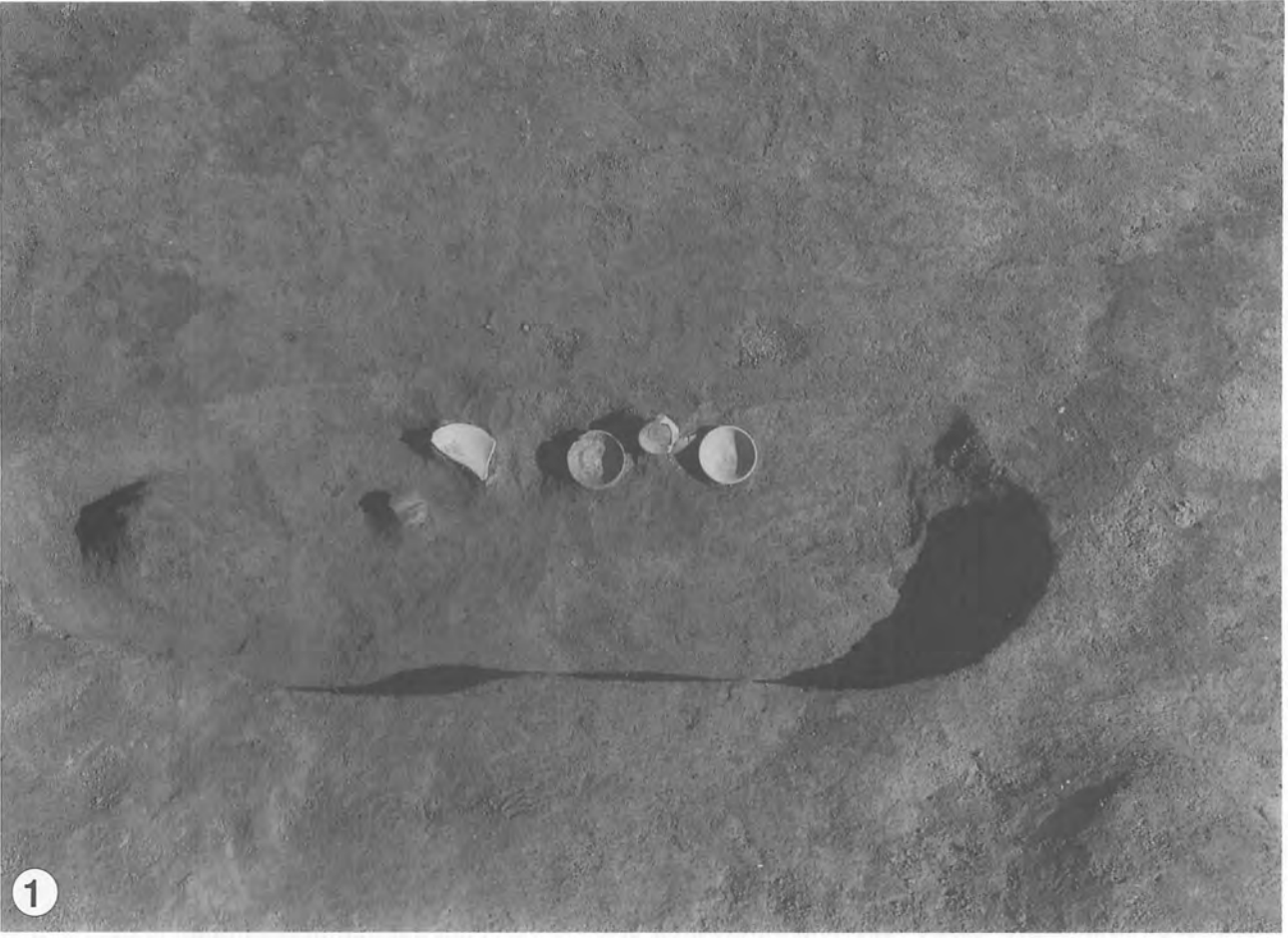
鶴嶋俊彦　1995　「古代」『須恵村誌』熊本県須恵村
寺師見国　1936　「北薩の縄文土器」『史前学雑誌』８－６
寺島孝一　1982　「畿内の緑釉窯』『考古学ジャーナル』211
東京大学史料編纂所編　1979　『大日本古文書　家わけ第５　相良家文書』第１巻　覆刻本
富田紘一・東光彦　1969　「鹿本郡植木町富応久保遺跡」『熊本博物館報』１
中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』
中村　勝　1991　「福岡市新貝窯跡群とその資料」『福岡考古』15
西住欣一郎　1989　『天道ケ尾遺跡Ⅰ』　熊本県教育委員会
野田拓治　1982　「古式土師器の成立と展開」
『森貞次郎博士古希記念古文化論集』
人吉市教育委員会　1990　『願成寺文書』
古城史雄　1996　『沖松遺跡』熊本県教育委員会
舟山良一　1996　「新開窯跡」『須恵器集成図録』第５巻　西日編
本郷泰道編　1988　『前原北遺跡』宮崎県教育委員会
松永幸男　1987　「塞ノ神式土器小考」『古文化談叢』18
松本健郎編　1980　『生産遺跡調査報告Ⅱ』熊本県教育委員会
松本雅明　1978　「渡鹿旧電波高校遺跡　熊本大学大江運動場遺跡調査報告」
『熊本市中央北地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
森田　勉　1982　「北九州地方から出土する越州窯青磁の様相」
『考古学ジャーナル』211
柳田康雄　1991　「土師器の研究　九州」『古墳時代の研究』６
土師器と須恵器
山崎純男・小畑弘己　1983　『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市教育委員会
山下義満　1996　「中世居館跡発掘事例－球磨郡深田村灰塚遺跡調査概報－」
『九州史学会発表要旨集』
山本信夫　1988　「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」
『貿易陶磁研究』Ｎｏ.８
横田賢二郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」
『九州歴史資料館研究論集』４

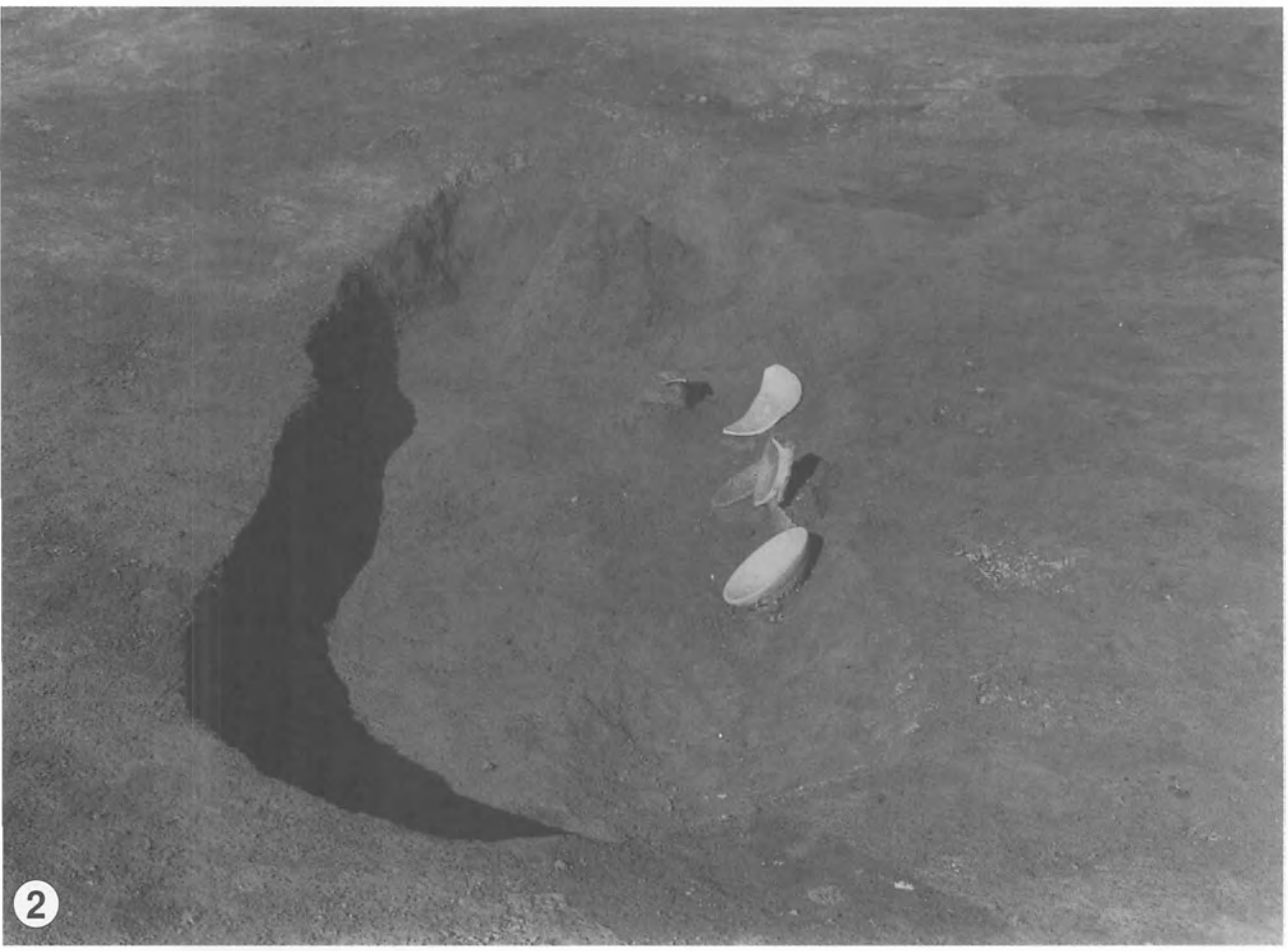
写 真 図 版

図版 1

① 竪穴式住居跡（南から）
② 竪穴式住居跡（東から）

図版 2





① 木蓋土壙墓（西側から）
② 木蓋土壙墓（南側から）

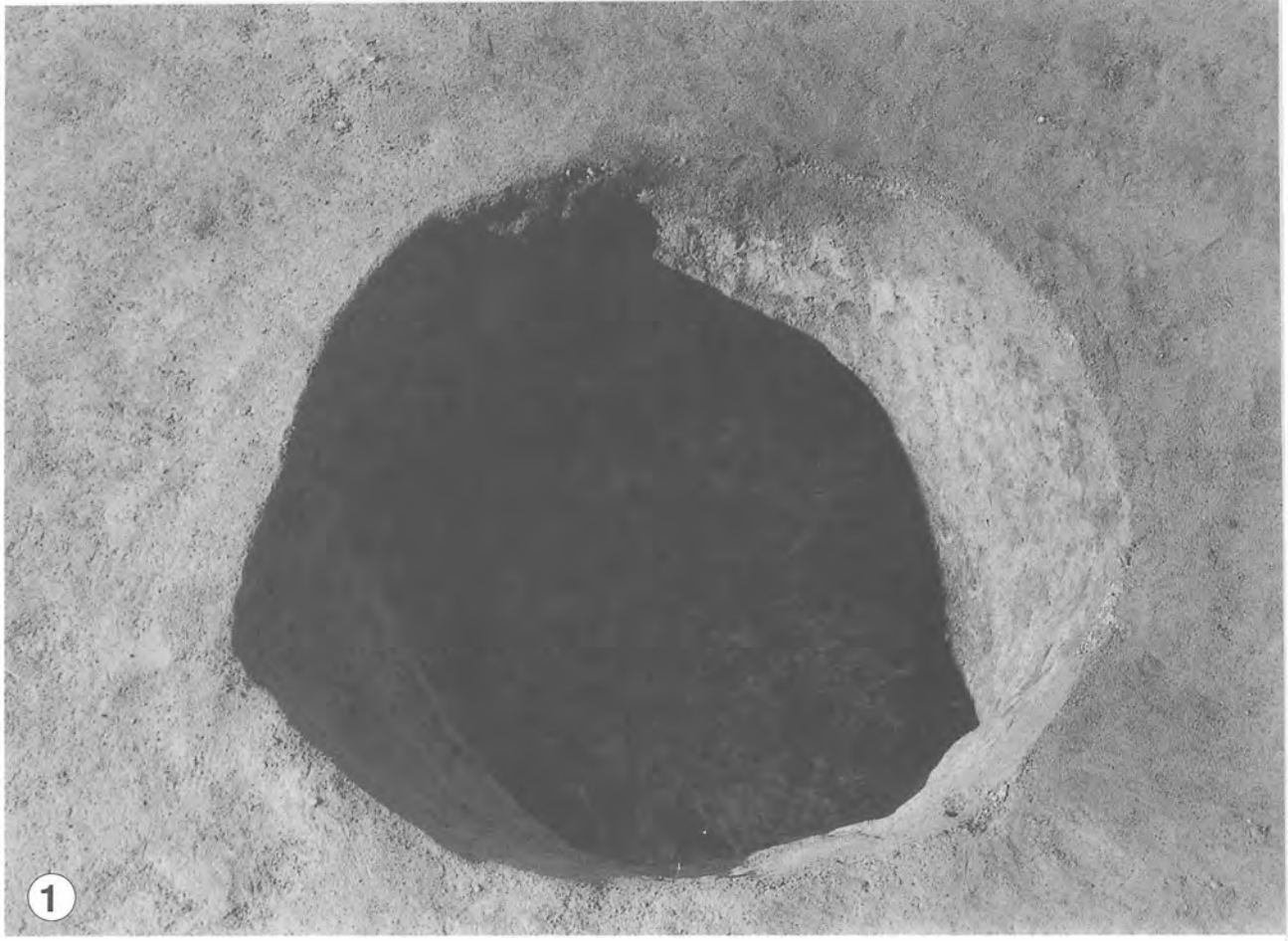
図版 3

① 木蓋土壙墓供献土器
② 木蓋土壙墓枕状造り出し部

図版 4

① 1号柵状柱列（上）・2号柵状柱列（下）
② 3号柵状柱列

図版 5

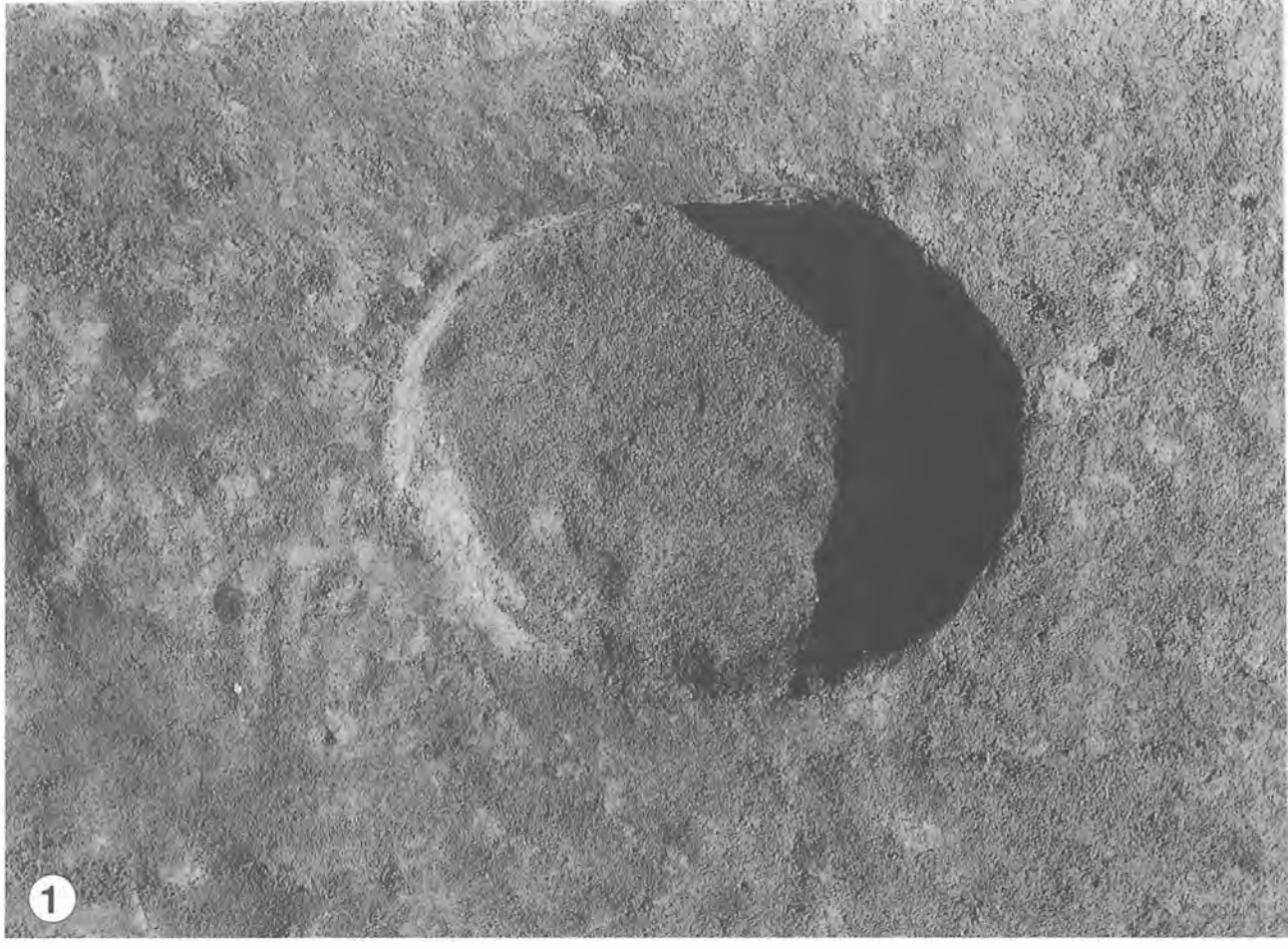


① 2号土坑
② 3号土坑

図版 6

① 4号土坑
② 5号土坑

図版 7

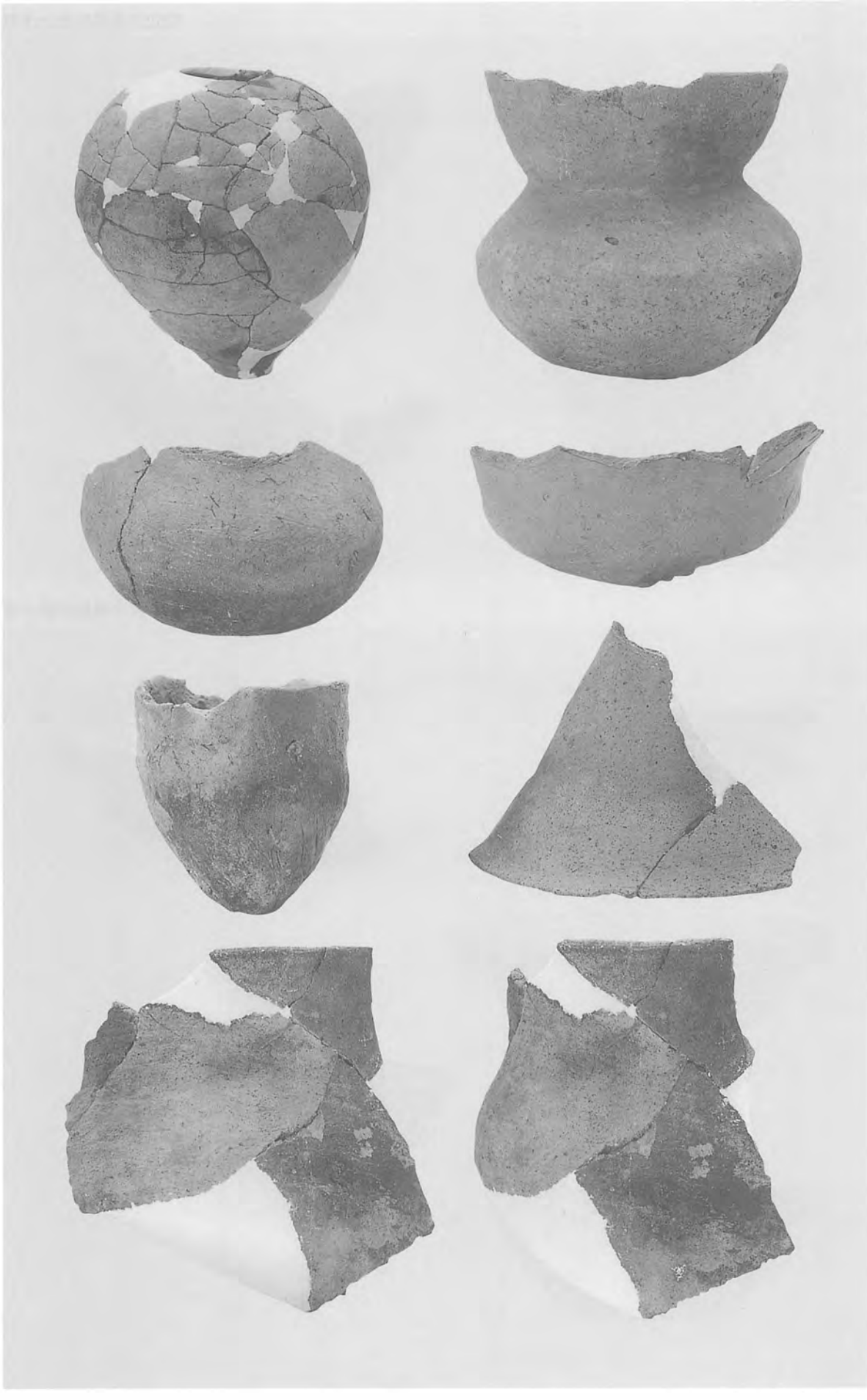


① 6 号土坑
② 7 号土坑

図版 8

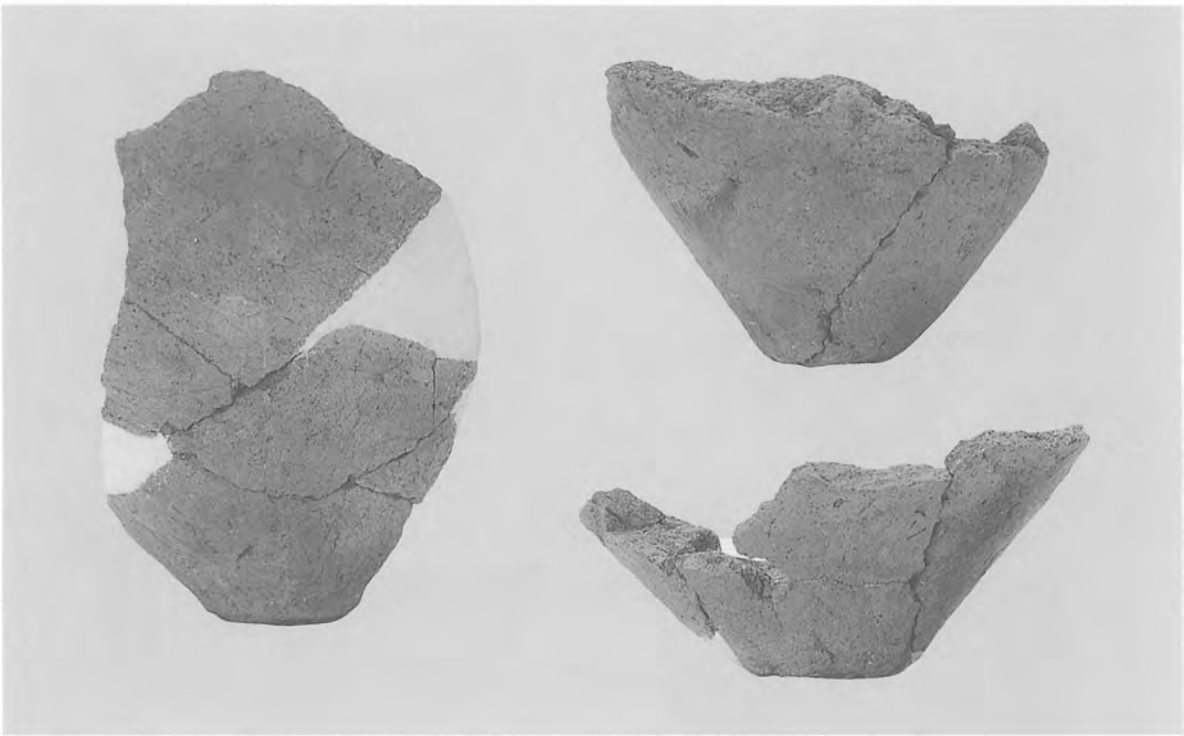
① 8 号土坑
② 調査風景

図版 9

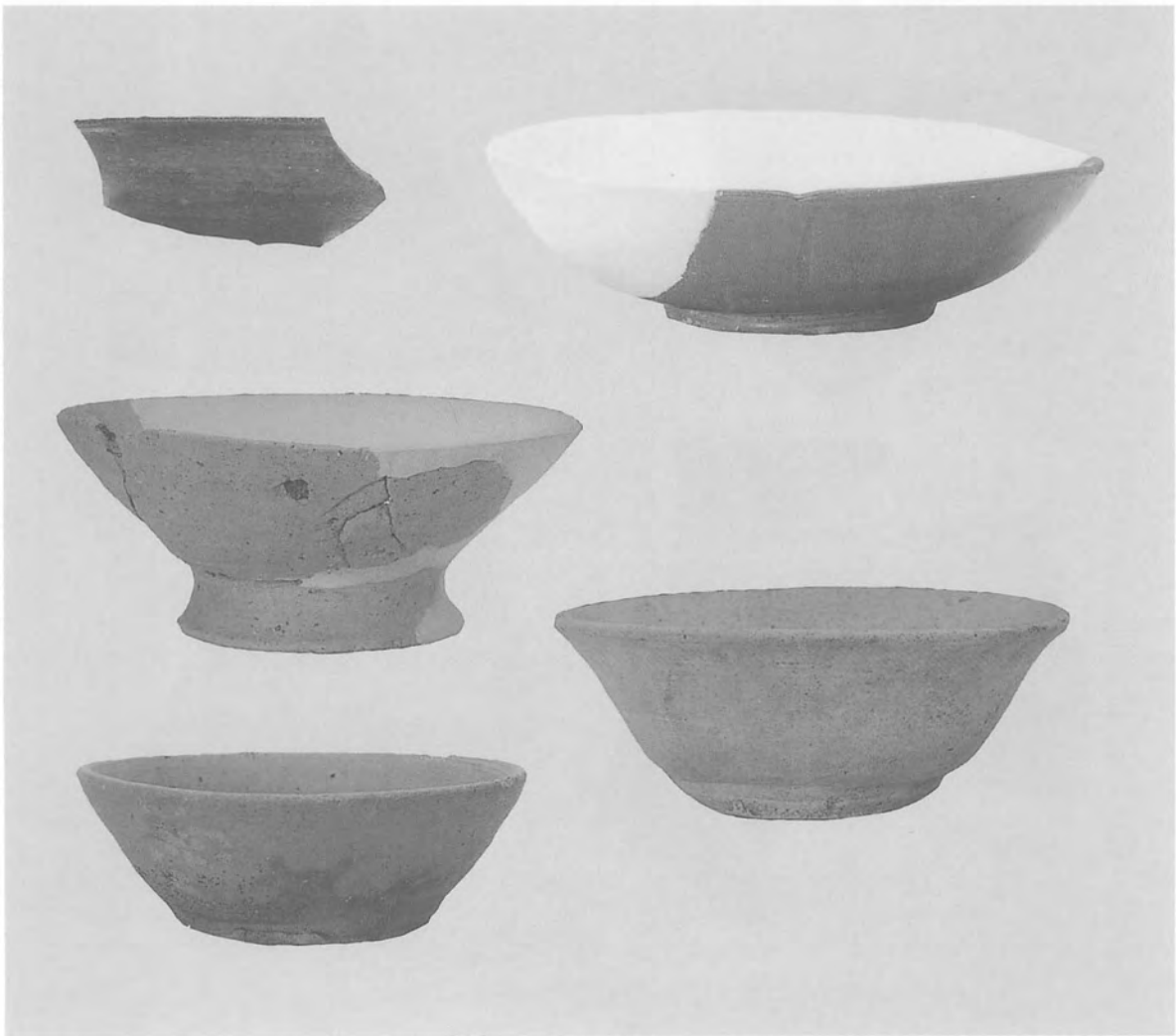


図版10

竪穴式住居跡出土土器



木蓋土壙墓供献土器



第Ⅱ部　中尾・別府遺跡の調査とその成果

第Ⅰ章　調査の概要
第Ⅱ章　遺跡の概要
第Ⅲ章　中尾遺跡の調査とその成果
第Ⅳ章　別府遺跡の調査とその成果

第Ⅱ部　中尾・別府遺跡の調査と成果　目次

第Ⅰ章　調査の概要 ……177
第１節　調査に至る経緯 ……179
第２節　調査及び整理の組織 ……179
第３節　調査の方法と経過 ……180
１．調査の方法 ……180
２．調査の経過 ……180
第Ⅱ章　遺跡の概要 ……183
第１節　遺跡の概要 ……185
１．遺跡の概要 ……185
２．遺跡の基本層序 ……185
第Ⅲ章　中尾遺跡の調査とその成果 ……187
第１節　先土器時代の遺物 ……189
１．遺物 ……189
第２節　縄文時代の遺構と遺物 ……194
１．遺構とその位置 ……194
２．包含層出土の土器 ……195
３．包含層出土の石器 ……196
第３節　まとめ ……196
１．先土器時代の調査について ……196
２．縄文時代の調査について ……198
第Ⅳ章　別府遺跡の調査とその成果 ……199
第１節　先土器時代の遺物 ……201
１．遺物 ……201
２．まとめ ……201
第２節　縄文時代の遺構と遺物 ……201
１．遺構とその位置 ……201
２．包含層出土の土器 ……209
３．包含層出土の石器・石製品 ……214
４．まとめ ……219
第３節　弥生・古墳時代の遺物 ……220
１．包含層出土の土器 ……220
２．包含層出土の石器 ……220
３．まとめ ……220
第４節　歴史時代の遺構と遺物 ……222
１．竪穴住居跡とその出土遺物 ……222
２．掘立柱建物跡とその出土遺物 ……223
３．土坑とその出土遺物 ……223
４．その他の遺構と遺物 ……235
５．包含層出土の遺物 ……238
６．時期不明の遺構とその出土遺物 ……241
７．参考資料（調査区外土坑） ……242
８．まとめ ……244
参考文献 ……252
写真図版 ……255

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図 ……182
第２図　基本土層図 ……186
第３図　中尾遺跡遺構配置図 ……190
第４図　先土器時代石器実測図 ……191
第５図　先土器時代石器実測図 ……192
第６図　先土器時代石器実測図 ……193
第７図　１号集石実測図 ……194
第８図　２号集石実測図 ……195
第９図　縄文式土器実測図 ……196
第10図　石鏃等実測図 ……197
第11図　別府遺跡Ⅰ区遺構配置図 ……202
第12図　別府遺跡Ⅱ区遺構配置図 ……203
第13図　先土器時代石器分布図 ……204
第14図　先土器時代石器実測図 ……205
第15図　縄文時代遺物分布図 ……206
第16図　１・２号集石遺構及び
　　２号集石出土土器実測図 ……207
第17図　２号集石出土石器実測図 ……208
第18図　縄文式土器実測図 ……209
第19図　打製石斧実測図 ……210
第20図　打製石斧実測図 ……211
第21図　打製石斧実測図 ……212
第22図　打製石斧実測図 ……213
第23図　磨製石斧実測図 ……214
第24図　石鏃実測図 ……215
第25図　石匙・石錐等実測図 ……216
第26図　磨石・敲石実測図 ……217
第27図　砥石実測図 ……218
第28図　不明石製品実測図 ……219
第29図　不明石製品実測図 ……219
第30図　磨製石鏃実測図 ……220
第31図　弥生～古墳時代の土器実測図 ……220
第32図　土師器・須恵器等遺物分布図 ……221
第33図　１号竪穴式住居跡実測図 ……222
第34図　１号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……223
第35図　１号竪穴式住居跡出土石器実測図 ……223
第36図　１号掘立柱建物跡実測図 ……224
第37図　１号土坑及び
　　１号土坑出土遺物実測図 ……225
第38図　２号土坑及び
　　２号土坑出土遺物実測図 ……226
第39図　３・４号土坑実測図 ……227
第40図　３号土坑出土遺物実測図 ……228
第41図　３号土坑出土遺物実測図 ……229
第42図　３号土坑出土遺物実測図 ……230
第43図　５・６号土坑実測図 ……231
第44図　７号土坑及び
　　７号土坑出土遺物実測図 ……232
第45図　８・９・10号土坑実測図 ……233
第46図　11号土坑及び
　　11号土坑出土遺物実測図 ……234
第47図　12号土坑実測図 ……235
第48図　13号土坑及び
　　13号土坑出土遺物実測図 ……236
第49図　14号土坑及び
　　14号土坑出土遺物実測図 ……237
第50図　焼土遺構・
　　13号ピット出土遺物実測図 ……238
第51図　陶磁器実測図 ……238
第52図　包含層出土遺物実測図 ……239
第53図　溝遺構実測図 ……240
第54図　溝遺構出土遺物実測図 ……241
第55図　溝遺構出土遺物実測図 ……242
第56図　参考資料 ……243
第57図　参考資料 ……244

表　目　次

第１表　中尾遺跡石器観察表 ……246
第２表　中尾遺跡縄文式土器観察表 ……246
第３表　別府遺跡石器観察表 ……247
第４表　別府遺跡土器類観察表 ……249

図　版　目　次

図版１
　１．中尾遺跡１号集石検出状況
　２．中尾遺跡２号集石
図版２　中尾遺跡先土器時代の遺物
図版３　中尾遺跡先土器時代の遺物
図版４　中尾遺跡石鏃等
図版５
　１．中尾遺跡縄文式土器
　２．別府遺跡遠景
図版６
　１．別府遺跡１号集石
　２．別府遺跡１号竪穴式住居跡
図版７
　１．別府遺跡１号掘建柱建物跡
　２．別府遺跡１号土坑
図版８
　１．別府遺跡３・４号土坑
　２．別府遺跡３号土坑
図版９
　１．別府遺跡13号土坑
　２．別府遺跡14号土坑
図版10
　１．別府遺跡溝遺構
　２．調査区外土坑
図版11　別府遺跡先土器時代の遺物
図版12　別府遺跡石鏃
図版13　別府遺跡石匙等
図版14
　１．不明石製品（１～２）・磨製石鏃（３）
　　線刻礫（４）
　２．別府遺跡縄文式土器
図版15　別府遺跡出土遺物
図版16　別府遺跡３号土坑出土遺物
図版17　別府遺跡３号土坑出土遺物
図版18　別府遺跡７・13・14号土坑、13号ピット等
　　出土遺物
図版19　調査区外土坑出土遺物（参考資料）

第Ⅰ章　調　査　の　概　要

第1節　調　査　に　至　る　経　緯

第2節　調査及び整理の組織

第3節　調　査　の　方　法　と　経　過

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

平成2年度から須恵村・深田村で県営畑地帯総合土地改良事業が計画された。この事業は基幹事業(農業用用排水・農道）と併せて行う事業（基幹事業以外の農業排水・農道と客土・暗渠排水・農用地造成・区画整理・農地保全・営農用水）で，農業用用排水施設，農道の新設や受益面積が概ね100ha以上のものである（基幹事業以外の新設もしくは変更で受益面積が概ね50ha以上のもの)。

須恵・深田地区は受益面積60haで主に区画整理が計画された。この事業の実施に先立ち，事業地区内に文化財が所在する可能性が高いことがわかり，文化課と農地建設課の間で協議が行われ試掘調査を実施することになった。

その結果，中尾地区・別府地区において都合約1haの広大な遺跡が所在することがわかり，再度農政部局と設計変更等の協議を行い，やむを得ず削平を受ける箇所については発掘調査を行う事となった。

第2節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである)。

発掘調査の組織

（予備調査・平成2年度）

調査責任者　江崎　正（文化課長）
　　隈　昭志（教育審議員）
調査総括　松本健郎（主幹・調査第1係長）
調査事務局　中川義孝（教育審議員）
　　上村忠道（経理係長）
　　大広美枝子（主任主事）
　　川上勝美（主任主事）
　　古城史雄（主任主事）
調査担当　高木正文（参事）
　　園村辰実（文化財保護主事）

（本調査・平成3年度調査）

調査責任者　大塚正信（文化課長）
　　隈　昭志（教育審議員）
調査総括　島津義昭（調査第1係長）
調査事務局　松崎厚生（課長補佐）
　　木下英治（主幹・経理係長）
　　大広美枝子（主任主事）
　　川上勝美（主任主事）
調査担当　木村元浩（学芸員）
　　中川裕二（嘱託）
専門調査員　木村幾太郎（大分市立歴史資料館長）
調査指導・助言および協力者（順不同，敬称略）
　　賀川光夫　（別府大学）
　　橘　昌信　（別府大学）
　　池田榮史　（琉球大学）
　　鶴嶋俊彦　（人吉市教育委員会）
　　和田好史　（人吉市教育委員会）
　　須恵村教育委員会
　　須恵村役場
　　球磨郷土研究会

調査作業員

五嶋マツミ・荒木忠代・松坂アサカ・川辺ナラヨ・中村ユキヨ・釜田ミヤ子・恒松リツ・富田ミツ子・平田シマエ・宮田マスノ・林田ミエ・恒松シヅエ・松山ヒサ子・松村ユキエ・北川十七子・谷村ミチ子・久保田米子・中村淳一

整理の組織

（整理・報告書作成）

報告書責任者　桑山裕好（文化課長）
　　丸山秀人（教育審議員）
報告書総括　島津義昭（主幹・調査第1係長）
事務局　渕上重喜（教育審議員）
　　江尻靖子（総務係長）
　　高宮優美（参事）
　　岸本誠司（主事）
　　東　　修（主事）

報告書担当　古城史雄（参事）
木村元浩（主任学芸員）
冨永圭子（嘱託）
森　愛華（臨時職員）

整理作業　後藤直美・渕上慶子・後藤ちず子・吉田律子・山元友子・村山紀子・上田律子・河野智子

調査指導・助言および協力者（順不同，敬称略）
美濃口雅朗（熊本市教育委員会）
出合　宏光（相良村教育委員会）
岩谷　史記（熊本大学院生）

第３節　調査の方法と経過

１．調査の方法

平成２年度の試掘調査を終えて，中尾地区の遺跡は中尾遺跡，また別府地区の遺跡は別府遺跡と名付けられた。本調査の対象面積は，中尾遺跡約3,000㎡，別府遺跡約5,000㎡で，合計8,000㎡である。まず中尾遺跡から本調査を開始し，調査終了後，別府遺跡の調査に着手するというスケジュールのもと，調査に取りかかった。

①　表土剝ぎ

第Ⅰ層のみを重機を用いて掘削した。Ⅱ層は褐色砂質土（アカホヤの二次堆積）層であり，第１次の遺構検出面とした。

②　調査区の設定・調査の手順

その調査区の平面形にあわせて，任意にグリッドを設定した。それは実測，測量及び遺物取り上げのために一辺が10ｍの正方形のグリッドを調査区全体に網の目のように設定するものである。

中尾遺跡では，グリッドは東西方向をアラビア数字で，南北方向をアルファベットで示した(**第３図**)。

別府遺跡では，調査箇所が２カ所に分かれるため，東側をⅠ区，西側をⅡ区と大調査区を設定した。さらに両調査区の位置関係を把握できるよう，やはり，一辺が10ｍの正方形のグリッドをⅠ区・Ⅱ区を通して，東西方向をアラビア数字で，南北方向をアルファベットで示した（**第10・11図**)。

調査は重機による表土剝ぎ及び調査区の清掃から始めた。

遺構は平面形を確認の後，土層堆積の状況を確認するためのセクション・ベルトを残して掘り始める。次に土層観察と土層断面図の作成，そして遺物出土状況等の写真撮影,その後ベルトを取り除き平面図・断面図を作成し，再度写真撮影を行う。

一方遺物包含層の調査では，１つのグリッドを単位として掘り下げを行う。その後平板・レベルを用い，出土位置と深度を計測し，記録していき，遺物を取り上げる。

２．調査の経過

平成３年７月から平成４年３月にかけて調査を行った。以下月ごとの進捗状況を記す。

中尾遺跡

７月

中尾遺跡の表土剝ぎ作業開始する。耕作土直下の褐色砂質土（アカホヤの二次堆積層）上面で，イモ穴・集石を検出する。この面での遺構は以上であった。その後遺構の掘削と平行して，下層の遺構・遺物を確認するために，トレンチを設定し，掘削にかかった。

須恵村経済課北川氏と県立球磨農業高等学校生徒４名が応援に来る。

８月

中川調査員が調査に合流する。

トレンチ調査では，文化面の検出・遺物の集中度・土層堆積状況の確認を行うが，文化面（遺構）は認められない。かなり地層が乱れているようである。撹乱からではあるが，若干の土器片と石器が出土する。南へいくほど遺物の出土は少なくなるようである。

また琉球大学池田助教授が来訪され，指導・助言を受ける。

９月

木村調査員が職員研修のため，１週間程現場を離れることになるため，古城調査員が応援にくる。

縄文時代早期の遺物が若干出土する。遺物はすべ

て位置を押さえ，各トレンチの土層断面図作成する。

また下旬には超大型台風19号が接近する。被害状況が気になったため，翌日は休日であったが，現場に急行する。幸いにも被害は仮設トイレの転倒だけであった。

10月

集石等の遺構実測図の作成をすべて完了し，29日で中尾遺跡の調査を完了する。

別府遺跡

10月

10月中旬に別府遺跡の北西側であるⅠ区の表土剥ぎを開始する。下旬から，遺構精査を開始する。

11月

遺構精査の結果，溝・土坑・掘建柱建物跡を検出した。また併せて基準杭の設置を行う。

その後，遺構の掘削を開始する。またⅠ区の北西部には遺物包含層が残存していることが判明した。

12月

Ⅰ区のすべての検出遺構の図面作成・写真撮影を行い，Ⅰ区の調査を終了する。

1月

木村調査員が1週間程特別休暇にいるために，代わりに園村辰実・丸山伸治・濱田彰久調査員の応援を受ける。

Ⅱ区の調査に取り掛かる。重機による表土剥ぎ作業を実施する。

遺構精査の結果，土坑・竪穴式住居跡などを検出する。

2月

検出した遺構の図面作成を急ぐが，雨が多く思うようにはかどらない。しかし，下旬には大半の検出遺構の図面作成・写真撮影を完了させた。

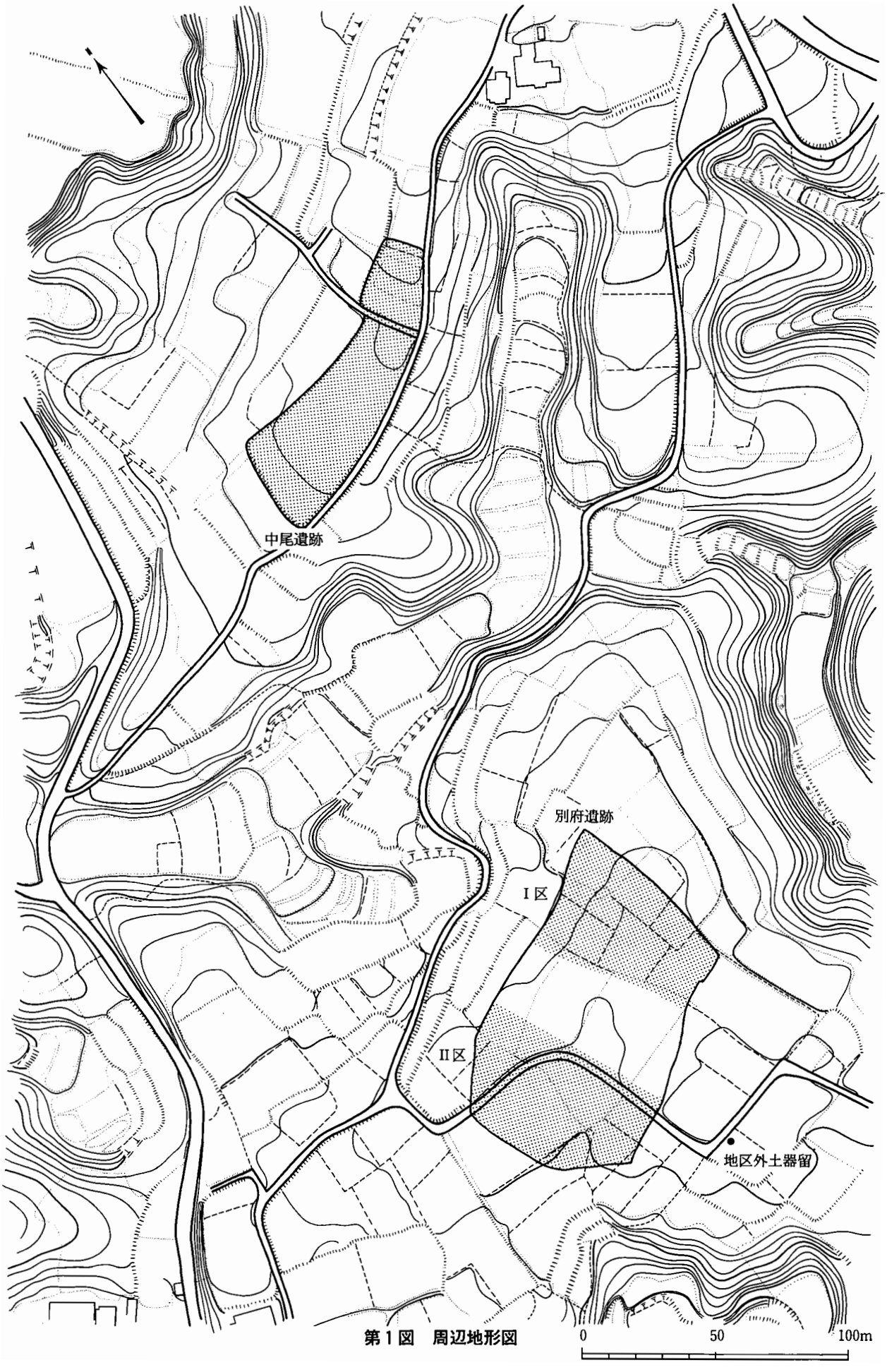
3月

調査区外の工事現場より土器が多量に出土したとの通報を受けた。急遽現地に赴き，遺物の取り上げ，写真撮影を行う。

一方調査区では，下層に遺物・遺構が存在しないか，最終確認のため，数箇所にトレンチを設定する。しかし下層には遺物・遺構は存在しなかった。

また別府大学橘教授及び大分市歴史資料館木村館長の現地指導を受ける。

検出した遺構の補足等を実施し，3月末に調査を終了させた。



第1図　周辺地形図

第Ⅱ章　遺　跡　の　概　要

第1節　遺　跡　の　概　要

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

遺跡周辺の地理的環境，歴史的環境については，堂園遺跡の頁に詳しいので，ここでは中尾遺跡・別府遺跡の立地及び概要について述べることとしたい。

１．遺跡の概要

中尾遺跡・別府遺跡の発掘調査は県営緊急畑地帯総合整備事業須恵・深田地区の計画に伴い平成３年度に実施された。

中尾遺跡は熊本県球磨郡須恵村字中尾に，別府遺跡は球磨郡須恵村字別府に所在する。

人吉盆地の北東寄り，球磨川の北側の田頭川と阿蘇川に挟まれた丘陵地に位置する。その地形は北から南に緩やかにその高度を下げていくが，幾つもの狭い丘陵地と小さな谷が複雑に入り組んでいる。

中尾遺跡と別府遺跡は，ほぼ東西に伸びる谷を挟んで対峙している。

中尾遺跡

遺跡の標高は約181ｍで，小丘陵の南端部に位置する。北から南へなだらかに傾斜している。昭和40年代頃に一度地形の改変を受けているとのことであった。

遺跡の現況は畑地として利用され，調査区の東端に南北に延びる里道が走っていた。また調査区の南端にも東西に里道が走っている。その里道より南に10ｍ程行った所から，急激な段落ちとなる。

中尾遺跡の出土遺物には，先土器時代のナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形様石器や縄文時代の土器片・石器などがある。全体的に遺物量は少なく，また残念ながら自然堆積層の残存状況が悪いために，層位的にとらえられたものではない。

遺構としては，縄文時代早期に属すると思われる集石遺構２基を検出した。

別府遺跡

中尾遺跡より，直線で約180ｍ南西に行った箇所が別府遺跡である。

遺跡の標高は約180ｍで，小丘陵の東南端にあたる。ほぼ平坦な地形であったが，20年程前に整地されているとのことであった。

遺跡の現況は畑地として利用され，調査区の西端に里道が走っていた。

別府遺跡の主体となる時期は平安時代である。しかしその他にも，少量ではあるが，様々な時代の遺構や遺物が出土している。

先土器時代の可能性のある資料としては，台形様石器・細石刃核などがある。

また縄文時代は，遺構としては集石が２基，遺物としては，孔列文土器を始とする土器小破片や打製石斧・石鏃などが出土している。その時期の中心は縄文時代晩期のようである。

弥生・古墳時代の遺構は検出されなかった。しかし遺物はごく少量ではあるが，出土しており，重弧文土器や鹿を描いたのではと考えられる線刻礫などがある。

平安時代は，他の時代と比べて，遺構・遺物ともに検出例が多い。

遺構としては竪穴式住居跡１軒・掘建柱建物跡１棟・土坑14基などが確認されている。

遺物としては，遺構に伴う土師器・須恵器の他に，包含層からもある程度まとまった量の遺物が出土している。

鎌倉時代は，遺構は検出されなかったが，青磁や東播系陶器などの遺物が出土している。量的にはごく少量である。

２．遺跡の基本層序

中尾遺跡は，残存状況が悪く自然層を提示できないが，基本的に両遺跡で認識された自然層は同一のものであるため，別府遺跡で認識された自然層を提示する。

また，それぞれの遺物の包含位置について説明する事にしたい（第2図）。

第Ⅰ層（表土）

耕作土である。

第Ⅱ層（褐色砂質土）

砂質土で，ふかふかとした細かい砂粒で，土壌化したアカホヤ火山灰の二次的な堆積層である。

縄文時代後期から中世の遺物を含む。

第Ⅲ層（黄褐色土）

アカホヤ火山灰層である。この層は不純物を含まないアカホヤ火山灰の一次堆積層である。

第Ⅳ層（黒色砂質土）

粒子はきめ細かく不純物を含まない。

縄文時代早期の遺物や細石器の遺物を含む。

第Ⅴ層（黄白色砂質土）

不純物をほとんど含まず，硬く引き締まる。

先土器時代の遺物包含層に対応する。

第Ⅵ層（黄褐色土）

姶良カルデラ起源の入戸火砕流である。この層の上部に若干青っぽい硬質土がのる。また下部には黒っぽい硬質土が存在するが，細分が難しい。無遺物層である。

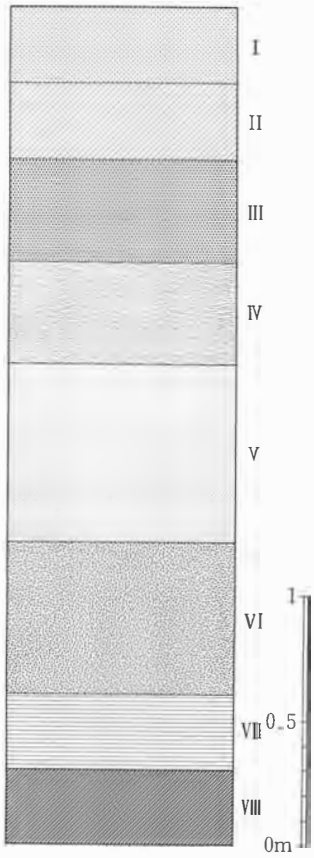
第Ⅶ層（黒褐色粘質土）

きめ細かく不純物をほとんど含まない。無遺物層である。

第Ⅷ層（茶褐色粘土）

きめ細かく不純物をほとんど含まない。

これらの基本層序は，遺跡全体を見通したうえで決定したものであるが，遺跡内の地点により各層の厚さは様々であり，既に削平されたりして存在しない層もある。特に中尾遺跡においては，層位が逆転していたりと撹乱がひどい。



第2図　基本土層図

第Ⅲ章　中尾遺跡の調査とその結果

第1節　先土器時代の遺物

第2節　縄文時代の遺構と遺物

第3節　まとめ

第Ⅲ章　中尾遺跡の調査の成果

第１節　先土器時代の遺物

１．遺物（第４～６図）

器種としては，ナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形様石器がある。しかし層序の乱れが著しく，先土器時代の石器出土レベルより，かなり下位のレベルより土器が出土したりしている。これは，以前の基盤整備事業によって，削平をうけた結果であると思われる。しかし，当時期の資料が存在することは確実であり，この15点は貴重な資料となるであろう。

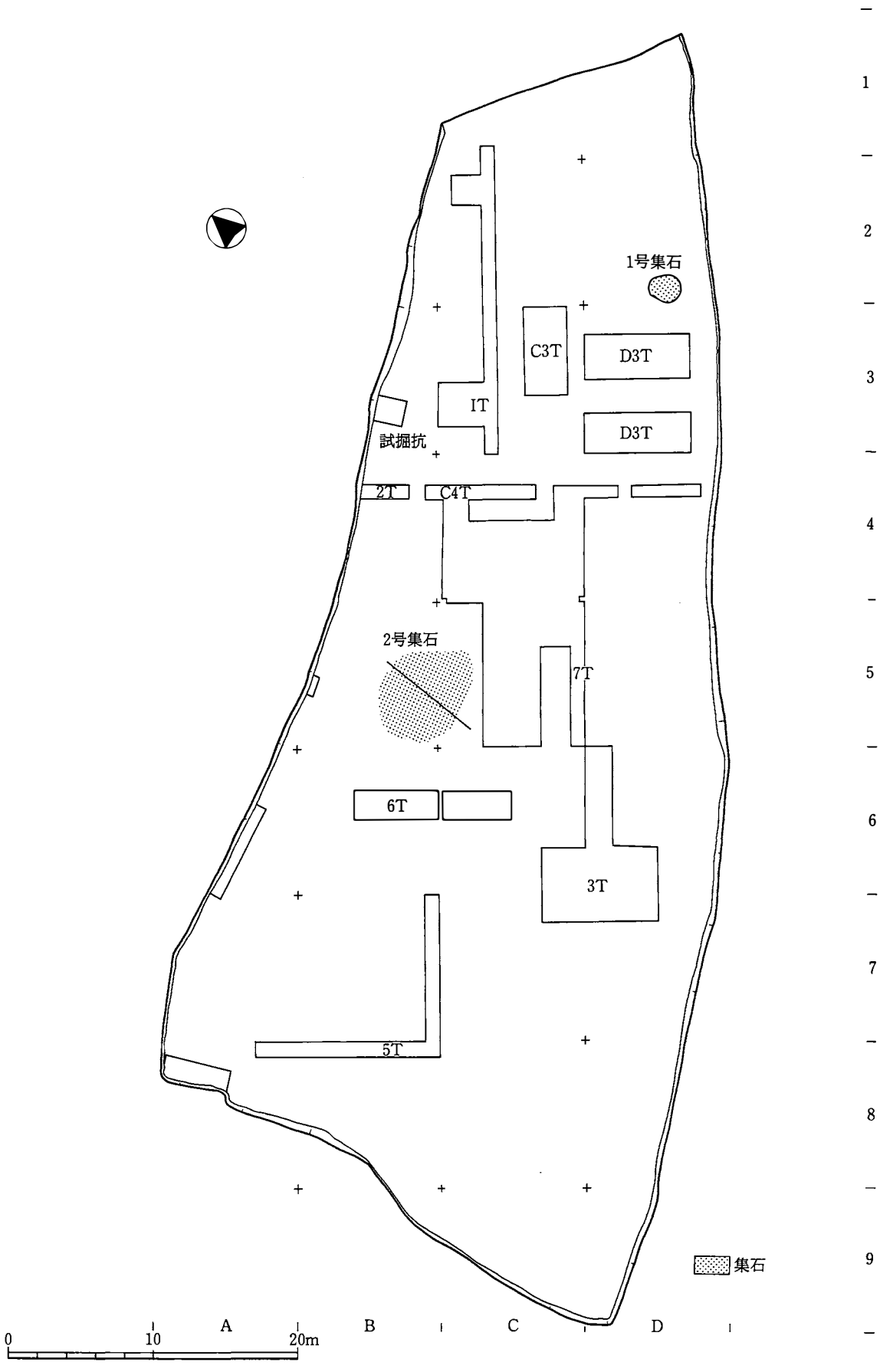
１～５は，ナイフ形石器である。１は，長さ２㎝にも満たない非常に小型のものである。縦長の剥片を素材とする。基部は一部欠損するが，両側縁・先端部及び基部に緻密な加工を施す。結果的に全周加工のものとなっており，刃部は見られない。２は，縦長の剥片を素材とする。先端部及び一側縁に急斜度の加工を施すものである。下部は欠損しているが，鋭利な刃部が残存する。３は，横長の素材を用いて，素材の打面部を取り除く形で，この一側縁に急斜度の加工を施すものである。下部は欠損している。４は，縦長の素材を用いている。一側縁に急斜度の加工を施す。下部は欠損する。５は，基部の一側縁が欠損しているが，基部加工のものである。両側縁には刃部を残しており，使用痕跡と考えられる微細な剥離が見られる。先端部も欠損しているが，優美な縦長剥片を用いたものである。

６・７は台形様石器である。６は，素材の打面側に緻密な加工が入る全体形がほぼ平行なものである。刃部には，使用痕跡と考えられる微細な剥離痕が見られる。７は，比較的大型のもので，一側辺は，欠損している。欠損している辺は，やや緩やかな加工と考えられ，対する辺は，素材の打面を切る様に大きく加工を施している。刃部には，使用痕跡と考えられる微細な剥離痕が認められる。全体形は，刃部が幅広の直線的なものである。

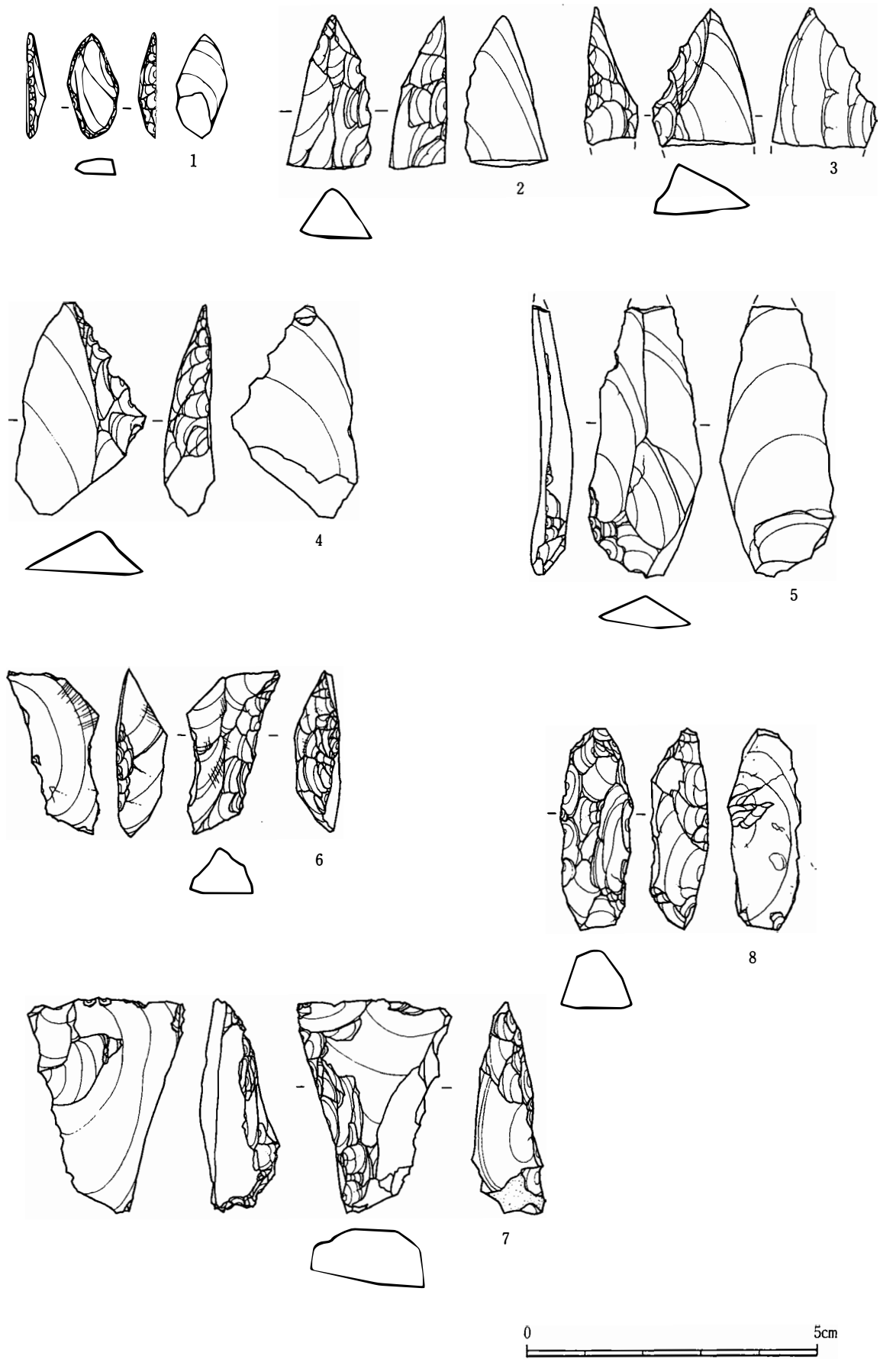
８～11は，三稜尖頭器である。８は断面三角形状を呈する小型のもので，両先端が欠損している。全体的に加工が粗い。石材あるいは風化によるものか，全体的に丸みを帯びたような印象を受ける。素材は，横長剥片を用いている。９は，大型のもので，先端部のみである。加工は粗く，正面の稜も明確に造り出されず，礫面を残している。また，石質は不良で節理がある。平らな底面も節理面となっている。製作途中で放棄された未製品であるととらえておきたい。10は，一側面のみに緻密な加工を施すもので他のものと異質である。先端及び基部が欠損する。素材剥片は，やや斜めの縦長である。11は，先端部と基部を欠損しているもので，両側面には緻密な加工が入る。横長の剥片を素材としている。

12～15は，剥片尖頭器である。12は，下部が欠損しているが，やや幅広の縦長剥片を素材とするものであり，厚みをもつ。一側縁に整然と加工を施し，対する縁が鋭利な刃部となっている。13は，やや幅広の縦長剥片を素材とする大型のものである。基部は，両端部を加工し，内湾させている。一側縁の先端近くに若干の加工が入るものの，両側縁は基本的に素材の鋭利な縁辺を残しており，刃部としている。14は，柳葉形の優美な縦長剥片を素材とし，基部の一辺を内湾させ，対する辺は直線的である。先端部は欠損するが一側縁には綿密な加工を施しており，対縁には，粗い加工痕がほぼ全体に認められる。これは使用痕とも考えられる。15は先端部はないが，全長10㎝以上あるもので２つが接合するものである。素材は，優美な長狭の剥片を使用している。基部は両端を加工し，内湾させてはっきりと造り出し，両側縁にも加工がいる。また，裏面の一側縁上部にも平坦な加工が見られる。14同様一側縁には緻密な加工が，対縁には全体にわたって粗い加工が入る。両側縁の加工斜度は異なるものの意図しているかのように直線的であり，全体形は非常にスマートである。欠損については，接合位置の側縁部に見られるやや深い加工が原因かもしれない。

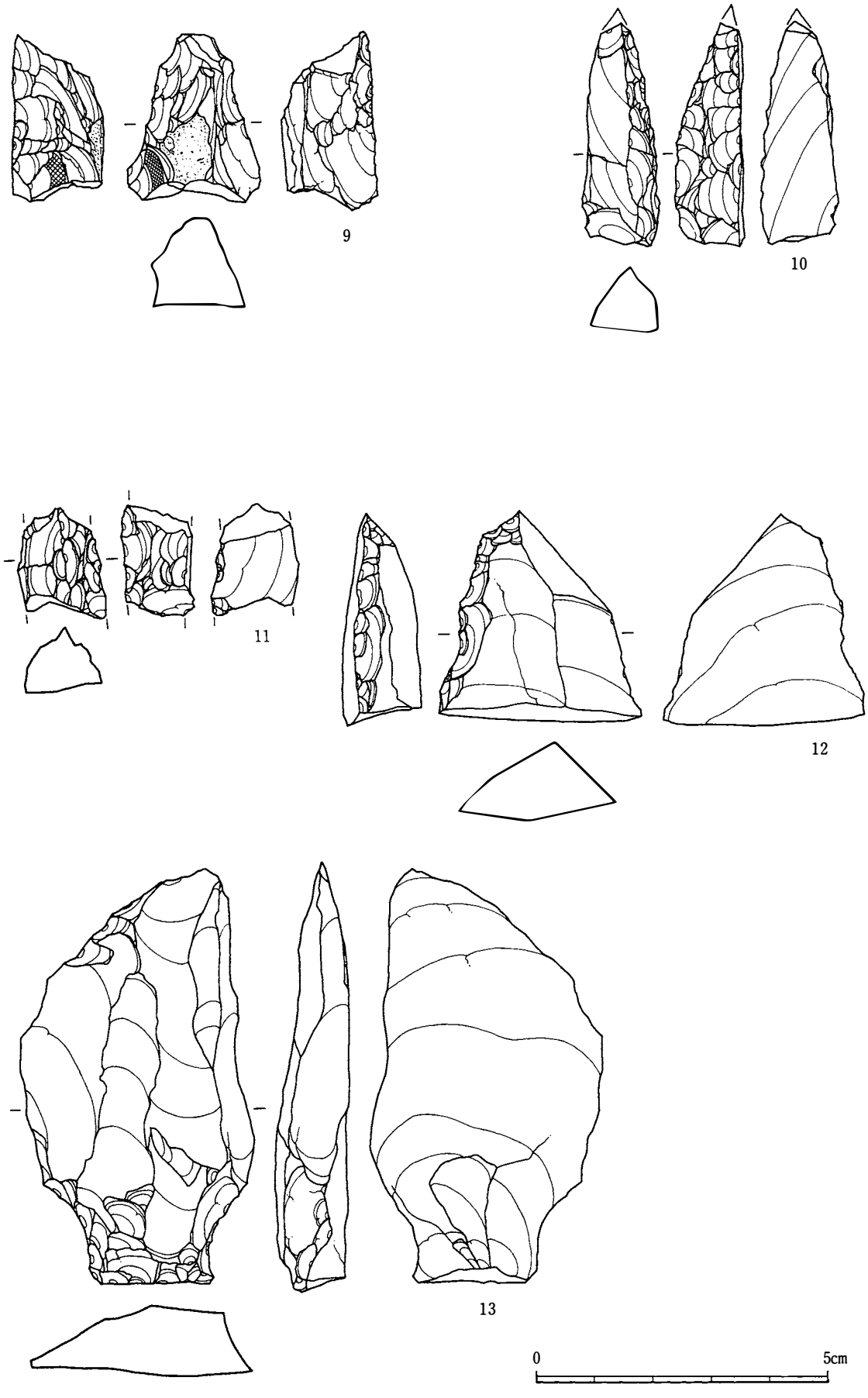
出土層位については，出土状態が不良なため断定



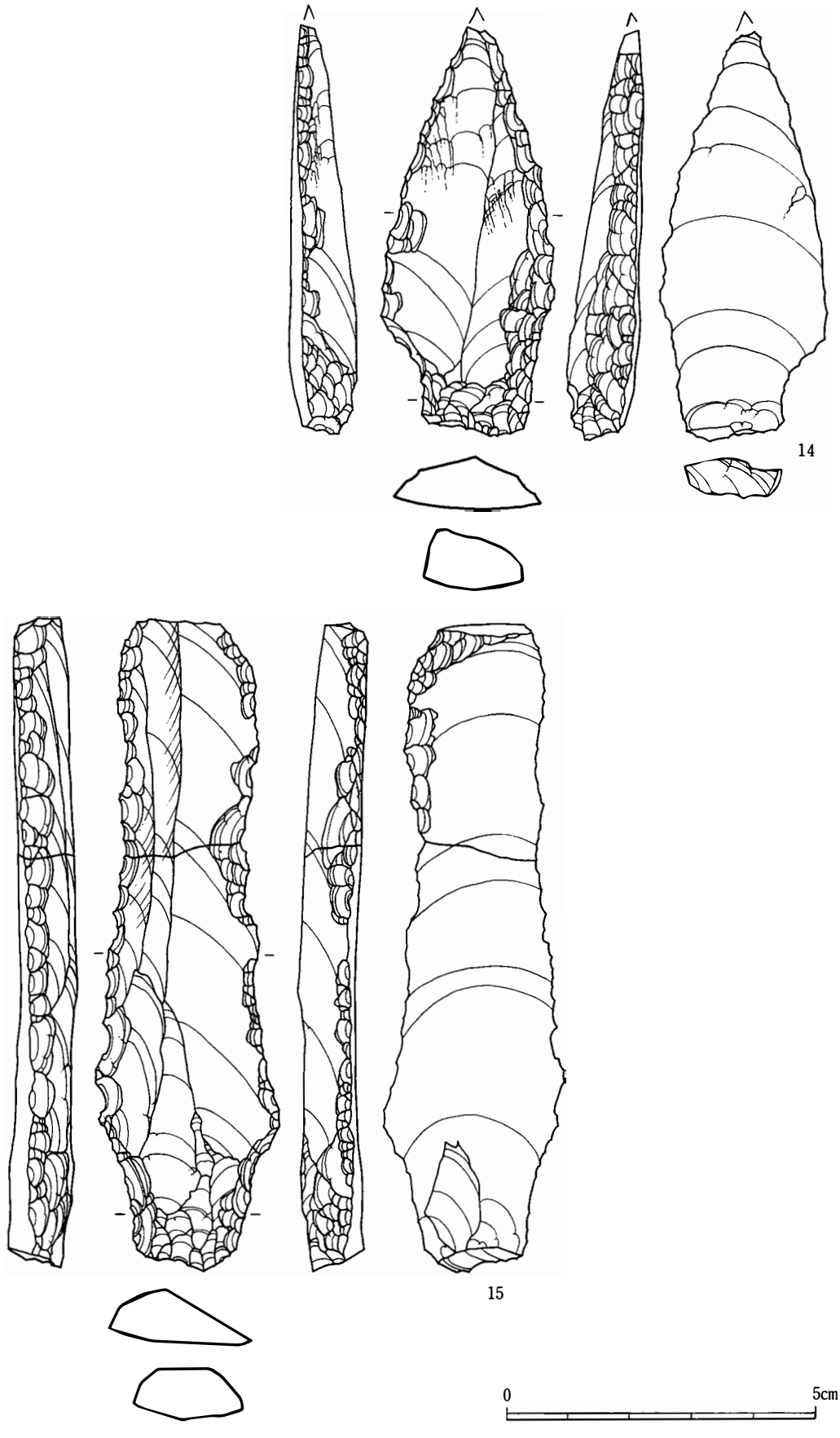
第３図　中尾遺跡遺構配置図



第４図　先土器時代石器実測図



第５図　先土器時代石器実測図



第６図　先土器時代石器実測図

できないが，縄文時代早期の遺物包含層である第Ⅳ層直下の第Ⅴ層に比定できるのではないかと考えられる。

なお，ここで使用した器種の呼称または分類については迷うところがある。特にナイフ形石器と剥片尖頭器の区分であるが，ここでは，わりあい優美な縦長剥片を素材どして，素材の打面を残しており，基部を明瞭に造り出すもの（推定を含む）を剥片尖頭器としている。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１．遺構とその位置（第３図）

縄文時代に属すると考えられる遺構として，集石遺構がある。

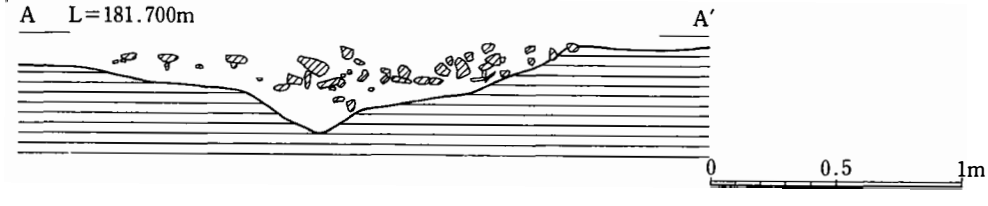
集石遺構

１号集石（第７図）

Ｄ２グリッド南西部において検出した。土坑の平面形は，やや不正な楕円形を呈している。土坑内の中央部よりやや南東よりの部分が一段深くなっている。長軸2.28ｍ・短軸2.08ｍ・最大の深さ0.25ｍ程を測る。土坑内には最大で径20㎝程の角礫及び破砕した礫が詰まっているが，火を受けた痕跡は認められなかった。また遺物の出土もなかった。

２号集石（第８図）

Ｂ５・Ｃ５グリッドにまたがって位置する。破砕礫が散乱した状態で検出された。掘り込みを持たないものであり，礫群として捉えたほうがいいのかも知れない。石の散布状態は約７ｍ四方内に収まり，



第７図　１号集石実測図

その集中度は弱い。石の堆積は，最大でも厚さ約20cmに満たない。礫に混じり土器の小片が１点出土しているが，細片で図化に耐えるものではなく，また時期を特定できるものでもない。

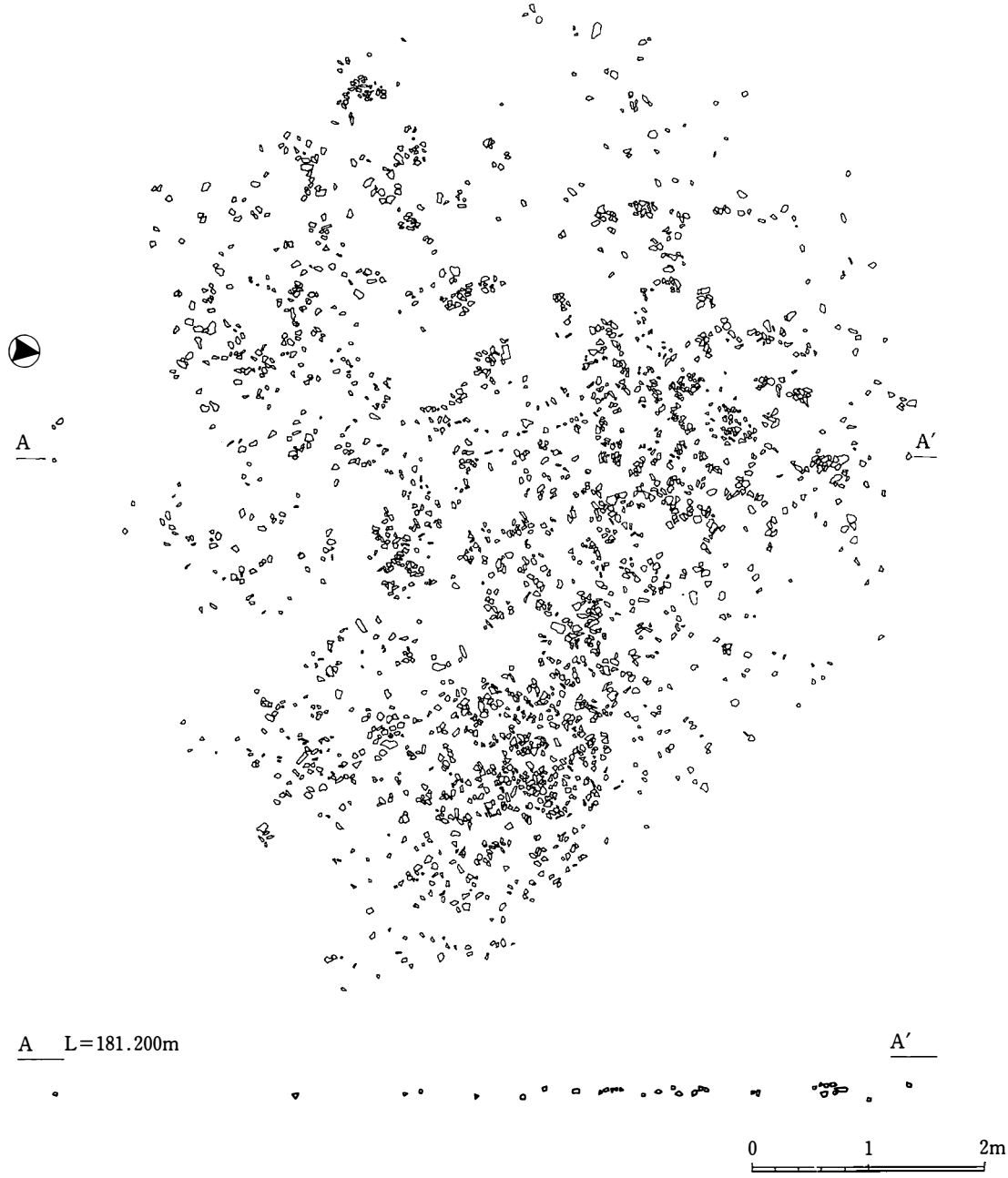
２．包含層出土の土器

分布

極細かい破片すべてを含めて，約150点程が出土している。しかしそのほとんどが細片であり，図化に耐え得るものは極端に少ない。また地層が乱れているために，層位的に捉えられたものは少ない。その分布は調査区の東側からの出土が多い。特にＣ３・Ｃ４・Ｃ５・Ｄ３グリッドからの出土が多い。

土器（第９図）

出土した土器のうち９点を図化した。１～３は口縁部近くの狭い範囲に貝殻腹縁による連続刺突文を施文するものである。これは木崎康弘氏が蒲生・上の原遺跡（木崎1996）で設定している中原Ⅰ式に該当する。４は撚糸文土器の口縁部分である。５は押型文土器で，口縁がわずかに外反する。外器面には



第８図　２号集石実測図

斜に山形の施文を，内器面は口縁部分の狭い範囲に，横位の山形の施文をする。これは木崎氏が無田原遺跡（木崎1995）で提唱している沈目式に該当する。６も押型文土器の胴部片である。７はゆるやかに口縁部が内湾するものである。口縁部分にはヘラ状工具による連続刺突文を２段に施す。さらにその下位には数条の横位の沈線を施す。８・９は刻目突帯文土器である。８は口縁部片で口縁部分に刻目突帯を巡らす。９は口縁部分を欠損しているが，本来は口縁部分とその下位の屈曲部分に刻目突帯を巡らしていたと思われる。８に比べると９は調整がかなり粗雑である。

３．包含層出土の石器

石鏃（第10図１～16）

総数19点が出土している。その内16点を図化した。その分布を見ると，Ｄ３グリッドからの出土が顕著である。

石鏃はその形状から，大きく２類に分類できる。Ⅰ類は正三角形もしくは全長より横幅の方が長いものである。Ⅱ類は二等辺三角形のものである。

Ⅰ類（１～10）

全体の形状が正三角形に近いものである。１は平基式の石鏃である。２～10は凹基式の石鏃である。２は凹基の状態は浅く三角形状に抉れる。３～８・10は凹基の状態はＵ字形状に抉れるものである。その中でも５・６・８は，幅が小さくＵ字状に抉れる。９は深く三角形状に抉れる。

Ⅱ類（12～16）

全体の形状が二等辺三角形をしているものである。

12は，凹基の状態はわずかに浅く抉れる程度である。14～16は凹基の状態はＵ字形状に抉れるものである。

異形石製品（トロトロ石器　第10図17）

１点が出土している。その出土位置はＢ６グリッドである。一端を丸くし，もう一端の両側に角状の突起がつく。特に磨きは認められない。使用石材は，チャートである。

石匙（第10図18）

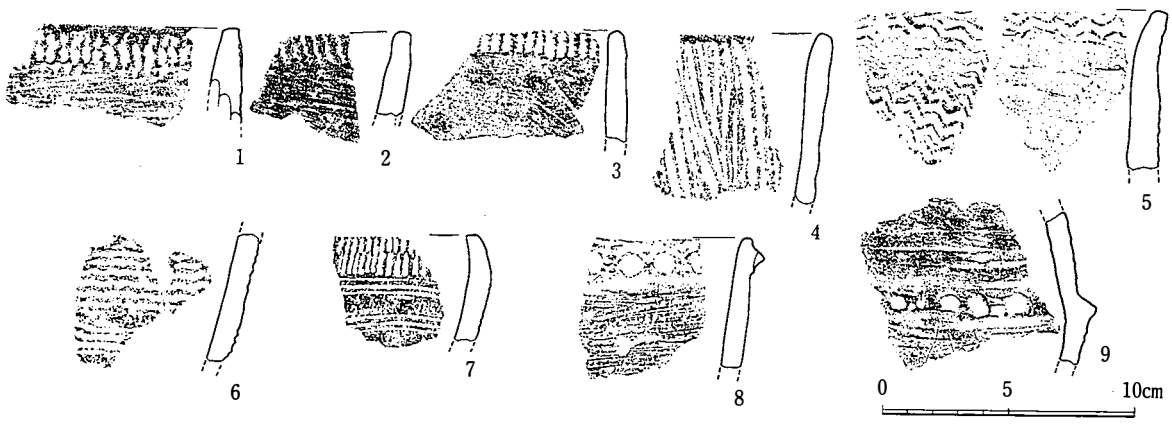
１点の出土であった。残念ながら出土地点を押さえられない。横型の石匙で，つまみ部を欠損している。

第３節　まとめ

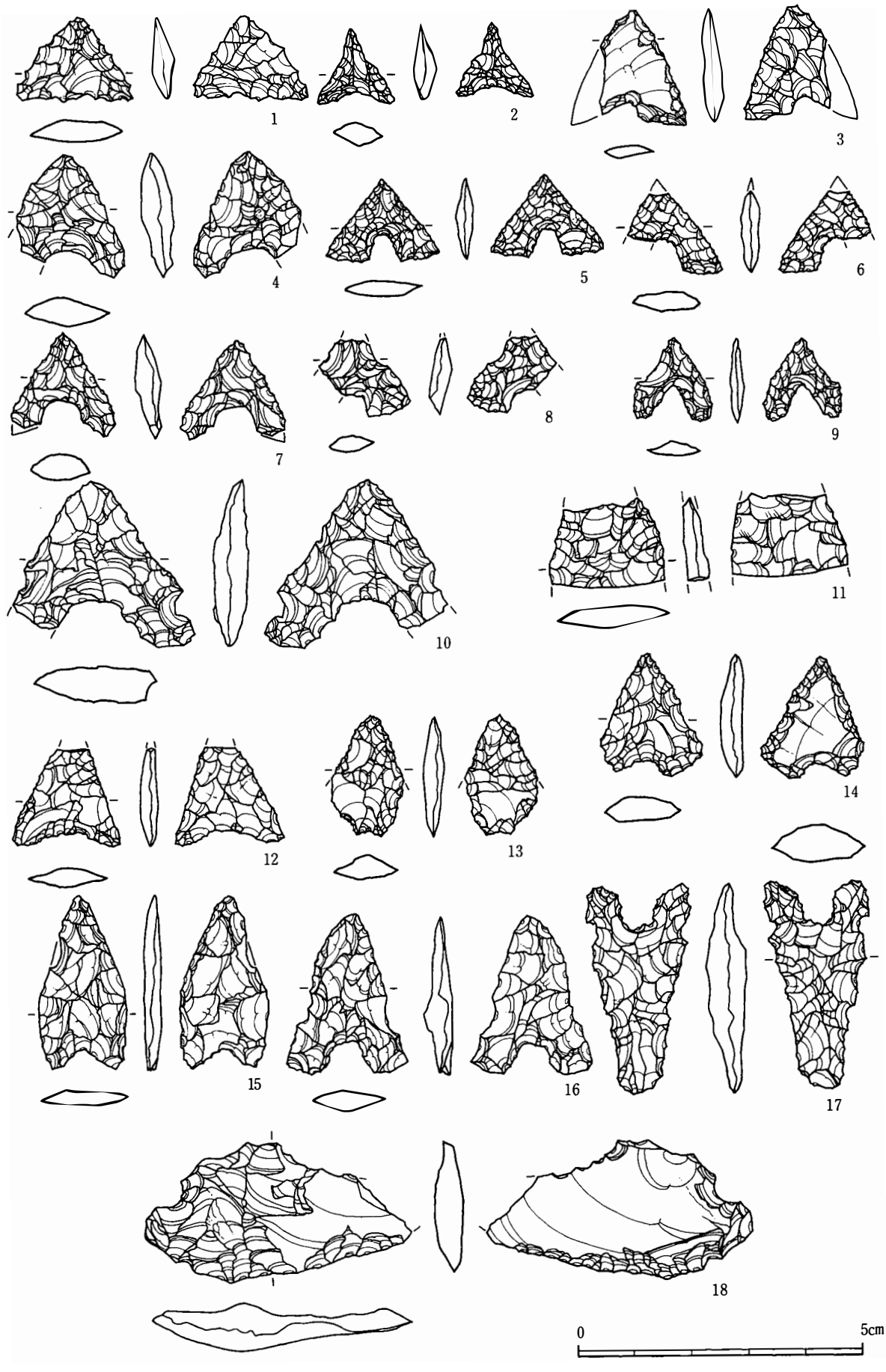
１．先土器時代の調査について

当地における先土器時代の様相については，遺構がなく，遺物の出土状態も原位置を保っていない。このため推測の域をでないが，確実に先土器時代に属する剥片・砕片が出土していないことから，一時的なキャンプ地であったと考えておきたい。しかし縄文時代のものと考えられる剥片・砕片は数多く出土している。この中に先土器時代の剥片・砕片がないとは断言できない。

これらの剥片・砕片について，肉眼観察により約30の母岩に分類し，接合作業を試みたが，接合できる資料はなかった。



第９図　縄文式土器実測図



第10図　石鏃等実測図

本格的な発掘調査によって出土した先土器時代の遺物は，須恵村では初のことであり，貴重な資料を提示できた。

2. 縄文時代の調査について

遺構としては，集石２基を検出した。いずれも検出面が第Ⅳ層であることから，縄文時代早期に属するものと考えられる。１号集石は明確な掘り込みを持つが，２号集石は掘り込みを持たない。

一方遺物に注目すれば，土器は時期を特定できるものは，すべて縄文時代に属するものであった。しかし層序が乱れ，先土器時代の石器出土レベルより，かなり下位から土器が出土したりしており，その出土状況はとても原位置を保っているとは言い難い。図化したうちの中で６点が，早期に属するものである。１点は時期不明だが，残り２点が晩期に属するものであった。上記の集石遺構の存在から併せて考えると，その中心は縄文時代早期にあったものと考えられる。

以上のように，遺物はごく少量であり，そのほとんどが撹乱をうけている。これは昭和40年代に整地を受けていることに起因すると考えられるが，予想以上に深い部分まで，撹乱をうけていた。

第Ⅳ章　別府遺跡の調査とその結果

第1節　先土器時代の遺物

第2節　縄文時代の遺構と遺物

第3節　弥生・古墳時代の遺物

第4節　歴史時代以降の遺構と遺物

第Ⅳ章　別府遺跡の調査の成果

第１節　先土器時代の遺物

１．遺物（第14図）

器種としては，台形様石器・細石刃核など６点がある。その分布は調査区の北西部のＧ１・Ｇ２・Ｈ１グリッドに限定される。ただしその出土状況は原位置からのものではなく，第Ⅲ層や第Ⅳ層からの出土である。

１は，台形様石器である。横長の素材剥片を用いるが，打面部側には粗い大きな加工を，先端部側には綿密な加工を施すものである。刃部は直線的であり，全体形は逆三角形を呈す。

２～５は，細石刃核である。２は，正面の３枚剥離面が作業面である。打面は，作業面方向からの２枚の剥離によって構成されている。打面と作業面との角度は，まだ鈍角である。片側面には，礫面を残している。３は，正面に一枚の比較的大きな作業面が見られるものである。打面は一部に礫面を残すものの，平坦である。片側面は，一部礫面を残すものの，周辺からほぼ全面に加工を施している。４は，正面に作業面２枚を残す。打面は中央に礫面を残すものの，平坦剥離調整が施されている。また，片側面には一部礫面を残しているものの，基本的に打面から下部方向への調整が施され成形されている。５は，１枚の大きな打面をもつものである。細石刃の剥離は，その打点側とは反対側から行われている。側面部の下部には，一部礫面が残存している。

６は，ブランクである。打面・一側面及び下部には，礫面を残している。礫面のない一側面には，礫面をはぎとるように加工が施されている。側面の加工方向をもってその上部を細石刃を剥ぎ取る打面とするならば，まだ鋭角で，作業面（頭部）調整もおこなっていない状況である。

２．まとめ

この時期に関する資料はそれほど多いものではない。台形様石器や細石刃核（ブランクを含む）が出土しているのみである。

台形様石器については，先述した中尾遺跡出土のものと同じ石質で，その形態は中尾遺跡のものを一回り小さくしたようなもので，酷似している。このことから，両遺跡は一時期密接な関係があったと考えられる。

しかしながら，組成でいえば，細石刃核は別府遺跡のみで見られるものであり，先土器時代の活動時期としては，中尾遺跡よりやや後出するものと考えられる。細石刃核（ブランクを含む）の石材は，すべて黒曜石である。基本的に素材とした原石の礫面を大きく残すもので，その形状をあまり変えないものであろう。

わずか６点ではあったが，この時期に属する資料は確実に存在し，貴重な資料となるものであろう。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１．遺構とその位置（第15図）

縄文時代に属すると考えられる遺構として，集石遺構２基がある。いずれもⅠ区から検出された。

集石遺構（第16図）

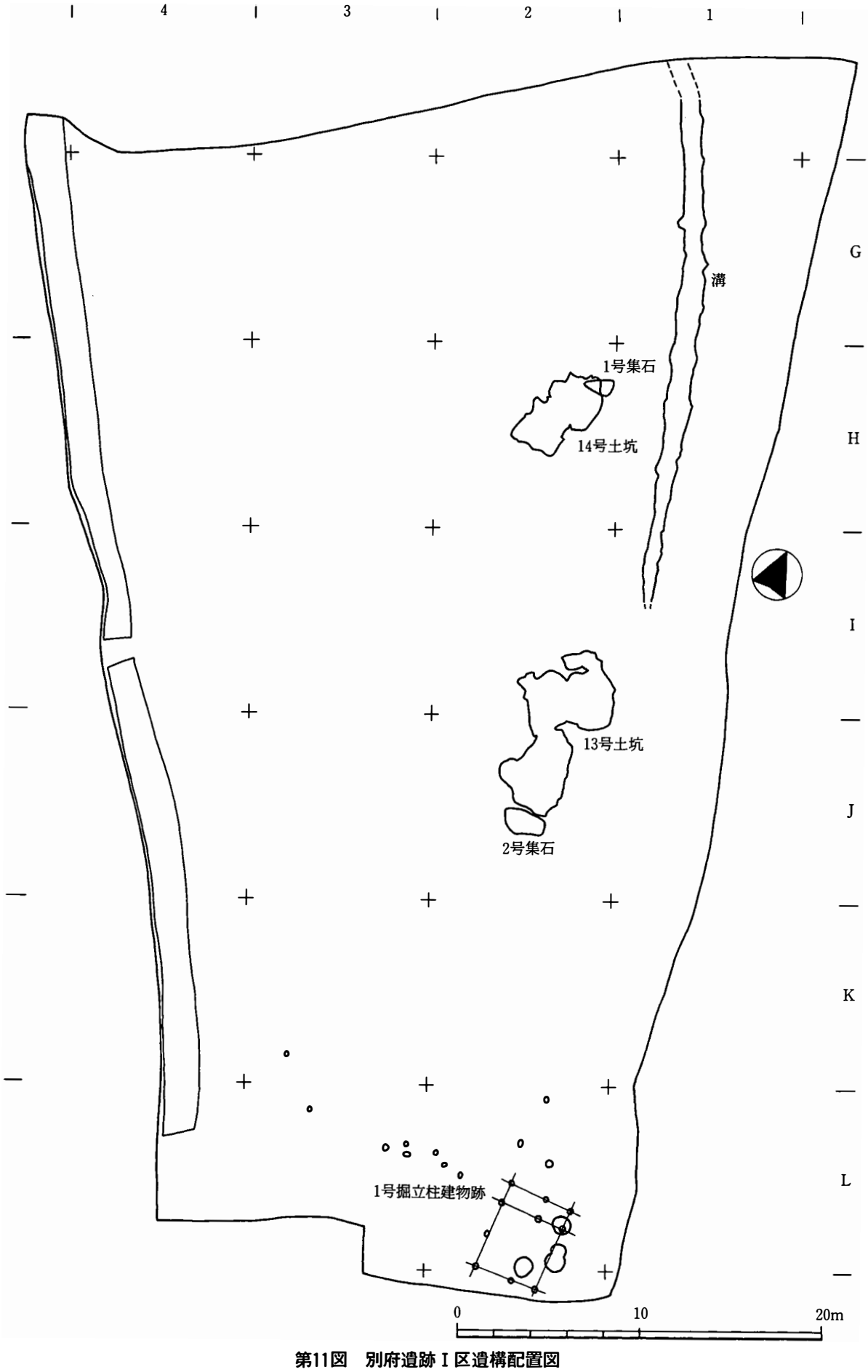
１号集石

Ｈ２グリッド内，14号土坑の北東端部に位置する。後述する14号土坑の遺構実測図作成終了後，床面を断ち割る際に検出した。集石の土坑の掘り込みが果たして何層からか明確ではないが，上面の14号土坑により破壊されていないことを考えると，第Ⅳ層を掘り込んでいる可能性が高い。

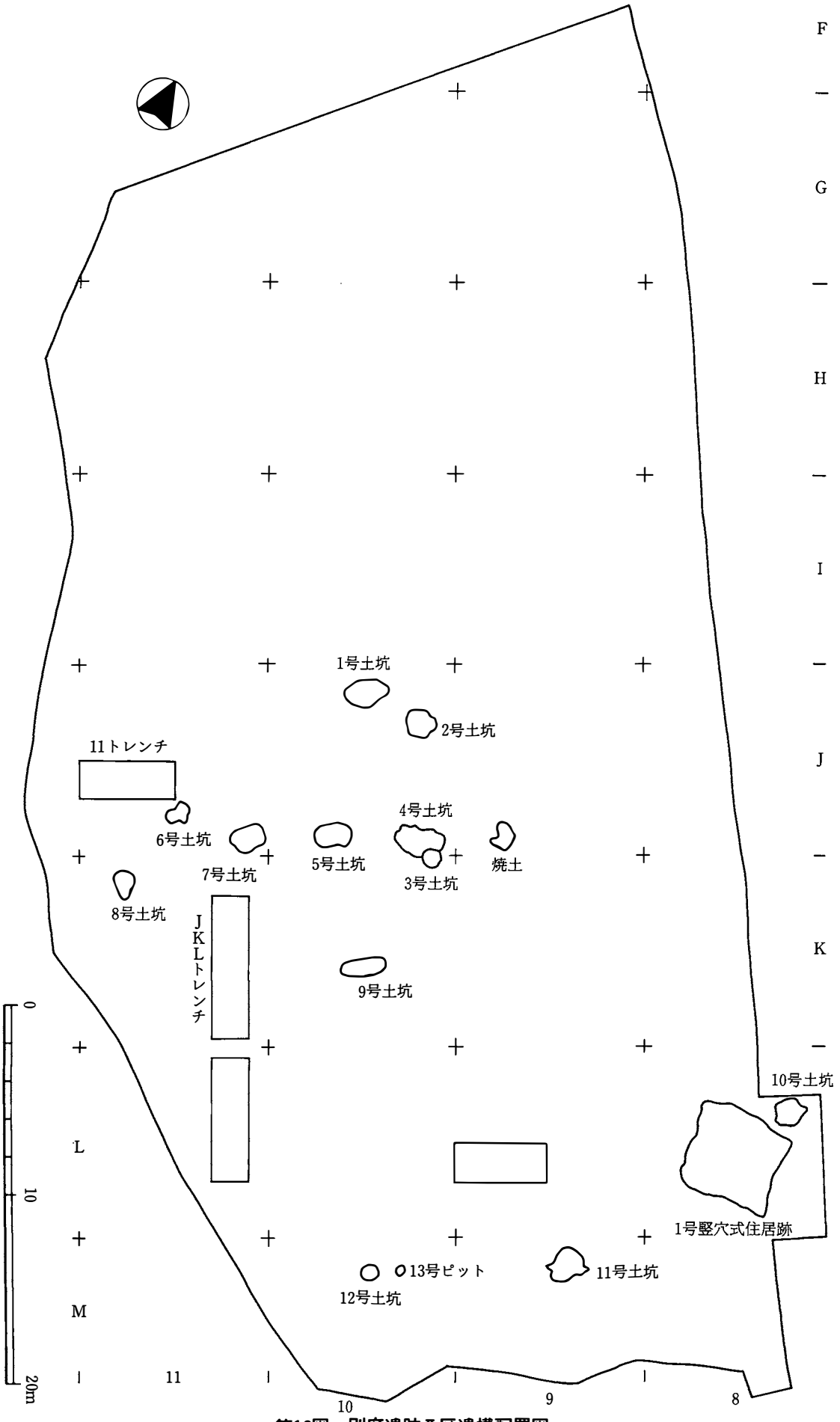
土坑は，不整な楕円形を呈し，長軸168㎝・短軸70㎝・深さ15㎝程を測る。土坑内には最大で径14㎝程の礫及び破砕した礫が詰まっている。出土遺物はなかった。

２号集石

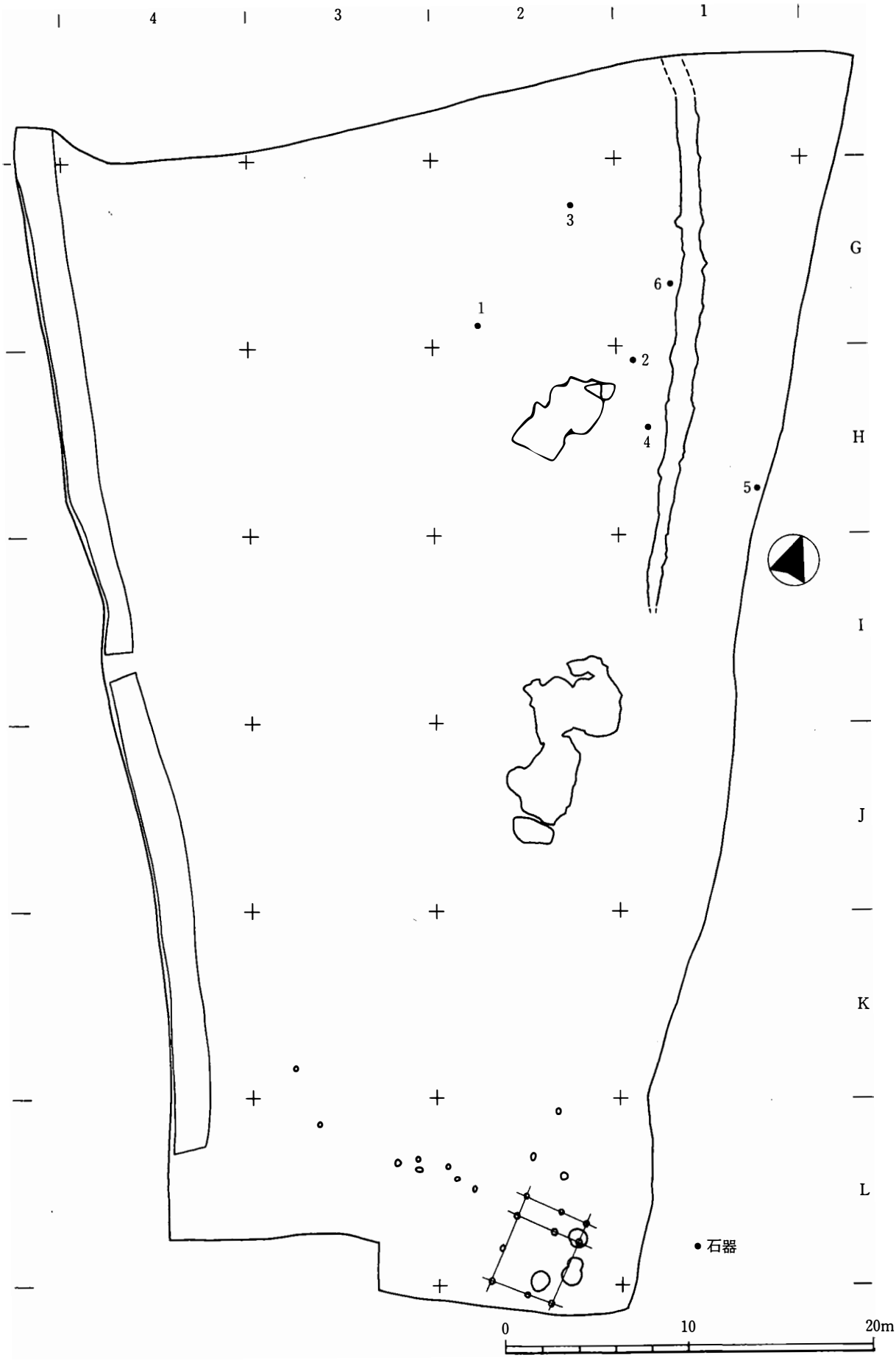
Ｊ２グリッド南西部において検出した。土坑は，不整な楕円形を呈し，長軸236㎝・短軸122㎝・深さ50㎝程を測る。土坑内には最大で径20㎝程の礫及び破砕した礫が詰まっている。また微細な炭化物を検



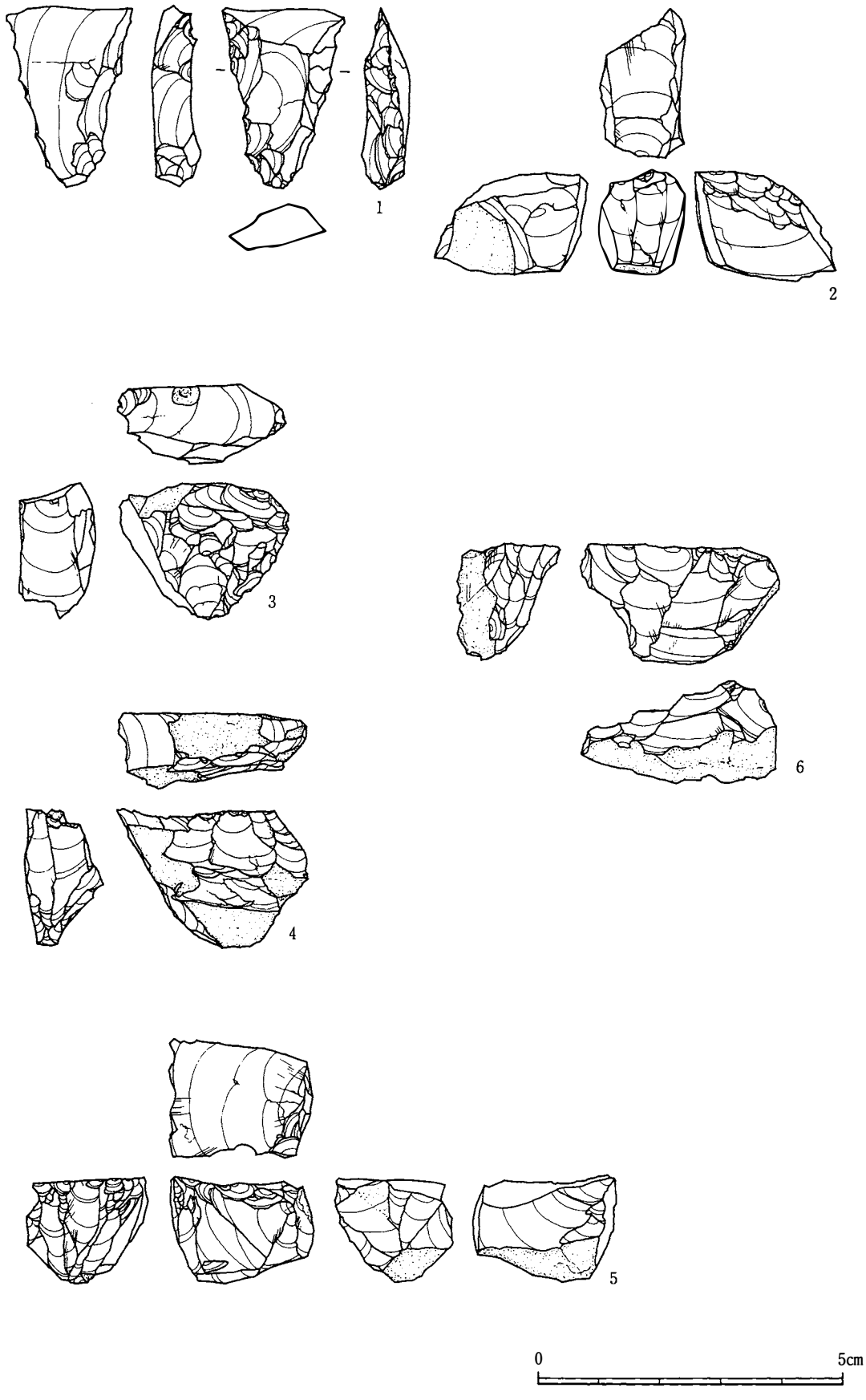
第11図　別府遺跡Ⅰ区遺構配置図



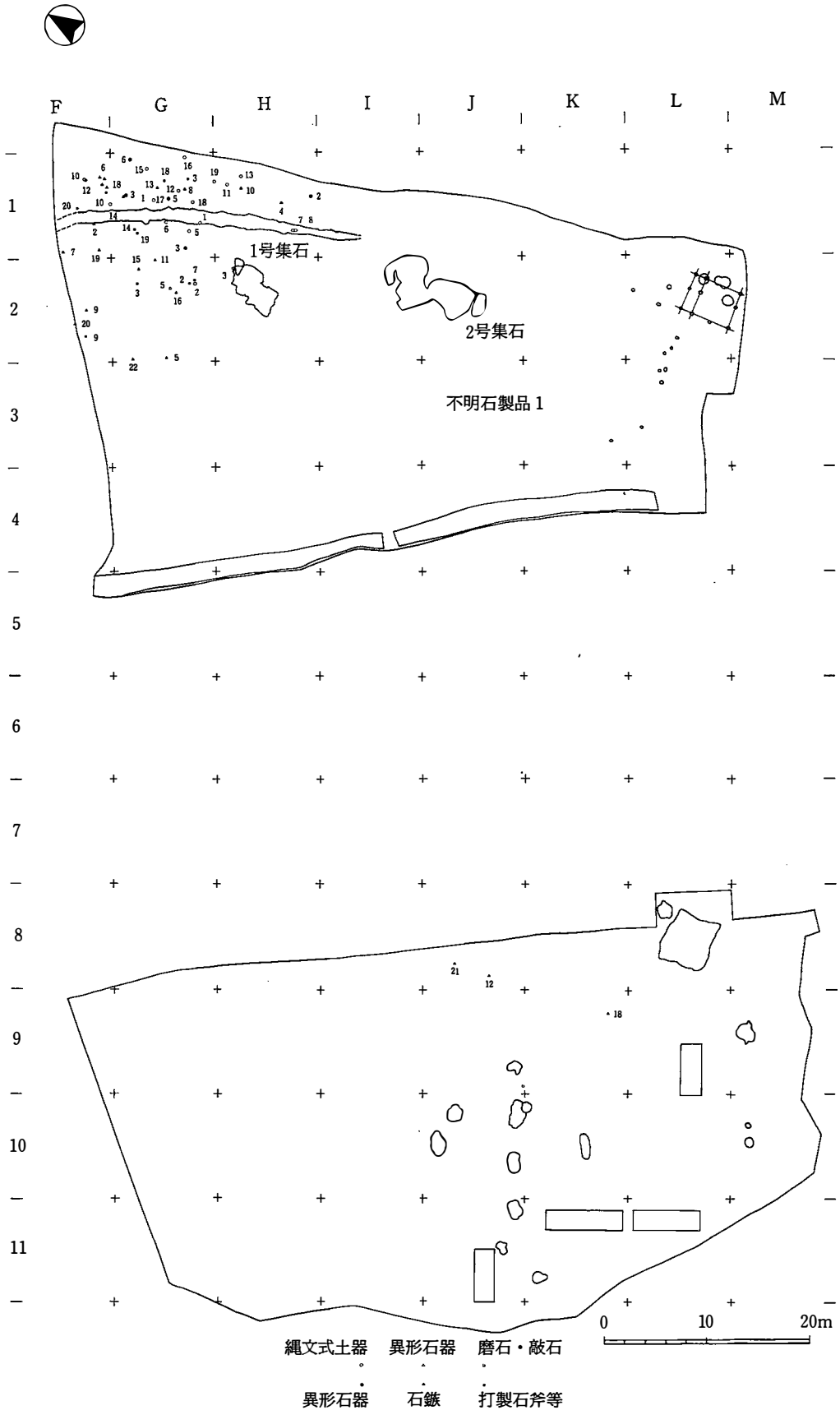
第12図　別府遺跡Ⅱ区遺構配置図



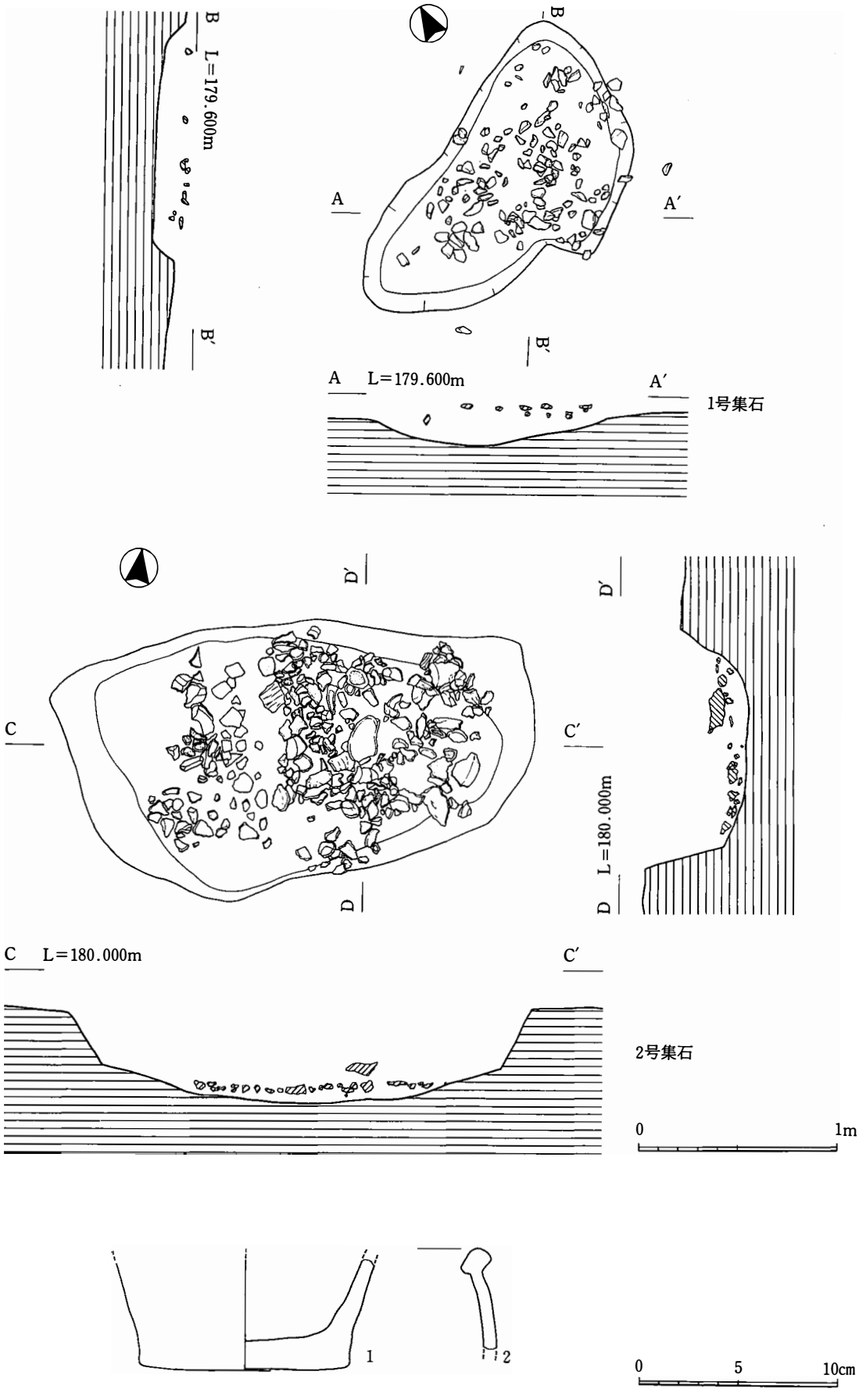
第13図　先土器時代石器分布図



第14図　先土器時代石器実測図



第15図　縄文時代遺物分布図



第16図　1・2号集石遺構及び2号集石出土土器実測図

出した。

出土遺物としては縄文式土器片や打製石斧・敲石などがある。

２号集石出土遺物

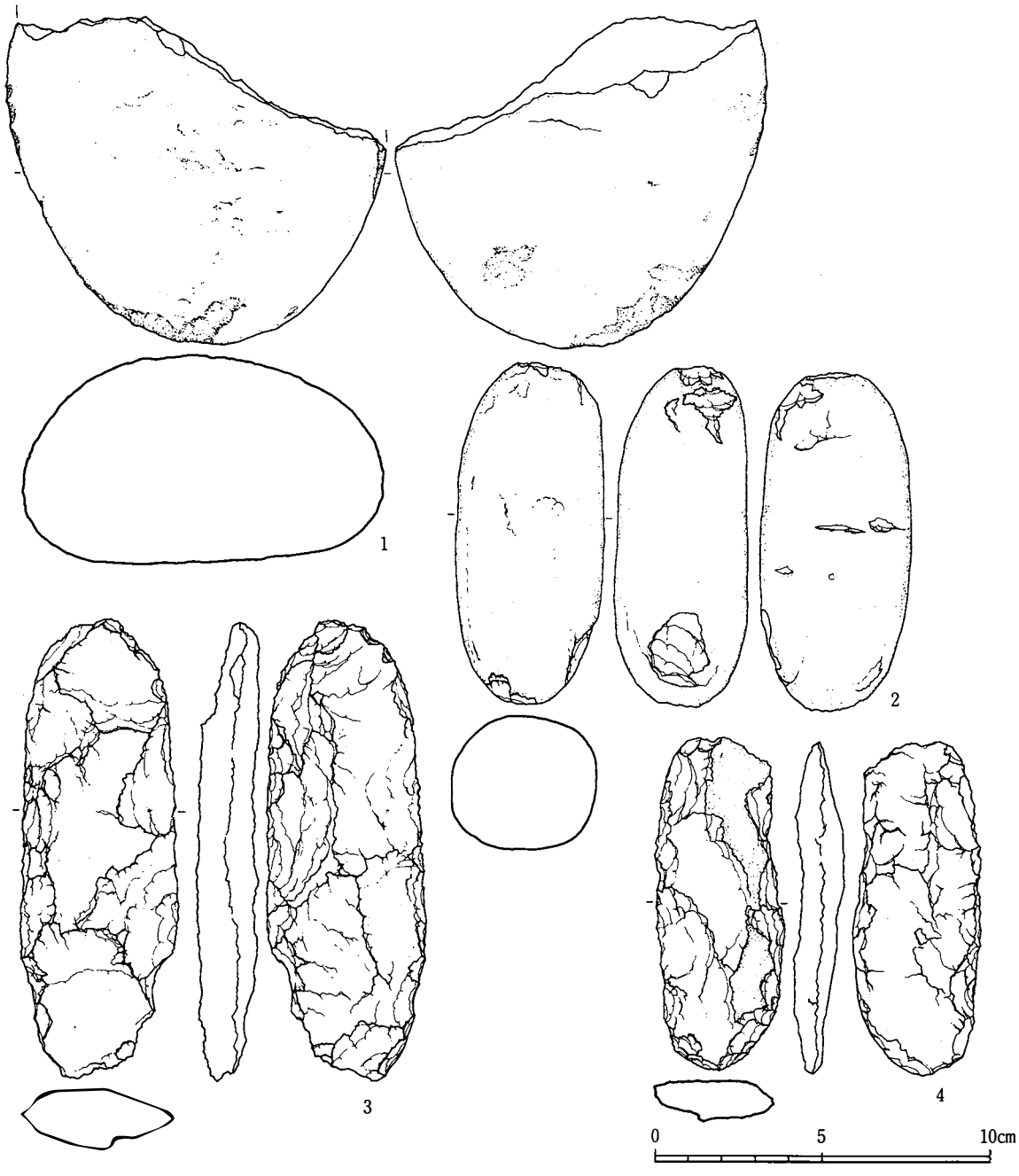
土器（第16図）

１は，縄文式土器の平底の底部と思われる。また２は陶器の口縁部片であるが，流れ込みの可能性が高い。

石器（第17図）

１・２は磨石・敲石である。１は球形のもので，いづれも敲打痕跡が側面に認められる。長さ9.7cm・幅11.3cmで，重量は800ｇである。２は棒状のもので，両端に敲打痕跡をもつ。長さ10.1cm・幅4.5cmで，重量は275ｇである。

３・４は，従来から「短冊形」と呼ばれてきた打製石斧で，全体の形状は長方形に近い。３は，長さ13.6cm・幅4.7cmで，重量は130ｇである。４は，長さ9.9cm・幅3.9cmで，重量は55ｇである。



第17図　２号集石出土石器実測図

2．包含層出土の土器

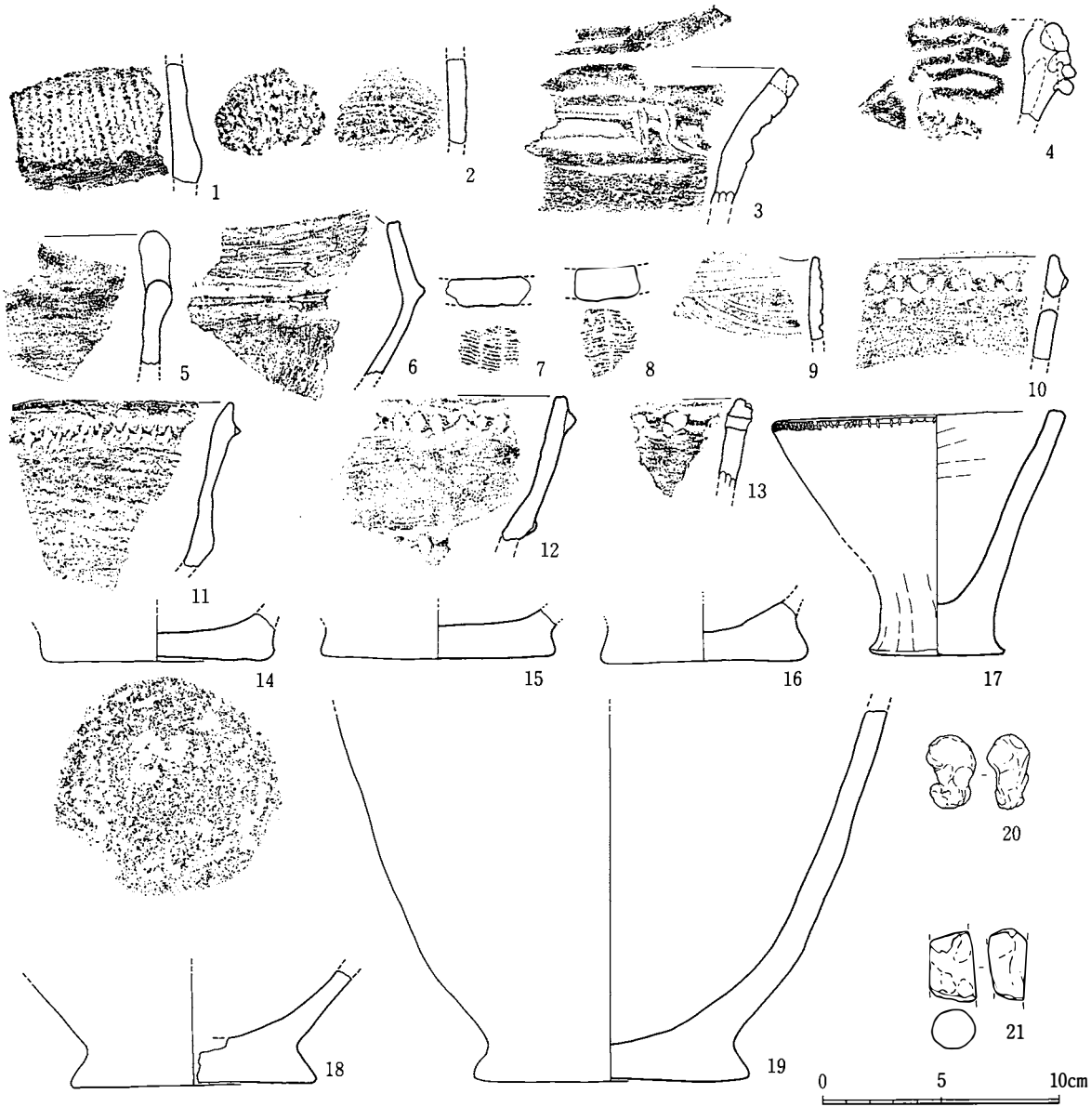
分布（第15図）

約30点程が出土した。層位的に捉えられたものは少ない。位置を押さえられる土器片の大部分が調査区Ⅰ区の北西側からの出土である。これはⅠ区においては，調査区北西部分以外は既に削平を受けていたことに起因すると思われる。また調査区のⅡ区からの出土土器は，ごく少量であり，表土剥ぎ後の遺構検出のための清掃に伴い出土したものがほとんどである。Ⅱ区は縄文時代の遺構の中心からはずれていることが考えられる。

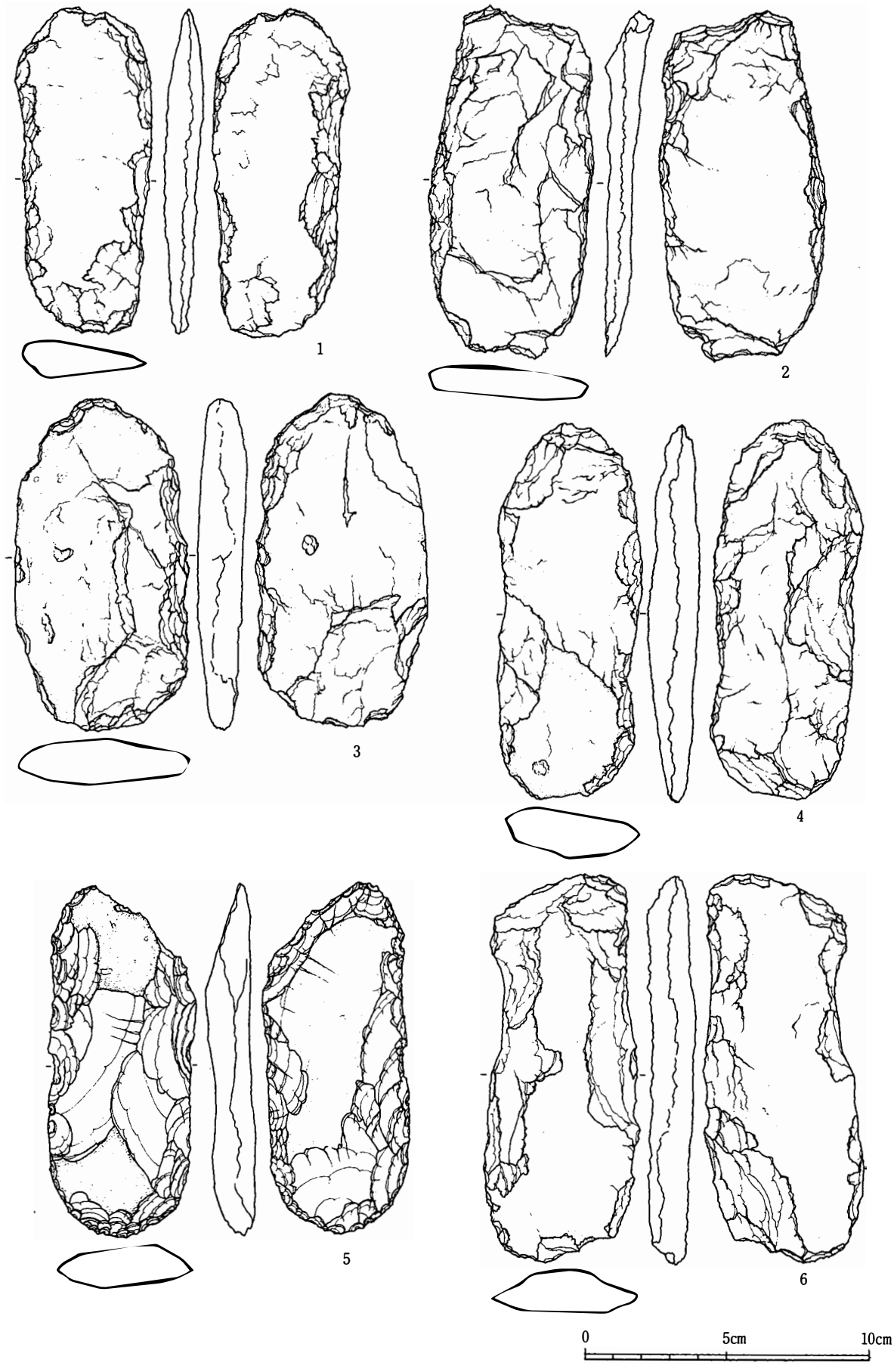
土器（第18図）

出土した土器のうち19点を図化した。1は撚糸文土器の口縁部分である。2は押型楕円文土器の胴部片である。3は口唇部分の数箇所を突出させる。また口縁帯に凹線文を施す。4は山形口縁部分の頂点付近に幅2.2㎝程の粘土紐を縦位に貼り付け，さらに螺旋状の突帯を貼り付ける。5は口縁部に三角形状の突起をもつ。調整は粗雑である。6は浅鉢形土器で，体部から口縁部が屈折して立ち上がる。口縁部は波状を呈す。外面はヘラ状工具による丁寧なナデを施す。7・8は組織痕文土器である。9は波状口縁で，口唇部に刻目を施し，口縁部分に3条の平行沈線と孤文を施す。胎土も緻密で外来系の土器と思われる。

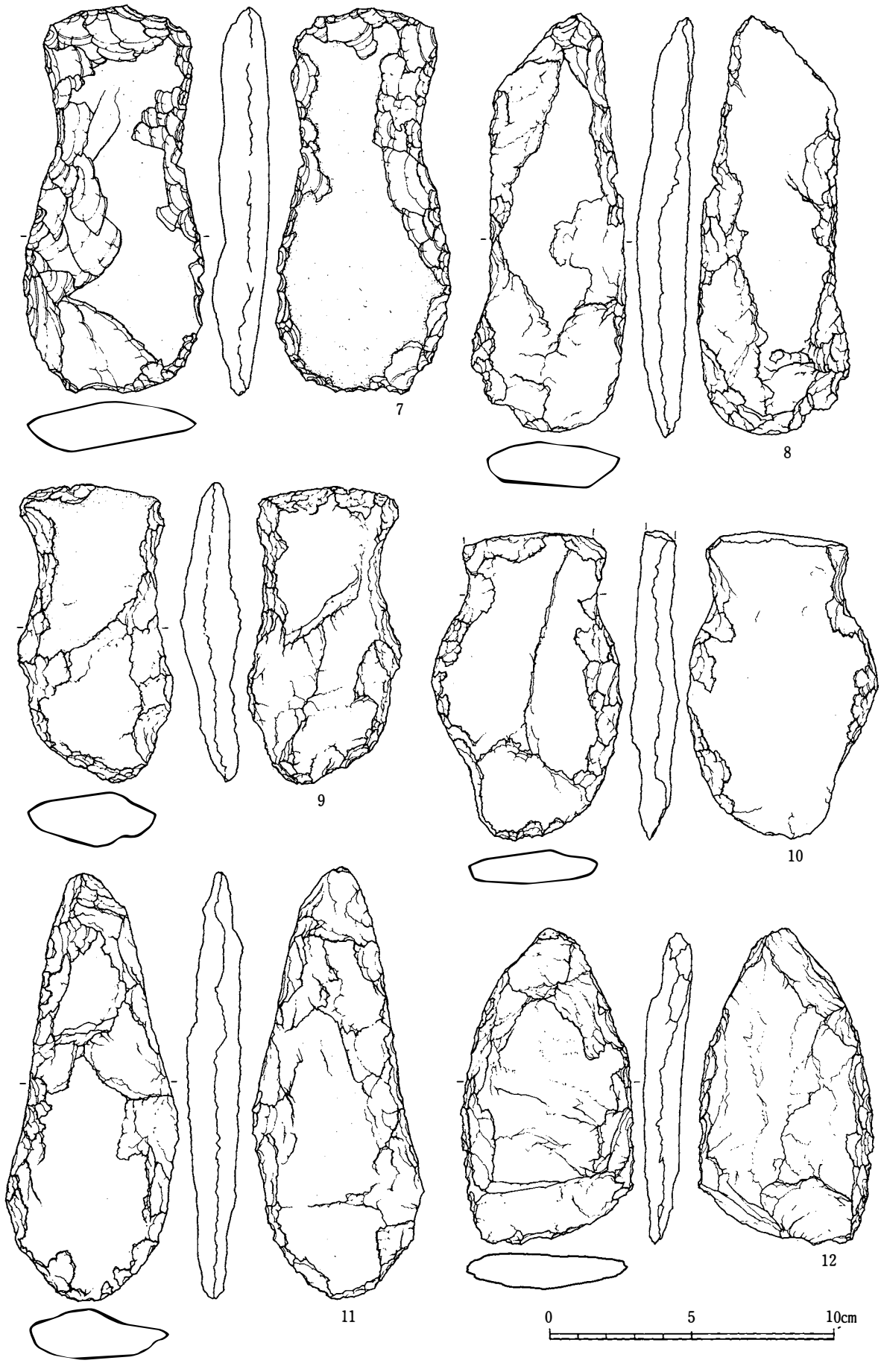
10〜12は刻目突帯文土器である。10・11は口縁部



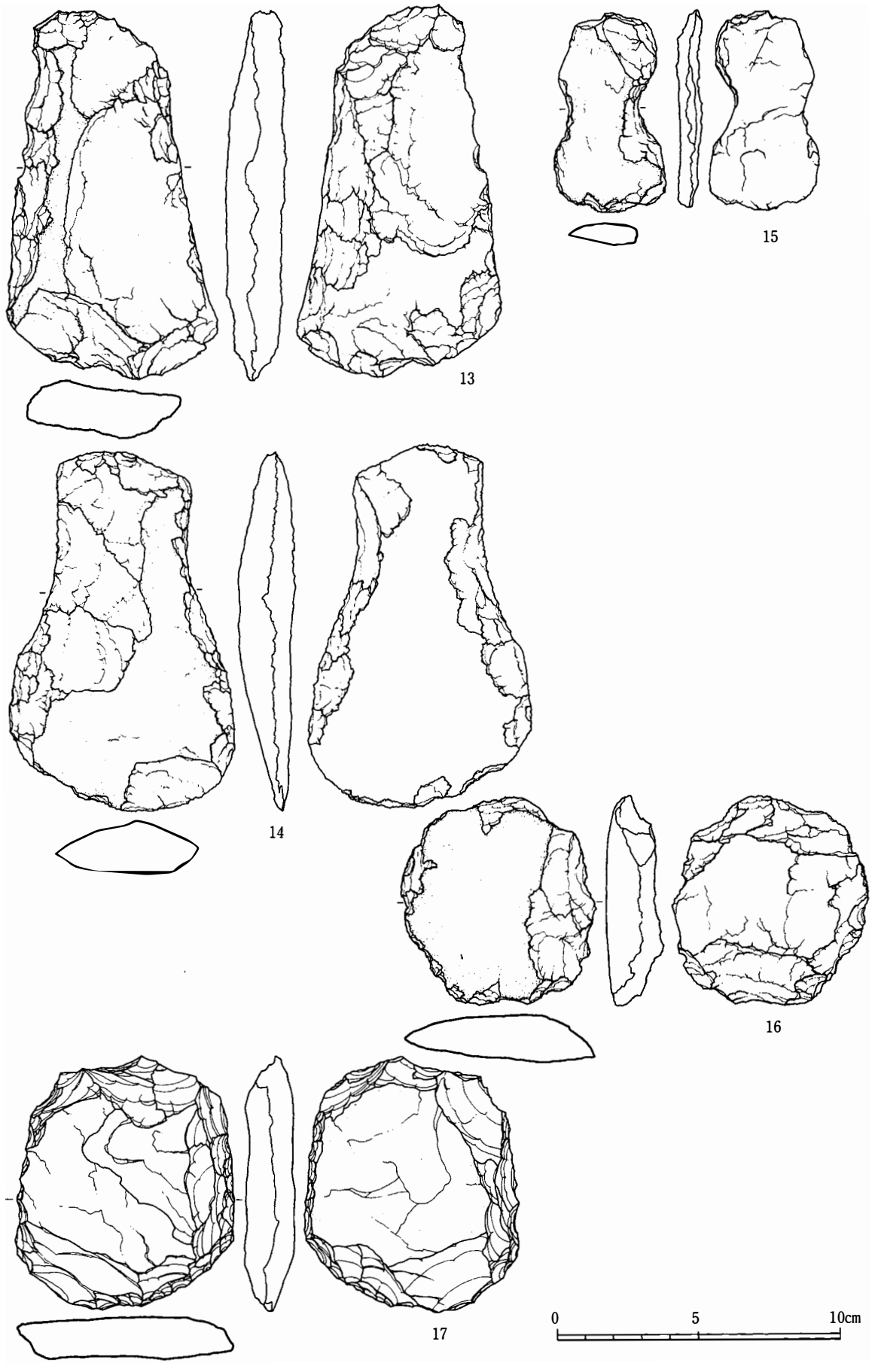
第18図　縄文式土器実測図



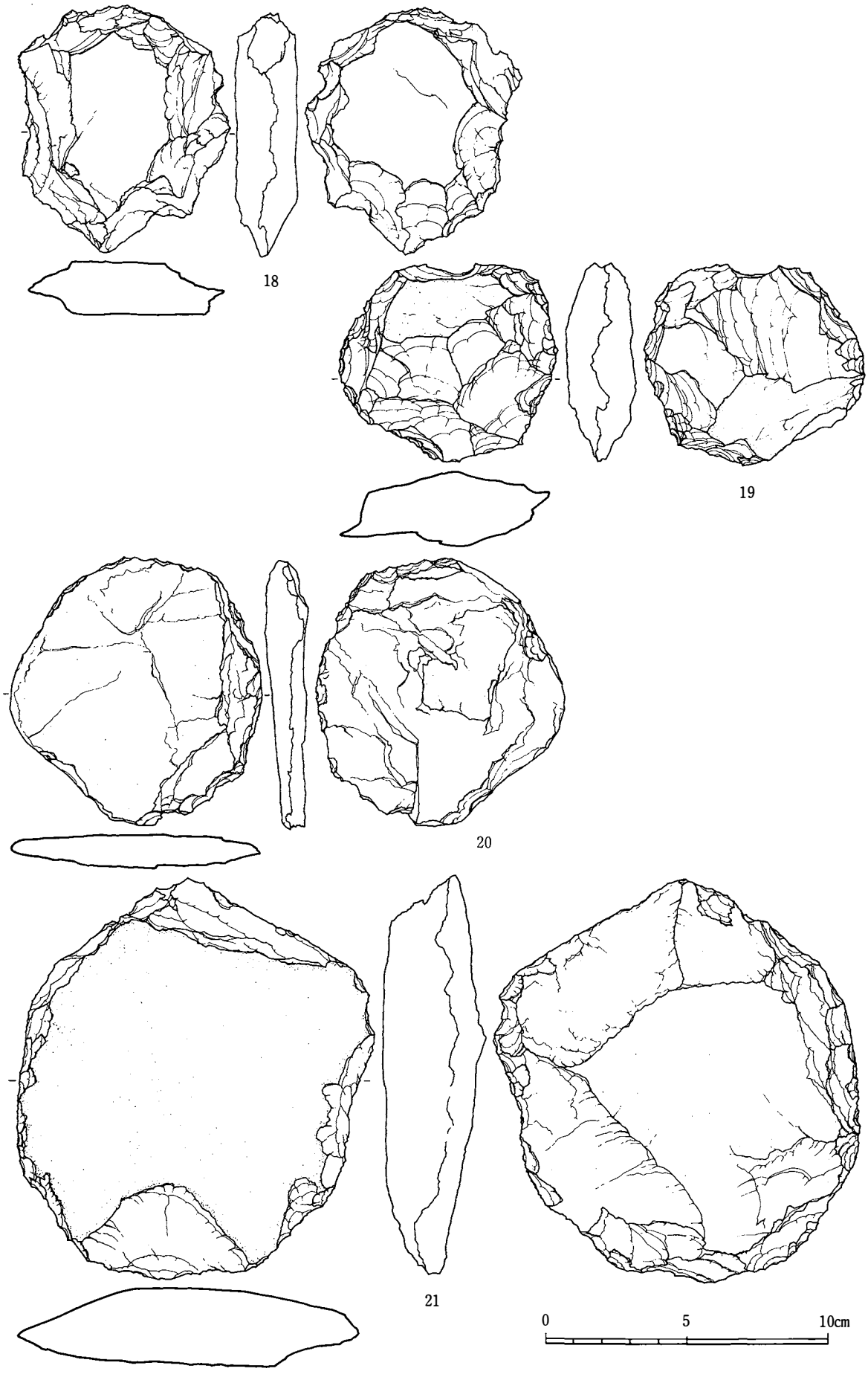
第19図　打製石斧実測図



第20図　打製石斧実測図



第21図　打製石斧実測図



第22図　打製石斧実測図

に刻目突帯を巡らす。12は口縁部分とその下位に２条の刻目突帯を巡らす。13は孔列文土器である。口縁部直下に刻目突帯を有し,その刻目の下位に約1.2㎝間隔で穴を穿っている。17は鉢形土器で，肥厚した底部から，体部が伸びる。口縁部に刻目を施す。縄文式土器の頁に提示したが，弥生・古墳時代の土器の可能性もある。

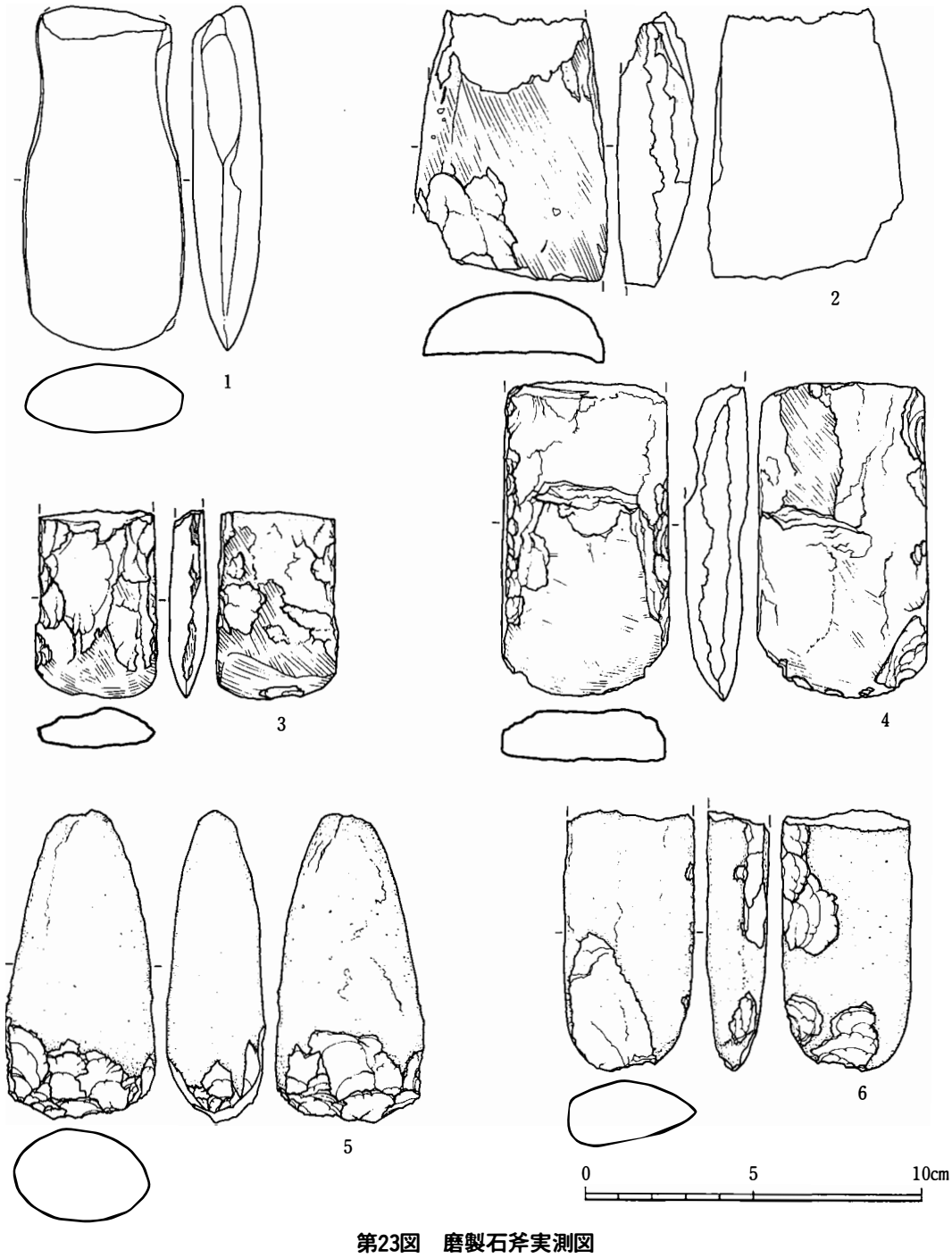
14～16・18・19は底部である。いずれも平底である。特に18・19は円盤貼り付け状の底部である。

20・21は焼成粘土塊と思われる。20は色調は褐色で，重量は8.5ｇである。21も色調は褐色で，重量は9.6ｇである。断面円形の柱状をなす。土偶の一部かも知れないが，不明である。

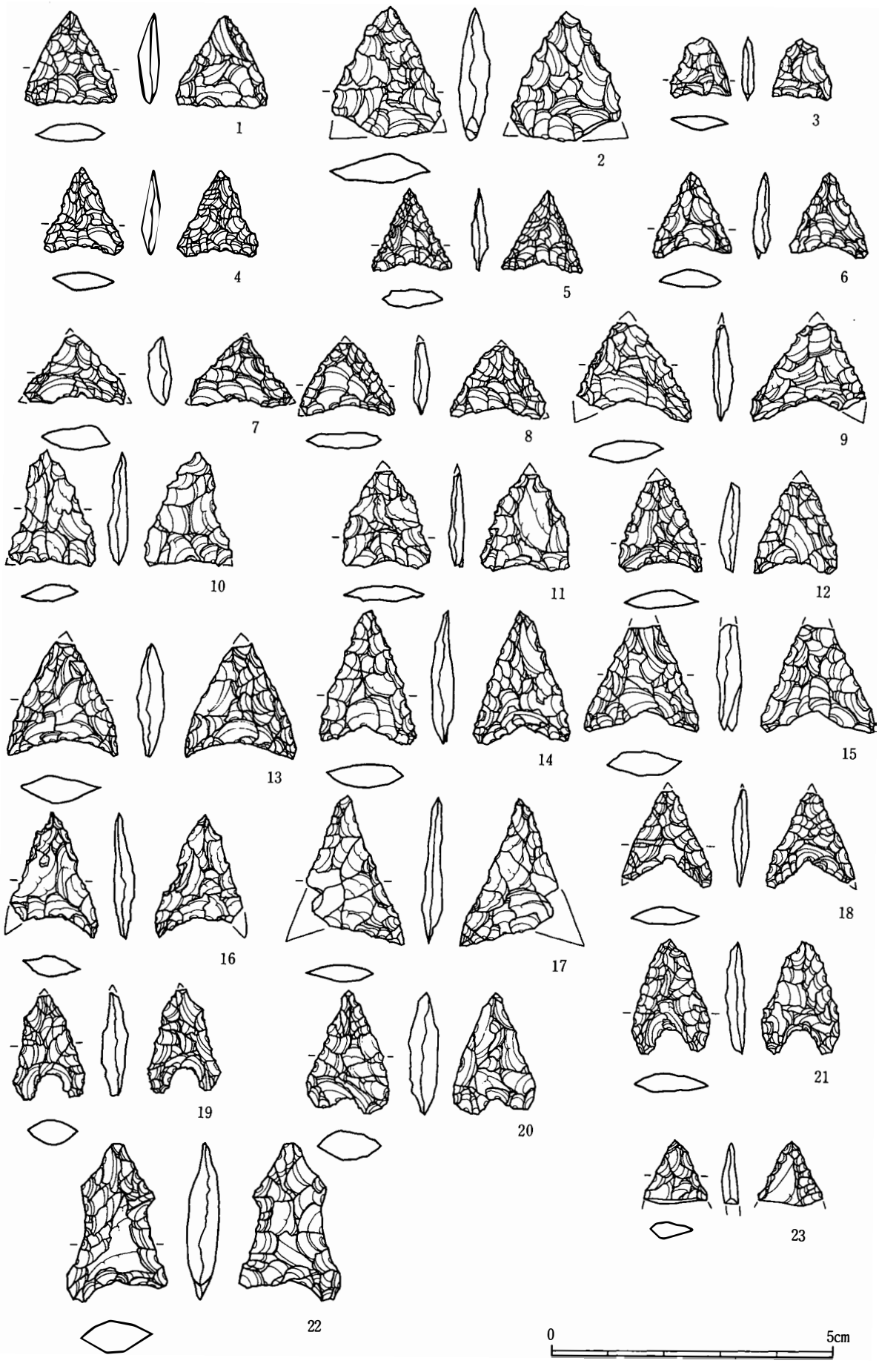
３．包含層出土の石器・石製品

打製石斧（第19～22図）

今回の調査で出土した打製石斧は30点程度であり，今回そのうちの21点を図化した。位置を押さえられ



第23図　磨製石斧実測図



第24図　石鏃実測図

る打製石斧13点のうち11点が，調査区Ⅰ区の北西側からの出土である。Ⅱ区からの出土は５点である。表土剥ぎ後の遺構検出のための清掃に伴い出土したものがほとんどで，その出土位置を押さえられないものが多い。

打製石斧はその形状，調整，大きさより４種に大別した。以下その特徴について記述する。

Ⅰ類（１～10）

従来から「短冊形」と呼ばれてきたもので，全体の形状は長方形に近い。概ね長さ11cm前後から14cm以下で，幅は５cm前後のものである。その中で１は比較的小型のものである。また４・６～８は比較的大型で長さに比して幅が狭い。なかにはバチ形との区別が困難なものもあった。

Ⅱ類（11～14）

従来から「バチ形」と呼ばれてきたものである。全体の形状は二等辺三角形に近いものである。その中で14はやや「しゃもじ」状に近い。

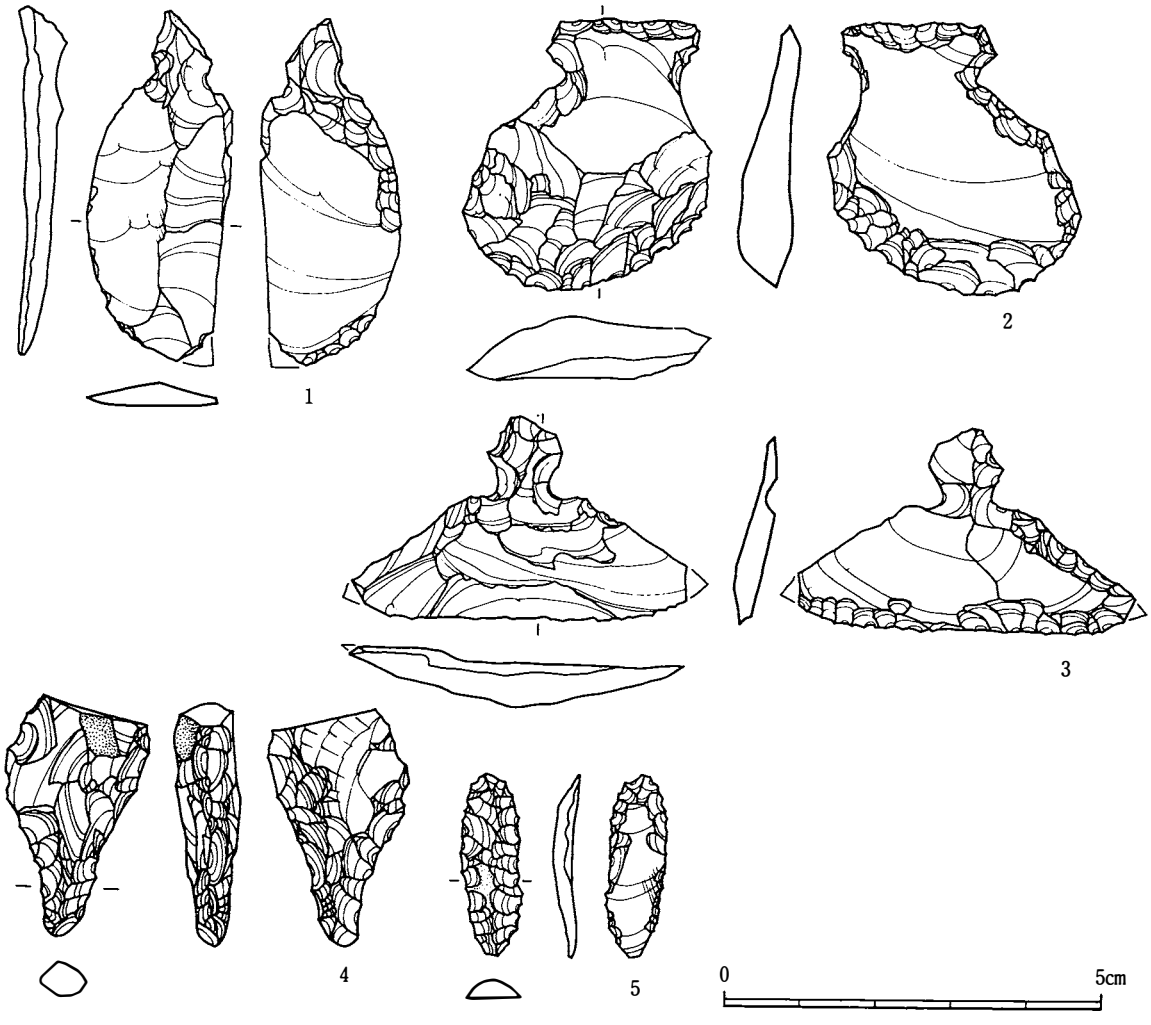
いずれもⅠ区からの出土である。

Ⅲ類（15）

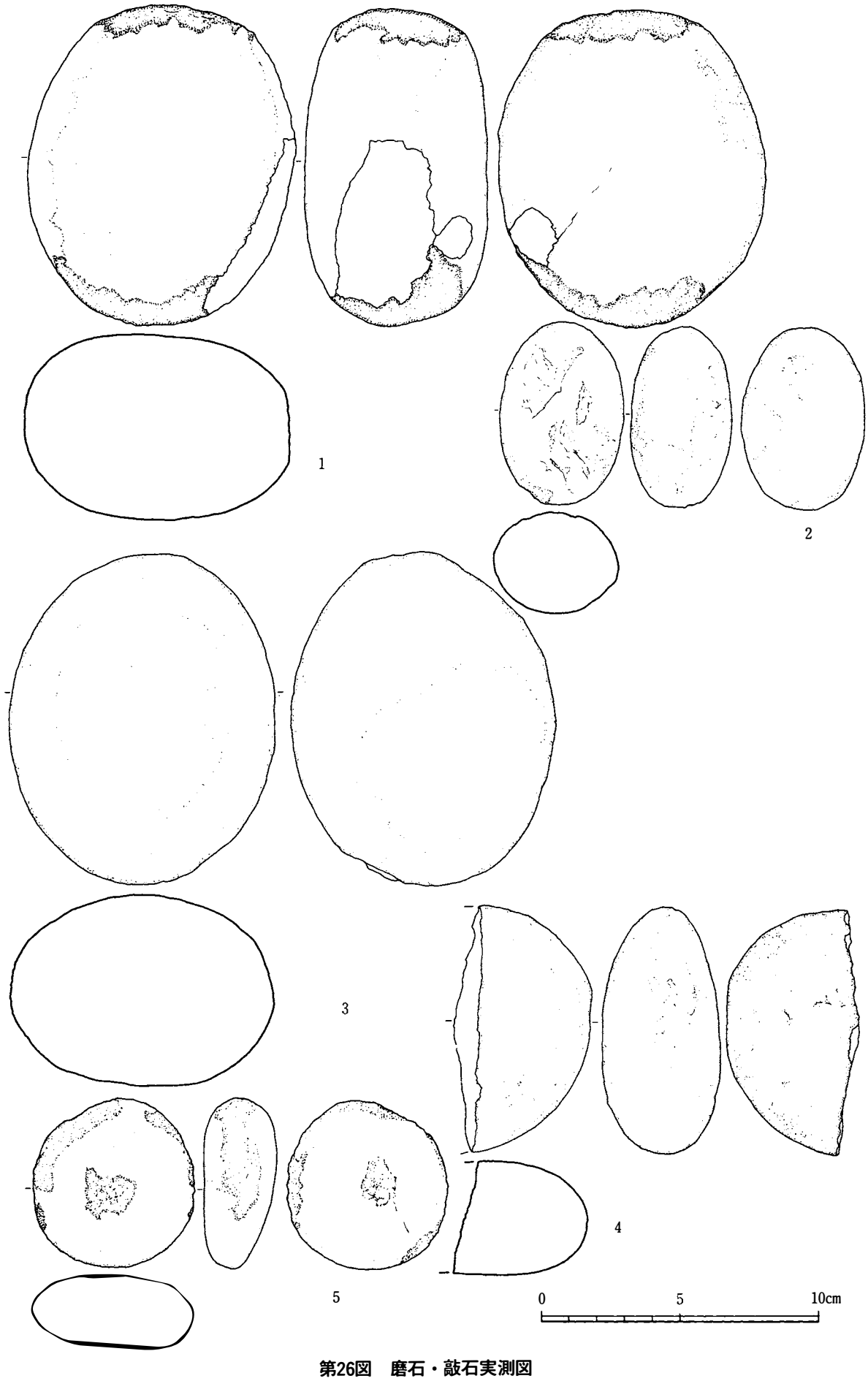
石斧の側辺に抉りがあるもので，従来から「分銅形」と呼ばれてきたものである。出土量の全体に占める割合は一番少なく１点のみで，Ⅱ区からの出土である。小型で薄手のもので，厚さは１cmに満たない。また重量も20ｇである。

Ⅳ類（16～21）

従来から「円盤状石器」と呼ばれてきたもので，ほぼ全周に刃部がまわる。大きさは直径８cm前後の小型のもの（16～20）と直径14cmを越える大型のもの（21）がある。厚みは２cm前後のものである。



第25図　石匙・石錐等実測図



第26図　磨石・敲石実測図

磨製石斧（第23図）

磨製石斧の可能性のあるものを含めても６点が出土したのみである。そのほとんどが半分近く欠けたものである。その分布は，出土地点が不明な４を除く５点が調査区Ⅰ区の北西隅である。１の形状は長方形に近いが，側辺に僅かに抉りが入る。その断面形は楕円形を呈す。２はその残存部位が少なく，その形状は伺い知れないが，恐らく基部にいくに従い，細くなるもので，形状は二等辺三角形に近いものであると思われる。３・４は，その形状は長方形に近いもので，断面形が方形をするものである。３はやや小型のものである。

５の形状は，本来は二等辺三角形に近いものであると思われる。刃部を再加工しようと試みたものであろう。６は果たして磨製石斧かどうか不明なものである。先端に加工した痕跡が認められた。

石鏃（第24図）

総数30点近くが出土した。その分布を見ると，やはり調査区Ⅰ区の北西部からの出土が顕著である。しかし石鏃という性格からか，土器や石斧に比べるとⅡ区からの出土も多い。

石鏃はその形状から，大きく２類に分類した。

Ⅰ類は正三角形，Ⅱ類は二等辺三角形のものである。さらにその基部の形状で平基のものをａ，わずかに抉れるものをｂ，三角形状に抉れるものをｃ，Ｕ字形状に抉れるものをｄとする。

Ⅰａ類（１・２）

全体の形状が正三角形をしている平基式の石鏃である。

Ⅰｂ類（３～８）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずかに抉れる程度である。７・８は全長より幅が広い。

Ⅰｃ類（９）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態は三角形状に抉れる。

Ⅱａ類（10）

全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃である。

Ⅱｂ類（11～13）

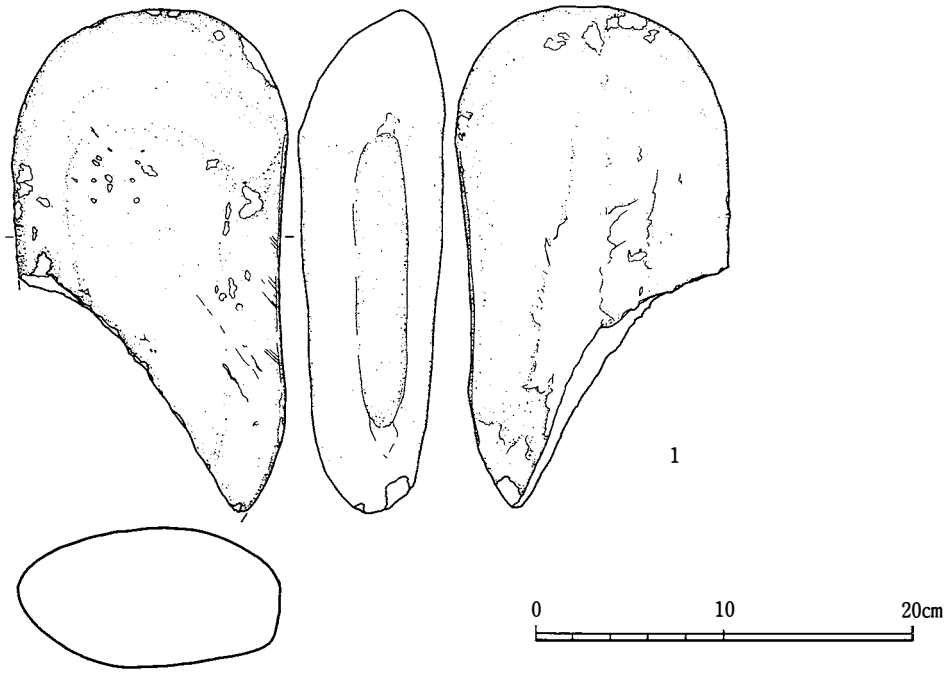
全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずかに抉れる程度である。

Ⅱｃ類（14～18）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態は三角形状に抉れる。

Ⅱｄ類（19～22）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はＵ字形状に抉れる。19～21



第27図　砥石実測図

は凹基の抉りの幅が小さい。22は五角形の形状を呈す。

23は基部を欠損し，分類が不明のものである。

石匙（第25図１～３）

３点の出土であった。いずれも出土地点を押さえられない。１・２は縦型の石匙で，つまみ部をはっきり作り出している。３は横型の石匙で，やはりつまみ部をはっきり作り出している。

石錐・異形石器（第25図４・５）

いづれも調査区Ⅰ区の北西隅からの出土である。１は石錐である。２は削器の可能性がある。

磨石・敲石（第26図）

総数５点が出土した。その内訳は調査区Ⅰ区の北西部から２点，調査区Ⅱ区から，出土位置を押さえられないものの３点である。その他，後述するⅡ区に所在する歴史時代の竪穴式住居跡からも，２点が出土している。

出土総数が少ないせいもあるのかも知れないが，磨石・敲石の出土位置に限ればⅡ区の方が顕著である。

１～３は球形のものである。いずれも敲打痕跡が側面に認められる。２はかなり小型のものである。４～５は円盤状のものでいずれも敲打痕跡をもつ。５は他に比して小型で，平面部にも敲打痕跡が認められる。

砥石（第27図）

１点の出土である。石材は砂岩である。幅が14cmを越える大型のものである。

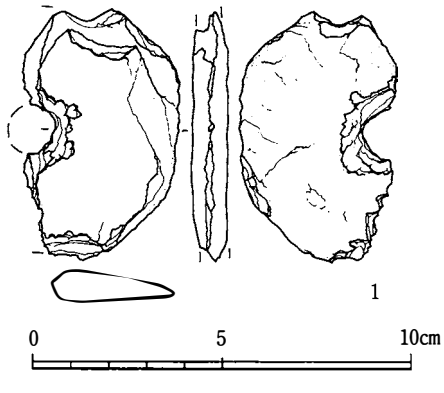
不明石製品（第28・29図）

１は形状的には玦状耳飾に類似するが，大型で重量は34ｇを量る。２は，小型のノミ状の石斧に類似する。四面とも面取り加工を施している。刃部を欠損する。全長5.4cm・幅1.1cmで，重量5.8ｇである。Ⅱ区のⅡ層包含層からの出土である。

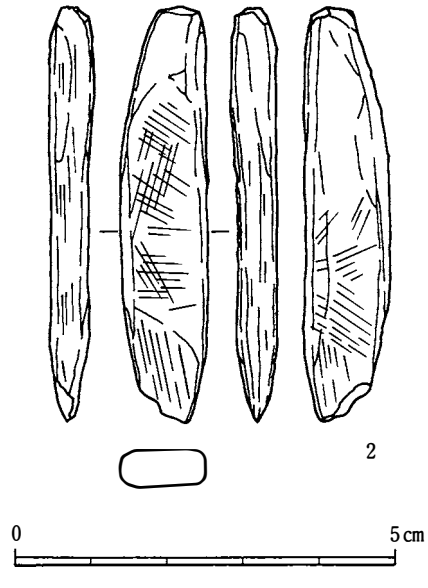
４．まとめ

縄文時代に属する資料もそれほど多いものではない。遺構としては，集石が２基あるのみである。いずれも掘り込みを有すものである。１号集石は，その検出状況から，早期に属する可能性が高い。また２号集石は，出土した土器は底部１点のみであるが，それは後期から晩期にかけてのものと考えられる。

土器（第18図）に注目すると，縄文時代早期に位置づけられる土器が２点（第18図１・２），後期に位置づけられるものが２点（第18図３・４）で，その他のほとんどの土器が縄文時代晩期に属するものであり，その中心は縄文時代晩期にある。そのなかで孔列文土器（第18図13）は，朝鮮半島との何らかの関係を伺わせるものであるという。福岡県をはじめとして，宮崎県や鹿児島県で数十例が報告されている。しかし熊本県内では出土例がほとんどなく，別府遺跡の孔列文土器は，南九州との関係を考えた方



第28図　不明石製品実測図



第29図　不明石製品実測図

がいいのかもしれない。

また遺物の分布をみると，Ⅰ区の北西に集中する。これは前述したようにⅠ区の他の地域が削平を受けていることに起因するものであり，包含層出土の弥生・古墳時代の土器や歴史時代の土器においても，やはりⅠ区の北西に集中する傾向が認められる。しかしⅡ区においては，全体的に，縄文時代の遺物は微少である。このことは縄文時代の中心はⅠ区にあるといえよう。

第３節　弥生・古墳時代の遺物

１．包含層出土の土器（第31図）

この時期に属する遺物は極少量である。弥生時代から古墳時代にかけての土器と思われるもの７点を図化した。２を除きすべて調査区Ⅰ区の北西部からの出土である。１は弥生式土器で口縁部に２条の刻目突帯をもつものである。２は胴部片で屈曲部の上位に重弧文を施す。外器面に斜め方向のハケ目調整を施す。３は口縁部片である。口縁部が外反する。また２条の突帯をもつ。４は頸部に刻目突帯をもつ古墳時代の土器片である。内面は工具によるナデ調整を施している。５は口縁直下に刻目突帯をもつものである。縄文時代の刻目突帯文土器との区分が難しいが，刻目が太いことからこの時期に含めた。６は屈曲部に刻目突帯をもつ。内外面ともハケ目調整を施す。７は古墳時代の土器の底部である。平底で突出気味のものである。

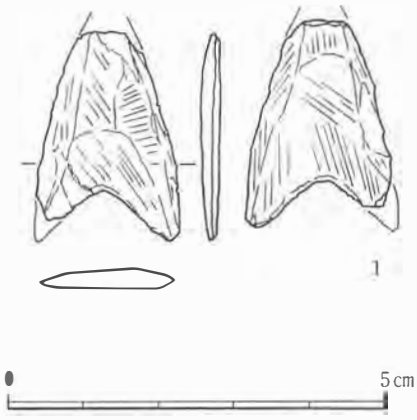
２．包含層出土の石器（第30図）

磨製石鏃で，基部の一端を欠損する。基部に抉りを有すものである。石材は安山岩で，現状で全長2.7㎝・幅1.9㎝・厚さ0.3㎝である。重量1.6ｇを計る。Ⅰ区Ｆ１グリッドからの出土である。

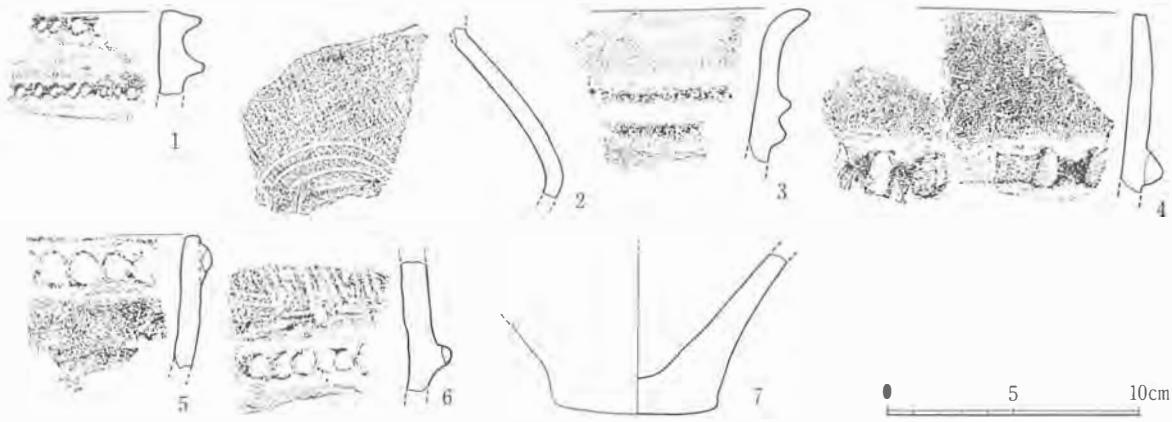
３．まとめ

この時期に属する遺物は，ごく少量であった。しかし，重弧文土器など確実に弥生時代の遺物が存在することは確かである。

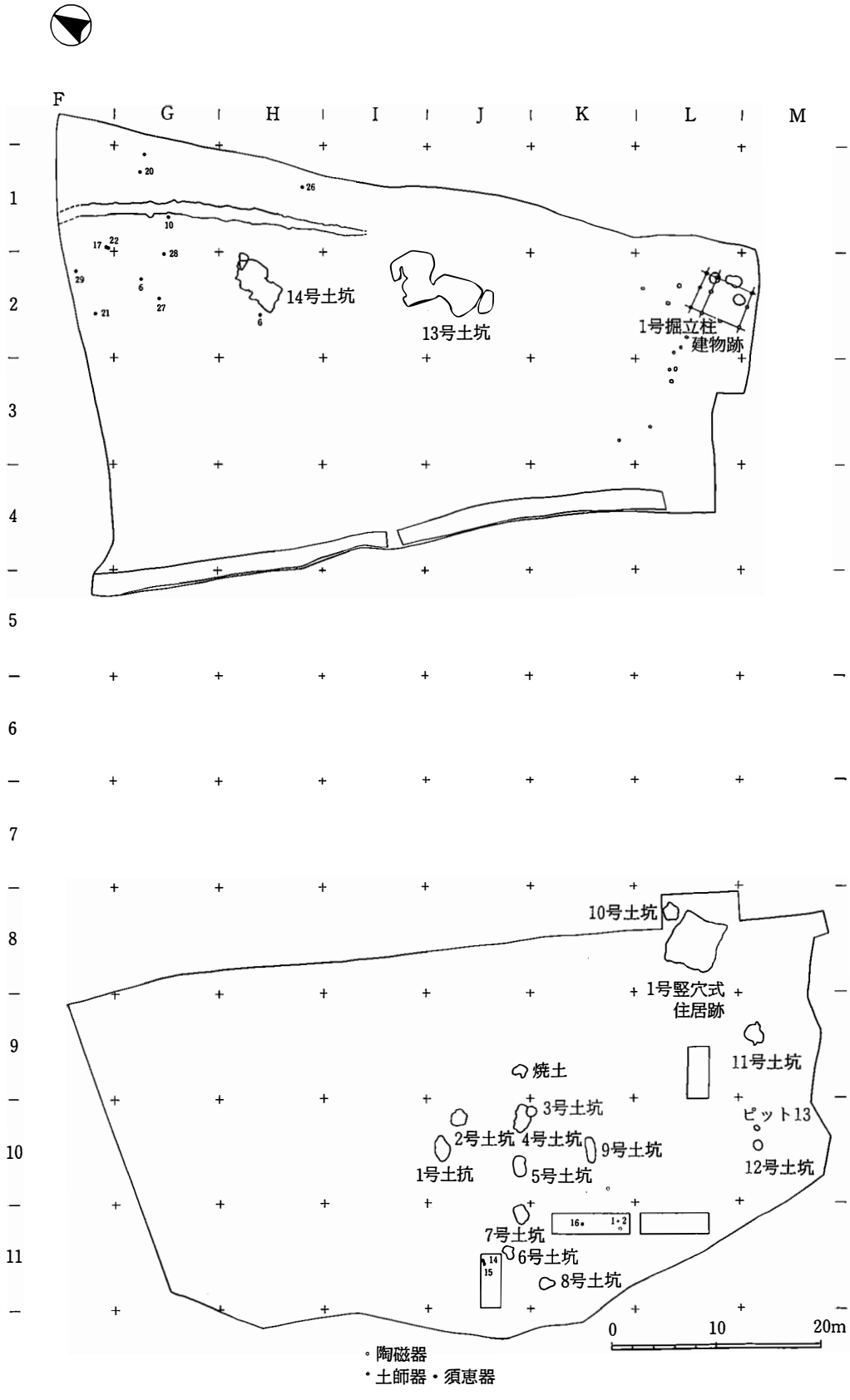
後述する溝遺構からは，鹿を描いたと思われる線刻礫も出土している。この溝遺構がどの時代に該当するか不明であるが，鹿は弥生時代の画材で最も多く登場することより，この線刻礫は弥生時代のものと考えている。鹿は水稲農耕儀礼にとって不可欠な動物であるという（橋本1989）。そうであるなら，別府遺跡周辺においても，稲作が行われていた可能性を示唆するものである。



第30図　磨製石鏃実測図



第31図　弥生～古墳時代の土器実測図



第32図　土師器・須恵器等遺物分布図

第４節　歴史時代の遺構と遺物

１．竪穴式住居跡とその出土遺物

竪穴式住居跡は１軒が検出された。

１号竪穴式住居跡（第33図）

第Ⅱ調査区南東端Ｌ８グリッド内で検出された竪穴式住居跡である。平面形は，東西軸が４ｍ72㎝，南北軸４ｍ56㎝程度の方形である。削平がひどく，深さは15㎝程度である。

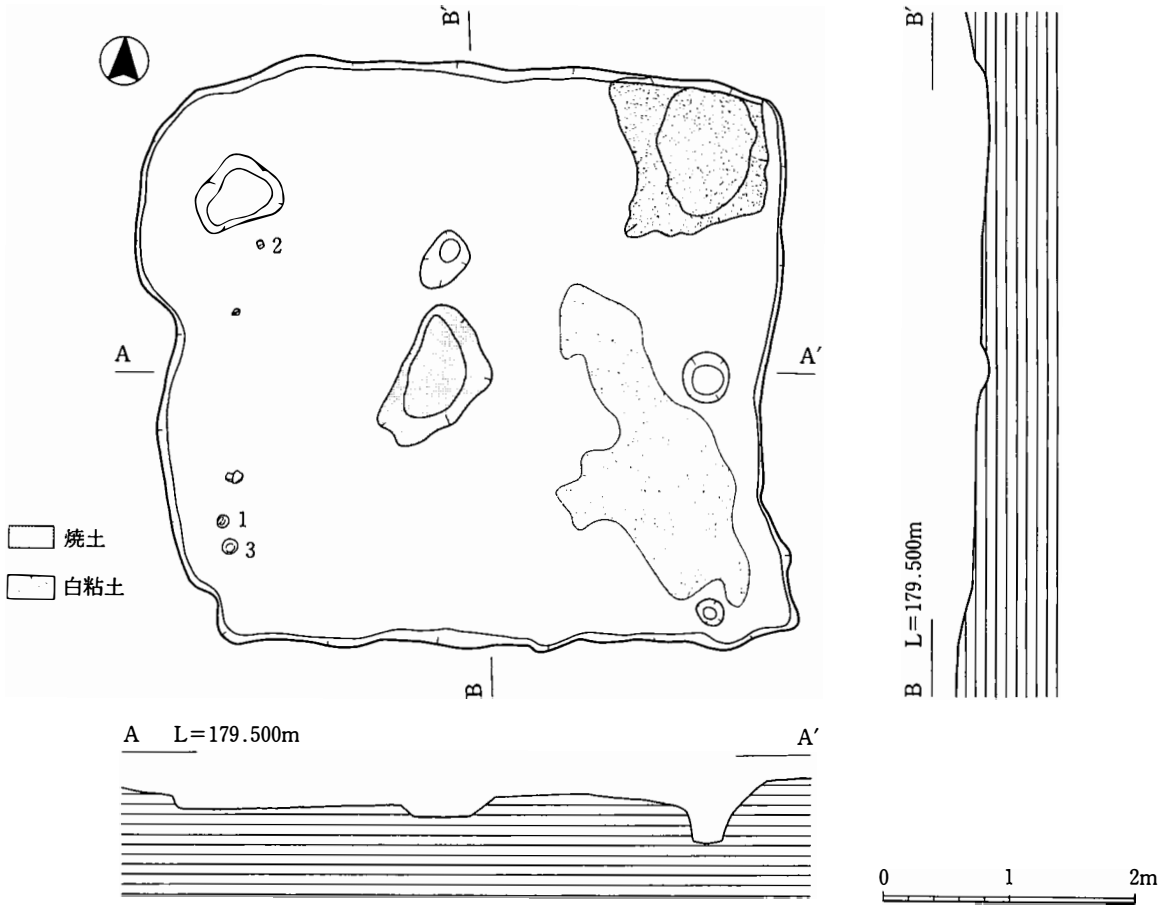
床面には，ほとんど硬化面は認められなかった。しかし厚さ約２～３㎝の白色粘土が，ごく部分的に床面に認められた。これは床面の凹凸を整えるために用いられたものと推定される。本来は床面一面に粘土を敷き詰めていたものかも知れない。焼土は住居跡内中央に認められた。約10㎝の浅い掘り込みをもち，長軸約１ｍ・短軸約60㎝の不整な楕円形を呈する。また３箇所に柱穴と思われるものを検出したが，主柱穴となるものは不明であった。

出土遺物は土師器の坏や須恵器の皿・高台付き碗それに磨石などが見られた。

１号竪穴式住居跡出土遺物（第34・35図）

１～３は土師器の坏である。１は，平底の底部から，体部が直線気味に立ち上がるものであるが，体部下位でわずかに屈折する。また口縁端部がわずかに外に開く。底部と体部の境は明瞭であり，２・３に比べ器高が高い。２・３は１に比べるとわずかに丸みを持つものである。４は須恵器の小形壷と思われる。５・６は須恵器碗で，短い高台を持つ。高台はいずれも底部外端に付く。７は須恵器の皿でナデ調整を施す。

第35図は磨石である。円盤状のもので，敲打痕跡をもつ。全長9.6㎝・幅10.6㎝・厚さ4.7㎝である。重量780ｇを計る。



第33図　１号竪穴式住居跡実測図

2．掘建柱建物跡とその出土遺物

掘建柱建物跡１棟を検出した。

１号掘建柱建物跡（第36図）

第Ⅰ調査区南端Ｌ２グリッド周辺に位置する。掘建柱建物跡と考えられる。桁行３間，梁行２間の柱配置をしている。北～南方向の主軸をもつものである。

西側桁行は約５ｍ20cmで，柱間は北より約90cm・１ｍ63cm・１ｍ63cmを測る。東側桁行は約５ｍ10cmで，柱間は北より約79cm，北より３番目の柱痕跡が存在しないため３ｍ26cmを測る。

北側梁行は約３ｍ80cmで，柱間は西より約１ｍ81cm・１ｍ20cmを測る。南側梁行は約３ｍ68cmで，柱間は西より約１ｍ64cm・１ｍ11cmを測る。

しかし北側の桁行が他に比して短いことなどより，桁行２間，梁行２間の柱配置で北側に庇を有するものの可能性も捨てきれない。

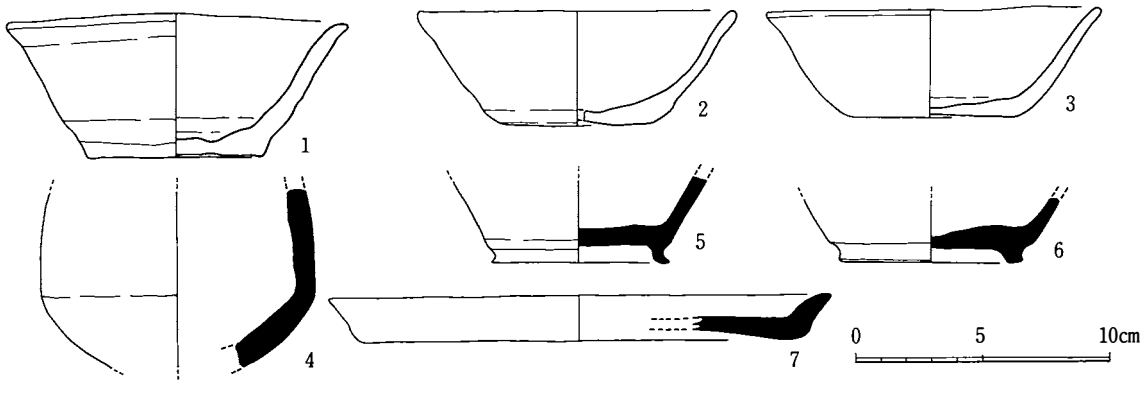
遺構検出面での柱穴の大きさは，直径20～32cmで深さは15～60cm程度を測る。柱痕跡を残した柱穴は１箇所から検出された。直径は約10～15cmである。出土遺物は検出されなかった。

3．土坑とその出土遺物

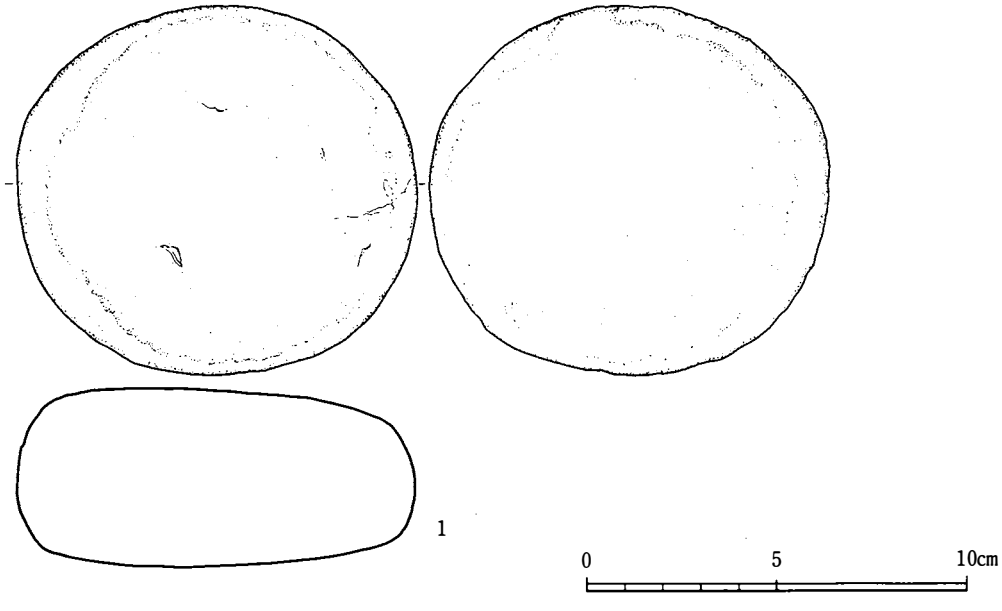
14基の土坑が検出された。一点の遺物も出土しない土坑については，その所属時期が不明であるが，便宜的にこの頁で一括して記述する。

１号土坑（第37図）

Ｊ10グリッドに位置する土坑である。平面形態は，



第34図　１号竪穴式住居跡出土土器実測図



第35図　１号竪穴式住居跡出土石器実測図

不整な惰円形を呈している。土坑の規模は，長軸２ｍ36cm・短軸１ｍ56cm程度である。深さは，最も深いところでも17cm程度である。

床面は比較的平坦である。土坑内の東側寄りに焼土が見られる。その焼土の存在する付近より，土師器坏・碗などが出土している。

１号土坑出土遺物（第37図）

出土した土師器のうち１～５までが，底部を欠損するため，口径により比較すると，その口径の大きさにより，３種類に分類できる。口径が16cmに近いもの（１・２），口径が15cmに近いもの（４・５）。それと口径が13cmに近いもの（３・６・７）の３種類である。

口径の違いから推察すると，口径が13cm未満のもの（３・６・７）は高台を持たないものであり，それ以外は高台を持つものであろう。

高台を有すると推察されるもののうち，１・４は，体部がほぼ直線的に立ち上がり，口縁端部まで，ほぼまっすぐなものである。その他の２・５も，体部は直線的に立ち上がるが，上記の１・４に比べると体部下位にわずかに丸味をもち，口縁部の先端がわずかに小さく開くものである。

次に高台を有しない３・６・７を見てみると，３・６は体部がほぼ直線的に立ち上がる。また６の底部はほぼ平底で，底部と体部の境は明瞭である。７は底部と体部の境がやや不明瞭で，丸みを帯び立ち上がるものである。

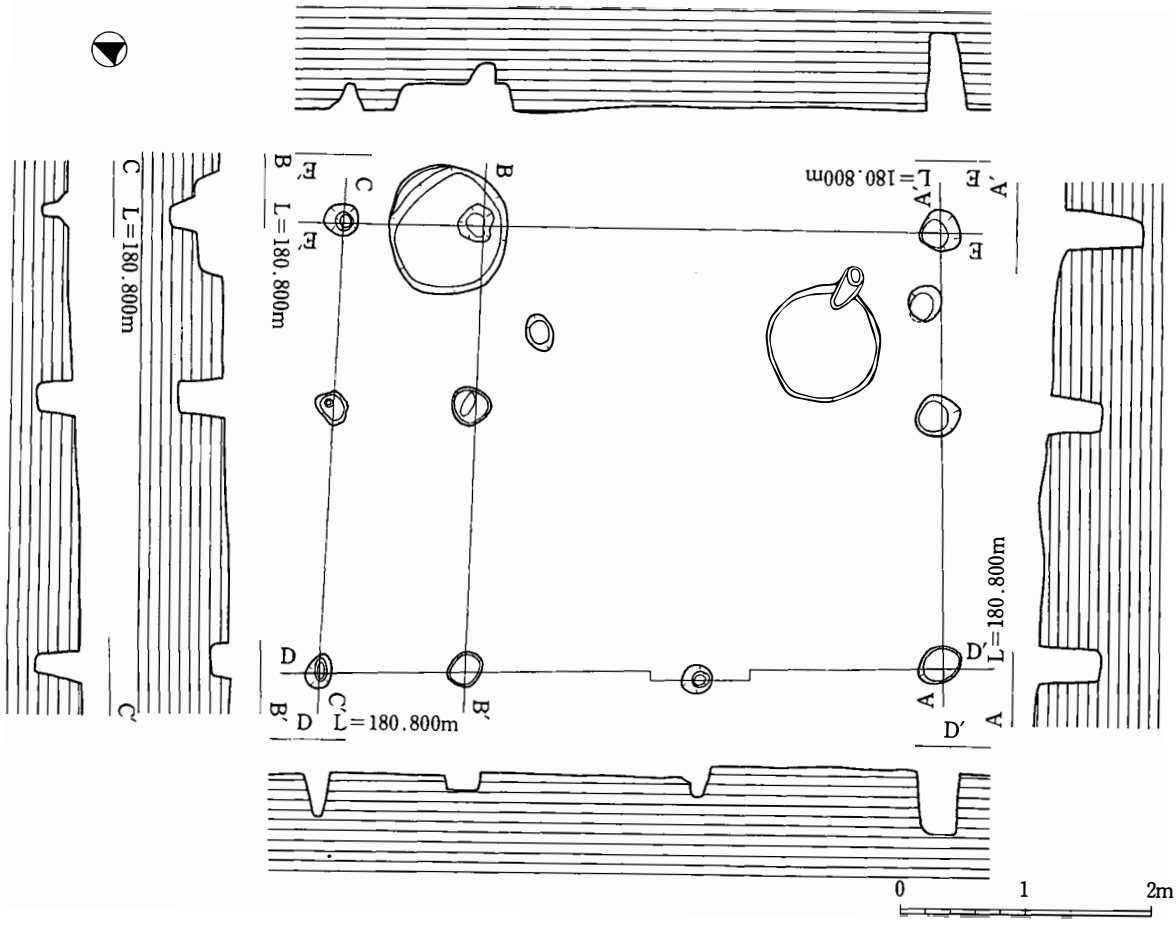
８・９は高台部分である。両者とも高台が短く，断面三角形の高台が底部端に付く。８は底部が厚い。

２号土坑（第38図）

Ｊ10グリッドに存在する土坑で，１号土坑の東約２ｍの地点に位置する。その平面形態は，不整な円形を呈し，２段に掘り込んでいる。その規模は，直径１ｍ56cm～１ｍ64cmで深さは60cm程度である。

埋土は単層である。床面は平坦でしっかりしている。

出土遺物としては，土師器碗がある。



第36図　１号掘立柱建物跡実測図

２号土坑出土遺物（第38図）

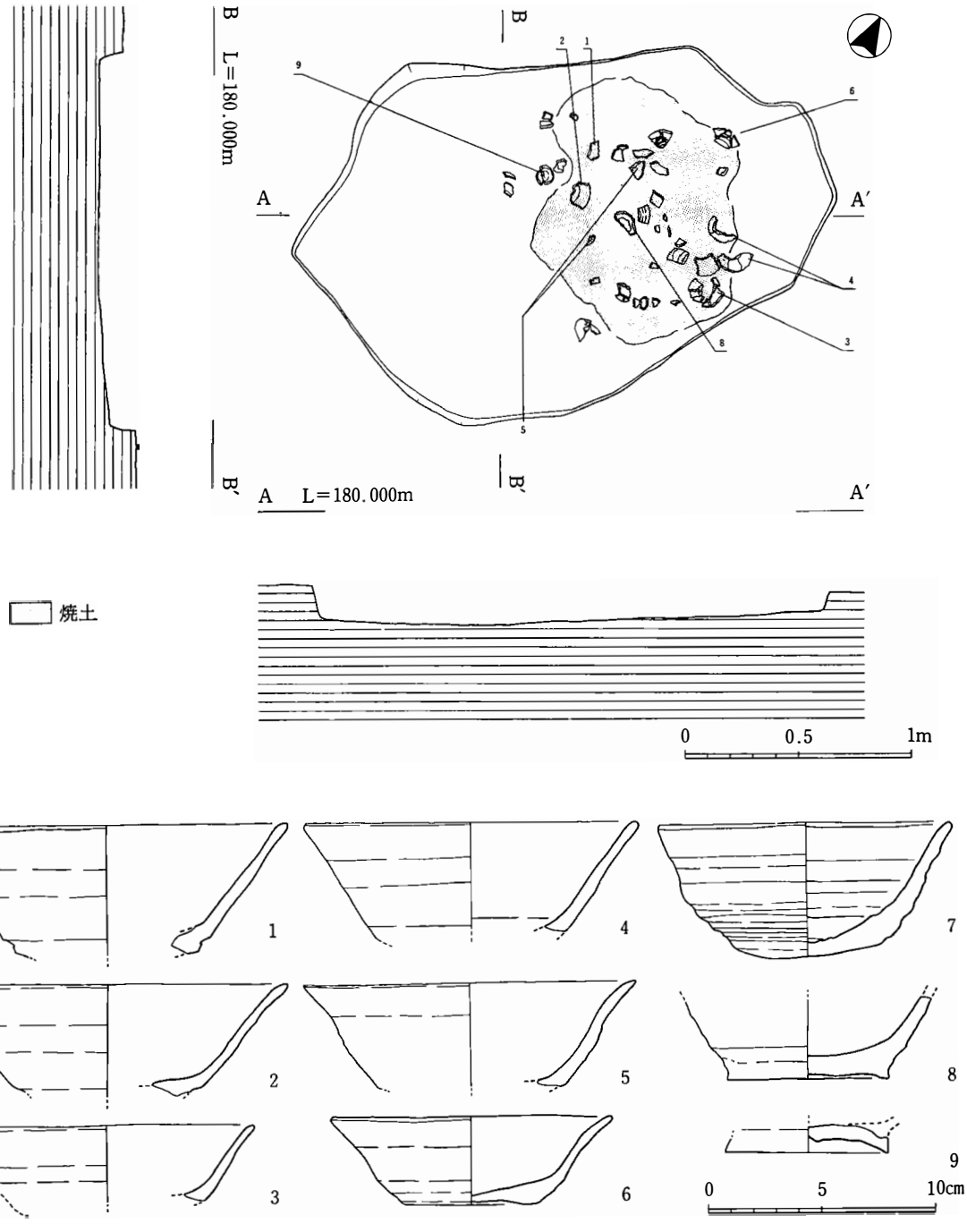
高台付きの碗であるが，底部を欠損する。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部でわずかに外反する。復元口径15.３㎝，器高は高台部を除き5.４㎝である。

３号土坑（第39図）

Ｊ10グリッドに位置する土坑である。４号土坑を壊している。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸１ｍ38㎝・短軸68㎝・深さ52㎝程度である。

埋土は単層であるが，床面には焼土が認められ，また微細な炭化物も検出された。床面は比較的平坦である。

遺物としては，坏・高台付碗・黒色土器・甕・鉢・移動式かまどなど多くの器種が出土している。しかしすべて土師器であり，須恵器は１点も出土していない。そのうちのいくつかには煤が付着したり，はっきりと火を受け赤変している痕跡が認められた。



第37図　１号土坑及び１号土坑出土遺物実測図

その中には，接合できる破片で，一方は赤変しており，他方とおおきく色調が違っているものなども存在する。その他の土師器にもかすかに赤く変色したようになっているものが多い。

土坑に土器を投棄した後に燃やされたものと考えられる。

また移動式かまどについては，生活必需品であるにもかかわらず，出土数が少ない。このことより①祭祀用のものである可能性。②廃棄される場合に移動式かまどと認識出来ないほどの小片となってしまった。などが考えられている。

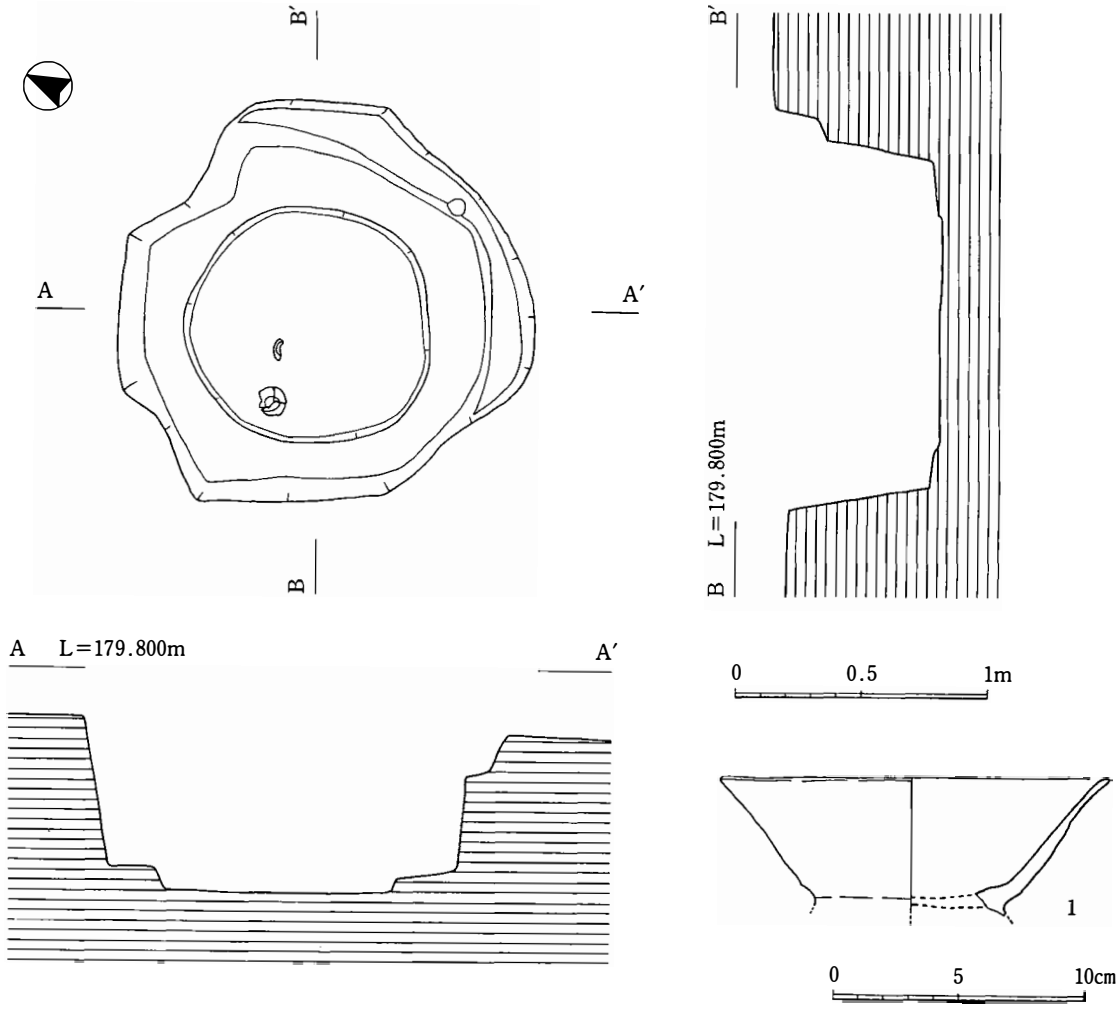
３号土坑出土遺物（第40～42図）

１～15は坏である。

１・２は，口径12cm前後で器高4.２cm前後のやや小型のものである。平底の底部から，体部がほぼ直線的に立ち上がり，口縁端部がわずかに外反する。

３～８は，口径12.６～13.4cmで，器高4.6～5.1cmである。平底の底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。そのうち６～８は体部の下位で若干屈折する。７は体部外面に墨書が認められる。２つの文字が書かれているが，薄れて読み取れない。底径は6.5～7.9cmとややばらつきがある。底部は回転ヘラ切離しのままで未調整のもの（６・７）や板目圧痕が認められるもの（３）などがある。

９～13は口径13.8～14.2cmである。器高は５cm前後のもの（９～11）と4.3cm前後の器高がやや低いもの（12・13）とに分かれる。底径は6.0～6.9cmで，上記の１～８に比べ底径が小さい。そのため体部の外への傾きがやや急である。やはり平底の底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。その中で13はやや



第38図　２号土坑及び２号土坑出土遺物実測図

丸底気味である。また10は底部に板目圧痕が認められる。

14は口径13.2cm，器高4.8cm，底径7.3cmで，直線的な体部で，口縁先端でわずかに外反する。底部は円盤貼り付け状で，板目圧痕が認められる。

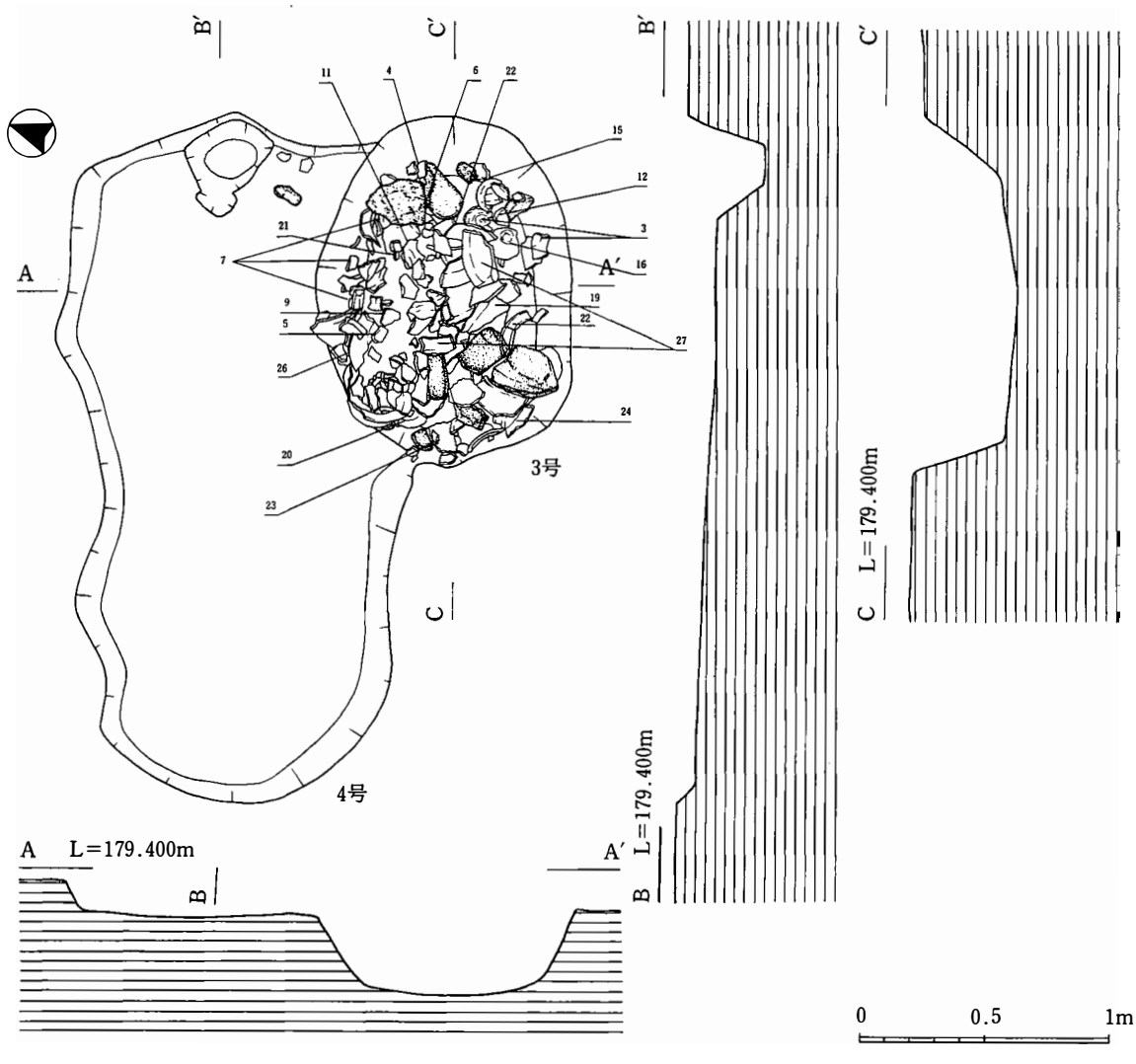
15は口径14.6cm，器高5.1cm，底径8.0cmで，直線的な体部である。

16～19は高台付き碗で，内器面をいずれも黒く仕上げている。口径15.1～16.3cmで，器高は5.5～6.1cm程度である。上記坏に比べて口径が大きい。体部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部はまっすぐ伸びる。低い高台が底部端につく。その断面形は台形に近い。その中で18は火を受け内面の一部が赤変している。

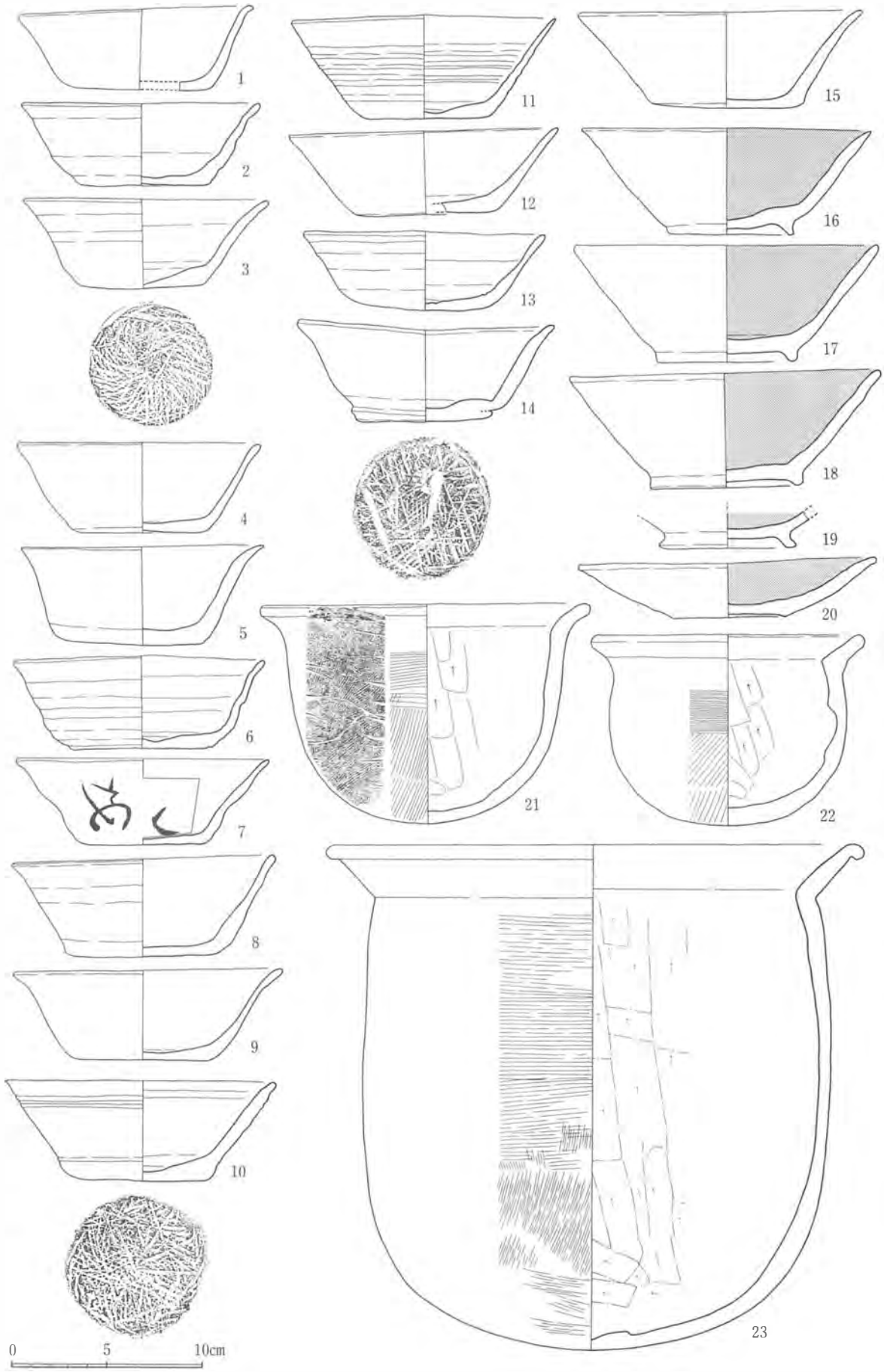
20は浅鉢で,内器面を黒く仕上げている。口径15.5cm，器高2.8cm，底径5.7cmである。

21～26は甕である。21・22は小型で楕円形の胴部に外反する短い口縁部が付く。いずれも外面はハケメ調整。内面はヘラ削りを施す。23は楕円形の胴部に外反する口縁部が付く。丸底で，胴部下半が張り，頸部がわずかにすぼまる。24も同様な器形と思われるが，直線的である。25は胴部下半の張りが少ない。26も同様な器形であるが，対となる取っ手を有す。いずれも口縁部は内外器面とも横ナデ，胴部外面はハケ調整，内面はヘラケズリである。

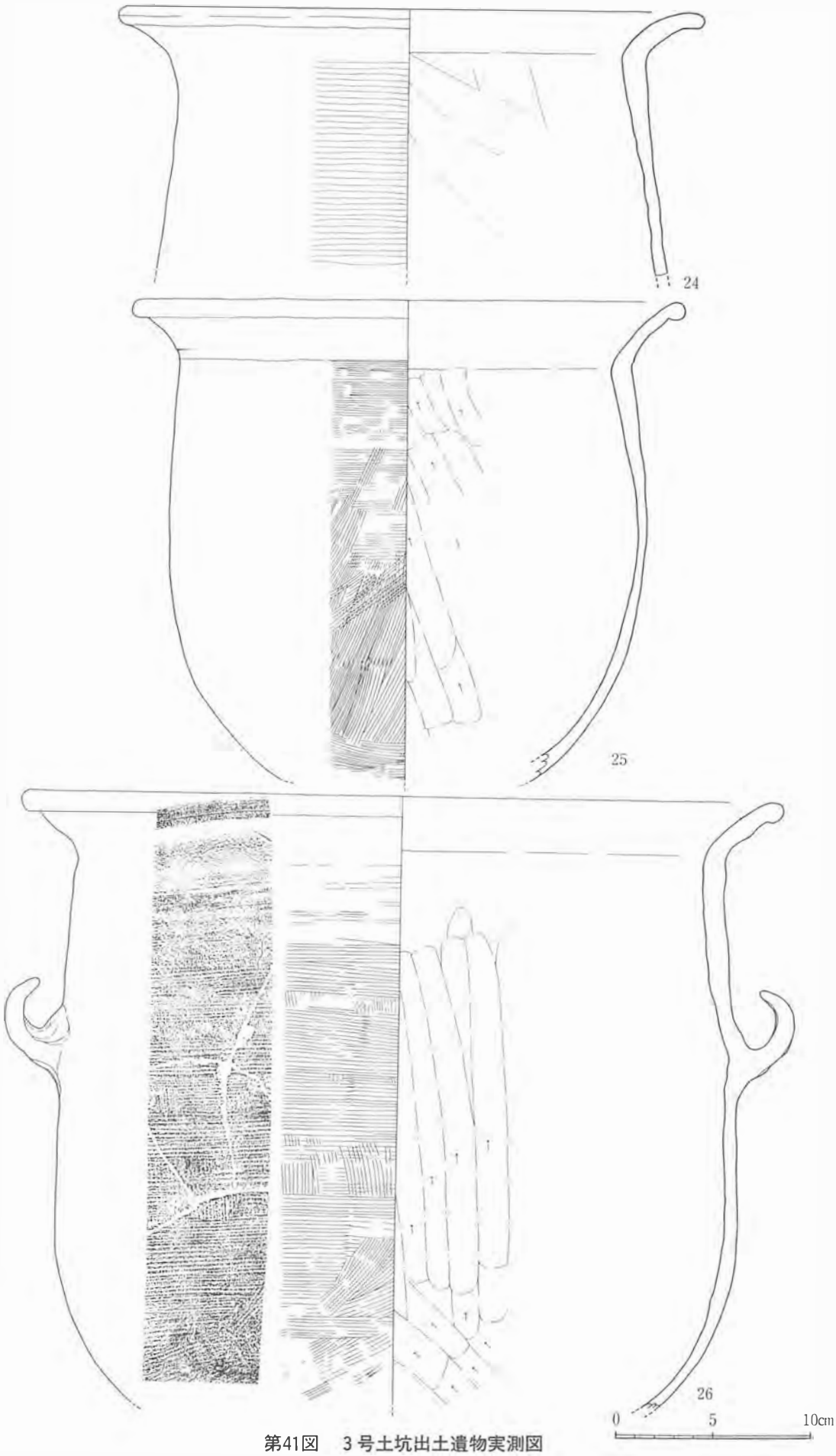
27は移動式かまどである。口縁部から体部の焚き口付近の部分約3分の2が残存している。外面はハケメ，内面はヘラケズリを施す。



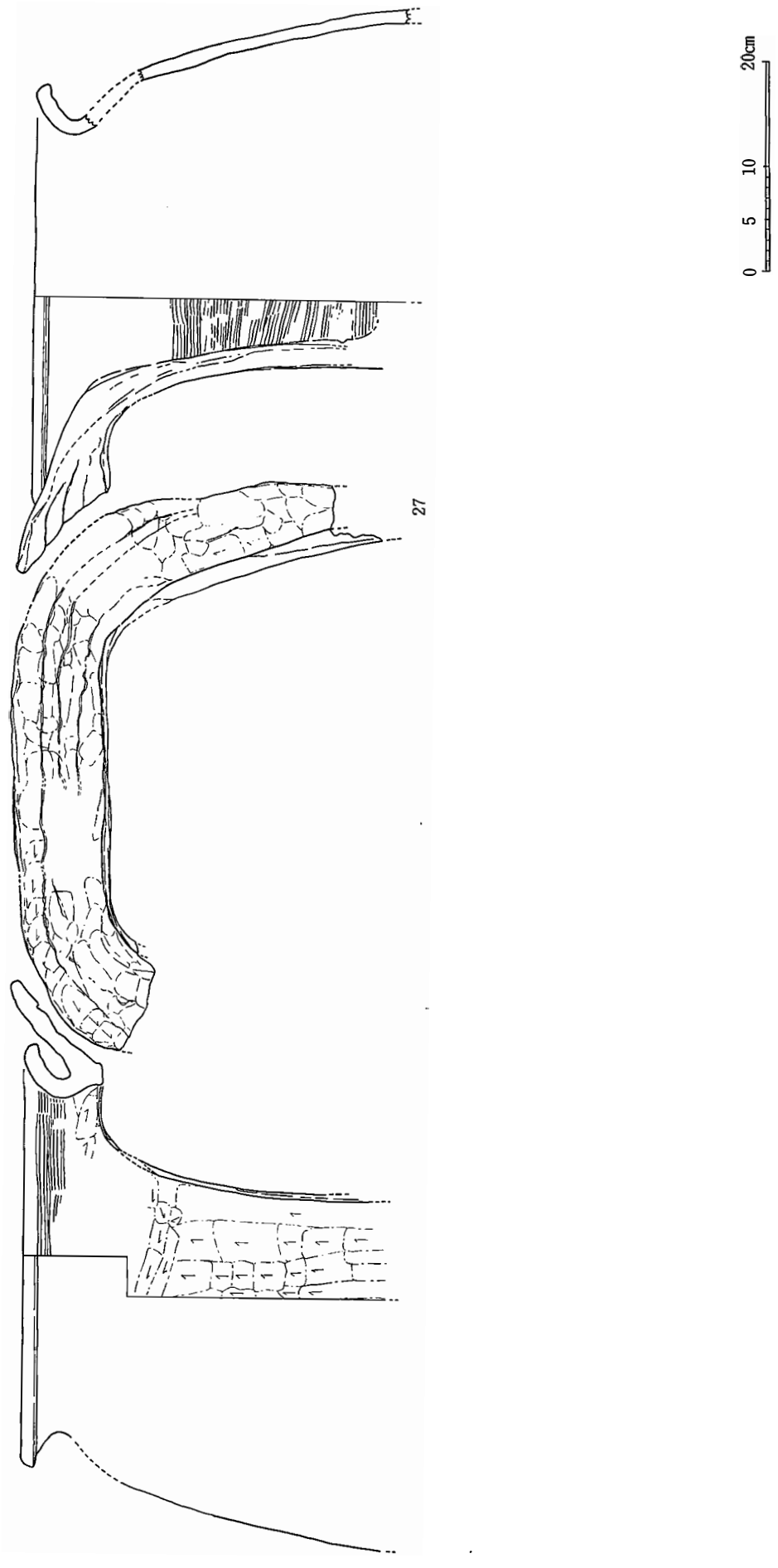
第39図　3・4号土坑実測図



第40図　３号土坑出土遺物実測図



第41図　3号土坑出土遺物実測図



第42図　３号土坑出土遺物実測図

４号土坑（第39図）

３号土坑に接する土坑である。３号土坑により一部を破壊されている。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸２ｍ68㎝・短軸１ｍ54㎝・深さ15㎝程度である。

埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。

遺物として，土器の細片が２点程出土しているが，３号土坑からの流れ込みの可能性が高い。また細片で図化に耐え得るものではなかった。

５号土坑（第43図）

Ｊ10グリッド内の４号土坑西側に位置する土坑である。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸２ｍ02㎝・短軸１ｍ22㎝・深さ８㎝程度である。土坑内の両端に柱穴が存在するが，５号土坑に伴うものではない。

埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。

遺物としては，円礫が１点土坑内中央より出土している。

６号土坑（第43図）

Ｊ11グリッド内の南東部に位置する土坑である。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸１ｍ23㎝・短軸94㎝・深さ20㎝程度である。

埋土は単層である。また床面は南より北に向かってわずかに深くなる。

遺物としては，土器の小破片が２点程出土しているが，図化に耐え得るものではない。

７号土坑（第44図）

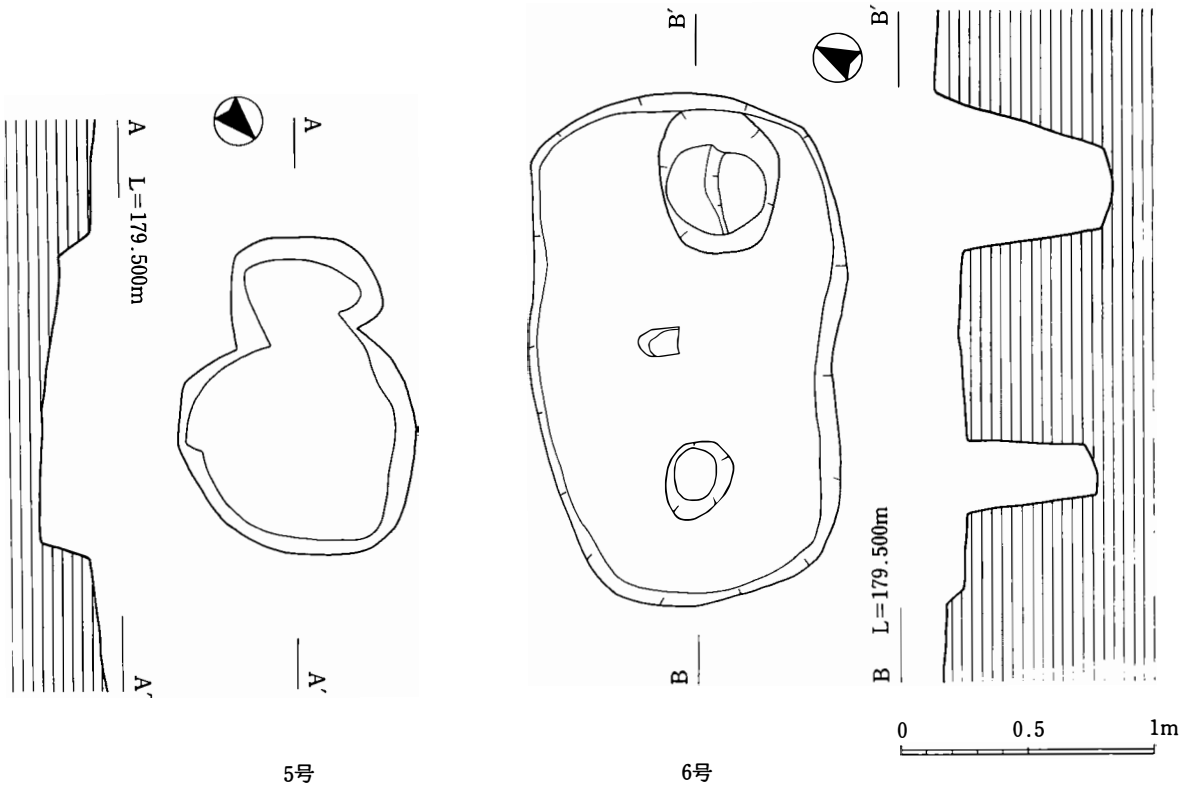
Ｊ11グリッド内の南に位置する土坑である。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸１ｍ75㎝・短軸１ｍ40㎝・深さ10㎝程度である。土坑内に約70㎝×40㎝の不整な楕円形の掘り込みが認められるが，土坑に伴うものではない。

埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。

遺物としては，土師器の坏２点と碗１点が出土している。

７号土坑出土遺物（第44図）

１・２は坏である。口径13.2～13.9㎝・器高5.0～5.2㎝・底径6.8～7.0㎝である。平底の底部から，体部がほぼ直線的に立ち上がるが，体部の下位に若干丸みが認められる。両者ともやや歪みが認められる。



第43図　５・６号土坑実測図

３は碗である。復元口径14.2cm・器高7.3cm・復元底径8.４cmで，器高が高い。体部は直線的である。底部端にやや高めの高台が付く。

８号土坑（第45図）

Ｋ11グリッドに位置する土坑で，その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸１ｍ42cm・短軸１ｍ３cm・深さ27cm程度である。

埋土は単層である。床面は比較的平坦である。

遺物は出土していない。

９号土坑（第45図）

Ｋ10グリッドに位置する土坑で，その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸２ｍ26cm・短軸87cm・深さ17cm程度である。

埋土は単層である。床面は比較的平坦で，中央部分に深さ18cm程度で，径20～30cmの円形の掘り込みが認められるが，この土坑に伴うものではない。

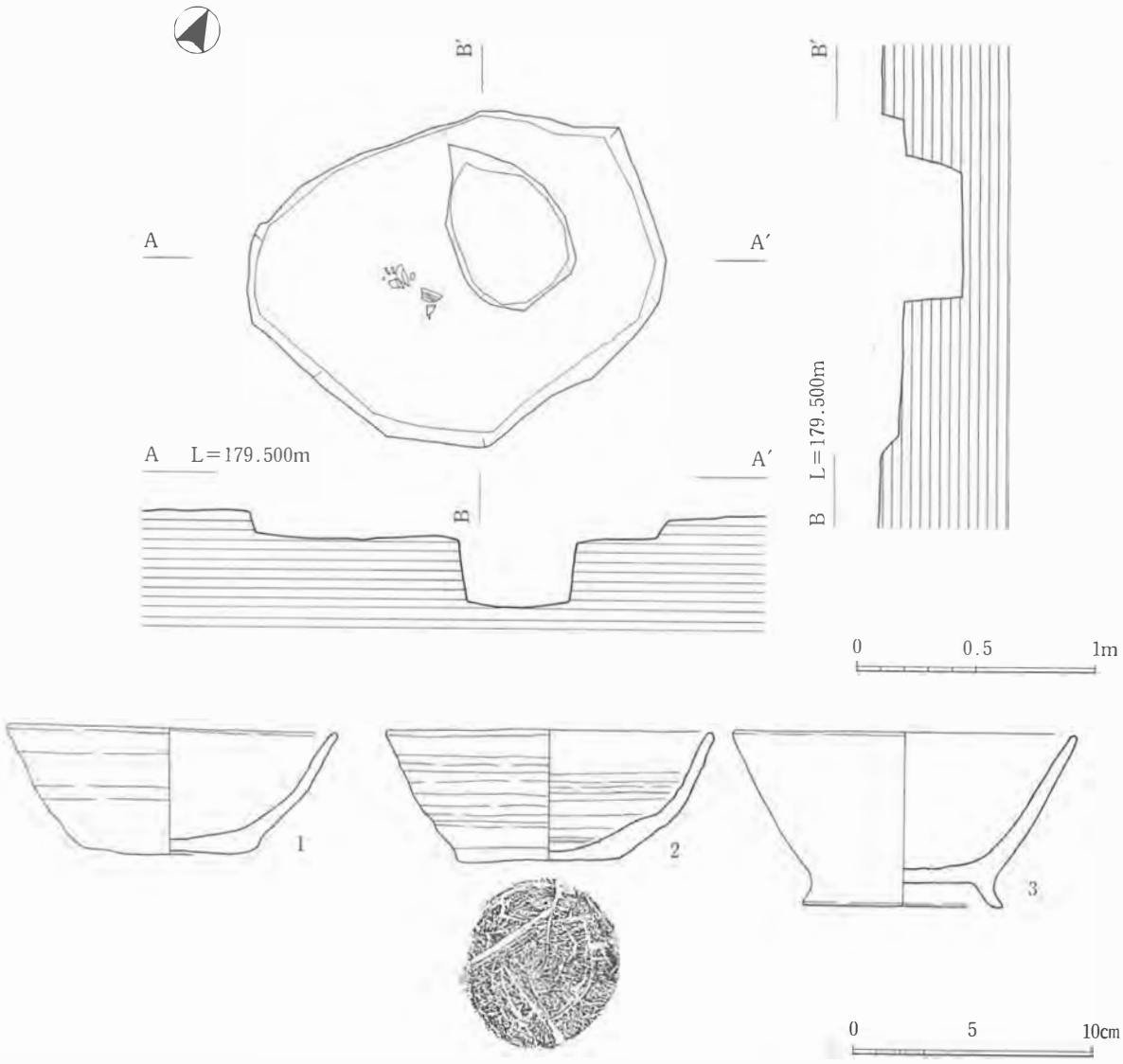
遺物は出土していない。

10号土坑（第45図）

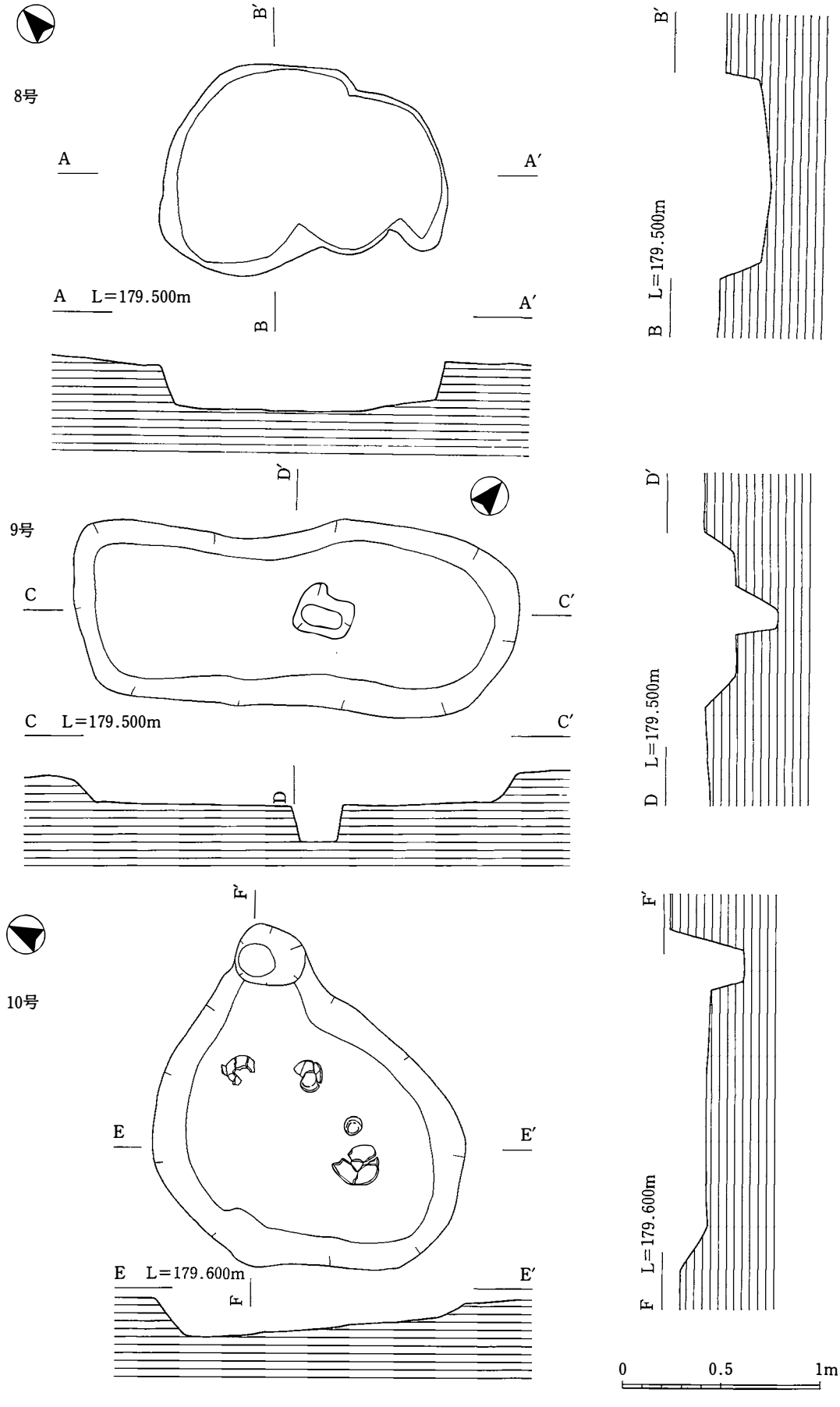
Ｌ８グリッドに位置する土坑で，その平面形態は，不整な円形を呈している。その規模は，径１ｍ32cm～１ｍ62cm・深さ17cm程度である。

埋土には焼土や炭化物を含むが，分層はできなかった。床面は比較的平坦である。

遺物は土師器の坏・碗が３・４点出土したが，かなり脆くなっており，取り上げる際に粉々になってしまい，復元が不可能となってしまった。



第44図　７号土坑及び７号土坑出土遺物実測図



第45図　8・9・10号土坑実測図

11号土坑（第46図）

Ｍ９グリッドに位置する土坑で，その平面形態は，不整な円形を呈している。その規模は，径１ｍ80cm程度で，深さ約33cm程度である。土坑内の北側や土坑周辺に円形の掘り込みが存在するが，この土坑に伴うものではない。

埋土は単層であり，床面は比較的平坦である。

遺物は土師器の坏１点が出土している。

11号土坑出土遺物（第46図）

坏で，口縁部分を欠損する。底部は平底で，やや丸みを持って立ち上がるようである。

12号土坑（第47図）

Ｍ10グリッドに位置する土坑で，その平面形態は，不整な円形を呈している。その規模は，径90cm前後で，深さは約14cm程度である。

埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。遺物は角礫が２点出土している。

13号土坑（第48図）

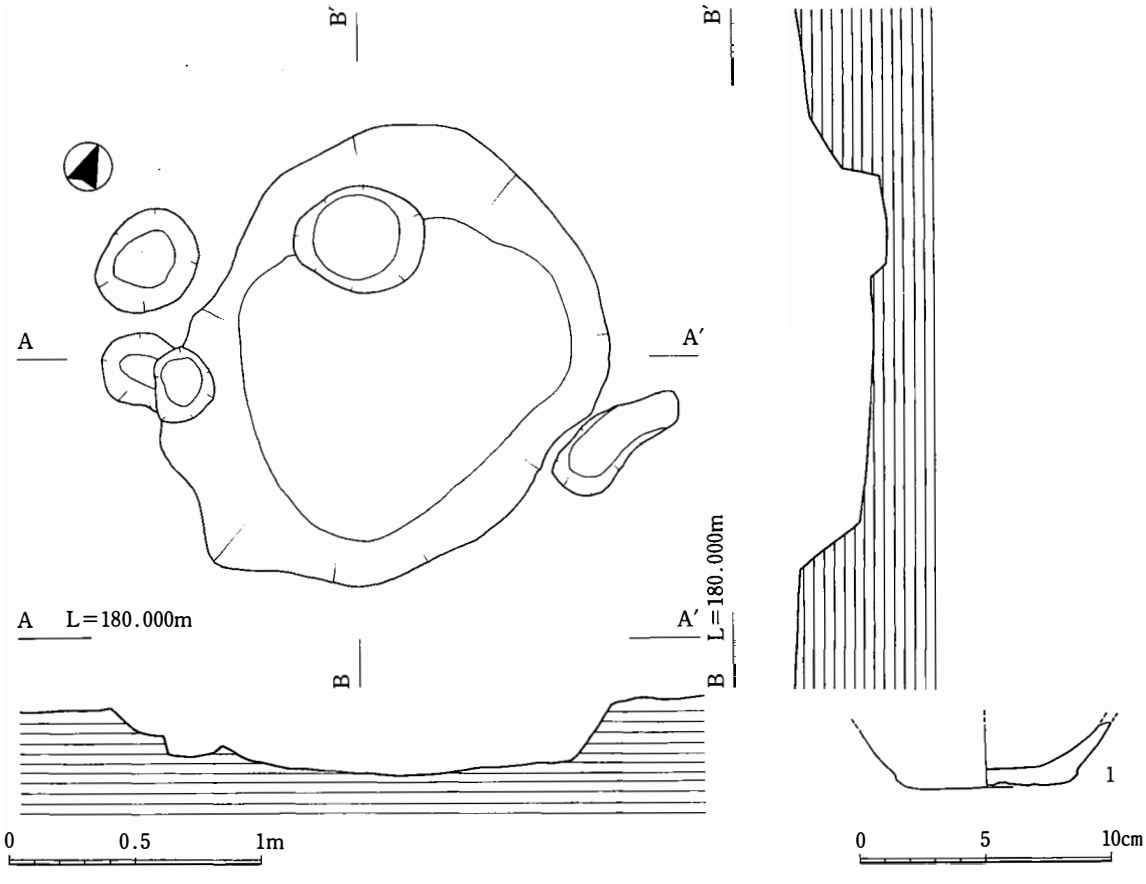
Ｉ２・Ｊ２グリッドにまたがって位置する土坑である。長軸が４ｍ以上の大きな２つの不整形の土坑と３つの小さな土坑が部分的に重なっているように思われる。またそれ以上の土坑の重なりがあるのかも知れないが，遺構検出時点では確認ができなかった。

南側の土坑の平面形態は，不正な楕円形を呈しており，西側の一部を径１ｍ20～１ｍ40cmの小さな土坑により破壊されている。その規模は，長軸４ｍ66cm・短軸２ｍ90cm程度で，深さは最深で48cm程度である。その床面には浅い凹凸があり，本来は３つの土坑で構成されているものかもしれないが，平面や土層断面からは確認できなかった。

北側の土坑は，南側端と西側端が他の土坑により壊されている。その平面形態は，不整な楕円形を呈している。その規模は，長軸４ｍ60cm・短軸１ｍ70cm・深さ30cm程度である。床面は比較的平坦である。

なお，埋土は分層が困難であった。その色調は暗褐色砂質土であった。

出土遺物は，ほぼまんべんなく土師器・須恵器の



第46図　11号土坑及び11号土坑出土遺物実測図

小破片が散在していた。

13号土坑出土遺物（第48図）

出土した遺物の多くが小破片で，接合できたものはごく少量であり，図化できたものは下記の２点であった。

１・２は，須恵器の高台付きの碗である。いずれも体部が直線的に立ち上がり，低い高台が付く。１は南側の土坑，２は北側の土坑からの出土である。

14号土坑（第49図）

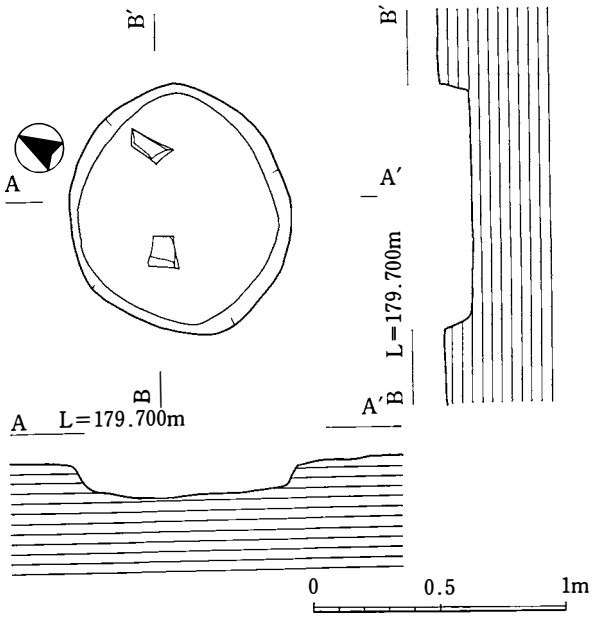
Ｈ２グリッドに位置する土坑である。土坑の平面形態は，不正形を呈しており，その規模は，長軸６ｍ・短軸２ｍ70cm程度で，深さは最深で48cm程度である。その床面は比較的平坦である。

土坑検出時点で，その埋土には，焼土や微細な炭化物が交じっていた。また土坑内北側の床面には，平面形が長軸約２ｍ・短軸１ｍ20cm程度の楕円形で，最大の厚さ約20cmの焼土帯が確認された。また西側の壁面には30～20cmの円形の焼土帯が２カ所で確認されている。

出土遺物は，土坑内全域に須恵器や土師器の小片が散在していた。

14号土坑出土遺物（第49図）

１・２は土師器の坏である。１・２共に平底の底部から，ほぼ直線的に立ち上がる。



第47図　12号土坑実測図

３は土師器の碗である。やはり体部は直線的にたちあがる。高台は低く，断面形が台形に近いものである。土師器にしては焼成が極めて良好で，赤茶けている。須恵器の焼成の悪いものかも知れない。

４は縄文式土器である。ただし，この土器の接合関係をみると，土坑外のものとも接合するので，この土器の一部の破片が土坑内に流れ込んだものと思われる。口縁部分でわずかに湾曲し，またわずかに肥圧させて，文様帯としている。凹線で鍵形の文様を施す。

５は，土師器の坏蓋である。つまみを有し，かえりを持たないもので，天井部にヘラケズリの痕跡がわずかに残る。

６は，須恵器の坏蓋である。偏平でつまみ，かえり共に有しない。歪みがあるものである。

７・８は須恵器の高台付きの碗である。いずれも歪みがひどいが，体部は直線的に立ち上がるもので，低い高台を有す。８は外器面全体に自然釉が掛かる。また底部端に高台が付く。

９は焼成粘土塊である。色調は灰褐色をなし，一部に煤の付着が認められる。重量15.６ｇである。幅1.５cm程度の粘土紐を２本を握り潰したような状態である。

４．その他の遺構と遺物

焼土遺構（第12図）

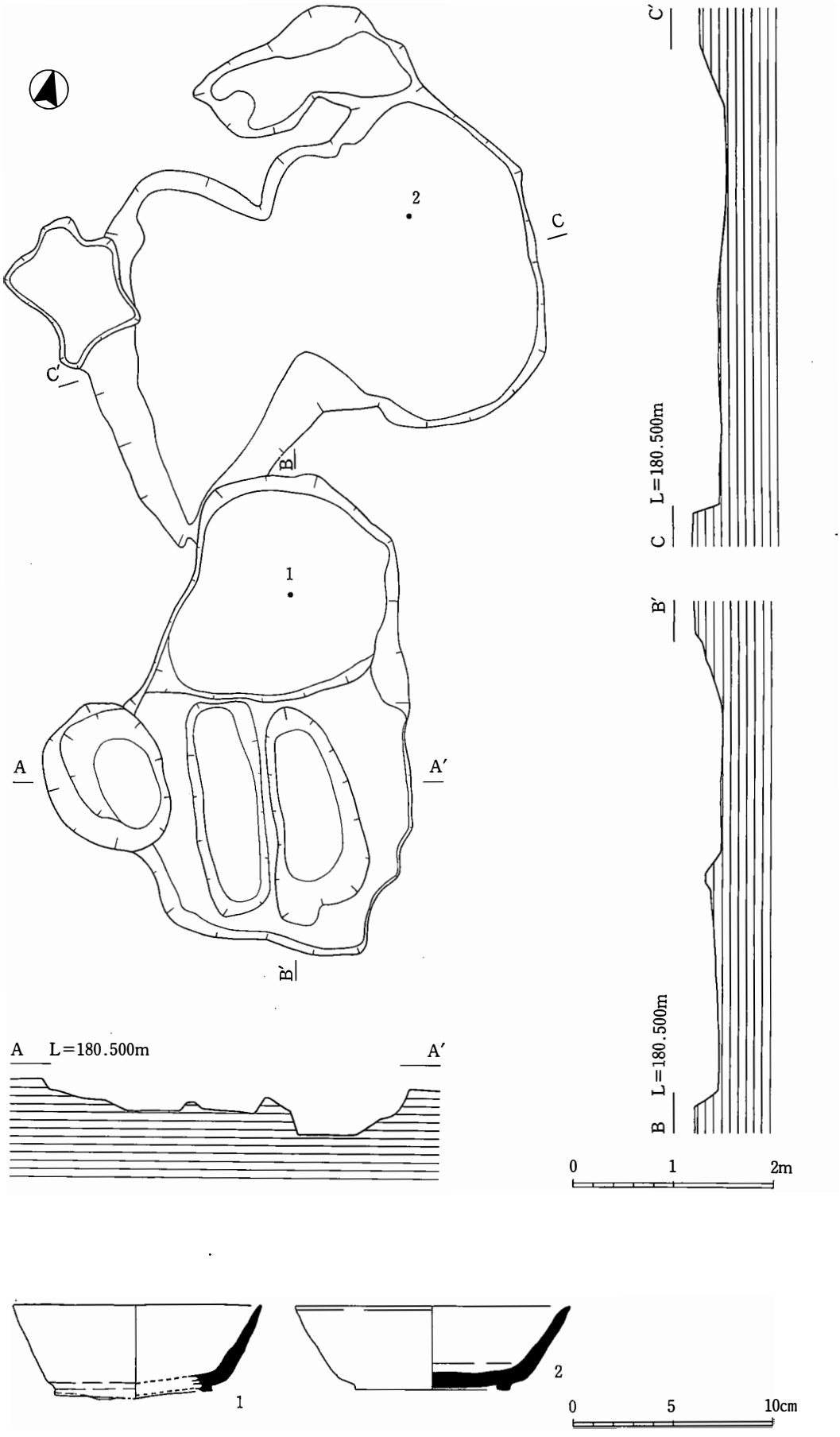
Ｊ９グリッド内南西部で土が焼けた部分があった。削平のためか，掘り込みは確認できなかった。不定形で，１ｍ40cm×１ｍ20cm前後の範囲に収まる。碗の高台部分が出土している。

焼土遺構出土遺物（第50図１）

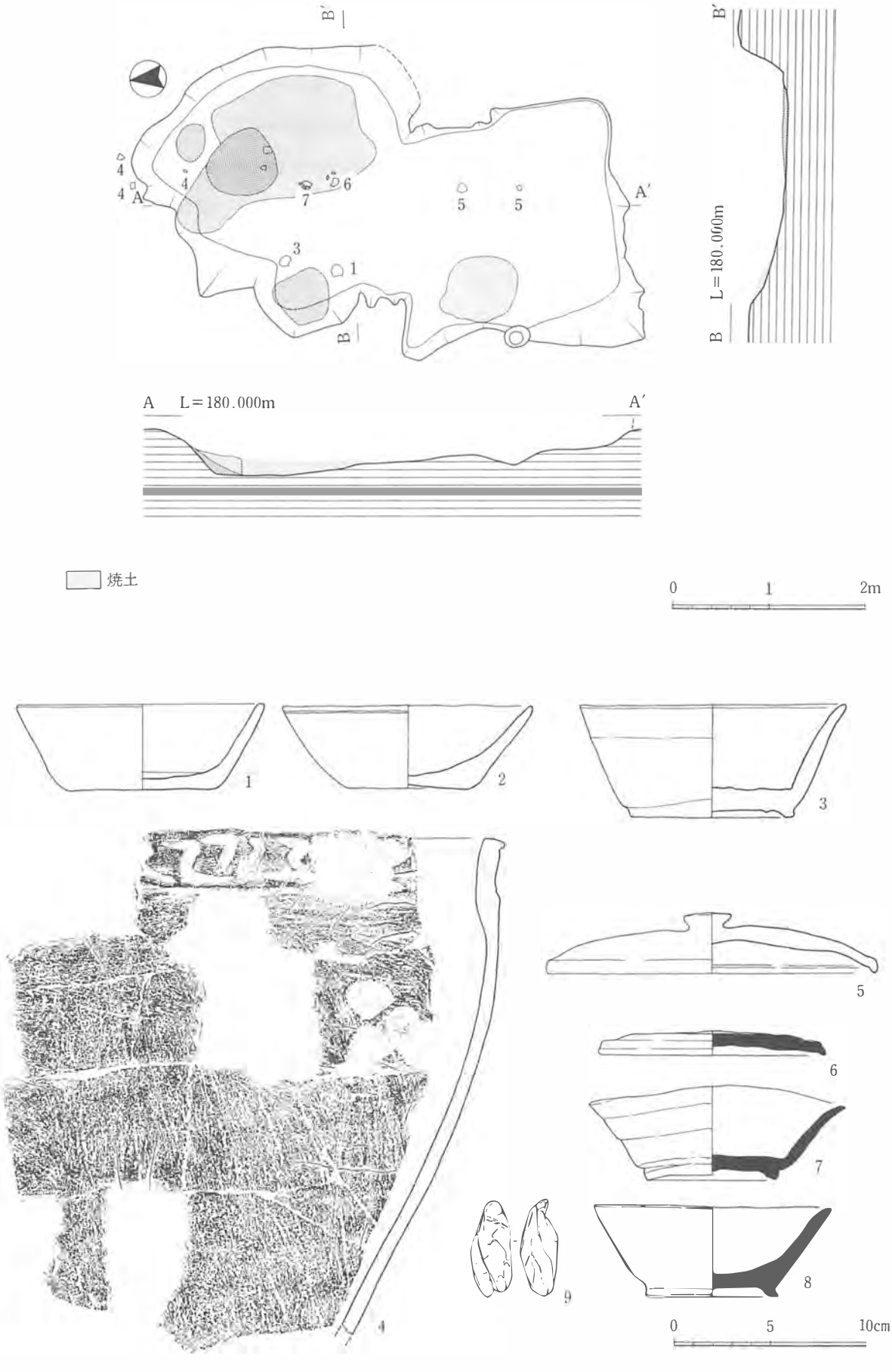
１は碗の高台部分で，底部端につき，湾曲気味に外に開く。

13号ピット（第12図）

調査区内には，ピットが数十個検出されているが，掘建柱建物跡に伴うものは，前述のものだけであった。しかしその中でM10グリッド内に位置する13号ピットは，径46cmで，深さ約40cmのしっかりしたものであった。しかしその周辺には，ほかに柱穴と思われるようなものがなかった。またこのピットの



第48図　13号土坑及び13号土坑出土遺物実測図



第49図　14号土坑及び14号土坑出土遺物実測図

上面からは，土師器坏１点と碗２点が出土している。

遺物（第50図２～４）

２は土師器坏で，復元口径12.8cm，器高4.3cm，底径6.0cmである。直線的な体部であるが，体部の下位に若干丸みをもつ。

３・４は碗である。２は，復元口径13.8cm，器高6.7cm，底径7.5cmで，高台を有すもののなかでは口径が小さく，器高が高い。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部端につき，その断面形は三角形に近い。４は高台部分のみで，やはり高台の断面形は三角形に近い。

５．包含層出土の遺物

分布（第32図）

遺物の分布は，位置を押さえられるものが少ないが，やはりⅠ区の北東側に集中する。須恵器の出土箇所はすべてⅠ区である。陶磁器はⅡ区の西部から出土している。

遺物（第52図）

１～15・17・18は，土師器である。

１～９は高台を持たないものである。

１・２は，口径が10cm前後のもので器高が３cm位のものである。１は底径が5.９cmと大きいため体部が立つ。２は平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに内湾し，底部は回転ヘラ切り離しのままである。

３～５は，口径が11cm前後のもので，器高が４cm前後のものである。いずれも底部は平底で，体部はやや直線気味に立ち上がる。

６・７は口径が12.4cm，器高4.8cm，底径7.5cm前後で，底径が大きい。いずれも底部は平底で，体部は直線的に立ち上がる。底径が大きいため，体部がやや立ち気味になる。

８・９は，口径14cmを超えるものである。８は，器高4.6cmである。平底の底部より，若干丸味を帯びて立ち上がる。９は，器高5.8cmで，体部は直線的である。また歪みが大きい。

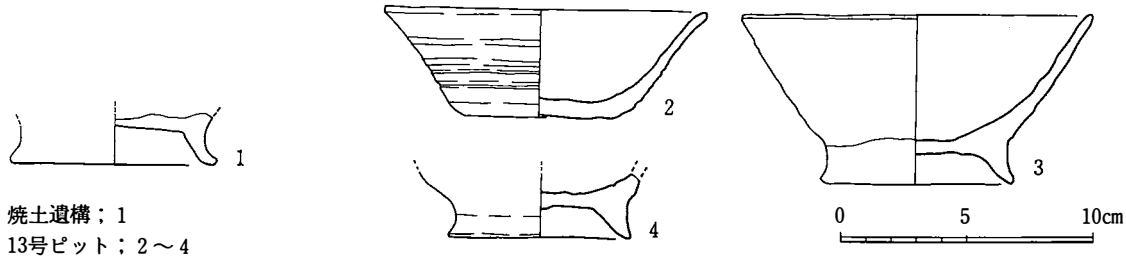
10～11は高台付きの碗である。10は復元口径が14.６cm，11は復元口径15.0cmである。10は器高・底径ともに大きい。平底で体部が直線的に立ち上がる。焼成は良好で，須恵器に近いものである。11も，平底の底部から体部がほぼ直線的に立ち上がる黒色土器で，高台の先端がゆるやかに外に開く。

12は，鉢である。頸部がくびれ，口縁部が短く外反する。

13は蓋で，かなり偏平な形をしている。小さく偏平なつまみが付く。

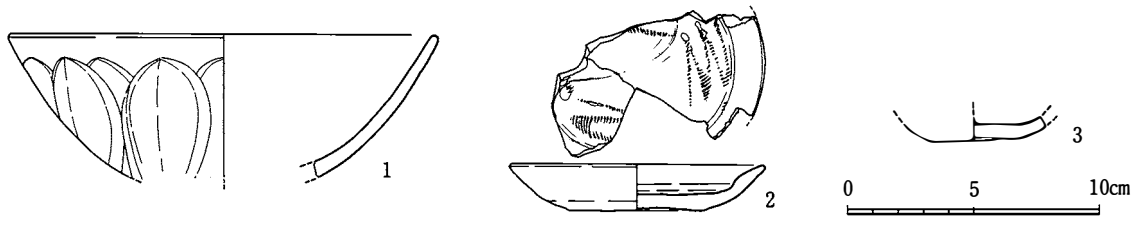
14は甕で，胴部下半を欠損する。口縁部がゆるやかに外反する。調整は外面ハケ，内面ケズリである。

15は底部を欠損するが，鉢と思われる。口縁部が

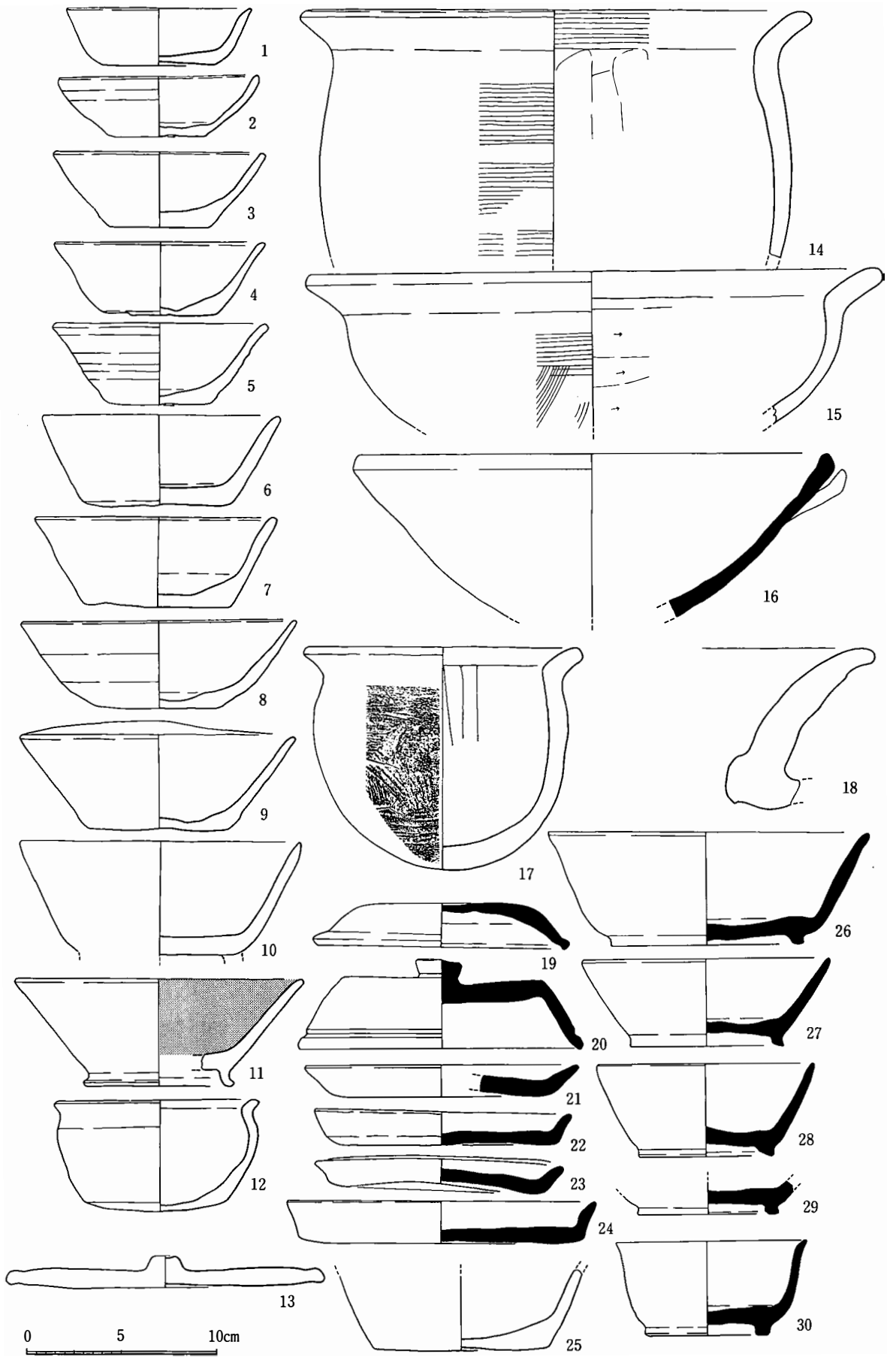


焼土遺構；1
13号ピット；２～４

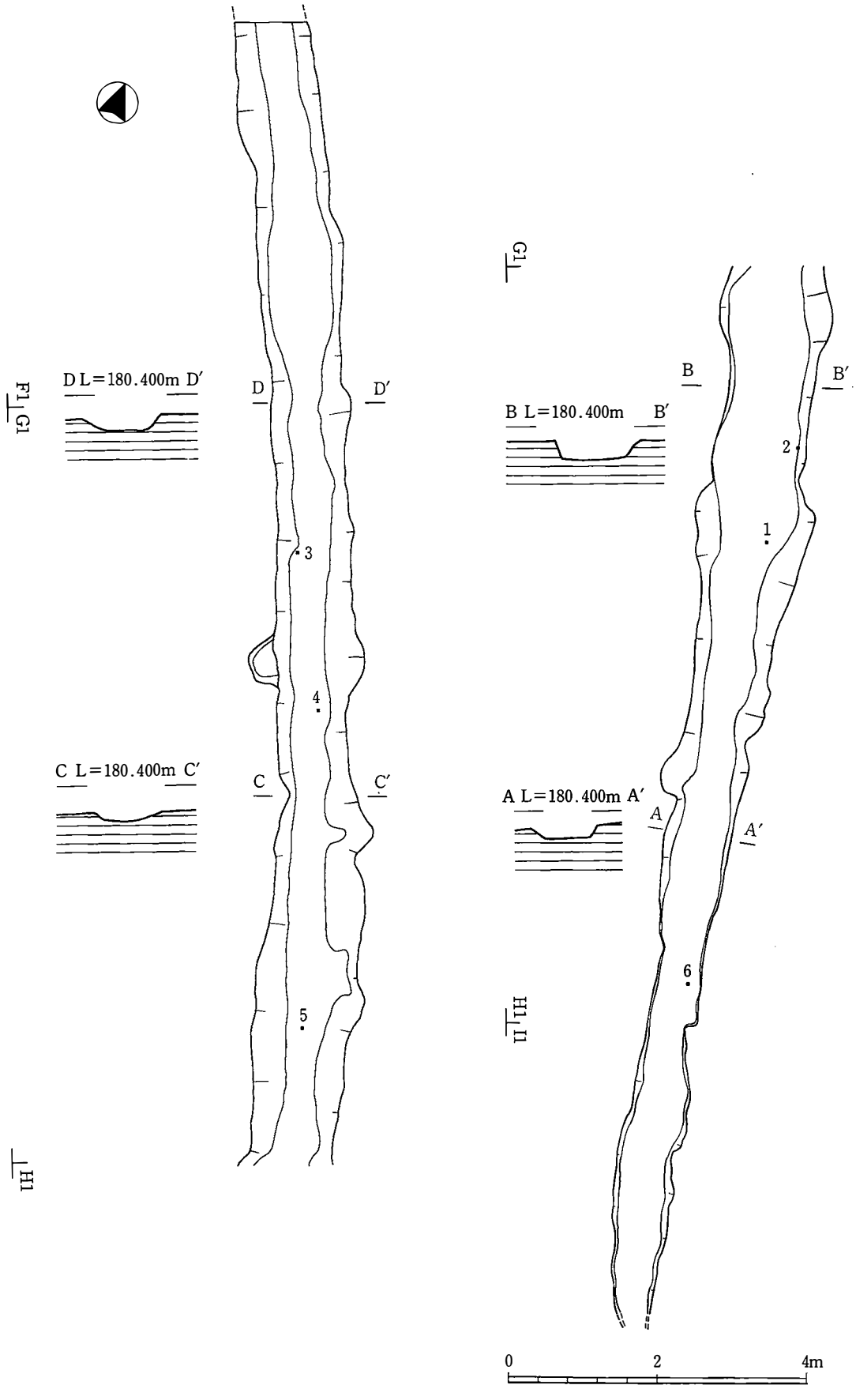
第50図　焼土遺構・13号ピット出土遺物実測図



第51図　陶磁器実測図



第52図　包含層出土遺物実測図


F1
G1
D L=180.400m D′
D
D′
3
4
C L=180.400m C′
C
C′
5
H1
G1
B
B′
B L=180.400m B′
2
1
A L=180.400m A′
A
A′
6
H1
0
2
4m

第53図　溝遺構実測図

なだらかに外反する。

16は東播窯系の片口のスリ鉢であると思われる。

17は小型の甕で球形の胴部に短く外反する口縁が付く。外面はハケメ調整，内面はヘラ削りを施す。18は甕の口縁部か。

19～24・26～30は須恵器である。

19・20は蓋で，いずれも，かえりを有しない。19は全体的に丸みを帯びる。天井部付近は回転ヘラ切り離しの痕跡が残る。また天井部と体部の区分が不明瞭で，つまみを有しないものである。20は，擬宝珠形のつまみを有し，天井部と体部の区分が明瞭なものである。口縁部付近に回転ヘラケズリにより段をつける。

21～24は皿である。口径はそれぞれ14.4cm，13.5cm，13.1cm，16.2cmである。

25は土師器坏の底部片。

26～30は高台付きの碗である。26～28は体部が直線的に立ち上がる。30は丸みを持ち，垂直気味に立ち上がる。また高台はいずれも短めで，断面形が四角に近いもの（26・29・30）と三角形に近いもの（27・28）がある。また高台の断面形が三角形に近い27・28は，高台が底部端部につく。

第51図１～３は陶磁器である。陶磁器類はＫ11グリッド内の西側に設定したトレンチ内より数点破片が出土している。

１は龍泉窯系青磁の碗で，蓮弁の文様を有する。復元口径16.8cmである。灰色がかった緑色の釉がかかる。２は内面にジグザグ文を櫛状の施文具で描く。復元すると口径10.2cm・器高1.8cm・底径5.4cmで，青みがかった白灰色の釉がかかる。また底部部分の釉はカキ取られている。３は陶器の底部部分で，回転糸切り底となる。内面には深緑色の釉がかかる。外面は無釉である。瀬戸系のものと思われる。底径3.6cmを計る。

６．時期不明の遺構とその出土遺物

溝遺構（第53図）

調査区の北西部Ｆ１・Ｇ１・Ｈ１・Ｉ１グリッドにまたがって存在する。

現長で約29ｍを測るが，北端は調査区外となっており，またＩ１グリッド付近においては，削平が著しくなり，不明瞭となる。しかし本来はさらに伸びていると考えられる。幅は約１ｍである。その深さは北端地点で約25cmである。

出土遺物は極少量である。縄文時代晩期の土器の細片や石器。その他に石庖丁ではないかと考えられる線刻礫や平安時代頃の須恵器・土師器片が出土している。

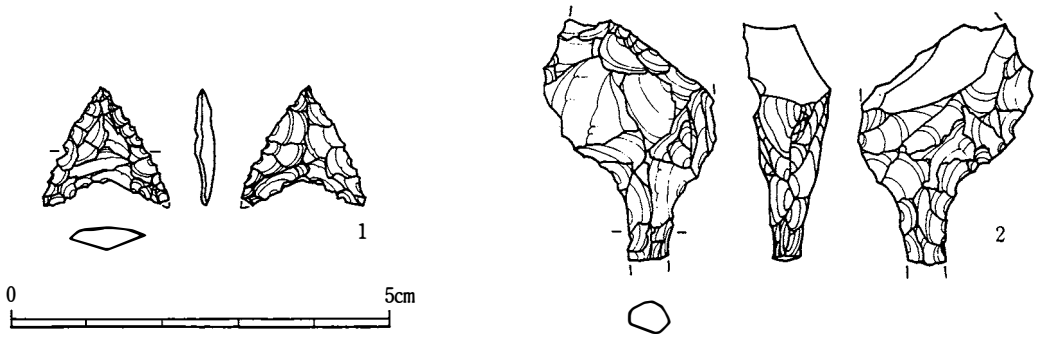
その出土状況は，溝の削平が著しいせいもあって，その多くが溝の床面直上となる。そのため時期の決定ができなかった。

溝出土の遺物（第54・55図）

縄文時代の土器や平安時代頃の須恵器・土師器は，極細片で図化出来なかった。

１は，全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態は三角形状に抉れる。２は石錐である。

３・４は磨石・敲石である。ともに球形のもので，



第54図　溝遺構出土遺物実測図

いずれも敲打痕跡が側面に認められる。

５は磨製石斧である。基部部分を欠損する。その全体的形状は伺い知れないが，恐らく基部にいくに従い，細くなるもので，形状は二等辺三角形に近いものであると思われる。

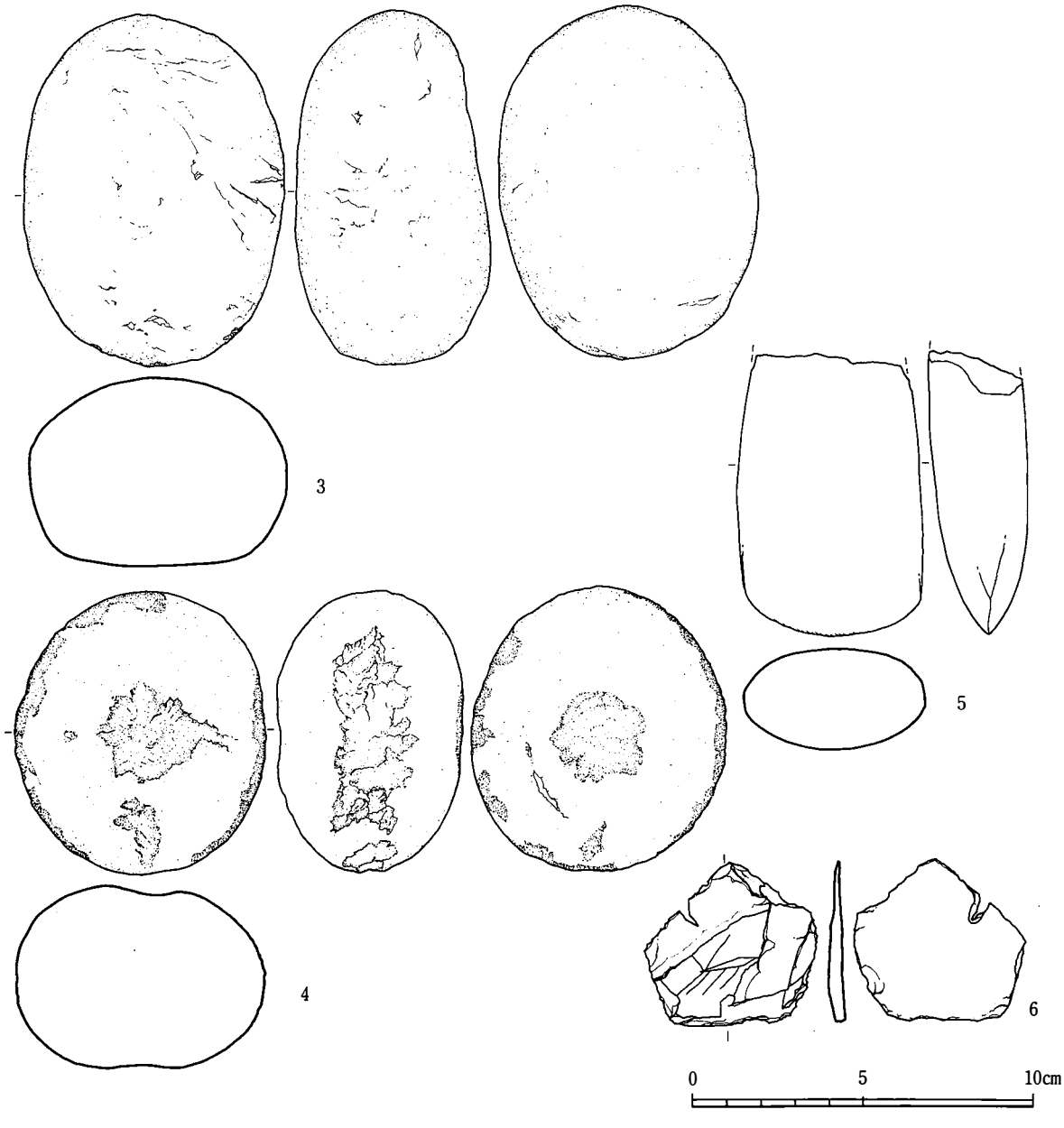
６は，線刻礫である。一片４㎝，厚さ５㎜程で，その平坦面に細い線刻が刻まれている。その線刻は胴体と思われる菱形の線刻と足のような４本の線，長い角を思わせる２本の線から成り，その構成から鹿を連想させる。

７．参考資料

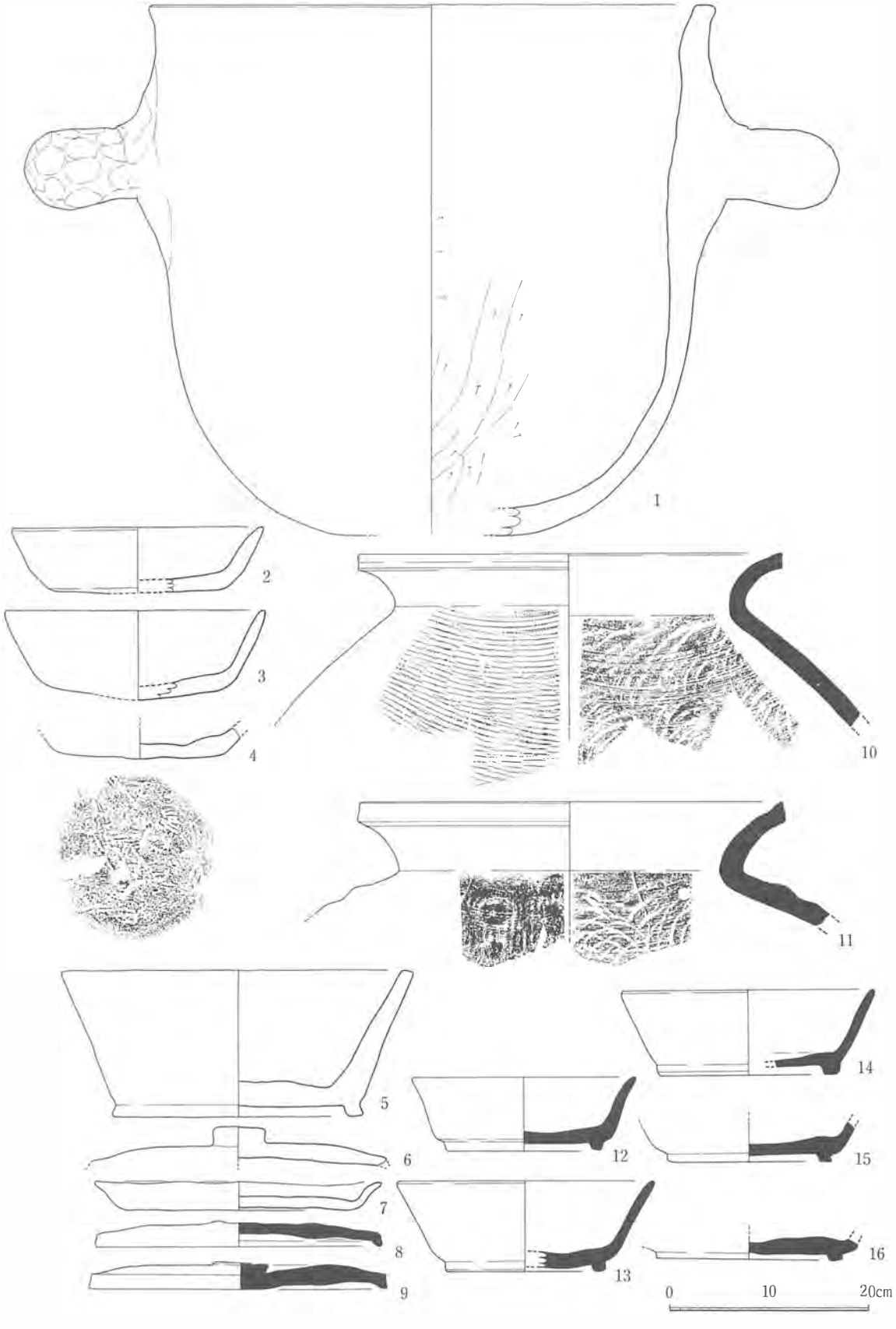
調査区外土坑

発見の経緯とその出土状況

別府遺跡Ⅱ区の調査も大詰めとなった３月に，県営畑地帯総合整備事業のこの地区の施工業者から，「工事中，重機で掘削していたところ，多量の土器がまとまって出て来た」との通報を受けた。早速現地へ案内してもらうと，須恵器や土師器が重なるように出土していた。周辺はすでに工事が進んでおり，土器が出土した部分だけが一段高く残っているという状況であった。発見された地点は別府遺跡Ⅱ区東



第55図　溝遺構出土遺物実測図



第56図　参考資料

南端から南へ約40ｍ程いった地点である。

恐らく土坑の上部が削平され，床面近くの土師器・須恵器が残存しているものと思われる。

遺物は土師器の甕・坏・碗・蓋・皿や須恵器坏・甕・蓋・碗などがある。

土坑出土の遺物（第56・57図）

１～７は土師器である。

１は取手付きの甕である。丸底の底部よりほぼ真っすぐに立ち上がる。外面の胴部下半は縦方向のミガキ，内面はヘラケズリを施す。

２～４は坏で，やや厚手のものである。２は，ほぼ平底の底部であり，体部の下位で若干屈折して立ち上がる。３は，底部が若干丸みをもち，体部もわずかに丸みをもって立ち上がるものである。赤く彩色を施している。５は高台付きの碗である。体部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部はまっすぐ伸びる。短く，断面四角形に近い高台が底部端に付く。底部内面に同心円叩きの痕跡が認められる。

６は蓋である。やや偏平化しており，頂部に偏平なつまみを持つ。７は皿である。復元口径14.４㎝，器高1.４㎝を測る。土師器ではあるが，須恵器に近いものである。

８～17は須恵器である。球磨郡錦町下り山窯の製品に類似する。

８・９は蓋で，いずれもかえりを有せず，偏平なものである。８はつまみを持たず，天井部には，回転ヘラ切りの痕跡が認められる。一方９は，偏平なつまみを有し，天井部には回転ヘラ切りの痕跡をナデにより消している。

10・11・17は甕である。いずれも胴部下半を欠損する。10は外面に平行叩き，内面には同心円文の痕跡が残る。一部に自然釉が掛かる。11の外面は，自然釉が一面に掛かる。叩きの痕跡は不明瞭であるが，格子目叩きを施し，内面には同心円文の痕跡が残る。17は前者に比べかなり大型のものである。口縁部分が，10・11に比べると垂直気味に外反する。外面には平行叩き，一部格子目叩きが認められる。内面には同心円文の痕跡が残る。

12～16は高台付きの碗である。12～14はいずれも体部が直線的に立ち上がるものである。また高台はすべて短めで，断面形が四角に近いものである。その中で14は底部端に高台が付くものである。

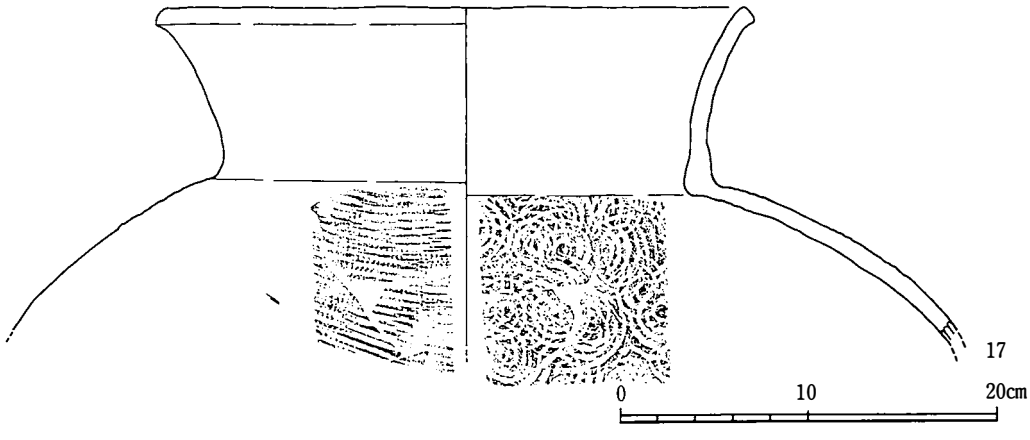
８．まとめ

検出した遺構としては竪穴式住居跡が１軒，掘建柱建物跡が１棟ある。その他には，土坑や焼土の痕跡やピットなどがある。土坑は遺物が出土していなかったりして，その時期が不明なものも含めて14基がある。

遺構に伴い出土した遺物のほとんどが９世紀代に位置づけされるものと考えられる。

建物関係の遺構は，竪穴式住居跡１軒と掘建柱建物跡１棟である。その他建物の可能性のあるものとしては，13号ピットなどがある。

その遺構の位置についてみてみると，Ⅰ区の東南端に掘建柱建物跡が，Ⅱ区の東南端に竪穴式住居跡が，南端に13号ピットが存在する。こういう状況から，Ⅰ区の南側の調査区外部分やⅠ区とⅡ区の間の



第57図　参考資料

調査区外部分の南側半分などに，まだ建物が存在する可能性がある。

土坑に関しては，Ⅰ区の中央やや東側寄りに大型の土坑２基が存在する。Ⅱ区の土坑は，南側に限定される。そのなかで１～９号土坑が比較的近接して１つのまとまりをなす。また調査区外ではあるが参考資料として前述した土坑が，Ⅱ区の南側約40ｍの地点に位置する。

土坑個々の平面形態及びその規模に着目すると，楕円形に近いものは，長辺が２ｍを越えるもの（１・４・９号）と２ｍ以下のもの（３・６・７号）がある。

円形に近いものは，径1.５ｍ前後のもの（２・10・11）と１ｍ以下のもの（12号）がある。

不整形のものは，長辺が４ｍを越える大型のもの（13・14号）とそれ以下のもの（５・８号）がある。

遺物に目を向けると，遺物の出土した土坑は１・２・３・６・７・10・11・13・14号の９基であるが，そのうちの５基が，図化に耐えないような小破片しか出土しない土坑（６号）や１・２点程しか出土土坑（２・７・10・11号）である。

また遺物の種類では，その多くが土師器である。特にⅡ区の土坑からは須恵器は出土せず，３号土坑を除けば，その器種は土師器坏・碗に限られる。

その中で小型の楕円形を呈する３号土坑は，遺物の出土量及び器種も豊富で，移動式かまどや黒色土器，甕なども出土している。しかもそれは投棄され，燃やされたような状況であった。想像をたくましくすれば，祭り事に伴う宴の後に，使用した土師器を土坑に投棄し，燃やしたような印象を受ける。

その他比較的まとまった遺物が出土している土坑としては，大型の楕円形を呈する１号土坑がある。それは，床面に焼土がある土坑である。土師器の焼成遺構の可能性もある。また焼土のみが残存する焼土遺構も土師器焼成遺構の可能性がある。

またそれ以外にはⅠ区の大型の不整形の13・14号土坑がある。両土坑とも土師器・須恵器が出土しており，14号土坑は焼土を有す。本来はいくつかの土坑の重複があるのかも知れないが，不明である。

以上のような状況であり，確実に土壙墓と認定できるものは存在しなかった。また仮に土壙墓が存在したとしても，その可能性のあるものは４号・６号・７号土坑くらいである。これらの土坑では遺物を伴わないか，伴ってもごく少量で，土師器の坏・碗のみである。距離的にも，時期的にも近い沖松遺跡（古城1995）の土壙墓と比較した場合，別府遺跡の場合は，黒色土器が欠損する。これは狭川真一氏の説（1993狭川）によると，別府遺跡は黒色土器を有する沖松遺跡より，下位の階層となるものであろう。

しかし土坑の存在する地域は，１号土坑や焼土遺構など土師器焼成遺構の可能性があるものなど，工房等の存在を予想させる地域であり，土壙墓の存在の可能性は低いと考えられる。

包含層からの遺物の分布を見てみると，Ⅰ区は遺物の分布は削平の関係もあり北東側に集中する。Ⅱ区では，包含層からの出土遺物は位置を押さえられないものがほとんどである。

以上のことから，９世紀代の遺構の中心は，Ⅰ区においては，調査区内の東側から南側にあると考えられる。またⅡ区においては，南側にあると考えられる。さらにⅠ区の調査区外の東側や南側及びⅠ・Ⅱ区間の調査区外の南側の部分，Ⅱ区の調査区外の南側部分に延びる可能性がある。

つまりこの時期の遺構は調査区内の南側からさらに調査区外の部分に延びるものと考えられ，その中で南東部に建物遺構が，北西部に工房等の遺構が存在したことが予想される。

その他包含層からの遺物の中には，陶磁器類や東播系のすり鉢など13世紀頃の鎌倉時代の遺物が認められる。これらは，Ⅱ区西側Ｋ11グリッド周辺から出土している。検出された遺構はないが，その分布より，鎌倉時代の遺構がⅡ区の調査区外の西側に存在する可能性がある。

第１表　中尾遺跡石器観察表

挿図	番号	器種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	登録番号
4	1	ナイフ形石器	1.8	0.9	0.3	0.4	安山岩	85
4	2	ナイフ形石器	2.6	1.5	1.0	3.0	安山岩	183
4	3	ナイフ形石器	2.3	1.8	0.8	2.8	安山岩	１Ｔ一括
4	4	ナイフ形石器	3.6	2.2	0.9	4.8	安山岩	241
4	5	ナイフ形石器	4.7	2.0	0.7	5.4	安山岩	384
4	6	台形様石器	2.8	1.6	0.8	2.2	黒曜石	565
4	7	台形様石器	3.7	2.8	1.4	9.4	チャート	75B
4	8	三稜尖頭器	3.5	1.2	1.0	4.2	黒曜石	15
5	9	三稜尖頭器	2.9	2.9	1.6	8.8	?	?
5	10	三稜尖頭器	3.7	1.3	1.2	5.6	チャート	229
5	11	三稜尖頭器	1.9	1.6	1.3	3.4	チャート	133
5	12	剥片尖頭器	3.6	3.6	1.4	13.0	安山岩	20
5	13	剥片尖頭器	7.0	4.0	1.3	38.4	チャート	16
6	14	剥片尖頭器	6.6	2.9	1.2	18.2	流紋岩	181
6	15	剥片尖頭器	10.9	3.0	1.1	35.8	安山岩	412・440
10	1	石鏃	1.5	2.0	0.4	0.8	チャート	251
10	2	石鏃	1.3	1.4	0.5	0.4	チャート	260
10	3	石鏃	2.0	(1.5)	0.4	(0.8)	チャート	325
10	4	石鏃	2.2	(1.9)	0.6	(1.6)	黒曜石	380
10	5	石鏃	1.4	2.0	0.3	0.6	黒曜石	340
10	6	石鏃	(1.4)	(1.7)	0.3	(0.4)	チャート	507
10	7	石鏃	1.8	1.9	0.5	0.8	チャート	
10	8	石鏃	(1.4)	(1.6)	0.4	(0.6)	チャート	355
10	9	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.4	チャート	313
10	10	石鏃	2.9	(3.3)	0.7	(3.8)	黒曜石	表採
10	11	石鏃	(1.5)	(2.0)	0.5	(1.2)	黒曜石	Ｋ３
10	12	石鏃	(1.7)	1.9	0.4	(0.8)	チャート	729
10	13	石鏃	(2.1)	(1.3)	0.5	(0.8)	チャート	336
10	14	石鏃	2.2	1.8	0.4	1.4	チャート	645
10	15	石鏃	3.1	1.6	0.3	1.4	安山岩	試掘杭４
10	16	石鏃	2.8	2.2	0.5	1.6	黒色硬質頁岩	434
10	17	異形石器	3.7	1.8	0.7	3.4	チャート	60
10	18	石匙	2.5	4.7	0.9	7.0	チャート	２区２層

第２表　中尾遺跡縄文式土器観察表

挿図	番号	色　調	胎　土	焼　成	調　整	登録番号
9	1	淡茶褐色	含砂粒・角閃石	普通	ナデ	１ＴＰ11
9	2	褐色	含砂粒多	普通	ナデ	中尾49
9	3	明茶褐色	含砂粒多	普通	ナデ	中尾50
9	4	明褐色	含砂粒多・角閃石	普通	ナデ	中尾157
9	5	淡褐色	含砂粒多・金雲母	普通	内・ナデ	中尾166
9	6	暗褐色	含砂粒多・黒雲母	普通	内・ナデ	中尾26
9	7	明褐色	含砂粒多	普通		中尾111
9	8	褐色	含砂粒少	普通		中尾40
9	9	黒褐色	含砂粒多	普通		中尾31

第３表　別府遺跡石器観察表

挿図	番号	器種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	登録番号
14	1	台形様石器	3.0	2.1	0.9	4.0	チャート	89
14	2	細石刃核	1.6	2.5	1.6	5.6	黒曜石	H-1C,SC
14	3	細石刃核	2.2	2.8	1.3	7.0	黒曜石	G-2a
14	4	細石刃核	2.2	3.2	1.3	7.0	黒曜石	H-1c,SH
14	5	細石刃核	1.7	2.4	2.0	8.0	黒曜石	H-1b
14	6	ブランク	2.0	3.2	1.7	8.8	黒曜石	G-1d,39
17	1	磨石・敲石	(9.7)	11.3	6.2	800	安山岩	J2a・sx1内No1
17	2	磨石・敲石	10.1	4.5	4.0	275	砂岩	〃　7
17	3	打製石斧（短冊))	13.6	4.7	1.9	130	安山岩	〃　19
17	4	打製石斧（短冊))	9.9	3.9	1.3	55	安山岩	〃　17
19	1	打製石斧（短冊）	11.3	4.8	1.3	75	安山岩	JKL-11T 3層
19	2	打製石斧（短冊）	12.2	5.8	1.1	95	片岩	G-2b 2層
19	3	打製石斧（短冊）	11.5	6.0	1.6	140	片岩	G-1B 2層
19	4	打製石斧（短冊）	13.0	5.1	1.8	130	安山岩	Ⅱ区 2層
19	5	打製石斧（短冊）	12.2	5.2	1.4	130	安山岩	
19	6	打製石斧（短冊）	13.5	5.5	1.5	150	安山岩	JKL-11T No8
20	7	打製石斧（短冊）	13.6	6.4	1.7	190	安山岩	G-2b 74
20	8	打製石斧（短冊）	14.8	5.5	1.6	130	安山岩	南西部撹乱
20	9	打製石斧（短冊）	10.4	5.5	1.9	100	安山岩	F-2d 3層
20	10	打製石斧（短冊）	(10.8)	6.8	1.2	(95)	安山岩	F-1b No2
20	11	打製石斧（バチ）	15.1	6.1	1.8	145	安山岩	2層
20	12	打製石斧（バチ）	11.2	6.2	1.3	110	粘板岩	F-1b 2
21	13	打製石斧（バチ）	12.9	7.4	2.0	200	安山岩	2層
21	14	打製石斧（バチ）	12.6	7.9	1.9	180	安山岩	G-1c 35
21	15	打製石斧（分銅）	6.9	3.9	0.7	20	片岩	Ⅱ区 2層
21	16	打製石斧（円盤）	7.2	6.9	1.7	100	安山岩	Ⅱ区
21	17	打製石斧（円盤）	8.9	7.7	1.6	160	粘板岩	G-？ 3層
22	18	打製石斧（円盤）	8.7	7.5	1.9	155	珪質頁岩	No34
22	19	打製石斧（円盤）	7.8	6.9	2.6	145	粘板岩	G-1c 3層
22	20	打製石斧（円盤）	9.5	8.9	1.2	120	粘板岩	F-1d 20
22	21	打製石斧（円盤）	14.2	12.7	2.8	600	安山岩	G-2a 3層
23	1	磨製石斧	(10.1)	4.7	2.1	151	安山岩	No25
23	2	磨製石斧	(8.0)	5.8	2.0	(120)	安山岩	H-1b S1
23	3	磨製石斧	(5.5)	3.6	1.2	(30)	粘板岩	No44
23	4	磨製石斧	(9.2)	5.0	1.6	(110)	粘板岩	
23	5	磨製石斧	(9.2)	4.5	2.7	(160)	安山岩	G-1a No33
23	6	磨製石斧？	(7.7)	3.9	1.9	(80)	砂岩	G-1a S5
24	1	石鏃	1.7	1.8	0.6	2.2	チャート	F-1b S7
24	2	石鏃	2.3	(2.0)	0.6	(2.0)	チャート	F-1d S1
24	3	石鏃	1.1	1.1	0.3	0.4	安山岩	G-1a S2
24	4	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石	南端部撹乱
24	5	石鏃	1.5	1.5	0.3	0.5	黒曜石	No83
24	6	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	チャート	No15
24	7	石鏃	1.2	1.8	0.4	0.6	黒曜石	No13
24	8	石鏃	1.3	1.7	0.3	0.6	チャート	No28
24	9	石鏃	1.8	2.0	0.4	1.0	安山岩	F-2b・2d間ベルト
24	10	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.8	安山岩	H-1a S2
24	11	石鏃	(1.7)	1.6	0.3	(0.6)	チャート	No73
24	12	石鏃	1.6	1.5	0.4	0.6	チャート	平板位置有
24	13	石鏃	(2.0)	2.0	0.5	1.4	安山岩	No23

挿図	番号	器種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	登録番号
24	14	石鏃	2.5	1.7	0.4	1.2	黒色硬質頁岩	２層一括
24	15	石鏃	(1.9)	2.0	0.5	1.2	チャート	G-2a S2No72
24	16	石鏃	2.2	(1.6)	0.4	(0.8)	安山岩	G-2b　S7
24	17	石鏃	2.6	(1.8)	0.4	(0.8)	安山岩	E-1b　S4
24	18	石鏃	(1.7)	1.6	0.3	(0.4)	チャート	平板位置有
24	19	石鏃	(1.8)	1.3	0.5	(0.8)	黒曜石	No22
24	20	石鏃	2.2	1.5	0.5	1.4	チャート	No68
24	21	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.8	チャート	Ⅱ区２層
24	22	石鏃	2.8	1.8	0.6	2.2	チャート	ＳＤ２　Ｓ２
24	23	石鏃	1.1	1.1	0.3	0.2	チャート	表採
25	1	石匙	4.5	1.9	0.7	3.6	チャート	
25	2	石匙	3.6	3.3	0.9	8.4	チャート	Ⅱ区　２層
25	3	石匙	2.6	4.5	0.8	4.4	チャート	Ⅰ区　３層
25	4	石錐	3.2	1.9	0.9	4.2	チャート	No50
25	5	異形石器？	2.4	0.9	0.4	0.6	黒曜石	No12
26	1	磨石・敲石	11.5	9.7	6.6	1,110	安山岩	F-1b　３層
26	2	磨石・敲石	6.6	4.5	3.6	100	砂岩	Ⅱ区　２層
26	3	磨石・敲石	11.8	9.6	6.8	1,120	砂岩？	Ⅱ区　２層
26	4	磨石・敲石	8.9	(5.0)	4.1	220	砂岩	Ⅱ区　２層
26	5	磨石・敲石	6.1	5.9	2.6	135	安山岩	G-2b S679
27	1	砥石	(26.4)	(14.6)	7.5	3、400	砂岩	
28	1	不明石製品	(6.6)	(4.1)	0.9	(30)	粘板岩	ＳＸ１　南端
29	2	不明石製品	5.4	1.1	0.6	5.8	粘板岩	Ⅱ区　２層
30	1	磨製石鏃	2.7	1.9	0.3	1.6	安山岩	別府21
35	1	磨石・敲石	9.61	0.6	4.7	780	安山岩	ＳＢ1,Ｎｏ１
54	1	石鏃	1.6	1.7	0.3	0.5	安山岩	ＳＤ1,S23
54	2	石錐	3.1	2.3	1.1	5.0	チャート	,S35
55	3	磨石・敲石	10.3	7.6	5.5	665	安山岩	ＳＤ1,S33
55	4	磨石・敲石	8.3	7.4	5.4	475	安山岩	ＳＤ1,Ｓ２
55	5	磨製石斧	(8.2)	5.3	2.9	193	蛇紋岩	ＳＤ1,S47
55	6	線刻礫	(4.6)	(5.2)	0.5	(11.8)	粘板岩	ＳＤ1,No19

第４表　別府遺跡土器類観察表

挿図	番号	色　調	胎　土	焼成	調整	登録番号	備考
18	1	暗褐色	含砂粒・角閃石	普通	ナデ	G-1d　No1	より糸
18	2	褐色	含砂粒・角閃石	普通		G-2b　3層一括	押型文
18	3	茶褐色	含砂粒多	普通	ナデ	H-2a　P2	
18	4	茶褐色	含砂粒多	普通		Ⅱ区　2層	
18	5	淡褐色	含砂粒・小石	普通		G-1d	
18	6	淡褐色	含小石・黒雲母	普通	ミガキ	G-1d　S4	
18	7	明褐色	含砂粒多	普通		H-1d　3層	
18	8	暗褐色	含砂粒少	普通		H-1d　2層	
18	9	褐色	含微砂粒	良好		Ⅱ区　2層	
18	10	褐色	含砂粒多・角閃石	普通		F-1b　3層	
18	11	黒褐色	含角閃石・黒雲母	良	内面ミガキ	H-1a　P1	
18	12	淡褐色	含砂粒	普通	ナデ	G-1b　No2	
18	13	褐色	含砂粒多・角閃石	普通		H-1a　2層	孔列文
18	14	黒褐色	含砂粒多	普通		F1b・G1cベルト	
18	15	褐色	含砂粒多	普通		G-1a　No1	
18	16	褐色	含砂粒少・角閃石	普通		G-1b　No3	
18	17	茶褐	色含砂粒多・角閃石	普通		G-1a　No3	
18	18	茶褐	色含砂粒多・角閃石	普通		G-1b　P4	
18	19	明褐色	含砂粒多・角閃石	普通		G1b・H1aベルト	
18	20	褐色	含砂粒	普通		Ⅱ区　2層	
18	21	褐色	含砂粒	普通		G-1d	
31	1	黒褐色	含砂粒多	普通		G-1　2層	
31	2	黄褐色	含砂粒多・角閃石	普通		Ⅱ区　2層	
31	3	褐色	含砂粒多	不良		G-1c　No1	
31	4	茶褐色	含砂粒多	普通		G-1b　2層	
31	5	淡褐色	含黒雲母・長石	普通		G-2b	
31	6	灰褐色	含砂粒多・金雲母	普通		H-1a，P4	
31	7	茶褐色	含砂粒多	普通		G-1b・1d	

挿図	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	登録番号
34	1	坏	13.5	5.6	6.9	淡黄褐色	砂粒少	良	ナデ	Ⅱ区SB01・No3
34	2	坏	(12.6)	4.5	(6.2)	黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	〃　・No7
34	3	坏	13.0	4.2	6.4	明黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	〃　・No2
34	4		胴部径	(10.8)		暗褐色	砂粒多	やや良	ナデ	〃
34	5	碗			7.1	灰青色	砂粒？	良	ナデ	〃
34	6	碗			7.1	灰青色	砂粒？	良	ナデ	〃
34	7	Ⅲ	20.0	1.7	18.2	灰青色	砂粒？	良	ナデ	〃
37	1	碗？	(15.9)			淡褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No20
37	2	碗？	(15.8)			黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No23
37	3	坏	12.9			黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No 7
37	4	碗？	14.8			黄橙色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No24・3・4
37	5	碗？	(14.8)			淡褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No17・22
37	6	坏	(12.4)	3.9	(6.0)	黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No1
37	7	坏	(12.9)	5.6	(6.4)	白褐色	砂粒多	不良	ナデ	Ⅱ区SK9
37	8	碗			(7.2)	黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No21
37	9	碗			7.1	黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区SK9No24
38	1	碗	(15.3)	(5.4)		淡褐色	微砂粒	普通	ナデ	Ⅱ区SK10No 2
40	1	坏	12.0	4.2	7.1	黄褐色	砂粒	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No176
40	2	坏	(12.3)	4.3	6.5	橙色	砂粒少	良　ナデ	Ⅱ区SK11No17	
40	3	坏	12.6	4.6	6.5	黄橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No12・22
40	4	坏	(12.6)	4.7	6.5	淡黄橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No4・140

挿図	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	登録番号
40	5	坏	12.8	5.1	7.5	淡黄褐色	砂粒多	良	ナデ	Ⅱ区SK11No96･135
40	6	坏	13.1	4.8	7.1	白褐色	砂粒多	やや不良	ナデ	Ⅱ区SK11No19
40	7	坏	(13.3)	4.6	(6.0)	橙色	砂粒少	良	ナデ	Ⅱ区SK11No81･89
40	8	坏	13.4	5.1	7.9	淡茶褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No127･163
40	9	坏	13.9	4.7	6.9	淡茶褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No68･102
40	10	坏	14.2	5.2	6.5	赤橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区ＳＫ11No171
40	11	坏	13.9	5.2	6.8	淡赤橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No76
40	12	坏	14.2	4.4	6.0	淡黄橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No10
40	13	坏	13.8	4.2	6.9	淡黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No172
40	14	坏	13.2	4.8	7.3	淡黄橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No175
40	15	坏	14.6	5.1	8.0	橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No 8
40	16	碗	15.1	5.5	6.7	外淡橙色 内黒色	砂粒多	良	ナデ	Ⅱ区SK11No21･163 黒色土器
40	17	碗	15.8	6.1	7.1	外茶褐色 内灰褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No128
40	18	碗	16.3	6.0	8.0	外白橙色 内黒色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No166 黒色土器
40	19	碗			(6.6)	外明褐色 内黒色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No67 黒色土器
40	20	皿	15.5	2.8	5.7	外淡褐色 内黒色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区SK11No54 黒色土器
40	21	甕	(16.9)	11.4		茶褐色	砂粒	やや良	ハケメ	Ⅱ区SK11No78･148
40	22	甕	(13.8)	9.9		褐色	砂粒	不良	外ハケメ・ 内ケズリ	Ⅱ区SK11No168
40	23	甕	27.6	26.6		褐色	砂粒多	良	外ハケメ後一部 ナデ・内ケズリ	Ⅱ区SK11No33･165
41	24	甕	29.8			淡褐色	砂粒多	やや良	外ハケメ・ 内ケズリ	Ⅱ区SK11No40
41	25	甕	27.3	26.4		褐色	砂粒多	良外	ハケメ後一部 ナデ・内ケズリ	Ⅱ区SK11No148
41	26	甕	38.5			褐色	砂粒多	良好	外ハケメ・ 内ケズリ	Ⅱ区SK11No94
42	27	竈	38.0			黄褐色	砂粒	良好	ハケメ・ケズリ	Ⅱ区SK11No36
44	1	坏	13.9	5.0	6.8	淡灰色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区ＳＫ６
44	2	坏	13.2	5.2	7.0	黄橙色	砂粒	普通	ナデ	Ⅱ区ＳＫ６
44	3	碗	(14.2)	7.3	(8.4)	黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区ＳＫ６
46	1	坏			(3.3)	淡褐色	砂粒多	普通	ナデ	Ⅱ区ＳＫ１
48	1	碗	(12.3)	4.7	(7.7)	灰色	砂粒多	良好	ナデ	ＳＸ1,No56
48	2	碗	(13.8)	4.2	(7.8)	淡灰色	砂粒少	不良	ナデ	ＳＸ1,No 8
49	1	坏	(12.6)	4.5	(7.8)	白褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No37
49	2	坏	13.0	4.3	6.5	明黄褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No 1
49	3	碗	13.7	5.8	8.5	赤褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No 9
49	4	縄文式土器				茶褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2
49	5	蓋	(17.0)	3.1		明褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No107
49	6	蓋	11.4	1.1		暗灰褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No111
49	7	碗	13.3	4.6	6.7	灰色	微砂粒	良好	ナデ	ＳＸ2,No113
49	8	碗	12.2	4.8	6.7	灰褐色	砂粒多	普通	ナデ	ＳＸ2,No 3
49	9	焼成粘土塊				灰褐色	砂粒	普通		ＳＸ2
50	1	碗			8.0	黄橙色	砂粒	普通	ナデ	Ⅱ区焼土Ａ
50	2	坏	(12.8)	4.3	6.0	橙色	砂粒	普通	ナデ	Ⅱ区ＰＩＴ13
50	3	碗	(13.8)	6.7	7.5	白橙色	砂粒	普通	ナデ	〃
50	4	碗			7.3	橙色	砂粒	良好	ナデ	〃
52	1	坏	(9.6)	(3.0)	5.9	褐色	微砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	2	坏	(10.4)	3.2	4.8	茶褐色	微砂粒	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	3	坏	(10.8)	3.9	5.2	黄橙色	砂粒？	やや良	ナデ	Ⅱ区２層

挿図	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	登録番号
52	4	坏	(10.9)	3.9	6.1	黄橙色	微砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	5	坏	(11.0)	4.3	4.6	褐色	砂粒？	やや良	ナデ	Ⅰ区２層
52	6	坏	12.4	4.8	7.4	褐白色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区G2a・P7
52	7	坏	12.4	4.8	7.6	黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	8	坏	(14.2)	4.6	6.0	黄橙色	砂粒？	やや良	ナデ	Ⅰ区２層
52	9	坏	14.2	5.8	7.2	黄橙色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	10	碗	(14.6)	(5.9+)	―	淡褐色	砂粒多	良	ナデ	Ⅰ区G1d・P2
52	11	碗	(15.0)	5.6	(7.6)	淡褐色 内黒	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	12	鉢？	10.1	5.8	7.1	褐色	砂粒？	やや良	ナデ	Ⅰ区２層
52	13	蓋	(16.2)	1.7		橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	14	甕	(26.2)	(12.9)		黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区J11d・1T,P1
52	15		(30.0)	(8.1)		淡褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区T-11d
52	16	鉢	(22.4)	(8.5)		灰色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区JKL11T須恵器
52	17	甕	14.2	11.6		黄橙色	砂粒？	やや良	ハケメ調後ナデ	Ⅰ区F1d P4
52	18					茶褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層
52	19	蓋	13.1	2.3		灰褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区H2c4層・須恵器
52	20	蓋	(15.0)	4.7		暗灰色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区G1a2層・須恵器
52	21	皿	(14.4)	(1.5)		淡灰褐色	砂粒少	やや良	ナデ	Ⅰ区F2aNo4須恵器
52	22	皿	13.5	1.8	10.6	淡褐色	砂粒	やや良	ナデ	Ⅰ区F1dNo4須恵器
52	23	皿	13.1	1.8	10.4	濃灰色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層須恵器
52	24	皿	(16.2)	2.2	(15.2)	外濃灰色 内褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区２層須恵器
52	25	碗？		(3.9)	(9.0)	黄橙色	微砂粒多	不良	ケズリ後ナデ	Ⅱ区２層
52	26	碗	16.8	5.9	10.0	灰褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区H1b須恵器
52	27	碗	(12.8)	(4.4)	(8.1)	外淡灰色 内灰色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区G2a・p5須恵器
52	28	碗	(11.8)	4.8	(7.1)	灰褐色	微砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区G2a・p2須恵器
52	29	碗			7.2	暗灰色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅰ区F2bNo2須恵器
52	30	碗？		4.5	6.2	外濃灰色 内灰褐色	砂粒多	やや良	ナデ	Ⅱ区2層・須恵器
56	1	甕	(28.7)			黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	地区外土器溜
56	2	坏	(12.4)	(3.3)	(9.0)	黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	〃
56	3	坏	(13.2)	4.5	8.2	淡褐色	砂粒少	やや良	ナデ	〃
56	4	坏？		1.6	8.4	淡褐色	砂粒多	やや良	ナデ	〃
56	5	碗	(16.8)	(7.4)	12.6	淡褐色	砂粒少	やや良	ナデ	〃
56	6	坏蓋		(2.0)		淡白色	微砂粒多	不良	ナデ	〃
56	7	坏	(14.4)	1.4	(12.2)	明茶褐色	微砂粒多	やや良	ナデ	〃
56	8	坏蓋	(14.5)	1.4		灰褐色	砂粒多	やや良	ケズリ・ナデ	〃・須恵器
56	9	坏蓋	(15.2)	1.4		灰色	砂粒少	やや良	ナデ	〃・須恵器
56	10	甕	(21.4)			灰白色	砂粒少	やや良	ナデ・タタキ	〃・須恵器
56	11	甕	(21.2)			濃白色	砂粒多	やや良	ナデ・タタキ	〃・須恵器
56	12	碗	(11.4)	3.9	(8.0)	灰色	砂粒少	やや良	ナデ	〃・須恵器
56	13	碗	(13.0)	4.6	(8.2)	灰褐色	砂粒少	やや良	ナデ	〃・須恵器
56	14	碗	(12.6)	4.3	(8.8)	濃灰色	砂粒多	やや良	ナデ	〃・須恵器
56	15	碗			(8.2)	濃灰色	砂粒多	やや良	ナデ	〃・須恵器
56	16	碗？			9.4	濃灰色	砂粒少	やや良	ナデ	〃・須恵器
57	17	甕				暗灰色	砂粒少	良	ナデ・タタキ	〃・須恵器

参　考　文　献

木﨑康弘　1995　「原始」『須恵村誌』熊本県須恵村

木﨑康弘　1995　『無田原遺跡』熊本県文化財調査報告書第148集

木﨑康弘　1996　『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告書第158集

山崎純男・島津義昭　1981　「晩期の土器　九州」『縄文文化の研究』4雄山閣

島津義昭　1989　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』小学館

富田紘一　1993　「粘土塊と粘土貯」『縄文研究』X

橋本裕行　1989　「弥生のデザイン」『古代史復元5　弥生人の造形』講談社

鶴嶋俊彦　1995　「古代」『須恵村誌』熊本県須恵村

木﨑康弘　1996　「第5章　奈良・平安時代と人々の暮らし」『相良村誌』熊本県相良村

網田龍生　1994　「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会

網田龍生　1994　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎的研究』X

美濃口雅朗　1994　「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎的研究』X

山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集　九州歴史資料館

松本健郎他　1980　『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告書第48集

狭川真一　1993　「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景－北部九州を中心として－」『貿易陶磁研究』NO. 13

古城史雄　1996　『沖松遺跡』熊本県文化財調査報告書第154集

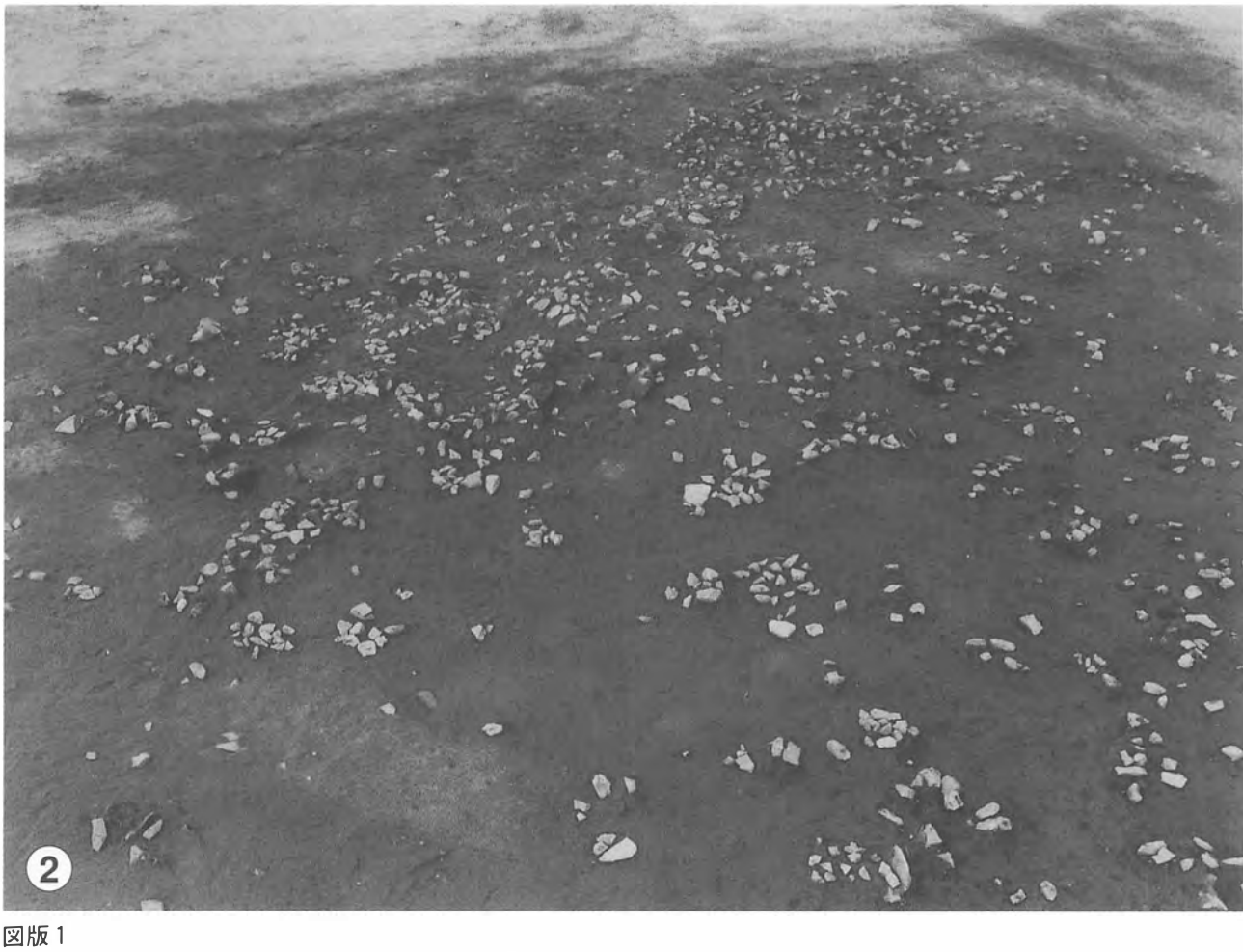
報 告 書 抄 録

書　　名	堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１集
編 著 者 名	木崎康弘（第Ⅰ部）・古城史雄・木村元浩（第Ⅱ部）
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒８６２　熊本市水前寺６丁目１８番１号
発行年月日	１９９７年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
堂園遺跡	球磨郡須恵村堂園	435082：82－5－7	199010 －199102	2,400㎡	農業関連
中尾遺跡・別府遺跡	球磨郡須恵村中尾 別府	435082：82－4－12 ：82－5－5	199104 －199203	8,000㎡	農業関連

主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
堂園遺跡		押型文,	
縄文時代早期	集石１基	中原式・石清水式・塞ノ神式	集落構成の資料
中後晩期			
古墳時代前期	竪穴式住居跡１基	土師器	古代豪族関係の墓
平安時代中期	木蓋土壙墓　１基	緑釉陶器・越州窯青磁・土師器	
中尾遺跡・別府遺跡			
先土器時代		ナイフ形石器・台形様石器他	
縄文時代早期	集石４基	中原式・沈目式	
後期晩期		南福寺式・刻目突帯文・孔列文	
弥生時代		弥生式土器・線刻礫	
平安時代	掘立柱建物跡１基 竪穴式住居跡１基 土坑14基	土師器・須恵器	
鎌倉時代		青磁・東播系陶器	

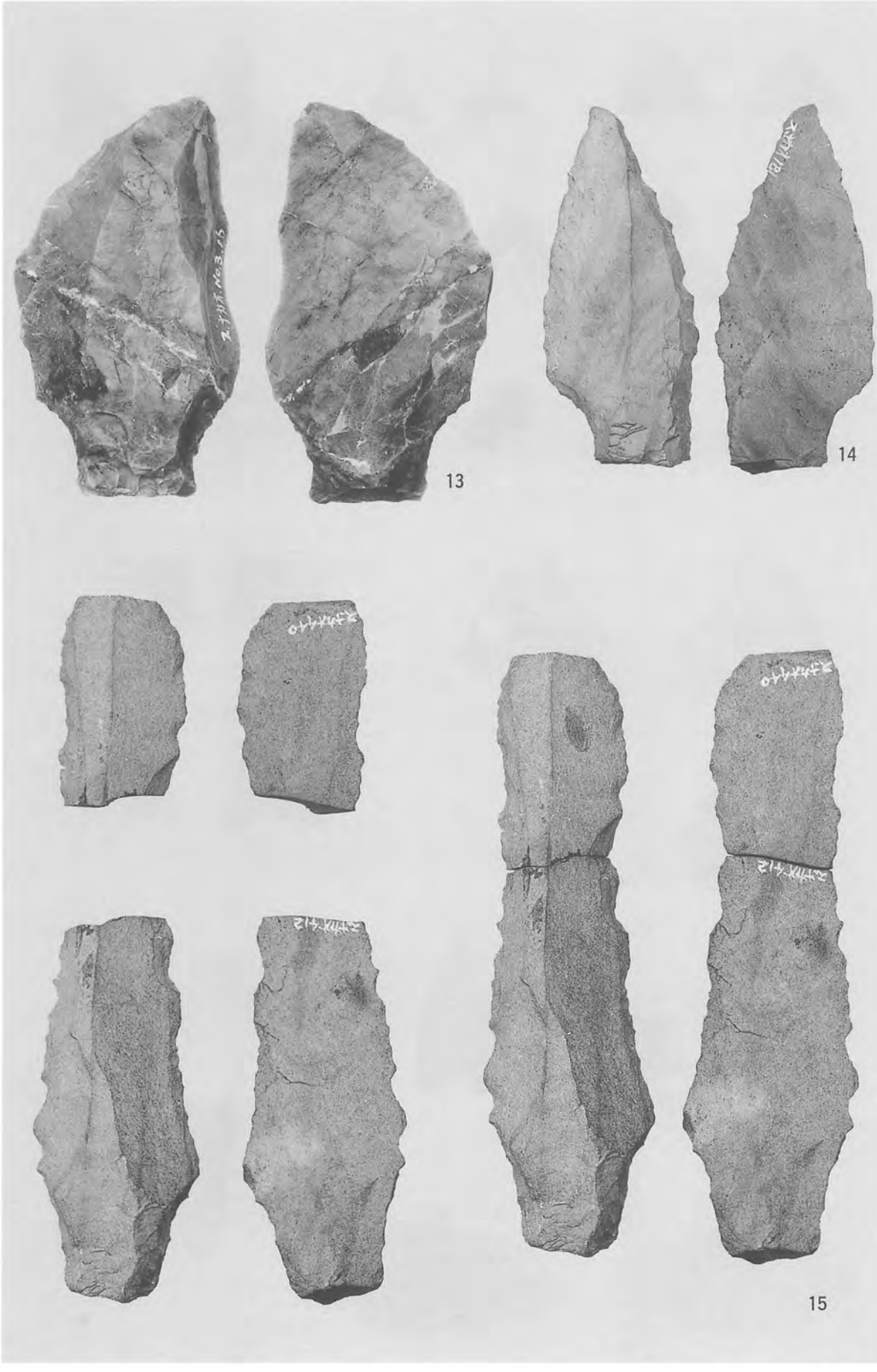
写 真 图 版



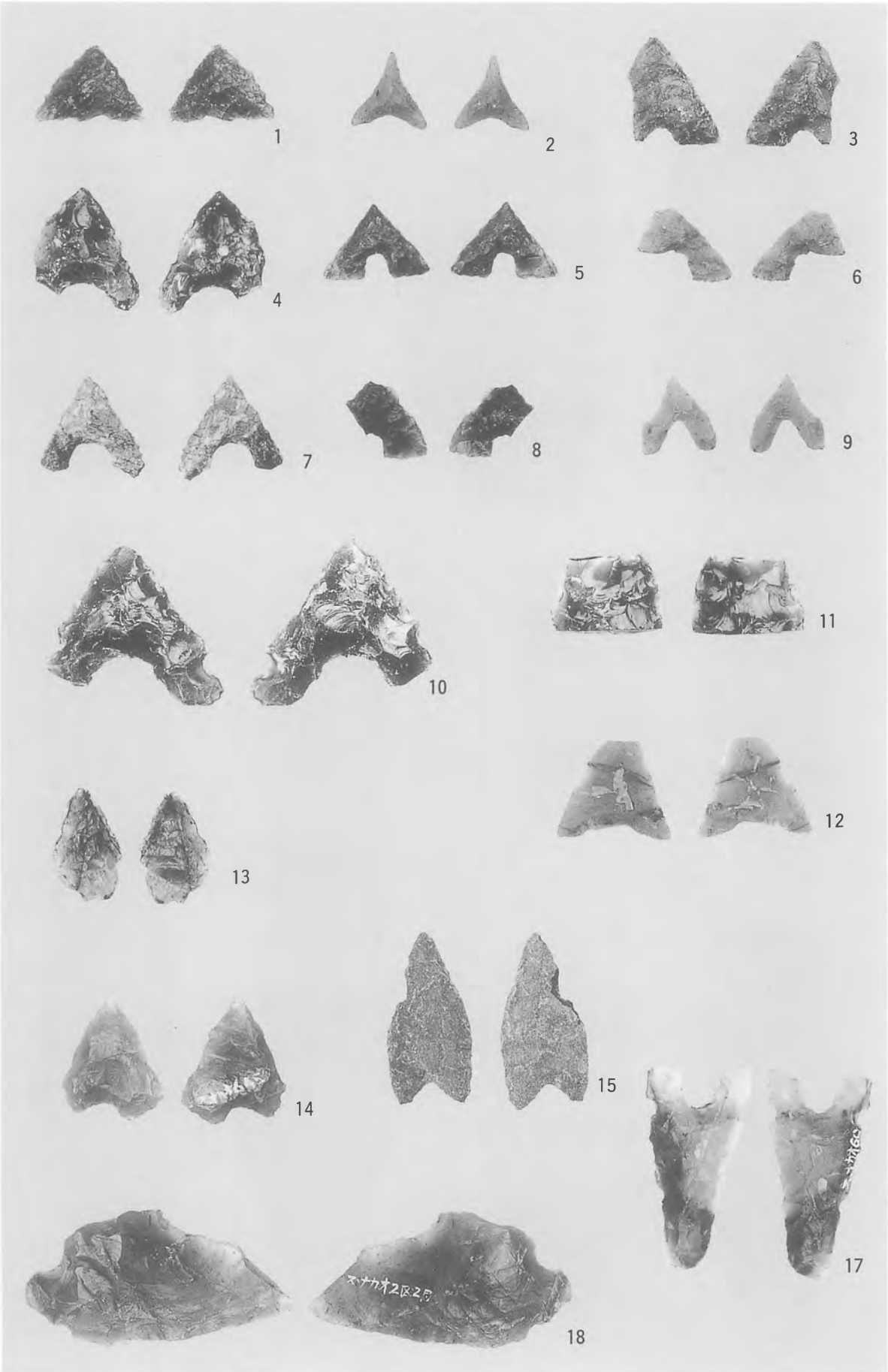
図版 1

① 中尾遺跡 1 号集石検出状況　　② 中尾遺跡 2 号集石

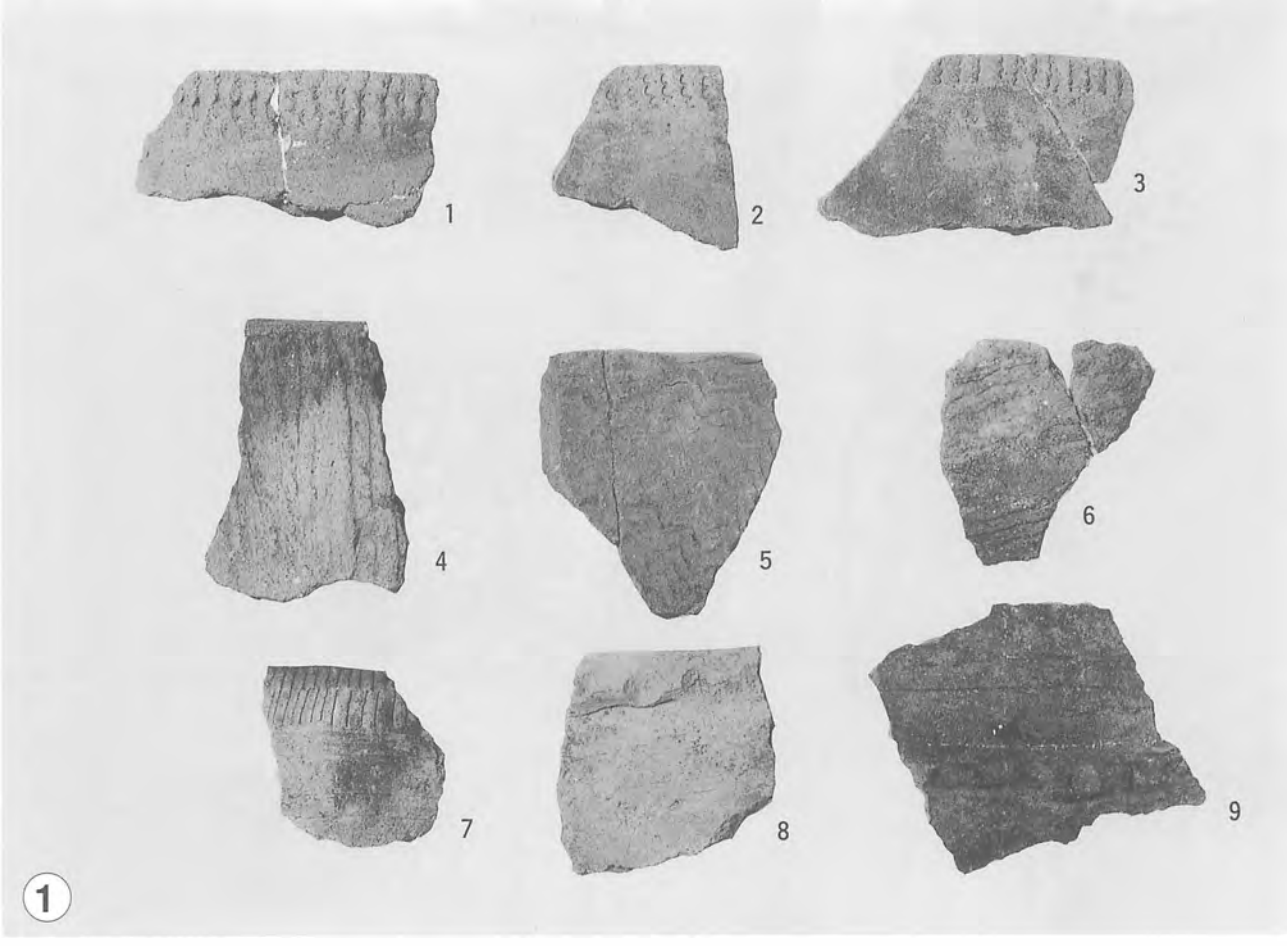
図版 2　　中尾遺跡先土器時代の遺物



図版 3　　中尾遺跡先土器時代の遺物



図版 4　　中尾遺跡石鏃等



図版 5

① 中尾遺跡縄文式土器　　② 別府遺跡遠景

図版 6

① 別府遺跡 1 号集石　　② 別府遺跡 1 号竪穴式住居跡

図版 7

① 別府遺跡 1 号掘建柱建物跡　　② 別府遺跡 1 号土坑

図版 8

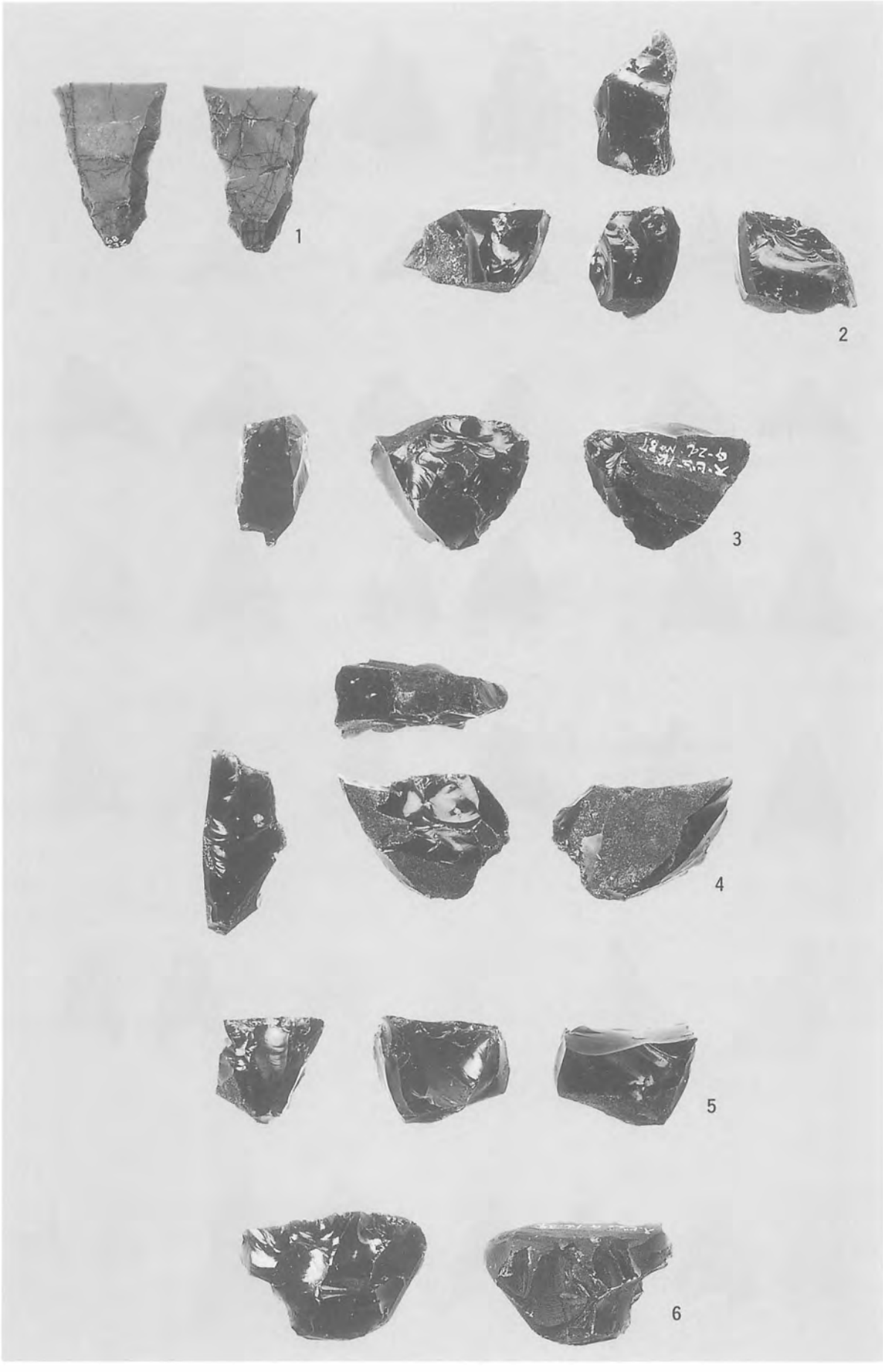
① 別府遺跡 3 ・ 4 号土坑　　② 別府遺跡 3 号土坑

図版 9

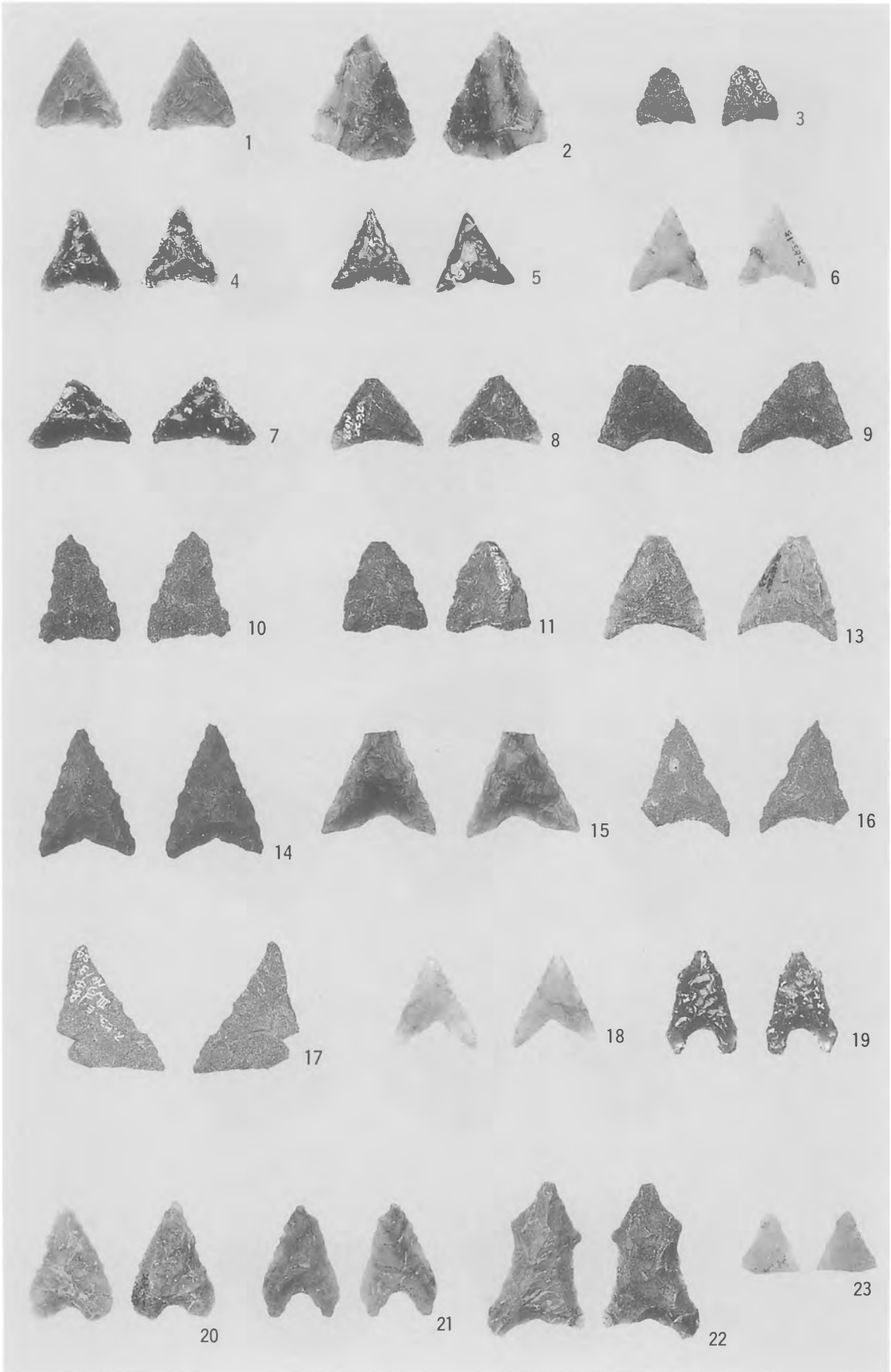
① 別府遺跡13号土坑　　② 別府遺跡14号土坑

図版10

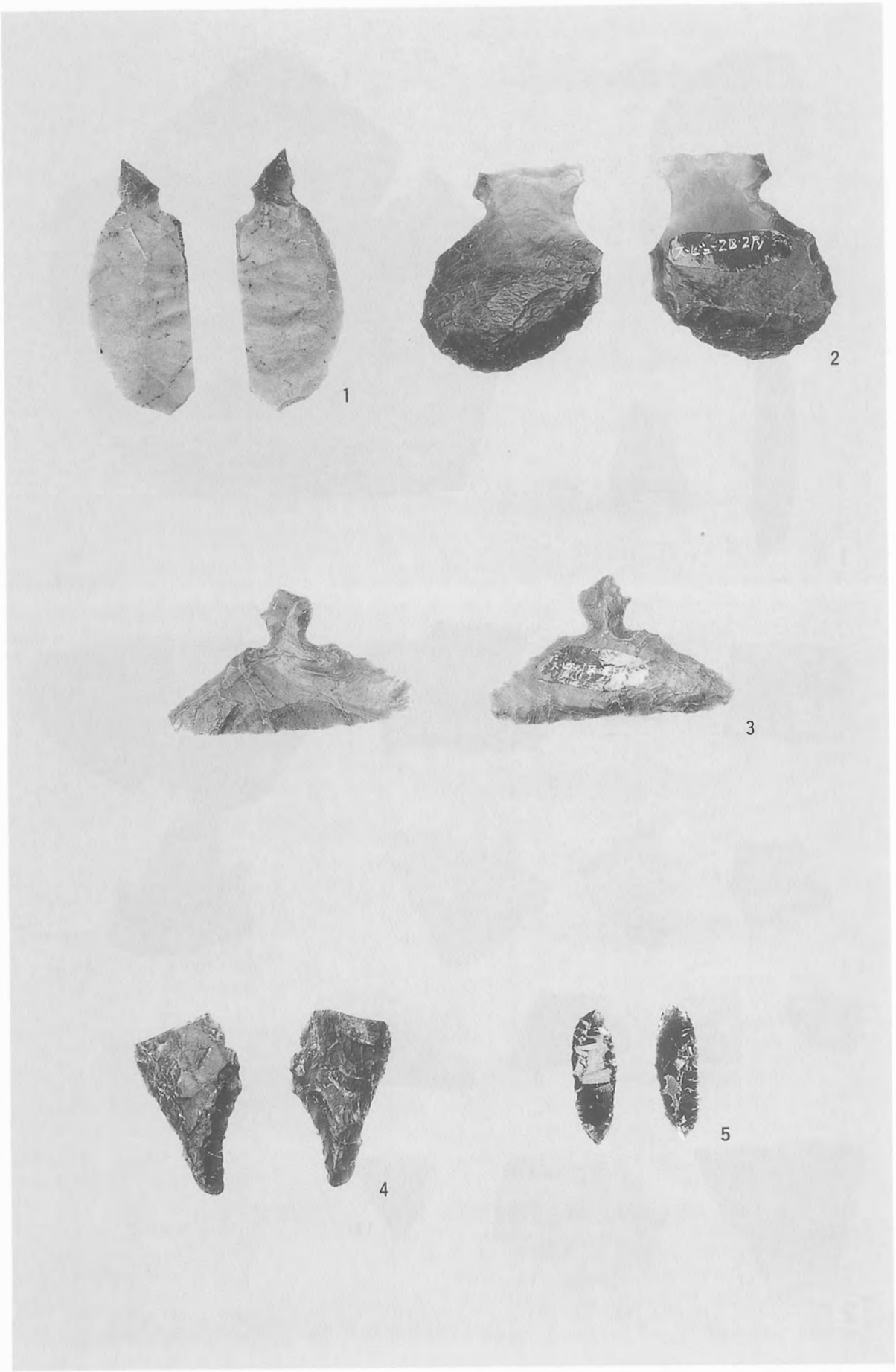
① 別府遺跡溝遺構　　② 調査区外土坑



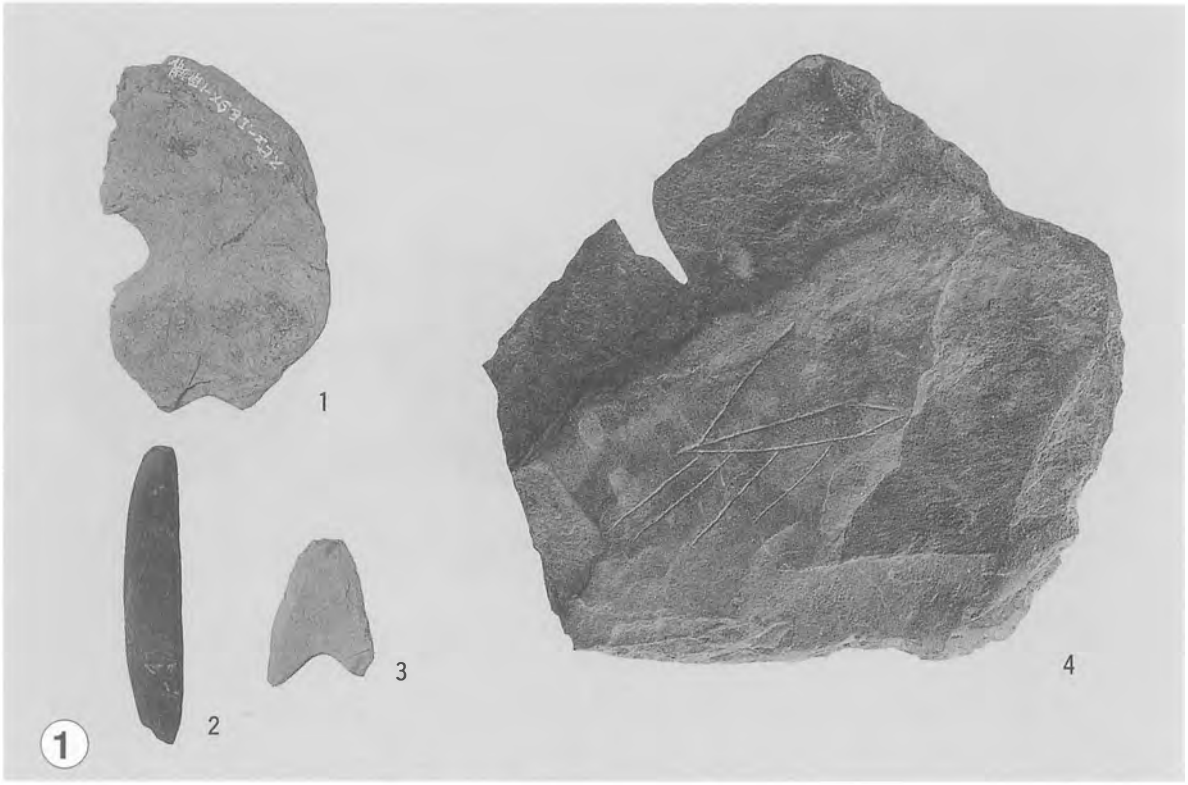
図版11　　別府遺跡先土器時代の遺物



図版12　別府遺跡石鏃

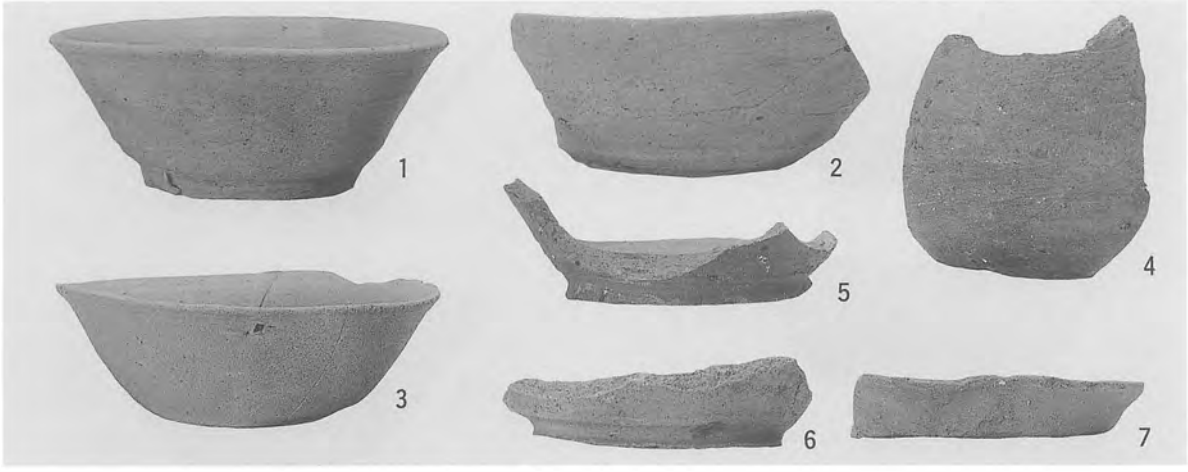


図版13　別府遺跡石匙等

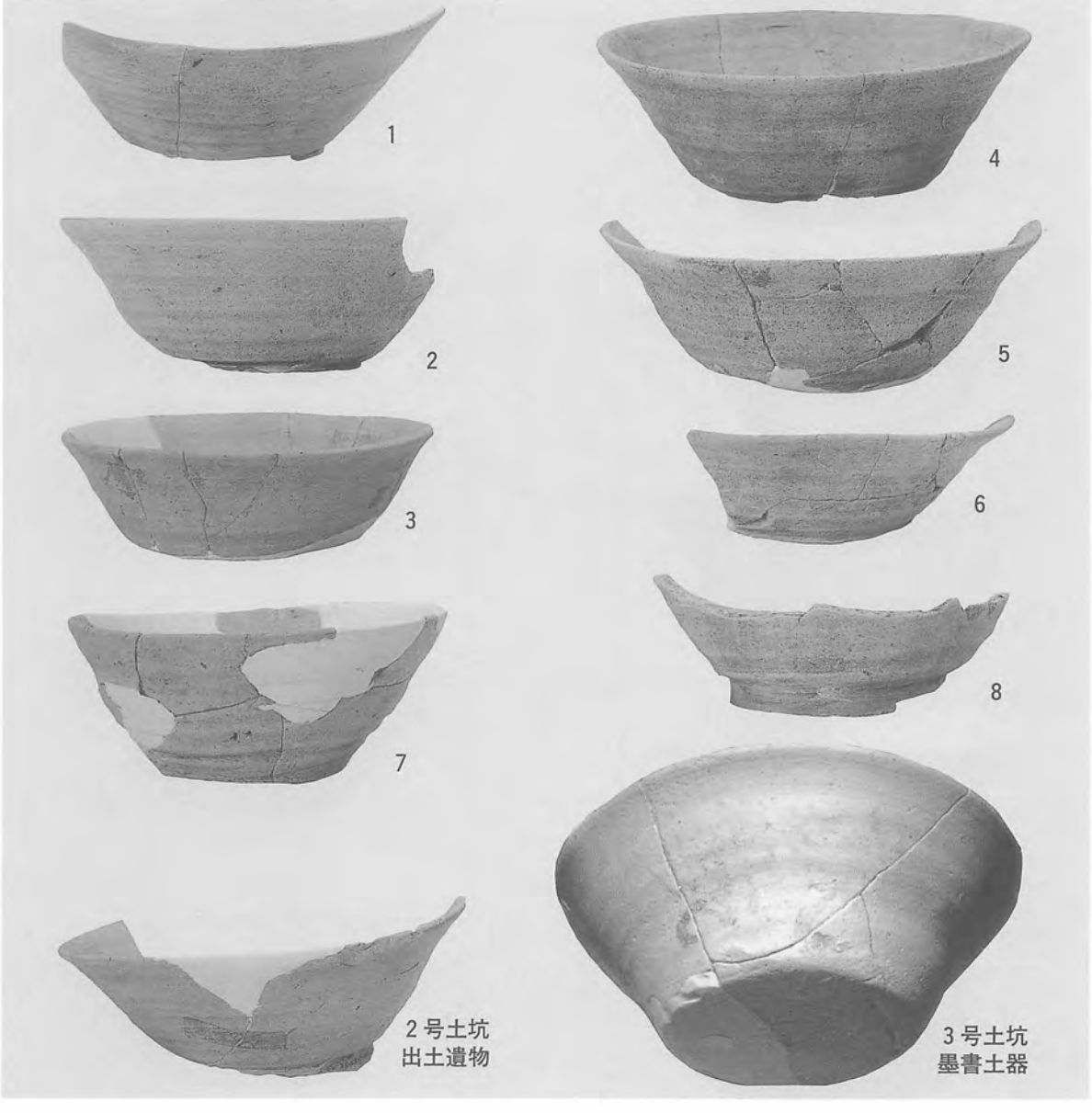


図版14

① 不明石製品（1～2）・磨製石鏃（3） 線刻礫（4） ② 別府遺跡縄文式土器

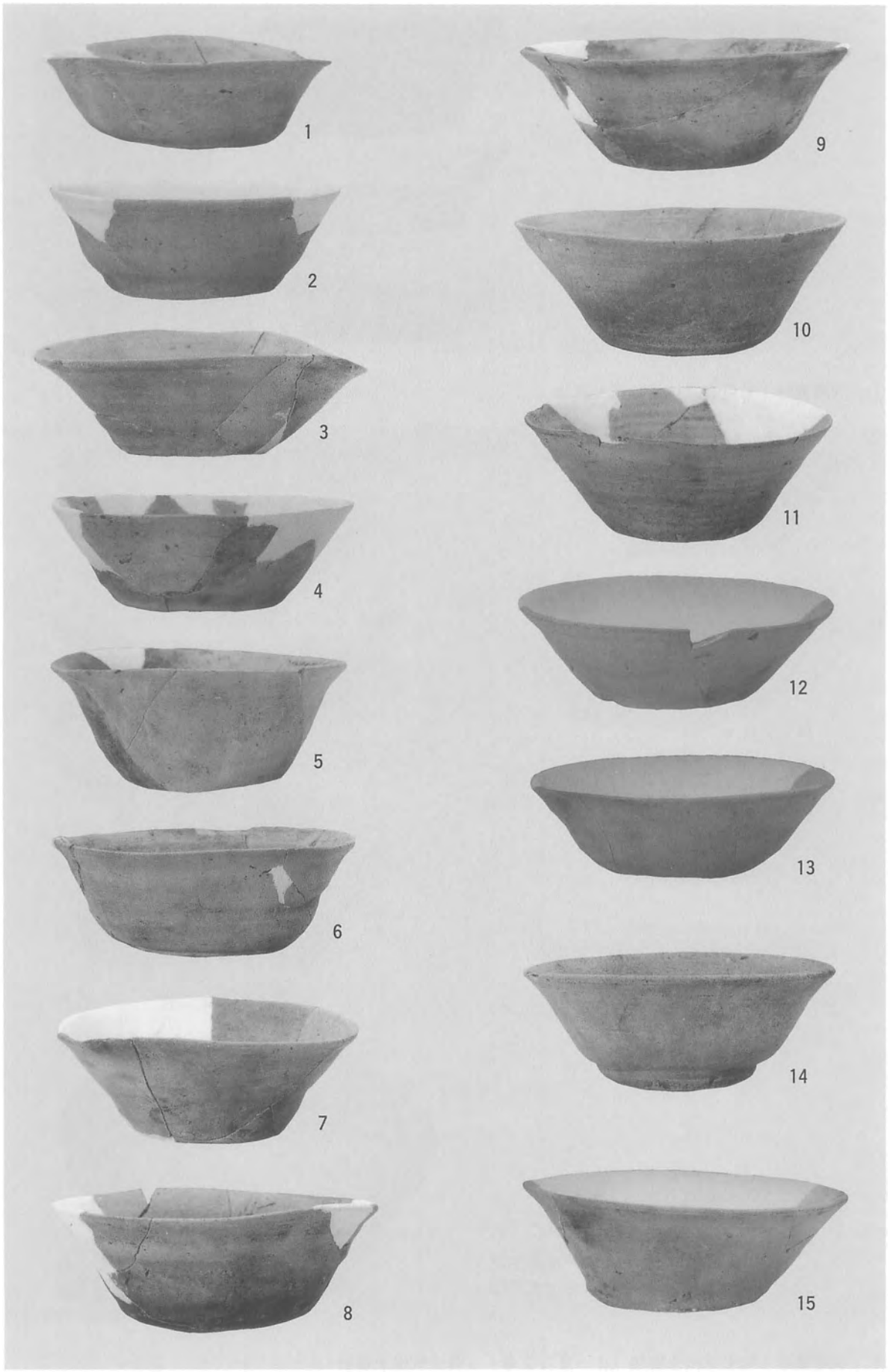


① 別府遺跡１号竪穴式住居跡出土遺物

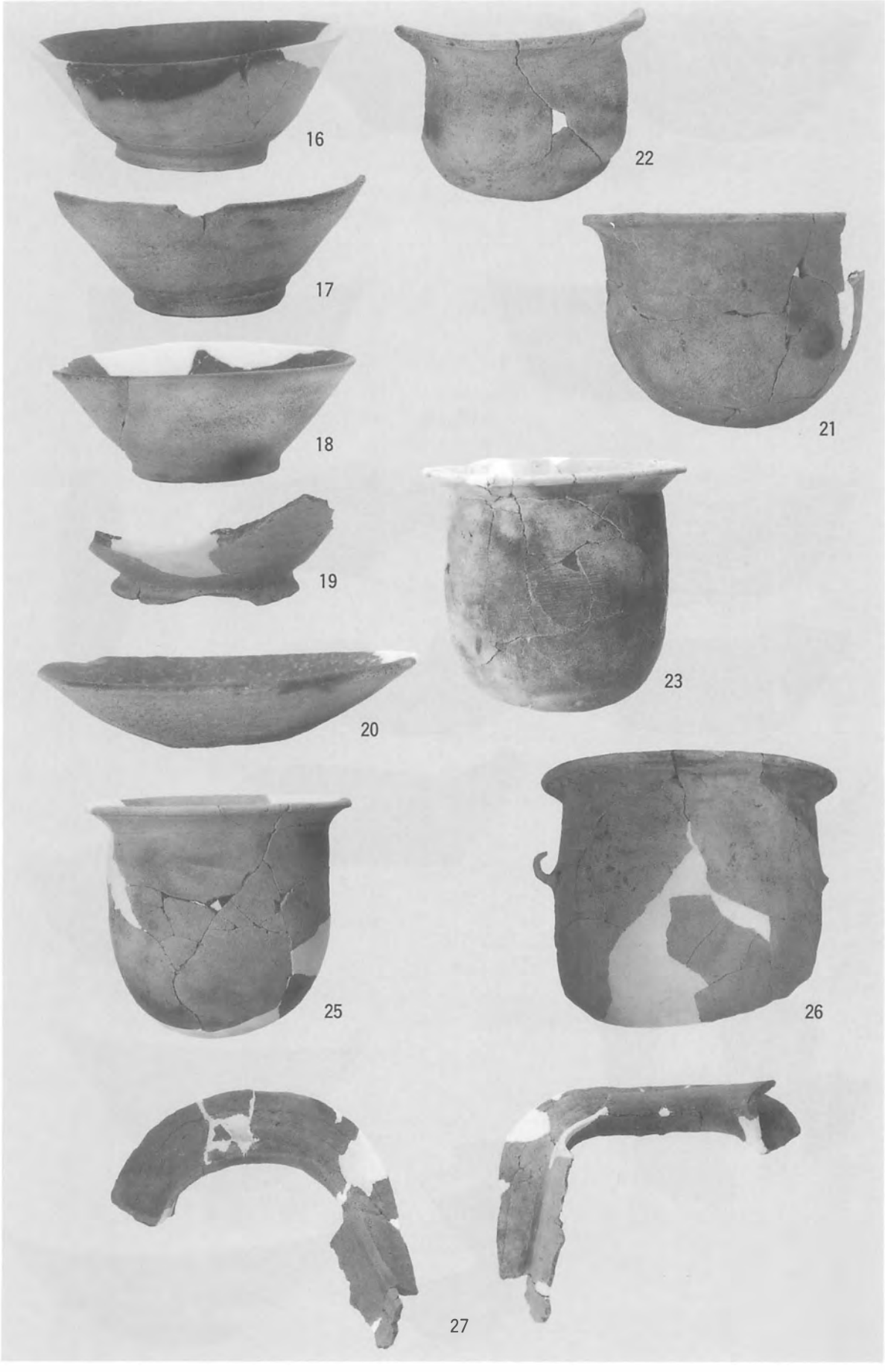


② 別府遺跡１号土坑出土遺物（１～８），２号・３号土坑出土遺物

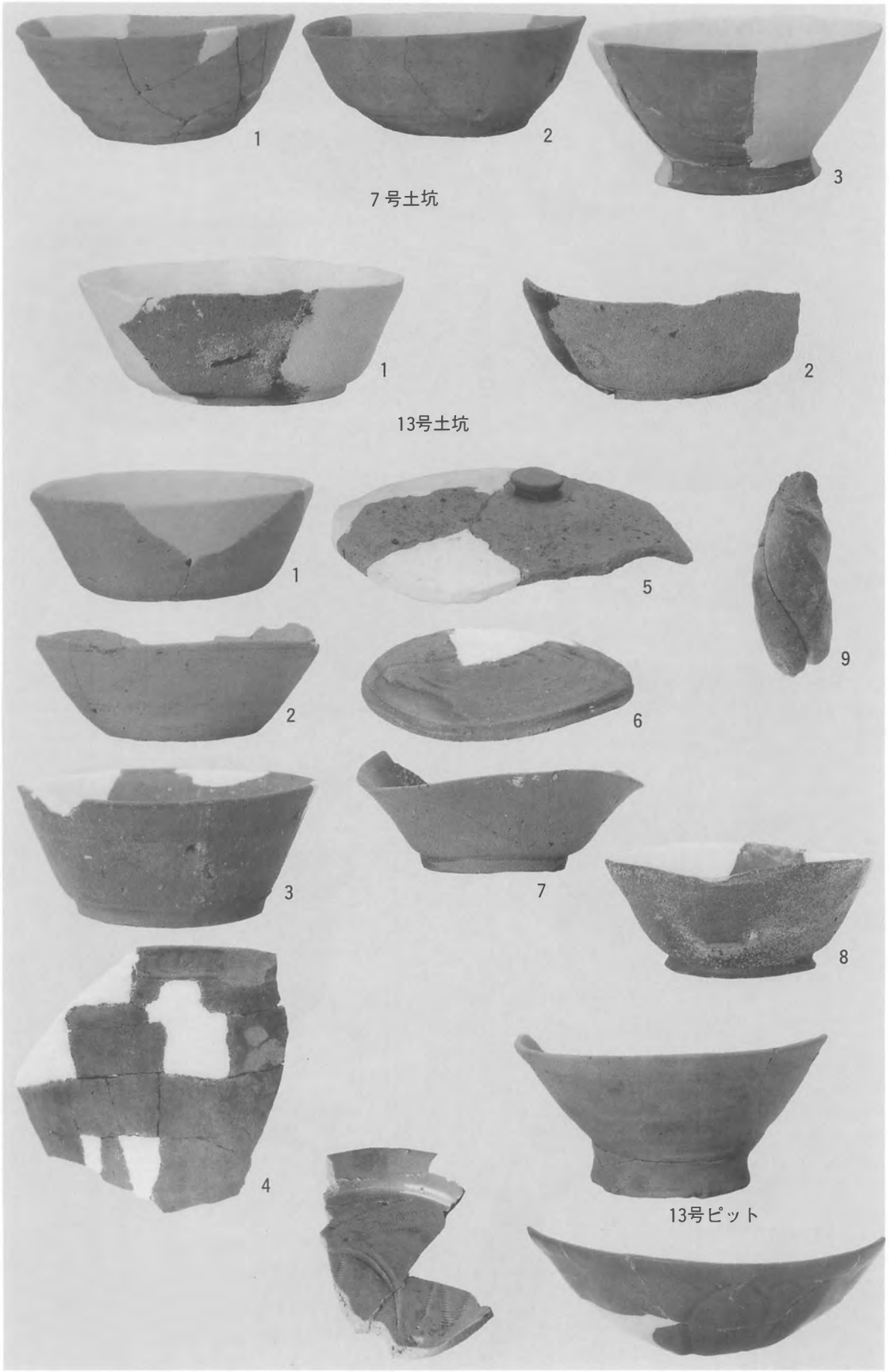
図版15　別府遺跡出土遺物



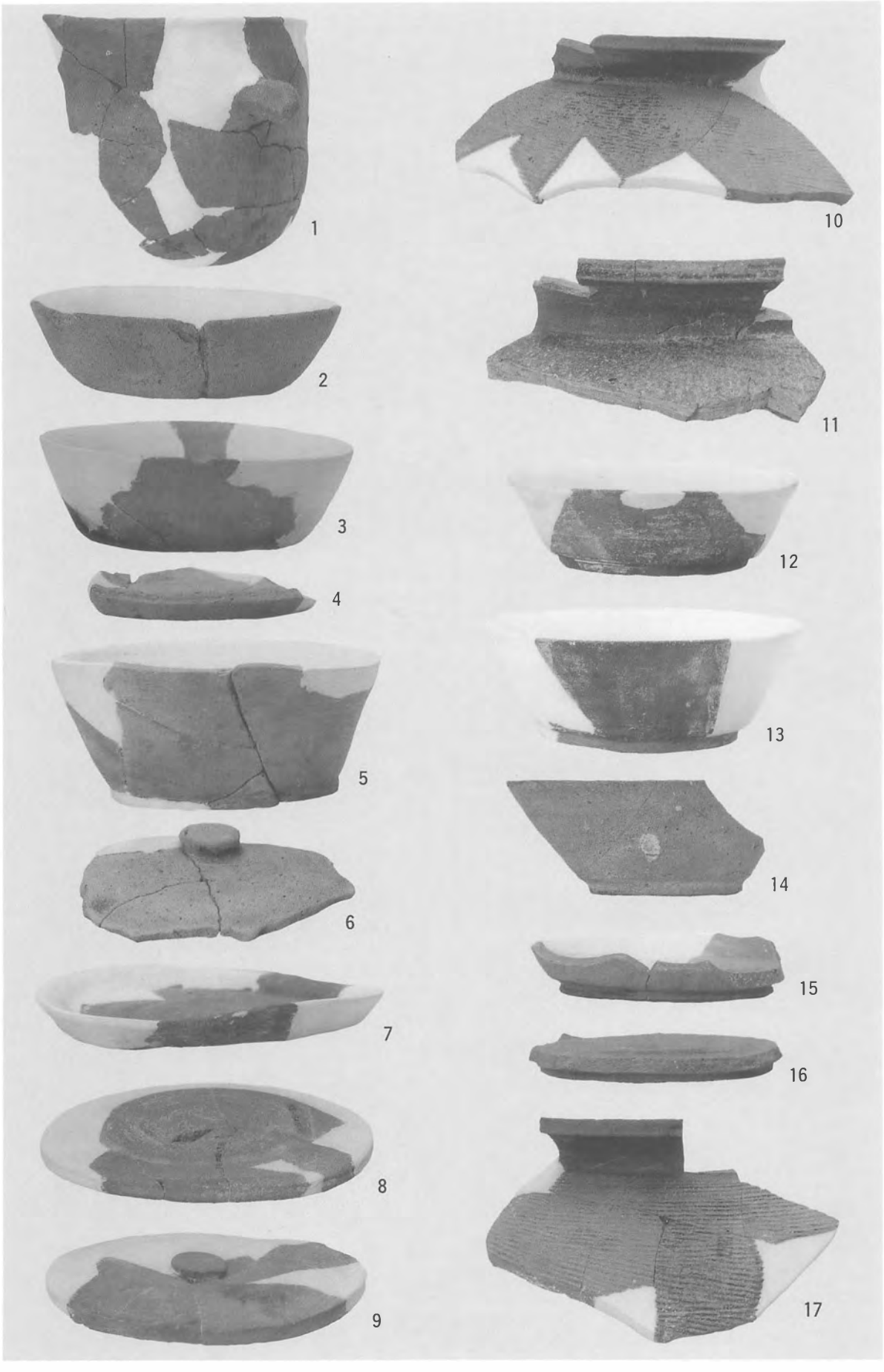
図版16　別府遺跡 3 号土坑出土遺物



図版17　別府遺跡 3 号土坑出土遺物



図版18　別府遺跡７・13・14号土坑、13号ピット等出土遺物



図版19　調査区外土坑出土遺物（参考資料）

熊本県文化財調査報告　第159集

堂園遺跡
中尾遺跡
別府遺跡

平成９年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-70　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー

08 教委 教文
② 002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 159 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：堂園遺跡 中尾遺跡 別府遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日